（岡山製本）

大正三年一月廿四日印刷
大正三年一月廿七日發行

有朋堂文庫
新編水滸畫傳二（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

すれば、其師羅眞人も、尤老莊より出たる末流なるべしと思へば、釋氏にて、汝幸ひに火坑を脫出で等の佛語をなす。正法に不思議なしと聞くに、其術奇しからずや。且かゝる清修をもなす人にして、誕辰慶賀の進物十萬貫を、天より賜る富貴なりとて、晁蓋以下三阮まで七人合體して、是を奪ひたる人數の內なるも笑ふべき事ならずや。

ば、戴宗又これを呵て云く、汝亂言を云ふ事なかれとて、三人遂に公孫勝が後堂に至りし處に、公孫勝又兩人に對して云けるは、今宵は先我が家に歇み給へ、明日重ねて宜しく商議すべしとて、各床に上て歇みけり。時漸三更の前後に至り、李逵暗に起て戴宗を窺ひ見るに、戴宗は他念なく睡りしかば、李逵殆ど悦んで想ひけるは、我たまく公孫勝に尋ね遇ぬる所に、又彼賊眞人一言を以て攔當たれば、明日早速公孫勝を引て高唐州に歸るべしと、擅に主意を定め、遂に二つの斧を搶取て門外に馳出で、即ち月光に乘じて、二仙山に跑上り、直に眞人が紫虛觀の邊に至てこれを見るに、兩扉の大門を關して開かざりしかば、李逵輕々と身を躍せ、短墻の上に跳上り、頓て大門の傍に下りて、悄々に松鶴軒の前に至り、裡面を望み見るに、唯閑寂の體なりけり。

論者のいはく、往昔漢の張良は、黃石公に遇て兵書を授り、本朝の牛若丸は、鬼一法眼が軍術の祕書を寫取ると言ひ、又鞍馬山の天狗僧正坊に劍術と飛翔の術を學ぶと云ふ。皆是私意を用ず、其道を貴くし、衆人に尊信せしめん事を希ふは、和漢同日の論なり。されば此書にも、宋公明九天玄女に見えて天書を授り、公孫勝羅眞人に學ぶ、詭論怪談は、一部の文華、强て咎むべきものにあらず。然るに公孫勝が學ぶ處は道家の事にて、淸道人と稱

宗も亦忙はしく身を翻へして地上に拜伏す。獨黑旋風は側に立て、暗に羅眞人を白眼けり。眞人先公孫勝に問て云く、此兩人は何人ぞ。公孫勝答て云く、愚弟向に老師に告ける處の、梁山泊の義弟等なり、今宋公明高唐州を攻て、知府高廉が妖法に數陣を敗られ、事危急に及びしゆゑ、宋公明此兩人を馳て愚弟を邀ふ。然れ共未だ敢て妄に承允せず、先來て老師に候ひ奉る。羅眞人が云く、汝幸ひに火坑を脱れ出で、今既に長生の法を修せんとするに、何ぞ再び世俗に礙つて、自ら大事を誤らんや、必ず擅に事をなすべからず。戴宗是を聞て云く、宋江明暫時公孫先生を請待して、敵を破らんと欲す、もし高廉をだに撃候はゞ、再び當山に還し進らせん、伏して願くは快く許容あつて、公孫先生を借給へ。羅眞人が云く、足下兩人は道家のことを知り給ふまじ、長生を修せんとする者、豈よく俗事に礙つて身心を塵さんや、足下等は宜しく速に歸り候へ、公孫勝に於ては決して許すまじ。公孫勝命を背く事能はず、遂に兩人を引て、再び山を下りし處に、李逵問て云く、彼眞人は何等の事を云たるにや、我偏にこれを聞取難かりし。戴宗が云く、羅眞人堅く公孫先生を戒めて山を下らしめ給はぬなり。李逵これを聞て大に吼り、我輩若干の路を經て、此處に至り、偶公孫先生に逢ぬるに、何ぞ空しく回らんや、若再三我が怒を惹出さば、二つの斧を揮て彼賊眞人が頭を打碎かん、と罵りしか

我尤長兄のことを憂ふるといへ共、只恨らくは老母を棄がたし、況や老師羅眞人旦暮某を左右に侍らしめ給ふことなれば、いかんぞ肯て放ち給はんや、這回は實に請に應ぜんこと能ふまじ。戴宗これを聞て忽ち地上に拜伏し、再三淚を洒いで哀みしかば、公孫勝これを見て、同じく心中に哀み、則扶け起して云く、賢弟先哭を休給へ、再び爲に商議をせんとて、頓て酒宴を設けて戴宗李逵を饗應し、盃已に數遍巡りしかば、戴宗又頻に悲み告ていはく、先生もし此遭來り給はずんば、宋長兄は必然高廉に活捉となり給はん、然らば山陣の大義、是より七顚八倒して、必ず天下の人に咲はれん。公孫勝が云く、已に斯の如くんば、我まづ老師に告げ、若萬一許容あらば、早速兩兄弟と共に馳行かん、宜しく我に隨つて老師の觀中に來り給へとて、卽日戴宗李逵兩人を引て、二仙山に上りけり。此時冬の初なりしかば、日短く夜長くして晩るに易し。公孫勝等三人、漸々半山に至りし處に、紅日西に落ち四方漸々暗し。公孫勝自ら戴宗等兩人を引て、松樹の蔭の小路を過り、直に羅眞人觀門の前に至りしかば、戴宗頭を擡げて門上を見るに、大なる一片の額あり、額の上には金字を以て紫虛觀と書たり。三人遂に觀門の内に入て廊下を過行ける處に、兩人の童子立出で、公孫勝等を延て松鶴軒の内に入る。當時羅眞人は閑に雲床の上に坐して公孫勝を近く招しかば、公孫勝向ひ前で拜をなしけるに、戴

く尋ねしか共、終に先生の貴宅を知らずして、空しく歸山せり、這次宋長兄柴大官人を救はんと欲して、高唐州に發向ありし處に、知府高廉が幻術に兩陣を破られし、親方に討れたる人馬若干にして、今又計の施すべきものなく、已に危急に及べり、此故に今日又某と李逵とを馳て、先生を請待あらんとなり、先刻途中の酒店に於て、幸ひ一人の老翁に遇けるが、先生とは隣家たる由にて、貴宅を指教へし故、敢て伺候すといへ共、尊母詐つて、先生は未だ雲遊して家に居給はずと宣ひしゆゑ、故意李逵をして家内を鬧しめ、漫に先生を賺し出しまゐらせり、伏して願くは無禮の罪を免し給へ、宋長兄今高唐州に在て、先生を待わび日を過すこと年の如し、若先生舊日の情を顧給はゞ、早々駕を移し給ひて、始終大義を全からしめ給へ。公孫勝が云く、我幼年の時より天下に雲遊し、多く豪傑の士と交を結んで、梁山泊に聚りし處に、某向に不圖故郷に回り、再び山陣に上ること能はざる所以は、第一は老母晩年に至て奉養する者なき故、我自ら是に仕ふ、第二は則老師羅眞人再三苦に留て、長生不死の法を修せしめ給ふに因てなり、我常に梁山泊より人來て訪はん事を怕れ、則名を清道人と改めて此處に隱れ在り、我毛頭大義を忘れたるにはあらざれども、唯止事を得ずして山陣に回らざるなり。戴宗が云く、今宋公明危急に臨んで居給ふに、先生廣く仁慈を惠給ひて、先一旦駕を枉給へ。公孫勝が云く、

ずといはゞ、汝忽ち怒り吼て、家内を鬧すべし、必ず老娘を傷ふことなかれ、我又走入つて汝を責らば、汝まさに怒を息て靜るべし。李逵これを聞いて、先二つの斧を腰に插し、直に門内に入て人や在と問しかば、老娘出て李逵を迎へ、相貌甚だ兇惡なるを見て、心中先これを怕れ、則慇懃に問けるは、官人は何れの所より來給ひしぞ。李逵答て云く、我は梁山泊の豪傑黒旋風と云ふ者なり、今宋長兄の命を奉り、來て公孫勝を請待す、又老娘速に彼を出さば、我深くこれを感悦すべし、若萬一彼を出さずんば、我今一把の火を以て汝が家を燒拂ひ、立處に一片の白地となさん。老娘が云く、淸道人は雲遊して未だ家に回らざるに、豈よく彼を出さんや。李逵これを聞て大に怒り、忽ち斧を揮て先壁を打堋しければ、老娘是を攔當らんとせし處に、李逵恰も霹靂の如くに吼て、汝何ぞ公孫勝を出さぬや、我今汝を害せんとて、又斧を揚て狂ひしかば、老娘此光景を見て大に恐懼し、忽ち眼を眩し地上に暈倒しぬ。時に公孫勝後堂より走り出で、無禮をなすことなかれ、と呼りし處に、戴宗早く進み入て、故意深く李逵を責り、則老娘を扶け起して罪を謝しければ、李逵も同じく斧を撇て罪を請ふ。公孫勝が云ふ、兩兄弟先裡面に入給へとて、遂に兩人を延て後堂に至り、先謝して云けるは、兩兄弟遠路駕を枉給ふ事、我甚だこれを感激す。戴宗が云く、先生山を下り給ひて後、向にも已に蘇州に來て城中城外遍

二仙山に戴宗李逵清道人の居を問図

き、彩雲岫を出て清風洞に入る。此山若道士修行する處にあらずんば、定めて仙翁の藥煉る所ならん、決して凡人の住處とは見えざりけり。此時戴宗一人の樵夫に遇て問けるは、知らず清道人の家は何れに在や。樵夫指ざして、此山口を過て門外に石橋ある處、乃ち是清道人の住宅なり。戴宗李逵これを聞て大に悦び、頓て山口を過て此處を見るに、果して十餘間の草屋あり、周遭は都て短墻にして、門前に石橋ある家あり。戴宗李逵已に橋を過て門邊に至りし處に、一人の童子出ければ、戴宗これに問て云く、清道人は家に在や。小童答て云く、清道人は後堂の外に在て、丹を煉居給ふなり。戴宗心中に悦び、則ち李逵に對して云く、汝は暫く此處に在て待べし、我は先内に入て問んとて、頓て門内に入ける處に、一人の老娘すゝみ出る。戴宗これを見て忙はしく禮を行うて、某は清道人にまみえんが爲、今日貴宅に拜候せり。老娘問て云く、官人の姓名はいかん。戴宗答て云く、某は戴宗と申す者にて、山東より來れり。老娘がいはく、我倅清道人は、異鄉に雲遊して未だ回らず。戴宗が云く、某は昔より識荆にて、唯一句肝要のことを告んが爲、特地來て候ひ奉る。老娘が云く、倅は實に家にあらず、いかんぞよく對面ならんや、宜しく回て再び來り給へ。戴宗是を聞て先門外に出で、則李逵に對して云けるは、今日はすべからく汝を用ひん、汝内に入て清道人を問ふべし、老娘もし倅は家にあら

我は則此蘇州の内九宮縣の二仙山の下に住す、我今日私用有て、此邊に出ぬるゆゑ、急に歸て二仙山に上り、羅眞人の講じ給ふ長生不老の法を聞んと欲す。戴宗これを聞き、心中に想ひけるは、恐らくは公孫勝も彼山に蟄居して在ならん、宜しく此老翁に問んとて、便ち問て云く、老翁の在處に公孫勝と云ふ人はあらずや。老翁が云く、公孫勝と云ふ人は他に問給ふ共、之を知る者あるまじ、此人は則我が隣家にして、猶一人の老母あり、前年は久しく雲遊して他國に在けるが、比日又家に回りぬ、當初は公孫一淸先生と云しか共、今は俗姓を稱ずして、唯淸道人と號す。戴宗が云ふ、某此數日公孫先生を尋ねて、方々に至りぬれ共、公孫勝といふ名を人皆知らざるこそ理なり、又此處より二仙山へ幾何の路ありや。老翁云く、此處より彼地へは四十五里の道あり。戴宗が問て云く、淸道人今他國には出ざるや。老翁が云ふ、淸道人は則羅眞人の門弟頭にて、旦暮老師の左右を離れず、何の遑ありて再び他國に出んや。戴宗之を聞き大に悦び、則老翁に告て云けるは、老翁は先二仙山に歸り給へ、我輩は再び旅宿に回り、跡より少刻尋來らんとて、遂に酒食をしたゝめ調へ別れけるに、彼老翁もまた酒店を出て二仙山へ回りけり。戴宗李逵は旅宿に至り、甲馬を著て兩人九宮縣に馳ければ、暫時に二仙山の下に至り、此風景を見るに、高山峨々と聳え、鶴東林に啼き、深溪幽々と遙にして、水西谷に響

を揪へて拖り回るべし。戴宗是を聞て大に怒り、汝亦亂言を吐くや、必ず無禮の言をなすべからずとて、此日も空しく旅宿に歸り、次の日又村里郡縣遍く捜し尋ね、一軒の酒店に入り酒食を求めけるに、酒店の小斷是を見て内に引入り、支度を申通じける處に、暫くして又一人の老翁入來りて酒食を求めければ、小斷早速申通じ忽ちに酒食を具へ、先老翁が前に具へ、戴宗李逵には未だ拿來らざりしかば、李逵是を見て大に怒り呼つて云く、我等兩人は先に來りたるに、何故老翁を先にし我等を後にするやとて、老翁が前の酒を取て地上に投丟ければ、老翁忽ち大に怒り、則ち來て李逵を揪へて罵りけるは、汝は何奴なれば、此の如き無禮をなすや。李逵これを聞き大に怒り吼り、拳を擧て打んとせし處に、戴宗忙はしくこれを止め、老翁に對して云けるは、願くは老翁無禮の罪を免し給へ、彼はもと村中の野人にて曾て人の禮を知らず、老翁もし彼に對し怒を起し給はゞ、畢竟老成からず、願くは只これを忍び給へ、老翁がいはく、足下はいまだ知り給ふまじ、我は是より猶遠路を回りて長生不死の法を聽聞す、もし延引する時は講談の時刻を差ふ、此店の小斷原來此故を知りぬるゆゑ、我少し足下等より後れて來りしか共、先我前に酒食を具ふ、遮莫此漢子はいかんぞ斯の如き無禮をなすや。戴宗が云く、老翁はもと何れの所より來り給ふ人にて、又何れの處に行て長生不死の法を聞給ふや。老翁答へて云く、

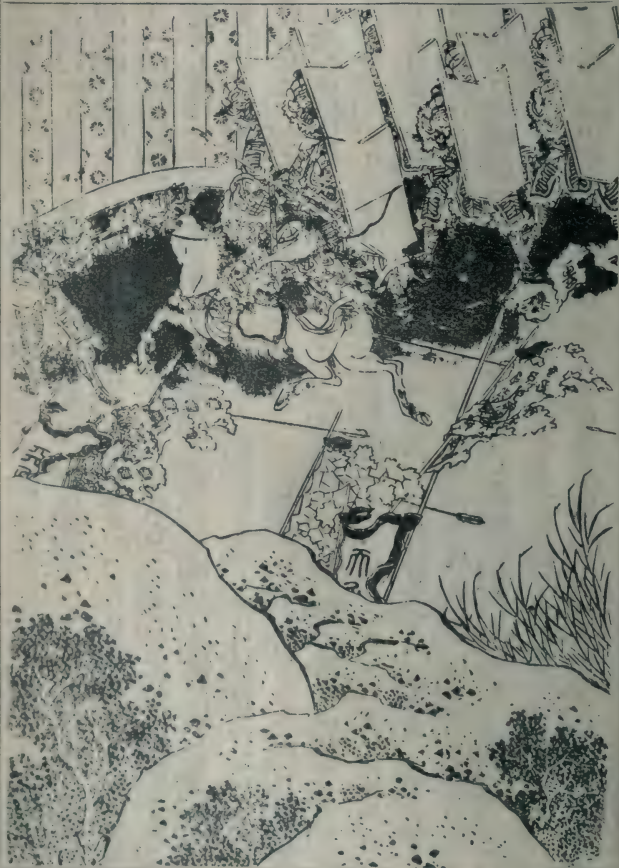
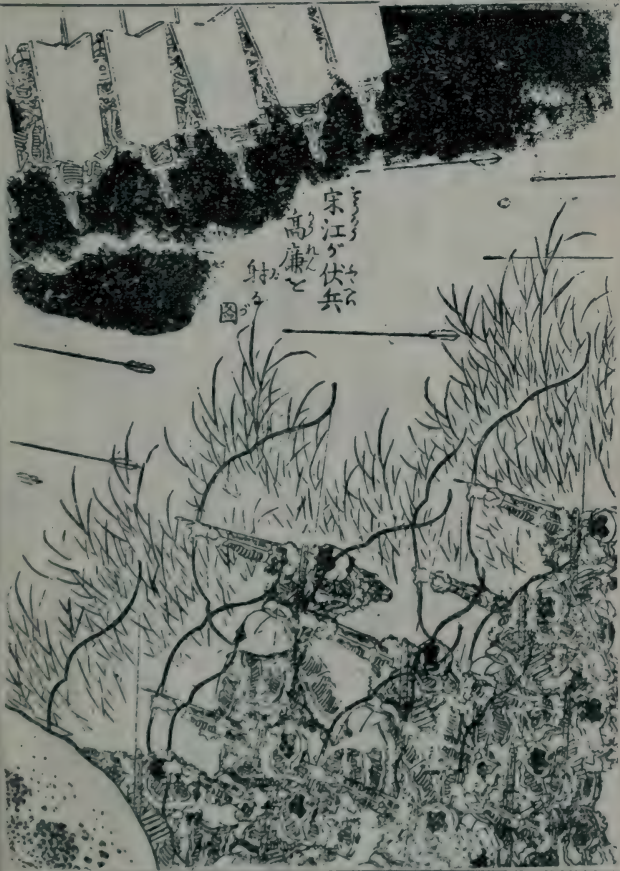
くまじ。宋江吳用も又齊しく李逵を戒め、汝必ず禍を惹出すことなかれ、若公孫先生に遇なば、速に引て回るべし。李逵が云く、我殷天錫を殺して柴大官人を苦めぬるゆゑ、我これを救はんと欲して、蘇州に往んと願ふなるに、豈敢て又禍を惹出さんや、長兄必ず心を安んじたまへ、此回は是非公孫先生に尋ね合ひ、速に此處に邀へ來らん、もし來ることを肯はずば、我則ち先生の首に繩を著ても拖り來らん。宋江吳用責つて云く、汝又麁言を吐くや、來る事を肯ぜずば、戴院長宜しく說話すべし、汝必ず怒を發せず、麁言失禮を愼むべし。李逵深く領掌しければ、戴宗四つの甲馬を取て、二つは己が腿につけ、又二つは李逵が腿に著て、遂に宋江吳用其外の面々に辭別し、高唐州を馳出で、神行の法をなし、李逵と共に蘇州を望て進發し、一日八百里の路を馳て急しかば、未だ旬日にも過ざるに、蘇州の城外に至つて旅宿に歇み、翌日兩人城中に入て終日尋ねしか共、公孫勝を知りたる者一人もなく、次の日又四下に轉て尋ねけれ共、同じく消息を得ざりけり。

○戴宗智をもつて公孫勝を取る

斯れば、李逵大に焦燥て云く、彼愚道人何れの所に隱れて我輩を苦むるや、我若彼に遇ば、頭

則ち三軍に下知して城を堅固に守らせ、矢疵愈ば再び戰をなし、宋江を活捉べしとぞ圖りける。宋江は先に兩陣を破られ、多く兵を討せて、心中深く愁へ、則吳軍師と商議して云けるは、此高廉すら猶敗ること能ず、もし他所より救の兵來て戰を助けなば、いかなる計を以てこれに敵せんや。吳用が云く、某つら〳〵想ふに、高廉が妖法だに破らば、親方早速勝を取べし、但し此妖法を破らんには、只蘇州に人を馳て、公孫勝を邀へ來らば、高廉が妖法に勝て立處に城を乗取べし。諸頭領これを聞て、衆皆其言に服しけり。時に宋江が云く、向に戴院長を蘇州に遣し、公孫勝を訪はしめけれ共、遂に尋遇ずして虚く歸りぬ、今更何れの處を尋させんや。吳用がいはく、蘇州の支配には村鄉極めて多し、いかんぞ數日の間に遍く尋盡さんや、然れ共公孫勝は原清潔の道家なれば、定めて名山幽洞の内に居し、鄉には在まじ、今回又戴宗を馳給はゞ、蘇州の支配下に於て、名山仙境の地のみを尋しめ給へ、然らば必然公孫先生の消息有べし。宋江其言に同じ、則ち戴宗を請て云けるは、賢弟又我爲に蘇州に馳て、公孫先生を邀へ來らんや。戴宗が云く、某馳行んは最易けれ共、只一人の頭領を得て、共に同往せばいよ〳〵可からん。李逵進み出て云く、某敢て長兄に隨ひ行ん。戴宗が云く、汝若我に同往せんならば、宜しく我言語を容て違くことなくんば、等しく伴はん。李逵が云く、我決して違

勝三百餘人を領して、草の内に伏し、稍頭を擡げて陣邊を見るに、かの高廉三百の神兵を引て、直に陣中に突入りけるが、陣中には人なきを見て、急に馳回らんとせし時、楊林白勝喊の聲を揚て、一度に咄と斬て出しかば、高廉計に中りぬと驚きて、慌忙き奔走す。楊林等あへて刀打せず、一向亂箭を放て、雨よりしげく射蒐けるに、果して高廉が左の臂に流箭中りしかば、已に危く見えし處に、三百の神兵齊しく高廉を扶け逃走る。楊林白勝雨を冒して追打し、敵兵許多砍殺したり。高廉は三百の神兵に扶られて、漸々遠く逃延しかば、楊林等肯て深入せず、已に兵を退けし處に、忽ち雨過ぎ雲收りて、再び一天に星現れ月明かなり。此時楊林白勝、二十餘人の神兵を生捉て宋江が陣中に引せ、彼風雲雷雨のことを詳に語りければ、宋江呉用大に驚きて云く、此處より彼地へは僅五里に足ざる路なるに、いかんぞ又此邊には風雨なきや。諸人議論していはく、是かならず高廉が妖術なるべし。楊林又云く、高廉自ら髮を披れ、劍を揮て陣中に斬入けるが、遂に一箭に中つて、城中に逃回りぬ、我輩は小勢なるによつて、敢て長追せずして、唯神兵二十餘人活捕しのみなり、と帳前に引出しければ、宋江則白勝に命じて、一々頭を刎させけり。已にして諸頭領七手に分つて、陣を七ケ所に列ね緊しく固め、又夜打あらんことを防ぎ、暗に人を山陣に馳て、救の兵を求めけり。高廉は矢に中て城中に引退き、

宋江が伏兵高廉を射る図

を輪しける處に、彼怪風忽ち己が陣中に吹回つて、宋江が陣中には來らざりしかば、宋江急に軍馬を進め、喊き叫んで攻來る。高廉術を破られて心中に怪み、又彼銅の牌を取て響かせけるに、忽ち一つの猛獸露れ出で、牙を張り爪を舞して宋江が陣中に跑來る。宋江が軍馬これを見て大に驚き、こと〴〵く皆右往左往に逃散しかば、宋江も又諸頭領と共に、馬を回して奔走す。高廉また劍を揮て、妖法を行ひし處に、飛天神兵忽然として前面に續出で、前後より夾みて攻けるに、宋江が人馬大に敗れ、我後れじと先を爭ひ逃走る。高廉後に從つて追擊すること二十餘里に至て三軍を收め、遂に勝喊を揚て、再び城中に引入けり。宋江は山坡の下に陣取て、敗軍を聚め見るに、多く士卒を討れたれども、尙悅ぶらくは、諸頭領は一人も戰死なし。宋江又吳用と商議して云く、我軍勢已に兩軍打負け、今更敵の妖法を敗り、神兵を討つの計策なし、知らず何を以て是に當らんや。吳用が云く、彼必ず勝に乘じて、今宵夜討に來るべし、豫め先計を設けこれを防がしめんとて、楊林白勝等に兵少し與へ、此處に留置き、其餘の頭領は都て舊陣の内に引退きて、先人馬の力を歇めけり。偖楊林白勝は兵を引て、半里ばかり傍の草深き處に埋伏してありけるに、其夜一更の時に至て、四面に雲生じ、八方に霧降り、一陣の怪き風驟に起つて、少刻大雨頻に下り、雷電霹靂天地も崩るゝ許なり。楊林白

を返すの法を得ば、彼却て己が術を以て己が兵を傷ふことあらん。宋江是を聞て、彼九天玄女より賜りたる天書を開見るに、果して敵の幻術を破て風を回し火を返すの法あり。宋江大に悦で、其呪語其祕法を心中に記え、此夜五更の前後に、金を鳴し鼓を擂て、直に城下に攻來る。高廉是を聞て再び人馬を催し、頓て城門の外に馳出て陣を對す。宋江劍を揮ひ馬を躍らせて陣前に跑出で、遙に敵軍を望み見るに、高廉が陣中に黑色の旗を搖動して、三百の神兵左右に相列る。吳用宋江に對して云く、彼黑色の旗を搖動す者共は、都て幻術を行ふ人馬なり、恐らくは又妖法をなさん、長兄自ら心を留給へ。宋江が云く、軍師心を安じ給ふべし、我自ら妖術を破るの法あり、諸軍疑はずして、只願すゝめと下知をなす。扨又高廉は三軍に命じ、敵進むとも妄に戰ふことなかれ、只宜しく牌の響くを聞て相圖と定め、此時一度に力を併せ斬て出で、速に賊首宋江を生捉べし、しからば我必ず重く恩賞を行はんとて、遂に寶劍を提げて陣前に進み出しかば、宋江大に罵つて云く、高廉奸賊我昨夜未だ至らざりしゆゑ、誤つて汝に一陣を破られぬ、今日我汝を生捉て仇を報んぞ。高廉大に怒て云く、汝反賊早く馬を下り綁を請よ、とて口中に呪語を念じて、寶劍を左右に揮しかば、忽ち又一朶の黑雲生じ一陣の怪風起り、砂を走せ石を飛せて、宋江が陣中に落かゝる。宋江是を見て、同じく口中に呪語を念じ、劍

前に斬て出づ。林冲是をみて同じく馬を飛せ鎗を撚て相迎へ、戰わづか四五合に至て、于直遂に林冲に搠れ、馬より下に眞倒に落にけり。高廉是を見て大に驚き、又左右に呼つて戰はしめける處に、同じく統制官溫文寶と云ふ者、長鎗を撚て林冲に搠かゝる。時に秦明林冲に替てこれを迎へ、遂に馬を交て相戰ひ、兩將互に祕術を盡して鬪みければ、戰已に二十餘合に至れ共、未だ勝負を分たざりし處に、秦明故意左の脇を開きけるに、溫文寶便を得て搠入んとせし時、秦明急に棍を擧て打しかば、文寶忽ち頭を碎れ死にけり。こゝに於て兩軍喊の聲を合せて、散々に攻戰ふ。高廉は兩人の統制を殺されて心中に怒り、頓て寶劍を拔て邪術を行ひしかば、忽ち己が陣中より一朶の黑雲生じ、直に半天に冲りて四方に散りし處に、俄に恠風大に起て、砂を飛せ石を走らせ、盡く林冲が陣に落入しかば、諸軍大に驚き、自ら潰亂れて奔走す。高廉是を見て、三百の飛天神兵を進めて緊しく擊しめしかば、林冲が兵共恰も星隕ち雲の散るごとく、七斷八續して東西南北に逃走り、遂に一千餘人討れ、漸く五十里ばかり引退いて、陣を荒野に取けり。此時宋江が後軍も已に至りしかば、林冲相迎へ、軍の次第詳に語りしに、宋江是を聞て大に驚き、卽ち吳用に向て云けるは、這何等の術なれば、かくのごとく利害なるや。吳用答て云く、想ふに是必定幻術ならん、若親方にも亦彼が術を破て風を囘し火

前後を備へ、高唐州へ進發す。先陣の人馬はや高唐州の堺に至りし處に、官軍共これを見て、急に知府高廉に告しかば、高廉冷笑ていはく、彼盗賊等梁山泊に藏れ在さへ、我猶自ら兵を發して打平げんと思ふ折節、今日彼自ら此處に來り、天我に功を成しめ給ふ者なりと悦んで、忙しく百姓等を呼聚て城を守らせ、己は城中の人馬悉く引率して、城外に打出る。原來高廉が幙下に三百の勇兵あり、是を名けて飛天神兵とす。此兵共は都て山東、河北、江西、湖南、兩淮等の地より選び出したる勇士等なり。此三百人各一様に結束して、嚴に披掛、衆皆高廉に隨つて同じく城外に打て出で、旣に陣勢を張列ね、金を鳴し鼓を擊て專ら敵の寄るを待わびけり。偖林冲、花榮、秦明等は五千の軍馬を引て馳來り、遂に兩軍相對し、箭軍を始め、互に陣脚を射住ける處に、林冲馬を陣前に騎出し、高聲に呼つて云く、もし高唐州に豪傑あらば、速に出て勝負を決せよ。高廉是を聞て二三十人の勇士を左右に從へ、同じく當先に進み出て罵りけるは、汝盗賊等猶自ら死を知らず、敢て來て我界を犯さんとするや。林冲大に怒て云く、汝民を害する大賊、何ぞあへて大言をいふや、我今此賊を打破て直に東京に攻上り、汝等が一族君を欺く高俅が輩を殺して、天下の大害を除くべきぞ。高廉を是聞て大に憤り、則ち左右を顧みて、誰かある、彼を活捕れ、と呼りしかば、統制官于直と云ふ者、馬を躍せ刀を輪して陣

携へ高唐州に往給ふと聞し故、某も高唐州に馳て消息を探聴し處、李逵已に殷天錫と云ふ者を殺して走りぬる故、官府より人を馳て柴大官人を捉へ、已に今牢中に入置き、其性命尤旦夕を保ちがたし。晁蓋又李逵を責て云く、汝何ぞ到る處に於て禍を惹出し、剰へ人を苦しむるや。李逵答て云く、柴大官人の叔父柴皇城は、彼殷天錫が非道に宅を奪んとする上に打辱められ、遂に是より病て相果たるに、殷天錫其死亡悲歎の中へ又來て、柴大官人を打んとせしゆゑ、我是を救んとて、却て彼を殺せしなり、縦ひ活佛たりとも、焉んぞ能是を見るに忍びんや。晁蓋が云く、柴大官人は原來山陣に大恩あり、已に今縲絏の危きに遇ぬるに、何んぞ山を下つて是を救はざらんや、我自ら高唐州に馳行かん。宋江が云く、長兄は山陣の主なるに、豈輕々しく自馳給はんや、某は從來柴大官人の恩を蒙りし事なれば、長兄に替て早々彼地に發向すべし。呉用が云く、高唐州は城大ならずといへ共、人馬多く兵粮も又多し、是等閑に看べからず、先林冲、花榮、秦明、李俊、呂方、郭盛、孫立、歐鵬、楊林、鄧飛、馬麟、白勝等十二人の頭領に、五千餘の人馬を與へ先陣とし、宋江呉用幷に朱同、雷横、戴宗、李逵、張横、張順、楊雄、石秀等十人の頭領は三千の人馬を領して後陣とし、尤嚴に備へて馳向はゞ可ならんとて、手分定り兵已に調りしかば、宋江等衆人終に晁蓋等に別れて山陣を下り、則

は、汝宜しく朱兄を拜し罪を謝せよ。李逵これを聞て大に叫り呼で云けるは、彼いかんぞかくのごとく放肆なるや、彼山陣に上てより以來、未だ曾て半點の功を建たるを聞ざるに、我いかんぞ却て彼を拜せんや。宋江が云く、前日小衙内を殺したるは、汝が罪にはあらざれ共、朱長兄は原汝よりも年長なれば、唯宜しく我が爲に罪を謝して、朱長兄を拜せよ。李逵毛頭拜せん氣色はなかりしか共、宋江に諫られ、卽ち朱同に對して云けるは、我一點も汝を怕るゝにあらねども、宋長兄再三諫め給ふゆゑ、我曲て汝を拜すぞとて、遂に斧を撇て兩拜を行ひしかば、朱同是を見て漸く怒を息し處に、晁蓋頓て酒宴を設けて、和睦の儀をぞ調へけり。此時李逵又諸頭領に對して、柴進が叔父柴皇城が家にて殷天錫を殺したる所以、詳に語りしかば、宋江大に驚いて云く、已に斯のごとくんば、必定柴大官人に禍を蒙らしめ、官府に捉るべし。吳學究が云く、長兄先驚き給ふことなかれ、戴院長歸りなば、消息分明にしれ候はん。李逵問て云く、戴院長は何れの處に行ぬるや。吳用が云く、我汝が柴大官人の館に在て、事を惹出さんことを恐れ、戴宗を馳て汝を山陣に呼回させけるが、汝が高唐州に往たると聞て、彼又高唐州に馳て汝を尋んこと必然ならんと、未だ云も終らざるに、一人の小賊來て戴院長の歸山と報じければ、宋江自ら是を迎へて、柴大官人のことを問ければ、戴宗答て云く、柴大官人李逵を

に官府を欺かんと圖るや、我今汝に白狀させんとて、已に左右に命じ鞭打せんとせし處に、柴進大に呼つて云く、家人李大我を救はんと欲し、誤つて人を打殺したるに、何ぞ我身に干らんや、況や我は太祖皇帝の鐵劵を所持したる者なるに、汝私の仇を夾んで刑罰を行はんとするは、是何の道理ぞや。知府が云く、鐵劵は何にありや。柴進が云く、我滄州の居宅に置し故、はや人を馳てこれを取寄しめたれば、近日の内必然來るべし。知府大に怒て云く、汝奸賊我を赫し欺かんと欲ふとも、我何ぞ汝に誑れんやとて、遂に左右の下官に命じ打しめければ、柴進忽ち皮肉を打破られ、鮮血滾々として紅に染にけり。此時柴進は鞭に勝ず、家人李大に命じ、殷天錫を殺させけるよし云ければ、知府頓て柴進に頸枷を枷しめ、先死囚牢の内に遣し、緊くこれを守らせけり。扨黒旋風李逵は、連夜に馳て梁山泊に歸り、則諸頭領にまみえし處に、朱同是を見て大に怒り、急に刀を拔て李逵に砍て蒐る。李逵も斧を揮て相迎ふ。晁蓋、宋江并に諸豪傑忙しく座を立て、兩人を扯住む。別して宋江詞を盡して朱同を宥諌め、向に小衙内を殺したるは、全く李逵が私の所爲にあらず、是則賢弟を山陣に邀へんが爲の計にして、李逵に命ぜしことなれば、晁天王、吳軍師、宋江三人が罪なり、賢弟今日山陣に上り給ふうへは、速に舊惡を忘れ、一向心を同じうし力を協て、共に大義を興し給へとて、又李逵を呼んで云ける

五編　巻之四十五

○柴進高唐州に失陷す

扨柴皇城が家には、頓て二百餘の士兵共、追々に群り來つて、四方より取圍みしかば、柴進便ち門外に出て云く、我汝等とともに官府に馳て分説すべしとて、自ら索にかゝりし處に、士兵共は猶家内に亂れ入り、李逵を搜しけれ共、李逵ははや見えざりしかば、先柴進を引て官府に至りけり。此時知府高廉は、妻舅が殺されたると聞て大に怒り、則ち柴進を堦の下に引き出させて、怒り罵り云けるは、汝いかんぞ殷天錫を殺したるや。柴進が云く、某は柴世宗の子孫として、太祖皇帝より鐵券を賜り、今則滄州に居住す、這回叔父柴皇城が病を訪はんが爲のみに、當地に至りし處、叔父不幸にして死去いたし、某悲歎に逼りぬる折節、殷天錫來て、頻に家を移れと催促し、剩へ某を敲んとして二三十人を進めける故、李大と云ふ者某を救はんと欲し、誤つて殷天錫を殺し候なり。知府益怒て云く、李大とやらんは、汝が家人なるべければ、汝が言を請ずして、いかんぞ敢て人を殺さんや、汝又擅に彼を逃し、妄

活命の恩に朱同を殺すなるべし。幾十歳も齢を經ざる小兒を害し、殘忍無道の所爲を豪傑の志なりとせば、猛虎と豪傑と同類たるべし、嗟くべきかな。又云く、通俗忠義水滸傳には、朱同に父母なきのみにて、家族有て山陣に迎置たる條洩せり。

言をなすや、縦ひ何人の末葉にもせよ、我豈恐れんやとて、遂に家人等に命じて、柴進を敲しめんとせし處に、黒旋風李逵雷の如く吼て走り出で、頓て殷天錫を馬より扯落しければ、二三十人の漢子共一度に馳聚りしを、李逵急に手足を飛せ七八人打倒し、其餘の者共は四面八方へ追拂ひ、殷天錫を揪へ、汝非道を擧動ひ、剰へ柴皇城も汝に打れたるより、病附きて死失ぬ、汝は世の悪魔と云べし、我一拳を請て試みよと云まゝに、鐵槌のごとき拳を擧て、只一つ眉間を打ければ、殷天錫忽ち血を吐て死にけり。柴進は李逵を引て後堂に至り、則商議して云けるは、賢弟今彼を殺し給ふ上は、少刻官府より土兵共多く來て賢弟を捜し捉ふべき間、一刻も急に梁山泊に逃回り給へ。李逵が云く、我若奔行ば、必ず大官人の身の上に禍至るべし。柴進が云く、我家には鐵劵を携へけるゆゑ、能禍を免るべし、足下は唯疾々奔り給へ。李逵こゝに於て二つの斧を提げ、遂に後門より奔出で、直に梁山泊へ馳往けり。

論者いはく、此卷の小衙内を殺し棄たる次第は、殊に世に毒を流せり。強を淩ぎ弱を扶くるは拚命三郎石秀にて、豪傑の好む所なるべし。晁蓋宋江兩人共、朱同が活命の恩を請し故、是を報んとて山陣に邀んと願ふは左も有べし。其故に東西も知らぬ小兒を奪て林中に害し捨るは、朱同もし今日の義に依て共に林中に入り、小衙内の屍の傍に自害せば、晁宋が

李逵ゲ一拳ホ
殷天錫吐血して
落命する圖

も、深く汝が孝義を感ぜん、我遺言は是のみなり、必ず忘るゝことなかれとて、遂に息絶えたり。
柴進是を見て大に哭きしかば、阿嬸再三勸めて云く、大官人先哭を忍て、後事を商議し給へ。
柴進が云く、我這回は鐵劵を携へざる間、急に人を馳て是を取寄せ、近々東京に上て、我親自
朝廷に訴へ奉り、叔父の仇を報じ、此寃を雪がん、とて先死骸を棺槨に收め、皆喪服を著し、一
家都て悲まざるはなかりけり。既にして第三日に至りける處に、彼殷天錫一疋の馬に乘て、二
三十個の人を從へ、直に柴皇城が門前に至る。柴進これを聞て門邊に出ければ、殷天錫はや
柴進に問て云く、汝は此家の誰なるぞ。柴進答て云く、某は皇城が姪柴進と云ふ者なり。
殷天錫が云く、我前日皇城に家を空て出よと命じぬるに、何ぞ我言に違くや。柴進が云く、前
日皇城重病に臥ける故、想はず延引に及し處に、皇城終に歿しぬる間、一七日を經なば家
を移るべし。殷天錫が云く、我已に三日を限ぬるに、何ぞ再び三日を延さんや、汝若我言に違
ば、忽ち、頸枷を加へ、一百杖を策つべし。柴進が云く、汝頻に欺くことなかれ、我家は先朝の
末葉として、しかも太祖皇帝より賜りたる鐵劵あり、卒爾に來つて後悔する事なかれ。殷天錫
が云く、汝いよ〳〵鐵劵あらば、今これを出して我等に見せしめんや。柴進が云く、鐵劵は今
我滄州の居宅にあり、我近々これを取寄て汝にみせん。殷天錫大に怒ていはく、汝何ぞ妄の

り、いかん共宜しき樣に商議し給へ。柴進が云く、嫿々速に憂を休め、只良醫を請て療治を加給へ、叔々若再び殷天錫に欺れ給ふ事あらば、我家の丹書鐵券を取寄て、彼と理論せんに、縱ひ天子の御前に出たり共、何ぞ怕るゝことあらんやとて、再び外面に出て、李逵竝に家人等に對して、始終の樣子を語りければ、李逵忽ち躍起て大に怒り、彼いかんぞ天下に人もなき擧動をなすや、我幸に二つの斧を携へたれば、先彼が頭を打碎きて、其後別に商議せば可なるべし。柴進が云く、賢弟先恚を息給へ、彼今高俅が權威を借て人を欺くとも、我家には鐵券を傳へければ、天子の御前に於ても更に怕るゝ處なし、先彼を饒して動靜を窺ひ給へ。李逵が云く、鐵券も太平の世には用ひらるべけれ共、今朝廷には奸臣佞人充滿して、天子を誑く時なるに、何ぞ鐵券のみを賴んや、我先殷天錫を殺し、世の爲に一害を除くべし。柴進が云く、我自ら彼が勢を伺ひ、賢弟を用ふべき處あらば、我早速知らしめん、其内は先房裡に在て歇給へ、といまだ云も終らざるに、一人の下女忙しく走り出て柴進を請ければ、柴進又内に入て皇城が前に至りけるに、皇城淚を洒ぎて柴進に對して云けるは、汝は義氣昂々として先祖を恥かしめざる豪傑なるに、我は愚にして殷天錫に打れ死をいたす、汝若骨肉の情を思はゞ、親自東京に上つて殷天錫が仇たることを天子に訴へ奉り、我爲に此寃を雪ぐべし、然らば我九泉の下に於て

ば協ふべからず。李逵が云く、某も大官人に従つて彼地に往んは可ならんや。柴進が云く、賢弟肯て來り給はゞ、我宜しく同往すべしとて、則家僕数人を携へ、其翌日五更の前後に館を出で、直に高唐州を望んで急しかば、日あらず柴皇城が家に至り、柴進先内に入て叔父が病體を見、忽ち聲を發て大に哭きければ、皇城が晩妻出て、柴進を勸めて云く、大官人遠路を來り給ひ、鞍馬の疲もあるべきに、先哭きを忍んで歇給へ。柴進これを謝し、抑事の起りを問ひけるに、晩妻答て云く、當地の知府高廉は、乃ち東京の太尉高俅が姪なるが、專ら高俅が權威を頼で惡虐を行ひ、剰へ妻舅殷天錫と云ふ者を携へ來て民間を惱しむ、彼殷天錫倘年小者といへ共、姐夫高廉が勢を借り、動不動人を害して浪に威勢を振ふ、彼頃日我家に花園水亭有て、風景好き事を聞及び、則二三十個の人を引て我家に亂れ入り、擅に我一家を追出して、己が住所にせんと、傍若無人の非道を云しゆゑ、皇城彼に對して云ぬるは、我家は當朝の金枝玉葉として、太祖皇帝より、丹書鐵券を賜りて家に傳へしかば、人敢て我家を欺かず、汝妄に我一家を追出して、居宅を奪はんとするは、何の非道ぞやと、良久しく爭論ありし處に、彼遂に拳を擧て、皇城を打けるゆゑ、皇城是を憤り、其日より病起り、飲食進まず服藥も驗なく、漸々死を待のみなり、今日幸大官人の來臨を蒙りしは、我一家の男女頗る力を得た

滄州知府
賞錢の札をかくる図

滄州の知府
小衙内の
死を悼む図

び山陣に回るべし。必ず事を惹出して、人を患しむることなかれとて、遂に別れて梁山泊へと進發す。柴進は李逵と共に再び私宅に回りけり。扨三人の者は夜を日に續で急しかば、日あらず朱貴が酒店に至り、先山陣に人を馳て注進しける處に、晁蓋宋江自ら諸頭領を引て朱同を迎へ、遂に山陣の聚義廳に至つて諸豪傑一々對面し、頓て酒宴を設けて朱同を饗應し、衆皆悅ばざるはなかりけり。扨又滄州の知府は、其夜三更の時迄待けれ共、朱同更に回らざりしかば、人許多四方に分遣し尋けれ共、曾て消息なきゆゑ、翌日又人を馳て尋しめける處に、小衙内は林の内に斬殺されて居給ふと告ければ、知府是を聞て大に驚き、親自林の内に至り、小衙内が屍を見て、忽ち地上に倒れ哭悲み、卽日公文を所々に遣し、遍く朱同を捜さしめ、賞錢の札を國郡在々に懸しめけり。偖又黑旋風李逵は、柴進が家に一月餘逗留して在ける處に、一日一人の飛脚忙しく馳來つて柴進に書簡を呈す。柴進是を披讀して大に驚き、已にかくの次第に於ては、我自ら馳行べし、と騒ぎけるを、李逵是を問て、大官人何等の事出來りて斯周章給ふや。柴進が云く、我一人の叔父柴皇城と云ふ者、今高唐州に在けるが、彼處の知府高廉が妻舅殷天錫と云ふ者に、花園を奪れんとして痛く打れ、遂に病となり、朝夕の存亡定がたき體になんぬとなり、叔父は原來自子なきゆゑ、此度我を呼寄せ、遺言を命ぜんとのことなれば、我自ら往ずん

朱同又いはく、足下等實に我を山陣に誘引せんとならば、我一つの望を准へ給へ、其時我山陣に上るべし。吳用が云く、一つの望はさて置き、たとひ千百の望たり共、我肯てこれを准ふべければ、速に示し給へ。朱同が云く、若彌我望を准へんとならば、彼黑旋風李逵を殺して我に見せしめ給へ、然らば我早速兩長兄に從つて山陣に上るべし。李逵是を聞て大に怒り、忽ち吼て云く、我晁宋兩兄の命を奉つて、小衙内を害し棄たるに、我何の事か干らん、汝此仇を復せんとならば、晁宋兩人の首を砍て心に慊かるべし、焉んぞよく我を殺さんや。朱同聞もあへず、又躍出て打果さんと狂ひしかども、三人の者再三扯住しかば、朱同焦燥て云く、若黑旋風あらば、我寧ろ死すとも、誓て山陣に上るまじ。柴進が云く、已にかくのごとくんば、是最易し、先李逵を我家に留め置べき間、足下等三人は速に山陣に上て、晁宋兩頭領の願を滿しめ給へ。朱同が云く、此上は柴大官人の敎に違じとて、其日三人柴進に別れ打立しかば、柴進は家人餘多を從へて、關外まで送りけり。

○李逵殷天錫を打殺す

時に吳用李逵に命じて云く、汝は先柴大官人の館に逗留して、朱長兄の怒を息給ふを待て、再

んで逃來る、我これを藏す時は、縱ひ官司たりとも我家を搜すこと能はず、頃日我一人の舊友及時雨宋公明、梁山泊に入て禍を避られけるが、原足下とも同じく舊友たるよしにて、一通の密書を某が方に送つて足下の噂あり、則吳學究、雷橫、李逵都て私宅に逗留す、先達て足下を山陣に邀へんとしけれ共、足下堅く辭して承允なかりし故、故意李逵に命じて小衙内を殺させ、豫め足下の歸路を絕したるよし、是全く足下を山陣に邀へて、救命の恩を報はんと欲するが故なりとて、頓て吳用等を呼出しければ、吳用則ち雷橫一人を引て屛風の背後より進み出で、忽ち地上に拜伏し再三罪を謝して云く、伏して望らくは、朱長兄某等が罪を免し給へ、是皆晁宋兩頭領の命令を蒙りて、かくのごとき計を行ひぬ、長兄もし山陣に上り給ひなば、晁宋兩兄自ら其分說せらるべし。朱同が云く、足下等の懇志尤も感激すといへ共、小衙内を殺したること、甚だもつて不仁なりとて、覺えず雙眼に泪を含みしかば、柴進此體を見て、再三再四ことばを盡して怒を宥め諫めける。朱同又柴進に對ひ、我を山陣に迎へんとのことならば、先黑旋風を呼出して遇しめ給へ。柴進これを聞て頓て李逵を呼出しければ、李逵地上に跪いて罪を謝す。朱同是を見て、忽ち怒心頭より起り、急に身を躍せ、李逵に跳蒐んとせし處に、柴進、吳用、雷橫一齊に座を立て、朱同を抱き住め、只管罪を謝して詫ければ、

三人の者を尋るに、吳用雷横は遂に見えずして、李逵一人遙の處に在て、二つの斧を揮ひ、汝速に來て我と勝負を決せよ、と呼りしかば、朱同大に怒り、足に信せて跳來る。李逵是を見て急に逃行き、一向惡口して朱同を罵りけるに、朱同はいよ〳〵怒に勝へず、我汝を殺さで置べきやとて、息をも續ず追しかば、漸々天色明にけり。李逵猶二つの斧を擧げ、朱都頭早く來て小衙内が仇を報はんやとて、已に大屋の内に逃入ければ、朱同是をみて相從つて追入ける處に、一人の官人進み出て問けるは、汝は誰なれば妄に我家に跑入るや。朱同此官人をみるに、相貌更に等閑の人にあらず、是則ち小旋風柴進なり。朱同此體を見て忙しく禮を行うて云けるは、某は鄆城縣の節級朱同と云ふ者なり、向に罪を犯して此滄州に流され來りぬ。昨夜知府の愛子小衙内を抱て、法事を見て在しに、黑旋風李逵小衙内を殺して、此屋に逃入ぬ、願くは大官人力を添て捉はしめ給へ。柴進が云く、長兄果して美髯公にあるならば、先内に入て坐し給へ。朱同問て云く、大官人の高姓大名を聞及べり、今日想ず尊顏を拜するは、莫大の幸なり。柴進が云く、某も亦美髯公の大名を聞及べりとて、遂に延て後堂に至りし處に、朱同又問て云く、黑旋風李逵貴宅に逃入たるは、原來大官人を識認たる者ならん、遮莫彼を出して某に與へ給へ。柴進が云く、我好んで天下の豪傑と交を結ぶ故、罪を犯したる者共、每度我家を賴

上つて命を立るとあるは、是尤可なり、某も又雷横を逃したる罪に依て、此滄州に流されしかども、十分の艱難を請ず、一兩年の内には必ず故郷に回つて、再び家風を起すべし、豈よく山陣に上て、自ら世を逼めんや、吳先生雷都頭とともに早々山陣に回り給へ、もし此處に在て禍を引出し給ひなば、後悔するとも益あらじ。雷横が云く、長兄自ら大德を有ち給ひて、只管人の下に居給ふは大丈夫の所爲にあらず、宜しく明らかにこれを察し給へ、況や晁宋兩頭領旦暮長兄の德を慕ひ給ふに、速に山陣に上り給ひて、豪傑の交を樂み給へ。朱同が云く、賢弟何故我一片の好意を忘れ、却て我を不義に陷れんと欲するや。吳用が云く、長兄決して山陣に上り給ずば、我輩は速に歸るべし、とて三人同じく橋の上にあり。朱同則ち小衙内を覓るに、はや此處にあらざりしかば、朱同大に驚き、前後左右を尋ねけるに、雷横が云く、長兄小衙内を尋ね給ふことなかれ、我實に黑旋風李逵を携へ來りけるが、今長兄山陣に上るまじと云給ひしを聞て、彼必定小衙内を奪取て馳行つらん。朱同これを聞て甚だ仰天し、直に城外に馳出て、二里餘追行きし處に、黑旋風李逵小衙内を殺して、林の内より呼り云けるは、朱都頭早く林の内に入て小衙内を取給へとて、己は林の外に走り出でぬ。朱同林の内に入て見るに、小衙内砍殺されて在しかば、朱同忽然として大に怒り、雙の袖を捲起げて、林の外に躍出で、彼

日小衙内を抱て街に出で、此彼に遊行して、小衙内を慰めけるに、はや半月を經て、七月十五夜盂蘭盆大齋日に至りし處に、天下一同の年例として、方々に燈火を點じ、寺々に法事を設け、殊更鬧熱なりしかば、朱同は又小衙内を抱いて、直に地藏寺の内に入て、法事を見せしめけるに、時漸々二更に近し。豈料んや此夜彼雷横來つて、朱同が袖を拽しかば、朱同是を見て大に驚き、先小衙内を橋の上に卸し置き、遂に雷横と共に傍に來て則ち問て云く、賢弟何故今宵此處に至り給ひしぞ。雷横が云く、我彼日長兄に助けられ、早速老母と共に梁山泊に上つて身を藏し、長兄の恩德を語りて晁天王宋公明等に聞しめしかば、諸頭領感激淺からず、此度某と吳學究とを馳て、長兄を訪はしむ。朱同が云く、吳軍師今何れの處にありやと、未だ云も終らざるに、吳學究はや此處に至つて、朱同に見え、各禮畢りしかば、朱同先問て云く、軍師從來恙なきや。吳用答て云く、某幸に堅固なり、山陣に諸頭領再三長兄を渴想す、今宵某雷都頭と共に此地に至りぬるは、唯長兄を山陣に邀へ、同じく大義に聚らんが爲なり、願くは長兄ともに山陣に光臨有つて、晁宋兩人の望を滿しめ給へ。朱同良久しく沈吟して云けるは、吳先生これらのことを云給ふことなかれ、若人在てこれを聞ばあしかりなん、雷横向に重罪を犯しぬるといへ共、我義を以てこれを逃しけるに、身を倚んずる處なきゆゑ、山陣に

らずんば、某自ら青州城に馳て、知府相公に訟ふべし。知縣これを聞て心中に驚き、遂に朱同が罪を有のまゝに陳て、青州城に送りしかば、知府即日朱同を二十杖策つて滄州に流しけり。滄州の知府は、朱同が相貌凡しからざるを見て心中に悅び、則ち衙門に留めて懇情を垂ければ、朱同も又知府が恩を感じ、心を傾け身を委ねて、朝夕怠らず事へけり。或日知府朱同に問て云く、汝は何ゆゑ雷横を逃して、罪を蒙りしぞ。朱同が云く、某豈敢て故意雷横を逃さんや、只誤つてこれを逃したり。知府再び問うて云く、雷横は又何故妓女を殺しぬるや。朱同答へて、雷横白秀英を殺したる來歷を備細に語りしかば、知府又問んとしける處に、屛風の背後より一人の小衙内出來る。年まさに四歲にして知府が愛子なり。小衙内朱同を見て、抱け〳〵と叫びければ、朱同則ち小衙内を抱きけるに、小衙内大に悅び、一向門前に出よと、朱同が鬚を撚つて云しかば、朱同知府に告て云く、某小衙内を抱て、府前に出て慰め申さんや。知府が云く、我愛子汝に抱れて府前に出んといはゞ、汝暫くこれを慰め來れ。朱同命を蒙り、頓て小衙内を抱て府前に出で、半時ばかり慰めて再び回りしかば、知府小衙内の悅ぶを見て、心中に朱同を愛し、則ち酒食を以て朱同を賞して云けるは、我愛子重ねて汝に抱れんと望まば、汝宜しく彼を慰めよ。朱同が云く、相公の命いかんぞ敢て違くことあらんやとて、則ち此日を始として、每

の酒店有ければ、朱同頓て士兵等を酒店の内に入れて酒を酌しめ、自らは雷横を引て、人なき所に至り、則雷横が頸枷を除きて云けるは、賢弟早く家に回りて、老母と共に何國になりとも落行給へ、我自ら汝に替て官司に出べし。雷横が云く、我もし身を遁れば、必定長兄の身の上に禍至るべし、我いかんぞこれを忍びんや。朱同が云く、賢弟の殺し給ひし妓女は、知縣が舊愛たるに依て、知縣深く賢弟を寃み、今青州府に送て命を償せんと圖る、もし青州府に至らば、賢弟遂に一命を害せらるべし、我今賢弟を逃して禍を蒙るとも、よも死罪には至るまじ、況や我は兩親もなく妻子もなければ、縱ひ賢弟の爲に一命を替るとも、又憂ふるに足ず、賢弟再び多言を休て早々馳行給へ。雷横これを聞て大いに感心し、遂に朱同に別れ小路より逃回り、忙はしく老母を携へて、梁山泊へと急ぎける。扨朱同は士兵等に告て、雷横が走りたる事を語りしかば、士兵共大に驚き、急に追蒐べしと騒動しける處に、朱同詐つて半日ばかり猶豫し、已に遠く逃延たらんと思ふ時に至て、諸の士兵を引て雷横が家に馳行けるに、雷横ははたしてはや老母を携へて落失しかば、朱同直に雷横が逃たることを知縣に訟へて、罪を請けるに、知縣は本朱同を愛しければ、是を助けんと思へ共、白玉喬再三訟へて云けるは、朱同は原來雷横と交厚きにより、故意逃したるに疑ひなし、願くは相公明かに察し給へ、若然

○美髯公誤て小衙内を失ふ

翌日雷横が母牢門の邊に來て、朱同に哀み告て云けるは、我齢已に七旬に近づき、朝夕只雷横を見て心を慰めけるに、彼不幸にして罪を犯し、我心の憂ひ盡く是を云べからず、願くは節級舊日の交を顧み給ひて、憐愍を垂給へ。朱同が云く、老娘宜しく心を安んじて回り給へ、向後我自ら雷都頭を憐み、何とぞ計を以て一命を救ふべし。雷横が母是を聞て云けるは、節級若肯て雷横が一命を救ひ給はゞ、是則再造の恩なり、いよ／＼計を施し給へとて、遂に別れて歸りけり。朱同は雷横を救はん計を思案して、終日沈吟しけれ共、更に良き策もなかりしかば、唯自ら金銀を出して縣裡の諸役人に賄賂を送り、暗に雷横が一命を救はんと圖りけり。知縣は常に朱同を愛し、朱同が言は都て容るといへ共、這回は己が心愛の妓女を殺され、寃骨髓に徹り、殊さら白玉喬只顧訟へて、女兒が仇を報しめ給へと、哀みければ、知縣則諸役人と商議して、雷横が在牢の日數六十日の限滿なば、青州府に送て、知府が決斷に任せんと議定して、已に日限も滿ければ、知縣則ち朱同に命じて、雷横を青州に送らせしかば、朱同自ら十五六人の士兵を引て、雷横を監押して、遂に鄆城縣を離れて十里ばかり馳けるに、此邊に一軒

へ父を散々打つて疵を被しめぬ、願くは相公明かに是を決斷し給へ。知縣これを聞て、心中に妬み大に怒り、雷横を呼寄せ、已に二十枚策て、拘欄の邊に示衆べし、と命じければ、下官共命を奉つて、雷横を絆め、拘欄の邊に至りし處に、彼白秀英は甚だ悦び、拘欄の前の茶坊の内に在てこれを見るに、雷横が母も亦此處に至り、大に哭嘆んで云けるは、我が子雷横當縣の都頭として、妓女の父を打たるばかりにて、何ぞかくの如き罪に干らんや、是尤公ならぬ決斷かなとて、自ら雷横が絆の索を解しかば、彼白秀英これを見て大に怒り、忽ち躍り出て、雷横が母を兩三度まで地上に打倒しけるに、雷横はもと孝順の者なれば、此光景を見て怒心頭より起り、恰も鐵石のごとき拳を捏つて白秀英が眉間を打しかば、白秀英遂に目口鼻より血を流して、暫時の間に死にけり。諸〳〵の下官大に驚き、又々雷横を拖て縣裡に回り、則知縣にまみえて、始終詳に訟へけるに、知縣ますます怒り、即日雷横を牢中に遣しけり。扨當牢の節級は今美髯公朱同なりけるが、雷横が入牢したるを見て、心中甚だ憂ふるといへ共、又いかんともする事なく、唯酒食を與へて欵待を盡すのみなりけり。

ち白秀英に對して云けるは、我今日は錢を携へ來らず、明日重く賞すべし。白秀英笑つて云く、官人は諸人よりも當先に進み出て見給ふに、何ぞ錢のなからんや。雷横これを恥て忽ち色を紅めて云けるは、我實に今日は錢を忘れて携へず、豈あへて怪むことあらんや。白秀英が云く、官人已に來て舞を見給ふに、いかんぞ錢を携へ給はぬや。雷横が云く、我汝に四五兩の銀を送るとも又妨なし、然れ共今日は忘れて銀を帶せざるあひだ、宜しく明日を待て。白秀英が云く、官人今日一錢だに持給はぬに、四五兩の銀を惠み給はんとは、莫大の虚言なり。白玉喬呼つて云く、我女兒何ぞ自ら眼力なきや、只よく他に問て賞を求よ、其官人に向て賞を求るは、恰も梅を望んで渇を止んと思ふに似たるべし。雷横これを聞て大に怒り云く、汝賊翁いかんぞ衆人の前に我を辱しむるや。白玉喬が云く、汝を辱しむるとも何の大事かあらん、汝もしこれを恥ば、速に頭を包んで恥を避よ。雷横これを聞て、忽然として鬚を倒に竪て、遂に臺の上に跳上り、彼白玉喬を散々に打て、臺より下に蹴落しける處に、諸人再三諫て先雷横を囘しけり。扨此白秀英は原東京に在し時、當縣の知縣に愛せられけるが、這囘知縣又白秀英父子を當地に呼下して、過活をなさしむるとなり。此時女子白秀英は、父が打傷はれたるを見て大に怒り、早速父を引て知縣が廳前に至つて、則訟へて云けるは、當縣の都頭雷横妄に我を戀ひ、剰

挿翅虎白秀英が舞曲を見る圖

に見えにけり。扨彼雷横は梁山泊を離れて、日あらず鄆城縣に至り、知縣にまみえて公用すでに調りし事を訴へしかば、知縣これを賞し、先休息すべしとて暇をぞ許しけり。これより四五日過て、雷横又街に遊行しける所に、鄆城縣の閑人李小二と云ふ者に遇しかば、李小二忙はしく問て云く、都頭はいづれの日歸り給ひしぞ。雷横が云く、我前日囘れり、此間當地に何等の新らしき事なきや。李小二がいはく、頃日東京より白秀英と云ふ妓女一人來りけるが、能舞をまひ歌を唱ひ、顔色ことに美なり、彼今拘欄の内に在て舞をまふ、都頭今日これを一覽し給はんや。雷横が云く、我幸今日は閑暇なるに、去來見物せんとて、李小二と共に拘欄の内に至つてこれを見るに、かの白秀英果して臺の上にあり、いまだ舞を初めずといへども、見物の人臺の四方に聚り、群を成隊を挽て望み見るに、李小二則雷横を引て諸人の前に潛出でて、近々と見物す。斯る所に一人の老翁又臺の上に出て、諸人に向て呼り云けるは、某は此囘東京より當地に至りたる白玉喬と申す者なり、齢晩年に至つて家業なき故、只此女兒白秀英を頼んで今日を過す、願くは見物の貴人一覽の後は必ず賞錢を惠み給へとて、樂器を打鳴しければ、彼秀英頓て舞を初めて良久して畢りし處に、見物の諸人一度に咄と喝采にけり。彼秀英自ら盤を捧げて、先雷横が前に至る。雷横これを見て、便袋の内を探せしか共、錢なかりし故、乃

を請て山陣の諸職を定むべし、と問ければ、呉用一々これを議定し、翌日諸の頭領を聚め號令を聞しめ、先孫新夫婦は元來酒店なればとて、麓に下して童威童猛に替らせ、時遷をして石勇が店を助けしめ、樂和には朱貴が店を助けしめ、鄭天壽をして李立が店を助けしめ、此四箇所の酒店に於て專ら世間の善惡吉凶を探聞しめけり。王英夫婦には後山の陣を守らしめ、鞍馬のことを司らせ、金沙灘の小陣には童威童猛を置て守らしめ、鴨嘴灘の小陣は鄒淵、鄒潤に守らせ、山前の大路は黃信、燕順に守らせ、山陣前面第一の關は解珍解寶に守らせ、第二の關は杜遷宋萬に守らせ、大陣の前の第三の關は劉唐、穆弘に守らせ、山南の水陣は阮家の三兄弟に守らせ、李應、杜興、蔣敬には、錢糧金帛等の事を掌らせ、陶宗旺、薛永には梁山泊の内に城臺等を築しめ、孟康には兵船を造らせ、侯健には專ら鎧兜衣袍旌旗等を作らせ、朱富、宋淸には筵宴のことを司らせ、穆春、李雲には寨柵を造らせ、蕭讓、金大堅には文書圖書等の事を掌らせ、裴宣には賞罰の事を掌らせ、其外呂方、郭盛、孫立、歐鵬、馬麟、鄧飛、楊林、白勝等には大陣の八面を守らせ、晁蓋、宋江、呉用は山陣の中央に居し、花榮、秦明は山陣の左邊に居し、林冲、戴宗は山陣の右邊に居し、李俊、李逵は山前に居し、張橫、張順は山後に居し、楊雄、石秀は聚義廳を守り、總て一山の頭領、各其職を怠らず相勤め、甚だ嚴密

○插翅虎拳をもつて白秀英を打つ

梁山泊の三人雷横を相迎へ、宋江先雷横に對して云けるは、久しく尊顔を拜せず、常に雲樹の思ひに逼りぬるに、今日は何の幸に來臨を惠み給ひしぞ。雷横答て云く、某向に知縣の命を請て、東昌府に赴き、今日公用を調へし故、再び鄆城縣に回らんとするに、順路當山の裾下を過るによつて、起居を候ひ奉る。晁蓋が云く、先山陣に登つて鞍馬の疲をも慰め給へ、とて頓て引て陣中に至り、諸頭領一々對面して、已に四五日逗留する處に、晁蓋又雷横に對して朱同が消息を問ければ、雷横答て云く、朱同は今知縣に愛敬せられ、比日職を改めて節級となり、殊更繁昌して恙なし。宋江が云く、伏して望らくは、雷都頭山陣に留り給ひて、我が輩と一所に義に聚り給ふまじきや。雷横これを辭して云く、我猶一人の老母あり、これに依て嚴命に遵ひがたし、老母歿して後は必ず來て山陣を頼むべしとて、はや別れを告げければ、晁蓋宋江再三留ること能ず、則一大盤の黄金を送て餞の儀を表し、頓て酒を勸めて別れを惜みけるに、雷横大にこれを謝し、遂に山を下りしかば晁蓋宋江吳用再び、金沙灘まで送つて一別に及びけり。雷横は金沙灘より船に乘て、對岸に上り、直に鄆城縣へ馳行きけり。晁蓋宋江は吳用

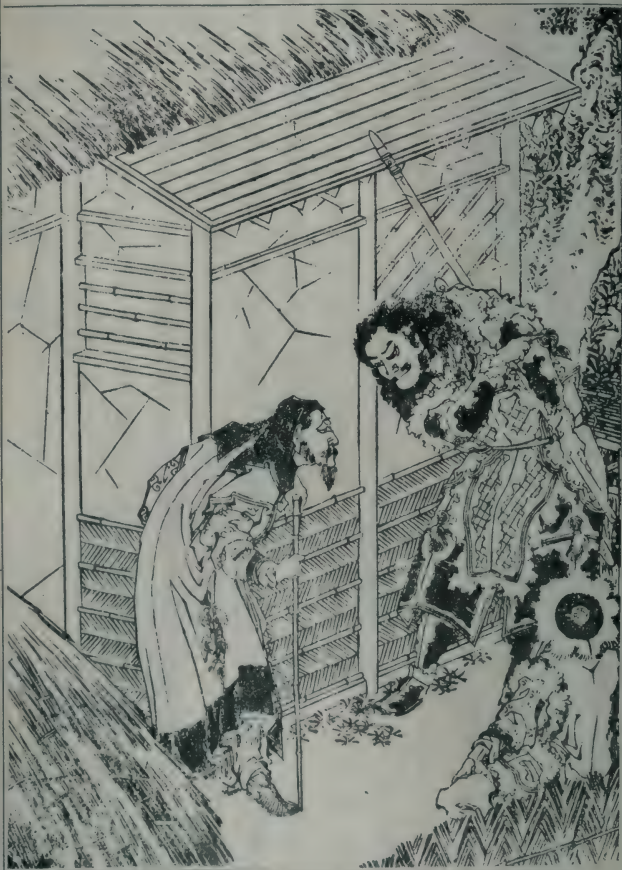
ざりけり。宋江又宴を新めて新參の頭領十二人を饗應べしとて、則ち李應、孫立、孫新、解珍、解寶、鄒淵、鄒潤、杜興、樂和、時遷、扈三娘、顧大嫂等を請て、宴飲を始め、樂を奏して大に娯みけり。翌日宋江、王矮虎を呼で云けるは、我當初淸風山に於て、汝に婚禮の儀を約せしといへ共、いまだ此願を遂ずして、心を安ぜざりし處に、幸今老父宋太公一人の女兒を養ひし故、我是を以て汝に嫁せしめん、汝是を悅ぶべしとて、則ち宋太公を請ければ、宋太公自ら一丈靑を引て廳上に至りぬ。宋江これを迎て云けるは、我以前王英に婚禮の儀を約しけれ共、いまだ此願を遂ざりしに、幸今一丈靑を以て王矮虎に嫁せしめんと欲す、諸頭領媒をなし給へ、今日はしかも吉日良辰なれば、宜しく婚禮を調ふべし。一丈靑は宋江が義氣を見てこれを辭せず、則王英とともに、頓首して拜謝せり。晁蓋ならびに諸豪傑都て是を悅んで、宋江が德あり義あることを感じけり。宋江頓て宴を設けしめ、已に婚禮の儀を相催し、衆皆盃を飛せて、酒漸々闌に至りし處に、朱貴が店より使を馳て報じけるは、鄆城縣の都頭雷横今朱貴が店に至りて、山陣を候ひ給ふ、と未だ云も終らざるに、晁蓋、宋江、吳用覺えず身を躍せて大に悅び、三人ひとしく下りて相迎へけり。

救ひを蒙りて、今日山に上りしかば、先禍を避るに足るといへども、只家内のこと安全ならず、願くは今又我等兩人を放て再び山を下らしめ給はゞ、却て感激に勝がたからん。吳學究笑て云く、大官人心を安んじ給へ、貴族は盡く已に山陣に迎へ取り、貴宅ははや焰燒して、一塊の黑地となし、大官人今更何れに往んと欲し給ふや。李應是を聞て未だ信ぜざる處に、妻子眷族都て車に載せ、李應が前に擡出しかば、李應是を見て忽ち驚き慌れ、妻に問て云く、汝いかゞして此所に至りしや。妻こたへて云く、相公知府に捉れ給ひて後、又兩人の巡檢官ならびに四人の都頭官二百餘人の士兵を引て、家内の財寶を收拾め、我が輩は車に載せて擡出で、宅には火を放ちて燒拂ひぬ。李應未だ聞あへず、大に呼つて駭きしかば、晁蓋宋江齊しく罪を謝して云く、我輩大官人を山陣に邀へんが爲、かく計を行ひぬ、願くは罪を免し給へ。李應是を聞て已ことを得ず、遂に心を傾けて山陣に止るべし、と領掌しけり。宋江又李應に對して云けるは、彼知府幷に孔目巡檢都頭等を呼出して、大官人に再び對面せしむべしとて、頓て此輩を呼出しけるに、彼知府を假たる者は蕭讓なり、兩人の巡檢を似せしは、戴宗楊林なり、孔目を假たるは裴宣なり。虞候を假たるは金大堅、侯健なり、小節級を似たるは、李俊、張橫、馬麟、白勝等四人なり。李應一々是を見て、只呆れたるばかりにて、聲をも出すこと能

をも訴へぬ、汝も宜しく索を掛て、州裡に來れとて、同じく是も絆めさせ、知府頓て主從兩人を當先に引しめて、李家莊を打出で、纔二三十里許に至て傍を見るに、宋江、林冲、花榮、楊雄、石秀等人馬を率して路を支り、林冲先大に呼つて云く、梁山泊の豪傑共こゝにあり、汝贓官、速に手を束ねて死を請ふべし。知府これを聞て返答にも及ばず、遂に李應杜興を捨て逃去ける處に、宋江急に趕しめしかば、諸頭領我先にと人數を引て追行き、少刻馳回りて云けるは、知府ははや行向知れず追失ひけるゆゑ、先兵を引回しぬ。宋江これを聞て、頓て李應杜興が絆を解しめ、自ら慇懃に云けるは、李大官人先山陣に上り給ひて、暫く難を避給はゞ可ならん。李應が云く、不可なり、我罪は自ら辨ずる處あり、今又知府を追拂ひ給ひしは、是則諸頭領の罪にして、我が干る所にあらず。宋江笑て云く、官司何ぞ肯て此のごとき分說を容んや、我もし大官人を棄回りなば、必然禍大官人一家に及べし、權く先山陣に躱れ給ひて、世間の靜謐を待て再び回り給へ、必ず遲疑して、自ら後悔を求め給ふな、とて遂に李應杜興を誘引し、三軍迤邐としてはや梁山泊の下に至りしかば、晁蓋自ら諸頭領を引て山を下り、頓て宋江等諸人を迎へて同じく山陣に上り、則聚義廳に於て酒宴を設け、大に飲酌を催しけり。此時李應は諸豪傑に對面して一々禮畢りしかば、李應又宋江に對して曰く、某主從兩人山陣の

後軍一度に咄と凱歌を唱ひけり。扨又撲天鵰李應は箭疵已に痊て病平復を得しかども、只門を閼して莊上にあり。暗に人を馳て祝家莊の戰を伺はしめ、祝朝奉が戰ひ負たる消息を聞て、私に快く思ひ居ける處に、家人來て報じけるは、當州の知府四正十人の步軍を引て、莊前に至り給ひぬ。李應これを聞て忙はしく杜興を出して、莊門を開かしめ、遂に迎へて廳上に至りしかば、李應恭しく知府を請て中央に坐せしめ、また孔目を請て其傍に坐せしめ、堦の下には虞侯節級等袖を列ねて坐しにけり。李應已に知府を拜し畢て、廳前に跪きし處に、知府先李應に問て云く、祝家莊今般軍に輸たる次第はいかん。李應答て云く、某先に祝彪に臂を射られ、多日箭疵養生して家にあり、曾て莊外に出ざりしゆゑ、某いまだ戰の虛實を知らず。知府が云く、汝なんぞ我を誑くや、今已に祝家莊より汝がことを告云ぬるは、汝暗に梁山泊の强盜等と通同し、擅に彼等を引て祝家莊を打せけるとなり、汝必ず抵賴ふ事なかれ。李應が云く、某不才たりといへども、原來法度を知れり、豈敢て盜賊と通同せんや。知府が云く、我汝が言を信じがたし、我先汝を府裡へ携へ回り、詳に査照すべしとて、節級等に命じければ、節級等頓て李應を捉へて索を掛けるに、知府又問て云く、老管家の杜興といふ者は何れに在や。杜興答て云く、則某杜興と云ふ者なり。知府が云く、祝家莊の者共、汝がこと

にしたれ共、又多く敵を殺し快く覺ゆるなりとて、却て勇み見えけり。斯る所に軍師呉學究人馬を引て馳來り、卽ち宋江に見え悦びを賀しければ、宋江又呉用と共に商議して、祝家莊の人民等を追散し、村を淸めんと欲しける處に、石秀進み出て、彼鍾離老翁が信行有て、宜しく路徑を敎へたることを告て云けるは、此村の内には、道を敎へたる大恩人鍾離老翁在るなれば、妄に民間を劫ひ、彼が家を壞ひ給ふことなかれ。宋江是を聞て大に感歎し、早速石秀を馳て老翁を呼寄せ、則ち對面して云けるは、若汝此村にあらずんば、我今村中を燒拂て、居民を追散すべけれ共、汝一人が家に善を行ふゆゑ、村中の民家を饒すなりとて、又一包の金を與へて、路を敎たる功を謝しければ、老翁再三頓首して宋江を拜しけり。宋江が云く、我今幸に祝家の一族を打亡して、村中の一害を除きぬ、彼が家に貯へし所の糧究て多し、我是を村中に散し、家毎に一石づつを惠むべしとて、鍾離老翁を始とし、各一間の家に粟一石を施し、其餘の金銀錢財幷に兵粮軍器等は盡くこれを取らしめて、山陣の軍用に備へけり。此般祝家莊を破て得たる所の兵粮都合五十萬石と記しぬ。宋江是を見て大に悦び、卽日諸頭領に號令を傳へて、歸陣の用意を調へしめ、其夜五更の左側に三軍を起して、已に祝家莊を打出しかば、村中の百姓老を扶け幼を引き、衆皆路上に出て宋江を拜謝せり。宋江は兵を三手に分て備を列ね、前軍

宋江明鍾離老人に恩賞をあたふる
図

かに聲を勵し云けるは、祝龍、祝彪は某これを殺しぬ、獨扈成を擊もらしたれ共、扈家莊を燒拂つて、扈太公幷びに一家の眷族ども都て砍盡せり、是故に某早速來て功を獻じ奉る。宋江是を聞て忽ち怒て云く、祝龍は汝が殺たる證見多し、其餘はいかんぞ汝が殺さんや。李逵が曰ふ、某先に祝彪を追て扈家莊に馳ぬる所に、一丈青が兄扈成、はや祝彪を生捉て親方の陣に引せくる、某半途に於てこれに遇ひ、則祝彪が頭を刎ね、扈成も共に殺さんとせし處に、彼忙しく逃て行向を藏しぬる故、我是を打漏し、只彼扈家莊を燒拂ひ、家內一族を斬盡しぬ。宋江大に責て云く、汝誰命を奉て扈家莊を焰燒せしぞや、汝も知るごとく、扈成前日自ら來て我に降參せんと約諾せるに、汝いかんぞ擅に彼が一家を殺せしぞ、是我が號令を違く所なり。李逵がいはく、長兄何ぞはや忘れ給ふや、前日扈太公女兒一丈青を馳て、已に長兄を害せんとせり、このゆゑに我是を殺せり、長兄未だ一丈青と婚禮の議も調らざるに、はや丈人妻舅のことを思ひ給ふや。宋江責ていはく、汝かく亂りなる言を云ことなかれ、我豈敢て一丈青を娶るの望あらんや、我今一丈青を父太公に預て介抱せしむるは、原來深き所存あり、汝今日我號令に違ぬる間、軍中の法に依て首を刎べけれ共、是祝龍祝彪を殺したる功に替て、先此度の罪を免す、若重ねて號令を背かば、決して軍中の法度を免すまじ。黑旋風笑て云く、我今戰功を無

五編　巻之四十四

○宋公明三たび祝家莊を打つ

偖も宋江は祝家莊の武勇烈しきに攻あぐみたる處に、病尉遲孫立兄弟を始め、一時に豪傑を多く得たるのみならず、外には吳用が軍配あり、内には孫立が計を施しければ、三たび兵を起す間に敗軍多かりしも、終には畢竟の謀略圖に當りて、祝家莊を攻破り、宋江已に莊内に入つて、廳上に坐しければ、諸の頭領等來て功を獻ず。生擒の軍士は凡五百餘人と記し、其外兵糧を得る事五十萬石に餘り、衣甲弓箭刀鎗馬羊を得たるは、其數を知べからず。宋江是を見て大に悅び、此回衆英雄の力を借て全き勝を得たり、只惜らくは、欒廷玉萬夫不當の勇有といへ共、全軍の敗北に因て、亂兵に殺されたりと覺ゆ、誠に希有の豪傑なりしをとて、一向嘆息しける處に、黑旋風李逵扈家村を燒拂つて、首を獻ずと報じければ、宋江大に驚いて云く、前日扈成自ら來て我に降らんと約せしに、李逵妄に彼莊を燒しはいかなる故ぞとて、頓て李逵を呼入けるに、李逵は全身血に染み、二つの斧を腰に插し、直に宋江が前に至て跪き、高ら

将三百餘騎を引て出で、其餘門樓を守るとあり。一村百姓の集り勢にて、騎兵歩卒を出すにもせよ過分ならずや。蔡太師が東京の第宅に門番少きとは、餘り不都合に兵多し。作者の思慮いかん。蔡太師が門番王公の悴を以て勤めさすると云ふこと、四編目の七巻目に出づ。

て祝虎を馬より下に攧落しぬ。莊兵共これを見て、恰も風の秋葉を吹敗り、雨の春華を打殘ふごとく、四方に散て逃去けり。孫立孫新はや宋江を迎へ莊内に誘引せり。祝龍は林冲と戰ひけるが、敵しがたくや思ひけん、馬を回し後門の邊に逃來りし處に、解珍解寶、一向莊兵等が屍を投出しければ、祝龍又北を望んで走りけるに、黑旋風李逵此に至り、遂に二つの斧を輪して馬より下に砍て落せり。祝彪は獨扈家莊を望んで逃行しかば、扈成是を綁めたりしが家人等に引せ、扈成自ら宋江が陣中に送り來る所に、李逵半途に於てこれを見付け、忽ち斧を揮て、祝彪を砍殺し、尚叱り狂うて扈成が家人等をも散々に斬拂ひければ、扈成分說せん間もなく、遂に家を棄て延安府へ逃行けり。李逵は直に扈家莊に斬て入り、扈太公并に一家の眷屬一人も漏さず、都て斬盡し、兵共に下知して、家内を捜させ、金銀米錢刀鎗弓矢、牛馬猪羊、遺さずこれを奪取り、則諸軍勢に携へしめ、先宋江が陣中に送り、己は只顧勢に乘じ前後左右に跑廻り、許多土民百姓を追散し、遂に一把の火を用ひて、扈家莊を燒拂ひ、直に祝家莊を望て馳回りけり。

石秀の綽名拚命三郎を、捨命三郎に作るも同じ字義なり。論者云く、祝家莊祝朝奉は農夫の豪富家とみゆ。此處は船來本第五十回にて、祝彪五百餘騎にて打出ると有り。又祝家の

黒旋風斧を揮て祝彪を斬図

打て出で、一齊に咄と喊の聲を作り、山を響せけり。此時鄒淵鄒潤は暗に大斧を藏して、囚車の傍を奔走しつゝ時節を伺ふ。解珍解寶は軍器を藏して、後門の邊を守り、孫新樂和は前門の左右を守る。顧大嫂は先手勢を聚めて、孫立が妻樂氏が車を守らせ、己は兩刀を藏して、堂前に徘徊す。扨祝家莊には、三回攻鼓を擂て一つの大砲を放しければ、欒廷玉等都て敵陣に突て入り、四下に分て相戰ふ。孫立は獨十餘人の手勢を領し、吊橋の上に相控たり。孫新は又已等が旗號を門樓の上に立ければ、樂和は鎗を撚て、相圖の消息を鄒淵鄒潤に通せし處に、忽ち斧を揮て、囚車を守る軍士數十人を斬殺し、七人の豪傑を囚車より出しければ、七人忽ち盡く軍器を尋ね取て、奔雷のごとく吼り、前後左右に當て、はや百餘人斬倒せば、顧大嫂は兩刀を打揮て堂中に走入り、家内の男女盡く斬殺しければ、祝朝奉大に驚き、堂外へ逃出せし處を、石秀是を斬伏て首を刎落せり。諸の頭領四面八方に跑散て、莊兵を殺せし數幾許と云限を知らず。解珍解寶兩人は後門の邊に在て、馬草の內に火を放しかば、黑焰忽ち天に沖りて、煌々と焚上る。四路の人馬、莊上に火の起るを見て、各力を併せ攻來る。祝虎大に駭き、急に馬を回して、吊橋の邊に跑來りけるに、孫立橋の上に在て、大に罵りて云く、汝奸人何れに往や。我あへて饒さじとて、鎗を擧しかば、祝虎再び宋江が陣中に突入し處に、呂方郭盛齊しく刀を舞し

を知けり。祝家莊正に滅亡の時至りぬるにや、彌心を傾けて孫立が言を信じ、半點も疑を入ざるこそ癡なれ。翌日孫立等衆人は、事を議してありける處に、辰の下刻一人の兵來て報けるは、宋江が人馬又四手に分て四方より寄來る。孫立が云く、遮莫何の怕るゝ事あらん、只よく鈎索等を以て、宋江等を生擒べし、若矢石等飛物を以て殺して捉へたるは、其功を論ずまじとて、衆皆衣甲を著して、軍の用意を調へけり。祝朝奉はや三人の子を引て門樓の上に上り、目を縱にして、四方を望み看るに、正東の方一彪の人馬出來る。此大將は豹子頭林冲なり。其後に李俊阮小二五百餘人を領し控へたり。正西の方に又五百有餘の人馬馳來る。乃ち是小李廣花榮なり。其背後には張横張順兵を領し控へけり。正南の方にも同く五百の人馬進み來る。當先に三人の大將あり、沒遮攔穆弘、病關索楊雄、黑旋風李逵等なり。總て四面の人馬一齊に攻鼓を鳴し、喊の聲大に起る。欒廷玉これを見て云けるは、今日の敵勢格別なれば、輕輕しく侮るべからず、我自ら一夥の人馬を引て後門に打出で、西の方の敵を敗るべし。祝龍が云く、某は前門に出て東の敵を撃べし。祝虎が云く、我も又後門に出で、南の方の人馬を追拂ふべし。祝彪が云く、某は前門に馳出て、賊首宋江を活捕べし、是第一肝要なり。祝朝奉是を聞て大に悅び、多く酒肉を以て三軍を賞しけり。諸大將各三百餘騎を引て、莊門の外に

孫立五六歩斗馬を退けしかば、石秀相繼て搠入し處に、孫立早くも是を避け遂に猿臂を舒して石秀を揪へ、頓て索を懸にけり。祝家兄弟これを見て、勢に乘じ攻戰ひ、宋江が兵を四方八面に追散し、先三軍を收めて莊内に引取り、皆々孫立に見えて喜び賀しけり。孫立問て云く、活捉の賊總て幾人ありや。祝朝奉が云く、初時遷と云ふ賊を捉へ、次に細作の賊楊林と云ふ者を捉へ、其後また黃信、王矮虎、秦明、鄧飛等を生捕り、今又將軍石秀を捉へ給ひしかば、總て活捉七人なり。孫立が云く、速に七つの囚車を調へて、彼等を此内に入置き每日酒食を與へて、身の養生をなさしめ給へ、後日宋江を生捕なば、共に東京に送て、武名を天下に振ふべし。祝朝奉父子これを聞て、大に孫立に謝して云く、此度幸ひに將軍の助を蒙ることなれば、宋江を生捕らんこと難からじ、誠に梁山泊の滅亡時至れりと悅んで、遂に酒宴を始めけり。扨此石秀が武藝孫立に劣れるにはあらざれ共、いよ〳〵祝家莊の輩を詐いて、孫立を敬はしめんが爲、故意孫立に捉れしなり。はたして是より益祝朝奉父子孫立に信服し、毛頭疑ひなかりけり。孫立又暗に鄒淵、鄒潤、樂和等を後門の邊に馳て、遍く出入の路筋を見せしめけり。楊林鄧飛等は、想はず鄒淵鄒潤を看、先心中に悅びぬ。樂和は左右に人なきを見て、暗に計の次第を告げ、活捕れ在る所の頭領に知らしにけり。顧大嫂も亦孫立が妻樂氏と倶に、路徑を看定めて、能案内

兵進み入て云く、宋江が人馬又寄來る、已に莊前に至れり、と報ければ、祝虎祝彪各〻莊前に出て門外を望み見るに、敵の軍中に金鼓大に打鳴し、はや陣勢を張りぬ。此時祝朝奉も又莊門の上に出ければ、左には欒廷玉あり、右には孫提轄あり、其外息三人ならびに、孫提轄が携へ來りし勇士共、悉く前後左右に立竝ぶ。宋江が陣中より、豹子頭林冲當先に進み出て、大音聲に惡口して罵りしかば、祝龍これを聞て大に怒り急に鎗搶綽て馬に乘り、一二百人を引て門外に斬て出で、直に林冲が勢に跑合ひ、兩軍同く攻鼓を擂て相戰ふ。時に林冲鎗を撚て祝龍を相迎へ、戰已に三十餘合に及べども、勝負分たざりしかば、兩軍互に金を鳴し、先雙方に引せけり。祝虎これを見て大に怒り、刀を舞はし陣前に騎出し、大音を揚げ、戰を挑みければ、宋江が陣中より、沒遮攔穆弘鎗を輪して、祝虎に渡り合ひ、兩將勇を奮て戰ひ、又三十餘合程に至れ共、更に雌雄分たず、祝龍これを見て甚だ焦燥、一二百餘騎を率して莊外に打出しかば、宋江が後より病關索楊雄馬を飛せ突て出で、直に祝龍を迎へて相戰ふ。此時孫立は莊上に在て兩軍の戰を見、急に衣甲を著し軍器を取り、烏騅馬と云ふ名馬に乘て、莊外に跑出で、故意惡口して罵りけるは、宋江反賊、我今日汝を殺さんに、早く出て一死を乞べし。宋江が陣中より、拚命三郎石秀鎗を擧て搠て出で、直に孫立と馬を交へて相戰ひ、已に五十餘合に至て、

朝奉もし事あらば、隔心なく一方の用を示し給へとて、一々對面させけり。祝朝奉父子原聰明の輩なれ共、孫立に誑かれ、況や欒廷玉が武藝の同門たることを聞て一點も疑はず、牛を殺し馬を宰て酒宴をなし、饗應尤豐なり。孫立已に兩日を過しける處に、第三日の朝、一人の兵來て報けるは、宋江又兵を發して莊上に寄來る。祝彪が云く、我自ら向つて此賊を生擒んとて、百餘騎を引て莊外に打出けるに、はや五百餘の人馬進み來る。小李廣花榮當先に在て馬を躍せ、鎗を撚て戰を挑みしかば、祝彪是を見て大に怒り、同じく鎗を撚て搠かゝる。花榮これを迎て鎗を交へ、兩人の豪傑、獨龍岡の前に在て、一往一來術を盡して勝を爭ひ、戰已に十餘合に及べども、未だ勝負分らざりし處に、花榮詐つて逃ければ、祝彪後に隨つて追行く處に、一人の兵諫て云く、相公必ず花榮を追ふことなかれ、彼は弓箭の高手なるに、恐くは誤あらん。祝彪これを聞て急に馬を回し、先兵を收めて莊内に馳入けり。孫立卽祝彪に問て云く、小將軍今日は何賊を捉へ給ひしぞ。祝彪が云く、今日は小李廣花榮とやらん云ふ賊の頭領出て某と十餘合戰ひけるが、遂に逃しゆゑ、某是を追擊せんと思ひしか共、渠は原弓矢の達人たるに依て、敢て長追せず、先兵を收めて引回しぬ。孫立が云く、某不才たりといへ共、明日彼等數人を生捕て、一覽に入れんとて、先今日の軍は休けり。翌第四日午の上刻に、又一人莊

欒廷玉が云く、頃日梁山泊の强盗等と相戰ひ、已に數輩の頭領を活捉ぬ、近日の内宋江を捉へて、共に官司に送らんと欲す、幸ひ今賢弟來つて、此邊を守り給ふは、恰も錦に花を添るが如し。孫立打笑て云く、某不才たりといへ共、長兄を助けて宋江を擒にし、速に功を建しめ進らせん。欒廷玉是を聞て大に悅びしが、頓て孫立が人數を莊内に引入れ、再び吊橋を拽起げ莊門を關しけり。此時祝朝奉父子四人廳上に出ければ、欒廷玉自ら孫立等を引て廳上に至り、一々見えしめ、各禮了りし處に、欒廷玉先祝朝奉に告て云けるは、此賢弟は則病尉遲孫立と號して、登州の兵馬提轄なり、今總兵府の命を奉りて、此邊鄆州城を守るゆゑ、今日此に至りぬ。祝朝奉が云く、已にかくあらば、某が此處も亦提轄の支配の地なれば、諸事下知を蒙るべし。孫立が云く、某がごとき小職、何ぞ論ずるに足らん、向後只朝奉の懇志に預らん、とて又三人の兄弟に對して云けるは、連日の戰に嘸神を勞し給ひしならん。祝龍が云く、某等朝廷の爲に駑鈍の力を盡すといへ共、未だ勝敗を決せずして、頗る氣を屈せり。孫立此時孫新、解珍、解寶等三人を呼で、祝太公父子にまみえしめて云く、此三人は則某が兄弟なりとて、又欒和を指ざし、此人は是鄆州より登州に至給ひぬる使者なり。又鄒淵鄒潤を指ざし、此人は則登州より送り來りし兩人の軍官なり、某同往せし內に、武藝不鍛煉の族一人もなし、

送りて、宋太公に預置き、殊更懇に介抱ある間、足下心を安んじ回るべし、後日足下の所爲を見屆け、此方より送るべし。扈成が云く、某自今以後祝家莊を助くまじ、若彼が軍士我が方に來る者あらば、早速是を綁め、將軍の麾下に獻ずべしとて、遂に別れ回りけり。

○吳學究連環の計を雙用ふ

偖も彼孫立は、旗號の上に登州兵馬提轄孫立と云ふ八字を大字に書き、統て四十餘人を引て、祝家莊の後門の前に至りしかば、莊上の軍士等是を見、頓て內に入り斯と告ければ、欒廷玉これを聞て、祝家三兄弟に告て云く、彼孫提轄は原某と共に、一人の師に從つて武藝を學びし者なるが、今日此處に至るは何故やらん、某これを迎へて問ふべしとて、則吊橋を下し迎へしかば、孫立等遂に馬を下り、橋を過て內に入り、各禮畢りし處に、欒廷玉先孫立に問て云く、賢弟は登州に在て暇なく勸め給ふと聞けるに、今日は又何等の事有て、當地に至り給ひしぞ。孫立答て云く、某這回鄆州を守て梁山泊の强賊を防ぐべしとて、總兵府の文書を授けられ、今日妻子を携へて鄆州城に發向す、則ち此處を過て長兄當莊に居給ふと承り、敢て來て起居を伺ひ奉る、素前門に至らんと欲しけれ共、村口に人馬多く屯したる故、小路を過て後門に至れり。

ち陣中に呼入ければ、扈成頓て帳前に至り、宋江に拜謁し、懇に告て云けるは、某が妹年幼うして事を曉さず、妄に威顏を犯して、今已に縲紲の辱を蒙りぬ、彼は先達て祝家莊の第三子と、紅糸の緣を結びしゆゑ、此度の戰に救ひの兵を出したり、願くは將軍廣く仁慈を垂給ひて、妹が一命を饒し給へ、若軍中に何等の物入用に候とも、某肯てこれを獻じ奉らん。宋江が云く、足下先寬坐して談話給へ。彼祝家莊の一族共、未だ曾て仇あらざるに、一向我山陣を恥辱るによつて、止がたく此寃を報いんが爲、此度已に軍馬を起して推寄ぬ、我輩此所の地理に達せず、しば〳〵敗軍に及べども、日あらず祝家莊を打潰し、一赤土となさんこと遠かるまじ、我元來足下の家とは仇もなく怨もなし、只汝が妹一丈青我王英を活捉しゆゑ、我又禮を回して足下の妹を活捉ぬ、汝もし王矮虎を回さば、我又汝の妹を還すべし。扈成が云く、王頭領は今某が方にあらず。吳學究問て云く、然らば王英は何れに在や。扈成が云く、王頭領は今祝家莊にあり、某何んぞ能これを求めんや。宋江が云く、汝もし王矮虎を取て我に還さずんば、豈よく妹を得ることあらんや。吳用又云く、足下彌妹一丈青を救んとならば、向後祝家莊に軍あるとも、これを救ふことなかれ、祝家莊の軍士若汝の家を賴て來る者あらば、早速絆めて我が方に送り給へ、然らば我肯て一丈青を還すべし、況や一丈青は前日已に山陣に

憂愁して、顏色一快からざりしかば、吳用まづ自ら酒を以て宋江を慰め、然して後に、此祝家莊を破るべき、便宜を得たると云ふ來歷を告て云けるは、今登州の兵馬提轄、病尉遲孫立と云ふ者難を避て山陣に來りけるが、祝家莊の師欒廷玉とは原武藝の同門なるゆゑ、幸ひ一つの計を獻じて、祝家莊を暫時に踏破らんと議定し、總て八人數十個の人を引て、少刻此處に到著す、所謂計は內應外合の企なり。宋江是を聞て大に悅び、頓て諸頭領と共に、孫立等が到るを待けり。扨孫立は手勢四十餘人を車に從はしめて傍に安置し、只彼解珍、解寶、鄒淵、鄒潤、孫新、顧大嫂、欒和等と共に都て八人、已に至て宋江に拜謁し、各禮已に畢りしかば、宋江はや酒宴を具て、これを饗應しける。扨又吳學究暗に號令を傳へて、諸頭領に計を授て云く、第三日には、かくの如く〳〵行ひ、第四日にはかくの如く〳〵行ふべしと、手分撥已に定りしかば、孫立等も又計を授け、右の手勢四十餘人を引て、遂に祝家莊に馳行きけり。吳用又戴宗に對して云く、戴院長は今再び速に山陣に回り給ひて、鐵面孔目裴宣、聖手書生蕭讓、通臂猿侯健、玉臂匠金大堅、此四人の頭領を誘引して早々來り給へ、我自ら此四人を用ふべき所あり。戴宗命を請けて、則遂に梁山泊へ急ぎけり。かゝる處に人の軍士來つて、宋江に報じて云く、西の村扈家莊より、扈成自ら牛を牽せ、酒を擔はせ陣外に馳來りて候。宋江是を聞き、則

に笑て云けるは、某等今山陣を頼んで伺候すれども、未だ一點の功あらず、幸ひ這回一つの計を獻じ、忽ち祝家莊を踏破らんはいかん。石勇悦んで云く、願くは良計を聞かん。孫立が云く、彼欒廷玉は原某と武藝の同門にて、彼が學び得たる所の武藝は、我も亦知らずと云所なし、我輩此度登州より鄆州に移る體にもてなし、祝家莊を過り、乃彼欒廷玉を訪ふべし、然らば彼必然自ら出て我輩を迎ることあらん、こゝに於て內應外合の計を行はゞ、大事立處に成べし、知らず此計はいかん。石勇これを聞き、究て神なり妙なりと思ふ處に、吳用今山を下て、祝家莊に發向有ると注進の人ありしかば、石勇急に吳學究を迎て孫立が計を告んとて、自ら門外に出て望見るに、吳用はや三阮兄弟、幷びに呂方郭盛等と共に、五百の人馬を引て、店の前にいたりたれば、石勇迎へて內に入り、頓て孫立等を呼出し、吳用にまみえしめ、計の次第一々詳に語りしかば、吳用是を聞て大に悅び、則孫立等に對して云けるは、足下等いよ〱肯て山陣の爲に計を施し給はんとならば、今日はまづ山陣に上り給はずして、我輩と共に祝家莊に趣き、速に計を行うて、功を全うし給はんや。孫立等是を聞て大いに悅び、衆皆心を傾けて領掌す。吳用が云く、我人馬は先に馳べき間、諸豪傑は後より進み給へとて、吳用は遂に人馬を催促して、祝家莊に至り、先兄弟に見えて其動靜を見るに、宋江は大に

劫もと図

孫新夫婦
大お
牢を

斬殺しぬ。牢中總て三五百の小牢子共、大に喊き叫んで牢外に打出けるに、孫立孫新これを迎て散々に斬拂ふ。鄒淵鄒潤は、はや王孔目が首を取て、州裡より馳來り、直に城外に打出る。解珍、解寶、樂和、顧大嫂等四人の者共は、許多の人を殺して、遂に城外に馳出しかば、孫立孫新兩人は同く殿後して、城門の外に打て出で、諸人再び孫新が家に回て、孫立が妻樂氏を車に載しめ、顧大嫂は馬に乘り、即日衆皆梁山泊へと進發す。解珍解寶諸人に對して云けるは、我若彼毛太公老賊を殺さずして、いかんぞ此冤を雪んや。孫立が云く、汝等が言尤然りとて、即ち孫新樂和は車に跟しめ、先に進せ、己は解家の兄弟鄒家の叔姪共に、數十個の人を引て、直に毛太公が家に馳けるに、毛太公父子は思ひ寄らざりし事なれば、大に仰天し腰を抜ける處に、孫立已に亂れ入て、毛太公毛仲義、ならびに一家の眷族悉く斬殺し、又金銀財寶馬刀等を得て、各馬に打乘り、急に後を慕うて馳ける程に、纔三四里に至て車に追著き、再び人數を備て急しかば、日あらずして梁山泊の下、石勇が酒店に至て、鄒淵先石勇に對面し、頓て楊林鄧飛等が事を問ければ、石勇答て云く、彼兩人は宋頭領に從つて祝家莊を攻けるが、兩度の戰に利を失ひ、楊林鄧飛其外數輩の頭領遂に敵方へ生捉れたり、祝家の三兄弟皆强勇なるに、其上武藝の師欒廷玉と云ふ者有て、戰を助けし故、親方已に敗北しぬ。孫立これを聞き、大

汝は何女なれば、牢門に近くや。顧大嫂答へて、我は牢中に飯を送る者なりと云しかば、樂和やがて門を開いて、顧大嫂を入しめたり。此時彼包節級は、東廊の邊に在けるが、顧大嫂を見て忽ち責つて云けるは、此女は誰なれば、妄に牢中に飯を送るや、古の語にも、牢獄には風をも通ぜずと云なるぞ。樂和が云く、此女は解珍解寶が姐なり、自ら飯を携へて牢中に送る。包節級怒つて云く、汝いかんぞ彼を放つて牢中に入しむるや、汝宜しく彼女に替つて、飯を牢中に送れ。樂和これを聞て即ち飯を乞取り、遂に牢中に入て、解家兄弟に與へければ、解珍暗に問て云く、昨夜云給ひし事はいかん。樂和が云く、今汝の姐此飯を携へて來り給ひぬ、少刻手を下すべき間、頸枷を除き待給へとて、匙を與へし處に、一人の小牢子進み入て、包節級に告て云く、孫提轄來つて牢門を敲き給ふ。包節級が云く、彼は府中の軍官なるに、牢中に入て、何の事かあらん、必ず門を開くことなかれ、と未だ云も終らざるに、又一人來り告て云く、孫提轄只顧焦燥て、緊しく門を敲く。包節級大に怒り、自ら走り出んとせし處に、顧大嫂刀を揮つて、迎へ進みしかば、包節級是を見て、急に逃んとしける時、解珍解寶牢の窓を鑚出て、包節級に向ふ。包節級逃行べき所なく、遂に解寶に頸枷を以て眉間を打砕れ、忽ち地に倒て死にけり。解珍も亦頸枷を以て小牢子四五人を打伏ければ、顧大嫂は刀を揮て、五六人

云ふ言の如く、我輩もし事を做出しなば、伯々先禍を蒙つて、入牢し給ふべし、願くは伯伯自ら明かに察し給ひて、我輩と同心し給はんや。孫立が云く、我はこれ登州の官軍なるに、豈よく汝等と倶に、かくの如きことをなさんや。顧大嫂これを聞て、忽ち刀を抜いて云けるは、伯々今我輩が心腹の言を聞給ひても、同心し給はずんば、我決して伯々を免さじとて、已に刀を揮て近きしかば、鄒淵鄒潤も同じく、刀を舞して左右に相從ふ。孫立これを見て、急に呼つて云く、嬸々先怒を息よ、我又肯て宜しく商議せん。顧大嫂が云く、此企はもと伯々の妻舅、樂和節級の諫に依てなす所なれば、再三遲疑し給ふことなかれ、我輩急に馳せて牢を劫ふべき間、伯々は其暇を窺ひ、速に行李等を拾收め給ひて、共に梁山泊に上り給へ。孫立嘆じて云く、此上は我力を併すべしとて、一緒に商議をなしにけり。先鄒淵を登雲山に回らしめて人數を催させ、又孫新を城下に遣して、暗に樂和に消息を通じ、解家兄弟に斯と告知せけり。翌日鄒淵は二十餘人を催し、再び孫新が家に至りしかば、孫新も又心腹の者七八人を催し、孫立も同じく手下の軍卒十餘人を呼集め、都て四十餘人、已に用意を調へて、各軍器を帶し、二手に分て城下へと馳行けり。獨顧大嫂は詐つて牢中に飯を送る女に出立ち、先牢門の邊に至りけるに、樂和ははや此邊に待て在けるが、顧大嫂を見て、故意知らぬ體にもてなし問けるは、

泊に來るまじ、必ず率爾に商議し給ふな。孫新が云く、我自ら一つの計あり、明日我兄に見えていふべきは、我妻顧大嫂今重病に臥て、旦夕保ち難し、願はくは長兄夫婦自ら駕を枉給ひて、是を見給へと誑いて、遂に誘引して回り、宜しく言を竭し、承允あらしむべし。鄒淵是を聞て然りと同じければ、孫新翌日家人等に二つの轎を擡しめて、飛がごとく孫立が家に馳行けり。顧大嫂は兩人の豪傑と共に、消息を待侘び居ける處に、孫新已に兄と嫂々を二乘の轎に乘しめ、再び家に回りしかば、顧大嫂自ら出て是を迎ふ。孫立夫婦顧大嫂を見て、大に驚きて云く、汝は重病に臥て在と聞けるに、何んぞ自ら出て相迎ふるや。顧大嫂が云く、我が病は實に人を救ふの病なり。孫立が云く、怪いかな、人を救ふ病と云は如何。顧大嫂が云く、伯々は未だ聞給はぬや、我弟解珍解寶前日毛太公が計に無實の罪に陷され、今已に牢中にあり、故に我等夫婦牢を劫うて救ひ出さんと計り、則登雲山より兩人の豪傑を迎へ、共に議をなす、もしいよく救ひ出しなば、直に梁山泊へ上らんと欲す、恐らくは明日、事出來せん、其時禍伯々に及ぶべし、此故に我病に托して、伯々夫婦を迎へ、共に長遠の計を議せんと欲す、伯伯若梁山泊に來り給はずとも、我輩は決然馳行べし、當世の朝廷、毎事明ならずして、奸臣志を得、賢臣志を失ふ時なれば、天下の民畢竟無事を保ちがたし、諺にも火に近けば先焦ると

り、叔が氣質に似て人となり尤信あり。天性異相にして、腦後に一つの瘤あり、是によつて獨角龍と混名せり。身の丈七尺許にして、大力の勇士なり。此時顧大嫂自ら兩人の豪傑を延て、後堂に至り、頓て酒宴を具へて饗應し、此度の一儀を委しく告て、牢を劫ふべきことを議しければ、鄒淵が云く、我山陣に都て八九十個の人あれ共、用に中らん者は二十人に過まじ、もし此事を倣就なば、當地に安身能ふまじ、我却て身命を立べき處あり、知らず汝夫婦は肯て往給ふべきや。顧大嫂が云く、遮莫水火の内になり共、我等夫婦肯て同往せん、只我兩人の兄弟を宜しく救ひ給ふべし。鄒淵が云く、今梁山泊大に繁昌して、晁宋兩頭領專ら賢を招き士を納む、彼内の頭領にも、我知音三人あり、錦豹子楊林、火眼狻猊鄧飛、石將軍石勇と云ふ者なり、我輩彌牢を劫うて、兩人の兄弟を救ひ出さば、皆共に梁山泊に入て災を免るべし、汝夫婦の所存はいかん。顧大嫂大に悅んで云く、若果して梁山泊に上りなば、身を安んじ命を立るに足ん、誰か敢て叔々の言を背く者あらん。鄒潤が云く、猶一つの事あり、もし我輩彼兄弟を救ひ出しなば、必然登州府より軍馬を馳て追しめんに、何を以てこれを遮らんや。孫新が云く、我兄孫立、今登州府兵馬提轄の官をなす、只是一人武勇勝れ、其餘は齒に掛るに足ず、我明日自ら趣きて兄孫立と商議を遂けんに、何の難き事あらん。鄒淵が云く、恐らくは彼梁山

○孫立孫新大に牢を劫す

顧大嫂孫新に問て云く、丈夫何の計を以て、兩人の兄弟を救ひ給はんや。孫新が云く、毛太公は元來錢財多く、勢有者なれば、必定兩兄弟を害せんと圖て、自ら休む事有まじ、遲疑せば立處に悔ることあらん、此上は只牢を劫て救はんのみ、他の分別にては必定間に合まじ。顧大嫂が云く、然らば我丈夫と共に今晩行かば可ならんや。孫新笑て、汝何ぞかく思慮全たからずや、我汝と牢を劫ひ、行方をも預め定むべし、今牢を襲んには、我兄孫提轄并相知れる叔姪鄒淵鄒潤を得ずんば、頗る難き處あり、但し鄒淵鄒潤は頃日登雲山に在て、衆を集め專ら人家を劫て、强盜をなす、原來我と交厚し、若此兩人を得て、力を併しめば、此事忽ち成就せん。顧大嫂が云く、登雲山は此處より遠からざるに、丈夫自ら連夜に馳行て、彼兩人を誘引し給へ。孫新が云く、我則今行べしとて、遂に登雲山に上りけり。顧大嫂は酒宴を具へ、豐に設て待居ける處に、黃昏に至て、孫新兩人の豪傑を引て歸り來る。扨此叔の鄒淵は原萊州の產にて、人となり忠良直實の上、更に又武藝の達人にして氣性高强なるによつて、かつて世に容られず、江湖の上に流落ぬ、人皆呼で出林龍と綽名せり。又姪の鄒潤は幼年の時よ

包節級に多く賄賂を送り、近々牢中に於て兩人の一命を害せんと圖る、某何卒これを救ひたく欲へども、孤力を以て及ぶ處にあらざれば、今日此に至て此消息を知らしめ申し、殊に兩人の兄弟も此事を大嫂に知らしめて、乃ち大嫂の力を借んと欲す、若急に救ひ給はずんば、恐らくは誤あらん、疾々計を回らし給へ。顧大嫂是を聞て大に駭き、慌しく人を馳て丈夫孫新を呼て、樂和に對面なさしめけり。此樂和と云ふ人は、元來聰明怜悧にて、諸般の樂品のことを曉し、鎗棒武藝能せざる所なし。扨又孫新は兄孫立の武藝を學び得て、能鎗を使ふ。世の人孫氏兄弟を古の尉遲恭に比して、病尉遲、小尉遲と綽名せり。其祖瓊州の人官軍の子孫なり。時に顧大嫂樂和が來意、解家の兩人入牢の事一々語り聞せけるに、孫新先樂和が深志を謝し、已にかゝる上は樂長兄先回り給へ、我夫婦は、宜しく長遠の計を定めて、後より長兄の家に至るべし。顧大嫂置酒して、樂和を欵待し、又一包の金銀を樂和に附與し、舅々樂和を敬ひいふことば是を以て牢中にて左右する儕へも分ち與へ、彼是の使用になし給はるべしとて、懇に賴みける。樂和又孫新に對し、若某を用ひ給ふ所あらば、外ならぬ緣者なれば、身を捨て力を併すべし、隔心なく示し給へとて、別れて城中に回りけり。

養子として、我等兩人が姐となしけるが、今已に孫提轄の弟、孫新に嫁し、則此登州城の東門の外に住して酒を商賣す、我此姐は勇力武藝男子に勝れて、四五十個の人敵すること能ず、其名を母大虫顧大嫂と申し、別して某等兄弟を憐む、足下もし此姐に消息を通じ給はゞ、彼必ず自ら來て我輩が一命を救ふべし。樂和が云く、顧大嫂の事は我も曾て聞及ぬ、汝兩人先心を寛げ給へ、我自ら急に顧大嫂を問て宜しく商議すべしとて、遂に牢中を出で、東門の外十里許馳ければ、はや一軒の酒店あり。樂和忙はしく內に入て、顧大嫂にまみえて問けるは、此家は孫新長兄の住宅なるや。顧大嫂がいはく、貴客は孫新を問給ひて、何の事ありや。樂和が云く、某は孫提轄が妻舅樂和と云者なり、今急事ありて自ら來れり。又顧大嫂が云く、節級はもと我家とは緣者たるに依て、常に大名を聞及びしに、今日又いかなる事にて光臨を惠み給ひしぞ。樂和が云く、今我牢中に兩人の罪徒來りけるが、此人等が大名は我久しく聞及びしか共、對面は這回が刱めてなり、一人が名は兩頭蛇解珍、一人が名は雙尾蝎解寶、と未だ云も終らざるに、顧大嫂驚きていはく、此兩人は則我弟なり、知らず何の罪を犯し、入牢しけるぞや。樂和がいはく、彼兩人前夜一つの虎を射て、毛太公と云ふ者の園の中に追落しける處に、毛太公此虎を藏し、剩へ大勢を以て遂に兩人を擒り、擅に賊情を告て、登州府に引渡し、なかんづく

多く賄賂を送りけり。扨登州城の牢獄を掌る第一の節級、姓名を包吉と云うて、不善の者なりけるが、此回毛太公が賄賂を得、且王孔目が言を信じ、即日解家兄弟を呼出し、大に罵りしかば、兄弟の者無實に罪を受たることを告けれ共、包節級これを耳に聞入ず、近日の內汝等が一命を害せんとて、再び牢中に遣しけり。茲に又一人の小節級ありけるが、牢中傍に人なきを見て、暗に解家兄弟の者に對して低言けるは、我足下等兄弟とは緣者たりと云共、只音に聞のみにて、未だ遇ざりしに、今日想はず此處にて對面するこそ憂けれ、唯知らず兄弟の人は我を知給ふや、又看たりし人ありや、我は則足下等の表兄、孫提轄の妻舅なり。解家兄弟是を聞き、忽ち思ひ出して云く、已にかくの如くば樂和長兄にてはあらずや。小節級が云く、我則ち姓は樂、名は和、原茅州の者なり、人皆我が綽號を鐵叫子と呼慣せり、我姐夫孫提轄、我武藝を好むを悅んで、曾て鎗法を敎へ給ひぬ、我今兄弟の人とは、緣類の好と云ひ、況や足下等は有名の豪傑なれば、我何とぞ此難を救はんと心を用ふれ共、只恨らくは、彼包節級毛公が賄賂を受て、足下等を殺さんと圖る、猶いかなる計を施し、足下兩人救んやとて、沈吟しける處に、解珍が云く、長兄もし彌我等を救はんとの慈念あらば、我等が爲に去方へ音信を通じ給へ。樂和が云く、足下等今消息を誰人に通ぜしめ給ふや。解珍が云く、我親昔日一人の眇女を

を藏しあらば、我早速汝等に還さん。兄弟の者大に悦び、則毛仲義に隨つて、又毛太公が館に行けるに、毛仲義兩人の者を引き門内に入り、頓て門を守る者に命じて門を闔さしめ、忽ち大音聲に、人や有る、早く出よ、と呼はりしかば、左右より二三十人の漢子毎手に棒を持て馳出で、直に兄弟の者に望んで打てかゝる、兄弟の者これを見て大に怒り、ひとしく手足を飛せ十餘人を打伏せしか共、遂に大勢に捉れけり。毛仲義大に罵つて云く、彼虎は昨夜我射たる虎なるゆゑ、向に汝等酒を飲で在し時、我はや是を官司に送りぬ、汝白晝に來て賊をなさんとするは、最大罪なり、我今汝等を官司に送て一害を除んとて、遂に囚車に載しめ、一包の贓物を設け、則解家兄弟を盜賊と名付け、官府に送り遣しけり。時に登州の六案孔目姓は王、名は正と云は、毛太公が婿なりしかば、預め知府に繕ひ告て、解家兄弟が罪を語りければ、知府これを信じ、解家兄弟を廳前に引せ大に怒て云く、汝擅に弓箭刀を帶し、妄に虎を尋ぬるに事託、賊をなすはいかん、已に一包の贓物ある上は、必ず是を抵賴ことなかれ。解家兄弟これを分說せんとする處に、王孔目知府を諫て、痛く拷問なさしめければ、兄弟の者これに勝ず、早速賊情を白狀して、自ら罪に陷りしこそ哀なれ。知府左右に命じて、兄弟の者に頸枷を掛させ、遂に死囚牢に遣しけり。扨毛太公父子は解家兄弟を殺して、後患を免れんと圖り、上下の役人に

るに叉虎のあらざるはいかん。解寳が云く、我自ら眼を明かにして、此内に陥りたるを見屆けぬ、是見給へ、地上にも血の跡を遺せるに、豈虎のなからんや、恐らくは太公の家人是を藏せしならん。毛太公が云く、何ぞかくのごとき事を云ふや、必ず我家に藏したらんと疑ふことなかれ。解珍が云く、我輩は是官府の命を受け、日を限て此虎を求む、若これを得ずんば、必ず重罰を蒙らん、太公早く還し給へ、太公忽ち大に怒て、汝等かく非道を云は、其心底に賊氣あり、若再び言を争はゞ、我痛く汝等を打傷はん。解家兄弟猛然として、鬚を倒に竪て、汝老賊虎を奪て己が功にせんと圖るや、汝に手段を見せんとて、傍にある欄干の木を扭折て、直に毛太公を望で打て蒐る。毛太公急に聲を揚て、解珍解寳白晝に來て賊をなすと呼りけるに、俄に五六人の家人棒を提て出しかば、解家兄弟これを左右に打倒し、直に門外に馳出て呼りけるは、毛太公老賊我今官司に訴へて、事を分明に正すべきぞとて、已に官司へと馳けるに、途中に於て毛太公が息毛仲義に遇しかば、解珍これを迎へて、汝が家人共我輩が殺したる虎を奪取て還さゞりしゆゑ、我今汝が家を鬧しめぬ、叉今官司にこれを訴へんと馳るなり、汝よき存念なきや。毛仲義が云く、我家人等は、皆鄙き村夫なれば、必定かゝることもあるべし、父太公も叉家人等に諫られ、信を失ひたるにや、汝兩人速に我に隨つて再び家に來れ、若虎

靠れ、已に睡んとせし處に、忽ち野外に弦音響きしかば、兄弟齊しく走り出て四下を顧るに、一つの大虎毒箭に中て跑來り、身を地上に撲つて只管狂ひけるに、兩人の者これを見て、急に刀を揮つて馳倚しかば、彼虎人の來るを見て、再び半山に跑上りぬ。解家兄弟急に追蒐けるに、彼虎漸々毒氣惣身に透り、遂に勝ずして四足を踏住むると見えしが、頓て身を翻し山の下に滾落けり、解寶是を見て、兄に對し云けるは、虎の落たる處、毛太公が後園の内なり、我輩速に馳て虎を求むべしとて、兄弟山を下り、毛太公が館に至り、門を敲し處に、天色はや明たりけり、此時毛太公自ら出て、兄弟の者を迎へ内に入ければ、兄弟慇懃に告て云けるは、今朝貴館に拜候するは他事にあらず、夜來一疋の虎を太公の後園に赶落せり、望らくは自ら園の内に入て、これを求めんことを願ふ、知らず太公肯て許し給はんや。太公が云く、既にかくのごとくんば、足下等兩人昨夜より疲れ給ひしならん、先酒を吶給へとて、頓て酒肴を具て、兩人を欵待し、再三懇に勸て、酒已に數巡に至りしかば、解家兄弟急ぎ虎を取るべしとて、遂に太公に隨つて後園に入り、四面八方遍く搜しけれ共、曾て其虎なし。太公が云く、足下等は夜中定て看誤つて我園の内に落たると思ひ給ふらん、又宜しく他所を尋て見給んや。解珍が云く、某等兩人原當地の者にて、山上山下の案内を知りたるに、何ぞ見誤る事あらん。毛太公が云く、然

五編　巻之四十三

○解珍解寶雙で獄を越ゆ

宋江は呉用三阮と倶に、酒數盃を酌ける處に、呉學究宋江に對していはく、今祝家莊を破るべき便機を得たると云ふ來歷はいかんぞなれば、當比山東の海邊に、登州と云ありける。此登州城の外、數里ならずしてひとつの山あり、山の上には多く豺狼虎豹動もすれば人を傷ふゆゑ、則ち登州の知府當地の里正等を呼集め、日を限て村中の者共に豹虎を捉しむべき旨を仰せ、若日限を背く者あらば、重く罰を行ふべしとて、預め公文を以て、村々在々の獵戸等に觸たるに、此節山の下に兩人の獵戸あり、兄を解珍と號し、弟を解寶と號す。兩人都て能鎗を使ひ、一身に人を驚かしむる武藝あり、解珍が綽名を兩頭蛇と云ひ、弟解寶が綽號を雙虎蝎と云ふ、父母は倶に歿して未だ妻を娶らず。兄弟各七尺餘高の身材にて、相貌極て兇猛なり。此兄弟此夜先豹虎を捉ふべきのよしを里正より命ぜしゆゑ、則ち腰刀を帶し弓箭を持ち、山上に登り此彼に徘徊し、豹虎を尋ね、夜も漸々四更の前後に至りて、兄弟頗る疲れ、互に背を合せて斷

て勸めけり。吳用果して何等の事を云出るや、次卷を見て分解べし。

伴ひ、長兄を助くべしと命をうく、知らず近日の戰、其勝負はいかん。宋江が云く、戰の始終一言の盡す所にあらずとて語りけるは、祝家莊の一族共、甚だ以て惡むべし、莊門の前に二つの白旗を竪て、其上に大文字に分明に、

塡平水泊擒晁蓋。踏破梁馬捉宋江。

と書ぬ、我初て攻たりし時は、其地利を知らざりしゆゑ、楊林黃信を失ひ、其後攻し時は、一丈青に王矮虎を活捉れ、欒廷玉が働に歐鵬を打傷はれ、又索を以て秦明が馬を纏倒し、鄧飛も同じく活捕れぬ、已にかく身方利を失ひし處に、獨幸ひに林教頭の力にて、一丈青を生捕り、我が兵一點の勇氣を保ちぬ、若然らずんば、身方全く鋭氣を折くべし、此後いかなる計を用ひて敵を打んや、若我祝家莊を打破つて活捕れし兄弟等を救ひ出さずば、誓て快よく自殺せん、何の面目有て再び晁天王に見えんや。吳用笑て云く、此祝家莊此度自ら滅亡を取るなり、某幸ひ一つの便機を得たり、事旦夕に有て祝家莊を破るべし。宋江大に駭いて云く、軍師已にいかなる良計有て、旦夕の內にこれを敗り給ふや、又其便機を得給ひしとは、いかなる來歷なるやらん、詳にこれを示し給へとて、近く進んで問ければ、吳用が云く、勝利ははや日あらぬことなれば、長兄まづ酒を酌で心を慰め給へ、然して後我これを語らんとて、自ら酒を持

冲故意雙の脇を開て透を見せければ、一丈青是を見て、直に砍入し處に、林冲鎗を揮て兩刀を左右に打落し、頓て左の手を伸して一丈青を中に引提げ、遂に軍卒に命じて綁めさせけるに、宋江を始として衆皆咄と喝采にけり。林冲忙しく宋江が前に至て、遲參の罪を謝しければ、宋江甚だ是を感心し、賢弟何の罪ありやとて、又商議して云く、今日ははや日も晩ぬるに、先軍を休ば可ならんか。林冲是を然りとし、早速李逵を走て諸頭領を招き集め、惣勢を一手に合せ、村口に引取しかば、祝家莊の軍勢も、同じく莊上に引入たり。此時敵身方に討死したる輩幾千と云ふ數を知らず。祝龍は頓て活捕し頭領共を囚車に入れ、宋江をも捉へ共に東京に送るべしと圖りけり。扨又宋江は大軍を村口に引上て陣を取り、則四人の頭領に命じて、一丈青を梁山泊に送り、父宋太公に預け、宜しく守らしむべき由を云ければ、諸人皆宋公之を娶らんと、都て懇に一丈青を監押して、此夜山陣に送り、又歐鵬をも先山陣に回して養生をなさしめけり。宋江は終夜鬱々として眼を合せず、一向計を思案して曉に至りし處に、一人の探事の者來て、軍師吳學究自ら三阮兄弟竝に呂方、郭盛等を從へ、五百の人馬を引て到著し給ひぬと報じければ、宋江大に悅び、遂に陣外に出て相迎へ、共に帳中に入て、酒宴を具へ盃數遍巡りし處に、吳用先宋江に對して云く、晁頭領今已に、長兄の軍利を失ひ給ふを聞給ひ、則某五人の豪傑を

豹子頭一丈青を虜にする図

に至りしかば、宋江大に悦び、再び兵を引回し、惣勢齊しく攻戰ふ。祝朝奉が莊上には、此體を見て、恐らくは親方利あらじとて、則祝虎を留めて莊門を守らしめ、彼小郎君祝彪、一疋の名馬に乘り、一筋の長鎗を持ち、自ら五百餘騎を領して莊門の外に突て出で、兩軍已に亂雜して、互に勇を奮ひ功を爭つて一足も引退かず、四面八方に跑て攻戰ふ。扨莊前には李俊、張横、張順等已に水を渡つて攻しか共、莊上より手透なく亂箭を射出しければ、李俊等三人は虚しく牙を咬で控へたり。戴宗白勝等只對岸に在て、喊の聲を作るのみなり。此時天色已に晩しかば、宋江兵を一所に合せて、且戰ひ且走る處に、彼一丈青急に馬を飛せて宋江を追來り、其間已に近づいて、宋江はや討れんと見えける處に、黑旋風李逵八十餘人を引て山坡の上より馳下り、二つの斧を揮ひ狂ひ來りしかば、一丈青再び馬を回して、樹林の邊を望んで馳し處に、樹林の背後より十四騎の馬軍鋒を竝べて突出る。當先に一人の大將手に長柄の鎗を撚り、威風相貌諸豪傑に拔出て、勇氣全く人を驚かしむ。宋江馬を勒へて大將を見るに、其名天下に隱れなき東京八十萬禁軍敎頭、豹子頭林冲なり。此時林冲一丈青を白眼て罵りけるは、汝賊女我對手には足ずといへども、梁山泊の權威を現さん爲なれば、我今曲て汝を對手には取るぞとて、鎗を舞して捌出しかば、一丈青大に怒り、兩刀を揮て相迎へ、戰未だ十合に至らざるに、林

歐鵬勢に乗じて追蒐しかば、欒廷玉急に鐵槌を飛せて、歐鵬を馬より下に打落しぬ。鄧飛是を見て、鐵鎗を舞し馬を躍らせ、欒廷玉に搠て蒐る。此時宋江は三軍に下知し、急に歐鵬を救はせ、再び馬に乗しめけり。欒廷玉は鄧飛には目も掛ず、直に秦明に搠蒐て、戰已に二十餘合に至れ共、未だ勝負分たざりし處に、欒廷玉詐つて逃しかば、秦明棍を舞して追來る。欒廷玉は荒草の内に迯入しに、秦明伏勢あるとは知らずして、相續て馬を跑入し處に、敵の伏勢左右より索を引て、秦明が馬を纒倒し、遂に秦明を活捉て、一度に咄と勝鬨を作りしかば、鄧飛これを見て大に怒り、慌しく來て、秦明を救んとせしに、兩邊より又鈎索を以て、鄧飛を馬より下に搭下し、頓て是をも綁めけり。宋江此光景を見て大に驚き、急に馬を囘して迯しかば、馬麟も又一丈青を棄て、歐鵬とともに宋江を保護して、南の方に走り行く。欒廷玉祝龍一丈青等は後に隨つて赶來り、漸相近付いて、宋江已に危かりし處に、正南の方より一彪の豪傑、五百の人數を引き馬を飛せ跑來る。宋江是を見るに、是沒遮攔穆弘なり。又正東の方より三百餘人の勢にて乗込を見るに、病關索楊雄、拚命三郎石秀を大將として救ひ來るなり。又東北の方より一人の豪傑大音聲に呼り、祝家の一族一人も漏すまじ、と罵り來るは、是則ち小李廣花榮なり。此三路の人馬一齊

宋江が後より、馬麟雙刀を揮て、馬を陣前に跑出し、直に祝龍を迎へて相戰ふ。鄧飛は已に馬を進て、搠出しかども、宋江に誤あらんことを恐れ、又引回して只宋江が左右に隨ひ、空しく戰を遠見す。扨宋江は鐵笛仙馬麟が祝龍に敵しがたく、摩雲金翅歐鵬は一丈青に勝がたき體を見て、心中慌ける處に、一彪の軍馬敵の横合より衝入しかば、宋江大に悦んでこれを見るに、此大將は則霹靂火秦明なり。此人原來短氣急性の勇士なるに、況や此度黃信を敵に活捉れしかば、恰も奔雷の如くに吼て、彼狼牙棒を揮ひ、便ち馬麟に替つて、直に祝龍を望みて打て蒐る。然れば祝龍も又馬麟を棄て秦明と相戰ふ。馬麟は又王英を奪ひ回さんとて、再び兵を引て敵陣に突入しかば、一丈青遙にこれを見て、歐鵬を棄て馬麟に斬てかゝる。馬麟又これを迎へ、互に兩刀を交へ、武藝の祕術を盡しけるに、恰も風の玉屑を飄へし、雪の瓊華を撒す如くなりけり。

○宋公明兩祝家莊を打つ

宋江はこれを見て、只呆れたる斗なり。扨秦明は祝龍と鋒を交へ、戰未だ八九合に及ざるに、祝龍はや危く見えし處に、祝龍兄弟が武藝の師欒廷玉鐵槌を帶し、鎗を撚て飛がごとく跑出け

に、兵過半を分ち、直に山坡の下に至て、來る敵を相迎ふ。此敵は則ち扈家莊の女將一丈青扈三娘なり。其勢約莫四五百も有らんと覺えて、彼扈三娘一疋の白馬に打乘り、雙の手に兩刀を揮て、當先に馳來る。宋江が云く、扈家莊の女將、萬夫不當の勇ありといふは、定て此女がことならん、誰か出て彼と戰はんやと、未だ云も終らざるに、王英はもと好色の徒なれば、女將と聞て心中に悦び、何とぞ是を活捉にして己が所有にせんと欲し、忽ち馬を飛ばし鎗を撚り、一丈青に搠てかゝる。一丈青これを見て、同じく兩刀を揮て相迎へ、遂に鋒を交へ、戰已に十餘合に及し處に、王矮虎漸々疲れ、鎗法殆ど亂れ、只左に架け右に隔て敵しがたく見えけるに、一丈青二つの刀を雙に揮て砍入しかば、王英勝まじきとや思ひけん、馬を回して逃んとせし處に、扈三娘急に右の刀を弃て、輕く猿臂を伸し、王英を脇の下に挾み、頓て地上に投しかば、諸々の軍卒ども遂に王英を捉へて、高手小手に縛めけり。是を見て歐鵬大に怒り、王英を奪ひ復さで置べきやとて、刀を舞し一丈青に斬てかゝる。一丈青少しも怕れず呵々と笑ひ、又これを迎て相戰ひ、互に祕術を盡し、一往一來精神を揮ひしに、歐鵬も又力衰へしかば、鄧飛これを危み思ひ、鐵鎗を撚て、喊き叫んで搠出ぬ。祝家莊にはこれを見て、もし扈三娘が過つこともあらんかと、急に吊橋を下して、祝龍自ら三百餘人を引て、當先に斬て出ければ、

一丈青王矮虎と虜にする図

誰かあへて違く者あらんや、唯知らず先陣を誰に命じ給ふぞ。黒旋風又云く、汝諸兄弟等は一向彼孩子等を恐るゝに、我又先陣を承はらん。宋江が云く、汝が先陣は不吉なれば、此度は汝を用ひがたし、我自ら先陣すべしとて、則馬麟、鄧飛、鷗鵬、王英四頭領を左右に従はしむ。第二陣は又戴宗、秦明、楊雄、石秀、李俊、張横、張順、白勝等に命じて、水路より進ましむ。第三陣は林冲、花榮、穆弘、李逵等に命じて兩路より進ましむ。已に手配定りしかば、各飽まで食して、衣甲を著し、衆皆名馬に打乘て祝家莊を望んで進發す。扨宋江は當先に帥字の大旗を持せ、總て百五十騎の馬軍と一千の歩軍とを引て、已に獨龍岡の前に至りしかば、宋江馬を勒へて、彼祝家莊を見るに、流水岡を繞て垂柳家を蔽ひ、墻内には劍戟を立て、門前には刀鎗を横へ、防嚴重に備殊に堅固なり。宋江是を見て心中大に怒り、忽ち誓を設けて云けるは、我もし祝家莊を攻破らずんば、永く梁山泊に歸らじとて、暫く牙を咬んで控へける處に、後陣の軍馬も又盡く至りぬ。宋江則第二陣の人馬を此處に留て、前門を攻さしめ、自らは又兵を引て獨龍岡の後に繞出て後門を見るに、都て銅墻鐵壁を設けて防甚だ嚴整なり。宋江急に戰を搦しめんと欲しける處に、忽ち西の方に一彪の軍馬喊の聲を揚て、親方の後陣に隨つて攻來る。宋江是を見て、馬麟、鄧飛等を留めて祝家莊の後門を撃しめ、己は歐鵬王矮虎等と共

襲ふことあらん、又祝家莊には前後二つの莊門あり、一つは獨龍岡の前にあり、一つは獨龍岡の後にあり、若前門のみ攻給はゞ、却て利を失ひ給ふべし、若前後より夾んで攻給はゞ、必勝利あらん、前門の邊の道は、都て曲折にして盤陀路なり、萬一此道に踏入給はゞ大いなる禍あらん、只大柳の樹有る路のみを擇で進み給はゞ、是順路なり。石秀が云く、敵今盡く柳の樹を砍たり、親方の兵已に其記を失つて進みがたし。杜興が云く、縱ひ柳の樹を砍たりとも、いかんぞ能其根を穿取んや、白晝ならば柳の根を記とし、もし黑夜ならば、兵を止給へ、恐らくは過あらん。宋江是を聞て大に悅び、深く杜興に謝し、別れて本陣に回り、頓て林冲等に見えて、李應が遇はざる事、杜興が語りし事共、詳に告ければ、李逵又進み出て云く、長兄自ら禮物を送て訪ひ給ひしに、彼作病して遇ざるこそ無禮なれ、我自ら三百の兵を引て、李家莊を打破り、李應を拖來りて長兄に拜謁せしめん。宋江が云く、汝猶知らざる所あり、彼は原富貴人なるゆゑ、只官司を恐れて我に遇ざりしぞ。李逵又笑ていはく、我思ふに李應は必ず幼年の孩子なるべし、故に我輩に遇ふことを怕るゝならん、とて衆皆咄と笑ひけり。宋江、諸頭領に對して云く、我彼兩人の兄弟敵の擒となり、朝夕の存亡保ち難からん、汝諸賢弟各力を盡して、我と共に祝家莊を破り、彼兩人を救ふべし。諸頭領一齊に進み出て云く、長兄の號令

に告けるに、李應が云く、彼は是梁山泊に在る謀反人なるに、我いかんぞ是に見えんや、汝只
我に替て云べきは、李應は前日箭疵を蒙りて、未だ快からざる故、今日の相見叶ひがたし、
猶重ねて對面すべしと、慇懃に答て宜しく回らしめよ。杜興命を承り、再び船を渡り對岸に至
り、宋江に見えて云けるは、主人李應再三拜謝して云く、此回來臨を忝うす、親自出て迎へ
奉るべきの處に、前日矢疵を蒙りて、今以て快からず、尊顏を拜しがたし、猶異日の參會を期
すべきなりと、慇懃に傳語せりと述ければ、宋江微笑して、我已に李大官人の心底を知れり、
我今祝家莊の軍に利を失うて、まみえんと欲するゆゑ、李大官人も亦、祝家莊より仇を夾ま
れんことを恐れ給ひて、相見し給はぬと覺えたり。杜興が云く、李應いかんぞ此のごとき存
念あらんや、實に病重りて坐立安からず、某はもと此處の者ならずといへ共、多年當村に住
して此邊の虛實能これを知れり、祝家莊の東は李家莊、西は扈家莊、此三村の內は原來死生の交
を誓ひて、互に相救ふ約ありといへ共、今某が主人は病氣と云ひ、殊に祝家莊とは敵身方に
分れたるに依て、今般の軍には救兵を出す事なし、只彼扈家莊は、必ず救兵を出すべし、餘は
恐るゝに足ずといへ共、彼女將一丈青扈三娘、極て能兩刀を使て、萬夫不當の勇あり、長兄
もし祝家莊を打んと思ひ給はゞ、東を防ず西を防ぎ給へ、恐らくは西の村の救兵、親方の後陣を

りしぞとて、從軍等を殺さんとしけれ共、林冲花榮再三これを諫めし故、宋江是を免しけり。諸將悶えて云けるは、未だ祝家莊を打ざるに、はや兩人の頭領を失つて、何ぞこれを忍びんや。楊雄が云く、此處は都て三つの村あり、東の村の李大官人は前日祝彪に臂を射られ、今家に在て專ら是を養生す、宋長兄速に馳て、彼と商議し給はゞ可ならんか。宋江が云く、我眞にこれを忘れぬ、彼は本當地の人なれば、能案内を知りつらん、我自ら訪うて計を求めん間、林冲秦明は暫く本陣を守り給へとて、頓て禮物を調へ、楊雄石秀等と倶に、三百餘騎を引て、遂に李家莊に至りしかば、李應が館には門前の吊橋を高く挽起て、墻の内には若干の人馬嚴密に備へ、はや金鼓を打鳴す。此時宋江馬を進めて呼りけるは、我は是梁山泊の宋江なり、自ら來て李大官人に見えんことを願ふのみにして、更に別意なし、疑心を生じ給ふことなかれ。杜興樓に上つてこれを見るに、果して楊雄、石秀等、宋江が左右に隨ひ在しかば、杜興忙しく樓より下り、莊門を開き、一艘の小船を濠の内に浮べ、宋江を迎へけるに、宋江急に馬を下り、杜興に對面す。楊雄石秀近く前で云けるは、此人は則鬼臉兒杜興と號し、向に某等兩人を引て、李大官人に見えしめぬ。宋江悅んで杜興に對して云く、足下我爲に李大官人に告て、梁山泊の宋江來て訪ふよしを知らしめ給へ。杜興是を聞て、再び船を回して内に入り、李應に此事を詳

や。此時花榮は馬上に在て、はや紅燈を見著け、則ちこれを指ざして宋江に告けるは、長兄彼紅燈を見給へ、我勢東に行く時は、彼紅燈も同く東に扯き、我勢西に行く時は、彼紅燈も又西に扯く、これいよ／＼敵の相圖に疑なし。宋江が云く、已にかくあらば、いかにもして彼紅燈を追失はゞ、敵の計忽ち齟齬べし。花榮が云く、彼紅燈を無せんこと、何の難きことあらんやとて、則ち馬を近く進めて、只一箭に紅燈を射落しければ、敵勢果して相圖の驗を失ひ、自ら大いに潰亂す。こゝに於て宋江三軍を進めて攻行んとせし處に、前面に又喊の聲天に響いて、火把の光幾千と云ふ數を知らざりしかば、宋江急に石秀を呼で云く、汝は暗に前面の勢を探聞來るべし、とて遣しけるに、早速馳囘り報けるは、前面の軍勢は則ち身方の第二行の人馬、林冲、秦明等、已に敵の伏勢を追散して、今まさに村口に攻出んとす。宋江これを聞て三軍を進め、左右より夾んで村口に打て出で、祝家莊の敵を四面八方に追拂ひ、頓て林冲が勢と一所に合せ、陣を取し處に、天色漸々明にけり。親方の人數の內獨鎭三山黃信見えざりしかば、宋江大に驚きこれを諸軍に問けるに、一人の小賊進み出て云く、黃信頭領は昨夜當先に進んで働き給ひし時、蘆葦の內より鈎索を投出して馬を鈎倒し、遂に大勢馳出て、黃信頭領を活捉りぬ。宋江これを聞て大いに怒り、已にかくの如くんば、何故早く來て告ざ

江問て云く、汝等は何を苦むや。三軍答へて云く、此處すべて盤陀路にして、只顧馳行くといへども、又舊の路に盤り出で、かつて前に進むこと能ず。宋江下知して、炬火の光ある處を目當に馳行かば、必ず人家有べしとて、已に軍馬を進めける。

○一丈青單王矮虎を捉ふ

斯る處に、前軍又呼つて云けるは、此邊の路も亦盡く木石を横へ、路口を塞げば、一足も進みがたし。宋江大に駭いて云く、我必ず此路に於て討るべしと、いまだ云も罷らざるに、穆弘が隊の内より、石秀來れり、と呼りしかば、宋江悦んでこれを見るに、石秀は只一人刀を撚り、直に宋江が馬の前に至て云けるは、長兄少しも慌て給ふことなかれ、某已に路徑を知れり、大柳の樹ある路は、是則生路なるに、只柳の樹を驗として此路を馳給へとて、頓て三軍に號令を傳へしかば、宋江喜悦斜ならず、忙はしく軍馬を催促して、遂に大柳の樹ある路を求めて馳けるに、約莫六七里に至て敵勢益加りしかば、宋江深く是を疑ひ、則石秀を呼て問けるは、前面の敵勢益多きはいかん。石秀が云く、敵の人馬は紅燈を見て相圖を定めければ、親方の兵も同じく紅燈を尋て攻行べし、已に正路を知る上は、敵大軍と云とも何ぞ恐るゝに足ん

承つてこゝに至れり。莊上には音もなく、靜りて答ふる者なかりけり。此時宋江が中軍人馬已に到りしかば、楊雄急に宋江を迎て云く、怪いかな莊上には音もなく靜りて人馬有とも見えず、計ありと覺え候。宋江が云く、先我試みんとて、自ら馬を勒て莊上を打望み、忽ち思ひ出し云けるは、我すでに誤れり、九天玄女より授りし天書の上にも、敵に臨んで急暴すべからずとあるに、我一味に楊林石秀を救んとおもひ、ます〳〵夜中に兵を起して、敵地に深入したり、今莊上に兵の見えざる、計有に疑なし、早々三軍を退けんとて、忙はしく號令を下しければ、李逵又呼つて云く、長兄何故兵を退け給ふや、我先敵陣に斬入らんに、諸軍我に從つて進むべし、と纔に云終りし處に、忽ち砲の聲大に響きて、獨龍岡の上に、一千餘の火把一齊に露れ出で、門樓の上より矢石雨のごとく飛せしかば、宋江三軍に下知し、舊路より退かんとせし處に、後軍に控へたる李俊が人馬、一度に呼つて云けるは、舊路ははや盡く塞りて、人馬の往來成がたし、恐らくは伏勢有べし。宋江是を聞て益駭き、兵を四方に走て路を尋ねさせけるに、黒旋風李逵は猶二つの斧を揮て敵を尋ねしかども、只一人の敵もなかりけり。かかる處に、又獨龍岡の頂に、再び砲の聲四下に起りければ、宋江是を聞て大に呆れ、急に三軍を進めて、大路の邊を過らせけり。此時敵の伏勢一齊に併起り、三軍齊しく苦み呼りしかば、宋

細作を活捉しとなり、某又路の樣子を見るに、甚だ曲折にして、伏勢あらん模樣なりし故、あへて深入せず馳回りぬ。宋江是を聞大に怒つて云く、我路徑を窺知て後、兵を進めんと思ひ、兩人の者を馳けるに、却つて敵に擒れしこそ恨なれ、今宵急に兵を進め、村中に斬て入り、彼兩人の者を救ふべし、只知らず、諸頭領の存念はいかん。時に黑旋風進み出て云く、願くは某一彪の兵を引て村中に攻入べし。宋江是を許容し、早速號令を傳へ、諸軍に用意を觸れ、萬事調へしめ、則李逵楊雄に兵を分與へて先鋒とし、又李俊に兵を與へて後陣とし、穆弘を左に備へしめ、黃信を右に在しめ、宋江は花榮歐鵬等と共に中軍に居し、旗を翻し鉾を揮ひ、鼓を擂ち金を鳴し、一度に咄と喊の聲をあげて、直に祝家莊に攻來り、已に獨龍岡の上に至りしかば、日全く晚にけり。宋江自ら前軍を催促して、勢を進せし處に、黑旋風李逵二つの斧を雙の手に揮て、當先に躍出で、遂に莊前に至つて此處を見るに、はや吊橋を高く挽起げて、莊門の內には、一燈の火も見えざりけり。李逵大に焦燥て、濠を越んとせし處に、楊雄これを諫めて云く、李長兄先控へ給へ、莊門を關して火をも出さゞるは、必然詐の計有べし、すべからく宋長兄の至り給ふを待つて、別に宜しく商議せん。李逵怒に堪ずして、二つの斧を揮ひ、岸を隔て大音聲に罵り呼りけるは、祝太公老賊早く出て雌雄を決せよ、黑旋風李逵先陣を

馬に騎て相從ふ。中には年少の大將全身嚴に披掛けて白馬に乘り、手に一筋の鎗を撚て、威風凛々として進來る。石秀は此大將を識認しか共、詐つて老翁に問けるは、此年少の大將は誰なるぞや。老翁が云く、此官人は則ち祝朝奉の第三男祝彪と云ふ人なり、三兄弟の內にては此人の武勇別して勝れたり、則扈家莊の一丈青と婚禮の約定りぬ。石秀これを聞て、暗に心中に曉し、則ち別を告て云けるは、某今道を尋ねて馳出べし。老翁が云く、今日はや日も昏けるに、若軍始りなば、必然汝が命を害せらるべし。石秀が云く、果してかくのごとくんば、老翁彌憐をたれて、我が一命を救ひ給へ。老翁が云く、汝今宵は先我が宿に留つて、明日もし軍なくんば馳出よ。石秀大に悅んで謝しけるに、門前に五六人騎馬の士來つて、每門に觸て云く、汝百姓等今宵紅燈を見て相圖とし、都て心を齊うし、力を併せ、梁山泊の賊を活捕り、宜しく官司に送て恩賞を乞ふべし、と高らかに呼り過りけり。石秀則老翁に問て云く、かく呼る人は誰なるぞや。老翁が云く、彼人は當地の捕盜官なり、今宵約を定て、宋公明を捉んと欲す。石秀是を聞て暗に沈吟しけるが、遂に火把を乞て、後堂の傍なる草屋の內に入て歇みけり。扨宋江は兵を村口に屯して、楊林石秀を待けれども、曾て音信なかりしかば、又歐鵬を馳て探聽しめけるに、歐鵬忙しく囘りて報けるは、某彼地に至て諸人の云を聞くに、一人の

再び脱れ出んこと難かるべし、殊更死路の内には地上に木石を横へて、伏勢多ければ、必定汝を疑つて忽ち生捉べきなり、汝自ら心をとめて、大柳の樹ある道を行べし、必道を差へて捉はるゝことなかれ。石秀是を聞て深く拜謝し、又老翁が姓名を問ければ、老翁答て云く、這村の人は都て祝氏多けれども、唯我は覆姓鍾離にして、原來此村に居住す。石秀が云く、某天の引合を蒙りて、老翁にまみえ、路徑を敎へ給ふのみならず、又多く酒食を惠み給ふこと、誠に感激の至なりと、深く是を謝しける處に、忽ち外面に騷動して、細作の者を捉へたり、と呼りしかば、石秀大いに驚き、走り出てこれを見るに、七八十人の軍卒共、楊林を高手小手に綁めて引來る。石秀これを見て、心中に甚だ苦み、故意老翁に問て云けるは、何故彼者を絆むるや。老翁が云ふ、汝何ぞ諸人が云を聞ざるや、彼は則宋江が遣したる細作の者なり。石秀が云く、彼定めて路に迷てこそ捉れつらん。老翁が云く、彼柳の樹ある路を知らず、一向大路を馳て遂に死路の邊に迷ひ、伏勢に捉はれしなり、然れ共彼者また驍勇にして、七八人の軍士を斬伏しとなり、此處に又彼を認識たる者あり、彼は則梁山泊の頭領錦豹子楊林と云ふ者なりと、未だ語りも罷らざるに、又前面に若干の人來つて、三官人自ら巡見に出給ひぬと呼りしかば、石秀壁の縫間より是を望み見るに、前には二十餘筋の鑓を持せ、後には七八人の力士、戰

石秀山賤に身をやつし祝家荘の路をとふ

して、一人の男子一人の女子とを持給ひけるが、此女子が名は扈三娘と申し、人皆一丈青と稱す、希有に武藝の達人なり。石秀が云く、已に斯の如くんば、梁山泊より攻來るとも何の恐ることかあらん。老翁が云く、汝等ごとき他國の者、此地の路徑を知らざる者は、若果して軍起らば、必定禍を免れずして捉るべし。石秀が云く、路徑を知らずして捉るとは。老翁が云く、我此處の路に一首の詩あり、其詩に云く、

好個祝家莊　盡是盤陀路　容易入得來　只是出不去

石秀此詩を聞て、故意淚を洒ぎ哀み告て云けるは、某は異鄕に流落て故鄕に歸ることも能はざる者なるに、若軍場に出合て、兵等に捉らるゝことあらば、必定非命の死を致すべし、願くは老翁廣く仁心を垂給ひ、脫出づべき路を教へ給へ、然らば我此一荷の柴を老翁に奉らん。老翁が云く、我何ぞ錢を償はずして汝が柴を受んや、汝定て酒食を求めがたからん、我に隨つて來るべし、我汝に酒食を惠んとて、遂に引て家に囘り、頓て酒食を以て石秀に與へければ、石秀再拜してこれを吃し、則ち又告て云けるは、伏て望らくは老翁路徑を指敎へ給へ。老翁が云く、汝村中に入て、大柳の樹ある傍を見よ、一つの路あり、是則ち生路なり、大柳の樹なき處の路は都て死路なり、若萬一路を差ひなば、左に旋り右に盤るとも、到る所盡く死路にして、

ども、其節は日已に暮しかば、路徑分明に見置ざりし。楊林が云く、遮莫只大路を望んで馳行んに、何の差かあらんとて、頓て前後に相從ひて、只願大路を擇んで進みける處に、遙對向に一村の人家有て、數ヶ所に酒店有ければ、石秀終に此處に至て酒店の前に柴を卸し憩ひ見るに、酒店の內にも劍戟を立竝べ、途中往來する者も都て衣甲を著し、胸の上には大なる祝の字の驗を附け、各勇を奮ん氣色あり。石秀近く前で一人の老翁に問て云けるは、此處はいかなる風俗なれば、毎人に衣甲を著するや。老翁が云く、汝は何國より來れる人ぞ、早く去て禍を避よ。石秀が云ふ、某はもと山東の者なるが、買賣に本錢を失ひし故、故鄕に回ること能ず、頃日此處に至て柴を賣ふ、知らず此所は何等の禍出來るや。老翁が云く、汝すべからく早々馳て身を他所に避くべし、此所には少刻軍始るなり。石秀が云く、かくのごとき靜謐の村中に何ゆゑ軍あるや。老翁が云く、此村の祝朝奉と云ふ人、今梁山泊の豪傑を欺き給ふ故、彼輩大勢を引て村口迄寄來りぬ、只喜ぶらくは、此處の路徑究て曲折なるによつて彼未だ進ず、若軍始りなば、救の兵を出さんとて、毎人衣甲を著せしめ、其用意調へり。石秀が云く、此村中總て幾何の人有や。老翁が云く、此祝家莊には凡そ一二萬の人有り、又東西の兩村より救の兵出べし、則ち東の村の頭たる人は撲天鵰李應と申す、又西の村の頭たる人は扈太公と號

汝は遣し難し、若陣を破り敵を衝くの時は汝を用べし、今先兩人遣すは、乃是細作の爲なり、汝を馳て何の用かあらん。李逵笑て云く、這等の小村一つ破らんに、何ぞ必しも長兄の力を用ひしめんや、某自ら二三百の人數を引て馳向ば、村中の男女都て斬盡さんに、何の難きことあつて、預め細作を馳給ふや。宋江責つて云く、汝何ぞ又亂の言を云や、重て多言する事なかれ。卽ち石秀を呼で云けるは、汝は嚮に祝家莊に行ぬるとなれば、頗る路徑をも記あらん、楊林と共に馳て、動靜をも探聞て來らんや。石秀が云ふ、彼今親方の人馬の至りしを知て、必定人數を備へて嚴に守るべければ、我輩此體にては行がたし、宜しく形を改め馳行かば可ならん。楊林が云ふ、我は道士の形に假て行べきに、足下は我が左右を離ずして、相從ひ給へ。石秀が云ふ、我蘇州に在し時、薪を賣てよく此業を知りければ、又一荷の薪を擔て馳行べし。楊林が云ふ、已に然らば、今宵五更の時分に馳行んとて、各身邊に刀を藏して、已に用意を調へしかば、宋江これを見て、心中に悅びけり。扨石秀一荷の柴を担てまづ進みし處に、路徑曲折にして四方に樹木茂り、果して路頭識れ難し。石秀且柴を卸して暫く歇みけるに、楊林もはや道士の形に裝ひて、此邊に至りぬ。石秀左右を見るに、幸ひ人なかりしかば、暗に楊林を呼で語て云く、此處原來路徑亂雜りて、順路識り難し、前日李應に隨つて此邊の路を過りしか

起し給ふことなかれ、今晁長兄の怒り給ひしは、是山陣の號令なり、縦ひ宋江自ら過有共、卽座に於て頭を刎らるべし、況や今新に鐵面孔目裴宣を立て軍政司となし、賞罰の事究て嚴なり、願くは兩賢弟自ら是を察し、憤り給ふべからず。楊雄石秀再拜して退きける處に、晁蓋則兩人の者を楊林が次に座せしめ、頓て酒宴を設け、各觴を順逆し、翌日又山上山下の諸頭領、聚義廳に參會し、祝家莊を攻べき計を議定し、先晁蓋は山に留つて、吳學究、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、呂方、郭盛等と倶に山陣を守る。宋江は諸頭領と共に、祝家莊に馳向ふ。則勢を二手に分け、二行に備て進發す。其一行は宋江、花榮、李俊、穆弘、李逵、楊雄、石秀、黃信、鷗鵬、楊林等三千の步卒、并に三百の馬軍を率して山を下る。第二行は林沖、秦明、戴宗、張横、張順、馬麟、鄧飛、王英、白勝等三千の步卒ならびに三百の馬軍を領し、先陣に二三里後れて山を下る。晁蓋等これを送て關前迄出ければ、宋江等は遂に別れて、直に祝家莊を望で進發す。前軍ははや獨龍山の前に至て陣を取ぬ。宋江此時花榮と商議して云けるは、我聞く祝家莊は路經甚だ雜なるとなれば、卒爾に兵を進めがたし、先兩人の物馴たる者を馳て、路徑の曲折を探聞しめ、然して後に兵を進めば、路の順逆を知り、戰に便あるべし。黑旋風李逵進出て云く、某久しく人を殺さずして寞寂なるに、某先馳向ふべし。宋江が云く、

光彩あり、然るに此兩人梁山泊の名を借り、鷄を偸吃ひ、我輩をして恥辱を蒙らしめければ、我先此兩人を殺して、號令を正し、其後軍馬を起して、祝家荘を攻破り、快く此寃を雪ぐべし。宋江猶諫て云く、長兄何ぞ人を一列に見給ふや、彼時遷はもと賤き者なるによつて、鷄を偸て事を惹出せり、此兩人は又忠義を重んずる誠の英雄なり、某かつて聞けるに、祝家荘の小人等、常に山陣を誹羞愧るとなり、いかんぞ此度に限んや、況や彼輩日頃專ら備を嚴密にして、山陣に敵せんと圖るよし、今山陣には人馬多きゆゑ、兵粮頗る乏し、先此勢に乘じて彼所に攻行かば、暫時に踏崩して、兵粮多く得べし、某不才たりといへ共、數人の豪傑を引て、自ら祝家荘に馳向ふべし、若祝家荘を打平げずんば、誓て再び山陣に歸るまじ、是第一山陣の爲には、仇を報て鋭氣を折かず、第二には彼鼠輩等に恥辱らるゝことをも免れ、第三は若干の兵粮を得て、山陣の用に供へ、第四には李應を誘引して山陣に加はらしめん、某愚意を以て之れを量るに、是則ち全き計なり、只知らず長兄の尊意はいかん。時に呉軍師すすみ出で、宋長兄の言尤可なり、今若楊雄石秀を殺さば、自家の手足を砍る道理なり、願くは晁長兄宜しく怒を息て、兩人が罪を免し給へとて、もろ〳〵頭領都て一同に諫めければ、晁蓋漸怒を忍び、兩人を免しけり。宋江猶自ら兩人を撫諭して云く、兩人の賢弟必ず異心を

五編　巻之四十二

○宋公明一回祝家莊を打つ

神行太保戴宗錦豹子楊林の兩人は、楊雄石秀兩人を延て廳上に至り、晁蓋宋江幷に諸頭領に見えしめ、各禮畢りしかば、晁蓋先其所存を問けるに、兩豪傑心を傾け隨順すべき由を語りしかば、諸頭領皆々悅びけり。楊雄又時遷が鷄を偸んで捉れしこと、李應兩度まで書簡を送て時遷を求しか共、祝家の者共是を許さず、剩へ一戰に及で、李應を射たること、且祝氏兄弟梁山泊の豪傑を誇羞辱むる事、一々くはしく告ければ、晁蓋これを聞て大に怒りて云く、汝等妄に梁山泊の名を借て羞辱を蒙らしめしこと、甚だ以て惡んづべし、我まづ汝兩人を殺さんとて、已に左右を呼で、此兩人が頭を刎よ、と命じける處に、宋江忙しく諫めて云く、長兄先怒を息給へ、此兩人の豪傑千里を遠しとせずして山陣に來り、心を傾けて隨順せんと云ふに、少しき過を擧て是を殺し給はゞ、却て不可ならん。晁蓋が云く、梁山泊の豪傑王倫を殺してより以來、只忠義を以て主とし、諸の頭領都て賤き志を起さず、各豪傑の志を磨て

に、諸頭領は皆聚義聽に相聚つて待居けり。

共、李應再三言を盡して送りしかば、兩人の者遂に金銀を收めて、李應に謝し別れ、直に梁山泊を望み急ぎしかば、はや前面に新しき酒店あるを看て、兩人齊しく酒店の内に入り、頓て酒を求て酌けるに、此酒店は則ち梁山泊より新に建たる酒店にして、石勇之を掌り、專ら世間の風説を探聽ふ傚眼の處なり。此時兩人の者酒店の小厮に向て、梁山泊の路數を問ひければ、石勇傍よりこれを聞て想爲く、この兩人の者は尋常の族にあらじ、我自ら是を試んとて、則出て問けるは、貴客兩所は何れより來り給ひしぞ、又梁山泊の道を問て何の用事有や。楊雄が云く、我輩は蘇州より來れり、山陣に頗る用事有る者共なり。石勇忽ち戴宗が語りし事を想ひ出し、則ち問て云けるは、足下は石秀と云ふ人にはあらずや。楊雄が云く、某は楊雄と云ふ者なり、其石秀は此兄弟（弟と云ふことなれば弟兄の誤なるべし）がことなり。則石秀を指ざし又問て云けるは、足下何を以て石秀が名を知り給ふや。石勇が云く、某本知らざりしか共、日外戴宗蘇州より回りて大名を稱揚せり、よつて某長兄の大名を聞及べり、今日山陣を尋給ふは、大なる幸なりとて、頓て酒宴を設け慇懃に欵待し、則ち水亭の窓を開て、相圖の響箭を葦の内へ射入しかば、早速一艘の快船を漕來りぬ。石勇自ら兩人を請て船に乘しめ、直に鴨嘴灘に至て、岸に上り、石勇先一人を馳て、山陣に斯と告ければ、戴宗楊林早山を下り相迎へ、遂に引て山陣に上りし處

李應箭疵を負て治療を乞図

將已に鎗を交へて、十七八合鬪ひしかば、祝彪力衰へ敵することと能ず、急に二十步許引退いて、弓箭を取て打搭へ、恰も滿月のごとく挽てひやうと放ちければ、其矢忽ち李應が右の臂に中り、馬より下に眞倒に落にけり。祝彪是を見て、再び鎗を擧げ早く擲入し處に、楊雄石秀齊しく刀を揮て砍て出で、直に祝彪を望で左右より來りしかば、祝彪又馬を囘し走り行く。楊雄早くも追著て、馬の股を砍けるに、馬忽ち斷いて立しかば、祝彪すでに落んとせし處に、大勢馳來りて之を扶け、諸人一度に放つ矢は、唯雨の降る如くなり。楊雄石秀は身に盔甲を著せざりしかば、此箭を遮りがたく思ひ、遂に祝彪を棄て退きけり。此時杜興は李應を扶け、再び馬に乘ければ、楊雄石秀は左右に從ひ、且李家莊へと退きしに、祝彪が勢は二三里ばかり追蒐しかども、天色已に晚て暗かりしゆゑ、遂に人數を引取て半途より囘りけり。扨李應は已に私宅に囘りて箭疵を養生し、則又楊雄石秀を後堂に請て計を商議しけるに、楊雄石秀が云く、大官人已に矢に中り給ひて、時遷も又救ひ難ければ、我輩兩人は先梁山泊に上り、晁宋兩頭領を賴んで、大官人の爲に此仇を報うべし。李應が云く、我今祝家を打破て、時遷を救んとは思へども、我已に矢疵を蒙るのみならず、彼が勢は我勢に多ければ、頗る難き所あり、此上は先梁山泊に上り給ひて、宜しく計を議し給へとて、一盤の金銀を相贈る。楊雄石秀これを辭しけれ

り。李應已に祝家莊に至りしかば、紅日はや西山に傾きぬ。此祝朝奉が家には、門前に一つの吊橋有て、四方は都て高墻あり、樓の上には金鼓を設け、樓の下には劍戟を建て、其防尤嚴なり。李應眞先に馬を進め、大音聲に呼り云けるは、祝家の三兄弟いかんぞ敢て我を誹るや、速に出て勝負を決せよ。此時大門開けし處に、五六十騎一度に馳出る。祝朝奉は赤馬に乘り、當先かくれば、第三の子祝彪相續て馬を一番に騎出す。李應是を見て、先祝彪を指ざして、大に罵つて云く、汝黃口の孺子、何ぞ妄に我を欺くや、我と汝が親とは死生の交を結び、誓て心を同じうし、志を共にし、互に相助けて村を守る、若汝が家に何事も有り、我に問て人を求むる時は則人を遣し、物を乞ふ時は則物を送る、我今一個の平人を求んが爲、已に兩度まで書簡を寄けるに、汝これを扯破て、我名を恥辱るは、これ何の道理ぞや。祝彪が云く、我が家汝と死生の交を結びし根元は、梁山泊の賊を捉へて山陣を掃清んが爲ならずや、然るに汝は梁山泊に心を通じて、已に謀叛の企あり、此故に我汝が書簡を扯破りぬ。李應が云く、汝平人を捉へて、梁山泊の賊とするは大いなる非道なり。祝彪が云く、時遷已に白狀しけるに、汝尙抵賴んとするや、退かば速に退け、若然らずんば、必ず汝が一家を捕へて、街に示衆べし。李應是を聞て大に怒り、鎗を撚り馬を躍せ、搠出ければ、祝彪も又馬を飛せ鎗を輪し搠て出で、兩

るや、先怒を息て彼等が返答を申聞よ。杜興が云く、某書簡を携へて莊内に入し處に、祝龍、祝虎、祝彪、兄弟三人同じく出て大に怒り、汝又來て何をなすやと問しゆゑ、某拜伏して申けるは、主人より書簡を寄候とて、則これを呈しけるに、彼等又色を變じ、罵り云けるは、汝が主人はいかんぞかく愚にして、再三書簡を寄せ、妄に梁山泊の賊時遷を求るや、我今これを官司に引渡さんと欲す、汝再び來ることなかれと云し故、某又答へて云けるは、時遷は梁山泊の者にあらず、彼は此回蘇州より來りし旅客なり、願くは仁心を垂給ひて、彼が一命を饒し給へと、未だ云も終らざるに、兄弟忽ち呼つて云けるは、我決して時遷を還さじとて、書簡を扯破つて地上に擲棄て、尙頻に罵つて、汝もし再三我等兄弟が怒を惹引さば、我必ず李應を捉へ、共に官司へ引かせん、と惡口したる故、某これを憤りければ、三人の兄弟、家人に命じ某を捉んとせし故、某急に馬に策つて馳回り候なり。李應是を聞て、忽ち牙を咬み齒を切つて大に怒り、早く馬を引せよ、我自己に馳向はん、と呼りければ、一家中都て騷動しける處に、楊雄石秀諫めて云く、大官人怒を息給へ、必ず我輩が爲に結盟の義を壞ひ給ふことなかれ。李應がいはく、足下等毛頭これを憂へ給ふなとて、遂に全身盔著を著し、手に點鋼鎗を撚て、馬に打乘り、凡そ二十餘人を引て打出ければ、杜興楊雄石秀等も、同く相續て馳出け

石秀深く是を感謝す。李應が云く、兩人の豪傑心を安んじ給へ、我が書簡を遣すからは、少刻時遷を送り來るべし。先強て酒を酌給へとて、自ら盃を把て相勸め、閑談畢て後、李應又鎗棒のことを兩人に問けるに、兩人の者一々これを語りしかば、李應其理あるを聞て大に悦び、益々懇志に見えにけり。扨かの使者巳の下刻に馳回り、則李應に對して云けるは、某自 祝朝奉にまみえて、書簡を呈せし處に、祝朝奉は已に時遷を放つべき氣色露れけれ共、彼三傑却て大に怒り、急に時遷を官司に引渡すべしとて、返簡にも及ばざりし故、是非なく歸れりと。李應これを聞て、忽ち大に駭きて云く、我此三ヶ村の内は、互に生死の交を結て、常に睦じければ、書簡を見ると齊しく時遷を送るべきに、却て三傑が怒をなせしは、必定汝が云誤りあるべしとて、又杜興に命じ云けるは、汝自ら馳て祝朝奉にまみえ、宜しく備細に告て、時遷を乞請回るべし。杜興が云く、願くは大官人再び書簡を修へて遣し給へ、然らば必ず承允することあらん。李應其言に同じ、頓て又書簡を修へ、杜興に與へければ、杜興則ち馬に乘て、飛ぶが如く祝家莊に馳行けり。李應は再び楊雄石秀に對して云けるは、此回の書簡にはいよ／＼具に云送りたれば、必然好信あるべし、心を寛げ待給へとて、共に黃昏まで待しかば、杜興頓て馬を飛せ跑來り、顏色大に變じて、暫く聲をも出す事能ざる故、李應問て云く、汝何故かく怒

號す、最能鑓を使ひ、又善背に飛刀を藏し、百歩の間を隔て人の首を得るなり、此三村は互に盟を誓ひ、若事ある時は、各人數を馳て相救ふ、只梁山泊の豪傑來て兵粮を借らん事を恐れ、三村同じく人馬を備へ、其防極て嚴密なり、某今長兄を引て李大官人に對面あらしめ、則ち李大官人の書簡を祝朝奉が方に遣し、時遷を求めば、祝朝奉肯て時遷を放ち送るべし。楊雄が云く、李大官人と云は、彼撲天鵰李應と云ふ人にはあらずや。杜興が云く、則其撲天鵰がことなり。石秀が云く、獨龍岡の邊に、撲天鵰李應と云ふ豪傑有とは聞しかども、未だ曾て其實を知らざりしに、果して詐ならざりしよな、我輩速に馳て對面せば可ならんとて、遂に杜興に隨ひ酒店を出て、三人同じく李家莊に至りけり。

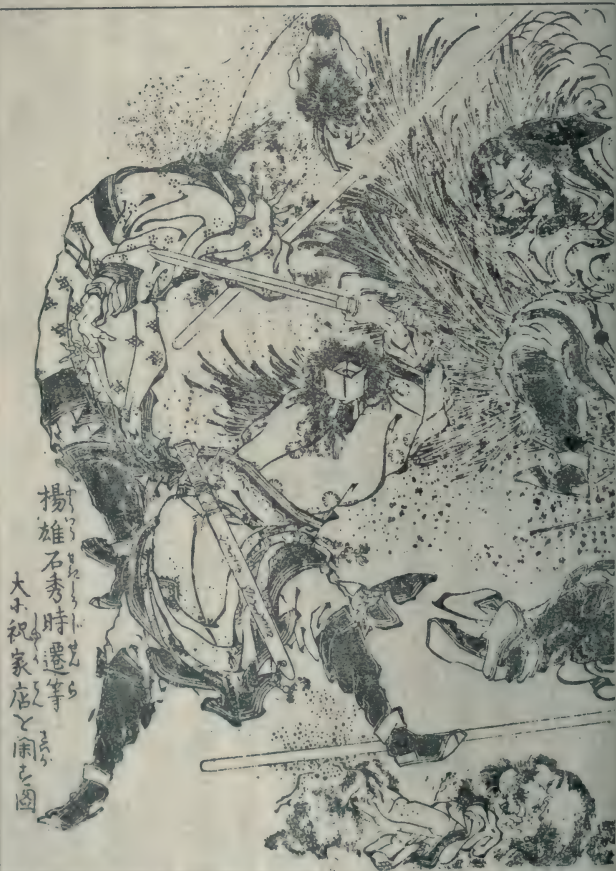
○撲天鵰生死の書を雙修す

此時杜興先家に歸り、李應に斯と告げ、門外に出で楊雄石秀を莊内に誘引しける處に、李應自ら廳前に出て相迎へ、終に一禮畢りしかば、頓て酒宴を設け兩人を欵待けり。此時兩人再拜して云けるは、願くは大官人一封の書簡を祝家莊に遣し給ひて、時遷を救ひ給はらば、我輩身を終るまで此恩を忘るまじ。李應これを聞て哀に思ひ、早速書簡を修へ、使を祝家莊に馳ければ、楊雄

んとは。杜興問て云く、長兄は何等の公用有て、此邊に至給ひしぞ。楊雄低言いて云く、我蘇州にて人命を害せし故、梁山泊へ行んと欲し、昨夜祝家店に宿しける處に、又事を惹出し、鄉民等を殺しけるが、只我輩三人の内時遷と云もの生捉れぬ。杜興が云く、長兄心を安んじ給へ、我自ら時遷を放つて長兄に還すべし。楊雄大に悦んで云く、已に然らば先暫く酒を汲給へとて、頓て盃を執て勸めけり。杜興又云く、某蘇州を出てより以來、數年此處に逗留し、幸ひ一人の大官人に愛せられ、乃ち彼大官人の家内のこと、都て某が預らずと云ふ事なし、此故に故鄉に回る遑あらず。楊雄が云く、其大官人とは、誰人なるぞ。杜興が云く、此獨龍岡の前に三つの村あり、中の村を祝家莊と云ひ、西の村を扈家莊と云ひ、東の村を李家莊と云ふ、此三ヶ村の内には總て一二萬の軍馬あり、其内に於ても、祝家莊は別して豪傑多し、此村の頭たる祝朝奉三人の男子あり、これを祝氏の三傑とす、嫡男が名は祝龍、二男は祝虎、三男が名は祝彪と號す、又一人武藝の師あり、其名を鐵棒欒廷玉と號し、萬夫不當の勇士なり、其外又一二千の力士あり、西の村扈家莊の頭たる人は、扈太公とて、一人の男子名を飛天虎扈成と號し、武勇諸人に勝れ、又太公の女子が名を一丈青扈三娘と號し、能兩刀を使ひ、しかも馬上の働き男子に勝れり、東の村李家莊の頭たる人は、即ち某が主人にて、姓は李、名は應と

刀を擧て索を砍拂ひ、草の内に進み入て、時遷を救はんとせしか共、遂に其行方を知らざりしかば、楊雄が云く、時遷を活捉れて遺憾には思へ共、今更力の及ぶ所にあらず、先速に道を求めて落行べしと、遂に東の路を望んで馳去けり。扨郷民等は時遷を活捕り、頓て祝朝奉が家に引渡しぬ。楊雄石秀兩人は、すでに二時ばかり馳ければ、天色漸白みけり。石秀前面を見るに、一軒の酒店ありしかば、兩人急に酒肆に入て歇ける處に、又一人の大漢子店に入て呼り云けるは、大官人今汝等に工役を仰せ給はんとなり、早々大官人の館に來るべし。酒店の主忙はしく答へ、少刻到らん、と云ければ、彼大漢子再び門外に出んとして、楊雄が前を過る時、楊雄此漢子を見るに、原來識荆なりしかば、則ち呼つて云く、小郎汝は何ゆゑ楊雄を忘れぬるや。彼漢子急に頭を囘し、楊雄を見て俄に拜をなして云けるは、恩人此處に至り給ふはいかん。楊雄が云く、我此處に至りし事は、頗る緣故あり、先共に坐して談話せよ、我詳にこれを告んとて、遂に三人座を列ねて、隔心なく見えにけり。時に石秀問て云く、此人は誰なるぞ。楊雄答へて、此人姓は杜、名は興、原中山府の生なり、人皆此賢弟を稱して、鬼臉兒と諢名せり、前年蘇州に於て人を殺す故、入牢して已に斬罪に決しけれ共、我深く彼が武藝を惜み、上下の役人等に内通し、遂に斬罪を免れしめけるが、豈知らんや、今日此處にて對面せ

人の漢子跳出て、直に三人の者を望んで打てかゝる。石秀これを見て、奔雷のごとく吼り、早く拳を擧て三四人打倒しければ、楊雄も同じく數人踢倒しぬる處に、彼家僕これを見て急に逃んとしけるを、時遷飛がごとくに走り、眉間を打ければ、忽ち血を吐て倒れけり。彼に打倒されし漢子共漸々起上つて後門より逃出ければ、楊雄是を見て云けるは、彼等已に逃出し上は、少刻大勢を引て來らん、我輩速に此處を避行んとて、三人同じく壁の上に掛たる刀を奪取て、已に跑出んとせし處に、石秀が云けるは、事已に此に至れり、何ぞ善人をなさんやとて、遂に家の四方に火を著しかば、忽ち黑煙天に沖り、煌熾に焚起たり。三人の者はや大路に出て約莫一時許馳ける處に、前後に火把の火二三百起りて、喊き叫んで赶來る。石秀が云く、我輩小路を求めて逃行ば可ならんや。楊雄が云く、先此處に控て、彼等を盡く赶散し、曉なば小路より馳行べし、と未だ云も罷らざるに、はや左右を圍んで、近々と赶來りしかば、楊雄等三人一齊に刀を揮つて斬て出で、楊雄先七八人を斬伏し處に、石秀も又十餘人斬殺しければ、數百の人數先を爭うて、四方八面に逃散けり。楊雄等三人又數十歩ばかり行けるに、再び喊の聲大いに起り、草深き處より、二つの鈎索を投出し、先時遷を搭住て引行しかば、石秀急に是を救はんとせし處に、背後より又二つの鈎索を以て、石秀をも搭住んとしけるを、楊雄急に

揚雄石秀時遷等大に祝家店を閙す図

何れの處に去てこれを求るや。時遷が云く、某自ら求る所ありと、打笑つて出けるが、果して一つの鷄を偸み來りしかば、楊雄石秀共に莞爾として云けるは、汝定めて賊手を出しこれを求めつらんとて、頓て鷄を殺し三人齊しく用ける處に、家僕是を知り再び座上に出て云けるは、其鷄は我家に養ひ置たる鷄なるに、いかんぞこれを偸み給ふや。時遷が云く、此鷄は今日途中に於て買求たるなり、汝何ぞ卒爾のことを云や。家僕大に怒て云く、汝等は何者なれば人の眼を遮つて偸をするや、早く原の鷄を還せ。石秀が云く、此鷄已に殺せり、豈能原の鷄を還さんや、我汝に價を還すべければ、宜しく怒りを休よ。家僕が云く、彼鷄は毎朝曉を報る鷄なれば、店中にこれを缺く事能はず、價は十兩銀を償ふとも、我これを取ず、只好原の鷄を還せ。石秀大に怒て云く、我價を償はんと欲す、汝再三原の鷄を還せと云は、甚だ以て道理なし、我此上は一錢も償ふまじきに、汝必竟これをいかんがせんや。家僕が云く、汝等必ず我店を、等閑の客店と一列に見ることなかれ、若猶鷄を還さずんば、汝等三人を捉へ、梁山泊の賊と名け、早速官司に送るべきぞ。石秀益〻怒りて、我もし梁山泊の豪傑なれば、汝いよいよ敢て我を捉んや。楊雄も同く怒て云く、我好意を以て價を償はんと欲するに、汝何んぞ我輩を捉へんや。家僕是を聞て大に怒り、忽ち聲を揚て、賊ありと呼りければ、左右より七八

り、則我が主人祝朝奉の住宅なり、祝朝奉三人の男子あり、都て是豪傑なるゆゑ、人皆稱して祝氏の三傑とす、此處に都合六七百の人家あり、盡く皆農夫たりといへども、毎家二挺の刀を所持す、我此店を祝家店と名付て、常に十四五人の家僕來て宿するに因り、則ち十餘挺の刀あり、此刀は云に及ばず、村中の刀都て我主人より分與へり。石秀が云く、汝が主人は又何故村中に刀を分與ふるや。家僕が云く、此處より梁山泊へは遠からず、只此賊を防がん爲、多くの軍器を備へて家々にあり。石秀が云く、我價を償うて一挺の刀を所望せんに、汝須からく我に賣與ふべし。家僕が云く、軍器の類は、都て目錄の上に記したる物なれば、某何ぞ妄に是を賣らんや、若主人是を知ば必ず我を笞つべし、重て軍器の沙汰をし給ふな。石秀が云く、汝賣ずば我も買まじ、いかんぞ斯恐るゝやとて、自ら盃を執て家僕に勸ければ、家僕は是を辭し、終に座を立て出にけり。

○拚命三火をもつて祝家店を燒く　又拚命三とも書く

此時楊雄石秀等盃を巡らし樂み居けるが、時遷が云く、兩長兄若鷄を用ひ給はゞ、某是を求め來るべし。楊雄が云く、我先に家僕に問けれ共、此處には鷄を賣る者なしと云しに、汝

く路に迷ひぬる事もやあらんとて、兩人の轎夫、齊く山上に登て此邊を見るに、兩人の女斬殺されてありしかば、轎夫大に駭き、慌て忙き馳回て、潘公に斯と告げ、則其夜潘公と共に蘇州府に至て、知府相公に訴へしかば、知府は急に人を馳て、屍首を檢驗させけるに、其人頓て立回り、知府に報じて云けるは、兩人の女松の樹に絆り著て殺されけるが、傍に出家の衣服のみ有て、別に一點の物もこれなし、と未だ語りも罷らざるに、知府はや前日裴如海が殺されたることを思ひ出し、是則私情を通じ、己が夫に殺されたる者に疑なしと考へ、潘公を呼出し云けるは、汝が女兒を殺したる者は、汝が壻なるべし、先比楊雄が隣家共訴出し出家等兩人首を刎られ、各衣類なかりしと云に、今女兩人を殺したる處に、出家の衣類を捨置しを思ひ合すれば、各私情を通じたるより起るなるべし。楊雄と石秀とを捉へざれば、決斷し難しとて、翌日賞錢をかけて楊雄と石秀兩人を求めけり。扨楊雄石秀時遷は已に蘇州を離て急しかば、不日に鄆州の地に至て、香林洼を過りし處に、はや一つの高山を望み、天色漸々晩しかば、三人の者遂に旅宿を求め飲酌を催しける處に、石秀不圖頭を擡げ店の内を見るに、壁の上に十餘挺の刀掛て有しかば、石秀則家僕を呼で問けるは、汝が主人は何等の人なるぞ。家僕答て、我主人は祝朝奉と申す人なり、前面に見ゆる高山は獨龍山と號す、山前に峨々たる一つの岡あ

の樹の背後より一人の漢子呼つて云けるは、汝兩人今人を殺すのみならず、剰へ梁山泊に行んとは、甚だ大膽の企なり。楊雄石秀これを聞て忙しく背後の方を顧るに、彼漢子地上に拜伏す。此人は則ち姓は時、名は遷と號し、又諢名を鼓上[illegible]（又蚤に作る）と云ふ。本高唐州の民、久しく蘇州に流落、楊雄が厚恩を多く蒙りし者なり。幼より簷を飛壁を走り、籬を跳馬に騙る、其迅速人目を愕然の術を練熟せり。此時楊雄問て云く、時遷汝は何の戯言を云や。時遷が云く、某頃日貧苦に逼りし故、此山中に墓ある處を尋ねて、棺材を掘出し、則ち其内を搜し、銀器の類を覓めんと欲し、毎日這邊に徘徊す、先にも已に夫人を殺し給ふを見れ共、故意知ぬ體に扣へて出ざりしが、今節級の商議して云給しを聞ぬるに、梁山泊に行給はんとの事なりし故、某敢て馳出ぬ、願くは某をも誘引し給はゞ、恩は天地と同じからん。石秀が云く、汝已に我輩に從つて來らんと思はゞ、我肯て汝を携へ往ん、今梁山泊には專ら壯士を招く時節なれば、却て人多く行を悦ぶべし。時遷是を聞き大に感謝して云けるは、某若山陣に足を留めば、必定今日の貧苦を免るべしとて、遂に三人後山の小路より下り、直に梁山泊を望んで馳行たり。扨兩人の轎夫は山の腰に在て數刻待しかば、紅日已に西山に傾け共、楊雄等三人倘未だ山を下らず。轎夫共商議して云けるは、はや日も晩んとするに、未だ回らざるは、三人同じ

共に人を殺せしことなれば、等閑の所に行がたし、唯宜しく梁山泊へ馳行べし。楊雄が云く、彼所は豪傑多しといへ共、本樞機なき所なるに、いかんぞ妄に行んや。石秀がいはく、梁山泊の晁宋兩頭領は、原來よく人の危きを救ふ、いはんや今專ら賢を招き士を納む、遍く天下の人是を知れり、我輩急に彼地に馳行かば、久竟無事を保て身命を安ずべし。楊雄が云く、凡事は先に難うして後に易き時は、後患を免るゝと云なるに、賢弟猶宜しく三思を加へて、前後の難易を量るべし、若我輩此裝束にて梁山泊に上らば、恐くは諸頭領官司より來れる私訪ならんかとも疑ふことあらんか、全く賢弟の議に服し難し。石秀笑つて云く、宋公明はもと押司の職をなしたる人なれば、定めて能人を識べきに、何の徒に人を疑はんや、殊更我山陣には頗る樞機あり、彼日長兄我と兄弟の義を結ばんとて、酒店に尋ね來り給ひし時、我と共に酒を酌でありし兩人の旅客、一人は則ち梁山泊の豪傑神行太保戴宗と云し者、一人は梁山泊に入んとて、戴宗に同行せし錦豹子楊林と云ふ者なり、彼其時某が志を感じ、一錠十兩の銀を惠みて云けるは、梁山泊には今專ら賢を求め士を募る間、必ず此處を棄て山陣に來れと諌めぬ、此故に我今梁山泊に行かんと欲ふなり。楊雄が云く、汝已に此の如き來歷あらば、何故疾云ざりしぞ、宜しく早々馳行べしと、各々腰刀を帶し、朴刀を提げ、已に山を下らんとせし處に、松

べけれ共、長兄我と義を結ばざれば、いか樣の事あらん共、我が干る所にあらず、潘公の懇志に免じ見ぬふりに在べし、然るに汝が不義今に露れん、其時は必然長兄を毒殺せんと、大罪を企つべし、豪傑大丈夫たる者淫婦の計に命を落さば、我義兄は天下英雄の笑者とならん、義弟として何ぞ見聞に忍びん、是亦我が止ことを得ざる今日の天理なり、汝よく物の理を分別して見よ。又楊雄に對して云けるは、今日對談の上にて我不義なきこと明白に正しければ、長兄いよ／＼我心を知り給へ、且此女はいか樣とも、長兄の心儘に行ひ給へ。楊雄がいはく、賢弟我爲に彼等が衣裳を剝取給へ、我自らこれを行はん。石秀此言を聞き、遂に妻と了頭が衣裳を剝ければ、楊雄親自兩人の女を樹の上に捆り著け、頓て刀を揮て云けるは、是等の淫婦もし今これを饒さば、久竟人を傷ふべし、只宜しく我手にかけて殺さんとて、先一刀に了頭を斬殺し、次に淫婦を斬んとせし處に、淫婦大に流涕して云けるは、丈夫此度は我一命を饒し給へ、向後過を改むべし。楊雄冷笑つて罵りけるは、汝淫婦前夜はよくも我を欺き、我已に汝が言を信じ、幾乎兄弟の情を壞はんと欲しぬ、我今汝を害せずんば、いづくんぞ能我この憤を散ぜんやとて、遂に刀を擧て淫婦が頭を刎にけり。楊雄又石秀に對し云けるは、此上は汝と共に何方になり共馳行て、身心を安んぜん、若汝行べき所あらば、速に誘引せんや。石秀が云く、我長兄と

病關索翠屏山に淫婦を斬る圖

てこれを忍び給ふことなかれとて、又巧雲に向て云く、汝裴如海に奸通し、夫の眼を眩す事、我疾より是を知れり、然るに汝言を詐りて長兄を誑き、我と長兄との盟誓までを敗らんとするゆゑ、前夜我汝が家の後門に彳みて待を知らず、木魚を持し頭陀後門より出たるを捉へ、これを責て汝等が悪事をなす次第、内外相圖の事迄微細に聞糺し、此頭陀が衣類を剝取首を刎ね、木魚を取て我是を敲き相圖をなせしに、裴如海忽ち汝が床を出歸るを捕へ、衣類を剝て首を刎ね、其衣類は證見の爲に取置き、則今汝に見する處なり、と云聞せけるに、楊雄又大に罵つて云く、汝淫婦始終の悪事備細に語れ、若然らずんば、我立處に汝を害すべきぞ。巧雲今は止ことを得ず、遂に白狀して云く、日外老父が家に於て、先夫の法事を成し時、始て裴如海と奸通し、其後每度後門より爬灰たりし、と語りける。石秀又問て云く、嫂々は何故、我汝に調戲たると誣りて、長兄には告けるぞ。巧雲が云く、前夜丈夫酒に醉て、我を責り給ひし時、何とやらん蹺蹊ありげに見えぬるゆゑ、我只これを猜して想ひけるは、叔々必定我過あるを知て、丈夫に告給ひしにより、夫是を憤り給ふならんと推察し、却て叔々を誹て丈夫を誑きぬ、叔々何ぞ我に調戲れ給はんや、何事も都て我詐りしことなれば、最罪重しといへ共、願くは慈仁を垂て咎を許し給へ。石秀又いはく、嫂々汝、此石秀預らぬことに口出しせりと思ふ

長兄の前にて明白に云給へ。巧雲が云く、汝に過なくば自ら靜り給へ、妄に眼を怒らしむるは、これ何の無禮ぞや。石秀が云く、汝は猶人知らぬとこそ思ふべけれ、我今證見を出して汝が罪を正さんとて、頓て裴如海が衣裳を取出し、汝是を識認たるや。巧雲これを見て、覺えず面を紅め、只一言の答にも及ばざりけり。石秀腰刀を拔て楊雄に與へて云けるは、長兄もし此事を分明に知り給はんとならば、此了頭に問給へ、然らば忽ち明白に知れ候はん。楊雄然りと同じ、則了頭を揪へ、大に怒て云く、汝賤人いかんぞ我妻を助けて不義をなさしめけるや、一々詳に白狀せば、我肯て汝が命を饒すべし、若半點にても詐らば、先汝が頭を刎べきぞ。彼了頭これを聞て大に駭き、忽ち抖ひ慄き云けるは、願くは相公我命を饒し給へ、我詳にこれを告んとて、彼日潘公が家に法事有し時、裴如海始て私情を通じ、此より每度忍び入て擅に樂むこと、始終具に語りしかば、楊雄大に憤り、早速妻を踏倒して罵りけるは、汝淫婦自ら明に白狀せよ、彼了頭已に白狀せし上は、汝縱ひ抵賴とも抵賴せじ、若實情を以て我に告ば、我肯て汝が性命を助けん、若半句にても詐らば、只今汝が胸を刮開て、天罰を知らしめん。巧雲大に驚き、則聲を震はし云けるは、我前日不圖酒興に乘じ自ら誤りぬ、願くは舊日の恩愛を想出し給ひて、這囘の罪を饒し給へ。石秀が云く、長兄必ず事を分明に正し給へ、自ら誤つ

て回りけり。翌日楊雄妻に向ひ云けるは、我久しく山神を拜せざる間、今日は汝と共に山神廟に參詣せん、宜しく用意を調へ來るべし。妻これを聞て領承し、はや粧を調しかば、楊雄則妻を轎に乘しめ、蘇州城の東門の外に馳出で、楊雄闇に轎夫に命じて、翠屏山に擡行べし、といひければ、轎命を受け、直に翠屏山を望で馳行き、暫時の間に彼山の腰に至りけり。楊雄先轎を跕させ、妻を呼出しければ、妻則轎を出で、大に駭いて云けるは、丈夫何故此險山に來て、山神を拜し給ふや、我聞く、山神の廟は我先祖の墓の傍にも是あるとなるに、何ぞ必しも遠く此山に至り給ひしぞ。楊雄が云く、此山の山神は究て靈感有となり、汝唯我に從つて山に登れ、轎夫兩人は暫く此所に在て待べしとて、唯一人の了頭を引て、三人齊しく四五重の山坡を上りし處に、石秀ははや此處に在て待侘けるが、楊雄夫婦が來りしを見て、急に相迎ければ、楊雄が妻は驚き怪みける。石秀潘巧雲に向ひ、嫂々恙なきや。巧雲答へて、叔叔何故此處にありや。石秀が云く、我疾來て嫂々を待侘ぬ。楊雄又妻に對して云く、汝前日我に告けるは、石秀一向不義の調戲を云しとなるに、今日此處には他人もあらざれば、汝兩人これを對談して明白に正すべし。巧雲が云く、過去りしこと、再三問給ひて何の益ありや。石秀眼を怒らし云けるは、嫂々汝何ぞこれらの詐を長兄に告て、兄弟の義を壞はしむるや、今日

五編　巻之四十一

○病關索大に翠屛山を鬧す

病關索楊雄は妻の詞に誑かれ、義弟石秀を恨みたる過を悔ひ、今更石秀が思はく面目なく、夫につけても妻の惡さ心魂に徹し、今にも首を刎たしと思へ共、石秀が云處も理あれば、勤て心を靜め石秀に對し、賢弟の計を聞て我速に鬱憤を散ぜん、速に所意を聞んと云ければ、石秀が云く、今此所の城の東門より三里外に、翠屛山と云ふ險山あり、長兄明日淫婦を誑きて云給ふべきは、我久しく山神を拜せざるに、幸ひ今日暇なれば、汝と倶に行て山神を拜すべし、と淫婦を賺し出し、彼山に上り給へ、某は先に山に上て待べき間、三人對面の上にて、虛實を分明に正し、其後長兄心の儘に行ひ給へ、是則罪を糾し罰を行ふ道理なれば、縱ひ官府に云たりとも、畢竟其分說有べし。楊雄が云く、三人對面の上、虛實を正せと云は、賢弟の淸潔なることを、我前に正さんが爲ならん、我今更賢弟を疑ふ心更になしといへ共、左も右も賢弟の教に從つて、明日淫婦を引て山に上るべきなり、汝かならず早く來て待給へとて、遂に別れ

れを落せし間、此次に至て梁山泊鐵面孔目裴宣を立て軍政司とすと云ふ。又宋江祝家荘を攻る備に楊林鄧飛などの名出たれば、是等皆以前より梁山泊に在し人のごとし。又前の編武大郎武松の段に、武大郎が妻潘金蓮武松に戀慕し、忽ち武松に羞辱られ、却て夫の留主に、武松我に戯弄をなせりと武大郎へ訴へ、此巻には楊雄が妻潘巧雲、夫の留主に石秀我に戯弄をなせりと楊雄に告ぐ。奸夫を需る淫婦、此詞を以て夫を詭く定例のごとし。外には工夫も思慮もなきものにや。

故、我遂に裴如海と頭陀とを殺せり、長兄是を見て、速に疑を解給へとて、則ち衣裳を取出し見せ、是は則ち兩僧が著したる衣裳なり、我是を證見にせん爲、剝取て置たるを、尊覽に呈す、我一旦兄弟の義を結では、我首今飛とも盟約に差ふことなし。楊雄愧入て、賢弟必ず我を恨ることなかれ、我今更面目を失ひて、賢弟に述ん言もなしとて、又一たびは大に怒り、我今宵淫婦を殺し、賢弟に見せしめんと云ふ時、石秀呵々と笑ひ、長兄は官司の法度も知り給ひつらんに、何ゆゑ此等のことを云給ふや、古より淫婦を殺すには、先奸夫を捉へ、然して後これを殺すことなり、彼奸夫裴如海は已に我是を殺せしに、長兄今又誰を奸夫として、淫婦を殺し給ふや、是乃ち證見もなきことなれば、若率爾に淫婦を殺し給はゞ、却て人殺と成て大いなる禍を蒙り給ふことあらん、しかじ我議に從ひ給はゞ、淫婦を殺し給ふとも、十分禍あらじ。楊雄が云く、賢弟何等の計有て、禍を免れしむるや、我が爲に委しく告候へ、と申ける。石秀何の答をなすや、五編目を讀まば明かなるべし。

論者いはく、戴宗公孫勝を求得ず、飲馬川の山陣の三頭領を誘引し楊林と共に梁山泊に上るとありて、晁蓋宋江に公孫勝を尋得がたき旨、且又楊林、裴宣、鄧飛、孟康四人の豪傑に遇て伴ひたる次第を告て、諸の豪傑まで對面せしむる事を書べきことなり。作者こ

今急に糺明せん手掛もなし、王公を免し、隣家共を回らしめ給へかし。知府然りと同じ、王公に構なく、諸隣家の訟は聞置て皆引取しむ。此事専ら沙汰ある程に、彼の淫婦巧雲もこれを聞き大に駭き、只心中に苦みけり。此時楊雄も已に次第を聞き、暗に想けるは、是必定石秀が所爲なるべし、我前日誤つて彼を恨みける故、彼證見を看せしめんが爲、兩人の僧を殺しつらん、我先彼に遇て、事の虚實を問はんとて、遂に街の邊に出ける處に、背後に人あつて、長兄何れに行給ふや、と呼りしかば、楊雄急に頭を回して其人を見るに、是則ち石秀なり。楊雄が云く、我賢弟を尋んと欲しけれ共、何れの所に在るを知らずして、甚だ是を憂ひぬ。石秀が云く、長兄先我旅宿に至つて談話し給へとて、遂に導いて旅宿に至り、則ち告て云く、某が云し事僞なきや。楊雄が云く、我前夜酒後に不圖言を洩し、却て淫婦に再び誑かれて賢弟を恨ぬ、此ゆゑに我今日汝を尋ね遇て、罪を謝せんと思ひしなり、望らくは、賢弟怒を息め我が過を免さんや。石秀が云く、某不才の小人たりといへども、頗る道理を曉しぬるに、いかんぞ敢て長兄に違んや、某初め長兄に告たるは、後々は長兄淫婦が毒殺に遇ひ給はん、然らば天下の豪傑は大丈夫の名を赦すまじ、我たま〳〵兄弟の義を結ながら、長兄を人の笑ひものたらしむるは、頗る忍びざる所あつて、實義に依て密に惡事を告ぬ、然れども我赤心長兄に通じがたき所ある

ば、知府則ち廳上に出て其訴を聞くに、諸隣家皆楷の下に跪いて、此王公と申者、今朝某等が門前に在て喊びしゆゑ、面々悉く出てこれを見しに、一荷の糕粥地上に潑翻し、其傍に兩個の死人あり、一人は和尚、一人は頭陀、各身に衣服を著せず、頭は刎落され、其側に又一挺の刀あり、此故に王公を揪へて訟へ奉る。王公も又告て云く、某毎日糕粥を賣つて營とす、常には五更過の時分より出てこれを賣ふ處に、今朝は例より些早く出し故、路も未だ見分けがたく、一向走り行きし處に、不圖蹋跌て地上に倒れ、一荷の糕粥悉く潑翻しける故、驚きて地上を見けるに、兩個の死人ありしかば、恐懼の餘り、覺えず聲を揚て呼りし處に、諸の隣家出て遂に某を揪へたり、唯闇くして跌倒れしのみにて、死人のことは、何ゆゑ何人誰に殺されたるや、更に知る所なし、伏して願くは相公明にこれを察し給へ。知府これを聞て、まづ王公を楷の下に留置き、則役人等を馳て、死人を檢驗させける處に、頓て立歸りて報じけるは、二人共に報恩寺の僧なり、各頭を刎落され、傍に一挺の刀あるを持參せりとて、これを知府に獻ぜり。知府これを見て、則當番の孔目に對して、評議を求めしかば、孔目告ていはく、此兩僧は原同寺の僧なるに、彼處に於て殺されしは、必定道ならぬことを倣出し、兩人殺死に及びしなるべし、王公實に是を知るまじ、二人の死人緣故あるべきことなれども、

又問て云く、裴如海は今何れの所にありや。頭陀が云く、彼倘床の上に歇みある、此事原我と一人の下女と、内外の消息を窺つて、彼等兩人が事を助る故、彼男女每度安心して斯優に歇む、我今此木魚を敲て響するときんば、彼早速出來る、是又我輩が相圖なり。石秀が云く、我先汝が衣服と木魚とを借るべしとて、頓て衣裳を剝取り、遂に刀を拔て頭陀を斬殺し、彼木魚を取て只顧敲しかば、裴如海此響を聞て、時分は好ぞと心得、則ち後門より走出ける處に、石秀早くもこれを捉へ、暗に低言罵つて云けるは、汝必ず聲を高むることなかれ、若敢て聲を揚ば、我今汝を殺さん、速に衣裳を脫で、我に與へよ。裴如海已に石秀たることを知りしかば、豈敢て聲を做んや。則衣裳を脫で石秀に與ふ。石秀これを取て、己が身に著し、已に叉刀を揮て、裴如海が頭を刎ね、急ぎ旅宿に回て、暗に門を開き、再び房間の內に入て歇みけり。茲に又當地の城中に、糕粥を賣て營とする、王公と云ふ者ありけるが、此時分一擔の糕粥を荷て商賣に出で、まさに此所に至て裴如海が屍を踏で眞倒に倒れ、これ何人なるにやと、手を伸し探り見るに、二人の僧斬殺されてありしかば、王公忽ち大に騷ぎ、聲をあげ呼りけるに、隣家の者どもこれを聞き、各門を開き馳出見るに、死人と王公と倒れありければ、衆皆大に駭ぎ、先王公を捉へ、官府に引渡さんとて、一同に騷けるが、死人をも見屆け、王公を拖り、蘇州府に至りしか

なり、楊雄今淫婦が言を信じ、我を恨ること深し、我縱ひいかやうの分說するとも、我言信ずまじ、彼若赤心を識る者ならば、己が心魂大丈夫ならざるを愧べきものなり、今我宜しく證見を求て、此事を分明ならしめんとて、翌日楊雄が當直の夜を伺ひ知り、其夜四更の時分旅宿を立出けり。

○石秀智をもつて裴如海を殺す

石秀は中夜より旅宿を出で、暗に楊雄が後門の邊に躲れ、裴如海が出るを待侘て在けるに、漸五更の左側に至つて一人の頭陀手に木魚を持ち、後門の外に出て左右を窺ひ見るに、石秀忙はしく走り倚て彼頭陀を捕へ、則ち低言罵つて云けるは、汝若聲を高むることあらば、我今汝を殺すべきぞ、汝若命惜くば、裴如海が惡事を一々詳に我に告げば一命を饒さん。石秀が云く、已にかく在て云けるは、汝肯て我を害せずんば、一點も詐らず備細に語るべし。彼頭陀懍き抖んには、我いよ〳〵汝を饒さん、速に告知らせよ、もし少しにても僞る所あらば、必ず頭を刎べきぞ。彼頭陀が云く、如海和尙今專ら楊雄が妻と私情を通じ、每度此家に忍び入て擅に娛をなす、少刻囘らんと欲するゆゑに、我門外に出て四方の動靜を窺ふ、是則ち實情なり。石秀

と云まじきと思へ共、丈夫却て彼が爲に、哄騙れ給はんこともあるべければ、我今これを告ん、必ず十分に怒て、事を破り給ふ事なかれ、彼石秀初め來りし時は、老實にして、肆なることもなかりけるが、頃日は已に志驕り、丈夫の留守なる時は、一向我に戯れ、不義の言を云ぬれども、我曾て心上に掛ずして忍びけるに、この兩日は頻に我を欺く、この故に今丈夫に告知らせ申す間、向後必ず彼を憐み給ふべからず。楊雄是を聞て心中大に怒り、彼已に是等の不義を做んと思ひ、却て裴如海がことを詐つて、預め我を欺きぬること、甚だ以て惡むべしと、再三憤りて妻に對していはく、彼已に此のごとき不仁不義の者ならば、早速家を追出すべし、汝心を安んぜよとて、翌日潘公に告て、石秀が家の道具等、悉く打碎きて棄しめければ、石秀は原來聰明の者なれば、はや是を察し思ひけるは、昨夜楊雄酒に醉て我云しことを妻が前にて漏し、却つて妻に誑れたるに疑なし、我且速に退いて、別に宜しき計をなさんとて、包袱を背に負て家を出で、則ち潘公に別を告げて云けるは、我久しく此處にあつて深く懇情を蒙り、誠に感激に勝ず、と遂に辭し、門外に馳出で、則ち近邊に旅宿を求めて休息し、自心中に思ひけるは、楊雄我と義を結んで、兄弟の盟をなしけるに、若今日此等の事を分明に正さずんば、必竟我獨不義に陷りて、天下の豪傑に笑はるべし、且楊雄も又淫婦の毒殺に遇んは眼前

一連に五七碗の酒を飲で大いに爛醉し、黄昏に及んで家に歸りしかば、妻みづから楊雄を助け、床の上に上らせける所に、楊雄妻が面を見て忽ち怒心頭より起り、則ち妻を指ざし大に罵つて云く、汝淫婦我必ず汝を殺すべきぞ。妻これを聞て甚だ怕れ、敢て聲をも作ず傍に臥けり。漸五更の時に至て、楊雄纔に醉醒しかば、則ち妻を呼で水を求ける處に、妻頓て水を携へて與へければ、楊雄これを取て云けるは、我宵には大醉したるゆゑ、定て汝を責りたる事もあらん、必ずこれを恨ること勿れ。彼巧雲が云く、丈夫常に醉給ふ時は、早速歇み給ふに、今宵は何ゆゑにや、我を責り給ひし詞の末、何とやらん心を安んじがたし。楊雄が云く、汝必ず心を煩はすことなかれ、とて常の體にもてなし、少しも怒色なかりけり。暫くして云けるは、我義弟石秀は、頃日快からずしてありぬるに、汝よろしく酒肉を具へ彼を慰めんや。巧雲これを聞て忽ち涙を洒ぎければ、楊雄問て云く、汝流涕するはいかん、我宵に汝を責りたるは、原本心にあらず、都て酒興に乘じての事なり、必ず再三是を恨ること勿れ。巧雲涙を掩へて云けるは、我父母初め我を王押司に嫁せしめける處に、王押司不幸にして早逝ありしゆゑ、今再び丈夫に嫁し、我心大いに悅ばしく思へども、丈夫は却て我を他人に欺かしめ給ふ、是則ち我を愛し給はぬに因てなり。楊雄が云く、誰人あへて汝を欺くや、速にこれを語れ、巧雲が云く、我も

よ。石秀が云く、向に巧雲親潘公の家にて、先夫の法事を做し時、彼裴如海と私情を通じ、此より裴如海毎度長兄の家に忍入るとなり、かくのごとき淫婦を留て何の益かあらん、長兄明かに曉し給へ。楊雄聞もあへず、大に怒て云く、此淫婦いかんぞかくのごとく我を欺くや、我是を殺さずんば有べからずとて、忽ち顏色變じければ、石秀諫て云く、長兄先怒を息給ひて、今晩は何事も云給はず、唯常のごとくにもてなし給へ、明晩は詐つて當直たるよしを云給ひて、家を出給へ、然らば彼惡僧必然來るべし、某は後門に待べき間、長兄は又三更の時分ふたゝび回り、前門を敲給へ、此音を聞なば、彼僧急に後門より逃出べし、此時某これを捉んに何の難きことかあらん。楊雄此言を聞て可なりと同じ、遂に酒樓を下りて街に出けり。

○楊雄醉て潘巧雲を罵る

斯る所に四五人の下官來つて、楊雄に對して云けるは、今知府相公花園の內に出給ひて、鎗棒を見給はんとのことなるに、節級早く來つて某等と共に一棒を使ひ給へ。楊雄これを聞て則石秀に向て、我は先官府に趣かん、汝宜しく家に歸るべしとて、遂に下官等と共に、知府が後園に至て、棒を使ひしかば、知府これを見て大に悅び、頓て酒を以て楊雄を賞しけるに、楊雄

抜て兩人の者を殺さんと欲しけるが、又心中に想ひけるは、我今楊雄に知らせずして、彼等二人を殺さば、必定事分明ならずして、我が罪となるべし、今日は先これを忍びて、重て殺すとも晩からじとて、空しく刀を鞘に收めて控へけり。彼巧雲は此日を始として、裴如海に心を傾け、毎度會合して私情を交へ、恰も漆と膠のごとくなり。一日石秀楊雄を訪ひければ、楊雄則ち石秀を迎て云けるは、我專ら公用に絆られ、久しく賢弟と酒を酌ざりしに、今日は幸ひ閑暇を得て、寂寞なる間、去來酒樓に上つて三盃を酌んとて、遂に石秀を引て家を出で、直に一軒の酒店に至つて樓に上り、頓て酒肉を求て、石秀に勸めけるに、石秀は只頭を低て悅ぶ色なかりしかば、楊雄これを怪み問けるは、賢弟何が故に斯頭を低て沈吟するや、恐らくは家内の男女賢弟を欺きたるに因て、これを憤るにあらずや。石秀が云く、家内の男女曾て我を欺かず、我今長兄の厚恩を蒙りし故、一句の言を長兄に告んと欲す、あへて是を云べきや。楊雄が云く、賢弟もし告んと思ふことあらば、速に語るべし、何ぞ必ずしも沈吟するや。石秀が云く、長兄は毎日官府に出て内に居給はざるゆゑ、家内の惡事を知り給ふまじ、長兄の妻巧雲は原正しき賢女にあらず、我毎度不義のことを看けれども、便機を得て長兄に告んと思ひ、延引今日に及べり。楊雄が云く、我常に他出して、家内の事は總てこれを知らず、汝宜しく不義の對手を告

石秀
竒巧雲如海
談話

墻

けるが、果して今此僧に私情を通ぜんと欲ふと覺ゆ、遮莫我必ず義兄に替て事を正さんものをと、自ら牙を咬み、遂に簾を揚て、彼和尙の前に至りしかば、巧雲早くも和尙に對して云けるは、此人は是我夫楊雄が義弟なり。裴如海が云く、先にも已に見えしかども、未だ誰人たる事を聞ざりしに、楊雄居士の義弟とや、知らず高姓大名はいかん。石秀が云く、わが姓は石、名は秀と號す、我專ら人の爲に力を出し、我身の禍を避ざるゆゑ、人皆拚命三郎と綽號せり、和尙よく我を識認給へ。裴如海是を聞て心中頗る怕れ、則ち巧雲に對して云けるは、我ははや諸の僧衆を請て來るべき間、暫く相待給へとて、已に門外に出ければ、巧雲は又樓上に登りけり。石秀は彌〻心中に疑ひ、自ら門邊にあつて待けるに、裴如海頓て、衆僧を引て來りしかば、潘公石秀これを迎て內に入り、茶已に了り讀經肇りたる處に、彼巧雲靈前に出て、自ら香を拈り三拜をなしければ、裴如海は只顧巧雲を望見て、慾心大に亂れけり。石秀傍に在て、此光景を看、心中甚だ冷笑ひけるに、須臾にして念經も了り、衆僧皆座に就て、齋食を吃し、遂に潘公石秀に別を告げ歸りし處に、獨裴如海は後に留りて、暗に巧雲と戲弄をなし、遂に私情を通じければ、石秀壁の縫間より之れを伺見、自ら嘆息して想道く、我が義兄楊雄は、誠に正しき豪傑なるに、此のごとき淫婦を娶り給ひしこと、何の不幸かこれに過んやとて、已に刀を

が云く、實に然らば、我肯て留り申さんとて、再家に歸りけり。翌日石秀は門前に立出て、僧の來るを待居ける處に、一人の年少なる和尚、一人の道人を從へて、はや門前に至り、則ち石秀に對して問訊をなしければ、石秀急に禮を還して内に誘引し、頓て潘公を呼出し、彼和尚に遇しめければ、彼和尚先潘公に對して云けるは、我が父何ゆゑ久しく寺には至り給はぬや。潘公が云く、我俗事繁多にして、寸暇を得ざるゆゑ、多日寺にも參詣せざりしとて、閑談半なる所に、彼巧雲風流に粧て樓を下り、先石秀を呼て問けるは、和尚至り給ひぬるや。石秀が云く、一人年少なる和尚至れり。巧雲が云く、其和尚は乃ち裴如海と云て、我父を拜して義父とし給ひぬるゆゑ、我爲にも又義兄なり、尤能經を念給ふ。石秀此言を聞て、心中はや疑はしく思ひけり。彼巧雲已に出て和尚に遇ければ、石秀は暗に傍よりこれを望み見るに、彼和尚巧雲を見て、合掌問訊して云けるは、賢妹恙なきや。巧雲答て、我常々師兄の事をのみ渇想す、いかんぞ消息をなし給はぬや。和尚が云く、我頃日新に水陸堂を建立しけるゆゑ、賢妹を請て遊行せしめんと思へども、節級に怪まれんことを恐れて未だ賢妹を邀ず。巧雲が云く、我夫楊雄は曾て拘束ならず、我已に宿願もあれば、近日貴寺に參詣すべしとて、互に意を含で談話しければ、石秀是を見て暗に想道く、我常々彼女を見るに、多く風話を叙て、心正しからざる體なり

しと云なるが、果して然りとて、良久しく沈吟し、此意を察し思ふに、楊雄は我と兄弟の約を誓ひしことなれば、忽ち我を疎んずることもあるまじ、殊に公務繁く家事を顧る暇もなき人なり、かた〴〵以て其妻必定我を嫌ふ所あつて、かく留主の間に家財を收拾しめ、我に家を出よとの意を曉さしむるに疑なし、我已に此意を曉す上は、豈よく片時も此家にあらんや、已に戴宗楊林の誘引にて、直に此所を去り、梁山泊に入らんとせしに、楊雄が懇切に暫く其義を止たれ、今斯る時宜に臨んでは、潘公へは故郷に歸らんことを辭とし、是迄の懇志を厚謝に及び、梁山泊に走るにしかじと、直に潘公が家に至つて、則ち潘公にまみえて云ひけるは、某故郷を出て六七年に及びしかども、未だ曾て歸らず、此ゆゑに明日早々別を告げて、故郷に歸らんと欲ふ。潘公が云く、汝必ずかくのごとき事を云給ふな、我已に汝の心を察せり、汝の留守の内に家財を拾收たるを見て、斯云ひ給ふならん、此事に於ては少々緣故あり、我女ははじめ王押司と云ふ人に嫁しけれども、此人不幸にして死せしゆゑ、今また楊雄に嫁せり、明日は則ち王押司の三回忌に當るゆゑ、出家を請て法事を做んとす、これに依て汝の家を空て、供人等を入置んと圖り、則ち家財等を收拾たり、必ず疑を休て、猶此所に逗留し給へ、況や我齡七旬に及んで、客に陪侍すること能ざる間、明日は足下我に替つて宜しく出家等を欵待給へ。石秀

理し、大に店を開き、石秀を此家に移し、商賣をせしめんと欲す、此事いかゞ有べきや。楊雄が云く、石秀是まで薪を荷うて營とせしは、頗る勞煩の業なり。泰山今居ながらの產業をせしめんとならば、大いに可ならん、石秀だに嫌はずんば、我何ぞ別に意あらん、知らず賢弟はいかゞ思ふや。石秀が云く、我多く潘公の厚意を賜ふ、何ぞ懇命に背かんや。潘公大に悅び、頓て造作を加へて、坊猪圈を構へ、數十の肥猪を畜ひ、猪肉の店を開き、肉案子盆器の類も綺麗に用意し、潘公年來の舊識などへも、店開販の吹聽をなし置き、先吉日を擇んで石秀此家に移り、商賣の備全く調りしかば、最上吉辰に大吉利市と祝して發店せしに、衆鄰舍潘公が知音知己、楊雄が勤に樞機ある者まで、若干家より、祝賀の積物等をなし、遠近より新肉舖を開帳と聞て來り求る人多く、其後引續て商殊に繁榮せしかば、石秀も大に心を安んじ、潘公楊雄等へも心を傾け懇切を盡しけり。かくして兩月あまりを過けるに、光陰迅速なる哉、時はや初冬に移り、褐裘を更る節に遇ひ、石秀一日早に起き冬の新衣を著し、五更の頃より外縣に出て、猪の買入しけるが、彼此に求るゆゑ、第三日目の黃昏前に回り家を見るに、舖店を開たる體もなく、家內に入て見るに、肉案其外商賣の用具家財等まで、盡く收拾め竈の邊まで何一品もなく片付ありしかば、石秀心中奇異少からず。諺に云ふ、人千日の好なし、花百日の紅なるな

して、我婿を助けなば、公門出入の人誰か敢て無禮をなす者あらんやとて、卽ち石秀を愛し敬ふこと淺からず。三人遂に酒店を出ければ、石秀は又薪を荷て相從ひ、直に楊雄が家に至りし處に、妻出迎へて內に入しかば、楊雄則ち石秀を引て、妻にまみえしむ。此妻は名を巧雲と云て、初一人の夫に嫁しけれども、此夫死しけるゆゑ、今又楊雄に嫁して、いまだ一年を經ざるとなり。石秀此妻を見て忙はしく禮を行ひしかば、楊雄則ち兄弟の盟を結びしことを妻に告げ、此より石秀を家に留めて、懇情殊更深かりけり。扨戴宗楊林兩人は、楊雄が大勢を引て來りぬるを見て、若また禍を引出すこともやあらんとて、急に城外に出て旅宿に歸り、翌日又公孫勝をたづねしかども、曾て消息を知る人あらざりしかば、兩人暗に商議して云く、城中城外遍く尋けれども、曾て消息知れず、此上は先梁山泊に囘りて他日又來るべしとて、其日蘇州を出て、再び飲馬川の山陣に至りしかば、裴宣、鄧飛、孟康等三人、已に用意を調へ、一行三百餘の軍馬を、官軍の軍行に詐り扮作ち、星夜に馳て梁山泊を指て急ぎけり。戴宗公孫勝に遇ずといへども、四人の豪傑三百餘の軍馬を得たるは、梁山泊一分の光を添ると云つべし。扨又一日楊雄が丈人潘公、楊雄と石秀とを呼んで云けるは、我家後門の外に一條の斷路小街あり、又一間の空房あり、此所井水も便よく、聊も諸用差つかへのなき地なれば、我石秀と商量て彼空屋を修

ふことは、曾て存ぜず候。楊雄又問て云く、足下の高姓大名はいかん。石秀答て、某姓は石、名は秀、金陵建康府の者なり。楊雄重て問けるは、今足下を邀て酒を勸めたる人は、何れにありや。石秀が云く、彼兩人は今節級大勢を引來り給ふを見て、再び騒動することもやあらんと思ひ、遂に此所を避行ぬ。楊雄が云く、已にかくの如くんば、先彼等を皆歸すべしとて、則ち人每に二碗の酒を與へて歸しければ、衆人都て酒を飮て退散しけり。楊雄又石秀に對して云けるは、足下此所には定めて親類もあるまじければ、某と義を結んで兄弟の好を誓ひ給へ。石秀これを聞て大に悅び、乃ち其年を問けるに、楊雄は二十九歲、石秀は二十八歲なりしかば、則ち楊雄を兄とし、石秀を弟とし、頓て天地を拜し、兄弟の義を結びけり。斯る處に楊雄が丈人潘公、七八人の漢子を引て、直に酒店の内に走り入る。楊雄忙はしく迎へて問けるは、泰山此に來り給ひて、何のことありや。潘公が云く、我今汝が人と爭をなしたることを聞しゆゑ、是を助んと欲て馳來りぬ。楊雄が云く、此石秀と云ふ人、我を助けて彼張保を打し故、禮物等ことごとく取回し、彼等を四方へ追散しぬ、此故に我今石秀と義を結んで、兄弟の約を誓ひぬ。潘公が云く、已にかくのごとくんば、我敢て石秀に三盃を勸めんとて、頓て酒肉を具へて、石秀を款待し、潘公熟々石秀が英雄諸人に勝れたるを見て、則ち心中悅んで云く、かゝる豪傑若果

の天下、朝廷不明にして、奸臣縱横し、賢者は退き小人は進む、我向に一つの事に因て、梁山泊に上り、晁宋兩頭領の幕下に屬して、專ら浮生を娛ましめ、唯朝廷の御赦免を待つのみ、若一旦時節到來せば、忽ち官人ともなるべし。石秀嘆じて云く、某も久しく梁山泊に趣かんと思へども、只恨らくは樞機なくして、未だ行ず、戴宗が云く、豪傑若梁山泊に行んと思はれば、某肯て導くべし。石秀之を聞き大に悅び、先戴宗等兩人に問て云く、兩長兄の高姓大名はいかん。戴宗が云く、某姓は戴、名は宗、此義弟は姓は楊、名は林と號す。石秀これを聞て云く、某曾て神行太保と云ふ大名を聞及けるが、知らず戴長兄の事にはあらずや。戴宗が云く、神行太保とは則ち某がことなり。石秀忽ち拜伏して、山陣に趣かんことを商議しける處に、外面に餘多の人尋ね來りしかば、三人の者これを見るに、則ち彼楊雄二十餘人の士兵を引いて進み入る。戴宗楊林密に想道く、再び騷動することもやあらんとて、急に門外に馳出ければ、石秀は自ら楊雄を相迎へて云けるは、唯今押牢は何故此所に至り給ひぬるや。楊雄答て云く、我方々長兄を尋候ひぬ、我先に想はず張保等に捉はれ、已に難義に及びし處に、幸ひ足下の助を蒙り、遂に彼等を追散し、ふたゝび禮物等盡く取かへしぬ、是則ち足下の賜なり。石秀が云く、某先に兩人の旅客に邀られ、此所にて三盃を酌しゆゑ、節級今我を尋給

き者を助け、其強者を打つ、これ眞の豪傑なりとて、戴宗楊林近く前んで云けるは、願くは豪傑我が輩兩人が言を容ひて、彼等を饒し給へとて、遂に彼漢子を引て酒店の内に入ければ、彼大漢子深く是を謝しぬ。戴宗が云く、我が輩二人は過路の旅人なり、今足下の猛勇を見ぬるに、恐らくは彼等を打殺し給ふこともやあらんと思ひ、敢て足下を諫めて此所に誘引しぬ、先宜しく三盃をくみ給へ。彼大漢子大いに謝して云く、兩位の長兄我を諫めて、禍を免れしめ給ふのみならず、猶且酒を賜らんとのこと、我豈あへて是に當らんや。楊林が云く、四海の内は皆兄弟なり、何の隔心かあらんとて、遂に酒を求て彼大漢子に勸め、酒已に數巡に至りぬる所に、戴宗彼大漢子に問て云く、豪傑の高姓大名はいかん。彼漢子が云く、某姓は石、名は秀、原金陵建康府の者にて、幼き時より武藝を學びぬ、若路次にて今日のごとき不平のことを見る時は、決して其弱き者を助け、其強き者を打つ。此ゆゑに人皆某を稱して拚命三郎と申す、今は此蘇州に落零て、薪を賣て營とす。戴宗が云く、足下のごとき豪傑此所に流落て、乏き營をなし給ふ事、又惜からずやとて、一錠の銀を惠みけるに、石秀固辭するを強て收しめ、足下願はくは此所を去て、天下に名ある豪傑等と義を結び、浮生を樂み給へ。石秀が云く、某頗る武藝を曉すのみにして、いかんぞよく寸進を得んや。戴宗が云く、當世

借んと云や。張保が云く、汝今日百姓を惱して多くの禮物を求め、何ぞ少し分て我に貸ざるや。楊雄が云く、我今日幸ひ兩院押牢となりしゆゑ、其樞機ある者どもは、皆我に禮物を送る、我豈敢て民を惱してこれを求めんや、汝却て我を妨げんと圖るらん。張保これを聞て大いに怒り、彼六七人の漢子どもに下知して、禮物を奪取らしむ。楊雄此光景を見て、汝何ぞ無禮をなすやとて、已に馳向つて打散さんとせし處に、彼張保早くも楊雄が背後に繞り出て、則ち楊雄を緊と抱きしかば、又兩人の漢子來て楊雄が手足を揪へて、少しも働かせざりし處に、對面より又一人の大漢子、一荷の薪を挑うて來りしが、張保が無禮をなすを見て、心中頗る憤り、頓て薪を卸して、張保に問て云く、汝は何ゆゑ押牢を妨ぐるや。張保是を聞て大いに罵つて云く、汝匹夫分量相應の乞食はなさずして、何ぞ妄に閑事を問て、多言を吐出すや。彼漢子大いに怒り、忽ち足を飛せ、張保を地上に踢倒し、其外の漢子等を又東西に打倒しければ、楊雄まさに身を脱れ、則ち平生の手段を出して、暫時の間に十人許打伏けり。張保これを見て敢て敵せず、彼禮物を奪取つたる漢子に跟て東の方に逃走る。楊雄益怒り、急に後を慕うて追蒐ぬ。彼大漢子は猶頻に路上を繞つて、張保が手下の漢子共を打伏せけり。戴宗楊林はこれを見て、暗に彼大漢子を稱美して云く、彼漢子は、則ち人の人を欺くを見ては其弱

て、兩人また旅宿を出て城外を遍く尋ねしかども、更に公孫勝を知る人なし。翌日又村里街盡く尋ねれども、知る人なかりしかば、戴宗楊林にいひけるは、公孫勝は必然城下に住すらんとて、第三日の朝飯後、兩人また城下に至て三四人に問しかども、公孫勝を知る者なし。兩人又百歩許進みし處、許多の人禮物を捧げ鼓樂を奏して、一個の人を迎へ來る。戴宗楊林立住つてこれを見るに、傘の下に一個の人有て若干の人これを供奉す。此傘の下の人は原河南の人にして、姓は楊、名は雄と號して、武藝の達人なり。又面の色黄なるに依て、人皆病關索と諢名せり。此楊雄昔日河南を出て、此蘇州に至り、久しく落魄て在けるが、今日知府に擢擧られて、兩院の押牢節級となりしゆゑ、牢中の下役人ども、此日樂を奏し、楊雄を迎へ、且喜を賀すとなり。此時又、路の傍より二十餘人の大漢子出來る。其内の頭たる大漢子は踢殺羊張保と云ふ者にして、常に城中城外に徘徊して、專ら人を惱す破落戸の棟梁なり。此張保今楊雄が立身したるを見て、これを妨げんと欲し、則ち諸人を推開て、楊雄が前に至り、節級恭喜しと呼はりしかば、楊雄急に答て云く、某何ぞ長兄の賀に當らんや、只望らくは長兄某と共に、去て一盃を酌給へ。張保が云く、我曾て酒の望なし、只汝に十貫文の錢を借ん。楊雄が云く、我頗る長兄の面を識認ぬといへども、未だ曾て錢財を相交へず、いかんぞ我に問て錢を

賢を招き士を納め、天下の豪傑と義に聚ることを告げ　裴宣等三人をも梁山泊に招きけるに、裴宣等三人之を聞き、鼂宋兩人が徳を感じ、乃ち戴宗に對して云けるは、某が陣中にも亦三百餘の人馬あり、若長兄微賤を弃給はずんば、某をいよ〳〵梁山泊に誘引し給へ、某等あへて犬馬の勞を盡すべし。戴宗大いに悦んで云く、鼂宋兩頭領は同じく一團の和氣あつて、能賢を招き、能士を募給ふ、足下等若肯て鼂宋兩人を助け給はゞ、是則ち錦の上に花を添るがごとし、もしいよ〳〵梁山泊に入らんと思ひ給はゞ、早々用意を調へて待給へ。我は先楊林と共に蘇州に馳せ、彼公孫先生を邀へて、再び此所に至り、衆皆一同に梁山泊に歸るべし。裴宣等喜に堪ずして、深く戴宗に謝しけり。戴宗楊林其夜は山陣に歇み、翌日早々三人の頭領を辭して、山を下りしかば、裴宣等三人同じく麓まで送つて、終に一別に及びけり。扨戴宗楊林は已に飲馬川の山陣を離れ、蘇州を望て急ぎけり。

○病關索長街にて石秀に遇ふ

偖も戴宗楊林は不日に蘇州の城外に至り、旅宿を求し處、楊林先戴宗に對して云けるは、公孫先生道家なれば、定て山間の村に住し、城下には住すまじ。戴宗が云ふ、我も斯こそ思ふなりと

誰なるや、必定等閑の人にあらじ。楊林が云く、此長兄は是梁山泊の英雄神行太保戴宗と云ふ人なり。鄧飛是を聞て忽ち拜伏して云く、某久しく大名を聞及びぬるに、今日何の幸にや尊顏を拜す。戴宗重て鄧飛に問て云く、彼豪傑は亦何人ぞや。鄧飛答へて云く、彼は我が義弟孟康と云ふ者なり、原眞定州の產にして、諢名を玉幡竿と號す。戴宗是を聞て大に悅び、四人同じく閑談良久しくして後、楊林又二人の頭領に問て云く、汝兩賢弟、此山に安身する事、幾年を經ぬるや。鄧飛がいはく、我が輩此山に來つて一年餘なり。此半年以前に又一人の豪傑を得ぬ、此豪傑は原京兆府の人にして、姓は裴、名は宣と申す、昔日六案孔目をなせし人なり、最能鎗を拈り、棒を使ひ、劍を舞し、刀を揮ふ、其人となり忠直にして一點も邪の心なし、これによつて人皆鐵面孔目と諢名せり、向に當府の知府に無實の罪に陷され、乃ち沙門島に流されんとして、此所を過りける故、我等兩人山を下つて、監押の下官兩人を斬殺し、遂に裴宣を留て山陣に在しめ、凡二三百の人馬を聚て共に此山を守り、年長たるによつて、山陣の主を裴宣に讓りぬ、願くは兩長兄片時山陣に上り給ひて、裴宣にも遇給へ。戴宗楊林大に悅び、頓て兩頭領に隨つて山陣に上りけり。時に裴宣出迎へて、聚義廳に至り、各禮畢て座已に定りし所に、頓て酒宴を進め盃を飛せ、酒數巡に及びければ、戴宗先晁蓋宋江が、今專ら

行の法をなして走る時は、我とともに齊しく快し、若然らずんば、汝いかんぞよく我に追付んや。楊林大に悦び、頓て二つの甲馬を雙の腿に拴著し處に、戴宗遂に神行の法を行うて馳ゆきしかば、兩人宛も空を飛がごとくにして、はや一つの高山を望みぬ。楊林が云ふ、此所は飲馬川と云ふ地なるが、山中には原來強盜の頭領あつて、若干の人馬山陣を守る、只知らず、頃日はいかゞしたるやらん。戴宗これを聞て云く、此山の勢極て猛惡なり、頃日たりとも、などか人馬のなからんやと、未だ云も終らざるに、忽ち金鼓の聲大いに響て、二三百の小賊馳出て、當先に兩人の頭領各刀を揮て、大音聲に呼はりけるは、汝二人は何者なるぞ、速に路を買て過るべしと。楊林呵々と打笑つて云けるは、汝あへて路を賣らば、我鋒尖を以て買ふべしとて、刀を輪し斬てかゝる。兩人の頭領忽ち地上に跪きて、楊林長兄にはあらずや、と呼はりしかば、楊林これを見て大に悦び、急に扶け起して禮を還し、則戴宗を請て見えしむ。戴宗問て云く、此豪傑は誰なれば、賢弟を見知りぬるや。楊林答て云く、我を識認たる豪傑は、原蓋天軍襄陽府の人にして、姓は鄧、名は飛、諢名は火眼狻猊と號す、我と彼とは兄弟の義を結び、多年一所に在しかども、五ヶ年以前に別れて後は、かつて音耗も通ぜざりけるに、想はず今日此處にて參會すること、緣の絕ざる處なり。鄧飛も又楊林に戴宗がことを問て云く、彼長兄は

を語り給ひし時、足下のことをも詳に聞けるに、一日の内に八百里の路を行給ふとなり、某今足下の路を行給ふを見るに、尋常の人の及ぶ所にあらざる故、若は神行太保にてもあらんやと思ひ、敢て大名を呼けるに、果して長兄の光臨なること、某莫大の幸なり。戴宗が云く、則ち彼公孫先生蘇州に回りてより以來、曾て消息なきゆゑ、晁宋兩頭領朝夕これを渴想し、則ち今某を蘇州に遣して、公孫先生を訪はしめ、早速誘引して山陣に歸るべきとの事なり、これに依て某今命を奉て今日此所に至り、想はず足下に見えしこと、奚啻雀躍のみならんや。楊林が云ふ、某は本彰德府の產たりといへども、蘇州の地に於ては知らざると云所なし、若長兄我を弃給はずんば、某あへて同往すべし。戴宗が云ふ、足下敢て同行し給はゞ、某何よりの幸なり、若公孫先生に尋遇ひなば、三人早速山陣に回るべし。楊林これを聞て大いに悅び、則ち戴宗を拜して、兄弟の義を結び、其夜すでに旅宿を求めて歇みしかば、楊林自ら酒肴を具へて、戴宗を款待けり。翌朝未明に兩人已に旅宿を出て路に臨みける所に、楊林戴宗に對して云けるは、長兄は神行の法を行うて、一日の內には八百里の路を行給ふに、某あによく長兄に從はんや、某は必定數日後れ、蘇州に至るべし。戴宗打笑つて云く、我が此神行の法は、又よく賢弟を走らしむ、乃ち四つの甲馬を分つて、二つは汝の腿に拴著け、同じく神

四編　巻之四十

○錦豹子小徑にて戴宗に逢ふ

戴宗偏に蘇州を志し、沂水縣にかゝりて行く處に、遙對面より一人の漢子來りけるが、戴宗の走ること疾きを見て、則ち呼で云けるは、神行太保何に往くや。戴宗これを聞て、忙しく頭を擡て此人を見るに、頭圓く耳太く、鼻直にして口方に、眉淸く目秀て、相貌殊に文雅なり。此時戴宗問て云く、某かつて豪傑の尊顔を識認らず、いかんぞ我名を呼給ふや。彼漢子答て云く、足下は果して神行太保にてましますかとて、忽ち地に跪いて禮をなす。戴宗急に禮を回して云く、足下の高姓大名はいかん。彼漢子答て、某姓は楊、名は林、綽名は錦豹子と申す、某數月以前に、道中の酒店に於て、公孫勝先生に遇ひ、梁山泊の晁宋兩公、今專ら賢を招き、士を納め給ふことを承り、某も山陣に身を倚んと願ひける處に、公孫先生一封の書簡を修へて某を山陣に薦め給ふ、然れども某猶未だ山陣に趣かず、其ゆゑは、至りても只山陣に何等の掛礙あつて、某を留めまじきことを恐れてなり、彼日公孫先生諸の豪傑のこと

く誘引して來らんや。戴宗聞て早速に應ずべしとありければ、宋江大いに悅び、果して戴院長行くならば、必ず旬日の內には其消息を聞べしとて、其日は衆皆聚義廳を退散しけり。翌日戴宗は旅裝をなし、梁山泊を離れ、彼四つの甲馬を雙の腿に拴著け、遂に神行の法を行うて飛がごとくに走り去り、直に蘇州を望んで進發し、已に路を行く事三日にして、沂水縣の界に至りけるに、人々擧て黑旋風李逵が取沙汰、區々なれば、戴宗これを聞て、心中に冷笑て過りけり。扨是より飲馬川の山陣に、又强盜あつて小賊を集め、頭領聚義廳を設け、寨を構ること、次卷を見るべし。

論者いはく、前の編武松が景陽岡にて、醉後虎を殺す段に、獵戶どもが驚いて云ふ詞、幷に、此虎は尋常の虎に異なりといふ。又信ぜずして其場に至て、果して死虎を見る。彼は里正の宅にて營待し、是は曹太公の館へ導く、事は別にして趣向大いに似たるかな。又朱貴朱富李逵を救ひ、都頭李雲共に朱富が脊屬を載たる車に跟て、沂水縣より梁山泊へ三日のほどに行著くと見ゆ。然るに戴宗公孫勝を尋るに、梁山泊を立て三日行て沂水縣を過るとありては、梁山泊より沂州の道程分別しがたきものか。神行の法にて一日八百里を行く戴宗も三日とは、神行の法ある事を、此所に至て作者忘却しけるにや。

酒肆を建しめ、北山の方には、李立に十餘人の山兵を與へて、酒肆を建しめ、北山の方には、石勇に十餘人の山兵を從はしめ、酒肆を設けしめ、都て朱貴が酒店の如く、水亭を修補ひ、則ち號箭を體さしめ、其用事を辨ずべし、又山前にも大關を設け、杜遷に之を守らしめ、又陶宋旺に港を掘せて、水路を修理せしめ、又蔣敬には一山の勘定を掌らせ、蕭讓には一山の關文等を掌らせ、金大堅には圖書印信兵符等を雕しめ、侯健には鎧衣袍旗號等を造らしめ、李雲には一山の房屋を掌らせ、馬麟には大小の兵船を造らしめ、宋萬白勝には金沙灘に陣を張しめ、王英鄭天壽には鴨觜灘に陣を張しめ、穆春朱富には陣中の兵糧を掌らせ、呂方郭盛には聚義廳を守らしめ、宋淸には專ら筵宴のことを掌らせ、已に一々分撥定りしかば、諸頭領先聚義廳に會合し、一連に酒宴をなして、山陣大いに熱鬧けり。これより梁山泊には、晝夜只軍の蒐引、戰の勝負等の事のみ學んで怠らず、官軍はや來れかし、一々鏖にして日に物見せ、賊官等が肝を飛しめんと、拳を捏て待侘けけり。一日宋江は晁蓋吳用其外の諸頭領と閑談して云けるは、我輩今日都て大義にあつまるといへども、獨公孫勝いまだ回らず、彼向に約諾し、四五ヶ月のうちに必ず歸山すべしと云しに、今已に若干の日を經ぬれども、曾て消息なきは、必然迷ふ所あらん、願くは戴院長、公孫勝が家に趣きて、彼が虛實を探聞、よろし

給はゞ、則自家の兄弟なりとて、互に禮を行ひ、三人同じく軍を追て馳行しに、半里ばかりに至り、朱貴相迎へて大いによろこび、四人の豪傑、齊しく車に跟いて急ぎしかば、はや梁山泊も近かりし處に、馬麟、鄭天壽出迎へて云けるは、晁宋兩頭領、未だ全く心を安んじ給はず、我輩を下して足下等の消息を探聽しめ給ふ、今已に恙なく回り給ふ上は、我儕兩人は先山陣に回り、かくと訴ふべしとて、兩人の頭領は先へ山陣にかへり、次の日四人の豪傑等遂に山陣に上り、聚義廳に至り、朱貴先李雲を引て晁宋兩頭領にまみえしめて云けるは、此人は則ち沂水縣の都頭、姓は李名は雲、綽號は青眼虎と申なりとて、次に朱富を引て、同じく諸頭領に見えしめ、この者は某が弟朱富、綽號は笑面虎と申なりとて、始終のことを語りければ、李逵も亦假李逵を殺し、ならびに四つの虎を殺したることども、くはしく語り、各〻一笑を催しけり。晁宋兩頭領打笑つて云けるは、李逵は四個の猛虎を殺されしかども、今日山陣には又兩個の活虎を添たりとよろこびて、大いに酒宴を設け飲酌を始めけり。時に吳用進み出て申けるは、今山陣甚だ繁昌し、四方の英雄風を望で馳加はる、これ皆晁宋兩長兄の德なり、近來山陣の事業尤大いにして、舊日に同じからず、猶須らく三ヶ所に酒館を設け、專ら世間のことを探聽しめ、預め先官軍を防ぐの計を備ふべし。乃ち西山の方には、童威童猛に十餘人の山兵

朱富止李逵
雲李逵鬪

の命を受て李逵が消息を聞んため此所に至りけるに、李逵已に活捉れ、縣裡に送られんとす、もし是を救はずんば、いかんぞ再び回つて宋公明にまみえんや、是に依て是等の計を行うて、都頭を誑きぬ、先に李逵都頭を殺さんとせしかども、某是を制して手を動かしめず、只土兵等を殺したるのみ、某等もし急に逃走らば、今時分は若干の路を過るべし、然れども我都頭の厚恩淺からざるを感じける故、故意此所に控へて都頭の赶來り給ふを待受けぬ、都頭もと知見明かなる人なれば、言ずとも知り給へ、今已に李逵を走らしめ給ふのみならず、剰へ許多の土兵等を失ひ給ひぬるに、いかんぞよく再び回つて知縣にまみえ給はんや、若再び回り給ふならば、必定知縣より罪せられ給ふべし、しかじ今日某等とともに梁山泊に入給ひ、晁天王宋公明とともに義を結び給へ、是則ち萬全の計なり、知らず尊意はいかん。李雲是を聞て暫く沈吟して云ふ、賢弟の諫は可なりといへども、只山陣に我を留むまじ。朱富笑つて云ふ、都頭何ぞ山東の及時雨宋公明の大名を聞給はざるや、彼人專ら賢を招き士を納め、天下の豪傑と盟を結び給ふ、いかんぞ都頭を容ひざらんや。李雲是を聞き嘆息して云ふ、我今家あれども奔り難く、國あれども投がたし、只悦ぶらくは、我未だ妻子あらざれば、官司に恐るゝ所なし、我肯て汝と倶に梁山泊に趣くべし。李逵是を聞き忽ち打笑て云けるは、都頭いよ〳〵山陣に上り

朱富兩人は、忙はしく李逵を呼で云けるは、我輩速に山陣に回るべしとて、已に小路を臨で、半里ばかり馳ける處に、朱富忽ち嘆じて云けるは、我師李都頭は人となり尤善なるに、我が計に落され、縱ひ酒毒醒たりとも、いかんぞ再び知縣に見えんや、必定後を慕うて、我輩を追蒐べし、我は原來彼が懇志を蒙りしことなれば、獨此所に待つて宜しく諫を加へ、ともに梁山泊に誘引すべし。朱貴が云ふ、汝が言尤可なり、彌諫言を盡して、必ず山陣に誘引せよ、もし然らずんば、彼却て知縣に罪せらるべし、惜しいかな一人の豪傑、何ぞ空しく是を殺さんや、李逵長兄は此所に留つて、朱富を助け給へ、我はまづ馳て家族等が車に跟べし、とて遂に兩人を此所に留て、朱貴は先車を追て急ぎけり。李逵朱富兩人は此所に留つて已に一時許待居ける處に、果して李雲刀を輪して飛が如く追來り、大音聲に呼つて云けるは、強賊走ることなかれ。李逵此勢の猛きを見て、同じく刀を揮て躍り出で、遂に兩人鋒を交へて相戰ふこと、已に八九合に至りけれども、更に雌雄分たざりし處に、朱富刀を入て兩人が間に隔り、乃ち呼つて云けるは、兩人の豪傑まづ戰を休て、我が一言を聞給へ。兩人これを聞き忽ち雙方へ分れしかば、朱富先李雲に對して、慇懃に云けるは、某曾て都頭の愛憐を蒙りて、鎗棒を學びしかば、平生洪恩を感ずること淺からず、然れども我兄朱貴、今梁山泊にありけるが、宋公明

じて是を吃せり。朱貴又盃に酒を釃ぎ肉を添て諸々の土兵等に與へ、一々是を飲ましめけり。此時李逵は、朱貴兄弟がかく行ふを見て、其計策たる事を知り、故意詐つて云けるは、汝等何ぞちと我にも與へて飲ましめざるや。朱貴責て云く、汝は是大罪人なり、何ぞ酒肉を汝に與へん、とて甚だ悪々しく答へけり。扨李雲は土兵等を見て呼はりけるは、汝等はや路を急ぐべしと、未だ云も終らざるに、土兵ども都て手攤足痲れ、盡く一度に倒れしかば、李雲是を見て、我計に中りぬるよなとて、已に刀を拔んとせし處に、覺えず己も渾身痲れ、同じく地上に倒れけり。朱貴朱富各々刀を揮て、酒肉を吃せざりし者どもを四面八方へ追散し、遂に五六人を斬伏ぬ。李逵此體を見て、勢に乘じて呼はりし處に、絆の索一度に破落離と斷しかば、李逵土兵等が刀を奪ひ取り、李雲を望んで斷てかゝる。朱富急にこれを扯住て云ふ、必ず李雲を殺したまふな、此人は我が爲には武藝の師にして、人となり尤も好し、汝は先これを棄て、一向先に行給へ。李逵答て云ふ、我もし曹太公を殺さずんば、いかんぞ此冤を雪んと、飛がごとくに追かくる。此時曹太公里正ならびに李鬼が妻等は、李雲に從つて此所まで來りけるが、今李雲等が毒藥に中りしを見て、急に逃走らんとせし所に、李逵電の如く追來つて、つひに曹太公、里正、李鬼が妻等悉く斬殺し、其外二三十人の獵戶ども、過半李逵が手の下に斬殺されけり。朱貴

至りなば、我彼に酒肉を進めて、これを用ひしめ、衆人悉く毒に中らん時、我輩其便機に乘じて李逵を救ふべし、知らず此計はいかん。朱貴が云く、此計極めて神妙なり、宜しく速にこれを行ふべし、若李逵だに救ひなば、汝も共に梁山泊に入り、同じく富貴を娯しめ。朱富これを聞て其言に服し、則ち又商議して云く、我輩果して李逵を救ひなば、半途より直に山陣に上るべき間、預め妻子資財を車に載せ、先道中に出して待しめんとて、頓て妻子どもを車に乘せ、則ち兩人の家僕を從はしめ、其夜三更の時に、はや道中に遣して、消息を待たしめけり。已にして朱貴兄弟兩人は、酒肉の内に蒙汗藥を入れ、數箇の人に之を持たしめ、已に半途に打出けるに、時はや五更も過ぎて、天色漸明る處に、忽ち金鼓の聲響きて、二三十の士兵共、李逵を監押し引來る。李雲は一乘の轎に坐して相從ふ。諸の土兵共はや朱富が前に至りしかば、朱富頓て相迎へて云けるは、某老早この所に出て、都頭を待わびぬとて、自ら一盃を捧げ、轎の邊に至りし所に、李都頭急に轎を下てこれを謝して云く、賢弟何ゆゑかく慇懃にこの所まで出迎へ給ふや。朱富が云ふ、某聊か一點の誠を表すのみ、何ぞ敢て謝に當らんや。李雲遂に盃を取て、其半を飲で半を剩しければ、朱富再三强けるに、李雲はもと酒量淺き故、しきりに辭してこれを飲まず。朱富又一塊の肉を取て獻じければ、李雲其慇懃なるを感

索を懸け、曹太公の家に置て、緊しく是を守らしめぬ。知縣是を聞き、早速當縣の都頭李雲と云ふ者を廳前に呼で命じけるは、沂嶺の下の曹太公と云ふ者が家に、黒旋風李逵を捉へ置けるが、汝多く人を引て彼地に趣き、李逵を監押して、縣裡に引來るべし、必ず村里を閙しめて、彼を逃すことなかれ。李雲命を奉て廳前を退き、頓て三十人の土兵を催し、各軍器を持ち、直に曹太公が家を望んで馳來りぬ。此沂水縣は本窄き所なれば、今李都頭馳向て、李逵を縣裡に引渡すこと、諸人皆是を傳へ聞て、其沙汰專らなりしかば、朱貴此消息を聞て大に驚き、舍弟朱富に對して云けるは、黒旋風果して禍を惹引し、已に今活捉れけるに、いかなる計を以て彼を救はんや、宋公明彼が禍を引出さんことを恐れ給ひ、乃ち我を此所に遣して、消息を聞かしめ給ひぬるに、我もし彼を救はずんば、何の面目あつて再び山陣に歸らんや。朱富が云ふ、長兄先我言を聞給へ、彼都頭李雲は、原來武藝の達人にて、四五十個の人たりとも、彼に敵することも能ず、我等兄弟兩人空しく虎の勇みをなすとも、いかんぞよく彼に敵せんや、もし李逵を救はんと思ひ給はゞ、唯智を以て取べし、力を以て取べがらず、幸ひ李雲某を愛し、常に某に鎗棒を指南す、これによつて某一つの計あり、今晩二三十斤の肉と十四五樽の酒とを調へ、其内に蒙汗藥を入れ、我長兄とともに半途に出て、李雲を待ち、彼已に李逵を引て

を以て捉ふべし、其計はかくのごとく〳〵と低言ければ、衆皆大に悦んで、神妙の策なりと同じけり。曹太公は再び家に歸り、李逵に對して云けるは、豪傑先寛りと坐して、酒を酌給へとて、新に酒宴を設けて再び飲酌を催し、諸の獵戸等再應李逵を勸めて、大盞にて飲しめけり。曹太公又李逵に對つて、豪傑此虎を官司に送て、恩賞を乞給はんや。李逵が云ふ、我は是路を急ぐ旅人なれば、恩賞を念とせず、只一剋も急に打立べし。曹太公が云ふ、いかんぞ敢て豪傑に謝せざらん、少剋村中より錢財を湊めて送るべし、彼虎は又自ら官司に獻ぜんと、未だ云も了らざるに、村中の獵戸共、悉く酒肴を携へて、李逵に送り、一々盞を取て相勸む。李逵夢にも計とは知らずして、擅に大飲し、宋江が示しぬる言語全く是を忘れ、約莫二時ばかりにして、李逵大いに爛醉し、前後不覺の體にみえければ、諸の獵戸ども、頓て李逵を扶け、椅子の上に坐せしめ、則ち一筋の大索を以て、恰も粽のごとくに李逵を綁めけり。この時曹太公は、里正等、若干の人を縣裡に馳せて訟へしめ、又李鬼が妻をも、同じく縣裡に遣しけり。知縣此事を聞いて大いに驚き、即ち里正共に命じけるは、黒旋風李逵は、謀叛人の同類なれば、尋常の罪人と一列ならず、必ず鬆せにして、これを逃すべからず。里正等が云ふ、李逵原勇力の豪傑なるゆゑ、若誤つて取迯すこともやあらんと思ひ、未だ縣裡に送らず、まづ千筋の

て、夫の仇を報はんと思ひ、忙はしく家に歸て、父母に告て云けるは、彼虎を殺したる大漢子は、則ち我が夫の仇人、梁山泊の賊黑旋風李逵なり、我が爲に彼を害し、夫の仇を報はしめ給へ。父母是を聞て大に駭き慌て、來つて里正にかくと告しかば、里正是を聞て云けるは、其黑旋風李逵と云ものは、昔日百丈村にて人を打殺し、其後又江州にて官軍を多く殺して、大罪を犯し、江州府より彼を尋ること尤嚴なり、もし彼を捉へたらん者には、三千貫の賞錢を賜らんとなり、彼今當村に來れるこそ幸なれ、暗に曹太公を呼で商議せんと、遂に人を馳せければ、曹太公頓て里正が家に至る。里正則ち曹太公に告て云けるは、今虎を殺したる勇士は、昔日百丈村にて人を殺し、頃日又江州にて罪を犯せし、黑旋風李逵と云ふ者なるよし、今官司より、彼を捉へんとすること嚴重にして、已に三千貫の賞錢をかけて彼を求む、願はくは曹太公宜しく商量し給へ。曹太公がいはく、さては彼勇士は官司の欲捕者なりとや、然らば彼を捉へん事、尤易かるべし、然れども萬一人差をせば、却て禍を惹出すに似たり、先詳に其實を糺し、其後彼を捉ふべし。里正が云ふ、今此所に一人の女あつて能彼を見知れり、此女は原李鬼と云し者が妻なり、前日黑旋風李逵曾て李鬼が家に來つて、酒食を求めけるが、何のゆゑもなく、李鬼を殺して、屋を燒きしとなり。曹太公が云ふ、彼果して黑旋風に違なくば、計

我が輩官司の命を受け、彼虎を殺さんと圖れども、未だこれを得ず、汝假令鐵石の人たりとも、焉ぞよく四つの虎を殺さんや。李逵が云ふ、汝もしこれを信ぜずんば、我汝等を引て死虎を看すべきぞ。獵戸等が云ふ、汝實に虎を殺せしならば、我重く汝を謝せんとて、頓て胡哨を吹しかば、片時の間に五六十の獵戸等、四面八方より馳集り、即ち李逵に隨つて嶺上に上り、遂に洞の邊に至て此處を見るに、果して四つの虎斬殺されてありければ、諸人大に悦び、頓て四つの虎を擡て、村に下りし處に、村中の貴賤悉く出て李逵を迎へ、直に曹太公と云ふ者が館に導いて、宜しく李逵を欵待けり。曹太公乃ち虎を殺したる所以を問しかば、李逵始終詳に語りけるに、諸人是を聞て衆皆大に驚きぬ。曹太公又李逵が姓名を問ひければ、李逵詐つて云ふ、某姓は張にて諱はあらず、人皆我を稱して張大膽と云習はせり。曹太公が云ふ、誠に大膽の勇士なり、若かくの如き大膽にあらずんば、いかんぞよく四つの虎を殺さんやとて、愈々奔走を盡しけり。此時村中の男女盡く曹太公が館に至り、都て群を成し隊を曳て、死虎を見物す。こゝに又李逵に殺されたる彼の假李逵が妻は、彼日此村に逃來つて、父母が家に在けるが、此日諸人とともに、曹太公が館に至つて、虎を見物し、不圖李逵が堂上にあるを見て、大いに驚き、彼虎を殺したる漢子は、正しく我夫を殺したる黑旋風李逵なり、宜しく父母に告

ひ來りしかば、李逵急に腰刀を揮て又母虎が頭を斫劈けり。かゝる處に俄に松の樹の蔭より、一陣の恠風起り、木の葉を吹散して、恰も雨のごとし。李逵忙はしく是を見るに、又一つの大虎跳出て、直に李逵を望んで狂ひかゝる。李逵少しも怕れず、又腰刀を振うて相迎ふ。彼大虎牙を張り爪を舞して跳入し處に、李逵傍に閃と避て、勇力に任せ打つ刀、早くも虎の眉間に斬込しかば、彼虎霹靂の如くに吼り、遂に身揮して死にけり。李逵暫時に四虎を殺し、猶洞の邊に至り、良久しく搜しけるに、漸々氣力疲れしかば、再び彼草庵に入りしが、愁涙に眼も合ず、翌朝洞に至て母が腿、其外骨を拾ひ包袱に裹み、泗洲大聖庵の後の土を穿て、彼骨共を埋め、愁傷に堪難つゝ、嶺を過て馳來りぬる處に、五七人の獵戶都て此所に在て、弓箭を携へけるが忽ち李逵を見て大に驚き、則ち問て云ふ、汝は是山神にはあらずや、いかんぞ只獨此嶺を過りて來りぬるぞ。李逵答て云ふ、我は是旅人なり、昨夜母を携へ此嶺を過りけるに、母再三水を求めぬるゆゑ、我母を嶺上に安置して、溪に下りし處に、豈知らんや、虎來て母を食ひぬ、此故に我洞の邊に尋行きて、兩の小虎と二疋の大虎とを殺しぬ。獵戶等これを聞て、都て信ぜずして云けるは、汝一人の力を以て豈よく四の虎を殺さんや、古の李存行と子路とは、共に是勇力たりといへども、只一つの虎を殺しぬるのみ、此嶺の二疋の大虎は尋常の虎と同じからず、

云ふ、先暫く待給へ、嶺を過て人家ある所に至りなば、茶をも飯をも進すべし。母が云ふ、我今口中に半點の涅なうして、渇に勝がたし、汝唯須らく嶺上に登つて水を求め飲しめよ、然らずんば今我實に渇し死なん。李逵これを聞て、漸嶺上に登り、母を青石の上に卸し置て云けるは、母暫くこゝに在て待給へ、我少刻水を尋ね來らんとて、遂に澗の内に入り水を求んとしけれども、一つの碗瓢もあらざれば、まさにこれをいかゞせんと、東西を望み見るに、山の頂に一つの草庵見えければ、李逵大に悦び、急に跑上りて庵中を見るに、一個の人もあらずして、四方盡く崩敗れ、幸ひ佛前に一つの香爐有しかば、李逵頓てこれを取り、再び溪邊に下つて、一香爐の水を舀取り、又嶺上に登つて、青石の上を見るに、母ははや見えざりけり。李逵是を見て、心甚だ疑ひ能々見れば、血こぼれて道をつたひみえければ、其血の跡を趁うて、一向尋ね行し處に、一つの大なる洞の口に至りて其内を見るに、二つの小虎あつて人の腿を噉ふ。李逵心中に想ひけるは、我此たび母を山陣に邀へて樂ませんと欲し、漸此所まで負來りぬるに、却て虎に噉れけるこそ遺憾なれ、彼小虎が噉ふ人の腿、もし我母の腿にあらずんば、是誰が腿ならんや、我今此虎を殺して、母の仇を報はんとて、忽ち鬚を倒に竪て、遂に彼小虎二疋を斬殺し、又親虎を尋ねて、暫く徘徊しける處に、山坡の邊より一つの母虎大に吼て狂

ち一錠五十兩の大銀を床の上に遺し置て云く、我兄は原家貧うして、終に五十兩の銀を見たることなし、彼再び回りて此銀を見ば、必ず悅んで我を追ふことあらじとて、遂に母を背に負て小路の上に馳行けり。

○黑旋風沂嶺に四の虎を殺す

李達は隣家の人十四五人を催し、再び家に入て、李逵を捉へんと計りし處に、はや母も李逵も見えざりけるに、只床の上に一錠の大銀ありしかば、李達心中に察して云ふ、李逵今此銀を遺したるは、必定梁山泊より人大勢來つて、母を山陣に携へ行しに疑なし、若跡を慕うて追蒐ば、却て一命を害せられん、只よく穩便たるべしとて、衆みな退散したりけり。扨李逵は猶李達が追來ることもや有らんと恐れ、只顧亂山嶮地を擇びて走り行く。已に嶺下に至りて、みすゝ天色晚しかば、李逵心中に思ひけるは、嶺下に至つて見れども、李達いまだ見えざるは、必定追ふ事を休つらん、然れども此處は沂嶺と云て、嶮阻の惡所なれば、夜の更ざる先に一足も早く急がんとて、老母を背に負て、忙はしく嶺上に登り來る。母は目盲たれば、道の險惡も時刻の明闇もさだかに知りがたし。母が云く、我甚だ渴す、水を求めて飲しめんや。李逵が

び給ふまじ、しかじ先これを詐らんにはとて、則ち答て云けるは、我今大いなる幸を得て官職を授れり、此ゆゑに我此度母を邀へん爲自ら家に回りぬ。母是を聞て大に悦んで云く、汝已にかくのごとくんば、莫大の福なり、我敢て汝が請に應ぜんと思ふ、須く兒が歸るを待べしと、未だ云も終らざるに、李達はや歸りければ、李逵則ち拜して云ふ、長兄久しく過ざりしに彌恙なきや。李達大に怒て云く、汝何ゆゑ回りしぞ、又來て我を苦しめんと思ふや。母が云く、李逵今は官職を授つて、我を邀んが爲家に回りぬ、汝卒爾に怒ることなかれ。李達が云ふ、母必ず彼が言を信じ給ふな、彼昔日人を殺して、若干の禍を我に被らしめ、頃日又梁山泊の强盜等と通同して、共に斬罪人を奪ひ取り、大に江州を鬧して、軍民を殺し、今彼は梁山泊に在て、專ら民を害し人を傷ひ、九族滅亡の大罪を犯す、是に依て江州の文書諸國に行はれ、緊しく彼を捜し求む、我又いかなる連累を蒙らんも料りがたきに、汝李逵、早々梁山泊に往きて、再び家に回ることなかれ、汝若遲々するに於ては、我速かに汝を捉へて官司に送るべきぞ。李逵が云く、長兄何ぞ怒り給ふや、只宜しく我に隨つて山陣に上り給へ、我よく長兄を樂しましめん。李達大に怒り、汝何ぞかく大膽なるやとて、忽ち門外に走り出ければ、李逵想道く、彼今門外に出たるは、必然我を捉へんと、友を語らふならん、しかじ早く馳回らんにはとて、則

真李逵斬ニ假李逵

に彼を窺ひ見給へ、若彼漢子黒旋風にもあらば、蒙汗薬にて彼を害し給へと、夫婦議を定ぬる處、李逵此言を聞き大に怒り思ふやう、彼が孝を感じ銀を惠みしに、却て我を害せんと圖る、恩を知らぬ小人ぞとて、跳出唯一足に踢倒し、腰刀を拔て頭を刎ね、内に入てみれば、女は遂に見えず。家には竹籠に舊衣裳と碎銀少し、李鬼が身邊には、與へし銀あり。是を取集め一つつみとし、三升の米飯、熟したれども菜蔬なし、李鬼が腿の肉を割で炙肉とし、是を以て飯を多く吃し、一把の火を放て屋を燒拂ひ、李逵は直に百丈村を望で馳行けり。李逵は遂に百丈村を望で馳行き、暫しの間に我家に至て母を見るに、母は兩眼瞎れて床の上にありしかば、李逵是を恠んで云けるは、李逵囘りぬるに、母は何故眼を開て見給はぬぞ。母是を聞いて半は悅び半は哀みて云けるは、汝久しく異鄕に在て、禍を免れけるが、今日は何ゆゑ又囘りたるや、我汝が事のみ常々悲しみ、兩眼をも已に哭瞎して開く事能ず、我此間貧しきと病との兩苦に逼りし事言はずともこれを知るべし、然れども汝が兄能淸貧を守つて、邪の事をなさぬゆゑ、我頗る心を安んじて是を悅ぶのみ、汝縱ひ何等の艱難を受るとも、必ず非道のことをなして、德を傷ふことなかれ、只知らず汝は今何れの所に在や、宜しく我に告て心を安んぜしめよ。李逵これを聞て心中に思ひけるは、我母は本老實の人なれば、われもし梁山泊に在といはゞ、必定悅

山坂の上に馳上り、時はや巳の上刻に至りしかば、李逵酒食を求んと欲して、左右を見るに、只一間の酒店もなし。百歩ばかり行て遙山の凹に一軒の草屋を見かけ、李逵飛が如くに跑て、遂に其屋に至りし處に、内より一人の女出て問けるは、貴客はいづれより來り給ひしぞ。李逵が云ふ、我は是過路の旅人なり、酒食を求んが爲こゝに至れり、我今一貫文の錢を汝に與ふべければ、我爲に酒食を調んや。彼女が云ふ、此里には酒を求る所なし、飯のみならば、我自らこれを調へて進らすべしとて、頓て内に入ければ、李逵は又家の後に繞出て、此邊を遊覽しける處に、一人の漢子此家を望で歸り來りしかば、李逵急に身を隱し伺ひ見るに、内より又彼女出て云けるは、丈夫は何ゆゑ遲く歸り給ひしぞ。彼漢子が云ふ、今日は不慮に死を免れて再び汝に遇ふなり。女大に驚きて云ふ、常には悦んで回り給ふに、今日は何等の禍に遇給ひて、かくは云給ふぞ。彼漢子が云ふ、今日一人の旅人に遇ひ、必定利を得んと思ひしに、あに料らんや、其旅人は是眞に黑旋風李逵なりしに、我是を知らずして、黑旋風の三字を以て赫しければ、彼大に怒り、忽ち我を踢倒して殺さんとせしゆゑ、我詐つて老母を養はん爲剪徑をなし、大名を穢せりと涙を流し告ければ、彼全く是を信じ、我命を饒すのみならず、一錠十兩の銀を惠みぬ。彼女忽ち低言て云ふ、聲を高め給ふな、今我家に一人の大漢子來て則門前にあり、丈夫暗

つの斧を與へんとて、遂に右の手に持たる斧を奪取て、幾乎に打掛んとせし處に、彼漢子大に慌て告けるは、君もし我を殺し給はゞ、外に又罪なくして死する者あらん。李逵が云ふ、我今汝一人を殺さんに、外に死する者あらんと云はいかん。彼漢子が云ふ、某もと剪徑をなしたることはなけれども、唯恨らくは家貧うして、一人の老母を養ふこと能はざるゆゑ、日頃妄に君の大名を假て人を赫し、專ら其行李を奪取て、老母を養ふ、君もし某を殺し給はゞ、老母は竟に飢死すべし、伏して望らくは一點の仁心を垂給へ、とて潸然として涙を流す。李逵は原人を殺すことを樂とする豪傑なれども、柔弱を助け老衰を憐む心、元來十倍して厚ければ、今彼漢子が詞を聞て、暗に想道く、我偶母を邀取らん爲故郷に回り、もしかく孝道を盡す者を殺さば、天地必ず我を惡み給ふべし、我先是を免さばやとて、則ち彼漢子を扯起して云く、我汝が孝を盡すを感じて、今一命を免すなり、自今以後必ず我姓名を塵すこと勿れ。彼漢子が云ふ、某今日より業を改めて淸淨の營をなし、重て君の大名を汚すべからず。李逵が云ふ、汝かく孝順の心あり、過を知て改めば乃ち汝が福なり、我肯て汝に惠まんとて、一錠十兩の銀取出し、これを與へければ、彼漢子地上に拜伏して大に感謝し、遂に別れて林の内に入にけり。李逵自ら打笑て云く、彼不幸にして我に遇ひ、定て一興を失ひつらんとて、又朴刀を提げ

に、五更の時もはや立て天色曉んとす。李逵又數里の路を過て、前面を望見るに、深林の内より、一人の大漢子跳出て、李逵に向て云ふ、汝此路を過らんには、速に若干の錢を留めて、路を買て過るべし、若買路錢なくば、決して通すまじ。李逵此賊を見るに、雙の手に二つの斧を持て、面の色は墨よりも黒し。李逵大に怒て云ふ、汝何奴なれば、此所に徘徊して剪徑をなすや。彼漢子が云ふ、汝もし我が名を聞かば、忽ち恐懼して、魂を飛し膽を落すべきぞ、我は是豪傑の譽高き、黒旋風李逵と云ふ者也、汝衣を脱で悉くさし置行かば、肯て汝が命は饒さん。李逵是を聞て大いに咲て云ふ、汝はもと何等の奸賊なれば、敢て我が姓名を假するや、黒旋風李逵といふは、乃ち我が事なり、汝等手段を見せん、とて朴刀を揮て斬てかゝる。彼漢子大いに驚き、戰ずして逃んとせし處に、李逵早くも衝入て、地上に踢倒し、則ち胸を踏著怒り罵つて云く、汝妄に我姓名を穢すこと、萬死に當る罪なり。彼漢子が云ふ、某も姓は李たりといへども、眞の黒旋風にあらず、君はもと大名を天下に振ひ給ひて、萬人皆怕をなすゆゑ、某妄に君の大名を假て、乃ち此所に在て剪徑をなす、人皆黒旋風の三字を聞く時は、大に慄きて行李を棄て逃走る、此故に人命を害せずして貨を得るのみ、某が實の姓名は李鬼と云て、此前村に居住す。李逵益怒つて云く、汝擅に二つの斧を使ふはいかん、我今汝に一

とを怕れ給ひ、同鄕の好なればとて、則ち某を此所に馳て汝の消息を探聽しめ給ふ、我は汝より一日遲く山を下りしかども、却て汝より一日先に此所に至れり、汝は又道中に於て何等の碍有て斯遲々し、今日玆に至るや。李逵が云く、宋長兄我が酒を飲む事を堅く制し給ひぬるゆゑ、我道中に於て酒を禁じ、路を緩々と馳て今日此處に著しぬ、汝はもと此村の人なれば、定て此酒店の主も知音ならん、宜しく一樽を具へしめんや、我今日ばかり先禁酒を破るべし。朱貴が云ふ、此酒店は乃我弟朱富が家なりとて、則呼出しまみえしめければ、朱富遂に出て李逵に對面し、早速酒肴を設けて欵待ける。李逵が云ふ、宋長兄再三我に命じ酒を飲べからずと禁め給ひしかども、今日は曲て三盃を酌べしとて、まづ盃を取て飲酌を始め、已に日も晩れ早三更過ぎ四更の時に移りしかば、李逵盃を收しめて云ふ、月明なるに乘じて宜しく百丈村に馳すべし。朱貴が云ふ、汝必ず小路より行く事なかれ、只よく東の大路を過て直に百丈村に至り、速に老母を取て早く山陣に歸り給へとて、再三此事を丁寧にいふにぞ、李逵が云ふ、小路より行く時は道甚近し、何ぞ大路を過らんや。朱貴が云ふ、小道の邊には、所々に險しき山坂有て虎多し、又剪徑する賊あり、しかじ大路の遠きを行んには、是全く無事ならん。李逵が云く、我なんぞ虎と賊とを怕るゝことあらんとて、終に朱貴兄弟に別れ、直に小路より馳ける

四編　卷之三十九

○假李逵の剪徑單人を劫す

黒旋風李逵は老母を邀んため、一旦故郷に向ひ、沂水縣の近くへ來りし處、城の西門の外に一族の人聚りて、榜の文を見てありければ、李逵も同じく諸人の内に雜つて、榜を讀むを聞くに、第一名の正賊は鄆城縣の宋江、第二名の賊は江州の戴宗、第三名の從賊は沂水縣の李逵と讀みければ、李逵これを聞て大いに驚きし處に、忽ち背後に人在て、李逵が肩を打て云けるは、李公此に在て何をなすや。李逵急に頭を囘して、其人を見るに、乃ち是旱地忽律朱貴なり。李逵問て云ふ、汝は又何故此所に至れりや。朱貴が云ふ、汝まづ我に從つて來れとて、兩人同じく西門の外の近村に馳て、一軒の酒店の内に入り、朱貴乃ち李逵を指ざして云ふ、汝いかんぞかく大膽に榜文を看るや、今官司賞錢を出して云ふ、宋江を捉へん者には、一萬貫の錢を賞し、戴宗を捉へん者には、五千貫の錢を賞し、李逵を捉へん者には、四千貫の錢を賞せんとなり、然るに汝諸人と共に榜文を見るは、自ら禍を求るにあらずや、宋長兄一向汝が禍を惹引さんこ

母を邀へんが爲、故郷に回りしかども、彼原烈性の者なるゆゑ、我其和すまじきを怕れ、一箇の人をも跟ざりし、彼もし道中に於て何等の禍を受るとも、我が此所よりは路遠ければ、これを知りがたし、汝は彼と同郷なるに、宜しく勞を辭せずして沂水縣に趣き、暗に彼が消息を探聽んや。朱貴が云ふ、某原沂州沂水縣の產にして、今一人の弟朱富と云ふ者、沂水縣の西門の外に居住せり、彼も又一人の兄李逵と云ふ者あり、家尤貧し、某久しく家弟が音耗をも聞ざりしかば、此度彼所に趣かんこと自ら願ふ所なり。宋江是を聞て、大いに悅び、明朝發足有べしとて、朱貴を山陣に留め、三盃を勸め、且路費を與へければ、諸の頭領に別れ、遂に沂州へ進發せり。扨黑旋風李逵は獨自ら梁山泊を離れ、故郷へと急ぎしかば、不日に沂水縣の界に到著せり。此李逵母を擔來る道に母を虎に噉れ、其身は生擒となり、朱貴に救はるゝ種々、次卷に具なり。

へ、我盡くこれを守るべし。宋江が云ふ、汝今故鄕に回り、老母を邀へんと欲せば、第一には道中にあらん時、必ず酒を飲で自ら禍を取る事なかれ、第二には汝もと短氣急性なるに因て、人を從はしめがたし、只汝一人暗に往て暗に回るべし、第三には汝が常に使ひ慣たる彼二つの斧を携へることなかれ、道中に於て縱ひ何等の事ありとも、自ら能これを忍ぶべし、是乃ち我が汝に示す所の三事なり、知らず是を守るべきや。李逵が云ふ、此三事何ぞ難とせんや、盡く肯てこれを守るべし、卽ち今日發足し、早く往て速に回るべきあひだ、長兄我が爲に心を安じ給へ。晁蓋宋江許若の銀を送りければ、腰刀朴刀を持ち、諸頭領に別れ、沂州沂水縣を望して馳行けり。晁蓋宋江等は衆皆山陣に上て聚義廳に相聚り、各座已に定りしかば、宋江先衆人に對して云けるは、我熟李逵が事を思ふに、這回必然誤を免るまじ、若彼と同鄕の人あらば、早々沂水縣に馳て、消息を探聽しめん。杜遷進み出て云ふ、朱貴は原沂州沂水縣の人にして、李逵とは同鄕なり、知らず彼を遣し給はんや。宋江が云ふ、誠に前日白龍廟にて參會したる時、李逵と朱貴、互に故鄕の好をのべて悅びけるに、我已にこれを忘れたり、速に朱貴を呼で商議すべしとて、一人の小賊を馳ければ、小賊頓て麓に下りて、朱貴に斯と告ければ、朱貴遂に山陣に上つて晁蓋宋江等に見えし處に、宋江先朱貴に對して云ふ、此たび李逵老

宋江、呉用、其外公孫勝を送つて山陣に上らんとする時、黒旋風李逵忽ち聲を放つて大に哭しかば、宋江忙しく問て云ふ、賢弟何ゆゑ流涕するや。李逵哭て云ふ、這は去て父を邀へ、那は去て母を訪ふ、唯我は是虚空より生じぬるや。晁蓋問て云ふ、汝今これをいかん。李逵が云ふ、我實に一人の老母あり、某が兄は家貧き者なれば、いかんぞよく母を優に養はんや、某母を迎へて山陣に至らば、宜しく是を奉養して、朝夕事んことを欲す。晁蓋が云ふ、汝が欲する所乃孝道なり、我數箇の人を從はしめて、老母を山陣に邀取べし。宋江が云ふ、不可なり、李逵は原其性烈火のごとくにして、動もすれば事を惹出す、此度もし故郷に回らば、必然誤あらん、向に江州城に於て、若干の人を殺しぬれば、官司いかんぞ李逵を捜さゞらんや、彼又相貌兇惡にして人皆識認者多し、若萬一半途に於て疎失あらば、誰かあへてこれを助けんや、汝先暫く月日を延引し、世間の靜謐するを待て、此事を圖るべし。李逵大いに焦燥て云ふ、宋長兄何ぞ斯のごとく、公ならざるや、自家の老父は已に山陣に邀て樂ましめ、我老母は只故郷に棄下て苦ましめんとや、願くは事を直に治め給へ。宋江が云ふ、汝妄に我を恨ることなかれ、汝若いよ〳〵急に老母を邀へんと思はゞ、我汝に三つの事を示さんに、宜しくこれを守つて誤らずんば、我汝を放ち遣さん。李逵が云ふ、長兄若示し給はんことあらば、一向これを云給

と斷金の交をなし、若干月日宴を同じうして相娯み、却て故郷のことを忘れたり、某一人の老母蘇州にあり、又一人の老師も同じく彼所にあり、某今日暫く諸頭領に別れ故郷に回り、老母の安否を候ひて、再び山陣に上るべし。晁蓋が云ふ、公孫先生尊母を伺ひ給はんに、某豈これを阻當らんや、然れども只別離に忍びず、今日は且倶に酒宴を樂み給ひ、明日山を下り給へとて、其日は酒を勸め別を惜みけり。翌日公孫勝は旅裝を調へ、諸英雄に別れ山を下りしかば、山陣の頭領共都て金沙灘の邊に送り、又盃を勸めて陽關の曲を歌ひ、晁蓋再三丁寧に云けるは、公孫勝先生此度の歸鄕、我もとこれを阻當べしと思ひしか共、老母を伺ひ給はんとのことなるゆゑ、我敢て其志に違はず、只望らくは四五ヶ月の内、再び光臨を惠み給へ、必ず約を失ひ給ふな。公孫勝が云ふ、某重く諸頭領の愛憐を蒙り、豈敢て約を差へんや、老母と老師とだを伺ひなば、早速歸山すべし。宋江が云ふ、公孫先生は何故尊母を山陣に迎へたまはざるや。公孫勝が云ふ、某が老母は平生只靜なることを好んで、鬧しきことを嫌ふ、是に依て迎へがたし、某が家には猶幸ひ田地あり、故に老母はよく水米の憂を免れぬ、某只一たび老母に見えなば、速に歸山して再び義を全うすべし。晁蓋一盤の金銀を公孫勝に送て餞を表し、陽關の曲已に罷りしかば、公孫勝遂に諸頭領に別れ、蘇州を望んで馳行けり。扨晁蓋、

又此難に遭て、多く長兄に心勞を掛ぬ。晁蓋が云ふ、賢弟心を安んじ給へ、我先に戴宗、杜遷、宋萬、王英、鄭天壽、童威、童猛等に命じて、尊父幷に令弟貴族盡く奪取らしめ、はや山陣に送りぬ。宋江これを聞て大いに悅び、則ち晁蓋を拜謝し、其恩を感じけり。晁蓋諸人に下知して、還道村を馳出で、遂に山陣に至りしかば、吳學究等金沙灘に出迎へ、共に大陣の聚義廳に入て、各座定りける處に、晁蓋頓て宋太公並に宋清を請て、宋江に見えしむ。宋江老父を見て大いに悅び、則ち再拜して云ふ、大人我がゆゑに、多くの禍を蒙り給ひて、嘸苦しみ給ひしならん、願くは不孝の罪を許し給へ。宋太公が云く、我向に趙能趙得に前後の門を緊く守られ、寸步も家を出る事能はず、只手を束て絆めらるゝを待居ける所に、數百人の將卒來つて我が一家を奪ひ取り、直に此所へ携へ來りぬ、汝先に我家の後門に來りし時、趙能兄弟汝を見著け、忙はしく馳て汝が後を慕ひけるが、汝定めて緊く赶れしならん。宋江が云ふ、今日父子再び參會すること、都て晁天王ならびに諸頭領の力なり、宋清、汝宜しく諸豪傑を拜謝せよ、と命じければ、宋清則諸の頭領に見えて、恭しく拜謝しぬ。晁蓋等衆人都て宋太公に見え、遂に牛を殺し馬を宰て、大に飲酬を催しけり。宋江父子三人、此より山陣に在て、悅ぶこと限りなし。一日公孫勝諸頭領に對して云けるは、某幸ひ晁天王に從ひて山陣に上り、諸英雄

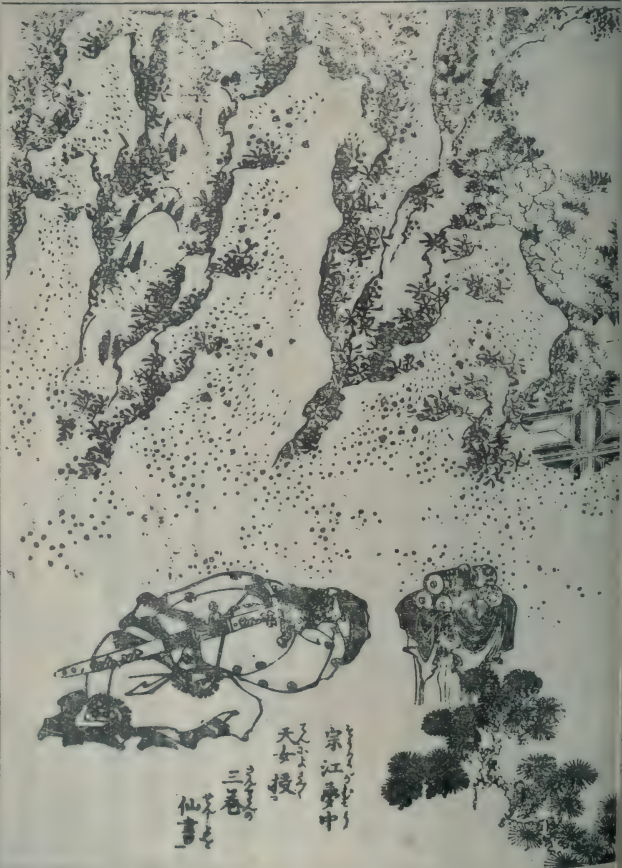
らくは宋長兄ならん。此時宋江走り出て云ふ、諸の賢弟、今日又來て我を救ひ給ふこと、其恩天地と等し、何をもつてよくこれを報ぜんや。六人の豪傑宋江を見て、大いに悦び、長兄恙なきこと何の福かこれに過ぎん、先速に晁天王に告んとて、石勇李立飛がごとくに馳去けり。宋江又劉唐に問て云ふ、賢弟等は何を以て我が此に在る事を知り給ひしや。劉唐がいはく、長兄前日山を下り給ひて後、晁天王と吳軍師頻に心を安んぜず、則ち戴院長を遣し、長兄の消息を求めしむといへども、晁天王猶心を安んぜず、又某等を引て、親自半途まで打出ける處に、幸ひ戴宗が回り來るに逢て、長兄の難に遇給ふ消息を聞き、晁天王大に怒り、忙しく此邊に至て長兄を尋し處に、人在て告けるは、趙家の兩都頭若干の土兵を率して、宋江を還道村に追入ぬと、詳に語りしゆゑ、某等皆晁天王に隨つて還道村に斬て入り、土兵等許多討取り、都頭趙得をも討取り、猶此所まで追來り、思はず長兄に見えたりと、いまだ云も終らざるに、石勇はや晁蓋、花榮、秦明、黃信、薛永、蔣敬、馬麟等を引て來りしかば、李立は又李俊、穆弘、張横、張順、穆春、侯健、蕭讓、金大堅等を引來ぬ。晁蓋先宋江に對して云ふ、我再三賢弟を諫めけれども、我が言を用ひ給はずして、果して禍に遇給へり。宋江が云ふ、某旦暮老父がことのみ、心に掛り坐臥安からず、尤止ことを得ずして、再び故郷に歸り、

天明なば此難を全く脱給ふべし、と云けるに、我宜しく路を求めて逃行んとて、則ち帳幔の外に出で、再び廟門の前に至つて額を見るに、玄女之廟と云四つの金字ありしかば、宋江忽ち拜謝して云く、いかなる神明にやと思ひけるに、原是九天玄女なるよな、我若よく重て天日の面を見ることあらば、必ず來つて廟を新に建立し、聊以て今日の恩を報い奉らんと觀念し、遂に村口を望で馳出ける處に、前面に人音大に響しかば、宋江又甚だ驚き、路傍の木蔭に躲れ伺ひ見るに、數多の士兵忙はしく走來り、各一齊に聲を揚て、神明救ひ給へ、と呼はりけり。其跡より彼趙能息を限りに逃來り、我が輩が一命脱れがたし、と呼はりけるを、宋江是を聞想ふやう、彼等は都て村口を守り專ら我を捉んとこそ圖りけるに、何ゆゑ却て騷動するやと疑ひ在處に、背後より一人の大漢子、奔雷の如く吼狂うて跑來り、奸賊何國へ逃るや、と大音聲に罵つて、遂に趙能が頭を斧を以て砍劈ぬ。宋江彼大漢子を見るに、乃ち是黑旋風李逵なりしかば、是又夢かと疑ひけり。其次に又兩人の豪傑跳來る。一人は鷗鵬、一人は陶宗旺なり。則ち李逵と共に軍器を揮つて士兵共を四面八方に趕散す。其跡より又三人の豪傑馳來る。一人は赤髮鬼劉唐、一人は石將軍石勇、一人は催命判官李立なり。都て六人の豪傑等相聚つて云けるは、士兵等は追散せしといへ共、獨宋長兄の見え給はぬはいかん。石勇が云ふ、木蔭にかくれある人見ゆ、恐

に現れしかば、宋江自ら奇異の想をなしける處に、兩人の女童、後より宋江を水中に推落しぬ。宋江大に駭き阿と一聲呼りけるに、忽ち眠醒め、依然として帳幔の内にあり、是則ち南柯の一夢なり。宋江忙しく起て月色を見るに、時まさに四更に近し、宋江現に袖の内を摸けるに、果して三卷の天書あり。宋江心中に想ひけるは、此夢大いに奇異なり、我が口中にも猶酒の香あり、娘々の授け給ひし四句の天言、都て心にも覺えて一字も忘れず、此廟中には必定神明の靈感なる者在て、現化し給ひぬるに疑ひなし、只知らずいかなる神明にやと、帳幔の内に又一つの錦帳あるを、高く揭て此内を見るに、まだ夜の明ざれば、冥々幽々として見定めがたくぞ有ける。

○宋江明九天玄女に遇ふ

暫時して鷄鳴き烏告て横雲を催す頃、四方の間白ければ、宋江再び錦帳の内を伺ふに、七寶九龍床の上に一人の娘々坐し給ひけるが、夢中に拜せし娘々と半點も差ふ所なし。宋江急にこれを拜謝し、又暗に想ひけるは、這娘々我を呼で星主と稱し給ひぬれば、恐くは是前生の預る所にして、我原等閑の人にあらじ、此三卷の天書必然用ふる所あらん、又彼兩人の女童我に告て、

宋江夢中天女授三巻仙書

となり、國を輔け民を安んじ、邪を去り正きに歸るべし、我又四句の天言を星主に授けん、星主これを記して心に忘るゝことなかれ。又世に漏すことなかれとて、則ち四句の語を誦へて宣はく、

遇レ宿重々喜。逢レ高不二是凶一。北幽南至レ睦。兩處見二奇功一。

宋江已に聞罷り、再拜頓首して是を記せり。娘々宣く、星主は是魔心未だ斷ず、道行未だ完からず、かるがゆゑに玉帝暫く汝を罰して下界に下らしめ給ふ、汝宜しく此三卷の書を熟覽すべし、功成ての後は必ず此書を焚べし、必しも世に遺すべからず、今天凡相隔りしゆゑ、久しく星主を留がたし、汝速に回るべし、他日天帝に見え奉らん時、再び玉樓金闕の上に於て、相會すべしとて、則ち又兩人の青衣女童に命じ、送らしめ給ひしかば、宋江謹んで娘々を拜謝し、遂に玉殿を下つて、兩女童とともに、石橋の邊に至りけるに、兩女童が云ふ、星主先に危急なりし時、若娘々の救ひにあらずんば、終に生捉れ給はんに、娘々星主を助け給ひし故、今已に恙なし、天明なば此難を全く脫れ給ふべし、必ず心を苦しめ給ふことなかれとて、又橋の下を指ざし、宋江に告て云けるは、水中に二つの龍有つて、形を現したり、星主はやく是を見給へ。宋江これを聞て、慌て忙き欄干に凭れ、橋の下を望み見るに、果して二つ龍水面

數箇の女童、玉の簾を高く捲ける處に、一人の娘々玉音を開でのたまはく、星主別來恙なきや。宋江再拜して云ふ、臣は則一箇の庶民なり、何んぞ敢て聖顏を覩奉らんや。娘々の云く、何ぞ必しも大禮に及ばんや、宜しく面を擧て對談し給へ。宋江謹んで命を奉り、乃頭を擡て殿中を見るに、七寶九龍床の上に、一人の娘々坐し給ひけるが、頭には九龍飛鳳の髻を結び、身には金縷絳絹の衣を穿、藍田の玉帶長き裙を曳き、白玉の桂障、彩袖を擧げ、顏は蓮の蕚のごとくにして、天然の眉目、雲鬟を映し、脣は櫻桃に似て、自在の規模雪體を端す。誠に凡女とは見えざりけり。彼娘々宋江に對して宣ひけるは、星主宜しく酒を酌給へとて、小童に命じ給ひければ、一人の女童玉の盃に酒を醼で、宋江に獻ず。宋江恭しく玉盃を接りてこれを飮けるに、此酒香馥郁く、其味甘露の如し。又一人の女童一盤の仙棗を捧て、宋江に進めぬ。彼娘々再び女童に命じて、又一盃を勸め給ひければ、宋江愼んでこれを飮み、酒已に數盃を賜り、娘々女童に命じ宣ひけるは、汝宜しく三卷の天書を携へ出て、星主に與へよ。女童命を奉り、頓て屏風の背後に入り、則ち三卷の天書を携へ出て、宋江に與ふ。宋江拜受して是を袖の內に納め再三頓首して謝し奉る。娘々の云く、我已に三卷の天書を以て星主に授けし間、星主も亦天に替つて道を行ふの主となり、忠を全うし義に仗て臣

ば、其來歷自ら知り給ふべきに、早く我に隨つて來給へとて、再三再四宋江を引て、後殿の傍に至り、兩人の女童又一つの墻門有を指ざして云けるは、宋星主此墻門より入給へとて、則ち宋江を導き門内に入しかば、宋江私に此所に至り、頗る恐入て見るに、星月明朗として香風馥郁たり。宋江想道く、此廟の後にかくの如き風景よき所ありけるよなと、又一里許過ぎて此邊を見るに、左右は皆大なる松樹枝を交へて稠密り、其中央には一つの大路あり。前面には潺潺と澗泉響きて靑石の橋あり。兩邊は都て朱欄干なり。岸の上には奇花異草萋々として、色佳き事一輪の月に映じて麗しく、淸香を一陣の風に寄す。然も茂れる竹柳の翠まで、自ら凡からず、偏に人間の住所とは見えざりけり。宋江益躊躇して思ひけるは、我近く鄆城縣に在しか共、曾てかゝる所あるを聞ず、誠に稀有の光景かなと、讃美感心して已ず。兩人の女童遂に導て宮門の内に入けるに、此所に又一つの大殿あり。殿上には燈燭熒煌き白晝の如し。宋江已に堦の前に至りしかば、數箇の女童出迎へて云けるは、娘々待侘ておはします、星主早く進み給へとて、卽ち宋江を延て大殿の上に至りしかば、宋江覺えず戰慄き、毛髮倒に竪ぬ。彼女童玉簾の内に入て啓奏て云く、宋星主今簾の前に至り給ひぬ。宋江は是を聞て、地上に拜伏し奏しけるは、臣は則ち下濁の庶民にて、聖上を識らず、伏して冀くは憐憫を垂給へ。此時

も見えざりけり。趙能が云く、怪しき哉廟中に風起るはいかん、我是を察するに、我輩再三廟中を閙しむる故、神明の悪み給ふならん、是に依て今此怪風起れり、我輩先廟外に出て、只嚴に村口を守り、夜明なば、再び來つて捜すべしとて、遂に人數を村口に引取けり。宋江は帳幔の内に在て、暗に想ひけるは、我今神明の佑を被りて縲絏の辱めを免れたりといへども、彼輩猶村口を守て有べければ、いかんぞ能此村を逃出んやとて、只顧心を患はしめ、覺えず眼を合せて眠りける處に、夢中又殿の後より人來りしかば、宋江大に驚いてこれを見るに、兩人の青衣童子、逕に帳幔の前に至て、宋江に對して云けるは、我今娘々の命を奉て、星主を迎へんが爲、此所に來れり、星主早々我に從つて尊歩を移し給へ。宋江是を聞しかども、只頭を低て一言も答ざりけり。又彼童子兩人がいはく、娘々今星主を迎へて談話し給はんとなり、宜しく速に來り給へ。宋江彼兩童子が言は鶯の聲燕の語にして、男子の音聲にあらざりしかば、略頭を擡て熟々見るに、果して兩人の女童なり。宋江大に怪しんで問けるは、兩人の女童は實に何れより來り給ふや。女童が云ふ、娘々の命を奉て、星主を宮中に迎ふ。宋江が云く、仙童此に至り給ふは、必定人差ひならん、某は姓は宋、名は江と號す、星主とやらん云人は某が事にあらず。女童曰ふ、我何んぞ人を差へんや、星主今宮中に至て娘々に見え給ひな

ず、又逃出つらん路なきに、知らず何れの所に行しぞと、衆皆奇異の思ひをなしけり。此時一人の土兵が云けるは、彼必定還道村の林の内に入て躱れあらん、此還道村と申は、只一つの道在て出入す、村中には獨高山林木多きのみにして、更に別路なし、彼若果して林の中に入て隠れあらば、恰も籠の内の鳥にして、終に手を束ねて捉はるべし、兩都頭宜しく村口を守り給へ、曉なば早々林の内を捜して活捉べし、彼たとひよく翅を插て天に飛とも、脱るゝこと叶ふまじ。趙能趙得是を聞て然りと同じ、則土兵等を引て、再び廟外に馳出けり。宋江暗にこれを見て、心中に悦び、尙神明を祈て身をも動さず、躱れ居ける處に、一人の土兵廟門の前に在て呼はりけるは、兩都頭再び廟内に入給へ、彼必ず此内に在べし。趙能趙得是を聞き、又衆人と共に、廟前に至て問けるは、汝何を以て彼此内に在んと云や。彼土兵が云く、兩都頭廟門の上を見給へ。二つの手の跡明々として塵の上にあり、彼今廟門を推開て内に入たるに疑ひなし。趙能が云く、汝が言明かなり、再び衆人を引て廟中に入り、四面八方一々仔細に捜しければ、宋江は只命運の拙きことをぞ嘆じけり。土兵ども都て火把をてらし、前後左右捜さずと云ふ所なし。趙能が云ふ、此上は再び帳幔の内に頭を入れ、則ち火把を照し、纔に闖き見んとせし處、忽ち一陣の怪風起つて、若干の火把同時に吹滅しければ、暗々と黒うして、面を對すれど

江是を見て、心中に悔て想ひけるは、我不幸にして晁天王の諫言を容ず、果して今宵禍あり、願はくは皇天憐を垂て、宋江が一命を救ひ給へと、心中に是を禱り、頻に足を飛せ走り行く處に、漸々風薄雲を拂ひ、一輪の明月現れ出しかば、宋江月の光に乘じ、此所を見るに、都て峨々たる高山なり。山の下四方澗連り水深して其中に只一筋の道あり。此所は還道村と云ふ所なり。宋江直に村中に馳入て、身を躱さん所を尋ね求るに、林の内に一つの古廟ありしかば、宋江急に廟門を推開いて進入り、前殿後殿偏く繞り、隱れ所を求めしか共、更に身を安んずべき所もなく、彌心を驚かしめける處に、外面に人在て、多くは此廟内に躱れしならん、こゝを搜せ、と呼はるを聞に、是鄆城縣の新都頭趙能趙得が聲なりしかば、宋江大に膽を消し、廟神の前に掛たる帳幔の内に入て躱れけり。此時兄弟の都頭、趙能趙得自ら四五十人を引て、廟中に進み入り、火把餘多揮照させて此彼搜しければ、宋江心中に神を禱りていはく、望らくは神明某が一命を救ひ給へ、と合掌しけるに、諸人都て廟神の前を過て、帳幔の内を見る者、一人もなかりしかば、宋江これを悅び、暗に息を吻と續ける處に、彼趙得自ら火把を揮つて、帳幔の内を照し見るに、忽ち火把の火飛で、趙得が眼の上に落ければ、趙得大に驚いて、覺えず火把を地上に棄て、再び帳外に走り出で、卽ち衆人に對して云けるは、彼かつて廟中にあら

扨も宋江は鄆城縣を望で進發し、不日に宋家村の近邊に至り、其夜は先客屋を求めて一宿し、翌日未明に宋家村の十里前なる林の内に入て其日の晩るゝを待ち、漸々紅日西山に落て、はや初更の時も近づきしかば、宋江暗に林の内を出て、逕に宋太公が家の後門に至て、ほと〳〵と敲きしに、宋淸已に門を開て走り出、卽ち宋江を一目見て大に驚き、長兄は何故、家に回り給ふや。宋江が云く、我此度來りしは、老父と汝とを迎へ取んが爲なり。宋淸が云ふ、長兄向に、江州城にて犯し給ひし罪の次第、はや此所の人都てこれを知りぬ、頃日知縣相公常に兩人の都頭を我家に遣し、緊く前後の門を守らしめ、只文書の到來するを待て、我輩父子を捉んとの事なり。是に依て我等父子寸步も家を出ること能はず、近日父子同じく入牢せんこと必定なり、長兄再び梁山泊に回り給ひ、速に諸頭領と共に發向在て、老父幷に某が一命を救ひ給へ、必ず疑惑遲滯して自ら誤ち給ふことなかれ。宋江これを聞て大におどろき、此より直に身を回して再び道中に馳出で、唯足に信せて、梁山泊へと走り行く。此夜月色朦朧にして路分明ならざれば、宋江益心を忙はしめ、一向急に走りて一時許馳ける處に、忽ち背後に數十人の聲在て、大いに呼はりしかば、宋江頭を回してこれを見るに、一簇火把を揮照して、諸人齊しく高聲に呼つて云く、宋江走ることなかれ、早く手を束て綁に就け。宋

急に老父を奪取て、共に山陣に上るべし、知らず諸兄弟これを許し給ふべきや。晁蓋が云く、賢弟の欲し給ふ所、則ち人倫の大事にして、生を養ひ死を送るは人の子の道なれば、今尊父を迎へ山陣に來り給はんこと大いに可なり、然れども只恨らくは諸兄弟連日辛苦して、陣中の人馬いまだ定らず、猶三日を延引し給はゞ、人馬を起して、倶に鄆城縣に發向し、終に尊父を奪ひ取て、賢弟の所望を准ふべし。宋江が云く、數日延引せんは易けれども、只恐らくは朝廷より文書下つて、はや老父を擒とすべければ、日を延て遲々せんこと能ふまじ、殊に人馬を引て發向せば、却て事を誤つべし、只某一人暗に馳往き、家弟宋清と共に老父を奪ひ取て、早速山陣に回らん、然らば是を知る人無うして、事彌穩かなるべし。晁蓋が云く、賢弟の高見其理あるに似たれども、若萬一途中に誤あらば、誰か肯て賢弟を救ふ人あらんや、尚自ら三思を加へ是を察し給へ。宋江が云く、父の爲に死なば何の怨あらん、只顧遲疑せんやとて、卽日發足の用意を調へし處に、晁蓋等色々留れども、宋江更に留らず、頓て諸頭領に別れ山を下りしかば、晁蓋以下の豪傑共、悉く金沙灘まで送りて、遂に袂を分ちけり。

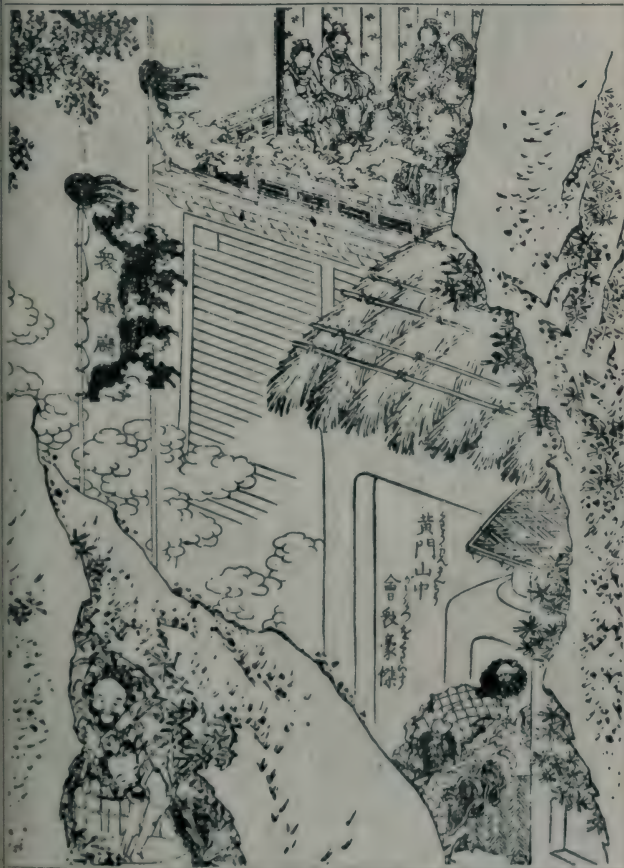
○還道村にて三卷の天書を受く

江兄は小皇帝となり給ひ、吳先生は宰相となり、公孫道士は國師となり、某等は都て將軍となり、速に東京の位を奪うて彼所に移り、倶に歡樂榮花を保たば、必定此所にあらんよりは、大いに娛しかるべし。戴宗聞もあへずこれを責て云く、汝何ぞ擅に亂言をいふや、汝今日已に此所に至る上は、昨日江州に在し時とは同じからず、すべからく兩長兄の命令を承つて、諸事これを謹愼べし、再び言語を亂に申すことなかれ、若我が諫言を容ひずんば、則ち兩長兄の命を受て、汝が首を刎て以て衆人に警さん。李逵是を聞て云ふ、長兄果して我頭を刎給はば、いづれの時か重新に又頭を生ぜんや、先宜しく酒を飲置べしとて、自ら大盞を取て酌ければ、諸〳〵の豪傑共一度に咄と一咲を催しけり。晁蓋心中に今日の會を悅ぶこと限りなく、則ち金銀を分て小賊共に恩賞を行ひ、猶且山前山後に若干の房屋を作りて、諸頭領の眷屬等を住せしめ、此より山陣に光を增す事大いにして、威を遠近に振ひけり。一日宋江諸頭領に對して云けるは、我幸に命を脫れ、山陣に上り、毎日諸兄弟と共に飮宴をなし、甚だ樂しといへ共、只恨らくは老父某が禍を蒙ることあらん、某既に大罪を犯したることなれば、必定朝廷より鄆城縣に文書下りて、某一家を捕ふべし、恐らくは老父が命も旦夕を保がたからんと思へば、我常に是を念うて、寸志を安んずる遑あらず、是に因て先暫く山陣を離れて故鄕に回り、

江第二位、呉用第三位、公孫勝第四位に坐しければ、宋江又諸人に對して云ふ、今日は先舊頭領は左の主位に坐し給へ、新頭領は右の客位に坐し給へ、後日其功の輕重を論じて、方によく座位を定むべし。諸頭領これを聞て然りと同じ、乃ち左の方の一連には、林冲、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜遷、宋萬、朱貴、白勝等坐しければ、右の方の一連は、花榮、秦明、黄信、戴宗、李逵、李俊、穆弘、張横、張順、呂方、郭盛、蕭讓、王英、薛永、金大堅、穆春、李立、歐鵬、蔣敬、童威、童猛、馬麟、石勇、侯健、陶宗旺等坐しにけり。總て四十人の豪傑左右に座を列ね、大に樂を奏し飮酌を催しぬ。宋江又諸頭領に對して語りけるは、蔡九知府京の童子等が歌ふ謠言を以て、黄文炳に告知せけるに、黄文炳亂に其謠言の意を解て、則ち宋江の二字に應ぜしめ、某を謀反人にしけるゆゑ、知府急に某を捉へ、又戴院長が携へたる返簡の、眞ならざることも、原知府これを知らざりしかども、又かの黄文炳圖書の上に蔡太師が諱の字あるを見て、則ちこれを假たる返簡と知り、再三知府を攛掇て、先某と戴院長とを殺さしめんと欲しぬ、もし諸頭領の救ひにあらずんば、焉んぞ能今日に至らんや。李逵進み出て云けるは、好哉長兄は天上の言語に應じ給ふよな、已に斯のごとくんば、彌多く人馬を聚めて、謀叛を企給ふとも、何の不可なることかあらん、乃ち晁蓋兄は大皇帝となり給ひ、宋

傑と義を結び、今日長兄に從つて山陣に趣くこと、萬千の幸なり、向後いよく某と長兄とは、必ず生死を同じうすべしと談話し、互に興を催し、路を行ける程に、覺えずはや朱貴が店に至り、此時山陣を守りて留主居したる、四人の頭領吳用、公孫勝、林冲、秦明等は、新參の頭領蕭讓、金大堅と倶に朱貴宋萬が注進を聞き、比日先達て朱貴が店に至り、專ら待侘し處へ、晁蓋宋江幷に諸頭領衆皆恙なく至れるを見て、大に悅び、忙しく是を迎へ、直に金沙灘に至り、金を鳴し鼓を擂て、共に山陣に上り、則聚義廳に於て酒宴を設け、香花を備へ、宜しく歸山の賀を表しけり。晁蓋此時山陣の主を、再三宋江に讓りて、第一位の座に請ければ、宋江大に辭して云く、長兄何故かゝる事を云ひ給ふや、此度某已に殺されんとせしを、諸頭領に救はれ、此恩報じがたきことを、某深く憂とするに、いかんぞよく第一位の座を犯して、山陣の主たらんや、長兄もし再三是を讓り給はゞ、某自ら死をなすべし。晁蓋が云く、當初某等七人、もし賢弟の救を蒙らずんば、いかんぞよく今日の福あらんや、賢弟は原來山陣の爲には恩主なり、若し賢弟第一位の座に卽給はずんば、誰かあへて此座を犯さんや、必ずこれを辭して、我が心を煩はしめ給ふな。宋江が云く、長兄は齡も已に某に二十歲の長なり、某もし一座に就ば、自らこれを羞殺すべしとて、頻に辭し、遂に晁蓋を第一位に坐せしめ、宋

號す。又一人姓は陶、名に宋旺、舊光州の人にて、綽名を九尾龜と號す。此四人の頭領宋江を迎へて談話いまだ終らざるに、小賊等はや酒を携へ來て、先晁蓋宋江に獻じ、次に花榮戴宗李逵に獻じ、衆人都て相見え、快く酒を酌で、一時ばかり過しける處に、第二行の頭領已に至り、同じく相見え、盃已に數遍巡りしかば、四人の頭領先二行の頭領十人を請て、黄門山の陣中に至り、則ち聚義廳に於て、美々しく酒宴を設て欵待けり。又一時餘過ける處に、第三行の頭領も同く此處に至り、共に宴上に列りける。宋江先四人の豪傑に對して云けるは、我今義兄晁天王を賴んで、梁山泊に上り、ともに大義を結んで死生を同じうせんと欲す、知らず足下等四人も此所を棄て、同じく梁山泊の大陣に入り、盟を誓ひ給はんや。四人の頭領大いに悦んで云けるは、若兩人の長兄、某等を棄給はずんば、共に大陣に伺候して、犬馬の勞を施すべし。晁蓋宋江喜悅斜ならずして云く、賢弟等已に我輩を助けて、梁山泊に來らんとならば、早々此所を收捨て發足あるべしとて、其日全く事を調へしむる處に、四行五行の頭領幷に總人數皆到著せしかば、一同に此山陣に一宿し、翌日晁蓋宋江再び備を列ね進發す。彼四人の頭領は手下の小賊五百餘人を領し、第六行に備へて進發す。宋江は又四人の豪傑を得て、心中大いに悅び、則ち轡を並べ、語りけるは、某異鄕に流落し、數度恐懼を受しといへども、許多の豪

聚儀廳
黄門山中
會數豪傑

て、馬より跳下り、則ち地上に拜伏して云けるは、某則ち宋江と云ふ者なり、向に惡人等が故に、害せられんとせし處に、諸の豪傑に救はれて、一命を脫れたり、某曾て足下等を犯したることなし、只望むらくは仁慈を垂給ひて、某幷に諸人の命を饒し給へ、若然らば身を終るまで此恩を忘るまじ。四人の頭領是を聞き、慌て忙き馬を滾び下り、再三再四宋江を再拜して慇懃に云けるは、某四人久しく長兄の大名を聞き及び、旦暮渴想の思に逼りしか共、緣熟せずして、未だ尊顏を拜せざりけり、前日江州に於て入牢し給ひぬと聞しゆゑ、急に人數を馳牢を劫さんと圖りしか共、未だ虛實を分明に知らず、先一人の山兵を江州に馳て、動靜を伺はせけるに、梁山泊より餘多の豪傑來つて、押司を奪取り、剩へ無爲軍を犯し、黃文炳一家を燒打せりと告けるゆゑ、某四人大に悅び、則此所に出迎へて、尊顏を拜せんとするに、果して今日長兄を觀奉ること、莫大の幸なり、願くは長兄諸の豪傑とともに、某等が山陣に駕を枉給はゞ、聊村酒を具へて、一盃を獻ずべし。宋江大に感悅し、則四人の頭領を扶起し對面し、其姓名を問けるに、一人は姓は歐、名は鵬、原黃州の人にて、綽名を摩雲金翅と號す。又一人姓は蔣、名は敬、本湖南潭州の人にて、綽名を神算子と號す。又一人は姓は馬、名は麟、元南京建康の人にて、綽名を鐵笛仙と

山泊に上るべし。宋江是を聞て大に悦び、此日朱貴、宋萬兩人を、山陣に回らしめて、呉學究等に斯と告させ、翌日諸頭領を手分し、五行に備へて進發す。第一行は晁蓋、宋江、花榮、戴宗、李逵なり。第二行は劉唐、杜遷、石勇、薛永、侯健等なり。第三行は李俊、李立、呂方、郭盛、童威、童猛等なり。第四行は黃信、張橫、張順、阮小二、阮小五、阮小七等なり。第五行は燕順、王英、穆弘、穆春、鄭天壽、白勝等なり。總て二十八人の豪傑、一千餘人を引て、次第を序で首尾を連ね、最嚴に備へけり。穆弘は數乘の車に、父穆太公幷に眷族其外家財等を載せ、則ち一把の火を放つて、家を燒拂ひ、五行の人馬已に打立ち、其間僅二十里を隔て押行ける。已に道を經る事三日に及び、黃門山と云ふ處に至り、宋江則ち晁蓋に對して云けるは、此山の形勢究て恠惡なり、恐らくは大勢の人馬、山陣を設けて在る事もやあらんずれば、宜しく後軍の至るを待て、一同に過るべし、と云も終らざるに、山上に金鼓の聲大いに響しかば、晁蓋宋江等しく駭き、各軍器を持て、近く向ひける處に、山坂の邊より三五百の小賊閃き出で、當先に四人の頭領、各軍器を揮て呼はり云けるは、汝等大いに江州を鬧し、無爲軍を襲ひ、若干の官軍百姓等を殺して、今梁山泊に回らんと欲するや、我輩四人此所に出て汝等を待つ事久し、只宋江一人を留めて、我輩に與へなば、其餘の者共は都て一命を饒すべし。宋江是を聞

諸人に對して云けるは、某不才たりといへ共、幸に天下の豪傑と交を結び、向にも已に晁天王ならびに諸頭領の爲に、再三山陣に留られしかども、父の命に背んことを忍びずして、遂に配所に趣きける處に、想はず酒興に乘じて亂言を壁の上に書き、禍戴宗に及んで、兩人已に害せられんとせし處に、料らず又諸頭領に助けられて、仇人黃文炳を殺し、心腹の冤を雪ぬ、然れども今日かくのごとき大罪を犯しぬる上は、必定朝廷に奏聞して、某等を捉へんと圖るべし、某今晁天王等十七人の頭領に從つて梁山泊に上るべき間、此外の賢弟等も某と倶に山陣に入んと想ふ人は、宜く用意を調へて來り給へ、若又某に從ふまじきと思ふ人あらば、其所存を語り給へ、只恐らくは若梁山泊に來り給はずんば、後必ず官司に捉はれ、禍を蒙り給ふことあらん、願くは明かにこれを察し給へ。李逵これを聞て躍出で云けるは、我輩悉く長兄に從つて山陣に上るべし、若一人にても從はざる人あらば、我此斧を以て頭を砍劈べし。宋江李逵を責て云く、汝何ぞ不禮の言をいふや、諸賢弟全く心傾けて歸服する時は、方に同往すべし、若然らざるを、いかんぞ强て誘引せんや。此時諸人議論して云けるは、今已に多くの官軍を殺し、兩所の州郡を鬧しめければ、賊官等必ず朝廷に奏聞して、我輩を捉へんとすべし、某等今若長兄に從はずんば、何れの所に馳て身を藏さんや、只宜しく長兄と共に、梁

に聖賢の書を讀つらん、人を殺さんとすれば、人又汝を殺さん事、書を見ざるものも、天道自然の理は辨あり、汝いかなる恨あつて我と戴宗を殺さんとするや、汝が兄黄文燁は、汝とは同胞の兄弟なれども、專らよく危を助け貧を救ひ、善を好んで惡をにくむゆゑ、人皆黄老佛と稱すと聞く、よつて昨夜黄文燁が家は毛頭犯すことなし、汝は專ら己に勝れる者を妬み、己に劣る者を弄し、唯よく惡を好んで善を惡むゆゑ、人汝を黄蜂刺と呼にあらずや、我今日汝を殺し、萬人の爲に一害を除べきぞ、尤又近日蔡九が首も刎んとす、汝速に分說ありや。黄文炳告て云ふ、某今に至て其非を知れり、早く首を刎給へ。晁蓋大いに怒て、我汝が首を刎ざらんや、汝早く今日の非を知らば災を免れんに、一向人を害せんとして、天罰早くも至るものかなと、牙を咬で罵りけり。宋江諸人に向つて云けるは、諸賢弟の内に、誰にても早く手を下し、此賊を殺し給へ。黑旋風李逵進み出て、我肯て長兄の爲に此賊を殺さん。晁蓋が云く、汝是を殺さば彌可ならん、速に手を下し、我が賢弟宋押司の寃を雪ぐべし。此時李逵右の手に刀を揮ひ、左の手にては黄文炳を指ざし、罵つて云けるは、汝奸賊蔡九知府が後堂に在て、再三知府を攛掇勸め、我が長兄を害せんと圖りけるが、今日却て汝が殺さるゝは、則天のなし給ふ所なりとて、竟に頭を刎しかば、諸の頭領都て宋江に對して、喜びを賀しにけり。宋江又

宗江命李逵
令斬黄文炳

はしく水中に跳入けるに、水底より又一人の漢子現れ出で、黄文炳を抱き上て船の内へ投入しかば、舟の上の男雙手を擧てこれを揪へ、頓て高手小手に絆めけり。今水底より現れ出て、黄文炳を抱上たる漢子は、便ち是浪裡白跳張順なり。又舟の上より鈎索を投て、官船を搭住たる漢子は、則是混江龍李俊なり。此時官船の水主共は、大いに怕れ盡く桄に跪いて、一命を免し給へ、と詫しかば、李俊が云く、怨なき汝等、今は殺すまじき間、早く江州へ回り、梁山泊の豪傑等が武勇を蔡九知府に告よ、我輩近々江州に攻寄て、知府が首を刎んこと日あらじ、百萬の勢を以て鐵城に籠るとも、我輩が眼より見れば、鼠を獵より易し、頭を洗て待と云聞よ。水主等命を免され際なく悅び、後をも見ずして漕去けり。李俊張順は黄文炳を活捉て心中大に喜び、遂に舟を回して穆弘が館へと急しかば、片時の間に岸邊に至りし處に、諸豪傑これを迎へ、同じく穆弘が家の草堂の内に入て、衆皆左右に列り坐せしかば、晁蓋宋江頓て黄文炳を引出させて、柳の樹に綁著け、これを肴となし、一盃酌べしとて、上は晁蓋、下は白勝に至るまで、總て三十人の豪傑、一々盃を擧て飲酒を催しけり。宋江先黄文炳を見て大に罵て云く、汝奸賊、我と汝とは往日寃もなく近日仇もなし、然るに何故再三再四知府を諫めて、我を害せんとは圖りしぞ、我又酒興に反詩を吟じたりとて、何ぞ汝が關る事あらんや、汝も已

て、忙しく岸に上り、共に諸人を接へて船に乘しめしかば、宋江晁蓋ならびに諸頭領、只黄文炳に遇ざりしことを恨み、各牙を嚙み、直に穆弘が館へと、舟を急ぎ漕去けり。此夜江州城には無爲軍に火の起りしを見て、諸人騒動し、遂に蔡九知府に斯と告し處に、彼黄文炳は此時知府と共に事を議して在ぬるが、無爲軍に祝融災ありと聞て、大に驚き知府に申て、某急に回りて火を救はんとす、願くは一艘の官船を以て、某を送らしめ給へ。知府これを聞て理なりと、船を申付て送せければ、黄文炳急に取乘り、頓て江面に出で、無爲軍を望み見けるに、火勢盛にして、紅焔天に沖る。黄文炳あわて驚ける所に、遥に一艘の小舟漕來り、漸漸黄文炳が船に近づきしかば、水手罵つて云く、汝が其船何ぞ官船を避ざるや。彼小舟の上に一人の大漢子進み出て云く、某等は出火の次第を江州城へ注進する舟なり、宜しく怒を息給へ。黄文炳是を聞き、忙しく船頭に出て問けるは、出火は何れの城門に當れりや。彼大漢子答て云く、城の北門に當れり、黄文炳が家は梁山泊の頭領等に燒拂はれ、一家の男女悉く斬殺され、金銀財寳都て奪ひ去れたり、笑止のことかなと。黄文炳未だ聞も了らず、這はいかに、我家を燒れけるかと悔ければ、彼漢子これを聞忽ち鈎索を投て、黄文炳が船を搭住め、則ち身を躍せ官船に跳乘し所に、黄文炳は本奸智多きものなれば、はや禍あることを知て、忙

四編 卷之三十八

○張順黃文炳を活捉る

宋江が計圖に當り、黃文炳が一家を斬盡し、放し火は熾に四方に延るゆゑ、百姓馳集り、火を救はんとする時、石勇杜遷大に呼つて、汝百姓等無益の所に來ることなかれ、我輩梁山泊の豪傑、數千人來て黃文炳一家を殺し、宋江戴宗が爲に仇を報うまでなり、汝等良民が干る事にあらず、早く去て禍を避よ、必ず出て事を招くべからず。百姓等是を聞き半は信じ半は疑ひ、只顧猶豫しける處に、黑旋風李逵雙手に斧を輪し狂ひ來りしかば、百姓共これを見て、大に膽を消し、盡く先を爭ひ逃散けり。又副陣の方より若干の軍士來て、火を救んとしける處に、花榮が箭に一人射殺され、諸人齊しく心を驚かし、急に回して四面八方へ退きけり。已にして薛永、黃文炳が家に火を放て燒立けるに、黑煙空に走せ地に匝き、紅燄天に飛て、片時の間に前後左右都て灰燼と成ぬ。此時石勇、杜遷、李逵三人は、遂に城門を開きければ、諸軍勢半は城門より走り出で、半は城上より跳出けり。張横三阮兩童等六人は、城中に火の起しを見

問て、王公と云ふ者死し、其子を叉門者となして、未だ年若なるに何んぞ匙あらんと云ふ、其趣小身者の屋鋪か寺院の把門の體に思はる。蔡太師は宋の宰相なれば、日本に比せば何れ百餘萬石の分限なるべし。通鑑の類に出る所、其外大臣の身上の趣、中々輕少の事にあらず。然るに水滸傳は支那人の作に有ながら、かゝる不相當のこと有や、宰相の把門ならば大勢代るゞ勤むべきことなり。又黄文炳を亡さんとて、宋江が軍配に無爲軍の庶民に罪なければ、一人も傷ふまじきとは、眞に豪傑の指揮と云べし。然るに霹靂火秦明を清風山に留めんとて、餘多の罪なき良民を屠り、秦明が眷屬を殺させしは、いかなる不仁の計ひぞや。

ち薛永に火を放させ、己は黄文炳が門を敲て、大音聲に呼はりけるは、隣家に出火せり、早く門を開て家財等を運び搬させ給へ、と云も終らざるに、家内の男女はや火の光を見て、大いに駭き慌て立出で、門を開きける所に、晁蓋宋江等喊き叫んで、家内に斬て入りしかば、諸の豪傑共相續いて斬て入り、一人を見れば一人を殺し、二人に遇へば二人を殺し、黄文炳が眷屬すべて四五十、暫時の間に斬盡しけり。然れども獨黄文炳は見えざりけり。諸の豪傑共家内を捜し、金銀珠玉盡く是を取り、一齊に喊の聲を揚げ城上を望んで馳來る。扨石勇杜遷兩人は火の起りたるを見て、各刀を揮うて城門を守る軍士を斬殺し、またく前後を顧て、猶人も有かと伺ひける所に、當地の百姓等手毎に水桶梯子等を持て火を救はんと跑來る、騷動大方ならざりけり。黄文炳が做行は次卷を見て知るべし。

按に此卷に蕭讓金大堅を誑く詞に岳廟と云は、いにしへの聖王天下の鎭守たるべき山山、齊の國の泰山をはじめ、東岳西岳南岳北岳中岳の五つを定め、天子自ら其地に臨で旅をなす。此五岳は道隔りたる故、後世には五所の靈を一所に封じこめ、勸請して諸州諸縣に有て岳廟と稱す、則是山の神なり。又白龍神の廟は、大江大川の水邊に水神の廟を勸請せしなり。又論者の云く、戴宗を糺問する蔡九知府が詞に、父太師が家の門者を

を回して、再び岸邊に來り、則ち報じて云けるは、城内には人音靜にして、何の用意もなし、宜しく速に計を行ひ給へ。宋江これを聞て大に悦び、則ち諸人に下知して、船の上に積し蘆葦を都て岸の上に運ばしめける時、一更の左側なり。宋江又、張横、三阮、兩童等を船に留めて、賢弟等六人は、宜しく船を守り、城中に火の手上るを看なば、早速岸に登て我輩を迎べし、と約を定めしかば、其餘の頭領は各手中に軍器を挈り、城邊に至て城を望み見るに、白勝已に此所に在て、諸人に對して云けるは、對面に露れ見ゆる大家は、則ち黄文炳が居宅なり。宋江問て云く、薛永、侯健は、何れの所に有や。白勝が云く、彼の兩人は黄文炳が宅へ忍び入んとて、はや行けるが、只長兄の至り給ふを待て、計を行はんと欲す。宋江又問て云く、汝は石勇杜遷には遇ざりしや。白勝が云く、彼兩人は城門の邊に在て相候ふ。宋江是を聞て、則ち諸の豪傑と共に、城中に忍び入り、直に黄文炳が家の前に至りし處に、侯健已に簷の下に在しかば、宋江近く呼で低言けるは、汝急に菜園の門を開て、軍士を入しめ、宜しく蘆葦等を其内に積上させ、薛永に火を求しめ、蘆葦に移し、則ち黄文炳が門を敲て、隣家に出火ありと呼はるべし、彼若駭いて門を開かば、我自ら計を行ふべしとて、豪傑等を分遣し左右を守らしめければ、侯健ははや去て菜園の門を開き、軍士等を入しめ、蘆葦を其内に高く積上げ、則

傷ふことあるべからず、今彼所に馳行んには、我一つの計あり、諸頭領我が爲にこれを行ひ給へ。豪傑等答て云く、長兄すでに計あらば、速にこれを示し給へ。宋江が云ふ、五十束の葦を五艘の大船に積て、張横、三阮、童威等を乘しめ、又二艘の小船に、李俊、張順等を乘しめて、計かくのごとく〳〵行はゞ可ならん。諸豪傑これを聞て然りと同じければ、宋江又侯健、薛永、白勝等に計を授け、無爲軍の城中に遣して、三更の時に計を行はしめ、又石勇、杜遷を城門の左に伏置て、火の起を相圖と定めて、計を行はしめ、事已に全く調りしかば、諸の豪傑頓て裝束を改め、各身には軍器を帶し、先晁蓋、宋江、花榮等は、童威が船に乘り、燕順、王英、鄭天壽等は張横が船に乘り、劉唐、黃信等は阮小二が船に乘り、呂方、郭盛、李立等は阮小五が舟に乘り、穆春、穆弘、李逵等は阮小七が舟に乘り、李俊、張順兩人は、只江面に往來して救應をなさしめ、朱貴、宋萬は、穆太公が館に留めて、江州の消息を聞しめ、分撥已に定りしかば、其夜五艘の舟一齊に搖出し、逕に無爲軍を望んで進み來る。此時七月の末にて、夜涼しく風靜に、月白く江清く、水の影山の光、上下一樣の碧を見る。已にして初更の前後に、大小の船盡く無爲軍の江中に入て岸邊に至り、蘆葦深き所を擇んで、舟を一行に纜ぎし處に、童猛は哨のため、獨快舟を漕で先城下に至りけるが、此時忙はしく船

ち又侯健に對して、黄文炳がことを問ければ、侯健答ていはく、彼に同胞の兄黄文燁と云ふ者あり、此人は常に善事を好み、あるひは橋を修理し、路を造り補ひ、あるひは貧きを扶持し、困るを救ひ、專らよく仁慈を行ふをもつて、人皆彼を稱して黄老佛と綽名せり、又彼弟黄文炳は、唯人を害することを好み、己に勝たる者を妬み、己に劣たる者を傷ひ、專ら惡事を行ふ、この故に人皆彼を稱して黄蜂刺と綽名せり、前日黄文炳知府を諫て、押司を害せんと圖りぬることを、兄黄文燁是を聞て大に憂ひ、必ず報いあるべしと悲みける、黄文炳果して自ら禍を招ぬ、此兩日は江州の貴賤、都て押司の事のみ沙汰して、衆皆怕れける故、黄文炳是を聞ていよいよ心中に襲れ慄き、昨夜江州に趣いて、蔡九知府を訪ひけるが、何等のことを議するにや、未だ家に回らざるとなり。宋江此時諸頭領に向ひ云けるは、黄文炳が動靜已に聞知ぬ、いよ〳〵各位我が爲に彼を殺して仇を報じ給るべきや。諸豪傑一同に答て云けるは、某等死を捨て馳向ひ、終に黄文炳を殺して、長兄の仇を報じ寃を雪ぐべし。宋江又云く、無爲軍の百姓等は、我に仇をなさゞりし者なれば、必ず一人も害すべからず、又黄文炳が兄黄文燁は、專ら仁德を行ふ人なれば、必ずこれを傷ふべからず、若これを傷ふことあらば、天下の人皆我輩が不仁なることを罵るべし、若無爲軍に至りなば、黄文炳が家内の輩より外一個の人をも害し

望んで馳行けり。宋江は穆弘が家に逗留して、已に諸豪傑と商議して、無爲軍を攻る用意を催しけり。扨薛永は遂に無爲軍に至て、第五日の午の上刻に再び穆弘が家に回り、即ち一個の人を誘引して晁蓋宋江に見えしむ。宋江先問て云く、此豪傑は誰なるぞや。薛永答へて云く、這人姓は侯、名は健と號して、本洪都の人なり、當世第一裁縫の上手にて、尤能針を飛せ線を走らしむ、況や鎗棒をも能使ふ、乃ち某が門弟なり、彼原來身體瘦たるに依て、人皆通臂猿侯健と呼り、則ち無爲軍の黃文炳が家に央れて衣服を縫て在しを、誘引して此所に至れり。宋江大に悅び、即ち江州の消息幷に無爲軍の路徑を問ければ、薛永答へて云く、今蔡九知府我輩に討れたる官軍を記たりけるに、五百有餘人にして、疵を被りし軍卒は其數を知らずとなり、是に因てはや使者を都に馳せて、此事を朝廷に奏問し、城門は日中後に闔し、出入を緊しく査め、用心尋常に異なり、長兄を害せんと計りしことは、もと蔡九知府、これを欲せざりしかども、彼黃文炳再三頻に知府を諫めて、斯の如きに至らしめぬ、今江州城の軍民等は、梁山泊の豪傑再び來て、江州を犯す事もやあらんとて、各怕れざるは一人もなし、某又無爲軍に至り、則ち黃文炳が家の前に徘徊して、動靜を問窺つて居ける所に、此侯健想はず黃文炳が家より出しゆゑ、則ち此度のことを告げて、黃文炳が消息を詳に問候なり。宋江大によろこび、則

かんぞよく是を報うべき、猶只恨らくは、彼黄文炳我とは、原より寃も仇もなきに、再三我を害せんと計りしこと、遺憾骨髓に徹しぬ、我若此仇を報ぜずんば、あによく寸志を安んぜんや、願くは諸豪傑我爲に無爲軍を攻て、黄文炳を活捉り、我が此恨を雪がしめ給へ。晁蓋が云く、我輩斯て在る上は、彼を活捉んこと掌を反すよりも易し、然れども彼賊はや必定此騷動を聞て、嚴く備を設けたらん、しかじ先山陣に回りて、軍師吳學究幷に公孫勝、林冲、秦明等と共に商議し、再び大軍を引て彼賊を活捉ん、此度は先急に梁山泊に歸りて、先宜しく休息を遂給へ。宋江が云く、若直に山陣に回りなば、重ねて來らんこと難かるべし、其ゆゑは、第一山遙に路遠し、第二江州に公文を開き行ひ多く人馬を備へ防を堅固にすべし、然らば却て彼賊を捉へんこと易からじ、只能此便機に乘じて手を下さば、立處に彼を捉ふべし。花榮が云く、宋長兄の言尤可なり、若無爲軍の路徑を識る人あらば、先これを城中に遣し、彼が住所をも見屆しめ、其後馳向つて手を下さば、何の苦もなく活捉べし。只恨らくは彼地の案内を知る人あるまじ。薛永聞もあへず、進み出て云けるは、某天下を繞て所々の路徑をよく知る内にも、無爲軍就中某が熟路にして、其案内を詳に知りぬ、望らくは某馳て動靜を伺ふべきや。宋江大に悅んで云く、賢弟肯て行給はゞ、我心安んずべし。薛永其日衆人に別れて、獨自ら無爲軍を

に打向ふ。其背後には花榮、黃信、呂方、郭盛の四將、ひとしく猛威をふるつて馳著る。花榮敵軍を見るに、悉く長柄の鎗を持ち、李逵一人を目蒐進みしかば、花榮急に弓箭打搭へ、滿月のごとく拽撓めて漂と放てば、當先にすゝみたる敵の勇士を、馬より下に射落しければ、官軍共是を見て大に驚き、各先を爭ひ、逃散らんとせし處に、梁山泊の豪傑等四方より夾み擊しかば、官軍多く討れ潰亂れ、鋒を倒にして盡く逃走るを、梁山泊の豪傑等は益勢に乘じて追擊し、直に江州の城下に至りし處、城中より矢石雨のごとく飛せ、急に城門を開きしかば、敗軍等は這々城中に迯入けり。こゝに於て花榮等は再び李逵を引て、白龍廟に馳回りぬ。

○宋江智をもつて無爲軍を取る

晁蓋諸人に下知し、衆皆船に乘しめ、則ち順風に帆を揚げ、直に穆弘が館を望んで走りしかば、暫時の間に岸に著き、諸豪傑各岸に登て、遂に穆弘が家に立寄りし處に、穆太公自ら出て相迎へ、頓て酒宴を設けて諸豪傑を饗應けり。此時晁蓋が云く、張順等若舟を以て迎はずんば、我が輩殆ど危かるべし。宋江が云く、某と戴院長とは、何の幸にや、長兄等の爲に萬死の內に於て一生を得ぬ、若然らずんば、非命の死を何ぞ避得ん、今日の恩は滄海より深し、い

立、童威、童猛等と共に十餘人の漢子を引て岸に上る。張順先天に悦び地に喜んで、宋江を拜して云けるは、長兄入牢し給ひて以來、某坐立安んぜず、何とぞ長兄を救はんと圖りしかども、又良計あらず、益憂へぬる處に、戴院長は同く擒となり給ひ、李長兄には又曾て遇ず、某一人が力の及ぶ所にあらざりしゆゑ、急に馳て兄張横に斯と告げ、卽ち穆弘が家に於て人數を聚め、今日直に江州城に攻入り、長兄戴院長を救はんと圖けるに、豈知らんや、はや人あつて長兄を救ひ出し、想はず此處にて恙なき體を見せしめ給ふこと、莫大の幸なり、扨此幾干の豪傑は、梁山泊の晁天王にはあらずや、いかん。宋江答へて、彼座上に居給ふは、梁山泊の主晁天王なり、其外總て山陣の頭領なり、各相見し給へとて、張順等九人、晁蓋等十七人、宋江戴宗李逵三人、都て二十九人、衆皆白龍廟に入て參會す、是を名づけて白龍廟小聚會とはいふなり。此時諸の頭領一禮をなして相見し、座已に定りたる處に、從へ來りし小賊等、忙はしく廟中に入て報じけるは、江州城より若干の軍馬、金鼓を鳴し鬨を作て馳出で、旌旗日を蔽ひ、劍戟麻のごとくに、はや近々と寄來りぬ。李逵是を聞て大に怒り、二つの斧を雙の手に持て、當先に進みしかば、晁蓋諸人に下知し、李逵を助けて、一戰をなせと呼はりし處に、諸人一度に軍器を揮り馳出けり。官軍すべて五七十、喊叫んで斬てかゝるを、李逵怒て大勢

三阮兄弟

江中ニ奪フ船ヲ

戴宗漸眼を開き李逵に對して云けるは、賢弟必ず卒爾の事をなすことなかれ、城兵猶五七千もあるべきに、若勢に乘じ、再び城内に砍入らば、必定誤りあるべきぞ。阮小七が云ふ、對岸に數艘の船、遙にみゆれば、某等兄弟三人、水を越て彼所にいたり、早々舟を奪取り、諸人を渡すべし。晁蓋が云ふ、此計究めて上策たらん、速に船を奪ひ取來れ、と命じければ、三阮兄弟頓て衣服を脫て水中に跳入り、約莫半里程至り、五艘奪ひ來れり。又皆上流を見るに、三艘の快船飛がごとくに漕來る。舟の上には各十餘人の漢子共打乘て、每手に軍器を持て、はや近々と漕寄しかば、諸人これを見て大いに驚きぬ。宋江は獨り自ら歎息して云く、我が命必ず此所にて終るべしとて、廟の前に走り出で、彼舟を望み見るに、まつ先に進みし一艘の舟の上に、一人の豪傑手に鎗を撚つて已に岸邊に漕至る。宋江此漢子等をよく〳〵見るに則ち浪裡白跳張順なり。張順乃ち船の頭に躍出で大音聲に呼はりけるは、汝等は何者なれば妄に白龍廟の内に在て衆を聚るや。宋江急に呼つて云く、賢弟宜しく宋江を救はんや。張順等これを聞て、大いに悅び、三艘の快舟齊しく岸に搖著ければ、宋江喜悅斜ならず、これを見るに、一艘の舟よりは、張順自ら十餘人の漢子を引て岸に上る。又一艘の舟よりは、張橫みづから穆弘、穆春、薛永等と共に、十餘人の漢子を引て岸に上る。また一艘の舟よりは、李俊自ら李

を打開しかば、いづれも廟中に入て、前面の額を見るに四つの金字あり、乃ち白龍神廟と云文字なり。此時小賊等宋江と戴宗とを廟の内に卸し休ける處に、宋江方に眼を開て晁蓋等衆人を看て、覺ず兩眼に涙を洒で云ひるは、晁天王是は夢中の參會にあらずや。晁蓋が云ふ、長兄さきに山陣に留り給はざりしゆゑ、今日の苦しみをうけ給ひぬ、寔に危かりし事なりとて、各息を繼にける。晁蓋又宋江に問て云けるは、彼大漢子は誰なるや。宋江が云ふ、彼は則ち黑旋風李逵と云ふ者なり、彼向にも再三我を助け、牢中を逃出よと諫めしかども、我竟に脫れがたき事を察し、彼が諫を用ひざりけり。晁蓋が云ふ、彼が働、諸人に勝れて其功第一なり、誠によき一人の豪傑かな、と稱しけり。宋江又卽ち李逵に對して云けるは、汝早く我が義兄に見えんや。李逵これを聞て、忙はしく晁蓋を拜して云けるは、長兄必ず遲拜の罪を赦し給へとて、又諸頭領に對面しける處に、朱貴と李逵とは本同鄉なりしかば、兩人別してこれを悅びけり。花榮が云ふ、某等已に此所に至り、大江に前路を攔られ、しかも一艘の船もあらざれば、江を渡らん方便なし、若官軍大勢後に慕うて追來らば、いかんぞよくこれを迎へ、敵し戰はんや。李逵が云ふ、諸長兄少しもこれを憂へ給ふことなかれ、若軍卒等再び來らば、我又二つの斧を振て、一時に斬拂ひ、直に城中に跑入り、かの賊官蔡九知府を捉へて、首を刎べし。此時

愛敬すること、師父のごとしと語りけるが、必定此漢子がことならめとて、晁蓋高聲に呼つて云けるは、前面の豪傑は、黒旋風李逵にてはあらずや。彼大漢子是を聞けれども敢て答へず、只管斧を輪して土兵共を四方に追散す。晁蓋此時宋江と戴宗とを背たる、小賊に下知して、彼漢子がしりへに隨はしめ、直に十方街に至て四方を顧るに、土兵軍卒其數を知らず斬殺され、尸は横りて野に遍く、血は流れて渠をなせり。諸〻の頭領等都て彼大漢子が後に跟て、盡く城外に斬て出ければ、江州の軍民百姓此勢を見て大に怕れ、近き進んとする者一人もなかりける。彼大漢子遂に江邊に至て許多の百姓等を砍伏しかば、晁蓋再應これを制しけれども、彼大漢子曾て耳にも聞入れず、ます〳〵斧を輪して虎の勇をなしにけり。漸〻五七里計に至つて、前面を望み見るに、淘々たる大江のみ有て、只一筋の旱路もなかりけり。晁蓋此所に路なきを見て、大いに憂へし處に、彼大漢子忽ち呼つて云けるは、長兄必ず憂給ふことなかれ、先宋押司と戴院長とを、廟の内へ休息なさしめ給へと叫び、當先に進みけり。

○白龍廟に英雄小く義に聚る

諸〻の豪傑盡く廟前に至てこれを見るに、廟門緊く關したりけるを、彼大漢子斧を以て廟門

這命を遁れ、逃去けり。斯る所に、東の隅より出し、蛇を使うて藥を賣る漢子共、盡く刀を揮て、斬場の内に亂れ入り、土兵等を散々に砍まくる。又西の隅に控たる、棒を使うて藥を賣る漢子共、同じく刀を拔持ち、一齊に咄と喊き叫んで斬廻る。南の隅より擔を荷うて入來りたる漢子共、各匾担を輪して、軍卒等を前後左右に打伏せけり。又北の隅より車を推て來りし旅客共、車を以て土兵等が逃んとするを遮り、其内二人の漢子一同に進み入り、一人は宋江を背ひ、又一人は戴宗を擔げ、其餘の旅客は各弓箭を取出し、軍卒等を射殺し、四方同時に劍戟起りて土兵共を傷ふこと許多なり。彼車を推來りつる旅客は、乃ち晁蓋、花榮、呂方、郭盛等なり。彼棒を使うて藥を賣る漢子共は、乃ち是燕順、劉唐、杜遷、宋萬なり。又擔を挑うて來りたる漢子共は、則ち是朱貴、王英、鄭天壽、石勇等なり。彼蛇を使ひ藥を賣る漢子共は、是阮小二、阮小五、阮小七、白勝等なり。都て梁山泊の豪傑十七人、百餘人の小賊を引て馳來り、斯猛威を振て、土兵共を追散したり。彼二つの斧を持たる大漢子は、猶四面八方に跑て、軍卒等を多く砍倒す、此漢子が功第一なり。晁蓋未だ此漢子を識認ずして想ひけるは、彼は何者なれば、斯比類なき働をなし、武勇を現すやと、良久しうしてのち、忽ち想ひ著けるは、嚮に戴宗梁山泊にて黑旋風李逵とやらん云ふ豪傑、よくふたつの手に雙の斧をつかひ、萬夫不當の勇力あり、此者宋江を

黒旋風等大
鬧法場圖

一向争論しける處に、監斬官是を聞て、士兵に命じて呼り云けるは、其者共一人も近く進ましむることなかれ、と未だ云も了らざるに、又南の隅より一夥の人、擔を荷うて進入しかば、軍士等これを遮つていひけるは、汝等擔を荷つて、斬場近く進み來るはいかん、速に外面に走り出よ。彼者共が云く、我輩は皆知府相公の家に擔を運ぶ者共なり、汝等いかんぞこれを攪へんや。士兵等が云ふ、汝等果して知府相公の家に出入する者共ならば、此處を過らず、別の路を過るべしと、一向問答休ざりし所に、北の隅より又一夥の旅人車を推て挨入しかば、士兵共罵つて云ふ、汝旅客等車を推て何れの所に往んとするや。旅客答へて云ふ、我輩は皆道を急ぐ者共なり、此所を放ちて過らしめ給へ。士兵等が云ふ、汝若路を急ぐ者ならば、別の道を求めて過るべしとて、再三再四これを阻當しかども、彼旅客耳にも聞入ざれば、四方に制し罵り、騒動切にして、蔡九知府もこれを禁ずること能はざりけり。已にしてはや午の上剋に至りしかば、軍卒等先監斬官に告げ、宋江戴宗兩人が首枷を除き、劊子はや背後に轉りて、刀を打かけんとせし處に、一人の大漢子雙の手に二つの斧を揮ひ、恰も奔雷のごとく吼て群人の内より跳り出で、急に二人の劊子を砍倒し、直に監斬官を望んで、馬の前に砍てかゝりしかば、諸の士兵共これを見て、急に劍戟を揮つて支へんとせしか共、彼大漢子に砍拂はれ、蔡九知府も這

者を引するゐ、先宋江を南面に坐せしめ、戴宗を北面に坐せしめ、緊く劍戟を建並べて、斬場の四方を諸軍卒に守らせ、只午の上剋を待て、首を刎べしとて、劊子已に背後に繞り、明晃々する刀日に映じて控へけり。此時諸の見物人面を仰いで牌の上に寫したる文字を見るに、其文に云ふ、

江州府の狂人一名は宋江と云ふ者、向に反詩を吟じて壁の上に書き、梁山泊の強盜等と通同して、謀反を企んと圖りぬるゆゑ、今日これを斬罪に行ふ。又犯人一名は戴宗と云ふ者、宋江が爲に私に梁山泊に消息を通じて、謀反を助けんとせし故、同じく斬罪に行ふ者なりと明かに書著ぬ。斯る所に斬場の東の隅より、一夥の漢子共諸人を推開けて挨入しかば、諸人是を見るに、乃ち蛇を使うて藥を賣る者どもなり。又西の隅より同じく一夥の漢子共諸人を推分挨入しかば、諸人これを見るに、乃ち棒を使うて、藥を賣る者共なり。土兵軍卒此體を見て大に罵つて云けるは、汝等藥賣、いかんぞ擅に人を推開て挨入るや、必ず騷動することなかれ。彼藥賣の漢子共が云く、汝土兵等何ぞかくのごとき事を云や、縱ひ京に於て天子の人を殺し給ふにも、又肯て人を放ち入て是を看せしめ給ふなり、汝此小州にて只兩個の罪人を殺すのみにして、見物を制するはいかん、我が輩近く進入てこれを見るとも、何の妨かあらんとて、

黄文炳が云く、相公の高論極めて明なり、若かくのごとく急に斬罪を行ひ給はゞ、梁山泊の盗賊等に、牢を劫はるゝことあるまじ、然らば帝も必ず其功を叡聞有て、これを恩賞し給ふべし。知府是を聞て大に悦び、一向黄文炳が智見を稱しければ、黄文炳も共に悦んで、遂に無爲軍へぞ歸りけり。翌日蔡九知府黄孔目に仰せ、明日宋江と戴宗とを街の上に於て、是を斬罪すべき間其用意を調ふべしと、嚴に命じければ、黄孔目はもと戴宗とは交厚き知己たるによつて、心中に甚だこれを悲しみ、乃ち知府に告て云けるは、明日は國家の忌日、明後日は又七月十五日、中元の節なれば、此兩日の内斬罪を延し給へ、と諫めしに、知府其議に同じけり。此時梁山泊の豪傑等は呉用が謀を受け、則衆皆々山を下りて、江州へ馳けれ共、此日は猶道中に在て江州には至らざりし處に、今黄孔目知府に告て斬罪の日を延したるは、天宋江等兩人を救ひたまふ時會計せり。蔡九知府は黄孔目が言を容ひ、斬罪の日を七月十七日に定め、即ち街の上に斬場の土壇を設けしめ、已に其日に至りしかば、土兵軍卒五百餘人を催し、知府親自黄孔目と同じく、宋江戴宗兩人を監押して、已に斬場へぞ引せけり。貴賤雲霞のごとくに集つてこれを見物し、宋江戴宗兩人を、深く憐む者多かりけり。宋江は前に引れ、戴宗は後に引れ、互に聲をもなさずして、只顧頭を低たるばかりなり。五百餘人の土兵ども、やがて兩人の

く策て、と呼りしかば、諸の軍卒共心中には戴宗を憐みけれども止事を得ず、戴宗を拖り倒し、頓て棒を舉て散々に打し處に、皮開け肉綻び、血は滾々と流て全身都て紅に染にけり。戴宗今は堪難く、則ち白狀して云けるは、某向に梁山泊の下を過し處に、一夥の強賊出て某を生捕り、彼書簡幷に禮物等盡奪取て、某が一命ばかりを饒しぬれ共、某再び歸鄕して、相公に見えがたきことを察し、則ち山陣に於て再三死を乞しか共、彼敵て殺さずして、却て此返簡を假て、某に與へし故、某先當座の罪を脫れんと欲し、則ち是を携へ來て、相公を誑き奉りぬ。知府が云く、汝分明に梁山泊の強盜等と通同して、我が京へ送る禮物を奪ひ取り、いかんぞ是等の白狀のみにて、罪を支吾んとするや、再び汝を打たずんば有べからずと、て、又軍卒等に命じ數十棒打しめけれども、白狀の言始終同じかりしかば、知府又牢子等に仰せ、先戴宗を牢中へ遣しけり。扨知府は黄文炳を謝して云く、足下の高見にあらずんば、すでに彼が僞に誑かれて、大事を誤つべきに、幸ひ足下の敎に因てこれを曉せりとて、悅ぶこと極りなし。黄文炳が云く、某彼戴宗が動靜をみるに、梁山泊の強盜等と通同して、謀叛を企てんと圖るに疑ひなし、若これを急に殺し給はずんば、必ず後來の患たらん。知府、宋江の反賊と共に同罪に決斷して、先當地に於て是を殺し、其後表を京に獻りて天子に奏聞せば可ならんや。

日未明に某又太師府の門前に至て伺ひしかば、彼把門則ち返簡を持來て、某に付與ぬ、某日限を誤らんことを怕れ、其日其まゝ東京を發足せり。知府又問て云く、汝が對面したる把門は、年の比は幾千何歳に思はれ、其相貌模樣はいかん。戴宗が云く、某府裡に至りし時は、已に夜中にして、翌日發足しぬる時は、五更の左側ゆゑ、天色猶暗かりしゆゑ、彼把門を分明には見屆ざりしかども、大概是を見るに、中等の身材にして、少し鬚ありぬ。知府これを聞き大に怒り罵つて云く、汝何ぞ亂の言を云や、其上到著發足、夜中又は五更と、偏に暗に託け、且我父太師府の把門は、王公と云ものなりしかども、前年病死しぬるゆゑ、又其悴を以て門を守らしむ、此者いまだ二十に過ざるに、いかんぞはやく鬚あらんや、殊に門を守る者、堂内に進み入る事能ず、凡書簡等の取次は、格別に又其役あつてこれを承る、這回の書簡は大事を云遣しければ、別して諸役人これを聞き、汝を廳前に呼入れ、詳に其故をも問べきことなり、然るに汝詐を以て我を謾かんとするや、と遂に左右の軍卒に命じて、戴宗を綁させければ、戴宗大に驚きて云く、某に何の罪ありや、某今答ふる所唯有し儘なり、聊偽を申立ず、殊さら某急に發足せしゆゑにや、曾て一個の役人も出候はず、何ぞ相公を欺くこと候はん。知府益怒て云く、汝奸賊、打ずんばいかんぞ敢て白狀せんやとて、已に左右を顧て、彼賊を痛

父昔日翰林院學士たりし時こそ、是を用ひ給ひたれ、今直に太師丞相に陞給ひても、同じく昔日の圖書を用ひ給はんや、殊更親の方より子に送る書簡の上に、いかんぞ諱の字ある圖書を用んや、尊太師は原來天下の書を觀盡し給ひて、博識大才の學者なるに、いづくんぞ敢てかくのごとき差をなし給はんや、相公もし某が言を信じ給はずんば、彼戴宗を呼で委しく問給ひて、東京の動靜を語らしめて聞給へ、若彼が詞に相違のことあらば、此書則ち眞の返簡にあらじ。知府が云く、彼戴宗は未だ東京に上らざる者なれば、只一度問はゞ、事の虚實分明に知れんとて、乃ち黃文炳を屏風の背後に藏し置き、頓て一人の下官を戴宗が家に馳にけり。扨戴宗は梁山泊にて這回返簡を假せたる事を、一々詳に宋江に低言しかば、宋江は心中に是を悦ぶこと限なし。此日は戴宗一人の友と酒を酌で居ける處に、俄に下官來て、知府相公院長を召給ふと告げて、遂に戴宗を誘引して、廳前に至りしかば、知府則ち問て云く、汝前日東京に至りし時は、いづれの門より城中に入ぬるや。戴宗答て云く、某前日東京に至りし時は、夜中にてありしゆゑ、何れの門と云ふ名を知らざりけり。知府が云く、我が父太師が家にては、誰人出て汝を迎へぬるや。戴宗が云く、某太師の家に至りぬる時は、一人の把門出て某を迎へ、則籠と書簡を取て内に入る、又少頃して出來り、遂に某を客店に導いて歇しめぬ、翌

宗廳前を退出し、牢中に至り先宋江を見て互に悦ぶこと限りなし。扨蔡九知府は急に宋江を都へ送るべしと商議して、囚車等を調へける處に、彼黄文炳伺候せりと告ければ、知府自ら是を迎て後堂に至り、知府先黄文炳に對して云く、足下の吉事近々に至るべし、預めこれを悦び給へ。黄文炳が云ふ、相公は何を以て、吉事の至るを知給ひぬるや。知府が云く、昨日彼戴宗東京より回り、則ち父太師が返簡を携へて來りけるが、彼罪人宋江を近日京に送るべきとのことなり、足下が事も頓て帝に奏聞して、官職を授けんずると委細に申來れり。黄文炳が云く、若果して此の如くんば、某莫大の福なり、然れども只恐らくは尊父太師何ぞ輕々しく某等がことを、早速奏聞あらんや。知府が云く、足下尙これを疑はゞ、父が返簡を見て我が謬なきことを知り給へとて、卽ち彼返簡を取出し、これを見せしめければ、黄文炳返簡を接へて、始終を見畢り、又圖書を見ること良久しうして、忽ち頭を搖て云けるは、此返簡恐らくは假せならん。知府が云く、何を以て足下これを假せと云や。黄文炳が云く、尊父太師常に書簡を寄せ給ふ時、此圖書を用ひ給ふや。知府が云く、常に寄給ふ書簡の圖書はこれにあらず、此般はいかなるゆゑにや、此圖書を用ひ給ひぬ。黄文炳が云く、某不才たりといへども、此書簡を見るに、彌假たるものに疑ひなし、其故いかんとなれば、翰林蔡京と云文字ある圖書は、尊

○梁山泊の好漢法場を劫す

此時晁蓋等呉用に問て云く、返簡を假せて、何等の差ありしや。呉用答へて、此回假せし圖書の文字は、翰林蔡京と云四字なり、乃此圖書宋江戴宗二人を殺すなり。金大堅が云ふ、我毎度蔡太師が書簡幷に文章を見たるに、圖書毎々翰林蔡京の四字なり、是何の差ふ所かあらん。呉用が云く、足下等是を知らずや、今江州の蔡九知府は蔡京が子なり、父より子に遣す書翰の上に、いかんぞ諱の字ある圖書を用ひんや、然るに我誤つて、諱の字ある圖書を用ひぬれば、戴宗必ず知府に疑れ、事竟に露るべし。晁蓋是を聞て大に驚き、急に人を馳て戴宗を呼回さんと思へ共、戴宗は本神行の法をなして、飛が如くに跑るゆゑ、はや五百里以上を行つらん、翅を生じ空を翔らずば、呼回すこと能ふまじとて、各呆れたる斗りなり。呉用が云く、もと我此計は做まじく思ひけれども、今はいかにせん止む事を得ざるに依て行はん、其計はかくのごとく如斯と低言しかば、晁蓋大に悅び、頓て諸頭領に號令を下し、各裝束を調へて當日山を下り、水を渉て急に江州を望で進發す。扨戴宗は既に江州に至り、直に知府が廳前に出て、返簡を呈しければ、知府是を披見して書面を曉し、則ち二十兩の銀を以て戴宗を賞しけり。戴

忍びんや。呉用が云ふ、足下等これを憂へ給ふことなかれ、貴族を明日は山陣に邀へ來るべしとて、其夜は各退散しけるが、翌日小賊來つて、蕭讓と金大堅が眷屬どもを、はや邀へ來るよし呉用に告しかば、呉用頓て彼兩人を請て、眷族等に遇しめける處に、衆皆大に悦び、いよいよ心を傾け膽を吐て、山陣に止りけり。呉用又兩人を請て、蔡太師が返簡幷に圖書を假て宋公明を救はんことを商議しけるに、兩人齊しく領承して、遂に返簡も圖書も全く調りしかば、則ち返簡を戴宗に與へ、再び江州へ遣しけり。扨晁蓋は諸頭領と共に酒を飲居ける處に、呉用俄に面色土の如くに成て阿と一聲叫びしかば、諸頭領大に駭いて其故を問ふ。呉用答て云ふ、這回返簡を假しことは、偏へに宋江を救はんが爲なるに、豈料んや却て宋江と戴宗とを殺す事を做出せり。諸頭領これを聞て駭き恠んで、書中に何等の誤在て斯云給ふや。呉用が云く、我先に事の忙はしきに紛れ大いなる差をなせり。蕭讓が云ふ、某が書きぬる筆跡蔡太師が字體と同じ、知らずいづれの所に差ありや。金大堅も又問て云ふ、某が雕たる圖書毛頭も誤たず、何を以て大いなる差ありや。呉用が云く、足下等兩人のなせし處には、少しも差ふ所なけれども、我自ら誤つてなせる所ありて然り、一人を助け救はんとて、却て二人を殺す者は、唯我のみとて、再三悔んで嘆息せり。此誤とは何を云や、次を讀て明かならん。

戰已に八九合に及んで、王英急に馬を回し逃けるを、兩人は跡を慕うて追行しに、忽ち山の上に金鼓の聲大に響き、左の方に雲裡金剛宋萬すゝみ出で、右の方には模著天杜遷進み出で、背後には白面郎君鄭天壽進み出で、各三十餘人を引て前後左右を遮り、遂に蕭讓金大堅兩人を捉へ、横に拖り竪に拽き、直に林の内に入て、四人の頭領齊しく兩人の者に對して云けるは、汝兩人宜しく心を安んじ給へ、我輩は是晁天王の命令を受け則汝兩人を捉へて山陣に留んと欲ふのみ、毛頭汝等を害するにあらず。蕭讓等兩人が云ふ、我が輩は唯よく飯を費すのみにして、雞を縛るの力もなし、山陣に留め給ひて何の用にか中らん。杜遷が云ふ、我が山陣の軍師吳學究原來足下兩人とは舊友といひ、殊更足下等は武藝の達人たるにより、向に戴宗を足下等の家に遣して邀へしめしなり。岳廟と云しは都て詐なるに、宜しく是を曉し給へ。蕭讓金大堅これを聞て大にあきれ、只面を見合すばかりなり。此時四人の頭領兩人の者を引て朱貴が店に至り、頓て酒宴を設けて兩人を欵待し、其夜遂に導いて山陣に至りし處に、晁蓋則ち諸の頭領と倶に、兩人の者を迎て相見え、豐に酒宴を具へて饗應し、晁蓋頓て蔡太師が返簡を假せんと圖ることを語り、山陣に止めければ、兩人齊しく吳學究に對し、某等兩人山陣に安身せば、是大いなる福なり、然れども各都て妻子あり、いかんぞ能これを棄るに

蕭讓金大堅途中遭賊軍

く酒を酌み、明日速に發足すべし。金大堅がいはく、已にかくのごとくんば大に可ならんと約を定め、其日は此にて三人酒を酌み遂に盃を收めて、酒店を出しかば、金大堅は先旅裝を調ふべしとて、宿所へぞ歸りけり。蕭讓は其夜戴宗を留めて、己が家に歇ましめ、翌日未明に起て、戴宗と共に暫く、金大堅が來るを待居ける處に、金大堅はや至りしかば、三人同じく蕭讓が家を出て、濟州城を離れ纔に十里許馳しに、戴宗彼兩人に對して云けるは、兩位の先生は跡より靜に來り給へ、某は先に馳回て諸の人に斯と告げ、宜しく途中まで出て兩人の先生を相迎はせ候はんとて、遂に飛が如く跑行けり。彼兩人の者は自ら包袱裹を背に擔ひ、漸々未の上剋に至て、約莫七八十里許過しと思ふ處に、前面呼はる聲有て四五十人の小賊馳出で、當先に一人の大將馬を進めて大音あげ、汝兩人何國より何國へ過るや、我今汝兩人を捉へて、其肝を引出し、宜しく是を肴として三盃を酌ん事を思ふとて、已に小賊等に下知して、彼兩人を早く活捕と呼はりけり。此大將は梁山泊の頭領王英なり。蕭讓是を聞き忙しく告て云けるは、某等兩人は泰安州の岳廟に趣いて、碑文を書碑文を彫の貧窮者共にて、曾て一錠の銀すら携へず、只兩三套の舊衣あるのみなり。王英益怒て、我何ぞ必しも汝等が貧福を論ぜんや。蕭讓金大堅大に怒り、兩人同じく腰刀を拔て、王英に斬て蒐る。王英鎗を捻て相迎へ、

り給ふや。戴宗が云ふ、某は泰安州岳廟より來りし者なり、今岳廟に一つの石碑を新に建けれども、此碑文を書かん人隣國に覺えなし、願くは先生駕を枉て、これを書給ふものならば、大なる幸ならん、且微薄ながら先五十兩の銀を送り申すとて、則これを與へければ、蕭讓が云ふ、某は只文を做り、字を寫すを善するのみにて、石碑を刻ること能ず、須く妙手の刻匠を求め給はゞ可ならんや。戴宗が云ふ、刻匠のことは、某別に五十兩の銀を送て、玉臂匠金大堅を頼んと欲す、望らくは先生吉日を擇給ひて、金大堅と共に駕を移し給へ。蕭讓銀を得て大によろこび、即戴宗と同じく家を出て、金大堅が宿所へと尋ね來り、已に半途に至て、蕭讓忽ち前面を指ざして云けるは、對面より來る人、乃ち是金大堅なり。戴宗彼來る人を見るに、頭には黒紗の巾を戴き、身には緑紗の衣を著し、人品尤文雅なり。此時蕭讓金大堅を扯住て戴宗に見えしめ、乃ち泰安州の岳廟に、新に石碑を立らるゝに依て、我が輩兩人を頼み、碑文を書せ、碑文を刻しめんとて、各五十兩の銀を送つて、我と足下とを、岳廟に邀へ給はんとの事なりと、一々詳に語りければ、金大堅これを聞て大に悦び、乃ち戴宗を請て酒店に至りし處に、戴宗頓て五十兩の銀を出して、金大堅に送て云けるは、願くは吉日を擇んで、早々駕を移し給へ。蕭讓が云ふ、今明兩日は是吉日なり、然れども今日は先此に在て暫

山陣に足を留め、終に我等が爲に書簡を假しめば、此回の用のみにあらず、大事を成さしむる事有べし。晁蓋が云ふ、其蕭讓を賺し邀へ得ば、書簡を假する事は足べし、猶又圖書印記を假する人のなきをいかんせん。吳用が云ふ、長兄これを憂へ給ふことなかれ、圖書を假せん人も同く濟州にあり、則ち姓は金、雙名は大堅と號す、原來圖書を假することの妙手なり、又よく鎗を刺棒を使ふ、彼かの如く圖書玉石を雕るの妙手たるにより、人皆彼を稱し玉臂匠と申す、是又五十兩の銀を送て山陣に迎ふべし、此兩個の人は只這回の用を調ふるのみにあらず、山陣に長く彼等を用ふべき處あり。晁蓋大いに悅んで云ふ、いよ〳〵此兩人を得ることあらば、計立處に成就すべしとて、其日は酒宴を設けて戴宗を欵待し、晩に至て裝束を調へ、一二百兩の銀を取て包袱に裹み、乃ち又四つの甲馬を腿に拴つけ、山を下り水を渉て路口に出で、竟に神行の術をなして飛がごとくに跑行き、纔一二時計の內に濟州府に至り、卽ち聖手書生蕭讓が家に尋行きて門外より呼り云けるは、蕭先生家に在や。此時內より一人の秀才出來る。戴宗此秀才を見るに、頭には烏帽を戴き、身には靑衫を著し、腰には繡縧を繋び、足には綾鞋を穿き、相貌極めて風雅なり。此秀才已に門外に出ければ、戴宗先問うて云く、知らず、秀才は蕭先生なるや。秀才答て云ふ、蕭讓とは則 某がことなり、足下は又何れの所より、何等の事有て來

四編　巻之三十七

○其下

晁天王、軍師並びに公孫勝が計略を可なりとして、又想道らく、蔡太師が返簡を似せんに、此人は高名の能筆なれば、其筆者有まじきと、猶又諸頭領に對し、唯恨らくは蔡太師に似たる筆者あらじと申しける時、吳用が云ふ、某此事已に心中に思量し了ぬ、今天下に專ら行はるゝ處の筆跡は唯四家の字體のみ、則蘇東坡、黃魯直、米元章、蔡太師これを名けて宋朝の四絕と申す、某一人の舊友に、能諸家の字體を寫す者あり、世の人皆稱して聖手書生と云慣せり、這人原濟州城の秀才にして、姓は蕭、名は讓と號す、又能武藝に達して槍棒を使ふ、是を用ひば必定能く蔡太師が筆跡を似すべし、しかじ戴院長を賴んで彼が家に至らせ、則彼を誑いて云べきは、泰安州の岳廟に新に石碑を建けるに、此碑文を書かん者隣國にこれなし、願くは先生、駕を枉てこれに書給はらば、大いなる幸ならんとて、先五十兩の銀を送つてこれを邀へ來り、其跡に又人を馳て、彼が眷屬を賺し邀へ山陣に引取るべし、然らば彼必ず心を傾けて、

り。此段事長ければ、次巻に推渡りて見るべし。

師吳用これを諫て云ふ、此事不可なり、いかんぞなれば、此所より江州へは路甚遠し、若人馬を起して江州へ攻行かば、此事はや江州に洩聞え、宋公明の性命は、忽ち知府が手に害せらるべし、此事力を以て敵すべからず、唯智を以てすべし、某不才なりといへども一つの計あり、唯戴院長の身の上に依て、宋押司を救ふべし。晁蓋が云ふ、願くは軍師の良策を聞かん。吳學究が云ふ、今蔡九知府戴院長を京へ遣し、書簡を蔡太師に送て、返簡を求めんと欲す。是則ち我輩が計を行ふべき本なり、先宜しく蔡太師が返簡を假て、一封の書札を修へ、乃ち其文に云遣すべきは、罪人宋江が事、必ず其地に於て罪を行ふこと勿れ、唯急に彼を京に送るべし、然らば此地に於て罪を委細に拷問し、宜しく決斷を遂げ、斬罪に行ひ、卽ち首を梟して衆に示し、速に童子等が謠言を絕すべしと詐かば、蔡九知府必ずこれを信じて、宋公明を都に送る事あらん、然らば官軍等宋押司を監押して、我が山の下を過ぎん、我が輩預め先人を山下に馳て、宋公明を奪取しめん、此謀計はいかん。晁蓋が云ふ、軍師の計最善なり、但萬一此所を過らずんば、又却て大事を誤つことあらん。公孫勝が云く、これ何ぞ難きとせん、我が輩預め先人を遠近に馳て、其過る道を窺しめ、何れの路にてなりとも是非々々宋押司を奪取らんに、何の難きことあらん。晁蓋が云く、賢弟等の計策極て當れりとて、大に悅びけ

害せんや。朱貴が云く、足下猶詐り給はゞ、此書簡を見給へと、乃ち蔡九知府が書簡を戴宗に見せしめければ、戴宗これを見て忽然として大に驚き、卽ち宋江が始て江州に至りし時の次第、吳學究の書簡を得たる事、此度宋江潯陽楼の上にて、醉後反詩を吟じたる始末まで、一々詳に語りしかば、朱貴是を聞て云けるは、此上は院長自ら山陣に上て、諸の頭領と共に良計を商議して、宋公明の性命を救ひ給へとて、先酒食を具へて戴宗を管待し、頓て蘆葦の内へ響矢を射入れしかば、小賊等相圖の響を聞き、卽ち一艘の快船を漕で、朱貴が亭下に至りし處に、朱貴遂に戴宗と共に船に乘り、直に金沙灘に至て岸に上り、朱貴自ら戴宗を導いて陣前に至りしかば、吳用は戴宗が消息を聞て、忙しく關前に出て相迎へ、互に禮を行了て、吳用先戴宗に對して云けるは、今日は何の風院長を吹て此所に至らしめけるや、先大陣の内に入給ひて、諸の頭領に相見え給へとて、遂に院長を引て陣中に入り、則ち諸の頭領を請て戴宗に遇しめ、各座已に定りける處に、朱貴頓て宋公明が反詩を吟じ、今牢中に在る事、戴宗が京に上らんとして此處を通りし來歴、詳に語り聞えければ、晁蓋其外大に驚き、猶戴宗に問尋ね、戴宗有し次第備細に語りたるに、晁蓋、已にかくあらば、諸の頭領を請て人馬を催さしめ、急に江州を攻め、宋江を救はずんば、押司が命は今風前の燈のごとくにあらん、と議しければ、軍

呈する書簡を擅に封を破りし事、罪まさに死にいたるべし。朱貴大いに冷咲て云ふ、蔡太師が方へ送る書簡を開きぬるとも、何の利害かあらん、我此處には英雄豪傑充滿して、當朝の太宗皇帝の對手にもならんと欲す、豈肯て其餘の人を恐れんや。戴宗此言を聞て大に驚き、乃ち問て云けるは、足下は好き一人の豪傑と覺えたり、願くは姓名を知らしめ給へ。朱貴が云ふ、我は此所に居住し、專ら世間の善惡を窺知て、山陣に註進をなす、梁泊山の豪傑旱地忽律朱貴と云ふ者なり。戴宗が云ふ、足下果して梁山泊の豪傑ならば、吳學究先生を知り給ふや。朱貴が云ふ、吳學究は乃是我山陣の軍師と成て、兵權を掌る、足下いかんぞ吳學究を問給ふや。戴宗が云ふ、吳先生と某とは交厚き知己なり。朱貴が云ふ、吳先生も常に足下の噂あり、足下は必定江州の節級神行太保戴院長ならん。戴宗が云ふ、某則其兩院押牢節級戴宗なり。朱貴が云ふ、向に山東の及時雨宋公明江州に流されし時、我山陣に至て、諸の豪傑と參會ありけるに、其節軍師吳學究一封の書簡を足下に寄て、宋公明のことを賴れしに、足下何ゆゑ今却て宋押司を害せんと欲ふや。戴宗が云ふ、宋押司と我とは今同胞の兄弟よりも猶親し、彼今誤て反詩を吟じたる故。遂に擒となつて入牢せり、我彼を救はんとすれども、計を行ふべきものなし、是に依て我今京に上り何とぞ方便を盡し、宋江明を救んと欲す、我豈敢て彼が性命を

朱貴これを接へ、封皮の上を見るに、幾干の文字を書して、

平安家書百拜奉ニ上父親大人膝下一。男蔡德章謹封。

と有ければ、朱貴則封を披き是を見るに、其内の文句にいはく、

見今拏下得應ニ謠言一題ニ反詩一山東宋江上監收在レ牢。一節聽ニ候施行一。

とありければ、朱貴見了て大に驚き、良久しく只惘然と呆れけり。兩人の小賊ははや戴宗を擡て、人を殺す草房の內に至り、已に衣を剝取んとせし處に、腰の縧に一つの牌露れ出しかば、朱貴又これを取て見るに、牌の上に銀字を雕著ていはく、江州兩院押牢節級戴宗、とありしかば、朱貴小賊等に對していはく、汝先手を動すことなかれ、我常に軍師吳先生の語り給ふを聞けるに、江州の神行太保戴宗と云ふ人、軍師とは交厚き舊友たるとなり、恐らくは此人にてぞ有べし、然れども此人いかんぞ此書簡を京に送つて、宋押司を害せんとするや、遮莫天幸を賜うて此書簡我手に落ぬる上は、宋押司の一命先恙なかるべし、宜しく解藥を以て彼を甦らせ、乃ち事の實否を詳に問んとて、頓て小賊に解藥を調合させ、戴宗が口中に灌入しかば、須臾の間に戴宗再び眉を揚げ眼を開いて扒起き、乃ち朱貴が手に彼書簡を披き拏ぬるを見て、大いに呼つて云ふ、汝は誰なれば、斯大膽に蒙汗藥を用ひて我を顚倒させ、剩へ蔡太師が方へ

身汗に濕ひ、殊更堪がたかりしかば、戴宗酷だ暑氣に中んことを怕れ、若清き家もあらば暫時休息して暑氣をも避んに、此所はいかなる困窮の地なれば、只一軒の酒店もあらぬやと、頻に憂ひける所に、遙なる樹木の側に、水に傍ひ湖に臨で一軒の酒店ありしかば、戴宗大に悦び、恰も電の如く馳て酒店の前に至りしかば、乃ち頭を擧此所を見るに、淸淨なる座舖二十餘間あり。戴宗大に悦び、自ら籠を荷ひ店の內に入り、一間の座に就て、籠を卸し衣を脫ぎ、則窓の欄干に靠れ、暫く休息しける所に、一人の酒保來つて問けるは、貴客は酒を用ひ給ふや。戴宗が云ふ、酒は少し用んとす、多く與ふことなかれ、唯急に飯を携へ用ひしめよ。酒保がいはく、我店には牛肉猪肉羊肉鵞鷄鴨等の肴多し、貴客の好に依てこれを進らすべし。戴宗云ふ、我は只素酒を吃して、葷酒を用ひず、別に野菜あらばこれを與へよ、必ず肉を出すことなかれ。酒保これを聞て再び走り出で、頓て一椀の菜蔬と、三碗の酒とを携へ出ければ、戴宗は飢渴の餘り、これを過半用ひて、又飯を求んとせし處に、忽ち天旋り、地轉り眼花み舌攤えて、遂に座上に倒れけり。此處は則梁山泊の下にして、此店は是朱貴が酒肆なり。此時朱貴戴宗が蒙汗藥に中て倒れたるを見て、座上に出來り、乃ち彼小賊兩人に命じ籠を收しめ、又戴宗が懷中を搜させける處に、一つの便袋を取出し、其內を見るに、一封の書簡有しを朱貴に與ふ。

戴宗使命を奉て
蔡知府と辞別を

まじっ戴宗別れに臨で、又再三李逵に命じて云けるは、賢弟必ず酒を食つて、宋長兄の飯食を缺く事なかれ、若萬一酒に醉て、自ら事を誤ち宋長兄にも艱難を請しむることあらば、我深く汝を恨むべし。李逵が云ふ、長兄かくのごとく疑ひ給はゞ、我今日より酒を禁じ、旦暮牢中に在て、宜しく宋長兄に事ふべし。戴宗これを聞て大に悦んで云ふ、賢弟もしあへて此のごとく心を留て宋長兄に事へなば、我全く心を安んずべし、假にも怒を發し爭を惹く事なかれとて、遂に宋江に別れて牢中を出で、此日より李逵は酒を斷て牢中に在り、旦暮宋江に事へて寸歩も離れず慇懃に務けるこそ優しけれ。さて戴宗は宿所に回り、旅裝を調へ書簡を便袋に收め、自ら籠を荷ひ、四つの甲馬を雙の腿に拴著け、則神行の法を做て呪語を念じ、遂に江州を離れて、東京へと進發し、當宿晩に至て旅宿を求め、甲馬を取て休息し、翌日未明に起て又四つの甲馬を兩の腿に拴つけ、遂に籠を荷うて旅宿を出で、かの神行の術をなして飛が如くに跑しかば、千里を遠しとせざりけり。此日もはや紅日西山に傾き夕陽斜なりしかば、又旅宿を求めて休息し、翌日五更の一天に起き、早涼に乘じ神行をなし、足に信て馳けるに、三百餘里を過ぎ、時已に巳の上剋なり。戴宗少し疲れける故、若も淸淨の酒店あらば暫く憩んと欲し、左右を伺ひしか共、更に一座の酒店もあらざりけり。此時六月の初旬にて、天氣甚だ熱し、全

の書簡を以て、京の家父蔡太師が方に送つて、來る六月十五日の生辰を賀せんと欲す、汝我が爲に勞を辭せず、京に登り全く事を調へ、返書を携へ回らば、我自ら重く汝を賞すべし、汝彼神行の法にて、京に行かば上下の往來僅十日の内なるべし、必ず日限を差へず、早々恙なく歸鄕せよ。戴宗命を受け謹んで領承し、乃ち二箱の禮物と一封の書簡とを取て、知府に拜別し、先家に歸りて禮物を櫃の內に收め、直に牢中に來て、宋江に見えて云けるは、長兄心を安んじ給へ、我此次京に上るこそ幸ひなり、蔡太師の方に少し計を施し、いかんともして長兄を救ふべし、我又旬日の內には必ず歸らんと思へば、明日より朝夕の飯食は、李逵に命じ送らしむべき間、心を寛げ我が回りを待給へ。宋江が云ふ、賢弟宜しく計を轉らして、我が一命を救ひ給へ。此時戴宗李逵を呼で、牢中に至らせ、乃ち語つて云けるは、宋長兄醉後誤つて、反詩を吟じ給ひぬるゆゑ、今かく擒となつて入牢し給ひ、我又知府が命を請て東京に上る間、其內朝夕飯食は獨汝を賴むなれば、必ず怠りなく、宋長兄に事て懇情を盡せ。李逵大に怒て云ふ、只反詩を吟じたるのみに何の罪あらん、當世謀反を企つる輩、悉く大官をなして安穩なり、某斯在上は誰か敢て宋長兄を惱さんや、若妖恠にても宋長兄に仇せん者あらば、我平生の大斧を以て一々頭を砍劈べし、戴長兄必ず心を安んじ、東京に赴き給へ、某毛頭怠ることある

謝して云けるは、這回若汝が高見にあらずば、必定宋江に誑かるべし。黄文炳が云ふ、此事若延引に及ばゞ悪かりなん、早々書簡を修へ給ひ、使者を京に馳せ、宜しく尊父太師恩相に告知せまゐらせ、相公國家の爲に大功を建給ひしことを、帝へ奏聞ならしめて、高名を天下に振ひ給へ。知府これを聞て大に悦び、則黄文炳に謝して云けるは、我早々書簡を修へ、使者を京に遣し、足下此囘の大功詳に父太師が方へ告知せ、早速天子に奏聞あらしめ、足下に大官大職を授け、互に富貴榮華に隆えて、共に裀を重ね鼎を列ねて娯むべし。黄文炳が云ふ、某原來一身を門下に倚し事なれは、萬一寸進を得て立身する事あらば、命を捨て力を盡して相公の大恩を報ずべし。蔡九知府此日一封の書簡を寫して、京に使者を馳んとて、已に用意を調へしかば、黄文炳又云ふ、相公須く人を選みて此使者を命じ給へ。知府が云ふ、當地に兩院の節級戴宗と云は、能仙術を曉して神行の法をなし、一日の内に八百里の道を行く、唯好此者を遣すべし、然らば上下の往來僅旬日の間ならん。黄文炳これを聞き、果してかく調法の者あらば、大いなる幸なり、と悅びけり。知府酒宴を設け、黄文炳を欵待し、夜も更しかば、黄文炳知府の家に一宿し、翌日早々囘りけり。扨蔡九知府は多く金銀珠玉等の禮物を調へ、二つの籠の内に收め、次の日戴宗を呼で、後室に至らしめ、卽命じて云ふ、我此回二籠の禮物幷に一封

九知府是を聞き只呆れける處に、黄文炳又知府に對して云けるは、相公速に彼營中の差撥、ならびに牌頭等を呼寄給ひて、此者初て來りしより、此のごとく狂人にてありしや、又頃日よりの狂人なるや、具くこれを問給へ、若初よりの狂人にてあらば、是則眞なり、若頃日よりの狂人ならば、是則詐なり。知府が云ふ、汝が言大に當れりとて、則人を馳て、管營差撥ならびに牌頭等を呼で、宋江が狂人の起りを問ければ、管營差撥敢て僞らず、唯直言を以て訴へけるは、此者初て來りし時は狂人にあらず、定て頃日より狂人になりしならん。知府此言を聞て大に怒り、忽ち左右に命じ、宋江を摑り倒さしめ、一連に痛く五十棒打せしかば、皮さけ肉綻び、鮮血淋漓渾身紅に染けり。戴宗は此光景を見て、大に寸心を惱しけれども、更に宋江を救ふべき計あらず、暗に萬千の悲歎を催すこそ哀れなり。宋江初の間は猶胡言亂語を以て狂人を詐り做けれども、栲問甚だ嚴なりしゆゑ、遂に白狀して云けるは、某前日潯陽樓に登て、大に爛醉し、誤つて反詩を吟じぬ、毛頭別意あるにあらず。知府白狀を取て、先重さ二十五斤の頸枷をかけ、乃ち大牢の内に入置て緊しくこれを守らせけり。戴宗は手下の牢守共に命じて、宋江を懇に憐ましめ、朝夕又自ら酒食を牢中に送て宋江を欵待けり。是によつて格別艱難の大牢に移れども、苦みなかりしなり。扨蔡九知府は黃文炳を後室に邀へて深く

○梁山泊戴宗に假信を傳しむ

蔡九知府倘緣故を問はんとせし所に、彼黄文炳屏風の背後より進み出で云けるは、相公必ずこの言を信じ給ふことなかれ、宋江が壁に書たる詩詞の筆跡、決して狂人のなす所にあらず、恐らくは狂人と云には詐あらん、先速に是を捉へて試み給へ。知府が云ふ、汝が言大に可なりとて、又戴宗に命じけるは、汝衆人善惡を論ぜず、彼罪人宋江を捉へ來れ、我專汝が音信を待ん。戴宗命を受け大に苦しみ、再び軍卒等を引て營中に至り、戴宗則人目を謀き、暗に宋江に對して云けるは、黄文炳知府の影身に添て妨ぐるゆゑ計調らず、再び命をうけて來れり、長兄先一旦擒となつて州裡へ至り給へ、重て良計有べしとて、宋江を捉へ囚車に入れ、則軍卒等にこれを擡せて、直に江州府裡に至りしかば、知府遂に宋江を堦の下に引せこれを見るに、宋江知府を睨み大に罵り呼つて云けるは、汝は何者なれば我を捉へしぞ、我は是玉皇大帝の婿として、此度十萬の天兵を掌て大元帥となり、乃ち閻羅大王を前軍に備へ、五道將軍を後陣に備へ、急に汝を活捕て、江州城を焰燒せんと欲す、我が丈夫玉皇大帝、我に賜つたる金印、重さ八百餘斤あり、汝等若早く災を避去ずんば、死立地に至るべし。蔡

はいづれに在や。牌頭官が云ふ、宋江は今已に抄事房にあり、宜しく某に從つて來り給へとて、戴宗並に諸軍を引て抄事房に至りける處に、宋江は頭髪を振亂し、面上に泥を塗り、只顧胡言亂語をなして、呼り狂ひ地上に倒れ、則戴宗並に軍卒等を見て罵りけるは、汝等何奴なれば我が玉殿に入や。戴宗故意大に怒り、卽軍卒等に命じて、宋江を捉はしめんとせし處に、宋江眼を瞬開て亂に打て懸り、再三罵つて云けるは、我は是玉皇大帝の女壻なり、丈人今十萬の天兵を我に與へて、汝が這江州を攻しめ給ふ、乃ち閻羅大王を先鋒とし、五道將軍を後陣に備へ、我は是大元帥として一つの金印を授れり、其重さは八百餘斤あり、汝等もし旗を捲て降參せずんば、只一鼓に生捉んとて、四面八方に跑て狂ひしかば、諸の軍卒此光景を見て云けるは、此者原狂人なり、是を捉へて何の用かあらん。戴宗が云ふ、誠に汝が云所其理あり、先回りて知府相公に此光景を訴へ、若彌彼を捉へ給はんとならば、再び來て捉ふべしとて、遂に衆人空しく城中へ歸りけり。此時蔡九知府は廳上に出て專ら消息を待居ける處に、戴宗頓て軍卒等と共に、廳前に至つて訴へけるは、彼宋江と云ふ者は、原狂人にして、頭髪を亂し面上を泥にし、只顧亂言を呼つて地上に狂ひ倒れ、一點も正氣これなし、これによつて某等先これを捕へずして馳回りぬ、と口を揃へ申ける。

を酌み、覺えず大醉に及び、此兩日は悉々として快からず、今日も猶打臥ありぬ。戴宗が云ふ、其日長兄彼樓上の粉壁に、何等の言語を書給ひしや。宋江が云ふ、醉後の亂言、はや全く忘れ畢ぬ。戴宗低言て云けるは、今蔡九知府某を廳前に呼で命じけるは、汝多くの軍卒を領し營中に馳せ、反詩を吟じたる罪人、鄆城縣の宋江を捕へ來るべしと命を奉ぬ、此故に某是を知て大に驚き、先諸の軍卒等を我宿所に待しめ、我今預め來つて、此事を長兄に報ぬ、唯知らずいかなる計を以て能長兄を救はんや。宋江是を聞き大に驚きて云ふ、已にかくのごとくば、我命必ず脱れがたし、終に江州に於て自ら死を致さんこと、去とては無運なりとて、天を仰ぎ歎息して止ざりけり。戴宗良久しく默然として在けるが、忽ち計を思ひ出し、宋江に對して云けるは、某今長兄に一つの計を施さしめ進せん、我は先回て少刻軍卒等を引て、再び來るべき間、長兄は宜しく頭髮を亂し、面上に泥を塗り、詐つて狂人の體にもてなし、地上に打倒れ、一向胡言亂語を呼で狂ひ給へ、然らば我又回つて狂人のよしを知府に訴ふべし。宋江是を謝して云ふ、兎も角も賢弟の教に順ふべき間、望らくは賢弟いよ〳〵我爲に力を竭し給へ。戴宗が云ふ、某豈敢て疎略あらんやとて、遂に宋江に別れ、城中に回り觀音庵に至り、諸〳〵の軍卒等を引て、再び營中に來り、則高聲に呼はり問ひけるは、新來の流人宋江と云ふ者

黄文炳が云ふ、某昨日彼酒保に問けるに、彼答て前日來りて酒後に是を書たりと告ぬ、若宋江を捉へんと欲給はゞ、營中の文冊を査め給へ、早速實否知れ候はん。知府が云ふ、汝が高見極て明かなり、宜しく文冊を査むべしとて、頓て左右に命じて、營中の文冊を取出させ是を見るに、今五月の册に於て、新配の流人等が名を寫したる内に、果して鄆城縣の宋江と云ふ者ありければ、黄文炳大に驚き、是則謠言に應ぜし者なり、小事に同じからざれば、是を早く捕はしめ給へ、萬一事延引に及んでは、風聲洩れ、彼必定連夜に迯失せ、後悔して益あるまじ。知府これを聞て其議に同じ、其日兩院の押牢節級、戴宗を呼で命じけるは、汝急に軍卒等を引て營中に馳せ、彼潯陽樓にて反詩を吟じたる罪人、鄆城縣の宋江と云ふ者を捉へ來れ、必ず時刻を差へ、自ら誤つことなかれ。戴宗命を奉け、心中大に驚き、終に廳前を退出して役所に至り、頓て軍卒等を催し先約を定めけるは、汝等衆人各器械を持て、我が宿所彼城隍廟の隔壁なる觀音庵に會合せよ、必ず時を過つべからずと命じ、且衆皆私宅へ歸りければ、此時戴宗は自ら仙術神行の法をなして暫時の間に先營中に至り、直に抄事房に入て宋江を見るに、獨安々と心よく床の上に打臥て在けるが、戴宗の來しを見て忙しく相迎へ云けるは、我前日城下に至て院長を問しか共、院長早や他出有て、庵門關したるにぞ、獨自ら潯陽樓に上り一瓶の酒

知らず此詩は何等の者が書けるや。黄文炳が云ふ、相公其姓名を見給へ、明かに、鄆城縣宋江作、と云五字あり。知府が云ふ、此宋江と云は何者ならんや。黄文炳が云ふ、彼自ら分明に書て、不幸にして文を雙頰に刺すと云ければ、必定今當地に流されて、營中に入ぬる配軍にてぞ有べし。知府が云ふ、若果して配軍が所爲ならば、何の大事かあらん、決して憂ふるに足らず。黄文炳が云ふ、相公必ずこれを輕く見給ふこと勿れ、京の小兒等が謠ふ四句の恠言は、正に此配軍が身の上に應ぜり。知府が云ふ、汝何を以てこれを知れりや。黄文炳が云ふ、耗國因二家木一と云を以て、某熟々これを思ふに、國家の錢糧を耗散するの徒は、必定家頭に木の字を著べし、然らば是則宋の字なり、第二句に刀兵點二水工一と云を以て之を思ふに、刀兵を興起するの徒は、必定水邊に工の字を著べし、然らば明かに是江の字なり、此反詩を書たる配軍は、性は宋、名は江と號す、此宋江都の謠言に應じて、反詩を書ぬるこそ天數なり、若急に彼を除き給ふならば、民の福何事かこれにしかん。知府又問て云ふ、縱橫三十六、播亂在二山東一と云は何等の意ぞや。黄文炳答て云ふ、縱橫三十六と云は、或は六六の年、或は是六六の數なり、播亂在二山東一と云は、今鄆城縣は是山東の地なり、此四句都て反詩の作者宋江に應ぜり。知府が云ふ、此反詩は何れの時書ぬるや、且此宋江當地に在やらん、未だ分明に知べからず。

や。知府が云ふ、近來京に頗る新しきこと有て騷動を催す、這回家父太師が書中に、此事を示して云ふ、頃日大史院司天監奏聞して云やう、夜天象を見るに、罡星照て吳楚の分野の地に臨む、敢て亂をなす者あらんとて、我が這江州の地は、別して牢く守るべきとの事なり、殊更小兒等が四句の語を謠うて云ふ、

耗國因ニ家木一　刀兵點ニ水工一　縱橫三十六　播亂在ニ山東一

今都には是等の恠事あつて、文武百官評議區々なり、此ゆゑに父太師急に書簡を下して、我此江州の地を就レ中嚴に守らしむ、あに奇異のことにあらずや。黄文炳これを聞き、良久しく沈吟して在しが、忽ち打笑つて云ふ、此事良に故あり、相公此詩を見て自ら曉し給へとて、彼壁に書たる詩の抄を取出して、知府に呈しければ、大に驚いて云ふ、是眞に謀反の意を含し反詩なり、汝此詩を何れの處にて得たりしや。黄文炳がいはく、某昨日も已に相公を訪ひ奉りしか共、相公は自ら珍客を欵待給ひて、貴閑なきよし承りし故、敢て尊顏を拜せず、再び江邊に至て直に囘らんとせし處に、暑氣甚だ人を蒸して勝がたかりぬるにより、暫く潯陽樓に登て熱暑を避け、壁に書し前人の吟詠などを見て、自らも詩興を催せし處に、こゝに又新題の詩詞あるを看けるに、乃ち此反詩にて候ゆゑ、早速これを抄して尊覽に呈し奉る。知府が云ふ、

禮物を持せ、乃ち一艘の快舟に乘て江を渡り、直に府裡に馳て、蔡九知府を訪ひける處に、此日府裡には遠來の珍客在て、酒宴を設け殊更忙しく見えしかば、黃文炳敢て知府に見えず、再び船を回して、潯陽樓の下に至り、暫く暑氣を避んと舟を下り、直に潯陽樓に登り、自ら欄干に倚り、左右の壁の上を見るに、許多題詠ありければ、卽ち身を起して、壁の邊に近々と來り、一々これを讀て、遂に宋江が題したる西江月の詞と並に四句の詩を看て、忽ち大に驚いて云ふ、這詩は何者が書たるにや、正しく謀反の心を含たる反詩なりとて、頓て酒保を呼で問けるは、此兩篇の詩詞を作りたる者は誰なるぞや。酒保が云ふ、昨日一個の人來て、只獨一瓶の酒を飮み、醉後に此詩を吟じ、壁の上に書ぬ。黃文炳が云ふ、凡何等樣の者なりしぞ。酒保がいはく、面上に兩つの金印有しかば、多くは營中の者なるべし。黃文炳が云ふ、必ず此兩篇の詩詞を刮無することなかれとて、自ら一紙を出して是を寫し取り、遂に樓を下り船に乘り、其日は宿所に回りけり。翌日又兩人の家僕を從へて、知府が家に至りければ、知府先人を出して、黃文炳を後堂に邀はしめ、小刻知府も又自ら後堂に出て、黃文炳に對面し、閑談已に罷りぬる處に、黃文炳知府に問て云けるは、知らず尊父太師の方より、近日使者到來しけるやいなや。知府が云ふ、前日書簡到來しぬ。黃文炳又問て云ふ、頃日京には別に新しき事もあらざる

刺二文雙頰一。那堪レ配二在江州一。他年若得レ報二寃仇一。血染二潯陽江口一。

宋江書罷て大に悦び大に笑ひ、又數盃の酒を酌で醉益發し、手を舞ひ足を踏で、再び又筆を擧げ、同じく四句の詩を吟じ、壁の上に寫していはく、

心在二山東一身在レ呉　飄二蓬江海一謾嗟吁
他時若遂二凌雲志一　敢笑二黄巣不二丈夫一

宋江已に詩を書了て、又其傍に、鄆城の宋江作ると、五つの大文字を書き、則筆を擲て、又自ら良久しく歌ひ、再び數盃の酒を飮んで、覺えず酩酊爛醉し、酒力に勝ずして、遂に自ら袖を拂て樓を下り、偏に浪々滄々として、忙はしく營中に回り、乃ち房門を開て床の上に打臥し、直に五更の時に至つて酒醒けるに、昨日潯陽樓に在て詩を吟ぜしこと、全くこれを覺えざりけり。こゝに又江州の岸に對して、無爲軍と云ふ所あり。此所に黄文炳と云て、昔日通判の職を做し者在けるが、經書を讀むといへども、巧言令色の輩にて、心大きにせまく、原來賢を嫉み能を妬み、己に勝れる者は是を害し、己にしかざる者を弄し、專ら鄕里に在て人を傷ふ。此黄文炳かつて、江州の蔡九知府は當朝の蔡太師が男たるを聞き、每度江を渡て知府を訪ひ、いかにもして蔡九が擡擧を被り、再び官をなさんと欲しぬ。此日這黄文炳兩人の家僕に、多く新果等の

宋江醉吟
潯陽樓上の粉壁に筆を揮ふ

で言を領し、遂に樓を下りて、未だ暫くもせざるに、はや一樽の美酒と六盤の佳肴とを拿て、再び樓に上りしかば、宋江これを見て心中想道く、此の如き美麗なる肴饌器皿他の及ぶ所にあらず、誠に富貴の江州かな、我罪を犯して此處に至り、かくのごとき眞山眞水を看て、浮生を慰ましむること亦宜ならずや、我故郷にも幾干名山古跡有りといへども、曾てこれらの風景に如ず、これを樂まずんば有べからずとて、只獨欄干に靠て一盃を乾し、兩盞を酌み、覺えず爛醉に及び、猛然として心中想ひけるは、我山東に生れ、鄆城に長じ、天下の豪傑と交を結んで、一つの虚名を世に振ふといへども、今已に三十餘歳に至つて、いまだ功成り名遂ず、剩へ罪を蒙りて此所に流され、我故郷の老父舍弟にも、再び面を對せず、斯參商の憂に逼ること、是何の應報なるぞやとて、潸然として涙を流し、風に臨み目に觸れ、恨を感じ懐を傷め、忽ち一篇の西江月の詞を作て、酒保に筆墨を借り、頓て身を起し粉壁の上を見るに、已に多く先輩の題詠ありければ、宋江暗に想ふやう、我も亦宜しく此壁の上に書べし、若他日身榮えて、再び此處を過らば、重ねて此樓に上て、我が此一篇の文字を看、今日の艱難を思ひ出すべしとて、自ら酒興に乘じ、卽ち粉壁の上に筆を揮ひ、其詞を書して云ふ、

自㆑幼曾攻㆓經史㆒。長生亦有㆓權謀㆒。恰如㆘猛虎臥㆓荒丘㆒。潛㆓伏爪牙㆒忍受㆖。不幸

れず。宋江又張順が宅を問けるに、是は原來城外の村中に住し、城下に來ることは極めて罕なり。宋江是を聞て大に悦び、再び城外に出て、張順が家を尋けれども、容易尋遇ず、自ら鬱鬱として數十歩ばかり繞り出て、江中の風景を見るに、誠に類少き佳觀なり。宋江すぐに一軒の酒樓に過りて酒旆を仰ぎ見るに、酒旆の上に潯陽江正庫雕と云ふ六つの文字あり。又簷の外に掛たる額には、蘇東坡が書たる潯陽樓といふ、三つの大文字あり。宋江此額を見て思ひけるは、我昔日鄆城縣に在し時、江州には潯陽樓と云ふ名所有と聞けるに、果して此處にありけるよな、我いかんぞ空しくこゝを過んや、宜しく樓に上て、風景をも一見せばやとて、樓前へ至て門の上を見るに、又兩面の額あり、五つの大字有て世間無比酒と書り。又一面の額には天下有名樓と云ふ五文字なり。宋江已に樓に上り座を求め、獨自ら欄干に倚て、目を縱にし此處を見るに、眞によき一座の酒樓なり。雕簷日に映じ、畫棟雲に飛び、欄干低くして軒窓を接へ、簾幙高く戸牖に懸り、吹笙品笛總て座毎に設け、其美麗なること言語に盡すべからず。宋江良久しく此景を見て、讃嘆轉頻なり。時に一人の酒保樓上に來て簾を下し、乃ち宋江に對して云けるは、官人は別に客を待給ふや、又獨自ら酒を酌給ふや。宋江口に信せて答けるは、我猶兩人の客を待てどもいまだ見えず、汝先一樽の美酒と、幾干の佳肴を携へ來れ。酒保謹ん

腹を壊ひてこれを苦しむのみ、別に重病にあらざれば、唯瀉を過るの藥六和湯を求てこれを服さば、忽ち瀉も止り痛も住るべし。張順が云ふ、某今日も兩尾の鯉魚を携へしかども、宜しく之を棄つべし。宋江が云ふ、既に兩尾の鯉魚を携へ給ふとならば、足下我が爲に是を管營と差撥とに分ち送り給へ。張順其言に應じ、乃ち鯉魚を把て、管營と差撥とに送り、直に馳て六和湯を求め、再び營中に回り、宋江に用ひしめ、其日は張順暫く看病して、遂に私宅に歸りけり。翌日戴宗李逵兩人多く酒食餚果を携へ、宋江を尋しに、病いまだ快からざるゆゑ、床の上に臥して、酒肉をも用ひざれば、戴宗李逵大に憂ひ、其日は終日看病して、黄昏に回りけり。宋江は營中に在て、五七日六和湯を用ひし處に、病全く痊て快く覺えければ、城下に馳て、戴宗を訪はんと欲しけれども、此日は若戴宗が來ることもやあらんと、心に待けれども、終に見えざりしかば、次の日宋江朝飯後若干の銀を懐にし、城下に至て其邊の人に戴宗が住所を問ひけるに、戴院長はいまだ妻子もなく獨身なるゆゑ、城隍廟の隔壁なる觀音庵を借て住給ふ、若事あらば彼庵に尋往き給へ。宋江こゝに於て直に觀音庵に尋けるに、はや他行せし體にて庵門關しありしゆゑ、宋江立去て李逵が家を尋ける處、一個の人有て告て云ふ、黒旋風は未だ安身を定ず、東方に兩日住し、又西方に兩日歇み、偏に雲遊の如く、其止る處知

張賢弟既に尊敬の心を表さんと欲して、再三席主をなさんと望むに、今日は先席主を張賢弟に譲て、其心の信を全からしめ給へ。宋公明が云ふ、今日の席主原來某が當然なれ共、院長かく諫め給ふ上は、某豈敢て教に違んや、他日に某酒宴を設け、今日の席を還すべし。張順大に悅び、乃ち兩尾の鯉魚を携へて、戴宗李逵並に宋老と倶に、宋江に隨つて琵琶亭を下り、遂に營中に至て抄事房に入りしかば、宋江取敢ず先兩錠二十兩の銀を宋老に與へけるに、宋老は天に歡び地に欣び、再三拜謝して宿所に囘りけり。此時天色既に晩けるゆゑ、張順彼兩尾の魚を宋江に送て別を告しかば、宋江頓て張橫が書簡を取出して、張順に與へければ、是を請取、直に別れて出去り、戴宗李逵も城下に立歸れり。宋江は兩尾の鯉魚を得て、一尾は管營へ送り、一尾は自ら賞翫せしに、其味甚だ美なるに依て多く用ひし處、其夜四更の時に至て、腹頻に痛み、曉までに凡二十度ばかり瀉し、たゞ昏々として床の上に臥しけるが、宋江が人となり、常によく人を敬ひ交るゆゑにや、營中の流人ども都て宋江を訪ひ、湯を沸し粥を煑、或は手を按り足を拈り、殊更懇に看病をなせり。翌日張順又兩尾の鯉魚を携へ宋江を候ひける處に、宋江は諸の流人どもに看病せられて、床の上に打臥て在ければ、張順これを見て大に驚き、急に醫師を請て療治を加へんと欲する所に、宋江が云ふ、我昨日多く魚肉を食しける故、

琵琶高止に
老父母女子
玉蓮が歩傷を
及抱と

しく拜謝して云けるは、我輩豈敢て多くの銀を望んや、若三五兩の銀を得なば、是十分の福ならん。宋江が云ふ、我が一言汝等を誑くことなし、汝宋老、若自ら我に隨ひ營中に來らば、我速に二十兩の銀を汝に與ふべし。宋老夫婦いよ／＼拜謝して云ふ、貴客若肯て二十兩の銀を惠み給ひて我が輩を救ひ給はゞ、恩は天地を等うして、親子三人身を歿るまでこれを忘るまじ。此時戴宗は大に李逵を恨み云けるは、汝又人を打傷ひ、宋長兄に多くの銀を費さしめ、倘白々として悔ざるは、甚だ以て道理なし。李逵が云ふ、我は唯指頭を以て女が面を彈きけるに、彼自ら倒れぬ、我いまだ此のごとき懦弱なる女を見ず、汝親子若猶これを憤らば、我面を三百拳打て恨を雪げ。宋江等これを聞て衆皆一咲を催しけり。酒亭の上下、事を表さず濟べきを悦び入ける。張順自ら酒保を呼で、今日の席は我則東道なり、酒錢は我是を償ふべきぞ。宋江是を聞て、我賢弟等を引て酒を勸め、いかんぞ此席の主を張賢弟に讓んや、尤禮に於て不可なり。張順再應席主たらんと求めて云けるは、宋張兄山東の地に居給ふ時だにも、我が兄弟兩人、何とぞ鄆城縣に趣きて長兄を訪ひ奉らんことを願ひたるに、今日天幸を賜つて押司の尊顏を拜し、手を一亭に握る、いかんぞ一點の欵待を盡さゞらん、今日は某先席主をつとめ、聊尊敬の誠を表すべし。戴宗が云ふ、公明長兄すべからく某が言を聞給へ、

四編　巻之三十六

○潯陽樓にして宋江反詩を吟ず

琵琶亭にては李逵女性を彈倒しければ、酒樓の主大に駭き、急に家僕に命じ、女が口中に水を灌ぎ藥を含せ、漸甦らしめ扶け起しけるに、面の上大に傷ひ破れけり。女が父母は原女が爲に事を動さんと欲しけれ共、女を打たる者は黑旋風李逵なりと聞しかば、先自ら大いに怕れ、あへて一言の是非をも云ず、只手巾を把て女が頭を包み、父母同じく女を痛りけり。宋江此體を見て、先女が母を呼で問けるは、汝が夫の姓はいかん。彼老母が云ふ、我等が輩姓は宋にて、原京師の者なり、女が名は玉蓮と申し、曲を知て唱ふにより、乃ち這琵琶亭に在て、客の爲に曲を唱ひ、僅の助を求め、親子三人これを過活とす、女本短氣者なるゆゑ、客の勢を顧ずして一向曲を唱ひ、反て貴客の怒を惹出し、自ら苦みを取りぬ、我輩貴客を怨ることとあらず。宋江彼が辭の老實なるを聞き、尚且同姓たることを感じ、又老母に對して、汝宜しく人を我に跟て營中に遣せ、我汝に二十兩の銀を與へ、女が醫療錢に當しむべし。夫婦の者是を聞て忙

弾きけるに、彼女忽然として座上に倒れ、只昏々として半死の體に見えけり。酒樓の主大に驚き、此女の生死も分別すべからざれば、客を皆扯留置て官司へ訴ふべしと騒ぎける。其決著は次の巻に見るべし。

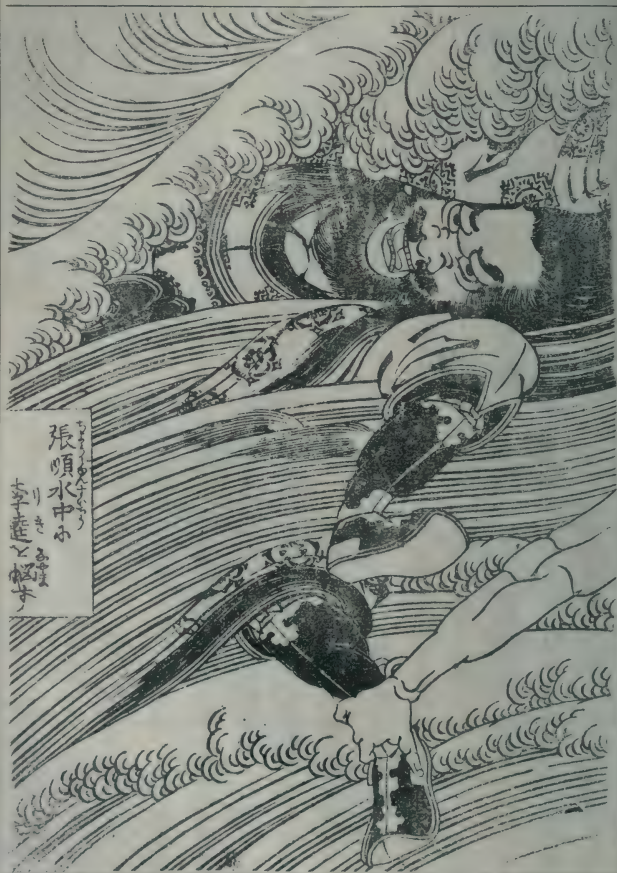
此巻に酒保と有は、酒店にて客の前に侍し酒を篩ものなるべし。又造酒家にて酒保と云は日本に俚俗杜氏と呼ものなるべし。前々の編、武將蔣門神を苦め施恩が怨を報ふ處に出たる酒保是ならん。然れば酒保の二字を酒肆杜氏とのみ譯すべからず。又宋江酔を醒さんとて魚辣湯を望み鮮魚を欲する、是は日本の潮煮に辛味を和したる食物なるべし。通俗忠義水滸傳には魚辣湯のことなく、只鮮魚を欲するとあり。又紅魚と書り。日本の鯛赤魚いづれ海魚の名にて、潯陽大江なりとも海魚は有べからず。此江に網する金鱗の大鯉魚を紅魚とは云べからず。舶來の水滸傳には、魚辣湯、辣魚湯、二様にあり。紅白魚湯ともありて、紅魚と云ふ事見えず。

出て、料らず足下に相まみゆ、今日已に三人の豪傑に會すること、是則天の賜る幸なり、先宜しく座を寛げ三盃を傾け給へとて、再三酒保に命じ酒肴を新に設しめ、頓て酒宴を始ける。張順又宋江に對して云けるは、長兄もし鮮魚を用ひんとならば、某自ら數尾の鮮魚を取て來るべし。宋江是を聞て悅び謝しければ、李逵も大に悅び、則かくのごとくば、我張順と共に往て魚を求むべし。戴宗これを責て云く、汝水を飲て滿腹し、何ぞいまだ足らざるや。張順打笑ひて李逵が手を携へ、兩人已に琵琶亭を下て江邊に至り、張順諸の魚船を見て、一聲呼りしかば、彼江面の漁船盡く皆岸の邊に漕著ぬ。張順問て云けるは、汝等何の船に大いなる鯉魚ありや。時に此漁船より答て云く、大いなる鯉魚は某が船にあり。又かの漁船より答て云く、大いなる鯉魚は某が船なりとて、暫時の間に十四五尾の鯉魚を携へ出ぬ。張順これを見て其內四尾を擇取り、再び琵琶亭に至て宋江に贈りしかば、宋江大に悅び是を謝し、乃ち又座を改めけるに、李逵は張順よりも長年なりければ第三に坐し、張順は第四に坐し、彌興を得て酒を酌ける處に、二八ばかりなる一人の女、忽ち宋江が前に至て恭しく禮を行ひ、頓て淸音を開て曲を唱ひければ、李逵これを聞て大いに怒り罵つて云く、我まさに豪傑の事を語り慰まんとおもふに、汝來て一座の興を妨ぐるは莫大の無禮なりとて、忽ち指を以て女が面を

宋江を指ざし張順に對して云く、足下は此長兄を識認給ふや。張順つら〳〵宋江が面を見て云けるは、彼長兄は當地の人かは知らね共、某は曾て此江州にては見たる事なし。李逵躍出て云けるは、汝知らずや、此長兄は是黒宋江と云人なり。張順が云く、彼山東の及時雨鄆城縣の宋押司にはあらずや。戴宗が云く、乃ち其及時雨宋公明なり。張順是を聞き忽ち地上に拜伏して云けるは、某かつて押司の大名を聞く事久し、今日いかなる吉日なれば押司を覩奉るや、世上の人皆押司の清徳を稱して云けるは、押司は能人の危きを扶け人の困めるを救ひ給ふとなり、誠にこれを敬はずんば有べからず。宋江が云く、某が如き何ぞいふに足らん、前日我當地に來る時、掲陽嶺の下なる混江龍李俊が家に數日逗留し、其後又潯陽江の上にて足下の兄張横に遇ひ、直に穆弘が家に數日滯留せしに、令兄張横足下に届け得させよとて一封の書簡を我に寄ぬ、然れ共我此所に至て未だ日あらず、殊更足下の住所をも知らざる故、猶足下を訪ふこと延引せり、則其書簡を營中に置り、今日は戴院長李逵兩人に誘はれ、此琵琶亭に至り快く酒を酌て江中の風景を遊覽し、某又鮮魚を求めて猶三盃を酌んと欲しける處に、李逵自ら馳て鮮魚を求むべしとて江邊に往けるが、少刻有て江邊頻に鬧ぎぬるゆゑ、酒保を遣しこれを看せしめけるに、李逵爭論を倣出たると告しによつて、これを勸解んとて忙しく江邊に馳

の足にては水瀾を踏み、あたかも平地を行が如くにして、江水身を浸す事只臍より下のみなり。遂に岸の邊に至りければ、張順兩手を以て李逵が大腰を抱き、岸の上に投上げけり。諸の見物人一齊に咄と喝采、暫く鳴も止ざりし。宋江岸の上に在、張順が水中の自由なるを見て、誠に張横が云し所差ざりけりと、暗に感心淺からず。已にして張順李逵同じく岸に上て宋江等が前に至る。戴宗李逵を見るに、多く水を飲しとみえて、只顧口中より白水を吐ぬ。戴宗が云く、汝兩人先琵琶亭に至て談話せよ。此時張順李逵各衣を著し、總て四人再び琵琶亭の上に來て座已に定りしかば、戴宗則張順に問て云く、足下は我を識認給ふや。張順が云く、某素より院長の尊顔を識りしかども、未だ良緣あらずして謁を下風に取ざりけり。戴宗又李逵を指ざして云く、足下常に彼をもかつて認識たるや。張順が云く、いかんぞ李長兄を見知らざらん、只未だ席を交へざるのみなり。李逵張順に對して云く、汝我に飽まで水を飲しめて嘸滿足にあるべし。張順答て、汝も又我を痛く打て益喜悅なるべし。戴宗が云く、汝兩人今般却て交を結び盟を誓ふの期至れり、古の語にも、打ずんば相識を成さずとこそいふなれ。李逵又張順に對して云く、汝必ず陸路に於て我を犯す事なかれ。張順答て、我は只水中に在て汝を待べきに、汝必ず江邊に至ることなかれとて、四人齊しく一笑を催しけり。戴宗又

を見て心を驚かしめける處に、彼漢子又李逵を引上ては息を續がせ、又引入ては水を飲ましめ、浸す事數十度に至りしかば、宋江餘に忍び兼ね、乃戴宗と商議して、一個の人を央て救はしめんと欲し、頓て戴宗を馳て、先諸人にかの魚牙主が姓名を問ひし處に、諸人答て云く、彼白面の漢子は當地に於て魚店の行家張順と云ふ者なり。宋江忽然として想出して云く、彼者必定浪裡白跳と云ならん。諸人が云ふ、則其人なり。宋江是を聞き戴宗に對して云けるは、彼が兄張横と云ふ者這囘張順に書簡を送んと欲して、則其書を某に寄ぬ、某未だ彼を訪ふ暇あらずして、其書簡尚營中に置り。戴宗が云く、已にかくあらば我宜しく張順を岸邊に呼寄すべしとて、頓て江中を望み大音に呼りけるは、張豪傑先手を動し給ふことなかれ、汝の令兄より書簡を寄られてこゝにあり、今汝に此書簡を屆くべき間、其大漢子を免して速に岸に上らしめ給へ。張順遂に此言を聞て、何人なるやと頭を擡て岸の上を望見るに、戴宗獨諸人に拔出て在ければ、張順原來戴宗が面を識しゆゑ、則李逵を放ち棄て、岸の上へ扒上り、戴宗に向ひ恭しく禮をなして云けるは、願くは院長某が不禮を免し給へ。戴宗が云く、足下我が難儀を顧て宜しく彼者を饒し給へ、然らば我一個の人を汝に見えしめて悅ばすべし。張順已に領承して再び水中に跳入ぬ。此時李逵は浮つ沈つ苦みけり。張順頓て李逵を把て扶け、兩

て船の上に跳乘し處に、彼漢子は原李逵を賺して船に乘しめんと圖りしことなれば、今李逵が計に陷て船に乘たるを見て大に悅び、頓て篙を岸に著て船を撑開きしかば、船は箭のごとくに江心を望んで出にけり。李逵も頗る水性を識しかども、水中の働は陸路の働にしかざりし故、自ら心大に駭き、少し猶豫しける處に、彼漢子篙を撇て呼りて云けるは、汝賊漢早く勝負を決せよとて、頓て李逵を捉て、又罵つて云けるは、我今汝と拳を交へん事を休て、先汝に飽まで水を飲しむべし、とて兩足を擧て杫を力に任せて踏しかば、彼小船底は天に朝て倒に翻り、兩人の英雄齊しく水中に落入ぬ。宋江戴宗は忙しく岸邊に追至て彼船を見るに、底を上にして倒に翻りければ、宋江戴宗岸の上に在て、這はいかにと身を擣て憂ひ恨しが、更に益もなかりけり。江岸の上にはや三五百人集り、盡く柳樹の下に立並んで見物し、各評議して云けるは、彼の大漢子此度は計に落しかば、縦ひ一命を脱れたりとも、滿腹に水を飲べし、嗚呼笑止や、と衆皆手に汗をぞ捏りけり。宋江頸を伸して江面を望み見るに、彼魚牙主李逵を揪へて一遭は扯上げ、又一遭は扯下げ、兩人の豪傑江中の清波碧浪の内に在り、浮つ沈つ組合ひ、今もや息絶なんと思はれけり。一人は全身雪よりも白く、一人は渾身墨よりも黑し、見る人毎に奇異の兩雄かなと譽ぬ者はなかりけり。宋江戴宗は李逵が水中に在て苦しめらるゝ體

張順水中に李逵を擒す

や。李逵首を回して此人等を見るに、乃ち宋江戴宗なりしかば、略手を緩めける處に、彼漢子忙しく身を脱れ飛がごとくに馳去けり。戴宗深く李逵を恨みて云けるは、我預め汝此のごとき事を惹出さんと料知り、再三無用と制しけれども、汝我が言を容ずして江邊に來り、果して諸人を惱しぬるよな、若一拳に人を打殺しなば必定命を償ふべし、汝すべからく以來を謹愼め。李逵答て云く、長兄かくの如く云給ふは、連累を被らんことを怕れてならん、もし我自ら人を殺しなば、我獨命を償ふのみ、何ぞ必しも人に干らんや。宋江が云く、賢弟只顧爭論をなして平生の義を壞ふことなかれ、先再び琵琶亭に至り、酒を酌で怒氣を散ぜしめよ。此時李逵は宋江戴宗に隨ひて纔に十歩ばかり往し處に、背後に一人の漢子來て大に呼はり罵つて云けるは、賊男子、汝いよ〳〵力量あらば、今また雌雄を決せよ。李逵急に首を回しこれを見れば、則かの魚牙主衣を脱去赤條々になり、一身の肉よりも白きを露し、獨自ら一艘の小船に駕して、李逵が後の岸邊に撐至り、猶一向惡口せり。李逵これを聞て甚だ怒り、忽ち奔雷のごとく吼て身を回し來る。彼漢子これを見て、船を岸に撐著、竹篙を撚て頻に李逵を罵りしかば、李逵も又罵つて云く、汝果して勝負を決せんと思はゞ、早く岸に上つて手脚を交へよ。彼漢子耳にも聞入ず、頓て竹篙を擧て李逵が腿の上を搠破りしかば李逵憤然として大に怒り、身を躍せ

大に驚き、諸船纜を解て、都て江中に撐開きたれば、李逵益猛り狂ひ、右の手に竹篙を持て彼魚商人等を四面八方に追散して、頻に猛威を振ふ處に、小路の上より一人の漢子進み來る。諸人是を見て、魚牙の主來り給ひぬと悅び、衆皆向ひ進んで云けるは、何ゆゑ長兄は晩く至り給ひしぞ、一人の大漢子魚を奪取らんとして、諸の魚船共悉く追散しぬ。彼魚牙主が云く、其無禮をなす大漢子はいづれに在や。諸人李逵を指ざし云く、彼を見給へ、尙岸邊に在て只顧人を尋ねて騷動す。彼魚牙主これを見て忙しく馳來り、大に罵つて云けるは、汝賊漢豹の胃虎の肝を吃たる大膽者たりと云とも、焉ぞよく我が商賣を妨げんや、早くこゝを走り去て禍を免れよ。李逵此漢子を見るに、身の丈は六尺五六寸ばかりにして、年の頃は三十二三歲と見え、面白く鬢黑く、頭には萬字巾を戴き、身には白布衫を著し、人物風雅にして、威風端嚴なり。李逵敢て詞をも囘さず、竹篙を輪して彼魚牙主に打てかゝる。那漢子早くも進み入て、李逵が手中の竹篙を奪取りし處に、李逵急に彼漢子が頭を揪へしかば、彼漢子已に三次まで李逵を踢んとしけれども、李逵は原來水牛に等しき大力なれば、彼漢子を推偏て少しも掙扎せず、恰も鐵鎚のごとき拳を舉て、肩骨を一向續て打ければ、彼魚牙は只徒に眼を瞪開く計なり。斯る處に背後より一箇の人來て李逵が手を握り、大に責て云けるは、汝何ぞかく酒に狂うて人を惱す

して睡るもあり、或は船の頭に出て、結網もあり、或は水中に浮んで、沐浴するもあり。此時五月の半にして、紅日はや西山に沈まんとすれども、魚牙の主未だ來て艙を開かざれば、買者は已に湊りしか共、倘商賣を始ず。李逵直に船の邊に馳倚て、呼り云けるは、汝等此船に鮮魚あらば、其大いなるを我に賣與へよ。漁人等答て云く、我が輩未だ魚牙主來らざる故、艙を開くこと能ず、汝岸の上を見給へ、若干の魚賣人都て魚牙主が來るを待居るなり。李逵が云く、何ぞ一向魚牙主を待ん、先兩尾の鮮魚を我に售れ。漁人等又答て云く、我が漁船の舊例に未だ艙を開かざる前に、預め先酒を供へ、船神を祭ることあり、我が輩只魚牙主が來るを待て、倘未だ船神に酒をも奠らざるに、いかんぞ妄に艙を開て魚を取出さんや。李逵是を聞て大に怒り、忽ち一艘の漁船に跳乘しかば、漁人等李逵が勢に恐れ、敢て攔らんとする者なかりけり。李逵擅に船中を捜しけれ共、一尾の魚もあらざりけり。大江の内にて魚を取る漁船には、都て船の尾に一つの大孔を開て江水を出入させ、活魚を養ふ故、今李逵水なき艙の内ばかりを捜しけるに依て、曾て一つの魚も見えざりしなり。李逵又他の船に乘移りて捜しける處に、若干の漁人等都て岸の上に跳上り、各竹篙を拿て李逵を打んとせしに、李逵大に怒り、焦燥て躍り向ひ、漁人等が亂に打かけたる竹篙を五六本奪取り忽ち扭折て棄ければ、漁人等これを見て

先宋江戴宗が殘し置し二碗を乞取て皆食ひ、自ら一盃を篩で、これを飲て云く、今某自ら馳て鮮魚兩尾を求め來らん、兩長兄これを許し給へ、と云けるを、宋江は笑を忍へ見て在りしが、戴宗ひたすら李逵をとゞめて、其事に馴たる酒保さへ求がたきと云へるを、他より卒爾に望むとも、何ぞ是を得ん。李逵が云く、長兄の言差へり、我自ら漁船に應對せば得ざる事あらじ、酒保小厮等何をか做得んとて、はや躍起つて馳んとするゆゑ、戴宗いよ〳〵制して、汝行かば、又爭論を起さん事必然なり、我等汝三人は此亭の客なり、何爲汝自ら往んや、宜しく彼酒保を央て預めまづ漁人に賣るや賣らざるやと問しめ、若肯て賣らば之を求め、果して賣らずんば、魚牙の主が來るを待て之を求むとも、未だ晩きことあらじ。李逵が云く、我自ら馳て鮮魚を求めんに、漁人等何ぞ賣るまじきや、若彼小厮を遣さば必定魚を得難しとて、遂に亭を出て江邊に馳行けり。戴宗これを見て大に苦しみ、乃宋江に對して云けるは、某不慮に彼を誘引し、後悔已ことを得ず、願くは押司彼が無禮を免し給へ。宋江が云く、彼が本性天然かくのごとくんば、我却て彼が直實なるを敬ふ、院長必ず隔心の言をいひ給ふなとて、兩人樂んで琵琶亭の上にあり、閑談轉濃にして一興を催しけり。扨李逵は遂に江邊に至て此處を見るに、八九十の漁船盡く首尾を連ねて、楊柳樹の下に纜の綱を繋ぎ、若干の漁人等、或は船傍を枕と

も一旦醉を解も可なるべしとて、則酒保を呼で紅白魚湯に辣三分を加へて製り來らしむ。酒保諾ひ、少刻して拿來り、一碗づつを三人の前に具ふ。宋江速に是を用ひんとするに、是又魚鮮ならず、醃のごとく思はれ、宋江戴宗ともに等しく其まゝさし置てこれを食せず。李逵は悉く食し畢て、兩長兄は何ゆゑ好で造へしめ、用ひ給はざるや。宋江が云く、何のゆゑにや魚鮮新ならず、味美ならざればさしおきぬ。李逵是を聞て、忽ち酒樓の小厮を呼で云く、此亭にては鮮ならぬ魚を用ひて、客の錢を貪るや、速に鮮魚を以て、改めて製し來らんや、然らずんば、我忽ち此酒樓を粉のごとく打碎かん、とて大に怒り罵りければ、此體に駭き、酒保多く來り、貴客怒を止め給へ、此處原來鮮魚多しといへども、唯今は猶船中に有て、いまだ是を賣らず、我亭の魚も皆昨日の魚なるが、夏なれば、今日へ圍ひがたく、ぜひなく鹽水を以て洒ぎ洗ひ、或は冷水を屢替て浸し、暑腐を防ぎし魚なれば、籞の魚のごとくならず、誤つて鹽過る時は醃の魚のごときに至る、明かにこれを察し給へ。戴宗が云く、汝等が云ふ所のごとくば、其理あり、今ははや鮮魚を求得らるべきや。酒保が曰く、江中に繫とゞめし漁船、行家の主が來るを待得、諸船一同に價を估して倶にこれを買ふ、此ゆゑに猶いまだ鮮魚を求めがたし、商賣始りし體を見聞次第、又來て命を承らんとて、皆一同に退きければ、李逵は

銀は藥錢として、其打れたる者共に與ふべき間、汝此銀を取て歸るべしとて、再三强て與へしかば、小張乙遂に銀を收め、頓首拜謝して回りけり。宋江又戴宗李逵に對して云く、我輩三人同く酒店に至て三盃を酌ば可ならんか。戴宗が云く、幸ひ前面の江邊に琵琶亭と云ふ酒館あり、是は以前唐朝の白樂天が古迹なり、我が輩彼亭に上り、三盃を酌み、猶其風景を遊覽せば、方によく鬱悶を散ずべし。宋江が云く、若果して琵琶亭に至て酒を酌まば、白樂天が故事を思出して、格別に樂しかるべしとて、三人齊しく彼亭に望で馳來り、頓て亭上に登て此處を見るに、一邊は潯陽江に倚り、一邊は酒店の主が房屋なり。琵琶亭の上には又十四五の客座有て、殊さら美麗なり。戴宗一つの客座に入て、宋公明を上座に就しめ、己は主席につき、李逵は其次に坐し、三人座已に定まりければ、戴宗則酒店の酒保に命じ酒肴を具へしめ、飲酌を始めけり。宋江戴宗李逵と倶に數盃を傾けしが、嚮にも酒肆にて酒を用ひし上なれば、宋江は魚辣湯を用ひて少しく醉を醒さんと思ひ、戴宗に問けるは、此處にて魚を食するに、惜らくは新鮮ならず覺ゆ、此地は鮮魚拂底なりや。戴宗笑て、長兄は何ぞ見給はずや、江中總て魚船なり、江州は原魚米の地なれば、他所に稀なる鮮魚あり、しかも何魚も此江中にあらずと云ふ事なし。宋江が云く、我新魚あらんには些の魚辣湯を得て、聊醒を索て、又酒を酌んと欲す。戴宗自他と

李逵大に市街を騒がす

給へとて、遙後に隨ひ來て、近く前んとする者は一人もなかりけり。李逵これを耳にも聞入ずして直に馳行く所に、後に一人の漢子來て李逵が肩を揪へて呼りけるは、汝何ぞ他人の錢財を奪取るや。李逵大に怒り、忙はしく首を回してこれを見るに、乃ち戴宗と宋江にてありしかば、李逵忽ち面を紅にして大に慚て云けるは、兩人の長兄必ず我を責り給ふこと勿れ、我常にはこれらの非道をなさゞりしかども、今日は想はず宋押司の賜りたる十兩の銀を輸しゆゑ、再び償ふべき銀もなく、殊更押司を邀へ一盃を進め申さんことも能はず、已ことを得ずして、これらのことを惹出しぬ。宋江大に笑て云けるは、賢弟若銀を用ふべき事あらば、只顧我に問て求め給へ、今日明かに輸たる銀、あに能これを奪ひ回すの理あらんや、速に其銀を彼輩に還し給へ。李逵が云く、左も右も押司の命に背じとて、卽ち懷中より銀を出し、宋江に遞與ければ、宋江頓て小張乙を呼で銀を還しける處に、小張乙が云く、某等が本銀十五兩許を取て、李公の輸給ひぬる銀は再び李公へ還すべし。宋江が云く、汝等が勝し銀、何ぞ再び回さんや、宜しく是を取て回るべし。小張乙は心中に、李逵が仇を挾まんことを怖れしかば、曾てかの十兩の銀を取らずして、再三辭退に及びけり。宋江又問て云く、猶李逵に打れたる者有や。小張乙答へて云く、李公に打倒され苦む者、數箇人あり。宋江が云く、已にかくあらば、此十兩の

を二つに排るは、原老賭のなさゞる所なり、先暫く酒を酌で歇み給へ、我が輩は倘自ら勝負を新め慰まんとて、已に李逵を傍に推開しかば、李逵小張乙に對して云けるは、我が今輸たる銀は人の銀にして我銀にあらず。小張乙が云く、遮莫已に輸給ふ上は、今更これを如何せん。李逵が云く、汝宜しく察して其銀を先我に借せ、我明日母銀に利を加へ償ふべし。小張乙が云く、博奕の上に於ては親子昆弟をも顧ずしてこれを敵とし、互に贏を爭ひ、一錢の借貸をなさゞる事は、豫て是を知り給ふべし、然るを汝此銀を借んと云は大丈夫の心に背けり。李逵此言を聞て大に怒り、忽ち衣の袖を卷起げ、雷霆の如く吼つて云けるは、汝いよ〳〵其銀を還すまじきや。小張乙が云く、李公常に若干の銀を輸給へども、曾て悔給ふことなきに、今日は何ゆゑ非道を云給ふや。李逵これを聞て、雙眼を睜開き、遂に彼十兩の銀を奪取て、別に又十四五兩の銀を掠め取り、倘聲を勵して、吼り呼つて云けるは、我常には一錢も賒ざりしかども、今日は緣故有て、且此銀を借るに、汝必ず我を恠むことなかれとて、已に跑出んとせしに、小張乙急に走り倚て、取れし銀を奪ひ復んとしければ、李逵大いに狂ひ、先小張乙を地上に打倒し、猶四面八方に跑て諸の徒者共を盡く踢倒し、自ら門を開て馳出しかば、彼一夥の人同く門外に走り出て呼り云けるは、李公いかんぞ我輩が銀までも奪取給ひしぞ、宜しく還し

○黒旋風浪裡白跳と闘ふ

黒旋風李鐵牛十兩の銀を得て心中想道く、宋押司は原我と交も厚からず、唯一座の初見のみにて、此銀を借し給ひし其志の懇切なること、義を重んじ財を輕んずる、天下の英雄とも聞傳へたるのみなりしに、肇て其實を知りぬ、世界普く名を聞ても尊敬すること宜なり、今偶此處に至り給ひしかば、我幸に酒宴を設て、宋押司を欵待べきに、頃日は連綿博奕に輸け、只半錢の貯もあらざれば、三盃を勸め、一點の情を表すに方便なし、しかじ先此十兩の銀を下稍として博奕をなし、宜しく數貫文の錢を贏取て、宋押司を心の儘に欵待べしとて、忽ち飛がごとくに城外に跑出で、直に小張乙と云ふ者の坊頭をなす博奕店に至り、則十兩の銀を投出して云けるは、我に十兩の稠馬を與へよ。小張乙が云く、李公は常に勝を急ぎ給ふに依て、却て負速に至る、宜しく排を微にして本を堅くし、死を避け活を俟て、贏を取給へとて、十兩の稠馬を與へし處に、李逵原來短氣の者といひ、況や今日は別して心忙はしく、十兩の稠馬を二つに分て前後に排り、只一打にこれを打輪て、早くも手を空しうしければ、小張乙幷に諸の潑漢共、一齊に唉て云けるは、李公は今日却て勝負を常よりも急ぎ給ふはいかん、盡數の稠馬

あり、渠焉ぞ一錠の大銀あらんや、今彼十兩の銀を還して大銀を贖ると云しは、乃ち是僞なり、必定賭博坊に往て、博奕をこそなすべし、若贏なば彼十兩の銀を長兄に還すべけれども、輸なば一錢も還すまじ、萬に一つも贏つ事はあらじ、然らば某却て何の面目かあらん。宋江咲て云く、院長何ぞ斯のごとき隔心のことを云給ふぞや、豪傑にはまゝ酒と博奕の癖あり易し、僅十兩の銀何ぞ英雄に惜むべき、彼若輸なば、又再び借すべきに、必ずこれを憂給ふな、某彼が氣質を伺ひみるに、本忠直の豪傑なり、是故に我是を愛す、我が所持の銀の有ん限は、豪傑のことに聊惜む所なし。戴宗が云く、李逵は本武藝力量は諸人に勝れたれども、只意麁く膽太く、若酒に醉し時は、妄に牢中の罪人を鞭打つて、內外を閙しめ、某も幾囘か其連累を被りぬ、殊更彼途中に於て、不平のことを見る時は、忽ち其強き者を打て、其弱き者を助け、動不動人の禍を己が身に干りて、猶後悔を知らざる愚直者なり。宋江が云く、彼敢て此のごとく弱を扶け、强を打は、上に傲つて下に忍びざるの豪傑、我益これを感ずること淺からずとて、又盞を執て相勸め、兩人再び飲酌を催しけり。此時戴宗が云く、城外に出て江中の風景をも見せしめ進せんに、知らず押司は尊歩を移し給ふべきや。宋江が云く、某素より江州の風景を遊覽せんことを欲すとて、遂に酒店を出て江邊に遊行す。

を勞すべき。李逵是を聞き忽ち掌を鼓ち、大に欣び躍て云く、長兄果して宋押司ならば、など疾某に知らせて、悦ばしめ給はざりしぞとて、忙しく身を翻して拜をなしければ、宋江急に禮を還して、豪傑先拜を休て坐し給へ。戴宗又李逵に對して云けるは、賢弟宜しく一處に酒を酌んで談話せよ。李逵が云く、今日初めて義士に遇ひ、心上大に趣あり、寧大碗にて酌べし、と遂に戴宗が次に坐しけり。宋江が云く、豪傑は何ゆゑ、先に樓下に在て、鬧ぎ給ひしぞや。李逵が云く、某前日一錠の大銀を一箇の人に預け、先十兩の小銀を借て使ひし故、今日此銀を贖回して、其餘を使んと欲し、乃ち這店の主に彼原銀十兩を借んとしけれ共、這主我が還すまじきを怕たるにや、敢てこれを借さず、此故に我是を憤り店を微塵に打碎かんと欲せし處に、院長哥（長兄と云ふごとし）來て我を此處に拖上給ひぬ。宋江が云く、足下唯十兩の銀を用ひんに何の得難きことかあらんとて、乃ち懷中より十兩の銀を取出して李逵に與へて云く、足下宜しく此銀を携へ行き、那大銀を贖復して、使用に備へ給へ。戴宗はこれを見て、心中に却て悦ばざる體也。李逵銀を得て云けるは、兩人の長兄猶此處に在て待給へ、某少刻銀を贖けて再び來らんとて、遂に樓を下て馳出けり。戴宗が云く、長兄今李逵に銀を借し事大に不可なり。宋江が云く、其故はいかんぞや。戴宗が云く、李逵は原直實の者なれ共、唯酒を貪り賭を好むの病

引て、再び樓上に登りぬ。宋江彼漢子が形を見るに、面色は黒き熊のごとくにして、身肉は鐵牛に似たり。怒る頭髪は鐵の刷に似て、瞋む眼睛は日の光のごとし。眉の毛は倒に上て、腮鬚は雙に分れ、聲は鐘に似て勢は虎の如し、誠に希有の勇士なり。宋江先戴宗に巨細を問ふに、戴宗が云く、這人は某が手下の小牢子にして、姓は李、名は逵と號す、原沂州沂水縣百丈村の產なり、異名を黒旋風李逵と申す、又李鐵牛とも云慣せり、彼前年人を打殺して、故鄉を走出で、其後御赦免を蒙りしか共、終に流落て、當地に逗留す、彼酒の癖あしき故、人皆是を怕る、彼又能二つの斧を使ふ。李逵も亦宋江を見て戴宗に問けるは、彼人は誰なるぞや。戴宗がいはく、汝も今天の引合を蒙りて此押司に見るなり、汝常に此押司を訪はんと欲して、毎度其德を稱したるが、いかんぞ拜を行はざるや。李逵が云く、我が訪んと思ふ英雄は、普天の下に於て、獨山東の及時雨黒宋江のみなり、此者何ぞ黒宋江ならんや。戴宗大に責て云く、汝いかんぞ斯く、上を犯すの言語を云や、宜しく黒の字を忌べき處に、直に黒宋江と稱するは、甚だ以て非禮なり、此長兄則及時雨宋公明なり、汝猶下拜をなさずして、何の時を待んとするや。李逵が云く、もし實に宋公明ならば、我肯て拜すべけれ共、恐らくは詐もや有んずれば、我豈容易拜を行はんや。宋江が云く、某實に山東の黒宋江なれ共、いかんぞ足下の拜

に推察し給へ。此節級は是江州兩院の押牢節級戴院長戴宗と云ものにて、呉學究と交厚き知己なり。宋の時は金陵一路の節級を家長と稱し、湖南一路の節級を院長と稱す、よつて戴宗を呼て戴院長と云なり。此戴宗原來奇妙の道術を知れり、若急事有て遠路に趣く時は、二つの甲馬を雙の腿に拴つけて、神行の法を行ふに、一日の内に五百里の路を行く。若四つの甲馬を用る時は一日の内八百里を行く。此に依て神行太保戴宗と云慣せり。其形面濶く口方にして、眉淸く目秀て、威風凛然として、相貌儼然たり。此時宋江戴宗互に來情去意を語りて共に悦び、頓て酒店の主を呼で酒食を求め、已に盃を執て相勸め、更に隔意なく説話に及び、宋江道中にて許多の豪傑に出遇たることを云聞ければ、戴宗も心を傾け、膽を吐て呉學究と通往することを告げ、眞に心腹を述て打解け在處に、忽ち樓下に閙ぐ聲有て、一人の家僕忙しく樓上に跑上りて、則戴宗に向ひ云けるは、今我店を閙しむる人あり、是は院長ならでは靜ること能ず。願くは樓を下て彼人を諫め給へ。戴宗が云く、其は誰なれば擅に人家を閙しむるぞ。家僕が云く、彼人は是常々院長に從つて我店に來り給ふ、彼鐵牛李大哥なり、今主を尋ね錢を借んとて、斯店を閙しめ給ふ。戴宗笑て云く、我は只何等の人なるにやと思ひしに、渠又來て人家を惱すや、押司暫く此に在て待給へ、我少刻彼を引て來るべしとて、遂に樓を下り、頓て一人の大漢子を

へ。宋江が云く、某あへて貴公の命に從はん、先暫く待給へ、今房門を關して來らんとて、頓て抄事房に囘りて、彼呉用が書簡を取て、袖の中に收め、又若干の碎銀を懷中に入れ、遂に節級と倶に營中を離れ城下に來り、一軒の酒店に入り、座已に定りしかば、節級先宋江に問て云く、長兄は何の處にて、呉學究に遭ひ給ひぬるや。宋江が云く、先書簡を見給へとて、彼呉用が寄たる書簡を出し與へければ、節級披讀し、これを袖の内に藏し、則ち身を飜して宋江を拜しぬ。宋江忙はしく禮を還して云けるは、先には言語を以て多く節級を犯したるに、願くはこれを赦し給へ。節級が云く、某は只宋氏の流人新に營中に至れりと許り聞きしゆゑ、常例錢を求んとて、想はず長兄に遭ひ、大いに渇想の懷を安んぜり、然れ共向には未だ長兄を識らざりしゆゑ、多く威風を冒して罪を得たり、伏して望らくは、これを恕り給へ。宋江が云く、差撥先達て節級の大名を稱して某に告しゆゑ、某早々尊顔を拜せんと欲しけれ共、未だ節級の住宅も知らず、想はず延引今日に至れり、某彼常例錢を送らざりしは、我熟々慮るに、若これを送らずんば、節級必ず自ら營中に出て、これを求め給ふこともあらん、其時宜しく尊顔を拜し、聊平生の想を慰めんと欲し、且梁山泊の書簡も猥に出しがたく、良に以ありて故意常例錢を差控へ、久しく送らざりしなり、某毛頭吝惜て遲々せしにあらず、願くは明か

宋江始て神行大保に會

不禮なるや、我今汝を一百鞭打んとて、左右を顧るに、兩邊に竝居し者共、心中に想ひけるは、我が輩こゝに在らば、必定節級が命を請て、宋江を策つことあらん、しかじ此を避往んにはとて、盡く走り出しかば、今の間に左右の人散去て一人もあらず。節級自ら短棒搶取て、宋江を再三罵りしかば、宋江が云く、汝再三我を罵り打んとするは、我に何の罪ありや。節級が云く、汝今我手下にあるからは、高く咳嗽をなすとも是則罪なり。宋江が云く、汝たとひ我が過を見出し罪せんと欲ふとも、恐くは未だ死罪にはよも至らじ。節級怒り吼ていはく、汝賊配軍、甚麼死罪には至らじと云ぞ、我汝を殺さんは一つの蠅を殺すよりも易し。宋江呵々と大笑し、我常例錢を送らざるに因て、死罪に當らば、梁山泊の軍師吳學究と通同する者の罪は、何等の刑に處せんや。節級此一言を聞き大に驚き、手中の短棒を撇て、急に問けるは、汝は今何の言を云しぞ。宋江答へて、我は梁山泊の軍師吳用と通同する者の事を云に、汝是をいかん。節級甚だ慌悵宋江を扯住めて云く、汝の姓名はいかん、梁山泊のことは、汝何の所に在てこれを聞ぬるや。宋江猶笑て云く、我はこれ山東鄆城縣の押司宋江と云ふ者なり。節級これを聞て大に驚き、急に拜を行うて云く、長兄は乃ち及時雨宋公明にてましますかな、此處は人の耳目多くして說話するに宜からず、同く城下に馳て平日の懷を語るべし、長兄尊步を移し給

司定て彼がことを知り給ふまじ、彼が人となり大いに利害く、殊更剛勇なるに仍て、動不動人を打ち人を羞しむ、若押司彼に常例錢を送り給ずば、彼必定某がいまだ押司に告知せざるかと恨むべし。宋江が云く、足下必ずこれを怕れ給ふべからず、彼憤りて如何ともいはゞ、只よく彼にまかせて云しむべし、我常例錢を送て彼に與ふとも、彼却て請ざることあらん、足下後に自ら是を知り給ふべし、といまだ云も了らざるに、一人の牌頭官、來て告けるは、節級今廳上に出給ひて、大に怒り罵りて云給ふは、新參の流人何ゆゑ常例錢を送らざるや、早く彼を拖り來れと命じ給ふ、早々廳前に往給へ。差撥これを聞て大に驚き、扨こそ事の破れに及べり、今更これを如何せんと、只顧慌て忙きけり。宋江打笑て、差撥長兄何ゆゑ慌給ふや、我先廳前に往て彼と説話せん、他日又光臨を恵み給へとて、彼牌頭官に隨つて房門を出し處に、差撥も同じく門外に出で、宋江に示して云けるは、押司必ず何事も忍て慇懃に答へ給へとて、遂に別れて歸りしかば、宋江も亦彼牌頭官に引れ廳前に至りけり。節級凳の上に坐し廳中にあり、宋江を見て大に怒り、汝賊配軍、誰が勢を假て、我に常例錢を送らざるや。宋江が云く、汝何ぞ妄に人の寶を貪るや、常例錢と云は、又誰が汝に許したるぞ、其所以を聞ん。此時左右側に坐せし者共、此言を聞て手に汗を握りけり。節級ます〳〵罵つて、汝奸賊いかんぞあへてかく

に快からず、願くはこれを察し給へ。管營が云く、汝實に病有ば、殺威棒を受がたからん、我まづ今日は此棒を免すなり、他日病の痊るをまつてこれを行ふべし、汝は又縣吏をもなしたる者なれば、當營の抄事房に遣し、抄事の職をなさしめんとて、卽ち抄事房に送らせしかば、宋江深く是に謝し、先はじめの房間に歸り、包袱繦を取り、直に抄事房に至て歇し處に、諸の流人共、宋江がかく光景好を見て、盡く酒を携へ來りて、宋江を賀しければ、翌日宋江も亦酒食を具へて、諸流人共を邀へ、終日酒を酌で樂みけり。これより宋江は時々彼差撥牌頭を抄事房に邀へて、酒肴を進め、又毎度禮物を送りければ、纔半月ばかりの内に、滿營の人と交を結び、一人も悅ばざるはなかりけり。宋江一日差撥を抄事房に邀へ酒を酌ける處に、差撥宋江に語つて云けるは、我前日押司に約しぬる、節級に送る常例錢は、何故未だ送り給はぬや、若節級明日これを問に及では、頗る光景惡からん、某も又彼に見えん時、云ふべき詞なし、只宜しく早く常例錢を送り給へ。宋江が云く、此事少しも妨なし、彼若常例錢を求んと欲せば、我却て一錢も與ふまじ、若差撥長兄自家の入用ならば、何時なり共我に問てこれを求め給へ、我樂んで足下に送るべし、節級が方へは、半錢も送るまじ、彼若明日我に問て、此錢を求ることあらば、我又是に答ふべき詞有り、必ず我が爲にこれを憂ひ給ふな。差撥が云く、押

遣さんとて、早速當府の下官兩人を差添へ、宋江を營裡へ送せければ、下官命を承り、宋江と濟州府の下官とを引て、州裡を馳出ける處に、此邊に酒店ありしかば、宋江三兩の銀を出し、江州の下官に與へ、乃ち酒を買せ飲しめけるに、這兩人の下官大にこれを悅びぬ。已に營裡に至りしかば、先宋江を房間の内に留置き、己は急に管營差撥がかたへ行て、斯と告げ、宜しく宋江を憐み給へと擡撥て、遂に江州に回りけり。扨濟州より監押して來れる兩人の下官、包袱裹を宋江に還し、再三謝して云けるは、某等今次押司に從つて當地に至る、途中頗る恐怖數々なりしかども、又多く金銀を得て、想はざる福を蒙りしは、偏に押司の賜なり、押司は猶恙なく凌ぎ給ひて、異日歸鄕の時を期し給へとて、哭々別を告げ、江州府に出て返簡をとひ、濟州へ歸りけり。宋江は營裡に在て、且差撥に十兩の銀を送り、管營には又二十兩の銀を送り、其他營中の軍卒等に、一々銀を與へしかば、宋江を愛せざる者一人もなかりけり。管營は賄賂を得て大に悅び、頓て宋江を廳前に呼入れ、卽ち頸枷を除しめて云けるは、汝は這回濟州より來りたる、新參の流人よな、我朝の太祖武德皇帝よりの聖旨事例有て、凡新參の流人、始て營中に入る者には、殺威棒と云て一百棒を策つ事あり、汝すべからく此棒を請よとて、遂に左右に命じ、打しめんとせし處に、宋江謹んで訟へけるは、某途中に於て、風寒の病に犯され、今

四編　巻之三十五

○宋江神行大保に會す

偖も宋江は掲陽鎭の穆弘、其外豪傑の面々に立別れ、潯陽江の船に乗り、順風に帆を挽走せければ、はやくも江州の湊に到著し、下官と倶に江州府の前に至る。此時府尹は廳上に出で、諸役人と共に、公事を商議して居たりける。江州府の知府姓は蔡、雙名は德章と號す、すなはち當朝蔡大師蔡京が第九の子なり。江州の人皆蔡九知府と稱せり。其人となり毒惡にして、貪欲無道といひ、奢をなす事言語に及がたし。原此江州は錢量洪大にて、人富み物饒なる繁昌の地なるゆゑ、蔡大師己が子を此處に遣し知府たらしむとかや。兩人の下官宋江を監押して町下に至り、役人等に就て、恭しく公文を呈す。蔡九知府流人を引出させ、公文を讀了り、宋江が人物凡からざるを見て、則問て云けるは、汝は人品も賤からざる者なるに、いかんぞ罪を犯しぬるや、且汝が頸枷の上に、本國よりの封なきはいかん。兩人の下官が云く、道中しばしば春雨に打濕され、數日以前遂に廢らしめ候。知府が云く、先其罪人を、牢城營裡（流人を入置所なり）に

意無筆の口より出べきや、此書の作者の意はいかん。

ければ、穆弘兄弟終に留ることは能はず、其日又豊に酒宴を設け、宋江を饗應し、半夜に至つて宴罷り、各一間に入て歇みけり。翌日は宋江未明に起て、旅装を調へ、則穆太公并に諸豪傑に別を告げ、又薛永に示しけるは、賢弟は暫く穆家に數日逗留し、頓て後より江州に來て、消息を通じ參會せよ。穆弘兄弟が云く、長兄必ず心を安んじ給へ、我等兄弟肯て薛永を憐み、諸事宜しく商議を遂げ、後より江州に遣すべし。宋江これを聞て顔色殊更悦びけり。穆弘兄弟餞として、一盤の金銀を宋江に送り、又若干の碎銀を兩人の下官に與ふ。張横は人を頼て一封を修へ、宋江に寄て弟の張順が方へ送りける。宋江穆家父子へ懇情を厚謝し、下官と共に立出ければ、諸の豪傑直に潯陽江の邊に至り、則一艘の船を假て宋江等三人を乗しめ、衆皆別を惜み、互に涙を洒ぎ、遂に海陸に袂を分ちければ、諸の豪傑等は再び穆弘が館に至り、其夜各私宅へぞ歸りけり。宋江配所に到著よりの次第は、次の巻を見て明かなり

或人のいはく、此巻中船火兒張横が船に、宋江と下官兩人を乗せ、遙に漕去り歌を唱ふ、七言絶句一章出たり。然して宋江諸豪傑に別れ、江州の配所に趣くに依て、張横其弟浪裡白跳張順が方へ、書簡を送んに、字を識らざれば、自ら書く事能はず、人を頼て書簡を修るとあり。尤無筆も歌は唱ふべしといはゞ、古句なるべし。昨夜華光來趁レ我と云ふ當

移し給へ。李俊が云く、是大に可なり、我押司を諫めて倶に往べし、と已に領掌しければ、穆弘やがて二人の家僕を留めて、童威、童猛兄弟に替て船を守らしめ、則童威兄弟をも倶に邀へ、諸の豪傑一同に、穆弘が館へと急ぎけり。穆弘兄弟は先人を家に回し、預め酒宴を美々しく設けしめぬ。已にして宋江等打連て、穆家に至りしかば、時はや五更の初なり。各草堂の上に登りし處に、穆太公も亦草堂に出て、宋江等に對面し、賓主座を分て兩邊に列座せり。宋江暗にかの穆弘を見るに、面は銀盆に似て、身は玉頭の如く、眼は圓にして眉は細かなり。相貌は端然威風嚴然なり。宋江此體を見て、獨自ら心中に悦びけり。諸の豪傑談話いまだ久しからざるに、天色已に明て、鳥の聲後園に噪し。此時穆春彼薛永を延て草堂に至り、同じく一所に參會す。穆弘頓て酒宴を草堂に具へ、慇懃に宋江等を欵待し、新に飲酌を催しければ、其日は衆皆穆弘が家に在て、各身の上に經たりし事共を說話し、覺えず紅日又西山に沈みければ、其夜は都て穆家に一宿し、其翌日宋江別を告て打立んとしけれ共、穆弘兄弟肯て饒さず、再應挽留て逗留させ、諸の豪傑と共に、恭しく宋江を導きて、掲陽鎭の街に遊行し、名所舊跡一々これを觀せしめ、翌日宋江又辭別に及ばんとするを、穆弘兄弟苦に留め、一連に三日滯留しける處に、宋江深く日限の差あらんことを怕れ、再四別を告

第一の英雄を見識んとならば、更にいづれの時を待ん、快く下拜せられよ。那兄弟聞も敢ず、忽ち身を翻し地上に拜伏し、再三頓首して云けるは、某等兄弟押司の大名を聞く事素より久し、今日幸ひに尊顔を拜謁し、何の悅かこれにしかん、願くは押司を犯せし罪速にこれを免し給へ。宋江急に兄弟の者を扶け起して云く、何爲かく慇懃の言に及ばんや、願くは兄弟の大名を知らしめ給へ。李俊が云く、此兄弟兩人は家富隆えて、遠近に隱れなき豪傑なり、則兄を穆弘と號し、沒遮欄と諢名す、弟を穆春と號して小遮欄と諢名せり。乃ち揭陽鎭を覇て威を諸人の上に振ふ、我此處には三覇と申て、三箇所を覇る者あり。押司は未だこれを識給ふまじ、某今具に語り申さん、揭陽の嶺の上下は、某と李立とこれを覇て一覇とす、潯陽江は張横張順の兄弟これを覇て一覇とす、揭陽鎭は穆弘と穆春兄弟これを覇て一覇とす、則此三箇所を覇る者を名づけて當地の三覇とは申すなり。宋江是を聞て大に悅び、乃ち穆弘兄弟に對して云けるは、果して李俊が云ごとくんば、是皆自家の昆弟なり、此上は只かの薛永を我に還し給へ。穆弘兄弟が云く、薛永とはかの膏藥を賣て鎗棒を使ひし漢子が事ならん、渠は向に客店より尋ね出し、痛く數十鞭うつて梁の上に吊起置、捆て潯陽江に沈んとせしが、少刻これを饒し押司に還し奉らん、先宜しく私宅に導いて、三盃を進め申さん、願くは押司尊歩を

宋江ならびに兩人の下官を引て、五人同じく村里を望で馳來り、纔半里許に至て、對面を見るに、若干の炬火猶岸の上に在て明亮なり。張横是を見て云けるは、岸の上に火把あるは必定彼兄弟未だ回らざると覺えたり。李俊が云く、彼兄弟と云は誰なるぞや。張横が云く、揭陽鎭の穆家兄弟兩人のことなり。李俊が云く、果して穆家の兄弟ならば、我はやく彼等を呼來て、宋押司を拜謁さすべし。宋江駭いて、賢弟其事大に不可なり、彼兄弟は我を捉へ殺さんと圖るなり、いかんぞよく相見せんや。李俊が云く、長兄必ず心を安んじ給へ、彼兄弟斯なせしは、長兄を知らず、凡々一列の人と見たればなり、彼等も原我が輩と一路の者共なれば、必ず長兄を敬ふべし、只宜しく我が所爲に任せ給へとて、李俊頓て手招して、大音聲に呼りければ、彼火把を拿たる一夥の人、一齊に咄と馳來り、遂に李俊等が前に至てこれを見るに、李俊張横恭しく宋江を尊んで左右に侍りしかば、彼兄弟大に驚き、長兄等兩人はいかんぞ此流人を尊敬し給ふや。李俊大に笑て云く、足下兄弟此流人を誰と思ひ給ふぞ。兄弟の者が云く、吾輩未だ誰とは知らざれ共、彼今朝揭陽鎭に在て、彼鎗棒を使ふ膏藥賣に、五兩の銀を賞して我揭陽鎭の威風を滅しぬ、我此ゆゑに彼を捉へんと欲す。李俊が云く、我常に足下等兄弟に語て其德を吹噓したる、山東の及時雨宋公明とは、乃ち是此人のことなり、汝兩人もし天下

船に乘り、客已に滿ぬる時、某船を半江の內に漕出し、乃ち右の手には刀を拔持ち、左の手には籃を提げ、諸の客に對し、三貫文の錢を求めて云ぬるは、今日は船賃を輕く定めしか共、船を急ぐべき間、此賞として乘合中より、三貫文の錢を輳て賜るべし、若然らずんば、決して船を動さじとて、先張順に問て錢を求む、張順詐つて大に某を罵り、既に爭を惹出して、互に拳を擧て打合ひ、某頓て張順を捉へて、江中に投落し、倘眼を怒らし諸の客を嚇し、是非三貫文を求るに、一船の商客等、張順が今水中に投落されたるを見て、大に驚き、忙はしく、三貫文を輳て我に與ふ、我此時船を岸に著て客等を上しむ、張順は水底に淬入して、はや岸に上り、暗に乘合の客等が、四方へ散て去を待て、兄弟公に此錢を分取り、各又博奕の宿に行て賭をなす、是則世に稀なる業なり。宋江是を聞て、又問て云く、足下兄弟今に此商賣をなすや。張橫が云く、今は某等此業を改め、某は唯潯陽江の內にて海賊をなす、弟張順は今江州に在て、魚を商賣す、長兄果して江州に到り給ふなら、某一封の書を寄せ、弟張順にも、押司の事を告知らせんと欲へども、只恨らくは某文字を知らざるゆゑ、書簡を修ふる事能ず。李俊が云く、我輩村里に馳て、一人の先生を賴み、書簡を修ふべきに、宜しく我に隨つて來り給へとて、則童威童猛を留めて船を守らせ、李俊は張橫と共に、

に、好々面を識認置んや。張横これを聞て再び沙の上に拜伏して云けるは、某常に李長兄と共に、押司の大德を稱して仰ぎ慕ひけるに、今日偶尊顔を見奉ること、喜望外に出て雀躍に勝ざるなり、伏して望らくは、無禮の罪を免し給へ。宋江忙はしく禮を還して、張横を見るに、身の丈七尺餘にして、兩眼の光は星のごとく、鬚は左右に別れて腮に垂れ、相貌凛々として威風堂々たり。張横又宋江に問て云けるは、長兄は何等の罪を犯し給ひて、江州に流され給ふや。李俊此時宋江が罪を犯したる次第を備細に語りて張横に聞しめければ、張横大に歎じ、心中いよ〳〵宋江を憐み、乃ち又宋江に語て云けるは、某同胞の弟一人有けるが、尤勇にしてしかも相貌賤しからず、全身雪よりも白うして、言語さわやかなり、水の上に浮む事四五十里にしても尚倦まず、水の底に沈む事七日七夜にして更に疲ず、武藝は名ある師に從つて全く練熟せり、人皆彼に綽名をつけて、浪裡白跳張順と稱す、當初某兄弟は唯此潯陽江に在て、世にまれなる業をなして錢財を求めぬ。宋江がいはく、世に稀なる業といふはいかん、願くはこれを聞べし。張横が云く、某兄弟兩人若博奕に輸たる時は、某先一艘の船に乘て岸邊に來り、乃ち船賃を輕く定めて乘合の客を渡すに、彼慳吝商人等、船賃の輕きを悦んで、盡く先を爭うて群り乘せ、此時弟張順も詐つて旅客の體に裝ひ、同じく乘合の客に雜つて

某今少し遲く至りなば、必定長兄の性命を誤つべし、今日某家に在しかども、頻に胸躍て坐立安んぜず、自ら心を慰めんが爲に、一葉の船に棹さして、此邊に漂ひ來り、想はず長兄に遇て、此急難を救ふこと、偏に天の引合なり、先宜しく心を安んじ給へとて、悦ぶこと限りなし。彼船家長此光景を見て、只惘然と呆れ暫く聲をもなさゞりけるが、漸心を納めて李俊に問て云けるは、李長兄此流人を呼で宋江と云給ふは、但し山東の及時雨宋公明にてはあらずや。李俊が云く、這人其及時雨なり、即ち彼船家長これを聞て、忽ち舷に拜伏して云けるは、及時雨宋長兄にてましますならば、などはやく姓名を知らしめ給はざりしぞ、已に仁兄の命を害せんとせし事、全く知らざるの過、願くは罪を宥し給へ。宋江是を聞て、則李俊に問て云けるは、此豪傑の高姓大名はいかん。李俊が云く、長兄は未だ知給ふまじ、則此豪傑は某と義を誓し兄弟なり、原來小孤山の下の人にして、姓は張、名は横、綽號は船火兒と申し、專ら此潯陽江に在て、これらの事をのみなして過活とす。宋江此時、兩人の下官と共に覺えず一笑を催しけり。こゝに於て二艘の小船繩を引て相攏ひ、直に漕て灘の邊に至り、則宋江並に兩人の下官を扶け岸に上らしめ、李俊又張横に對して云けるは、我常に賢弟と語りぬる、天下第一の義士山東の及時雨鄆城縣の宋押司に、今日天より良緣を假給ひて、相見えける

に、岸の上に一夥の人來て、三人の漢子を尋ねけるに、這三人の漢子、蘆葦の内より出て、我等に乗らしめよと詫しゆゑ、我これを許して乗しめけるに、頗る物有と覺えて包袱づつみを投たる響、凛々と耳に轟きぬ。かの大漢子また問て云く、其三人はもと何者なるや。船家長答て、兩人の下官一人の流人を監押して來りけるが、原何國の者かは知らね共、江州に流さるゝよし語りぬ、又彼を追て來りし岸の上の者共は、乃ち掲陽鎭が穆家兄弟兩人なり、彼等兄弟も必定此流人が物あるを見て、奪ひ取らんと計りしに疑なし。彼大漢子これを聞き、忽ち驚いて云く、其江州に趣く流人と云は、恐らくは我義兄にはあらずや、何とやらん疑はし、と云ければ、宋江船艙の内に在て、彼大漢子が聲を聞しに、少し聞慣たる聲なりしかば、忙はしく呼つて云けるは、其船の豪傑は誰人かは知らね共、願くは宋江が一命を救ひ給へ。彼大漢子宋江と云し二字を聞て、大に驚き慌て云けるは、扨こそ我が義兄宋押司なり、誠に危き急難かな、といまだ云も終らざるに、宋江はや艙の内より走り出て、星の光明なるに乗じて彼船を見るに、果して一人の大漢子船の頭に立出ぬ。是則混江龍李俊なり。兩人の艫を搖す漢子は、乃ち一人は出洞蛟童威、一人は翻江蜃童猛なり。此李俊、宋江の二字を聞て大に驚き、忙はしく此船に乗移りて、則ち宋江が手を携へて云けるは、長兄危き難に逢給ひて、嘸恐怖を受給ひつらん、

宋江張横にあひ

本望なり、何ぞ再三それを痛まんや。船家長又大に呼つて云く、汝三人はやく衣裳を脱で水中に跳入れ、もし然らずんば、我此刀を以て水中に斬込んとて、手中の刀を輪して、閃めかしければ、宋江等三人互に相抱き、已に江中に跳入らんとせし處に、江面に櫓の音響きて、忽ち一艘の小船飛がごとく漕來りける。其船の上には三人の漢子あり。其内一人の大漢子は船の表に立ければ、二人の漢子左右に分て櫓を搖し、はや宋江が乘たる船の前に至り、彼大漢子先大音聲に呼り云けるは、其船は誰船なれば、此處に於て私に商賣をなすや、船の上の貨我もこれを分べきぞ。這船の船家長暫く頭を擡け、彼船の大漢子を見けるが、忽ち打笑て云けるは、我は只誰なるらんと疑ひしに、李長兄の船なるよな、長兄も定てよき商賣有てこそ此邊には出給ひつらんに、何ゆゑ我を携へ給はぬや。彼大漢子が云く、かく云給ふは張大哥にてはあらずや、汝此處に在て獨自ら福を得給ふよな、船中の貨嘸重からんと戯れけり。

○船火兒夜潯陽江を鬧す

宋江を乘せし船家長答て云く、今宵不圖福を求めけるが、若これを語りなば、長兄も掌を敲て咲ひ給ふらん、我頃日博奕に輸て半錢の下稍もなく、獨寂寞にして、灘の邊に漂ひける處

乃ち此刀を以て汝等を水中に斬込を名けて板刀麵と云ふ、又汝等が衣裳を剝取り、赤條になして江中に推込を名づけて餛飩と云ふ、汝等が望に依て是を行ふべきぞ。宋江此言を聞て大に驚き、即ち兩人の下官に對して云けるは、誠に古の語にも福雙び至ることなし、禍單り行ずと云は、今宵我身の上に知ぬべし、嗚呼拙き運命かなとて、嘆息して止ざりしかば、船家長又怒て云く、汝三人宜しく商議を遂て、死を速にせよ。宋江が云く、我は是罪を犯して江州に流さるゝ罪人なり、汝もし一點も惻隱の心あらば、我が輩の一命を饒せ。船家長眼を睜開て云く、汝何ぞ面皮厚きことを云や、三人は扨置て半人も饒すまじ、我は是張爺々と云ふ者にして、專ら人を殺し火を放て浮世を樂しむ、汝かならず妄想を起して命を助らんと欲することなかれ。宋江又哀しみ告ていはく、我們が包袱の内の金銀財帛衣服等、數を盡して汝に與ふべき間、唯命計を助けよ。船家長聞も敢ず、則明晃々する刀を拔出し、大に怒り吼て云く、汝三人多く詞を費さんより、快く死を被れ。此時宋江天を仰て歎じけるは、我素より天地を敬せずして、父母に孝ならざりしゆゑ、罪を犯し身を亡すと云ひ、殊さら辜なき兩人の下官に連累を蒙らしむること、我あにこれを忍びんやとて、流るゝ泪は恰も降る雨のごとくなり。兩人の下官宋江に向て云けるは、押司悲み給ふことなかれ、我が輩押司と一處に死なば、是則ち今生の

は再び跡をも顧みずして漕しかば、岸を離れしこと漸遠かりけり。宋江艙の内より頭を出して岸の上を望見るに、十四五の火把盡く皆蘆葦の内に亂れ入り、猶紛々として明かなり。宋江心中に深く天地を謝しにけり。此時船家長歌を唱ていはく、

老爺生長在ニ江邊一　不レ怕ニ官司一不レ怕レ天
昨夜華光來趂レ我　臨レ行奪下一金磚

宋江等三人は艙の内に在て、此歌を聞き、各心大に驚きて云けるは、此船家長が歌の意は、必定蹺蹊あらん、最疑しきことなりとて、三人暗に議論區々なる處に、彼船家長俄に櫓を拖起て、艙の前に走り寄り、則宋江等三人に對して云けるは、汝等三人、一人は流人、二人は監押の者と見えたり、先汝兩人の監押の者は常に罪人をつれて、多くの賄賂を貪り、専ら不仁のことをなして己を利せんと欲す、是大惡人なり、又一人の流人は、原官軍とみえけるが、這回罪を犯して流人となるも、定めて不善の事をなしたるに疑なし、三人板刀麵を食せんと欲ふや、又餛飩を食せんと思ふや。宋江打笑て云く、足下は何の戲を云給ふや、其板刀麵と餛飩とは、世人皆これを好んで食する者多しといへ共、船中に於て焉ぞよくこれを得んや。船家長大に怒て云く、我が云所の板刀麵と餛飩とは、世間にある所と同じからず、我に一挺の名刀あり、

と走りければ、岸の上の者共大に焦燥て呼りけるは、汝船家長直にかくのごとく大膽なるや、速に船を漕返し禍を免れよ。船家長冷笑て答へけるは、我はこれ張船家なり、必ず來て我を犯すことなかれ。上の大漢子が云く、もし果して張船家なれば、我等兄弟を見たるや。船家長が云く、我原來眼明なり、いかんぞ汝等を見ざらん。岸の上の大漢子が云く、汝旣に我を見たるとならば、我爲にはやく其船を漕回せ、我汝に一言を語らん。船家長が云く、汝若事あらば、明日來てこれを語れ、今宵は我急事有て、急しく船を進む、再び漕返さんこと能ふまじ。岸の上の大漢子又云く、汝忙しく船を進むと云は、其流人等三人に賴れてならん、我急に其賊配軍を捉へんと欲して、此處に馳至りぬ、汝よろしく其三人を我に還せ。船家長が云く、此三人は我が爲には親類なり、汝必ずこれを望む事なかれ。彼大漢子が云く、汝先漕ぎ回せ、我宜しく汝と商議せん。船家長が云く、我偶此親類を接へ、夜飯の助を求めんと欲するを、何ぞ汝に送て汝を樂ましめんや、汝兩人必ず我を恨ることなかれ、他日對面致さんとて、一向船を漕上る。宋江艙の內に在て、暗に兩人の下官に對して云けるは、此船家長我が輩三人が命を救はんと欲して、斯彼等に對ひ分說をなすこと、此恩尤大いなり、若這船に遭ずんば、終に一命を害せられんに、天の佑を蒙りて幸ひ急難を免れたりとて、悅ぶこと限りなし。此船家長

ば我重く汝を賞すべし。船家長が云く、汝三人は原何人にて何れの處よりいづれの地へ行んとて此に至るや。宋江が云く、背に强盗有て、我が輩を追ぬるゆゑ、直に走りてこゝに至れり、汝早く船を貸て、我輩を渡らしめよ、我多く金銀を以て此勞を謝せんぞ。船家長此一言を聞て、心中に悅び、則船を漕て岸邊に著ければ、宋江等三人忙しく船の上に跳乘り、先吻と息を續けり。此時二人の下官包袱藴を把て、船艙の内に投入れ、又一人の下官は水火棍を以て急に船を撐開きければ、船家長は櫓を搭て船を搖し、暗に彼包袱裹を投たる音、好く響たるを聞て、心中にこれを奪ひ取らんと圖りて、大に悅び、遂に船を江心に搖出せし處に、岸の上の一夥の人、早く灘の邊に追至りて、十四五の火把を揮照し、頻に喊き叫んで躁動す。其内首たる二人の大漢子は各手に刀を提げぬ。其外二十餘人の者共は、都て鎗を拿ち棒を拽き、口々に大音揚て呼云けるは、汝船家長早く其船を漕回せ、もし然らずんば、汝も共に殺すべきぞ。宋江は兩人の下官と倶に艙の内に隱れ居て云けるは、船家長必ず船を漕回すことなかれ、然らば我重く汝に金銀を與へて、此恩を謝せん。船家長只頭を點きて、口に應へず、只顧上流を望んで漕行けり。岸の上の諸人これを見て、大に呼つて云く、船家長汝いかんぞ船を回さゞるや、必ず汝も共に殺さんに、其時後悔することなかれ。船家長是を聞て大に冷笑ひ、尙船を漕て上流へ

すべからず、速に忍び出て逃行ん。宋江が云く、我が輩若大路より逃ば、必ず過有ん、只此壁を鑿ち孔を明け、此處より出で小路を馳んとて、宋江自ら枷を提げ、下官兩人は包袱裹を負ひ、三人暗に用意を調へ、遂に壁の上に大いに穿を開け、三人相續いて鑽り出で、一時程にして、前面を見るに、蘆葦茫々と茂て江中に充滿しぬ。此處は則潯陽江なり。斯る處に遙背後より、若干の人の聲として、賊配軍走ることなかれ、と呼り、毎手に火把を揮照して、飛がごとくに赶來る。宋江是を聞て云く、上天某を棄給はずんば、一命を救ひ給へとて、三人同じく蘆葦の内に入て身を躱し、暗に頭を轉して背後の方を望見るに、火把漸々近きしかば、宋江等三人、いよ〳〵肝を消し魂を落し、又蘆葦の内を爬廻て、隱に身を藏さんする處もやあると、只顧尋けるに、此處は本大江の側の灣港にして、尤希有の惡所なり。此時宋江大に嘆息し云けるは、我早くもかゝる禍あることを知らば、只梁山泊に留り、一命を全うして、再び時を得ば、老父へも孝を盡さんものを、誰か識ん、今此處に於て非命の死を遂んとは、嗚呼時なるかな、嗚呼命なるかな、と頻に心を惱しけるに、彼追趕のものども、はや前面に至りけり。宋江すでに危急に臨みし處に、忽然として一艘の小船、蘆葦の内より漕出しかば、宋江忙しく向ひ進みて云けるは、いかに船家長、我が輩三人を其船に乘しめて、危き命を救くれんや。然ら

潯陽江に
宋江難に値ふ

ぐべし、唯流人が行方を知らず、未だこれを捉ず、遍く酒店打火店等を捜しけれども、曾て其消息なし、此故に我兄を呼起し、共に赶かけ行んと欲す。太公の云く、汝何ぞかく非道をなすや、彼流人自銀有て、膏を賣る漢子に惠ぬるは、是一點の厚意なり、汝何ぞこれに關らん、汝今日彼に打れたりといへ共、身體傷はず、只宜しくこれを忍びて、穏便に靜るべし、汝が兄若萬一汝が人に打れたる事を聞かば、立處に汝が相手を捜出し、性命を害する事有らん、汝宜しく我が諫に隨つて、今宵は快く歇むべし、必ず半夜三更に馳せて、門を敲き戸を打ち、妄に村中の人を鬧すことなかれ、汝もすべからく陰徳を積べし、陰徳あれば陽報あると云ぞや。彼大漢子父が諫言を耳にも聞入ず、則ち朴刀を提げて後亭を望て入しかば、父太公も同じく後に隨つて馳入けり。宋公この言を詳に聞て大に驚き、則ち兩人の下官等に對して云けるは、我が禍いかんぞかくのごとく毒惡なるや、たま〳〵仇を免れんとして、却て仇人の家に宿を借ぬること、命の拙き所以なり、然れ共三十六計走るを上計とすと云なるに、我が輩只宜しく此處を逃出ん、もし彼漢子我が輩此に在る事を知らば、必定性命を害すべし、縦ひ父太公我が輩が事を云ざるとも、家僕等いかんぞこれを云ざらん、畢竟此處に憩ひがたし、早々用意を調へ走るべし。兩人の下官等が云く、押司の言尤可なり、事已に此に到る、一刻も遲疑

歸りしかども、大に酒に醉ひ卽ち前後も省ず後亭の上に打臥ぬ、若事あらば、明日の沙汰にせよ。彼大漢子が云く、某急に兄を呼起し、共に馳て仇人を追かくべし。太公が云く、汝は誰と爭を惹出して、兄を呼起さんとするぞや、若汝が兄これを聞ば、必定人を殺し火を放て大事を做出すべし、汝まづ爭の所以を我に告知らせよ。大漢子が云く、大人は未だ聞給ふまじ、今日鎭上に於て、一人の漢子、鎗棒を使て、膏藥を賣ふ者あり、惣じて是等の商賣をなす者は、先我等兄弟にまみえ、其後揭陽鎭に於て鎗棒又は打拳にもせよ、人を集めて商をすることなるを、今日膏藥を賣し男子は、曾て我等兄弟を訪はず、擅に揭陽鎭にて、鎗棒を使ひし故、我鎭上にて命じ、諸人に半錢も賞を惠ましめず、然るに何れの所より來れる流人なるにや、傍若無人に只獨出尖で、乃ち五兩の銀を以て、彼鎗棒を使ふ漢子に賞し、我が此揭陽鎭の威風を滅しぬ、このゆゑに我かの流人を打んとせし處に、鎗棒を使ふ膏賣暗に後より來て、我を踢倒し、大に辱しめを蒙らせり、我是を憤ること骨髓に徹し、終に仇を報て恨を雪んと欲し、揭陽鎭の酒店、大火店等に觸て、彼流人に宿を借しめず、彼今宵路に迷ん所を追詰て討んと圖り、健なる漢子共を催し、先膏を賣る漢子は、方々客店を搜して、遂に尋ね出し、痛く數十鞭打て、今都頭が家の梁に吊置ぬ、明日彼を粽のごとくに捆り、卽ち江中に沈めて、這恨を雪

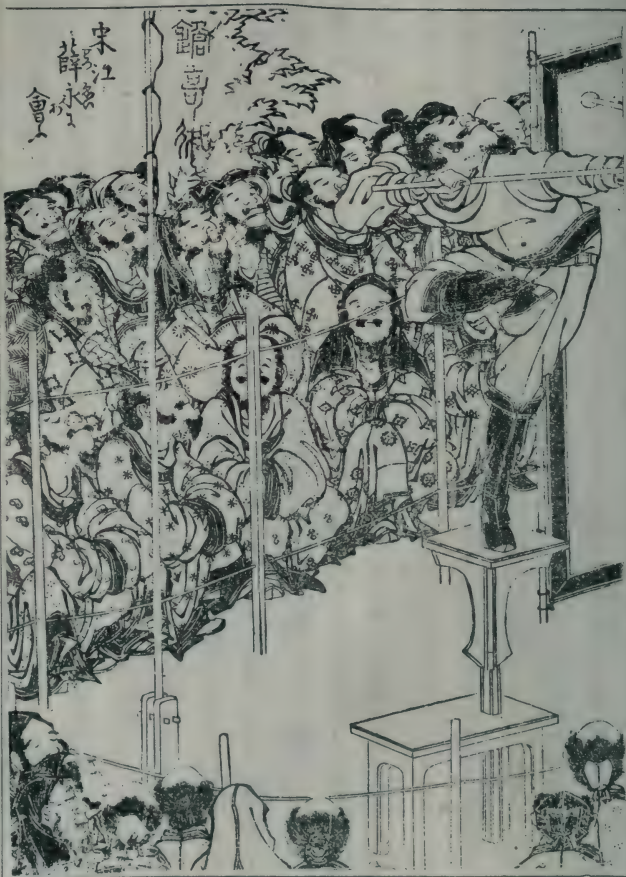
げ緩々歇み給へとて、頸枷を取しかば、宋江大に悦び、頓て兩人の下官とともに、淨手に出て天を見るに、星光雲を披いて明なり。宋江又房間の外を見るに、此處に一つの小路有ければ、宋江此路を眼の内に看置けり。三人又房間の内に入て門を關し、各床の上に登て打臥し、倘閑談して云けるは、幸ひに主の太公我が輩を留たればこそ、今宵は斯心を安んじて睡るなり、却て馬驛の打火店よりも大に勝似りとて、將に眼を合せんとせし處に、房間の外大門の前に火の光見えて、人音有しかば、宋江暗に戸の縫間よりこれを望み見るに、主の太公二三人の家僕に把火點させ、親自四方八面を揮照して遍く見廻り、用心緊しき光景なり。宋江低言て兩人の下官に語て云けるは、主の太公全く我が老父に似て、家内の用心究て嚴かなり、我が老父も亦今時分は自ら火把を照し家内を見廻るべしとて、覺えず涙を含みけり。斯る處に門外に數人の聲として、門を開け、と呼りしかば、彼家僕忙しく門を開きし處に、五七人の漢子門内に進み入りぬ。其内の頭と覺えし大漢子は、手に朴刀を提げ、其餘の者共は每手に棒を拿ぬ。宋江再び大漢子を好く見るに、彼頭たる大漢子は、今日揭陽鎭にて爭をなしたる漢子なり。此時太公かの大漢子に問て云く、汝は何れの處にて、誰と爭をなし、夜中に斯棒を拽き刀を提げ噪動するや。彼大漢子が云く、大人は我が兄の居給ふ所は知り給はぬや。太公が云く、汝が兄は早老

里許の路を來りしかば、はやくも林の背後に、一間の大家聳え見ゆ。宋江此大家を見るに、前は村塢に臨み、後は高き岡に倚り、數行の楊柳綠にして煙を含み、百頃の桑麻靑くして雨を帶し、高壠の上には牛羊陣をなし、芳塘の內には鵝鴨群をなす、眞に富饒なる光景なり。此時宋江兩人の下官とともに家の前に至て門を敲しかば、一人の家僕門を開て走り出で、乃ち宋江等に問て云けるは、汝等は誰人なれば、夜中來て門を敲くや。宋江恭しく答て云けるは、某は是罪を犯したる流人、配所江州に趣くものなり、今日は想はず馬驛を馳過て旅宿を求るに所なし、この故に貴宅を借て、一夜を過さんと欲す、望らくは憐を垂れ給へ。家僕が云く、已にかくのごとくば、少くこゝに待給へ、我まづ主の太公に告て來らんとて、再び內に入り、未だ暫くもせざるに、又走り出て云けるは、主の太公に告けるに、肯て一宿を貸まゐらせんとなり、宜しく我に隨つて入給へとて、遂に宋江等三人を延て、草堂に至りし處に、主の太公はや出て宋江に見え、乃ち家僕等に命じて、宋江下官等を房間に導かせ、又酒食をも進めよと命じけるゆゑ、家僕等頓て宋江等を引て房間の內に至り、則ち琉璃燈を點じ、宋江が前に設け、また酒食を出して、三人に食せしめ、遂に器を收拾めて外面に出ければ、兩人の下官宋江に對して云けるは、此處は殊更人なければ、彌々よく押司の頸枷を除くべき間、身を寬

軒の小酒店に入て、酒を求めければ、酒店の主が云く、貴客先に爭をなし給ひぬる大漢子、遍く酒店中に人を馳て、貴客等に酒を賣べからずと命じけるに、貴客必ず酒の望を休給へ、此處の酒店に於て、貴客に酒を賣ん者、恐らくは唯一人も有まじ。宋江は下官と共に此言を聞て、敢て再び聲をも做ず、遂に此店を去て、又數軒の酒店に至て酒を求んとするに、果して賣んと云ふ店一家もなかりけり。宋江力及ばず漸々市梢に至て此處を見るに、數間の打火店ありければ、旅宿を求めて歇んとせしか共、此處の家々も彼大漢子が命を受し故、宋江に宿を借す者一人もあらざりけり。宋江此光景を見て、大に興を失ひ、是非なく大路を望で馳し處に、はや日も落て天色晩んとすれば、宋江等三人心慌てける時に、兩人の下官が云く、押司素より來歷樞機もあらざりしに、多くの銀を教頭に與へ、剩へ事を惹出して、旅宿をも借受ず、今更何れの處に至て宿を求んや、誠に後悔これに過べからずとて、只顧躊躇して憂へける處に、遙對面樹林深き内より、燈の光閃き見えしかば、宋江是を見て、此林の中必定人家有と覺えたり、宜しく是へ馳て旅宿を借らば可ならんか。兩人の下官が云く、彼所はもと道中の馬驛にあらざれば、假令旅宿を租たりとも、頗る心を安んじがたし。宋江が云く、馬驛の打火店にはあらざれ共、別に宿を求ん所なければ、曲て彼所に一宿せんに、我に隨ひ來り候へとて、三人齊しく馳て二

夫かなと、感歎轉頻なり。宋江忙しく扶け起して云けるは、教頭いかんぞ我を拜し給ふや、宜しく先酒店に至て三盃を酌ん、もし我を棄給はずんば、早々來り給へ。薛永が云く、某久しく華顏を拜せんと願ひしかども、緣熟せずして日を延しけるに、今日高風を視奉るは、是天の賜なり、豈敢て尊命に違はんやとて、忙しく鎗棒膏藥等を收拾め、乃ち宋江に隨つて一軒の酒店に至りしかば、酒店の小廝出迎へて云けるは、貴客我店に至給ふは、定めて酒肉を求め給はんとのことならん、され共我が店の酒食は、貴客に賣與ふまじ、宜しく他の店に行てこれを求め給へ。宋江問て云く、何故酒食を我に賣らざるや。小廝が云く、貴客先に爭をなし給ひぬる大漢子、人を馳て云けるは、若貴客等此處に來て酒肉を求め給ふ共、必ず賣る事なかれ、又もし賣與へば、酒店を微塵に踏碎かんと、緊しく申越ぬ、我が此所の者共は、都て彼大漢子を怕る、其故いかんとなれば、彼此揭陽鎭を覇るに依てなり。宋江が云く、彼必定來て我輩を鬧すべきに、しかじ早々此所を立去ば可ならんや。薛永が云く、押司の言極て明けし、某も旅宿の主に房錢を償ひ、一兩日中必ず江州に至て、長兄を訪ふべき間、長兄は先速に、先達て江州に往給へ。宋江其議に同じ、乃ち又二十兩の銀を取出して、薛永に與へしかば、薛永深く拜謝し、先旅宿へぞ歸りけり。宋江は二人の下官と共に、酒店を出て、また一

と、衆皆手に汗を握りける。此時宋江は早くこれを避ていはく、某自ら銀を以て彼に賞するに、汝何ぞ干る事あらん、無益の怒を起すことなかれ。彼大漢子益怒て、又拳を擧げ、足を飛せ、宋江に打て蒐りしかば、宋江今は止ことを得ず、同じく拳を輪し、相迎へんとしける處に、彼膏藥を賣ふ敎頭背後より走り來りて、彼大漢子が頭巾と上縧とを揪へ、地上に痛く投しかば、彼漢子大に吼り、再び起上らんとせしかども、彼敎頭又脚を擧て踢倒し、尙痛く打んとせし處に、兩人の下官忙しく勸解へ、敎頭を抱住ければ、彼漢子漸々扒起て、宋江敎頭二人を見て罵りけるは、汝兩人好も我を打ぬるよな、少刻我が手段を見せんに、必ず此を走ることなかれ、とて、南を望んで馳行けり。宋江頓て彼敎頭に問て云けるは、願くは敎頭の姓名を報じ給へ。答て云く、某は本河南洛陽の者にして、姓は薛、名は永と號す、某が祖父は老种經略相公の幕下にありし軍官なりしか共、不幸にして浪々の身となり、某今鎗棒を使ひ、膏藥を以て渡世の營とす、人皆某を稱し、病大蟲薛永と云慣せり、貴官の高姓大名はいかん。宋江が云く、我は是姓は宋、名は江と號し、鄆城縣の者なり。薛永が云く、貴官はもし山東の及時雨宋公明と云ふ人にはあらずや。宋江が云く、某則ち宋公明なり。薛永聞も敢ず忽ち地上に拜伏して云けるは、名を聞しは面を見るに如ず、面を見るは名を聞よりも勝似り、誠に希有の大丈

ざるは、嘸自ら是を慚らん。我もろ〳〵の見物人に替つて、彼を賞せんと、則一錠五兩の銀を取出して、膏を賣る漢子に對して高聲に呼り云けるは、我は是罪を犯して配所に趣く流人なれば、教頭を賞すること能ず、只此五兩の銀を足下に送る間、もし輕少を嫌はずして、これを收め給はゞ、我大悦すべしとて、則銀を與へしかば、彼漢子此五兩の銀を得て、恭しく頓首して云けるは、かく大いなる掲陽鎭にだも、唯一人も人を識る豪傑あらざるに、貴客はもと身に官司の事を預り、配所に趣き給ふ過往、却て某に五兩の銀を恵み給ふ事、他の五百兩よりも、猶是を忝なうす、願くは某貴官の高姓大名を承つて、德を天下に傳んとす、宜しく尊姓名を知らしめ給へ。宋江が云く、教頭は何ゆゑ再三慇懃の言を云給ふや、這等の薄儀何の謝する所あらん、と未だ云も罷らざるに、一人の大漢子忽ち群人の内より躍出で、乃宋江に向て呼りけるは、汝は何れの所より來れる罪人なれば、あへて我が掲陽鎭の威風を犯して、傍若無人の舉動をなすや、彼膏藥を買ふ漢子、只這等の武藝を知るのみにして、我此掲陽鎭に來て鎗棒を使ふは、甚だ以て悪んずべし、此ゆゑに我諸人に云含て一錢半錢も施さしめざる處に、汝罪人の身分として、當地の人を欺き、擅に銀を以て彼に與へしこと、分に過たる賊配軍、我決して汝を饒さじとて、拳を輪し宋江に打て懸りしかば、諸人これを見て、すはや事を惹出せり、

何やらん見物して在ければ、宋江も又下官等と共に、群人の内に挨入てこれを見けるに、乃ち一人の漢子鎗棒を使うて、膏薬を賣る者なり。宋江暫く是を見ける處に、彼漢子はや鎗棒を使ひ休め、又拳を擧げ脚を飛せて打拳の神妙を使ひしかば、宋江覺ず聲を放て大に喝采にけり。此時彼漢子一つの盤を拿て四面八方に繞り、乃ち見物の人に向て云けるは、某は此度遠方より當所に至り、偏に諸主顧を頼で、今日の營を做んと欲す、某が鎗棒拳頭原來未熟にして、人目を驚しむるに足らず、然ども諸主顧を慰めんが爲、浪にこれを使うて、尊覽に備へ奉りぬ、もし筋重膏の入用も候はゞ、數錢を投てこれを求め給へ、我が此筋重膏は、是雙びなき名膏なり、必ず世間の膏に比して一列に見給ふことなかれ、縦ひ膏の入用あらずとも、某が乏しき營を助んと思はゞ、一錢半錢を論ぜず、盤の内に投入給へ、某幸ひ諸主顧を集めて、膏を賣はんとするは、恰も寳の山に入たるがごとし、何ぞ手を空うして回んや、願くは諸主顧、我が此盤の内に錢を滿しめ給へとて、累に六七遍繞りしか共、錢を投る者一人もなし。彼膏を賣る漢子又呼つて云けるは、望らくは見物の諸主顧、高く尊手を擧給ひて、志の一錢半錢を丟り給へ。此時見物の者どもは、倘眼を白々として、曾て一錢をも賞せざりけり。宋江此光景を見て、心中に想ひけるは、彼漢子空しく鎗棒を使ひ、虚しく言語を盡し、唯一錢の賞をも受

邊を過らば、必ず此店に倚て、宜しく三盃を酌み、再び百念を忘れ醉臥べし。宋江等衆人此言を聞て、各一笑を催しけり。其夜は李立酒宴を設けて、衆人を欵待し、夜も更ければ、皆々此家に一夜を過しぬ。翌日李立又酒食を具て、宋江等衆人を欵待し、頓て包袱繩を取出して、宋江并に兩人の下官に還しければ、宋江深く是を謝し、乃ち李俊等と共に嶺を下るべしとて、李立に別を告げし處に、李立深く別を惜み、暫く路を送りて立歸りぬ。宋江は李俊童威童猛兩人の下官等と嶺を下り、逕に李俊が家に至て先こゝに休けるが、李俊悦ぶこと限なく、早速酒宴を設けて、宋江を欵待し、乃ち義を結で八拜の交を誓ひ、遂に宋江を兄とし己を弟とす。李俊悦びの餘り再三苦に宋江を留めて數日憩しめ、宋江も其志の切なるを感じ留り、互に睦じきこと同胞のごとく、既に宋江ははや發足せんとて、李俊に別を告げしかば、李俊今は留がたく、再び酒宴を設け、別の盃を勸め、又碎銀若干を出して、兩人の下官に與へ、宋江が事を懇に頼みしかば、兩人の下官大に悦びて領承せり。宋江旅裝調ひ、李俊童威童猛等に別れ、掲陽嶺を離れ、江州を望て進み行き、兩人の下官は宋江が斯人に敬はるゝを見て、暗に是を感じけり。其日宋江下官等、共に半日許馳せて、未の上刻に一つの街に至り、宋江此處を見るに、人煙輳集りて房屋並列なれり。宋江又百歩許行て對面を見るに、一夥の人群り圍で、

四編　巻之三十四

○没遮攔及時雨を追趕ふ

催命判官李立、又宋江に對して、長兄今江州の配所に行て、苦しみを受給はんより、宜しく此處に留り給ひて、身を安んじ命を立給へ。宋江が云く、向に梁山泊の豪傑等、再三再四懇に我を山陣に留めしかども、我唯老父の命に背んことを恐れて、終に辭して止らず、今又いかんぞ此所に留らんや、某原來心を決せし事なれば、朝に配所に至て、夕に死すとも可なり、大丈夫何の悔ることかあらん。李俊が云く、押司は是當世第一の義士なれば、必ず官司を詐く事をなし給ふまじ、李立汝早く彼兩人の下官をも、同じく解藥を灌てこれを助けんや。李立忙しく解藥を把て下官等が口中に灌入れしかば、二人の者夢の覺たる心地して起上り、互に面を覩合せて、只惘然として呆れ在けるが、良久しうして後兩人、同じく宋江に對して云けるは、此店の酒はいかなる美酒なれば、僅數盃にして、斯人を醉しめけるや、我人倶に酒を飲は、原醉しめん爲なれば、よく人を醉しむる酒を以て、美酒とも名酒とも謂つべし、我が輩他日又此

悅び半は駭然き、忙しく解藥を取て押司の口に沃ぎ納しかば、漸々甦らせ進らせぬ、只知らず何等の事にて江州に流されさせ給ふや、願くは詳に之を知らせ給へ。宋江是を聞て大に悅び、彼閻婆惜を殺せしこと、石勇に遇て弟宋淸が書簡を得て家に回り、今また江州に流さるゝ次第一々委しく語りければ、四人の者感歎止ざりけり。

舶來の本に宋淸の事を四郞と書り。もと宋太公の四男なりし義なり。又論者云く、趙氏の都頭、宋江を捕へん爲に來り、其席に饗應賄賂を請け、剩一宿せしは、捕盜やら珍客やら分別しがたく、互に悠長なる次第なり。

の邊の者なり、專ら官司の法度を背て、私に鹽を此處に運び來て、これを商賣にす、乃ち某が家に倚て身を安ぜしむ、彼兩人原江邊に住し故、能水に伏し善船に駕す、兄が名を出洞蛟童威と號し、弟が名を飜江蜃童猛と號す、願くは押司彼等が拜をも受給へ、と未だ云も罷らざるに、兄弟の者忙しく、地上に伏して拜をなしぬ。宋江が云く、旣に今麻藥を用ひて、某を殺さんとし給ひけるが、いかんぞ又某が名を知て、斯憐を垂給ふや。李俊が云く、某が一人の朋友、頃日濟州より囘て、某に語りけるは、宋押司事を做出し給ひて、江州に流され給ふと告知らせぬ、某いまだ押司の尊顏を拜せざるゆゑ、常にしも何とぞ鄆城縣に馳て、押司を訪はんとこそ思ひぬれども、只恨らくは緣薄うして、徒に日を延しける處に、此たび押司江州の配所へ趣き給ふと聞しにより、定めて此邊を過り給はんと推察し、凡五七日嶺下に出て押司を待しかども、曾て消息も聞ざりしに、今日想はず天の引合せを蒙りて、彼兩人の兄弟等と倶に嶺に上り、幸ひ李立に遇て、押司の噂をせしに、李立又三人の男子を麻藥に中しめ、遂に是を捉へりと告し故、某深く之を疑ひ、此處に來て押司の尊顏を見奉りしか共、某素より押司を識認らざりし故、分明に知り難く、只顧躊躇に及びしに、不圖彼文書あらんことを思ひ出し、則文書を改め見るに、果して押司の姓名有しかば、我が輩忽然として、半は

漢子先文書を取て、これを披讀し、四人齊しく大に歎じて云く、危急かな、宋押司已に非命の死をなさんとし給ひぬるよな、今不慮の命を脱れ給はんこと、是天の祐なり。彼大漢子又云く、我已に四五日此邊に出て、此押司を迎へしかども、昨日迄は嶺下に在て待けるに、今日不思議に嶺上に登て押司の命を救ふこと、我平生押司を慕ふの誠、天に感通したるに疑なし、速に解藥を用て、宋押司を甦生なさしめ進らすべし、と未だ云も了らざるに、酒肆の漢子頓て解藥を把て宋江が口に灌入れしかば、宋江漸甦りて身を動し、乃ち眼を開て左右を見るに、四人の漢子雙方に並立ちぬ。宋江は原來これを識認ず、誰なるにやと思ひける處に、彼大漢子先宋江に向て、慇懃に拜をなしければ、宋江呆れて、足下は誰人なれば、我を拜したまふ、疑らくは是夢にはあらざるや。又彼酒店の漢子も同じく身を翻して宋江を拜しければ、宋江も又兩人の男に禮を還し、足下兩人は實に誰なれば某を斯愛敬し給ふや、願くは高姓大名を聞ん。彼大漢子答て云く、某は姓は李、名は俊と號す、原廬州の者にして、專ら楊子江の内に在て、船を撑す水主なり、某別して能水性を識たる故、人皆某に綽名し混江龍李俊と稱す、又彼酒店の主は、乃ち、此揭陽嶺の人にして、專ら酒の内に、麻藥を入るゝの商賣をなす、此故に人皆彼を稱して、催命判官李立と申す、又彼兩人の者は、同胞の兄弟にして、乃ち潯陽江

宋江李俊に會ふ

かりしに、今日天より偶幸を賜りて、三人の男子を捉へし處に、包袱の内大に實あつて、想はぬ大利を得たり。彼大漢子これを聞て、忙はしく問て云く、汝の捉へぬる男子は、いかなる模樣風俗ぞや。酒店の漢子が云く、兩人は監押の下官、一人は流罪人なり。彼の漢子大に駭き、其流罪人は身材矮して、面色黑きにあらずや。酒店の漢子がいはく、長兄の云給ふごとく、彼流人身の丈極めて矮くして、面色尤黑し。彼漢子慌て忙き問けるは、汝未だこれを殺さゞるや。酒店の漢子が云く、我早速にこれを殺さんと思ひしかども、折ふし家僕等いまだ囘らざるに依て、倘草房の内に入置ぬ。彼大漢子が云く、我其罪人を試に一見せんに、汝導けとて、四人竟に草房の内に入てこれを見るに、危かな宋江は、今もや殺されんとみえて、凳の上に載置けり。彼大漢子も亦いまだ宋江に對面せざりしかば、分明にこれを識認る事能はず、只顧躊躇して決せざりしが、忽想寄りけるは、兩人の下官が包袱の内に必定公文あらん、此公文をだに見ば、立地にこれを知るべしとて、乃酒肆の漢子に對して云けるは、我未だ宋押司に遇ざりしゆゑ、今此流人を見るといへ共、分明に是を知らず、唯此下官等が包袱づつみの内の、公文を取出し見ば、彼流人が姓名、明かに知るべし。酒店の漢子が云く、長兄の言尤然りとて、頓て下官等が、包袱蘊を開き内を見るに、一錠の大銀、並に若干の碎銀あり。彼大

へて云けるは、長兄等は何れの處に、遊行し給ふや。かの三人の内、一人の大漢子先答て云く、我が輩は嶺の上に登て、一個の人を相迎ふ、頃日ははや此邊に來るべき時節ゆゑ、毎日此邊に出て待つといへども、いまだ其來るを見ず、知らず何等斯遲滯なるやとて、一向嶺の上を伺ひ望みければ、彼の酒店の大漢子又問ていはく、長兄等の待給ふ人は、原誰なるぞや。彼大漢子が云く、我輩が待人は名高き大丈夫なり。酒店の大漢子が云く、其名高き大丈夫とは又是誰が事ぞや。彼の大漢子が云く、定て足下も聞及びつらん、世間の人皆山東の及時雨宋公明と稱す、鄆城縣の押司宋江なり。酒店の漢子又問て云く、其宋公明は何ゆゑ此嶺を過るや。彼大漢子が云く、我もと是を知らざりしが、頃日一人の朋友濟州より回りけるが、則語て云く、鄆城縣の押司宋公明、何等の罪を犯したるかは知らざれ共、濟州府の決斷に依て、近々江州に流さるゝと告しゆゑ、我熟々是を料り想ふに、若江州に趣むかば、必定此邊を過るべし、彼宋江鄆城縣に居給ひし時だにも、我何とぞ彼を訪うて相見えんと欲しけるに、今幸ひ此邊を過り給ふに、我何ぞ是を迎て相まみえざらんや、此ゆゑに我毎日此邊に出て待ぬれ共、未だ曾て來るを見ず、今日は此兩人の兄弟と共に、嶺上に登て、相待んと欲し、直にこゝに至りぬ、且汝が商賣頃日は得采いかゞぞや。酒店の大漢子が云く、某此數月かつて好き得采にも過ず、寂寞

ぎ、一連に三盃を酌乾ける處に、先兩人の下官、忽ち涎を流して地上に倒れ、更に身をも動す事叶はざりしかば、宋江これを見て、急に扶け起さんとして云けるは、汝兩人僅の酒を飲で、何ぞはやかく大醉せしや、といまだ云も了らざるに、宋江も等しく忽然として眼を眩し、覺えず地上に撲倒れ、三人只面を覩合せ、さらに動くこと能はざりけり。彼大漢子歎息して云けるは、嗚呼辱いかな、頃は曾て得采のことあらざりしに、今日天より此三人を、我が家に得せしめ給ふこと、是まづ莫大の吉兆なり、速に此輩を殺して、喜び酒をも酌べしとて、先宋江を倒に拖りて、人を殺す草房の內に入て、凳の上に載置き、又兩人の下官をも、同じく拖り入て凳の上に載せ、かの包袱蘊を取て、是を開き見るに、都て皆金銀なり。彼漢子打咲て云けるは、我多年酒肆を開き、或は商客を害し、或は流人を殺し、許多の人を剝取しかども、いまだ曾てかくの如き流人を見ず、量るに是等の罪人、いかんぞ若干の金銀を携へけるや、誠に我が福望外に出ぬ、昨夜燈花の報あり、今朝喜鵲の噪ありけるが、果して此客來りぬるこそ靈驗なれ、とて再び包袱を蘊んで、門前に走り出で、專ら家僕等が回り來るを待わびて、嶺の上を望で居けれども、只一人の家僕も回らざりける所に、三人の漢子來りて嶺に望て上りしかば、彼酒店の主誰なるにやと、忙しく出て是を見るに、原識たる人なりしゆゑ、乃ち相迎

が前に置き、自ら大盃に是を釃て、宋江等三人に勸めし處に、宋江等是を飲で云けるは、當世略平かならざるにより、諸方に惡人多く縱横して、動不動酒の内に蒙汗藥を入れ、乃ち萬千の豪傑を殺して、財寶を奪取ると云事、專ら沙汰す、然れ共我が輩は全く是を信ぜず、故に到る所に於て酒を飲まずといふ事なし、此處の酒も定めて異事有まじ。彼漢子打咲て云けるは、貴客の言尤當れり、今時は道中に多く惡人有て、麻藥を酒の内に和し、まゝ旅人を害し、財寶を刼取ることあり、我が此酒の内にも麻藥を入れけるに、貴客卒爾にこれを用ひ給ふことなかれ。宋江も同じく咲て云く、汝今我が云し戲言を聞て、汝も又戲を云や、遮莫我何ぞ麻藥を怕れんや、我反て毒の試に是を飲んと思ふとて、又一笑を催しけり。此時兩人の下官が云けるは、白酒は原盪めて飲む時は味いよ〳〵美なり、押司宜しく盪めて飲給はんや。宋江が云く、是誠に味美ならん、汝早く盪めて來れとて、彼漢子に命じければ、彼漢子心中暗に悅び想道く、凡蒙汗藥は盪めたる酒の内に用るときは、其驗甚だし、彼輩今酒を盪來れと云は、是我に福を與へて、己が死を急んとするなり、今麻藥を用ひずんば、更に何れの時をか待んとて、頓て麻藥を把て、酒の内に入れ、遂に熱く盪めて、再び宋江等三人が前に持出しかば、宋江等三人は、今麻藥を加へたるを夢にも知らず、又大盃に滿々と釃

宋江是を見て心中に悦び、乃兩人の下官に對して云けるは、我輩已に飢渴に及で疲れけるに、此嶺上酒肆有こそ幸ひなれ、且酒食を求めて是を用ひ、益精神を補ひ、嶺を下らん、とて三人等しく酒店に入つて坐をなし、良久しく待けれ共、更に一個の人も出ざりしかば、宋江呼つて云く、此店には何ゆゑ一人の男女も見えざるや、もし内に人あらば、速に出よと、未だ云も罷らざるに、内より一人の大漢子出來りけるを見るに、色赤く鬚亂れ、眼圓く口方なり。此漢子、卽宋江三人を見て恭しく問けるは、貴客は幾干の酒を索め給ふや。宋江が云く、我輩遠路を馳て頗る飢に疲れしかば、先宜しく肉を求めてこれを食せんに、汝はやく肉を持て我に賣れ。彼漢子が云く、我店には只牛肉と白酒とを賈ふ、知らず是を用ひ給ふべきや。宋江が云く、是尤よし、汝先二斤の肉と一角の酒とを拿來れ。彼漢子が云く、貴客我いふことを怪み給ふべからず、我此嶺上にて酒を賈ふには、先に價を得て後に酒を量るの例なり、願くは貴客先酒錢を償ひ給へ、然らば早速酒を量り出すべし。宋江が云く、先に價を償ひて後に酒を得るは同じ事なり、然らば先酒錢を償はんとて、急に包袱蘊を開いて銀を取出しければ、彼漢子傍に立て暗に包の内に物あるを見て、先虛華地にこれを悦びけり。宋江遂に銀をもつて彼漢子に與へしかば、彼漢子大に悦んでこれを收め、頓て一桶の酒と一盤の肉とを携へ出て、宋江

欵待し、又餞として一盤の金銀を宋江に送り、別に二十兩の銀を兩人の下官に與へ、酒宴も罷りければ、諸頭領皆盡く宋江を送て山を下り、各別を惜みけり。呉用と花榮とは、共に宋江を送り、二十里外の大路に至り、頻に依々戀々に一別に及びけり。扨宋江は梁山泊を去て、兩人の下官と共に江州へ趣きける。此兩人の下官は梁山泊人馬多きを見て、心中驚き、猶且諸の頭領共專ら宋江を敬ふを見て、是又奇異の思をなし、殊さら山陣に於て、二十兩の銀を得たりしかば、天に歡び地に悦び、ことに宋江を敬ひ尊ぶことといやましける。

○掲陽嶺にして宋江李俊に遇ふ

宋江配所への道を馳すること、はや半月餘なりしが、一つの高嶺ある所に至りぬ。兩人の下官宋江に對して、此嶺を過れば、則潯陽江と云所なり、此より江州に到るには、總て水路にして、其間遠からず。宋江が云く、今天色大に熱して、日中は殊更勝がたし、此朝涼に乘じて嶺を過らば可ならん。兩人の下官の云く、押司の言極めて然り、速に今朝涼に嶺を過るべしとて、三人同じく峯に馳上り、方に半日ばかり往て、嶺頭を過りし處に、此邊に一軒の酒店あり、前は恠樹に眺み、後は顚崖に靠り、左右は都て草屋なり。かの樹陰の下に一つの帘ありければ、

下は父の教に違く者にして、不忠不孝の徒となら ん、若かくのごとくんば、縱ひ榮華にして百年の壽を保つとも、畢竟何の益かあらん、長兄いよ〳〵我を饒し給はずんば、今茲にて一死を乞ふべしとて、忽ち地上に拜伏して、深く淚を洒ぎしかば、晁蓋吳用公孫勝等一齊に宋江を扶起して云けるは、長兄決して山陣に留り給はずんば、某等豈敢て苦に留ることあらんや、必ず憂ひ給ふべからず、然れども今宵は心を寬げ、山陣に一宿し給ひ、明日早々山を下らせ申さんとて、再三再四留て、又大いに飮酌を催しぬ。宋江は今は止ことを得ず、一日の酒を酌み良輿に乘じけるが、其夜は兩人の下官と共に、一處に在て歇み、翌早天に起て、はや山を下らんと、別を告しかば、吳用が云く、某一人の知己、今幸ひ兩院押牢節級となつて、江州に居住す、乃ち姓は戴、名は宗と號す、人皆彼を稱して、戴院長と申す、彼又道術を善して、一日の中に八百里の道を行により、人皆彼を稱して神行大保とも諢名せり、此人原來財を輕んじ義を重んじ、よき一人の大丈夫なり、某昨夜一封の書簡を修へて此にあり、今押司にこれを渡さん、江州に至り給はゞ、早速これを戴宗に屆け給ひて、彼とも宜しく交を結び給へ、總じて何等の事有とも、速に我が輩に告知せ給へ、必ず隔心有べからず。宋江是を聞て感謝に堪ず、深く禮しけり。此時晁蓋諸の頭領迄、深く宋江が別を忍びず、頓て酒宴を設けて宋江を

りし處に、晁蓋頓て盃を把て宋江に勸めしかば、其次に吳用公孫勝を始として白勝に至るまで、一々盃を取て宋江に勸め、酒已に數遍巡りける處に、宋江慇懃に謝して云けるは、諸豪傑我を愛し給ふ志深きこと、感佩に勝ざるなり、某は是罪を犯したる流人なれば、久しく住るに宜しからず、願くは速に山を下り申さん、はや盃を收め給はんや。晁蓋が云く、押司は何故斯我山陣を見外になし給ふや、願くは先山陣に止り給へ、押司もし兩人の下官を殺すに忍び給はずんば、我多く金銀を彼等に與へ囘らしめ、則彼官司へは、梁山泊の豪傑等大勢山を下て押司を奪ひ取ぬといはしめん、然らば罪彼等が身に及ぶまじ、唯宜しく意を決し給へ。宋江が云く、長兄必ず是等のことを云給ふことなかれ、是則我を救ひ給ふにはあらずして、却て我を苦しめ給ふに似たり、我が家には尙一人の老父あれ共、某かく禍を蒙りて異鄕に徘徊しぬるゆゑ、老父の左右に侍て孝を盡すこと能はず、これを憂ること萬千なり、今我もし山陣に留らば、父が敎訓を背くのみならず、禍必定老父が身に及ぶべし、我這回故鄕を出し時、老父再三此事のみを丁寧にす、我いかんぞあへてこれを背んや、向には我いまだ老父が心を知らざりし故、一時の興に乘じて山陣に加はらんと欲しぬ、然れ共這回は父が敎訓を受て配所に趣くことなれば、前遣とは等しからず、我もし長兄の諫に隨つて山陣に留らば、上は天理にそむき、

何を以てかこれを報ぜんや、誠に只心に銘じ骨に鏤のみなり。宋江が云く、某向に閻婆惜を殺してより、故郷を走り出で、凡半年餘り異郷に流落して、再び又禍を被りし故、山陣に來て身を躱さんと、已に花榮秦明等と議定して、山陣に赴かんとしける處に、半途に於て不圖石勇に遇ひ、則弟宋清が書簡を接へて、これを披見するに、老父死去し未だ葬らず、專ら某が回るを待つとの訃音を得て、一刻も早く回るべしと有けるゆゑ、中途より馳回りぬる處に、老父が死去と云は都て僞にて、某若諸の豪傑に隨つて、山陣に足を留ることもやあらんと、老父偏にこれを怕れ、かくのごとく詐の書簡を修へ、我を故郷に呼回しぬ、然るに又官司へ捉はれ、數十日在牢しけれ共、諸役人都て某とは原來交睦じかりし故、衆皆憐を垂れ、情深かりしかば、在牢の内少しも苦みを請ず、今又江州に流さるゝといへ共、此處は原富饒なる土地にて、他の配所とは大に同じからず、先互に一命恙なく相見えしこと、何の喜かこれにしかんや、某猶暫く山陣に在て、別離の患をも語り慰めんと想へども、配所への日限定めあつて、已に逼りしかば、久しく留りがたし、則是より辭別致すべし。晁蓋が云く、何ぞかく甚だ急ぎ給ふや、先暫く坐し給へとて、乃ち晁蓋宋江同じく中央に坐しければ、兩人の下官は宋江が椅子の背後に跪きぬ。晁蓋諸の豪傑を呼で左右に坐せしめ、各宋江に對し一禮畢

是を除んや、必ず卒爾のことをなし給ふな、淸風寨にて劉高が設し、囚車とは一列ならず。吳用此言を聞て大に咲て云けるは、某已に長兄の尊意を察せり、縱ひ頸枷を除たり共、長兄をだに山陣に留ずんば、何の妨かあらん、且晁天王久しく長兄に見えざる故、朝夕長兄のことをのみ渇想す、願くは長兄片時山陣に上て、心腹のことをも語り給へ。宋江が云く、唯吳先生は、よく我が意を知り給ひぬるゆゑ、頗る安心す、彼兩人の下官は、官司の命を奉つて、我を監押すといひ、殊更我を敬ふの心深し、縱ひ我が命を果すとも、彼兩人が命は扶んと思へり、願くは吳先生我が爲に彼兩人を饒し給へ。此時兩人の下官心中に宋江が此一言を悅び、只顧宋江に向て哀み告けるは、某等兩人が命は、全く宋押司の扶を蒙るのみ、憐を垂れて救ひ給はるべし。吳用是を聞打笑ひ、頓て宋江を導きて、漫々と蘆葦の茂たる岸邊に至りしかば、はや數艘の船來り相迎へ、乃ち諸の人を載て、山前に漕つけ、此處より又岸に上り、直に斷金亭の上に至り、吳用已に小賊等を四下に馳て、諸の頭領に斯と告ければ、衆皆斷金亭に至て宋江を迎へ、直に聚義廳に導いて各相見しける處に、晁蓋先宋江に對して云けるは、我輩鄆城縣に於て押司に一命を扶られてより以來、日として押司の大恩を思はずといふことなし、向には又諸の豪傑を山陣に薦め遣され、彌當陣の光を增ぬること大いなり、彼此の洪恩

宋江
劉唐と
宥め
両人の下
目を救ふ

なりといへ共、却て是我を救ふにはあらずして、我を不忠不義の地に落すに似たり、若彌我を迎て山陣に上らんとならば、是我性命を害せんとするに等し、しかじ我此處にて自殺を遂げ、猶清名を末代に遺さば、家門の譽此事なりとて、已に刀を喉に當て自殺せんとしける處に、劉唐是を見て慌て忙き推住め、頓て刀を奪取て云けるは、長兄果してかく心を決し給ふ上は、別に又宜しき商議も有べきに、必ず誤つて尊體を傷ひ給ふことなかれ。宋江が云く、賢弟信實に我を憐むの心あらば、這次は我を放て江州に往しめ給へ、此後配所の日限滿て再び回ることあらば、必ず先山陣に來て、足下等と會合すべき間、賢弟明かに是を察せよ。劉唐が云く、某は晁天王の命を受て來りし故、擅に主意をなすこと能ず、幸ひ今大路の上に、軍師吳學究、花知寨共に同く出て、長兄の至り給ふを待居ければ、長兄先速に彼兩人を此處に呼寄て、宜しく商議を遂給へ。宋江云く、已にかくあらば、快く此兩人を請て商議をなさんとて、則一人の小賊を馳しかば、吳用花榮轡を並べ跑來り、頓て宋江が前に至て馬を下り、恭しく禮を叙畢りし處に、花榮先云けるは、いかんぞ宋長兄の頸枷を除かざらんや、我あへてこれを除ん、とて已に左右を顧て、小賊等にこれを命ぜんとせしに、宋江慌て云けるは、花賢弟何ゆゑかくのごとき言をいふや、此頸枷は是國家の法度にして、私のことにあらず、いかんぞ擅に

張千李萬大に驚き、忽ち其色土のごとくになつて、半は死人と等し。宋江劉唐を見て問けるは、賢弟は誰を殺さんとせらるゝや。劉唐が云く、此兩人の下官を殺さんと欲す。宋江が云く、汝若果して兩人の下官を殺さんとならば、我肯て自己に是を殺さん、其刀を我に與へよ、汝自ら彼等を殺して手を汚さんや。劉唐が云く、我是を殺さずして、長兄に手を下さしめて殺さすは、却て無禮たりといへ共、敢て尊命に背ず刀を奉る間、宜しく兩人の下官を害し棄給へとて、遂に刀を宋江に與へしかば、宋江刀を取て又劉唐に問て云けるは、汝今兩人の下官を殺さんと欲する其意はいかん。劉唐答ていはく、山陣の主晁天王の命に因り、多くの人を鄆城縣に馳て、長兄のことを伺はしめける處に、長兄又官司に捉はれ、牢中に居給ふと聞えしかば、晁天王已に計を以て急に長兄を救ひ出さんと計りけるに、諸人凡て風說しけるは、長兄此度諸役人の憐を受給ひ、牢中殊に寬鬆にして、苦みをも蒙り給はず、遂に死罪を免れ、流罪に決斷すべしと、謠言專らなりしゆゑ、且事を延て動靜を伺ひし處に、果して此回江州に流され給ふよし聞えたるにぞ、晁天王諸の頭領を四方に分け遣し、長兄を迎へしめけるに、某が手にて長兄を接へしこと、尤是を欣べり、某今長兄を請て、山陣に上らんに、彼兩人を活し置て何の益かあらん、是故に是を殺さんと欲す。宋江が云く、賢弟等已に此の如くんば、其志尤切

助けんとする者又多し、少しも汝が憂に預らじ、若天我を棄給はずんば、改日必ず歸鄕して父子兄弟重て遇ん、只宜しく時の至るを待て、再會の期を測るべし、是則專要のことなり。宋淸益淚を流し、遂に宋江に別れ私宅へぞ歸りける。扨宋江は兩人の下官とともに旅路に向ふ處に、兩人の下官張千李萬宋江の父宋太公より多く錢財を惠れ、心中悅ぶ事限なし、況や宋江は忠義の士たることを知たれば、路すがら慇懃に宋江を敬ひ、いさゝか疎略のことなかりける。一日三人旅宿を求て歇し處に、宋江先兩人の下官に對して云けるは、我が輩明日は梁山泊の下を過るべきに、若山陣の豪傑等我が名を聞く事あらば、必ず山を下つて我を奪取り、汝兩人を驚しむることあるべければ、我が輩明日は常よりも早く打立ち、小路を求て馳行べきに、汝等兩人宜しく此議に同じ給へ。兩人の下官がいはく、押司もし自ら是等の事を語り給はずんば、某等必定梁山泊の麓を過て禍を受べき所に、押司是を告知せ給ひし事、莫大の福なり、明日は尤早天より打出で、小路を求て馳行べし、然らば梁山泊の禍を免れんと、已に其夜、議を定め、翌日五更の一點に起て飯を食し、三人旅宿を立出で、小路を行く事、纔二三十里許せし處に、山坡の背後より、一彪の兵馳出けり。宋江是を見るに、其内の大將は、乃ち是赤髮鬼劉唐なり。劉唐四五十人の小賊を引て馳來り、彼兩人の下官を殺さんとしければ、

江州は是富饒なる地にして、魚米多き所なり、是に依て我這回金銀を諸役人に送て、汝を彼所に遣すなり、汝宜しく心を寛げ、自ら重く保養せよ、我頓て宋淸を馳て、汝を訪はすべし、若好便あらば、毎度書簡を寄て、我を安ぜしめよ、汝今江州に行ば、必ず梁山泊の下を過るべし、若梁山泊の豪傑等、汝を奪て山陣に留るとも、必ず彼等と一所に在て、强盜の頭領を做す事なかれ、此一言は第一肝要の事なれば、牢く心に記して忘るべからず、汝若配所に趣きなば、只宜しく時の至るを待べし、上天もし憐を垂給はゞ、何條か父子再會の期なからんや、必ず自ら焦燥て心を惱し、且病を作す事なかれ。宋江父が敎訓を聞て、感懷肝に銘じ、覺ず淚を洒ぎ深く哭き、遂に父宋太公に別れ、江州を望で進發す。舍弟宋淸は猶一程の路を送りしかば、宋江別に臨んで、再三宋淸に命じて云く、汝必ず我がことを以て憂とすることなかれ、唯よく老父に事へ、孝を盡すべし、我想ず事を惹出し、數度老父を悲はしめ、半點も孝道を行はざりしこと、誠に以て我が一生の憂なり、汝いよ〳〵我に替て、朝夕老父の左右に侍り、何事も老父の心に從つて、晩年の餘命を娛ましめまゐらせよ、汝我を訪はんとて、遠く江州の配所などへ至ることなかれ、若老父汝に撇られ給ひなば、誰か肯て老父に事る者あらん、もし又父の命にて配所へ訪はしめんとならば、かたく諫め止めよ、我僥倖諸州諸縣に知人多ければ、我を

江が捉れたると聞て大に憐み、諸の役人共、都て宋江が徳を知縣に告げ、免されんことを求めて云けるは、宋江もと已むことを得ずして閻婆惜を殺せしこと明かなり、殊に閻婆惜には、公事の相手となるべき者もあらざれば、相公宜しく憐を垂て、宋江が罪を免し給へ。知縣此言を聞て大に悦び、同じく宋江を免さんと欲し、先宋江が頸枷を除て牢中に入置けり。宋太公多く金銀を上下の役人に送て、宋江を救はんと圖りしかば、役人ども皆悉く其意を得て、各心を用ひけるに、閻老婆は死してはや半年餘に及び、彼張三も又再び此事に干らざりしにぞ、宋江が對手となつて、訴訟をなす者一人もなかりしかば、直に六十日の限滿るを待て、知縣文書を修へ、則ち宋江を濟州府に送て、決斷を求し處に、知府文書を看て、宋江が罪を正し、只二十杖策ち面に刺を加へ、兩人の下官を監押として、宋江を江州に流しけり。役人共、宋太公が賄賂を請しのみならず、宋江とは原來交厚かりしかば、殊更懇情を垂れ頸枷も別して輕きを用ひけり。兩人の下官張千、李萬遂に宋江を監押して、州衙の前に至りし處に、宋江が父宋太公、弟宋清と共に、此邊に出て相迎へ、多く酒食を設けて、宋江幷に兩人の下官を請て食せしめ、又若干の白銀を出して張千李萬に與へ、又新しき衣服を以て宋江に著せしめ、旅裝已に調りしかば、宋太公自ら宋江を引て、僻靜なる處に至り、乃ち命じて云けるは、我聞く

が云く、汝計を以て我等兄弟を家内に賺し入れ、暗に我等を圖らんと思ふとも、我何ぞ白々と汝が計に中らんや、汝徒に無益の心を費すことなかれ。宋江が云く、我何ぞおへて、老父舍弟に禍を蒙らしむることをなすべき、宜しく疑を休て家内に入給へ、我恭しく三盃を勸めんとて、急に梯子を下りて、自ら大門を推開き、則ち兩人の都頭を引て堂上に至り、座已に定りしかば、頓て酒宴を設け珍物數を盡し、兩人の都頭幷に百人餘の兵共を懇に欵待し、尙錢財を分ち諸の兵共に施し、又二十兩の白銀を以て兩人の都頭に送り、再三酒を勸め、夜已に更しかば、兩人の都頭其夜は宋太公が館に歇み、翌日五更の時分、兩人の都頭遂に宋江を引て、縣裡に馳せ、夜已に明なんとせし時、はや到着しかば、知縣もやがて廳上に出し處、兩人の都頭趙能趙得遂に宋江を引て、廳前に出たり。知縣時聞彬これを見て、早速宋江に白狀を書しめけるに、宋江乃筆を揮て白狀を書て云く、

前年秋七月より、閻婆惜を妾として外宅に養ひ置たる處、此婆惜不賢不禮なるに依て、不圖爭を做し乃ち酒興に乘じ、想はずこれを殺害し、久しく罪を避け、故鄕を逃出しか共、這般兩都頭趙能趙得に捉れぬ。縱ひ何等の罪過に行はるゝ共、少しも怨ることなし。

と寫て知縣に呈しければ、知縣是を見て、先宋江を牢中に遣しけり。滿縣の貴賤ことゞく宋

宋江故郷に
皈りて難に
値ふ

て今此都頭の職をなしぬるゆゑ、己が勢に傲て、必ず我を捉へんと欲す、今徒に彼等と爭論するともいさゝか益あらじ、しかじ自ら出て擒となり、明日官司に於て罪を免されば、却て兩都頭が腌臢の氣を請まじ、大人明かにこれを察し給へ。宋太公忽ち泪を泣然て云けるは、我汝を呼回し難を受しむること、今更後悔いかんがせんや、とて一向哭き悲しみけり。宋江が云く、大人必ず憂へ給ふことなかれ、我明日官司に出なば、却て幸有るべし、某向には旅中に有て、人を殺し火を放つの豪傑等と交を結び、ともに山陣に入て身を躱さんと圖りし、若さもあらば、再び大人に見えんこと難からんか、今幸ひ又官司に出て、何國に流さるゝことあらば、其限の滿るをだに待ば、再び歸參し、重ねて大人にまみえんこと、却つて易からん、然らば我宋淸と共に、日夜大人の左右に侍て、一點の孝を盡し、聊か以て大恩を謝し奉らん。宋太公云く、汝已に此のごとく主意を定めなば、ともかくも汝が所存に任すべし、汝明日官司に出なば、我多く金銀を以て、諸役人に送り、宜しく汝がことを頼み、然るべき決斷を頼べき間、必ず心を惱すことなかれ。宋江頓首して是を謝し、乃ち梯子の上に登て、高聲に呼はり云けるは、汝等先噪動することなかれ、我罪はもと死にあたるにあらず、必ず御赦免を蒙ることもあらん、先兩人の都頭寒舍に入て、三盃を酌給へ、明日我都頭に從つて、官司に赴くべし。趙能

嘸疲あらん、先宜しく房間の内に入て休息せよ。宋江父の命を受、遂に房間の内に入て歇みけり。此時一更の時分にて、家人等も盡く歇みける處に、俄に火把の光四下に明亮き、大勢の人馬宋太公が館を取圍み、一齊に咄と喊き叫んで云けるは、必ず宋江を走らしむることなかれ、とて各頻に噪ぎけり。宋江父子三人この光景を見て大に驚き、互に面を見合せ、呆れ果たる斗なり。凡一百有餘の人馬とみえけるが、大將は鄆城縣の新都頭兄弟にて、趙能趙得と云ふ者なり。大音に呼りけるは、宋太公もし上の法度を知らば、宜しく速に兒子宋江を出して我が輩に與へよ、然らば我肯て汝を傷ふことあらじ、若又彼を隱し出さずんば、汝等父子三人、渾てこれを捕ふべきぞ。宋太公が云く、宋江は未だ家に回らざるに、何ゆゑ宋江を出せと云給ふや。趙能呵々と打笑て云く、汝必ず僞を構へ、我を誑くことなかれ、已に一箇の人有て、宋江曩に張社長が店にて、酒を飮たるを見屆け、倘且汝が家に跟込ぬ、いかんぞこれを抵賴んや、只速に宋江を出して、汝が禍を免れよ。此時宋江梯子の上に在て見合せ居しが、父宋太公に對して云けるは、大人彼等と爭論し給ふことなかれ、我先自ら出て彼等に捉るべし、縣裡の役人共は原來我と親しければ、縱ひ官司に出たりとも、我を助んと欲ふ者多からん、殊に朝廷より天下の罪人を御赦免あらんとならば、必定其時に遭て罪を免るべし、彼新都頭は僥倖に依

簡を修へしめ、一日も汝が早く回らんことを圖り、斯は行ひしなり、我又人の云を聞しに、白虎山の邊には多く强賊あり、汝をも擹掇て、同じく强盗の頭領をなさしめ、共に不忠不義の事のみ行ふとなり、此ゆゑに別して汝を呼回さんと、彼柴大官人の方より來りたる、石勇と云者に書簡を寄て、汝を尋しめぬ、是都て我がなす所にして、さらに宋淸が預りしことにあらず、必ず誤つて宋淸を怒ることなかれ。宋江是を聞き地上に拜伏して云けるは、大人斯の如く逆子を憐み給ふこと、誠に感佩骨髓に徹せり、先尊體恙なきを見奉り、何の悅かこれにしかんや、唯知らず某が閻婆惜を殺したること、官司猶これを捨ずして、某を尋ね求め候や。太公が云く、宋淸が未だ回らざりし時よりも、多く朱同雷横兩都頭の力を得て、官司の事は漸々鬆になり、今時分は汝を尋ん者一人もなし、殊更頃日朝廷に皇太子を立給ひし故、天下の罪人を御赦免あると風聞す、是に因て彌汝を賺して、急に呼回しぬ、必ず誤つて怒を起すことなかれ。宋江又問て云く、朱同雷横兩都頭は曾て我家に往來すること有や、宋淸が云く、我前日人の沙汰しけるを聞けるに、兩都頭各公用に因て他州に出たるとなり、朱同は東京に馳しと聞しかども、雷横は何れの處に往たるにや、未だこれを聞ず、今縣裡には只兩人の新都頭のみ有り、此兩人共に姓は趙にして、專ら公事を攝るなり。宋太公又云く、宋江汝遠路を來り

閣いて歸郷せしなり、足下もし疑ひ給はゞ、是を見給へとて、宋清が書簡を出し見せければ、張社長大に笑て云く、いかんぞ是等のことあらんや、尊父宋太公は今日午の刻の前後、東村の王太公と共に、我店に來て、酒を酌給ひぬること彰けし。宋江これを聞き、心中甚だ疑ひ、口も漸々晩しかば、頓て張社長に別れ、直に家に回り、已に門内に入て窺ひ見るに、何の動靜もあらざりしかば、はや家僕等宋江を見て、盡く皆拜をなして悦びぬ。宋江先問ていはく、我が父太公幷に弟宋清何も恙なきや。家僕答て云く、太公毎日押司の事のみ渇想し給ひぬるに、今日歸り給ひしこと誠に家の福也、太公はさきに東村の王太公と共に、張社長が店に於て、酒を酌給ひ、回り給ふより、房間の内に熟く睡入居給ふなり、小刻對面なし給へ。宋江これを聞て大に驚き、逕に草堂の内に進み入しかば、宋清悦び迎へて拜をなしぬ。宋江此時宋清が素服を着せざりしを見て、いよ〳〵其僞を知り、宋清を罵りけるは、汝忤逆の徒、老父恙なく在ますに、いかんぞ死給ふと詐りて書簡を寄せ、已に我を自殺なさしめんとははからひしぞや、これ莫大の愆なり、汝直ちに此のごとく不孝を行ふや、と未だ云も終らざるに、屛風の背後より宋太公走り出呼り云けるは、宋江誤つて宋清を罵ることなかれ、是原宋清が愆にあらず、我毎日汝が事のみ憂へ慮り、再び對面せんことを欲し、乃ち宋清に命せ、我已に死たりと、書

四編　巻之三十三

○梁山泊に呉用戴宗を擧ぐ

偖又宋公明は父太公死去の訃音を得て、不慮に燕順石勇に別れ、故郷を望で連夜に馳回りし程に、日を累ねて故郷の村口に馳著たり。此所に張社長と云ふ者が酒店に至て、まづ此に憩しかば、張社長は原來宋江と知音なるが、宋江一向兩眼に涙を含み、悅びざる色ありければ、乃ち問て云く、押司は已に一年半の餘客路に在て、故郷に回り給はざりけるに、今般再び回り給ふは大悅の至りなり、然るに何故押司尊顏を煩惱しめ、悅び給はざるや。宋江答て、足下は未だ知り給ふまじ、我一人の老父已に死去たるに依て、旅先へ訃音到來し、連夜に馳回る次第なり、よつて心神の惱勞少々ならず。張社長是を聞き、大に笑て云く、押司は何を戲れて、かくのごとき事を言ふや、尊父宋太公先刻我店に來り酒を酌で回り給ひぬ、いかんぞ其後頓死し給はんや。宋江が云く、足下我を誑き給ふことなかれ、我弟宋清が方より、書簡を寄せて、老父の死去を告越たるに依て、回り來ては義理を缺く事あれ共、父の喪には易がたく、萬障を

等舉て花榮を尊び敬ひけり。此時諸頭領再び廳上に回り入て飮酌をなし、晩に至て酒宴罷り、各退散して歇みけり。翌日晁蓋再び酒宴を設け、其坐位を議定し、秦明は花榮に三歳の長なれども、花榮は秦明には大舅妻の兄なれば、花榮に讓て、林冲が次第五位に坐せしめ、秦明を六位とし、劉唐を第七位、黃信を第八位に坐せしめ、阮小二、阮小五、阮小七が下に燕順、王英、呂方、郭盛、鄭天壽、石勇、杜遷、宋萬、朱貴、白勝と序で、總て二十一人の豪傑一行に坐を定め、大に飮酌を開き、互にこれを賀しけるが、是より梁山泊いよ〳〵威勢を增し、大船房屋鎗刀鎧甲頭盔弓箭旗等を造らしめ、防を堅固に構へけり。扨宋江父の喪を聞て故鄉へ歸り、思ひの外父宋太公は一點の病もなく、宋江却て禍に遭ふ次第、次の卷に明かなり。

小李廣神箭
射雁梁山

て相勸め、酒已に數遍順逆に巡り、列位醉を發しければ、諸の頭領等が云く、先山前に出て風景を遊覽し、再び來つて飲酌を催さんと、總て二十一人互に相讓て階を下り、直に山前に馳て、四下の風景を一覽し、第三の關上に至りし處、空中に數行の賓雁嘹喨飛ければ、花榮是を看て暗に想道く、先に晁蓋我が弓箭の覺を信ぜず、改日比試せしめんと云ひけるに、今此飛雁の内其一つを射落し、晁蓋等に我神妙の藝術を信服せしめんものと、心中に込め、小賊等に問て、一張の弓一枝の矢を乞取り、晁蓋に對して、長兄嚮に某が金錢豹子の尾を射切たるを、全く信じ給はざる様に見及びぬ、今空を見れば、屢旅雁飛渡れり、今又來らば第三の雁の頭を射て、尊覽に入んと欲す、若萬一射損ずることあらば、必ず笑ひ給ふな、と云も終らざるに、一群數十の雁列を亂さず飛來る。忙しく弓矢打搭へ滿々と拽緊め、ねらひは第三番目の雁に候ぞとて、漂と放てば、其箭過たず第三の雁を射貫て、遂に山坡の下に墜にけり。小賊これを取て晁蓋に獻りければ、晁蓋等是を見て盡く皆駭然入り、都て花榮を稱して神臂將軍と號せり。就中吳學究再び讃嘆して、花將軍かく弓箭の達人たるに因て、人皆漢の李廣が神箭に比して、小李廣と稱しけれども、我今其神妙をみるに、猶李廣が上にあつて、楚の養由基たりとも、いかんぞ能花將軍の上に出ん、是則ち當山陣の福なりとて、此より梁山泊の豪傑

に問ける處に、はや二三十艘の小船を漕來り、吳學究朱貴并に九人の豪傑を請て船に乘しめ、諸の眷族、其餘人馬迄船に乘しめ、諸船一齊に漕出し、直に金沙灘に至り、此處より衆皆岸に上りし處に、晁蓋は諸の頭領と共に、此邊に出て秦明等九人を迎へ、直に延て關を越え、山を過て陣中の聚義廳に至り、各皆賓主の禮了りしかば、左の方には晁蓋、吳用、公孫勝、林冲、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜遷、宋萬、朱貴、白勝等の豪傑椅子を並べて列座せり。扨此白勝は原濟州の牢中に在しかども、數月以前牢を越て迯出で、直に此梁山泊に來りて、身命を安んぜり。是本吳學究が計に因て、白勝遂に一命を脫れたりとかや。又右の方には花榮、秦明、黃信、燕順、王英、鄭天壽、呂方、郭盛、石勇が椅子を並べ連り坐せり。總て二十一人の豪傑、兩邊に相對し、座の中央に一爐の香を燒き各誓をなし、笛を吹き鼓を擂ち、牛を殺し馬を宰しめ、大に酒宴を催しけり。此時秦明花榮等宋公明が德を稱し、清風山にて劉高を殺したること、逐一明細に說話けるに、梁山泊の豪傑ひとしく是を歡びぬ。其後又呂方郭盛、互に方天戟を以て鬪ひしを和談せしめ、且花榮戟の號、金錢豹子の尾を射斷たることまで語りけるに、晁蓋心中に未だ全く信ぜずして云けるは、花知寨若果してかく弓箭の達人たらば、當山陣にも聊射藝の族あり、異日必ず射術の比試を一見すべしとて、又盃を執

は、我輩皆官軍にあらず、山東の及時雨宋公明の書簡を携へ、山陣に加らんことを願ふ者共なり、必ず疑を起し給ふことなかれ。林冲が云く、もし果して及時雨宋押司の書簡を携へ給ひなば、須く前面の朱貴が酒肆に入て、先書簡を山陣に遣し見せしめ給へ、此上にて宜しく相見すべしとて、則青旗を把て、只一麾招きける處に、蘆の内よりはや一艘の小船漕出けるが、船の上には三人の小賊あり。一人は船を守りしかば、二人は岸の上に跳上り、頓て秦明等衆人を引て、朱貴が酒肆を望んで馳ける處に、水面に二艘の哨船と又一艘の快船漕出けるが、船の上に白旗搖動し、金鼓齊しく鳴しければ、一艘の哨船飛がごとくに漕回り、行方知れず隱れけり。秦明花榮の諸豪傑此處の要害を見て、大に駭て云く、誠に希有の嶮所かな、官軍いかんぞよく此所を犯し得ん、我輩もし此山陣に足を留なば、究竟禍を免るべしとて、遂に彼二人の小賊に引れ、朱貴が酒肆に至りしかば、朱貴自ら出て秦明等衆人を迎へ相見し、則書簡を乞取てこれを見、頓て響箭を放て蘆の内に射入しに、はや一艘の快船箭の響に應じ、漕來りたれば、朱貴書簡を小賊に與へ、先山陣に屆けけり。朱貴又小賊等に命じて、豐に酒宴を設け九人の豪傑を欵待し、其夜は皆々朱貴が後廳に歇みけり。翌日辰の刻に、軍師吳學究自ら山を下り、朱貴が店に至り、則ち九人の豪傑を請て一々相見え、各禮を叙了て、來意を詳

諸人と商議して云けるは、我が輩已に途中にあり、回るにも又回られず、散にも又散れず、進退兩ながら難し、只宜しく宋押司の書簡を携へて、先梁山泊に上るべし、もし晁天王等肯て留めずんば、別に又商議有べしとて、總て九人の豪傑兵を一所に合せ、數百の人馬漸く梁山泊へと進みけり。

○小李廣梁山に雁を射る

偖も諸〻の豪傑梁山泊へ入んとて、一つの大路を求め山に上り、已に蘆の内を過らんとせし處に、忽ち水面の上に金鼓の聲大に響しかば、秦明等諸の豪傑これを見るに、山に漫り野に遍く色色の旗を建ならべ、水泊の中より二艘の快船を漕來り、當先に進みぬる一艘の上には、三五十の小賊袂を連ねて群り乘り、船頭に一人の豪傑凳の上に高坐せり。是則豹子頭林冲なり。後より進む一艘の船の上にも、又三五十の小賊群り乘て、船頭の凳に高坐するは、是赤髮鬼劉唐なり。此時林冲先秦明等が人馬を見て、忽ち呼り叱て云けるは、汝等は何れの州より來れる官軍ぞや、敢て我輩を捕へんとこそ思ふらん、去來汝等を一々殺して、我此梁山泊の利害を知らしめん、と罵りける處に、秦明花榮等忙しく馬を下り、岸の邊に立往り、乃ち答て云ける

相まみゆるに及ばん、梁山泊へは、我が書簡だに携へなば、曾て異儀あらじ、汝兩人我が爲に宜しく諸豪傑へ言を傳へらるべし、我今燃眉の急に遭ひ、只一步も早く家に囘り、老父の喪を勤んと欲す、必ず他日の參會を期すべし、互に恙なからん事こそ專要なれとて、遂に酒錢を償はしめて酒店を出で、宋江又自ら乘し馬を石勇に與へて云く、汝は原來馬なければ、宜しく此馬に乘て梁山泊へ馳行るべしとて、又三人手を携へ淚を泣然ぎ、再三依々として別を惜みしかども、宋江今は已む事を得ずして、遂に燕順石勇に別れ、直に故鄕へと馳行けり。されば燕順石勇思はず宋江に別れ、大に愁へ、漸く四五里許馳て旅宿を求め、其夜はこゝに歇で後軍を待けり。翌日辰の刻秦明花榮諸の人馬悉く此處に至りければ、燕順石勇これを迎へて相まみえ、宋江此度父宋太公の死去故、遂に歸鄕したること詳に通じければ、諸の豪傑燕順を怨みて云けるは、足下は何ゆゑ宋押司を留ざりしぞ、宋押司歸り給ふ上は、我輩梁山泊へ行く事能ふまじ。石勇分說して云く、宋押司這囘宋太公の死去を聞給ひて、已に自殺をも遂給ふべき模樣なりけるに、我輩いかんぞ能留ることを得んや、必ず誤つて、我等兩人を恨み給ふことなかれ、猶幸希に宋押司一封の書簡を遺し、云給ひぬるは、此書札だに梁山泊に携へなば、晁天王等必定我輩を山陣に留ん間、先早々梁山泊へ馳行けとのことなり。花榮秦明其書簡を見、乃ち

逝去に依て家に囘らんとならば、重て梁山泊に上り給ふことも有まじければ、我輩再び長兄に會合せんこと極めて難かるべし、世上の父母都て死せざるはなし、先心を寛け給ひて、某等を梁山泊に引つれ給へ、已に其期に至りなば、某もともに長兄に從つて、鄆城縣に囘り、宜しく出喪の儀を調ふべし、古の語にも蛇頭なければ行ずと申なるに、長兄もし此より囘り給ひなば、我輩のみいかんぞよく梁山泊に上らんや、晁天王等も又いかんぞ敢て快く我輩を留めんや、願くは長兄明かにこれを察し給へ。宋江が云く、我もし足下等を引て梁山泊に上り、而して後家に囘らば、許多日の差あり、是則ち孝を缺に似たり、千里にして喪に走り難に走るは、子たり臣たる者の據なき天理なり、我只一封の書簡を修へて、備細を晁天王に云遣すべき間、汝宜しく此書札を携へて、石勇と共に先梁山泊に行るべし、我今老父の死去を聞しかば、日を過すこと年の如し、已に眉を燒くの急に遭ひ、いかんぞよく日を延んや、此上は我獨自ら連夜に馳て一刻も急に家に囘らん、必ず誤つて我を怪むことなかれ。燕順石勇再三留しかども、宋江終に留らず、頓て紙筆を索て梁山泊への書簡を修へ、及ちこれを燕順に與へて收しめ、はや打立べしと急しかば、燕順が云く、長兄先暫く待給へ、秦總管花知寨此處に至るべきに、再び相見の上發足し給ふ共、何の遲きことかあらん。宋江が云く、何ぞ再び

く、某向に柴大官人に離れてより以來、諸州諸府に徘徊して長兄の仁名を聞し事、恰も雷の耳に轟く如くなり、這回長兄梁山泊に入給ふならば、某をも携へ往給はんや。宋江が云く、此事尤安し、先宜しく燕順に對面し給へとて、頓て燕順を呼でまみえしめ、則主に酒を求めて暫く飮酌に及びけり。此時石勇宋清が書簡を出し、宋江に渡しければ、宋江是を接り、先上包をみるに、逆に封じ、曾て平安の二字なきまゝ、甚だ心中疑ひ、忙しく披き讀むに、其書に、父宋太公今年三月五日に病死あり、然れども猶喪を停て家にあらしめ、未だこれを葬らず、長兄早々歸り給ひて、共に喪を行ひ宜しくこれを葬り給へ、專ら長兄の歸り給ふを待のみなり、とありければ、宋江これを讀をはり大に驚き、忽ち聲を放て再三哭悲み、涙は袂を濕しけり。燕順石勇齊く諫んとせし處に、宋江哭の餘り遂に眼を眩し、地上に倒れければ、燕順石勇大に慌て、急に水を灌ぎ口に入れ、漸々甦醒しめたり。此時宋江涙を拭て云けるは、兩人の賢弟某が一言を聞かるべし、我聊寡情薄意を以て云にはあらず、實は只一人の老父ありしゆゑ、獨これのみ心に懸りけるゆゑ、常に寢食を保ぜざりしに、這回終に死去ありしが、宋清禮を我に讓りて擅にこれを葬らず、專ら我回るを待て兄弟同じく禮を盡し共に葬らんとなれば、我宜しく急に回らずんば有べからず、足下等はまづ梁山泊へ上り給へ。燕順諫めて云く、尊父の

大いに平生の渇想を慰めぬ、もし天此良緣を假し給はずんば、空しく孔太公が館に尋ね行べきに、此處にてまみえ奉ること、誠に莫大の大幸なり。此時宋江彼漢子が手を携へ内に入り、則問て云けるは、足下の大名は何と號し給ふや。彼漢子答て云く、某姓は石、名は勇と號す、原大名府の者なり、某常に博奕を以て過活とす、人皆某が諢名をつけて、石將軍と稱ふ、某前年賭博の上にて爭を惹出し、只一拳に人を打殺して、故鄉を迯出で、直に柴大官人の館に身を躱して難を脱れぬ、世間の人多く長兄の大名を吹噓して德を稱するを聞き、某大いに長兄の高風を慕ひ、這般特々鄆城縣に馳て長兄を訪ひぬる所に、長兄も又事を惹出し給ひ、他鄉に出給ひしと聞き、甚だ憂に逼りぬ、然れ共令弟宋清公に對面しける處に、宋清公いはれしは、長兄は白虎山孔太公が館に居給ふ間、若某彼所に尋行ば、幸ひ急事の書簡を寄べきとの事なりしゆゑ、某乃ち其書簡を携へて孔太公が館へ尋ね往んと思ひ、まさに今此處に至れり、宋清公再三申されしは、何やら急用ある間長兄縱ひ何等の事有とも、必ず一刻も早く回り給へとのことなり。宋公此言を聞て心中に疑ひ、又問て云けるは、足下我が家に幾日逗留有けるや、又かつて我父に遇給ひぬるや否や。石勇答て云く、某只一夜貴宅に歇しかば、尊父宋太公にも終に見えざりしなり。宋江又此回梁山泊に上らんとする次第詳に語りければ、石勇がいは

石勇
謁及時雨

ち再び問て云く、又今一人は誰なるぞ。彼漢子が云く、彼一人の名を云べき間、汝かならず恐懼して、眼を眩かすことなかれ、此人は是名は天より高く德は地よりも厚し、乃ち鄆城縣の押司山東の及時雨宋公明と云ふ人也、定めて汝等も聞及びつらん。宋江是を聞て燕順を顧み、暗に咲を含みけり。燕順はや発を棄て怒を息ければ、彼漢子又いはく、我は今云ふ兩人だに除きなば、縱ひ當朝の大宋皇帝たりとも、又是を怕じ、汝何ゆゑ発を棄けるや。宋江が云く、汝怒を息よ、我且汝に問はん、此兩人は我爲には、原來朋友なり、汝は又何れの處にて、此兩人に遇けるぞや。彼漢子が云く、汝既に此兩人を知たるならば、實に語るべし、前年我柴大官人の館に、四五ケ月逗留して、柴進とは尤親しけれども、及時雨には未だ對面せざるなり。宋江が云く、然らば汝は未だ宋江には遇ざるよな。彼漢子が云く、我一つの事有て今急に宋押司の居給ふ所に尋往んと欲す。宋江問て云く、汝は何等のこと有て宋江を訪ふや。彼漢子が云く、宋押司の弟鐵扇子宋清我を賴で、一封の書簡を寄せぬる故これを屆ん爲なり。宋江是を聞て大に悅び、忙しく向ひ進んで云けるは、諺にも緣あれば千里來て相見え、緣なければ面を對して相逢ずと云は果して其言のごとし、其宋公明とは乃ち某がことなり。彼漢子これを聞て大に驚き、忽ち地上に拜伏して云けるは、今日は我爲には大吉辰にて、想はず長兄の尊顏を拜し、

我此座を換さしめん人は、當世に三人とはよもあらじ、汝無益の言をいはんより、宜しく嘴を閉て、聲を出すことなかれ、若再び言を以て我を犯さば、此拳汝を饒すまじきぞ。小厮が云く、我かつて貴客を犯さゞるに、何ゆゑ斯のごとく罵り給ふや。彼漢子彌怒て云く、汝猶聲を側るや、必ず拳を請て後悔すな。燕順これを聞いて怒に忍びず、忽ち聲を放て呼りけるは、汝は何者なれば、再三無禮を云や、必ず我が怒を惹出して悔ることなかれ。彼大漢子大いに怒り、傍に置たる棒搶取躍出で、燕順を睨て云けるは、我自ら小厮を罵るに、汝これに干りて我を犯すはいかん、我普天の下に於て、只兩箇の人に讓るのみ、若此兩人を除て其餘の人は、都て我が脚底の泥のごとし、汝無用の威を振て災を受ることなかれ。燕順大に怒り、急に凳を取て只一打と跳出ぬ。宋江は暗に彼漢子の言の俗ならざるを聞て、心中に愛し、忙しく走り出で、兩人が中に身を横へ、諫めて云けるは、兩人必ず手足を動すことなかれ、我先旅客に問ん、汝が今云し普天の下に於て、只兩箇の人に讓るのみとは、誰をさして云ぞや。彼漢子が云く、我もし彼兩人の名を云はゞ、汝も必定大に驚くべきぞ。宋江が云く、願くは其兩人の名を聞ん。彼漢子が云く。汝頻に聞んとならば、我敢てこれを聞しめん、兩人の内一人は乃ち滄州横海郡の柴世宗の孫小旋風柴進、柴大官人と云慣す人のことなり。宋江是を聞て暗に頭を點き、乃

るに、先達て一人の大漢子、店の内の大座の上に坐しけるゆゑ、宋江此漢子をみるに、頭には猪嘴巾を戴き、身には皂袖衫を著し、腰には白膳膊を繫び、足には八答鞋を穿き、座の傍には短棒を置ぬ。凡身の丈八尺許にして、眼の光は恰も明星の如くなり。宋江先酒店の小斷を呼で云けるは、我が同行の者多人數なるに、大座を借て坐せしめんや。小斷が云く、此事極めて易しとて、宋江燕順を延て内に入ければ、宋江小斷に命じて云く、我が家人等も、ことごとく此處に呼入て酒を飲しめよ。小斷答て云く、前面に猶大座あり、彼所にて酒を飲しめ申さんとて、前面に走出で、宋江が家人共をみるに、盡くみな爐の邊に在ければ、小斷頓て彼先達て來りたる漢子に對し、貴客の坐し給ひぬる大座には、此多人數の客を坐せしめん、貴客は宜しく小座に移り給はんや。彼大漢子甚だ焦燥て、我は是先に來りし者なるに、何ぞ後より來る者に座を讓らんや、我決して座を移すまじ、とて大に小斷を白眼けり。燕順此體を見て、宋江に對して云けるは、長兄彼漢子が言を聞給ひしや、甚以て無禮と思はる。宋江が云く、彼無禮をなさば、彼に任せ無禮をなさしむべし、何の咎るに足らん。燕順是を聞き自ら忍び居たる處に、彼漢子又宋江燕順を見て、一向あざ笑ひけるに、小斷猶慇懃に彼漢子に對して云けるは、願くは貴客某が爲に座を換給ひて、某に商賣を遂しめ給へ。彼漢子大に怒きて、汝なんぞかく人を欺くぞ、

へて兩公の下風に順ふべし。宋江大に悅んで云く、我今兩豪の爲に和睦の事を調へんに、敢て承知あるべきや。兩人の豪傑是を聞て大に悅び、早速領承に及びし處に、後軍の人馬盡く皆已に到しかば、各悅んで一々對面し、呂方先諸の豪傑を請て山陣に上り、牛を殺し馬を宰しめて、大に酒宴を設け、飲酌已に半夜に至て罷りければ、其夜は衆皆呂方の山陣に休みけり。翌日郭盛も又席主となつて、酒宴を設け、諸の豪傑を欵待しけり。宋江やがて彼兩豪を諫め、同じく梁山泊に誘引しければ、兩人の豪傑大に悅び、早速其諫に從ひ、各人馬を聚め、財寶等を收拾め、用意を調へ、山を下らんと商議する處に、宋江が云く、權く先兵を起すことなかれ、我今數百の人數を引て梁山泊に赴かば、彼地の哨の者共我が假旗の文字を見て、誠の官軍と思ひ、急に馳て晁天王に報ぜん、是忽ち一騷動に及ぶべし、然らば我輩彼地を閙しむるに似たり、我は先燕順と共に先に馳て、梁山泊にかくと告知らせん、足下等は都て後より進み、猶三手に分れ來るべし。花榮秦明が云く、長兄の言尤可なり、旣に斯の如くんば、長兄は速に燕順を引て先に往たまへ、我が輩は後より進發すべし。宋江此時燕順と倶に、わづか十餘人を從へ、馬上にて路を行く事已に兩日にして、此日午の刻に及んで、小賊共甚だ疲れしかば、宋江是を憩しめんと欲し、燕順と共に、酒店を尋ね求め、馬を下りて酒店の内を望み見

呂方
郭盛

自ら强盜の頭領となり、若干の人馬を集め、專ら家を打ち舍を劫して多くの金銀財寶を奪取り、今日の營極めて豐なり、然るに此豪傑擅に此處に至て、我此山陣を奪取り、各二つにして互に其一つを守んと欲す、我肯てこれを護らず、毎日戰をなすといへ共、いまだ雌雄を分たざれば此のごとし、今日天良緣を假し給ひ、及時雨の尊顏を拜し、殊更花將軍の神箭を一覽し、喜望外に得たり、願くは向後敎を垂給へ。宋江又彼鋼鐵の甲を著たる豪傑に問て云く、足下の尊姓大名はいかん。答へて、某が姓は郭、名は盛と號す、本西川嘉陵の者なり、某初水銀の商賣をなし、遍く諸州諸府を囘りぬる處に、前年黄河を渡んとして大風に船を翻され、這々一命のみ脱れし故、故鄉に囘ること能はず、唯客路に流落て、日を徒に過しぬ、某幼き時より、我鄕の兵馬提轄に從つて方天戟を學び、漸々これを練熟しぬ、人皆某を呼で賽仁貴郭盛と云慣せり、世間に沙汰しけるは、對影山に一人の豪傑來て、强盜の頭領をなし、究てよく方天戟を使ひ熟せりとて、嚇怕るゝ故、某これと武藝を試て、方天戟の高下を比べ、もし我彼に勝つ事あらば、山をも奪ひ取て、我が住所にせんと思ひ、斯每日戰ふといへども、更に雌雄を分たざるなり、今日上天佳緣を賜て、宋押司の高風を接へ、且花將軍の神箭を一見し、大悅雀躍のみならんや、兩公もし某が卑賤を厭ひ給はずんば、某あ

兩將戰已に神妙に入ける處に、兩將が戟の上に附たる號、一つは金錢豹子の尾、一つは金錢五色の旗、遂に相攪れ扯分つこと能ざりしかば、兩將互に焦燥けり。花榮これを見て、忙しく弓箭打搭へ、豹子の尾を廳て恰も滿月のごとく挽て兵と放てば、其箭忽ち豹子の尾に中て根もとより射斷しかば、二本の戟忽ち雙に分れぬ。此時兩陣の軍士共一齊に聲を揚て擧にけり。彼兩將これを見て大に驚き、各且戰を休て、直に宋江花榮が馬の前に馳至り、身を屈て云けるは、將軍の神箭人の及ばざる所なり、願くは大名を知らしめ給へ。花榮馬上に在て答て云けるは、我が此義兄は、則ち鄆城縣の押司たりし及時雨宋公明と云ふ人なり、我は又清風寨の知寨小李廣花榮と云ふ者なり。那兩人の豪傑此言を聞と等く馬より跳下り、恰も金山を推し玉柱を倒す如く、身を翻して地上に拜伏し、共に慇懃に云けるは、兩位の大名を聞く事久し、何の幸に今日尊顏を拜するや、宋江花榮これを見て、同じく急に馬を跳下り、兩人の大將を扶け起して問けるは、各は誰人なれば斯我が輩を敬し給ふや、望らくは尊名を告給へ。彼花團の甲を著たる大將先答て云く、某が姓は呂、名は方と號す、原潭州の者なり、某平生武藝を好み、這方天戟を使ひ慣ひぬ、人皆某を稱して小溫侯呂方と申す、某向に藥種を運て山東に到りし處、商賣の本錢を失ひ、故鄉に歸ること能ずして、權く先此對影山に足を留め、獨

此間は兩邊都て險阻の地勢なり。かゝる處に前山の內より金鼓の聲大に響きければ、花榮がいはく、前面には必ず强賊有べしとて、乃ち弓に箭を搭へ、急に一人の騎兵を後軍に遣し、早々馳至るべきことを催促させ、宋江花榮先二十餘騎の軍馬を引て向ひ前み、半里ばかりに至て、路を尋ける處に、忽ち一彪の人馬馳出ぬ。凡其人數百十餘人はかりあるらんと見えて、紅旗を持せ、年若の大將當先に進み來る。宋江等遙に彼大將を見るに、頭には三叉の冠を戴き、身には團花の甲を著し、威風堂々として赤馬に乘り、方天戟を橫へ、大音聲に呼はりけるは、今日は必ず勝負を決すべきに、早く出よ、と云も罷らざるに、又山の背より一彪の兵馳出ぬ。其勢同じく百十餘人ばかりにして、年若の大將當先に跑來る。其裝束をみるに、頭には三叉の冠を戴き、身には鑌鐵の甲を著し、手には方天戟を提げ、白馬に乘り、威風凜々として好き一人の豪傑なり。左右には白旗を風に飜して、金鼓をしげく打ち鳴し、兩軍鬨の聲を發し、すでに陣勢を對しける處に、彼兩人の大將馬を近々と進めて、互に方天戟を輪し、各威を爭ひ鋒を交へ、一往一來祕術を盡し相戰ふは、龍虎の爭も斯あらんと思はれ、刺ば躱し刺るれば閃き、精神益々盛にして、鬪已に五十合に及べども、更に勝敗分たざりしに、宋江花榮は馬上に在て此戰を見て、大いに感歎に堪ざりしが、花榮漸馬を近く寄せこれを見るに、彼

かんぞ無縁にして卒爾に往べき、もし往たり共、彼又いかんぞ我が輩を留んや、すべからく有縁の人を求めて導を頼み往べし。宋江笑を含て、彼生辰の禮物十萬貫の金銀珠玉の事、並に劉唐が持參せし書簡を閻婆惜に奪ひ取れ、遂に止ことを得ずして、閻婆惜を殺したること、一一詳に語りければ、秦明大に悦んで云く、已にしからば長兄は梁山泊の大恩人なり、若事延引に及ばゞ不可ならん。早々此處を收拾めて、梁山泊へ赴くべしとて、乃ち其日商議を定め、山陣の金銀米錢十餘輛の車に載み、又諸豪傑の眷族共を都て轎に乘しめ、都合三百餘疋の戰馬を牽せ、凡五六百の小賊共を三手に分ち、路すがら言を詐りて、梁山泊を攻る官兵なりと稱へしめ、已に山陣に火を放て、房屋盡く燒拂ひ、宋江は先花榮と共に、八九十の軍馬を領し、第一番に山を下りければ、秦明黃信も同じく八九十人の軍馬を引て、第二番に山を下り、燕順王英鄭天壽等三人は二三百の人馬を率し、第三番に山を下り、諸の豪傑已に清風山を離れ、梁山泊へ急ぎけり。諸州諸府に許多の軍馬を備へ、其防緊しかりけれ共、宋江等當先に大旗を持せ、旗の上に大字を以て收捕強賊官軍と書し故、敢て咎る族一人もなかりけり。されば已に五七日許馳ければ、青州を離れしこと甚だ遠ざかりぬ。宋江等三路の人馬、其間わづか二十里ばかりを隔て、隊伍を堅固に列ねけるに、路を攔らるゝ事もなく、はや對影山と云ふ處に至りぬ。

花英以妹配秦明

め、各まさに歇みけり。翌日宋江は黄信と同じく婚禮の主となりければ、燕順、王英、鄭天壽三人は媒となり、花榮が妹を秦明に嫁せしめ、一連に三五日酒宴を設け、山陣大に熱鬧けり。既にして又五七日を過しけるに、哨の小賊山に上り來て、宋江等に告けるは、青州の慕容府尹文書を朝廷に獻り、秦明黄信花榮等謀反を企て、淸風山に陣柵を構るよし、奏聞するに依て、近々大軍を發し淸風山を攻破らんと、風說專らなり、宜しく官軍を防ぐの計を施し給へ。諸豪傑是を聞き、各商議して云けるは、此山は原來小陣なれば、永く止らん地にあらず、若京より大軍寄來て、四方を取圍ば、進退意に任せず、防戰叶ふべからず、若一旦兵粮盡ば、必定脫れがたからん、豫め先謀を定めば可ならんと、評議區々なる處に、宋江が云く、我已に思ふ所あり、諸豪傑の意に合んや。各是を聞き、長兄已に良計あらば、速にこれを告給へ。宋江が云く、是より南に梁山泊と云地あり、方圓八百餘里、其中に宛子城蓼兒洼と云ふ最も堅固の要害あり、今晁天王と云ふ人、三五千の軍馬を集めて、嚴に水泊を守りけるゆゑ、官軍共大に恐れ、敢て來り犯すこと能はず、我輩宜しく人馬を引て梁山泊に上り、晁天王等と勢を合せて官軍を防ば、まさに保て恙なからん。秦明が云く、若かくの如き要害の地あらば、縱幾千萬の官軍來るとも、何ぞ憂ふる所あらん、只恨らくは我が輩を薦達はす人なきに、い

んことは、すべからく商議を容て與ふべし、先宜しく彼を呼出せ、我彼に遇て一言を云ん。宋江も亦云く、我また彼にまみえて問ふべき事あり、早々彼を呼出さんや。王英これを聞て、乃ち劉高が妻を廳前に呼出しければ、彼妻泫然と涙を浮べ、只願饒し給へと叫びけり。宋江大に怒て云く、汝惡婦、我向に好意を以て汝を救ひぬるに、汝なんぞ恩を仇となして我を害せんとはしけるぞ、汝今日天罰を蒙り、再び活捕れ、猶敢て分說有や。燕順これを聞て忽ち躍起て云けるは、これらの惡婦に對して何事をか問ん、只速に頭を刎て恨を雪んには若じとて、刀を拔てはや首を落しければ、王英これを見て大に怒り、忽ち刀を揮て燕順に斬て蒐るを、宋江等急にこれを諫て、燕順此女を殺せしは良に理あり、汝彼女が毒惡なるを見ざるや、我向に汝を勸めて彼女を救ひけるに、彼却て夫劉高をして我を殺さんと圖りぬ、汝もし彼を留て身邊にあらしめば、畢竟損有て益あらじ、我他日聰明の佳人を擇み出して配すべし、必ず早まつて兄弟の好を壞ふことなかれ。燕順云く、王賢弟もしよく宋長兄の言を曉さば、彼女を殺したること尤怨とするに足ず、若彼を饒して妻とせば、久しうして後必ず彼に害せらるべし、よろしく怒を息て我を恨ることなかれ。王英諸人に諫言せられ、唯默然として言はず。燕順また小賊に命じ、惡婦が屍を取棄さしめ、頓て酒宴を設け飲酌を催し、其夜三更の左側に至て盃を收

云く、汝もと宋押司を知らざりしことなれば、何ぞ再三悔るに及ばんと、兩人まさに公廳の内に在て議論して居ける處に、忽ち一人の兵來り報じけるは、寨外に兩路の軍馬金鼓の響有て寄來りぬ、早々防の備をなし給へと。秦明これを聞き、必定宋江等が人馬ならん、少しも驚く事なかれとて、黃信と等しく馬に乘り、寨門の邊にかけ來り、門外を望み見るに、兩路の軍勢はや近々と馳至りける。其一隊は宋江花榮、又一路は燕順王英、おの〳〵百四五十人を引率せり。黃信これを見て心中に悅び、則兵に命じて吊橋を下し、寨門を開せ、自ら兩路の人馬を迎へ、寨中に進せければ、宋江諸軍に號令を下し、一人の百姓一箇の寨兵をも傷はしめず、先南寨に兵を進め、劉高が眷族一々都て斬盡せり。此時王英は自ら先劉高が妻を奪取しかば、小賊等は皆家内を搜し、金銀財寶悉く奪取て車に載み、又花榮が妻子妹を轎に乘しめ、ならびに家財等悉く車に載せ、諸事全く調りしかば、諸の豪傑と再び淸風山に馳回り、遂に山陣の聚義廳に於て會合しける處に、黃信頓て諸の豪傑と禮を叙べ、則ち花榮の次に座を定めぬ。此時宋江懇に花榮が眷屬を一軒の房間の内に歇しめ、又劉高が財寶を分ち、諸の小賊共にこれを褒美し、各欣々然として喜びけり。宋江又左右に問て、劉高が妻は今何れの處にありや。王英答て、劉高が妻は某これを捉へ歸りぬ、此度は我に與へ妻たらしめ給へ。燕順が云く、汝に與へ

り、兩人手を携へて廳に上り、賓主の座已に定り、互に禮を叙畢りしかば、黃信先問て云く、總管は何ゆゑ只一騎こゝに至り給ひしぞ。此時秦明清風山の戰に打負たる次第、ならびに山東の及時雨宋公明義を重んじ財を輕んじ、專ら天下の豪傑と交を結び、更によく人の危急を救ふ故、人皆是を敬ふ、今此人難を避け災を脱れ、清風山に在り、我も此囘禍を蒙り、身を立て命を安んずべき所なく、宋公明が德を慕ひ、終に清風山に入て、宋江等と大義を結びぬ、足下は幸ひいまだ妻子もあらざれば、何の礙もなし、唯宜しく我言に從ひ、共に清風山に入て一處に豪傑をなし、彼文官等が欺きを免れ給はんや。黃信が云く、長兄今清風山に足を留て宋江等と義を結び給ひしこと、誠に豪傑の交なり、某豈あへて長兄の教に從はざらんや、さてかの宋公明の山陣に居給ふことは、曾て是を聞ざりしに、知らず及時雨はいつの時清風山に來り給ひしぞ。秦明打笑て云く、汝先日清風山にて、奪ひ取られし罪人、彼鄆城虎張三と云ぬるは、乃ち及時雨宋公明なり、其節本姓本名を隱して云ざりしは、閻婆惜と云ふ女を殺したる事あれば、もし又此事發らんを恐れ、唯僞つて張三と名を報たりしなり。黃信これを聞大に悔て云けるは、某もし夢にだも宋公明たることを知しならば、宜しく放ち免んずるものを、唯劉高が一片の言を聞て、已に義士を害せんとせしこそ愚なれ、今更後悔何の益かあらん。秦明が

しめ、燕順等三頭領は其次に坐を列ねしかば、小賊等頓て美酒佳肴を携へ廳上に設け、笛を吹き鼓を擣て大に酒宴を催しけり。扨又宋江は諸の豪傑に問て、清風寨を撃んと其計を商議しける處に、秦明が云く、清風寨を打んこと極て易し、何ぞ必しも諸豪傑の心力を費さんや、幸ひ彼黃信は某武藝の弟子にして、交尤厚ければ、某明日先清風寨に馳て黃信に寨門を開せ、又宜しく彼を諌め、我輩に降らしめ、則ち花知寨が眷屬をも取出すべし、且又劉高が妻を捉へ、宋長兄の爲に仇を報い恨を雪ぎ、聊以て進見の禮を表すべし、唯知らず列位某が所存に從ひ給ふべきや、宋江大に悅び、總管もしいよ〳〵肯てかくのごとく計を施し給はゞ、莫大の幸なり、明日宜しくこれを行ひ給へとて、衆皆喜悅して酒を酌み、酒宴已に了ければ、其夜は各房間に入て歇み、翌日早飯後より諸の豪傑甲を著し盔を戴き、結束嚴に裝ひ、秦明先馬に乘て山を下り、彼狼牙棒を提て、飛が如くに清風寨に馳來りぬ。時にかの黃信は嚴密に清風寨を守り、多くの兵を備へて晝夜緊しく防せけり。此日一人の兵黃信に告て云く、秦總管唯一騎寨外に馳來て、門を開け、と呼り給ふ。黃信是を聞忙しく馬に乘り、直に門の邊に來て、門外を望み見るに、果して秦明只一騎寨門の外に在り。黃信兵に命じ、吊橋を下させ門を開かしめ、自ら秦明を迎へて寨中に至り、直に大寨の公廳の前に至て馬を下

が手を假て尊夫人を殺さしめぬ、尤不仁不義の所爲なれども、只々いかにもして總官を此山陣に留たく、己ことを得ずして、かゝる詐の謀を施し畢ぬ、俯して願くは、總管某等が斯まで慕ひ敬ふの誠を察し給ひ、只曲て罪を免し給へ、然らば某等が幸何事か是に過ん。秦明此言を聞心中甚だ怒り、宋江等を斷併さんと欲ひけれ共、又却て熟想ひけるは、宋江等の所爲尤毒惡たりといへ共、原我を山陣に留んと思ふ好意より出し所なり、況や我今斷併さんとせば、必ず非命の死を遂て、一生の豪傑武名益なく廢れなん、先曲てこれを忍びんと、則怒を納めて云けるは、諸豪傑さまで我を山陣に止んとの好意は、我も又深くこれを感激とす、されども我が妻子を府尹が手に殺さしめ給ふこと、甚だ以て不仁不慈なり、我悲歎の思何を以て保んじ慰むべき。宋江が云く、某等もしかくのごとき計を行はずんば、總管豈あへて心を傾け意を投つて、我が輩と共に山陣に足を留め給はんや、夫人已に死し給ふ上は、空しくこれを悲み給ふとも益あらじ、幸ひ花知寨の妹は賢にして美なり、我此婚禮を主つて、花榮が妹を總管に嫁せしめん、知らず總管我輩一點の眞誠を顧て、此義を承引し給はらんや。秦明此時、宋江等が他念なく愛敬するを見て、方に心を安じ、乃其議に應じけり。諸の豪傑こゝに於て大に悅び、遂に宋江を請て中央に座せしめ、秦明を左に坐せしめ、花榮を右に坐せ

○石將軍村店に書を寄す

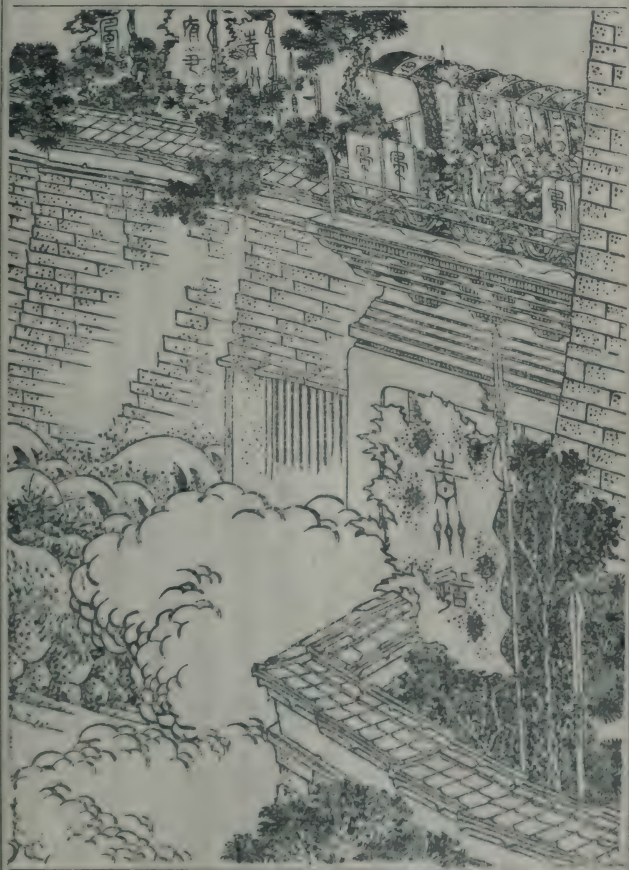
霹靂火秦明は、五人の豪傑と共に山陣に入しかば、小賊等已に酒宴を設け聚義廳の上に備へり。五人の頭領共に秦明を請て廳に上り、各〻讓りて秦明を上座に坐せしめ、五人一度に地上に跪いて慇懃に禮を行ひければ、秦明忙しく禮を復し、同じく地上に拜伏す。宋江先言を開て秦明に云けるは、總管必ず我輩を恨み給ふ事なかれ、昨日再四總管を山陣に留めけれども、意を決して留り給はざりしゆゑ、某一つの計を設け、山兵等が内より總管の容貌に似たる者を擇み出して、足下の衣甲を著せしめ、又彼馬に乘らしめ狼牙棒を持せ、直に青州城の正手を攻させ、多く軍民を殺しぬ、又燕順王英別に五十餘人を領して副手の門に推寄せ、詐り呼て秦總管が眷族を、速に城外に送り出せ、もし然らずんば、忽ち此城を踏潰し、一片の平地にすべしと罵りければ、府尹大いに怒り、却て總管の夫人を殺せり、是則某等總管一向家に歸んと欲給ふ念頭を、預じめ先過め是を絕さんがため、斯計を行うて府尹が怒を惹出し、乃府尹

は歎て益なし、新に媒せんとは、愛情を捨たる詞なり。天下に高名の豪傑の言語にはおらざるべし。

が手に殺させぬ、我今家あれども奔りがたく、國あれども投りがたし、天に上らんとすれば路なく、地に入らんとすれば門なし、我もし彼我が形を假粧たる奸賊等に尋ね遇ば、這狼牙棒を以て、骨を微塵に打砕き、方に這恨を雪んに、尚未だ彼賊等を分明に知らざるこそ遺憾なれとて、眼を怒らし牙を咬で罵りけり。宋江此言を聞て、又云けるは、夫人已に殺され給ふならば、今更悲歎益あらじ、先宜しく怒を息め給へ、某自ら總管の爲に新に媒をなし申さん、願くは總管再び我山陣に至り給ひて、某が存念をも具しく聞給ひ、兎も角も好るべき商議をなし給へ、と再三諫めければ、秦明其言に服し、乃ち宋江等に從ひて、再び清風山に歸り、早く山亭の前に至て馬を下り、諸豪傑齊しく山陣に入りけり。

論者云く、此標目に夜瓦爍場に走ると云は、秦明が似せ武者と思へば、此似せ武者が瓦爍場となしたるなり。實の秦明が走たるは翌日晝なれば、夜と云ふ處叶ず。且秦明が五百の軍勢、戰死もあり、過半水に溺たれ共、百六七十人の官軍山陣に生捉となし、此者共にも酒肉を恵むと有て、翌朝秦明青州へ馳歸る時は、從ふ人もなく唯一人歸りたるは、此官軍は山陣に捨置たるにや、不審と云々。且三國志に劉玄德の詞、妻女は衣服のごとしと云しは、娶りたる毎に新に覺るを云て、薄情を好む義にあらず。秦明が妻府尹に殺されたる上

にも猶あへて抵賴んや、汝もし實に戰に敗れたるならば、五百の兵の內などか一人は逃回りて、戰の動靜を報る者なからん、汝が僞たること、是を以て知るべし、汝今又こゝに來るは、必定我を賺し城門を開かせ、急に進み入て己が眷族を奪取んと圖るなり、我豈汝が僞に誑れんや、汝が妻子は我已にこれを殺せり、汝もし全く信ぜずんば、汝に首を與へて見せしめん、とて頓て軍士に命じ、彼妻子が首を鎗尖に刺貫き、高く挑げ出して、秦明に見せしめけり。秦明は原短氣の勇士なれば、妻子の首を見て、忽ち怒心頭より起り、其瞧眼は日月に異ならず。此時府尹兵に下知して、矢石雨のごとく投かけ射出させければ、秦明敢て分說するに及ばず、急に矢石を避て跑開き、猶城外を繞て此邊を見るに、焰燒せし地面未だ餘火消ず、燼の淡烟所々に起りぬ。秦明こゝに於て心神大に撩亂し、只自害せんと欲ひて、再び馬を舊路に馳せ、わづか十里ばかりに至りし所に、忽ち林の內より五人の大將、當先に進んで一彪の軍馬馳出ぬ。彼五人の大將は、乃ち淸風山の豪傑、宋江、花榮、燕順、王英、鄭天壽なり。相從ふ小賊總て二三百も有べし。宋江馬上に在て秦明に對面し、卽身を曲めて云けるは、總管何故青州には歸らずして、只一騎何國に往給ふや。秦明これを聞て自ら怒て云く、知らずいかなる奸賊の所爲やらん、昨夜我が形に假て此青州城を攻め、良民を殺し、房屋を燒き、剰へ我が妻子を府尹

秦明中謀不入城

ねて充滿せり。秦明此光景を見て、心中益常ならず、又高聲に呼り、早く吊橋を下して我を渡せ、と云ける處に、城中に早く一人の兵秦明を見て、忙はしく攻鼓を打て大いに喊び呼りければ、秦明駭き、我は是秦總管なるに、何ゆゑ城内には入れずして、斯のごとく躁動するや。斯る處に慕容府尹城樓の上に躍り出て、大いに怒り罵りて云く、汝反賊、いかんぞかく羞恥を知らざるや、汝昨夜多くの賊兵を引來て、我が此城を攻め、餘多の百姓を殺し、若干の房屋を燒き、今又來て我を哄り、此城門を開かせて、城中に攻入んと思ふや、朝廷も汝を重く用ひ給ひ、これまで疎略の御事少しもあらざりしに、汝は何ゆゑ朝恩を忘れ、義を負て朝敵とはなりたるや、我汝が謀反のよしを、帝に奏聞せんため、今朝老早使者を都に馳けるぞ、我必ず近近汝を捉へて骨を削り肉を切んで、天罰立處に思ひ知らせんぞ。秦明大いに驚き暫く呆れたるが、漸く心を靜め、又大音聲に呼つて云く、相公いかんぞ誤ち給ふや、某は是清風山の戰に打負け、五百の兵悉く賊徒に殺され、某も終に活捉れ、山陣に在しかども、寸歩も出ることなく、今朝一命を脱れ、再び回りぬ、昨夜は某清風山に在けるに、何ぞ來て此城を攻んや、相公宜しく僉議を加へ給ふべし。府尹益怒て云く、我何ぞ汝が衣甲馬軍器等を識らざらんや、殊に城中の諸軍も、又皆汝が賊兵を引來て、人を殺し火を放ちたるを見屆けぬ、汝此上

勸められしかば、就中大に爛醉しける故、花榮自らこれを扶けて張中に入り、遂に宜しく歇ましめ、各同じく廳を出て各己が房間にぞ歸りけり。扨秦明は其夜熟く睡り、翌日辰の刻に起て、山を下らんと欲し、諸頭領に別を告げしかば、宋江等再三留めて、朝飯後に打立ち給へ、と云けれども、秦明は本短氣の人なれば、決してはや下るべし、と頻に辭しければ、諸の豪傑忙しく酒宴を設けて、秦明を欵待し、頓て衣甲軍器を取出して、これを還しける處に、秦明遂に衣甲を著し、軍器を提げ、五人の豪傑に別れて山を下りしかば、宋江等五人の頭領相送て山の麓に至り、則彼馬を小賊に牽せて秦明に乘しめ、互に依々として已に一別に及びけり。秦明は馬に乘り棒を拿ち、獨自ら清風山を離れ、飛が如くに青州に望て馳回り、纔十里許に至りしかば、はや巳の刻の前後なり。秦明馬上に在て、遥に對面を望み見るに、烟塵大いに起て、一人も往來する者なし。秦明甚だ是を疑ひ怪み、遂に城外に至てこれを見るに、此處には原數百間の人家ありけるに、何ゆゑにや、一宇も殘さず悉く燒盡し、猶且斬殺されたる男女の屍、瓦礫場の上に横へて、其幾何と云ふ數を知らず。秦明此體を見て大に驚き、忙はしく馬に策つて、直に城の邊に至り、大音聲に、門を闢け、と呼りて、正手の方を見るに、濠に架たる吊橋を高く拽起げ、城中には都て旌旗砲石擂木等を嚴密に備へ、若干の軍士衣甲の袖を連

となら ば、某楽み甘んじて死に就べし、某列位に隨順せんこと、決して承允致すまじ、望らくは明かに是を察し給へ。花榮これを聞て、忙はしく秦明を扶け、再び廳上に上り、乃ち坐をなさしめて云けるは、總管怒を憩て我が一言を聞給へ、某も又是朝廷の舊臣が孫なり、然れども無實の罪を被りて世を逼られ、身を安立すべき所なきが故、已ことを得ずして今此山陣に跡を留め、乃ち諸の豪傑と共に强盗の頭領となりぬ、是皆一命を全うして、再び朝廷の聖恩を報じ、以て新に先祖の家風を振んが爲なり、總管已に心を決し、山陣に留り給ふまじきとならば、我が輩豈敢て再三留め申さんや、先心を寛げて酒を酌給へ、酒宴了りなば、某速に衣甲馬等を還しまゐらせんまゝ、必ず尊慮を安んじ給へ。秦明いかんぞ肯て心を安んずべき、只頻に回らんことを乞ければ、花榮又いはく、總管昨日より多く神を勞し、力を費し給ひぬる上は、嘸辛苦たらん、然れども總管は原强勇の大將なれば、十分の事もあるまじけれども、只痛むらくは彼馬なり、一日一夜東山に跑け、西山に馳疲れ、旁いまだ喂も養はざれば、焉んぞよく今日の用に中らんや、且よろしく飽まで馬に秣を飼ひ、其後山を下て青州に回り給へ。秦明これを聞て心中實にもと思ひ、漸々思慮を安んじて座を定め、又盃を擧て酒を酌ければ、五人の豪傑輪番相勸め、酒闌に至りける處に、秦明は疲と云ひ、殊更五人の豪傑に

をのみ聞しゆゑ、多く辜なき人を、悪みぬ願くは列位某が過を宥し給へ、且某は急に馳回て、慕容府尹に此の事を告知らしめ、再び宜しく商議をなすべし。燕順が云く、總管先五七日は山陣に滯留し給へとて、早賊等に命せて、牛を殺し馬を宰らしめ、大に酒宴を設け、飲酌を催し、又彼活捉たる官軍にも多く酒肉を恵て食せしめけり。此時秦明數盃の酒を酌畢、恭しく身を起して云けるは、衆位の豪傑いよ〳〵肯て某が一命を助け給はんとならば、某が彼衣甲馬軍器等を還し給ひて、青州府へ回らしめ給へ。燕順が云く、總管の言差へり、總管肇五百の兵を引て、青州城を打出給ひ、今敗軍に及んで、只一騎回り給ひなば、必定府尹これを罰せられん、まづ宜しく山陣に逗留し給へ、尤馬を歇め給はんには足まじけれ共、權く此處に在て某等と心を合せ志を同じうし給へ、然らば互に力を一つにして、當世の賊官等が、專ら民を剝で集めぬる不義の財を奪ひ取て、公にこれを分納し、共に浮生を樂まば、彼大頭巾等が下に在て差辱を被らんよりは、猶莫大に強ならめ、願くは總管時を察し意を決し給へ。秦明是を聞て忽ち廳を下て云けるは、某は是當朝大宋の臣なれば、死すとも又大宋の鬼とならん、況や朝廷某を擧給ひて、兵馬總管となし、統制使の職を兼しめ給ふ。是則ち朝廷の聖恩深き所なり、某いかんぞ此宋朝に背て山陣に留らんや、若列位これを悪みて某を殺さん

明に著さしめければ、秦明深く謝し畢て、又花榮に問ていはく、清風山の主三人の頭領は、我原來これを識認れり、只知らず第一位の椅子に坐し給ひぬる豪傑は、是何等の人なるぞや。花榮答て、彼豪傑は原鄆城縣にて押司の職をなせし宋江と云ふ人なり、其次三人は總官も亦これを識認たまひつらん、是則燕順、王英、鄭天壽なり。秦明がいはく、山陣の三傑は先にも云ふ如く、我もと是を識れり、彼押司宋江と云給ひしは、山東の及時雨宋公明と云ふ人にはあらずや。宋江先急に答て、某乃宋公明と申す者なり。秦明聞も敢ず忙はしく下拜をなして云く、押司の芳名を聞しことは、恰も雷の耳に轟くごとくなりし、今日何の幸にや、尊顏を覩奉ること、誠に欣躍に堪ざるなり。宋江も又忙はしく拜を還し、大禮を行はんとしけれども、兩足不自由にして、殊更難儀に見えしかば、秦明又問て云く、押司は貴足を痛め給ふと見及べり、何爲拜を還し給ふに及んや、知らず貴足を痛め給ふは、疔瘡にても生じけるにや、若然らば某幸ひに妙膏を以てこれを癒しまゐらせん。宋江が云く、某が賤足を痛ぬるは良以あり、いざ語り聞け申さんとて、鄆城縣にて閻婆惜を殺したることを始として、前後のこと一々詳に語り、又向に劉高に擒れ、兩足を痛く策たれ、終に皮開け肉綻れ、今に痛疼止ざるとて、劉高夫婦が不善の事具にこれを告ければ、秦明此言を聞て大に悔みて云けるは、某只一方の言

共は、又都て小賊等がために、鈎索に纏れて擒となり、溪の内に在し者共は、皆々水に溺て死にけり。此時秦明は怒れる氣天に衝て、吼る聲地に透り、獨自ら小路に倚て、馬を飛せける處に、纔四五十歩に至て、忽ち馬人共に陷坑の内に眞倒に落入ければ、兩邊の伏兵一齊に並び起り、つひに鈎索を用て秦明を搭住め、乃ち坑の内より拽上て、衣甲を剝取り、頓て高手小手に綁めて、淸風山に引回りぬ。這等陷坑等、都て宋江と花榮とが計にて、晝の戰にも、小賊等を東西の兩山に藏し置き、或は西山に金鼓を鳴して、秦明を誘引し、或は東山に紅旗を現して秦明を僞引き、かく敵を賺し、兩山の間を數遍奔走せしめけるゆゑ、寄手の人馬大に疲れ、遂に溪の内坑の中に躱れ、弓箭を避んとせし處、又四方より水を流しかけ、五百の官兵過半を水に溺し死なしめ、其餘百六七十人の官軍共は、こと〴〵く擒となり、七八十疋の良馬は皆奪取て山陣に牽けり。小賊共秦明を引て廳前に至りしかば、花榮忙しく出迎へ、親自秦明が綁の索を解き、則ち廳上に扶け上り、身を翻して拜をなしぬ。秦明これを見て忙はしく禮を還して云けるは、我は是擒となりし者なれば、身を臊子に切まれても死すべきに、何故却て我を拜し給ふや。花榮恭しく跪いていはく、山兵等都て貴賤を見分ること能ず、誤て總管の尊威を冒せり。願はくは罪を免し給へ、とて頓て衣服を將て、秦

を放つて絶倒す。秦明是を聞て臍を咬み両眼を睜開き、恰も奔雷のごとく吼り喚て云けるは、花榮汝敢てかくのごとく我を欺くや、汝もしよく我が胸の上に三百の明窓を開んとならば、何ぞ必ず明日を待んや、宜しく今早々山を下て雌雄を決せよ、汝もし我を恐れて山を下らずんば、汝が先祖の武名此時に當て穢るべきぞ。花榮冷笑て、汝今日東山に走り西山に馳せ、嘸身體も疲れたらんに、我縱ひ今汝を殺すとも、疲れたる者に勝ちなば、聊功名とするに足らず、人を食ふ惡馬も斃ては誰か策たざらん、汝疾回て明日來れ、今宵は我汝が一死を饒し、明日まで命を慥に預るぞ。秦明此言を聞て益大に狂ひ、只顧山下に在て、唾ばきし罵り、已に路を尋ね跑上らんと思へ共、又暗に花榮が弓箭の術細かなるに怕れ、只山坡の下に馬を勒へ、再三惡口しける處に、忽ち親方の諸軍大いに噪動しければ、秦明急に馬を回してこれを見るに、山の上より火炮火箭煌を飛せ、雨のごとくに打かけ、又背後の方には、三四十の小賊一處に群り、弓弩齊しく發して、散々に射たりしかば、官軍大いに亂れ、悉く皆鋒を倒にして逃走り、山の傍の深坡の內に身を躲れて、這々命を脫れぬ。此時已に三更の前後なり。諸々の軍馬弓箭を持ち、坑の內に避て纔に息を續んとせし處に、坑の四方より俄に大水發り、逸參に坑の內に滾入しかば、諸々の人馬盡く溪の中に亂れ入り、皆々命を免かれんと欲ひ、岸の上に上りし者

ず大いに怒り、自ら四五十騎を引て、山に跑上り、纔に半里許馳る處に、林の内より亂箭雨のごとく射出し、官軍忽ち五六騎箭に中て馬より眞倒に落て死にけり。こゝに於て諸勢進みかねしかば、秦明も止む事を得ず、再び山の下へ引退き、諸軍ひたすら飯を吃し、まさに火を擧し處に、山の上に又八九十の火把、一連に揮照し、馳下る軍勢あり。秦明急に兵を引て相迎んとすれば、火把はや一時に滅て、齊しく靜り何の音もなし。此夜は月光ありながら陰雲に遮り掩はれ、唯朦々朧々として十分明かならず。秦明此光景を見て、怒甚しく、諸軍に下知し火把を點させ、樹木を盡く燒拂はせんとするに、俄に山の上に鼓笛の聲大いに響しかば、秦明馬を進め、又も山を馳せ、乃頭を擡げ山の頂を見れば、二十四五の火把を照し、宋江悠然として酒を飲であり、花榮又安々と傍に陪侍して酒を酌り。秦明此體を見て、忽然として、忿骨髓に徹し、馬を山下に勒へ、大音聲に呼り罵つて、只顧惡口せし處に、花榮呵々と大に笑て答へけるは、秦統制、汝再三無益の怒を起さんより、先本陣に回り自ら保養を加へ、宜しく氣力を堅固にして、明日の參會を待て、毎日今日のごとく徒骨折しめんも不便なれば、明日は我決して汝が心窩の上に三百の明窓を開べきぞ、然らば汝が一命は只今宵を保んのみ、早々回り酒宴を設け、冥途の旅出留別に三軍を聚め、宜しく飲酌を催せ、と猶いまだ云も罷らず、聲

一々是を討取るべし、諸勢いよ〳〵力を竭せ、と下知を傳へ、又も馬の彊繩を扯回して、東西へ馳來り、四方を跑繞て山兵を尋ねれども、賊兵も紅旗もさらに影も形もなかりけり。秦明ますます忿に勝ずして云く、好し遮莫、我今道を求めて山に上り、終に強賊等を活捉らんものをと、又三軍を二手に分け此かしこに馳て路を尋ねしめける處に、西山の邊に又人馬の音聞えしかば、秦明は熬ぬ烈士にて、又馬に策ち西山に馳至り、遍く四方八面を搜して、賊兵を需れども、只一人の影もあらざれば、秦明今は自ら大に吼り忙はしく兵に下知し、亂木亂石も引退るに及ばず、直に是を踏越え〳〵、是非山に上らんとせし處に、一人の兵進出て申けるは、此邊の路は都て樵夫等が往來する徑路にて、山陣へは通ずまじ、況や木石多く交へ積て路口を塞ぎければ、恐らくは此を越んこと難かるべし、然らば勞して功なからん、只東南の方にこそ一筋の大路ありと聞及びぬ、宜しく彼所より攻上り給へ、若只管此處より上らんとせば、かならず過あるべし。秦明が云く、東南の方に若果して大路あらば、今宵の内に諸軍を引きて進み上るべしと、遂に諸軍を引て東南の方に馳來れば、はや紅日も西に傾き晩に及んとす。人馬齊しく大に疲れ、やう〳〵山下に至り、まさに陣を取て、一同食をなさんとするに、山の上に火把亂れおこり、金鼓亂れ響き、鬨の聲天に震ひ、砲の音地を動す。秦明これを聞て、慄り得

彼よ此よと道を尋んとせしに、西山の邊に金鼓の聲大に響き、林の中より一對の紅旗閃き出ければ、秦明これを見て、急に兵を引て馳向ひし處に、金鼓の聲も忽ち止み、紅旗も亦見えずなりぬ。秦明此處の路をみるに、都て樵夫等が往來する砍柴路にして、唯一筋も大路なし。況や此邊の路は、盡く亂木亂石を交へて、路口を塞ぎければ、さらに上るべき樣なかりけり。秦明三軍に下知して、路口の木石を取しめ、道を開んとせし處に、一人の哨者來て秦明へ申て云く、東山の邊に金皷の聲大きに響き、一彪の兵紅旗を閃かして馳出でぬ。秦明是を聞て急に兵を引き、飛がごとく東山に馳至り、賊を一人も漏さず、こと〴〵く討取よ、と下知して、四下を顧るに、金鼓も鳴ず、紅旗も見えざりしかば、秦明又三軍を率し、四面八方を搜し繞る所に、此邊にも同じく幾筋の砍柴路ありけれ共、是又多く木石を亂して通路を塞ぎてあり。かゝる處に又一人の細作の兵來り、西山の邊に又金鼓を鳴し、紅旗の兵出來りぬ。秦明聞もあへず、再び鞭を揚げ馬を跳せ、西山の邊に跑來り、乃ち諸軍と倶に此處を見るに、又紅旗もみえずして、一人の敵兵もあらず。秦明は元來短氣急性の大將なれば、敵兵の見えざるを憤り、牙を咬み齒を切つて、恚れる兩眼日光の如くなるに、又東山の邊に金鼓の響大に起り、萬千の軍馬一齊に進む勢聞えしかば、秦明限なく怒り、此囘こそ必定賊等が隱所を索得て、

に及びしが、更に贏輸みえず。時に花榮故意馬を回し、山下の小路を望んで逃走しかば、秦明怒て、汝何國に逃すべきぞとて、後に從ひ忙はしく追來る。花榮其圖を窺ひ、急に棒を甲の上縧に插し、左の手に弓を拈り、右の手に箭を拔出し、打搭へて滿月のごとく挽て切て放せば、其箭過たず秦明が盔の頂に中つて、頭腦に響きこたへしかば、秦明大に驚き、速に馬を回して引退き、未だ暫もせざるに、再び又追擊せんと、衆軍を進め跳來しが、小賊共は早盡く山陣に引回りしかば、花榮も又徑路より山に上りたり。秦明これを見て大に怒り、乃兵に下知を傳へていはく、盜賊等今我が兵に敵し戰はんとする、尤これを惡むべし、若今日此山陣を踏破らずんば、さらに何れの日をか期さん、衆軍力を併せて山上に攻上るべし、と其身當先蒐ければ、諸軍大將の勇に倚て、おの〳〵勢を增し力を扶け、金鼓一齊に打たて、一同に鯨波の聲をあげ、山をさして攻上り、段々に二所三所の山を繞り出で、猶も喚き叫び馳上る。其山の上より一時に檑木砲石を雨のごとく打下しければ、官軍忽ち途を失ひ、木石に中て死する者五六十人に過たり。これによつて進退こゝに谷り、諸軍漸々山を下り、再び引退くを見て、秦明は原來短氣急性の性質なれば、大に怒りてさらに忍ぶに勝ず、復道を求て山を上り、賊徒共一人も餘さず、都て滅し盡さんに、諸軍我爲に力を用ひ、進めや〳〵と、再び兵を引て山を繞り、

羞辱を免るべし、量るに汝がごとき匹夫、縦ひ幾千萬の賊兵を引來る共、いかんぞよく我が天兵に敵することを得んや、早々今日を省て、死を朝家に順ぜよ。花榮これを聞き、咲を帶し言を下ていはく、願くは總管某が分説を聞給へ、某豈敢て朝廷に背かんや、唯彼劉高が故に、私の仇を以て世を逼められ、家あれども回りがたく、國あれ共入がたし、かるがゆゑに權く此山に入て難を避け、災を遁れんと欲ふのみ、仰冀くは總管明察あつて、某が逆臣の汚名を再び淨からしめ給へ。秦明が云く、汝猶自ら囚に就ず、かゝる巧言を吐て、他を煽惑んとするや、我今汝を生擒り、朝家に一人の逆臣を除くべしとて、左右に命じ金鼓齊しく鳴さしめ、狼牙棒を揮て、花榮を望み撃て蒐る。花榮は却て呵々と打唉ひ、罵つていはく、秦明汝は眼ありながら、善人を識認らず、劉高如き惡人を羽翼く、汝今皇帝の命を奉つて來りし、官敵なればこそ、我多く言を卑うして敬ひしに、汝は誤つて我が怕をなして敬ふと思へり、我今汝に一棒を與へ、魂を消さしめんに、必ず一歩も逃る事なかれとて、棒を輪し馬を躍せて相迎へ、兩將清風山の下に在て戰を交へ、一往一來勇を奮て、恰も南山の猛虎北海の蒼龍、ともに勢を比べ鬪ふに異ならず。龍怒れば頭角崢嶸く、虎戰ふときは爪牙耀閃く、誠に一對の敵身方、適の勇將ぞと、兩軍鳴を靜め見物し、手に汗を握て勝敗を伺ふ。已に其戰五六十合

秦明と
與二花榮一
大戰

まで酒食を吃はしめ、某是を從へ、先戰ふに力を以てし、後彼を敗るに智を用ふべし、其計はかくの如く斯のごとくと低言ければ、宋江この議に同意し、賢弟の奇謀圖に當つて覺ゆ、宜しく早々行ひ給へとて、宋江花榮預め謀策を定め、乃ち山中前後に觸て、已に人馬をそろへける。花榮はやく一匹の良馬を擇び、其外盔甲弓箭鎗等をしらべ、軍勢の揃ふを相待ぬ。さて又秦明は衆を從へ馳來り、清風山の下より十里を隔て陣を取り、翌日五更の頃、軍勢に食せしめ、一つの大炮を放て、一時に鯨波の聲を咄と發し、清風山に寄來り、要害の地を見立て、軍馬を備へ、金鼓熾んに打鳴す、其響天地も震ふばかりなり。清風山にも、又金を鳴し鼓を撃ち、鬨の聲山谷に響せ、一彪の人馬麓をさして馳下る。此時秦明馬を勒へ、狼牙棒を横へ、敵の勢を伺ふに、諸〳〵の小賊等、小李廣花榮を中央に引つゝみ、各〳〵勇を逞しうし、我劣らじと馳せ進む。花榮已に麓迄下り、諸軍に鑼を鳴さしめ、遂に敵陣相對し、雙方鬨を合せ、暫く亂聲止ざりけり。時に花榮鎗を輪し、馬を陣前に駈寄せ、秦明に對て恭しく禮を行ひければ、秦明これを見て大に怒り、花榮汝は本將門の子孫ならずや、今知寨の職として、一境の地を掌に握て祿を食み、何の乏しき所有て、盜賊と合體し、朝廷に背くや、我今上命を奉つて、汝を捉へんため、此所に向うたり、汝速に馬を下り手を、束て縛を受けば、却て手を腥くし、脚を汚すの

出陣の吉兆を祝せずんば有べからずとて、頓て酒宴を具へ、盃を擧げ、再三秦明に勸めて云けるは、將軍宜しく、三盃を酌で出陣し、頓て凱歌を奏て歸陣し給へ。秦明これを謝して酒を酌了り、遂に慕容府尹を辭し、再び馬に乘り、隊伍を嚴密に開いて、三軍を催促し、直に淸風寨に望て馳行けり。

○霹靂火秦明夜瓦爍場に走る

秦明、已に打立て、大勢の軍馬を領し、淸風寨に至りしかば、四民こと〴〵く、秦明が威風凡ならざるを見て、適無雙の勇將ぞやと、各褒賞せざるはなかりし。淸風寨と云は、靑州の東南に在て、淸風山とは尤遠からず。秦明軍馬を引て、淸風寨の正南より進み、直に淸風山の下に至りしかば、小賊どもこれを見て、急に山に上り、諸頭領にまみえて、此樣子を告けるに、諸頭領は豫て申合せ、兵を發し淸風寨を打ん用意をなす所に、秦明先人馬を率し逆寄すと聞き、別位大に驚き、こはいかゞの計を以てこれに處せんと、各面を見合す計なり。此時小李廣花榮衆にぬきんで、列位十分驚き給ふべからず、いにしへの語にも、兵臨で急を告ると
きは必ず須く死敵すべしと云ふ事あるに、何の遲疑する所かあらん、只速に山兵等に飽

の狼牙棒を使うて萬夫不當の勇あり。此日秦明府尹の招きに應じ、直に府尹の衙に馳至りしかば、彼慕容府尹急に迎へ對面し、乃ち黄信が遣したる文書を出し見せけるに、秦明是を見て大に怒り、盜賊等が分として、いかんぞかく無禮をなすや、相公必ず憂ひ給ふことなかれ、某急に人馬を發し、盡く滅すべし、若彼賊等を活捉ずんば、誓て再び相公に見えまじ。慕容府尹が云く、將軍あへて此のごとく力を用ひ給ふならば、縱ひ賊勢幾千萬ありとも、何ぞ難しとするに足んや、然れ共、若將軍急に兵を起し給はずば、賊先清風寨を撃つ事あらん、宜しく速に人馬を催し給へ。秦明が云く、此事いかんぞ遲延に及ばんや、今宵の内に軍馬を催し、明日は早々發向すべし。府尹是を聞て大に悅び、豫め兵粮等の用意をなさしめけり。秦明は文書を見て、花榮が朝廷に背て、盜賊等と一所に在る事を聞ければ、覺えず怒心頭より起て、頭髮倒に竪ち、忙しく府尹を辭して馬に乘り、直に指揮司の内に來つて、一百の馬軍と、四百の歩軍を催し、先城外に遣し、勢揃をなさしめければ、此時慕容府尹は先達て城外にあり、多く酒肉等を調へて、三軍に賞しけり。今朝秦明も聲花に披掛ひ、已に城外に打出で、人馬を嚴に備へ、大文字に兵馬總管秦統制と、分明に書たる紅の大旗を當先に持せ、秦明は中軍に居して、白馬に乘り、已に三軍を起して打立んとせし處に、府尹自ら秦明を請て馬を下さしめ、先

へとて、各一笑を催しけり、翌日また五人の豪傑聚義廳に會合して、急に清風寨を撃んと商議しける處に、燕順先言を開て云けるは、山陣の兵ども昨日戰をなし疲れたれば、今日は先彼等を歇ましめ、明日早々山を下て清風寨を攻るとも、猶未だ遲かるまじ、唯知らず列位の尊意はいかん。宋江此議を聞て云けるは、燕賢弟の言究て可なり、先宜しく人馬を歇めて、氣力を増しめ、其後軍を發して一戰せば、必定戰に利有べし、只よく急に山前山後に觸れ、まつたく人馬の氣力を養はしめんとて、山中殘らず一々觸をぞ廻しけり。扨かの都監黃信は、一騎馳に清風寨に跑回り、忙はしく寨中の兵を催して、緊しく四方の柵門を守らしめ、頓て一封の文書を修へて人を青州に馳せ、府尹へかくと訟へしかば、府尹大に驚き、先文書を見るに、花榮今清風山の盜賊等と同じく山陣に在て、清風寨を犯さんと欲ふ意あり、賊もし急に推寄なば、清風寨必定保ち難からん、事已に危急に及ぬる間、早々良將を遣して、清風寨を堅固に守らしめ給へ、と有ければ、府尹これを見畢て益驚懼し、速に人を馳て青州の指揮使總兵管兵馬秦統制を請て、軍情の重事を商議すべしとて、頓て使者を遣しける。此秦統制は原山後開州の人にして、姓は秦、名は明と號す。此人甚だ短氣急性にして、怒る聲は雷の響くに似たるゆゑ、人皆諢名を做て、霹靂火秦明と呼慣せり。先祖は乃ち軍官をなしたる人なり。此秦明よく一條

我いかんぞよく獨心を安んぜんや。燕順が云く、知寨必ずこれを憂ひ給はざれ、我熟これを想ふに、黄信敢て夫人を活捉る事あらじ、假令活捉て州裡に送るとも、必ず此邊の路を過るべければ、某等三人これを奪取て、知寨に與へまゐらすべしとて、乃ち一人の小賊を山下に遣し、先消息を伺はしめければ、花榮大にこれを感謝せり。宋江此時三頭領に對して云けるは、賢弟等我爲に先劉高を引出させ給へ。燕順が云く、劉高は今廳の柱に捆つけ置ければ、速に是を殺して、長兄の爲に仇を雪ぐべし。花榮が云く、彼を殺さんには、我みづから手を下すべき間、各も宜しく一覽せられよとて、頓て衆皆席を立て柱の邊に來りし所に、宋江先劉高を指ざし、大に罵つて云く、汝と我とは、原來仇もなく寃もなきに、いかんぞ全く惡妻が言を信じ、我を害せんと圖りしぞや、今かく擒となりしは、天の責給ふ罰なり、汝猶此上にも分說ありや。花榮が云く、彼が如き惡人に對して、言語んも汚はし、長兄宜しく問答を休給へ、我急にこれを殺して、尊覽に備へんと、乃ち明晃々する刀を用て、劉高が胸を剜開り、頓て肝を拽出して宋江が前に獻じければ、小賊ども遂に屍を把て、傍に拖撇けり。宋江是を見て云けるは、今日三頭領の力に依て、此惡人をば殺したれ共、猶いまだ彼惡婦を殺さざるは遺憾なり。王英戲れて云けるは、我明日清風寨に馳せ、彼女を捉へ回るべき間、這回は是非我に與へて樂しめ給

花榮兩人救ひし所以はいかなれば、向に上元の夜、小賊等許多を清風寨に遣して、花燈を壯觀しめけるが、小賊等幸ひ其夜宋江が活捕れけるを見屆け、急に馳囘て三頭領に斯と告ける故、皆大に驚き、早速物慣たる小賊四五人擇出し、清風寨に遣し置き、毎日宋江がことを窺はしめ、消息を求めしが、此日宋江花榮兩人の者、果して靑州府に送るを聞き、預め此處に出張し、遂に官軍を追拂ひ、兩人を救ひけるなり。三人の頭領其夜宋江花榮と共に山陣に至りしかば、已に二更の時分なり。燕順はや聚義廳に於て酒宴を設け、乃ち宋江花榮を請て、客座に坐せしめ、三人の頭領は主席に座を列ね、大いに飲酒を催して、宋江花榮を欵待し、山川の珍物品を盡し豐なり。花榮先燕順等、三人の頭領に謝して云けるは、今日三頭領、宋押司と某とが命を救ひ給ひて、仇人を活捕給ひぬること、某等が爲に洪大の福なり、誠に何を以てか、此恩を報ぜんや、某今宋押司と共に、此山陣に逗留して身を躱さば、始終恙なくして寸心を安んずるに足るべし、然れ共、某が身の上には尙一つの事有て、未だ全く心を安ぜざるなり。燕順が云く、知寨は何の事に心腑を惱し給ふや、願くは速に心事を語て某等に知しめ候へ、若某等力を用ひてなるべき事は、縱ひいかなる難事たりとも敢て辭する事なく、これを扶くべし。花榮が云く、某猶妻と妹とを清風寨の内に捨置たれば、必定黄信に活捕るべし、若然らば

しく鳴さしめ、忙しく馬を拍ち劍を舞して、直に燕順等三人に斬て蒐りければ、三人の頭領も、同じく刀を揮て相迎へ、遂に鋒を交へて、戰已に三十餘合に及びし處に、黃信三人の豪傑に、一人して敵しがたく、力漸衰へぬ。況や劉高は本文官のことなれば、黃信を助け戰はんことはさて置き、先此光景を見て大に驚き、只逃走んとのみ欲しければ、黃信心中に想道く、敵は三人我は一人、いかんぞ勝を取る事を得ん、若彼等に活捉れなば、是乃ち一生の恥辱たるべし、且暫く此所を脱れて、再び計を施さんと思案を決し、忽ち馬を回して逃しかば、三人の頭領、勢に乘じて赶けれども、黃信重て跡をも顧ず、只馬を飛せて、淸風寨へ馳回りぬ。諸の軍士ども、黃信が逃たるを見て、大に潰亂れ、遂に囚車を棄て、四面八方に散失けり。此時劉高は肝を消し魂を落し、忙しく馬に策ち、逃回らんとせし時、小賊等頓て地上に鈎索を引き、劉高が馬を鈎倒しければ、劉高眞倒に地に落ける處を、數百の小賊一度に前で劉高を捉へ、又宋江が囚車を打開て、宋江を扶け出しければ、花榮は自ら囚車を踢破りて跳出けるに、綁の索盡く唆喇喇と斷にけり。諸の小賊ども劉高が衣裳を剝取て、宋江に著せしめ、衆皆劉高を大に罵つて、緊しく高手小手に綁めぬ。三人の頭領は、宋江花榮を請て馬に乘らしめ、遂に同じく劉高を監押して山陣に歸りけり。此日三人の頭領、此處にて宋江、

聞き、大に怒て云けるは、汝潑賊等必ず無禮をなすことなかれ、我を誰とか思ふらん、汝等も我名を聞く事久しからん、我は青州の都監鎭三山なり、汝等誤つて我猛威を犯さば、後悔立處に至るべきぞ。三人の大王、此一言を聞て大いに怒り、則ち眼を睜開て、唾き罵つて云けるは、汝は何鎭三山とやらん云ふ賊官よな、縱ひ鎭萬山にもせよ、三千貫の買路錢を償はずんば、我決して汝を饒すまじ、只速に路を買ひ、馬を下りて通るべし、倘然らずんば、三千貫の替りとして、汝が首を取べきぞ。黄信これを聞て、怒骨髓に徹り、再び大音聲を揚て罵りけるは、汝奸賊いかんぞ敢て自ら死を求んとするや、我はこれ官司の命を奉つて、死罪人を州裡に送る朝廷の役人なるに、何ぞ官路を汝等に攔られて、三千貫を出さんや、汝若命惜くば、速に衆を引て山に歸れ。三人の大王、聞も敢ず大に冷笑て云く、汝は公用を掌るを以て、權威を震はんと欲や、恐らくは這路を過らん者、誰か敢て三千貫を遺ざらんや、假如天子の御駕を移し給ふとも、三千貫の買路錢は是非これを求むべし、況や汝等をや、汝もし今三千貫の買路錢を攜へずんば、其質として、罪人を山陣に預け置け、若汝何れの日にても三千貫だに持參せば、我肯て罪人を還すべきぞ。黄信大いに怒り罵つて云く、汝死を招く強賊、いかんぞ斯朝廷を輕んじて無禮を云や、我が喪門劍の利害を汝等に知らせんとて、諸の軍士に下知して、金鼓齊

鎭三山青州道を鬧す

るや、只宜しく列を堅固に備て馳往べし、少しも猶豫することなかれとて、又劉知寨に向て云けるは、足下は諸軍と共に、囚車に從つて、後より進み給へ、我は試に敢て當先すべし。劉高は金鼓の聲に驚いて、魂魄已に散ければ、敢て返答にも及ばず、只口の内に再三再四念じていはく、大慈大悲の觀音菩薩、願くは此道を恙なく過らしめ給へとて、鎗を雙の手中に挾み、只合掌して觀念し、面の色は恰も土のごとくなり。黄信はもと有名の豪傑にて、兵馬都監の勤をなせば、少しも怯るゝ氣色なく、馬を躍せ劍を撚て、當先に進みける處に、林の内より五六百の小賊ども、喊き叫で斬て出で、各頭には紅巾を卷き、身には皂服を著し、腰には利劍を掛け、手に長鎗を持ち、我劣じと先を爭うて、一齊に咄と馳來る。其内に三人の大王馬を並べ、當先にすゝむ。一人の大王は、青き色の袍を著し、一人の大王は、綠色の袍を著し、一人の大王は、紅き色の袍を著しぬ。各頭には銷金の萬字巾を戴き、腰には皮鞘の腰刀を帶し、手には明晃々せし扑刀を提げ、三人同く路も窄しと馬を進めて蒐たりける。是則錦毛虎燕順、矮脚虎王英、白面郎君鄭天壽の三頭領なり。兩陣已に相對しける處に、三人の大王高聲に呼りけるは、今此に至る官軍は、何國より來りぬるかは知らねども、若此道を過らんと思はば速に三千貫を出し、路を買て過るべし、然らば我肯て汝等を饒さん。黄信馬上に在て此言を

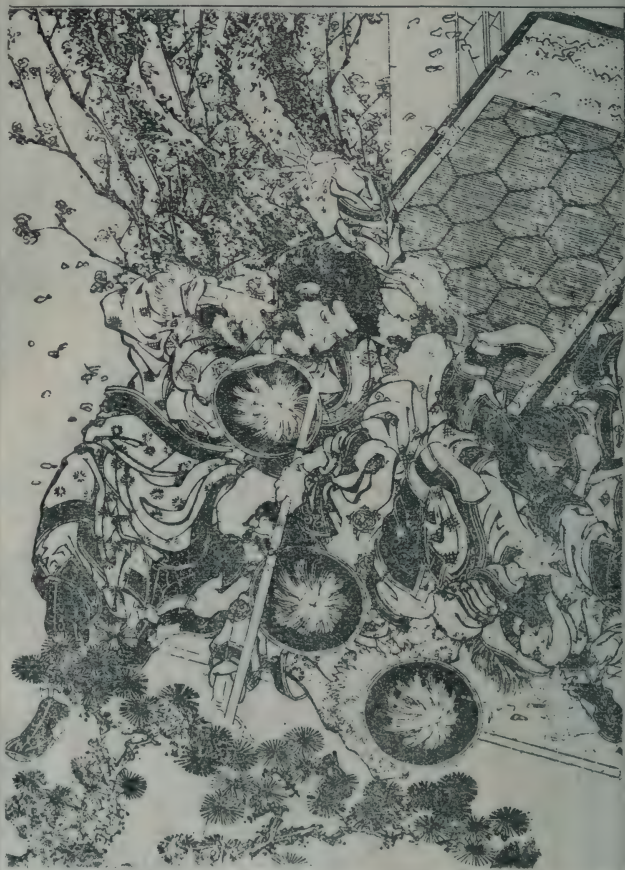
四編　巻之三十一

○鎭三山大に青州道を鬧す

宋江は不慮に淸風寨の正知寨劉高が手に活捕れ、小李廣花榮も、黄信が計にて、酒宴の席に活捕ければ、青州に送らん爲、兩人を囚車に入れ、百餘人の軍士を催し、鎭三山黄信、劉知寨共に淸風寨を發し、青州路を望んで、漸三四十里を馳せ、乃ち前面を見るに、大いなる林あり、林の内に人あつて、只顧窺ひ望みければ、諸の軍士これを怕れ、乃ち立住り、林の内を指ざして云けるは、恠いかな、林の中に人在て、再三我々を望むは、必定盜賊ならめ、知らず何を以て之を追退けんや、と衆皆進み難て控へたり。黄信此光景を見て、諸の軍卒等を責て云く、汝等何ぞかくのごとく人を怕るゝや、必ず遲疑を休て進發せよとて、當先に進んで馳ければ、軍士等も黄信が威勢に倚て、二つ囚車を擡き、大勢是を打圍で、一齊に吶と進みけり。既にして林の邊に至りし處に、俄に金鼓の聲、大に響きしかば、諸の軍士どもこれを聞て、魂懼れ慄き、急に逃去んとせし處に、黄信怒て云けるは、汝等衆軍何ゆゑ、斯自ら頻に恐懼す

内は決断したる罪人にあらず、只宜しく衣服を著させて、州裡に送るべしとて、乃ち花榮宋江を囚車に載せ、百餘人の軍士等に命じ是を擡せ、黃信は喪門劍を撫て馬に乘ければ、劉高同く鎗を持て馬に乘り、遂に淸風寨を離れて、靑州府へと急ぎけり。

此途中に甲冑馬上の豪傑待て黃信を追走らせ、劉高を生捉り、宋江花榮を救ひ、王英再び劉高が夫人を生捉り、山陣に引來る品々、四編目を讀て知るべし。

我決して足下を饒すまじ。黄信冷笑て云く、汝は何證見を看せよと云よな、我今證見を出して見すべき間、必ず驚くことなかれとて、則左右に命じ、一兩の囚車を推出させければ、花榮恠みてこれを見るに、囚車の內には宋江を入れ、紙旗を插し、旗の上には淸風山の賊首鄆城虎張三と書ければ、忽然として大に驚き、唯宋江と面を見合せ、呆れたる計なり。黄信又呼つて云く、是都て我が干りしことにあらず、原告の對手劉高此に在り、花榮汝もし分說あらば、速に今これを云んや。花榮宋江を見て、黄信に對し云けるは、彼者は是我爲には親類なり、乃ち鄆城縣より來れるに紛なし、然るに彼を捕へて賊とするのみならず、剩へ我を綁め同類と云は、甚だ以て非道なり、好遮莫我官司に至らば、自ら分辯すべき所あり、速に我を送て官司に至らしめよ。黄信が云く、汝已に斯のごとくんば、官司に於て宜く分說せよ、我今汝を送て州裡に行べしとて、則ち劉高と商議して百餘人の軍士を催し、已に囚車を推しめて、青州府へ進發せんとぞ、議定しぬ。又此時府尹は專ら音信を待て、尙廳上に控へけり。花榮又黄信に對して云けるは、足下と我とは同じく武官なり、足下もし肯て其類を憐むの心あらば、我が衣服を除ずして囚車に載しめんや。黄信が云く、此こと究て易し、何ぞ必ずしも衣服を除かんやとて、則劉高に對して云けるは、花榮が云には、官司に至て自ら分說有と申なれば、其

勤むべき間、足下某等が爲に、府尹相公に宜しく相達し給へ。黃信是を聞て呵々と打笑ひ、又第二の盃を以て花榮に勸めて云けるは、劉知寨今已に云給ひしは、足下と別に不和のこともあらざるとなれば、いよ〳〵悅ばしく思ふなり、府尹相公向に兩知寨不和たることを聞給ひぬるは、定めて外人等が、妄に傳へし所ならん、然れ共益親しく交り給ひて、互に公役を眞實に勤め給へ、是則官爵を受る者の本等なり。花榮頓首して盃を接へ、慇懃に深く謝して、終に飮乾ければ、劉高は又自ら大盃に酒を滿々と篩で、黃信に勸めて云けるは、今日都監相公此所に來臨を惠み給ひしこと、某等兩知寨が爲には莫大の福なり、願くは此酒を勸め進らすべき間、若我が輩を棄給はずんば、宜しく是を乾給へ。黃信急に盃を接へて云けるは、劉公何ぞかく慇懃の言を述給ふや、某敢て此酒を飮乾て、以て厚意を謝せんとて、乃ち盃を手に拿ち、能四方を顧み、頓て相圖のごとく、盃を地上に擲丟ければ、忽ち後堂大に響て、兩邊より四五十人の軍士一齊に進み出で、遂に花榮を押へ、高手小手に縛めけり。花榮大に驚き、これは何事をなすぞと呼りければ、黃信罵つて云く、汝尙あへて何事をなすぞと呼るはいかん、汝擅に淸風山の盜賊と通同して朝廷に背くこと、罪正に九族を滅すに當れり。花榮が云く、都監相公斯云給ふは定て證見あつての事ならめ、願くは其證見を見せ給へ、若證見もなくんば、

めんと思ひ給はゞ、和睦し給ひて後、某貴宅に至て欵待を請べき間、今日は先早々公廳に至り給ひ、只急に和睦の事こそ專要なれ。花榮是を聞て其言に服し、早速裝束を改めて兩人馬を並べ、直に大寨を望て馳來り、遂に公廳の上に登りし處に、劉高は早來て待居けるが、黄信花榮が至りしを見て、忙はしく出迎へ、三人座已に定りしかば、黄信頓て酒宴を具へしめて、飲酌を催しけり。此時家人等は花榮が馬を寨外に索出して、牢く寨門を關さしむ。花榮は計たることを夢にも知らず、一向想ひけるは、黄信は我と同じく武官のことなれば、必定我を憐む心深し、誠に感謝に勝ずと、心中喜悦して、毛頭疑をなさゞりけり。黄信先盃を把て、劉高に勸て云けるは、府尹相公這回足下等兩知寨不和たることを聞及び給ひ、大にこれを憂へ、乃ち某を遣し和睦のことを調へしめ給ふ間、足下兩人宜しく舊惡を念ずして、互に和睦を遂られ、向後諸事然るべき樣に商議をなし、朝廷の聖恩を報じ給へ、若果して能くかくのごとくんば、乃ち忠臣とも謂つべきものなり。劉高が云く、某等ごとき不能不才の徒なるに、府尹相公互にかくのごとく尊心に掛給ひて、和事を調へしめ給ふこと、誠に懇切の存念なり、某等兩人別に不和のこともなけれども、府尹相公外人等が云しを信じ給ひて、既にかく足下を遣して示し給ふ上は、向後別して睦じく交り、少しも私の恨を懷かずして、互に公用を專一に

なるは、必定私仇に因て、公事を誤ることもやあらん、宜しく急に和睦の儀を調ふべしとて、乃ち某に命じて、今日大寨の内に酒宴を設けしめたまひ、則足下等文武の兩知寨を請うて、和睦さすべきとのことなり、足下宜しく某に隨つて、大寨の公廳に至り給ひ、劉知寨と和を調へ、共によく清風寨を守り給へ。花榮此言を聞て、微しく打笑て云けるは、某豈敢て劉高を欺かんや、殊に彼は正知寨のことなれば、某常に諸事を讓りて、其下知を受るといへども、何ゆゑにや劉高は、只某が過を見出して、是を責んとのみ欲せり、今日府尹相公、某等が不和のよしを聞給ひて、忝く足下を遣し給ふのみならず、酒宴を公廳に設しめ給ひて、某等が爲に和睦を調へ給はんとの厚意、某何を以てか能くこれを謝せんや、誠に感激の至なり。黄信又花榮に對して低言けるは、知府相公此のごとく懇請のこと、足下一人を親切に想ひ給ひてのことなり、若萬一刀兵を動すことあらんときは、足下一人こそ、朝廷の御爲に力を用ひ、軍功をも建らるべし、彼劉高は、本文官のことなれば、其節に及んでは曾て益あらじ、足下いよ〳〵府尹相公の厚意を感じ給はゞ、早々某に隨ひ公廳に來り、宜しく先曲て劉高と和睦を調へ給へ。花榮これを謝して云く、都監相公の好意別して感佩に勝ずとて、則酒食を設けて、先三盃を勸んとしける處に、黄都監これを辭して云く、足下若果して某に三盃を勸

に藏置ぬる間、花榮は曾て此事を知らざるなり。黄信が云く、已にかくあらば、又花榮を活捉んこと最安し、明日大寨の公廳に於て酒宴を設け、宴席の四方に二三十人の軍士を伏置き、我自ら花榮が方へ往て、彼に對面し、只詐つて云べきは、慕容相公、頃日足下等兩人、文武知寨不和なることを聞及び給ひ、特々我を遣し、已に兩知寨を和睦さすべきとのことなりと告て、宜しく彼を誑き、終に賺して、公廳に誘引すべき間、既に飮酌始りなば、我が盞を擲るを以て相圖と定め、四方の伏勢一齊に出て、花榮を捉へ、早速縛めて州裡に送るべし、只知らず此計はいかん。劉高これを聞き、再三讃嘆して云けるは、此計大に神妙なり、いよ〳〵此良計を行ひ給はゞ、花榮を活捉んこと、恰も嚢の内を探りて物を取がごとくならんと、其夜已に計を議定し、翌日大寨の左右兩邊に、預め軍士を伏置き、廳上には酒宴を設けて、諸事全く調へ、朝飯後黄信馬に打乗り、直に花榮の小寨に馳せ、門前に立しかば、守門の士、内に入り、花榮に斯と告る處に、花榮は忙しく出迎へ、便ち延て廳上に至り、賓主の禮已に畢りければ、花榮先黄信に問て云く、都監相公は何の公用に依て、此邊に來臨ありや。黄信答て、某府尹の命を受て此處に來れり、乃ち是足下等兩知寨、文武の官僚不和たるに因てなり、知らず何ゆゑ、同僚不和にはなり給ひしぞ、府尹相公再三是を憂ひ慮り給ふは、兩知寨已に不和

空しく捨置がたし、宜しく先花榮を捉へて、事を正さん、と乃ち當府の兵馬都監を呼んで、急に花榮を捉へ來るべきよし命じける。此都監姓は黃、名は信と號し、武藝高强にして、青州を威鎭するに因て、人皆鎭三山と呼慣せり。又此三山と云ふ緣故は、青州支配の内に三つの險山あり、第一はこれ清風山、第二は二龍山、第三は桃花山、這三つの山は都て强賊の住處なり。此黃信常々人に語て云けるは、我這三つの山を鎭守して、大小の盜賊一々捉へ盡さんと誇言せしにより、人擧て鎭三山と諢名せり。此黃信は相貌凶猛にして虎豹のごとし、身軀長大にして蛟龍に似たり。平生能喪門劍を使ひ慣ぬ。此時黃信已に府尹が命を奉り、頓て四五十人の精兵を催し、衣甲を著し劍を取り、一疋の名馬に打乘て、直に清風寨に馳來り、先劉知寨が門前に至て、馬を下りければ、劉高忙はしく迎へて、後堂に入り、互に禮畢り、座已に定りし處に、はや酒宴を美々しく設け、黃信を欵待し、即宋江を引出して、黃信に見せしめければ、黃信が云く、這賊を且囚車に入れ、紅絹を以て彼が頭を包み、其上に一つの紙旗を插し、旗の上には、清風山の賊首鄆城虎張三と書て、州裡に送るべしと、急に用意を調へけり。宋江は自ら分辯しがたきことを察し、敢て聲をも出さずあり。黃信又劉高に問て云く、知寨此張三を捕給ひしこと、花榮も已にこれを知れりや。劉高が云く、昨夜二更の時分張三を捕へ、暗に我家

遂に彼が一命を害し、我獨此清風寨を覇らば、諸事全く如意にして、快からんものをと、已に計を定め、其夜二十餘人の軍士を催し、四五里外の路上に遣し、宋江が獨清風山に回らんとするを捕はしめける處に、二十餘人の軍士果して宋江を捕へ、遂に高手小手に綁めて引回りければ、劉知寨是を見て大に悦び、諸の軍士等に對して云けるは、我が察せし處毫髪も差ず、此賊清風山に馳回らんとして活捕らる、猥に沙汰して、外に漏す事なかれ、且此賊を後院の内に入置て牢く守るべし、と嚴に命じ、頓て牀子を修へ、心腹の者兩人を其夜青州に馳て、此事を訟へけり。翌日花榮暗に思ひけるは、宋江ははや清風山に回しければ、我が心稍安んぜり、唯知らず劉知寨は何故兎角の言も云ずして、自ら靜りけるや、嗚呼恠いかな、と疑更に晴ざりけり。彼劉知寨は、はや人を州裡に馳て、此事を訟へしめたれば、心中甚だ大悦し、暫く先何事も知らぬ體にもてなし、更に聲をも做ざりけり。扨青州の府尹、覆姓は慕容、雙名は彦達と號し、乃其妹は、今上皇帝徽宗天子の御寵愛にあひぬる貴妃なる故、專ら妹が勢に倚て權威を振ひ、或は居民を殘害ひ、或は僚官を欺負き、不仁不道の行跡多し。此時府尹後堂に坐して在ける處に、左右の近習劉知寨が牀子を携來て、府尹に呈す。府尹これを披き見て大に駭き、花榮はもと功臣の子孫なるに、何ゆゑに清風山の盜賊と通同するや、此罪尤重ければ、

に從ふべけれ共、只恐らくは長兄の先に痛く打れ給ひぬれば、必ず路を行く事能ふまじ。宋江が云く、縦ひ棒瘡痛むとも、何ぞ憂とするに足んや、先足下州裡に至らん時、對決に望んで劉高斯いはゞ、答は斯と慮り給へ、事已に危急に及びしことなれば、片時も逗留なりがたし、我は只よろしく速に清風山に馳行べしとて、乃ち膏藥を求めて棒瘡の上に貼り、其日晩昏に至て終に花榮に別れ、獨自ら清風寨を打出て、直に清風山へと急ぎけり。扨劉知寨は戰いかがと待居ける處、軍士等盡く散々逃回り、劉知寨に告て云けるは、花榮が猛勇萬夫敵しがたき勢あり、是故に某等勝を取る事能はずして引返しぬ、彼兩人の新教頭も、已に花榮が一箭に各射殺されぬ、誠に花榮が働は、等閑の及ぶ所にあらざるなり。劉高は兩腕とも頼み切たる新教頭を殺され、大に驚歎せしが、原來文官なれば、頗る計略智慮あり、花榮は又武官にて、勇猛藝術は人に過たりといへ共、智量に至ては却て劉高に及ばざりけり。此時劉高熟々想ひけるは、花榮必定今宵の内に彼賊を清風山に歸し、明日我と爭をなさんと圖るらめ、若官司に至て事を正すとも、彼再三抵頼ば、我何を證見として、彼に云勝つ事を得んや、我今宵急に二三十人の軍士を五里の外に遣し、賊を俟しめ、道にて捉はすべし、若天幸を賜り、賊をだに擒とせば、早速人を州裡に遣し、府尹に訟へ、又多くの官軍を催し、花榮をも倶に生捉て、

なれば、かくの如く恩を以て仇とし、我を再三打しめけるや、我もと實名を告んと思ひしか共、只閻婆惜が事又もや發んと怖れしまゝ、詐つて鄆城縣の旅人張三といふ者なりと誑きければ、彼劉高鄆城縣の縣の字を改めて虎の字とし、乃ち鄆城虎張三と書て旗を插し、已に囚車に載て州裡に送らんと圖りし處に、賢弟來り救ひし故、我先急難を免れぬ。花榮これを聞て云けるは、某向に想ひけるは、劉高はもと讀書をしたる文墨の者なれば、定めて同姓を憐むこともやあらんと量り、乃書簡の表に長兄の名を劉丈と書遣しぬ、後日彼もし官司に訟へ事に及ぶとも、我又自ら分辯する所有べければ、少しも怕るゝに足まじ。宋江が云く、賢弟の言差へり、古の語にも、飯を吃するは噎ばん事を防ぎ、路を行くにも跌かん事を防ぐと云事あり、もし自ら是を輕く看て防ぐことをなさずんば、却て災を脫れがたかるべし、賢弟先に彼が家に踏込で我を奪ひ復すのみならず、今又彼が家人等を追散せしことなれば、劉高いかんぞ肯てこれを忍びんや、必定文書を以て官司に訟ふべし、其時我尙此に在て、若再び捉はるゝことあらば、賢弟始終抵頼給はんこと能ふまじ、しかじ我は今宵暗に清風山に上て躱るべき間、明日汝もし彼と共に官司に出て對決に及ばゞ、其證見を出せと責て、對決に贏給へ、是乃ち萬全の良計なり。花榮が云く、某は只これ一勇の夫なれば、原來長兄の高明遠見に及ばざる間、敢て長兄の計

花栄飛箭射両教頭

ことなかれ、兩人の新教頭も亦、いまだ我が武藝の程を知らずしてこそ、我を撃んと欲すらめ、汝等幾干來るとも、箭の鏃も刃の鋒も及ぶべき我にあらず、卒爾に敵し非命の死を做さんより、速に人數を纒めて立回るべし、もし此言に背かば、一人も生ては回すまじきぞと。兩人の新教頭が云く、我劉知寨の命を承り、乃ち汝を撃て賊を取復さんと欲す、いかんぞ私の思慮を以人數を退けんや、只快く一戰を遂て勝負を決すべきぞ。花榮是を聞て呵々と大に笑ひ、則弓に矢を搭て滿月の如く拽緊め、暫し熬て兵と放ちければ、眞先に進んだる一人の新教頭が左の眼に射中、第二の箭を放て、又一人の新教頭が喉に射中し處に、兩人の新教頭忽ち地上に倒れ死にけり。諸の軍卒共是を見て大に驚き、悉く四面八方に逃散て、再び取掛らん兵もなし。此時花榮諸の家人等に命じ、先門を閉さしめ、直に後堂に至り、宋江にまみえ云けるは、某誤つて長兄に苦みを受しめまゐらせ、今更後悔止ざるなり。宋江が云く、賢弟何ぞ反てかくのごときことを云給ふや、汝想はず我ために災を蒙り給ふこと、一家中の老少、さぞこれを難義に思ふべし、彼劉高定めて、此仇を報ぜんとこそ圖るべきに、我が輩も亦預め計を施さば可ならんや。花榮が云く、某此官職をだに棄て、彼と理論せば、少しも難きことあるまじきに、長兄必ず憂ひ給ふことなかれ。宋江が云く、劉高が妻はいかなる惡人

尋ね捜させける處に、軍士等勢に乘じ、前後左右偏く捜し、遂に廊下の前の空房の内にて、宋江を捜し出せり。時に宋江は梁の上に吊起られ、しかも兩腿都て打綻られしかば、血流れて渾身全く紅に染けるを、軍士等急に扶け下し、綁の索を解ければ、花榮下知して先これを私宅に送り回さしめ、其身は再び馬に跳乘、大音聲を響せ呼りけるは、劉知寨汝今我上に在て正知寨をなせばとて、何ぞ擅に無禮をなし、我が親類を此のごとく打ちけるぞや、我猶明日此罪を正すべきぞとて、諸の軍士を引て、門外に馳出で、頓て私宅へぞ歸りけり。劉高は已に花榮に宋江を奪ひ復され、大に怒り、二百餘人を催して、花榮が方へ差向けり。此人數の内、首たる兩人の新教頭ありけるが、武藝衆に拔出て、原來名譽の勇士なれ共、猶未だ花榮が武藝には如ざりしなり。此兩教頭劉高が命を奉て、二百餘人を引率し、直に花榮が宅に寄來り、已に門前に至りければ、守門の軍士忙しく内に入て、花榮に斯と報じける。此時天色未だ明ざりしかば、寄手の輩は多く火把を揮照し、衆皆門外に群て、進入らんとはしけれ共、花榮が勇猛に怕れ、當先する者なかりしかば、各徒に噪動して時を移し、夜も漸々曉はなれぬ。此時花榮が軍士等自ら大門を推開て、少しも恐るゝ氣色なし。花榮ははや弓箭搶取て廳前に躍り出で、忽ち大音を揚げ呼つて云けるは、汝等諸の軍士共必ず劉高が爲に我を犯し、一命を失ふ

劉高書簡を見了て、忽ち大に怒り、乃書簡を扯破て、使者が前に投丢て、猶再三罵つて云けるは、花榮果して斯のごとく大膽なるや、汝も是朝廷の官人なれば、宜しく法度を守るべき處に、却て盗賊等と通同するはいかん、彼賊自ら其名を告て、鄆城縣の張三と申者なりと云たるに、花榮今又彼が姓名を劉丈と書しは、我と同姓たらしめて、其罪を免さしめんと圖るなり、我汝ごとき小人に欺かれんや、と益怒り、乃左右に命じて、花榮が使者を門外に赶出しぬ。使者此光景を見て大に驚き、早速馳回て花榮に斯と告ければ、花榮忽然として怒心頭より起り、急に盔甲を著し鎗を取り、忙しく馬に乘て、軍士四五十人を引率し、直に劉高が寨裡に馳せ、はや門前に押つめぬ。

○花榮大に清風寨を鬧す

此時劉知寨が守門の軍士等、花榮が猛勢を見て甚だ怕れ、四方に散て逃失けり。頓て花榮疾然として門内に馬を騎入み、廳前に至て馬より下り、只顧手中に鎗を撚り、大音に呼りけるは、劉知寨早く出給へ、對面の上敢て說話せん。劉知寨此言を聞て大に怕れ、深く閨中に躲れ出ざりけり。花榮尙再三呼りしかども、劉高さらに出ざりければ、花榮忙しく軍士等に命じ、宋江を

や。宋江が云く、我向に再三彼頭領等を諫めて、夫人を救ひぬるに、夫人は何故今日我を捉へしめ、賊首とは云給ふぞや、是則仇を以て恩に報ずるがごとし、夫人自らよくこれを察し給へ。彼女大に怒り、宋江を指ざし云く、汝奸賊尚かくのごとく抵頼んとするや、若痛く打たずんば、いかんぞ肯て白狀せん、宜しく早々打給へとて、再三劉知寨を諫めければ、劉知寨然りと同じ、則左右に命じ、宋江を四五十鞭打しめぬる處に、痛ましい哉宋江は皮開け肉綻れ、鮮血滾々と流れけり。劉知寨又左右に命じて云く、先今宵は其賊を梁の上に吊起て緊しく守るべし、猶明日州裡に送り罪を決斷せん、と議定しけり。扨宋江に從ひ行たる家僕慌忙き馳回り、則花知寨にまみえて、宋江が捉れたることを告ければ、花知寨これを聞て大に驚き、忙はしく一封の書簡を修へ、急に兩人の家僕を劉知寨が家に馳て書簡を送らせける處に、兩人早速劉知寨の門前に至り、守門の軍士に斯と告ければ、軍士内に入て、花知寨が使者のよし報しけるに、其使者を廳前に呼入しかば、使者則書簡を取出してこれを呈す。劉知寨これを披き讀む、其文にいはく、

花榮拜ニ上僚兄相公座前ニ。所レ在薄親劉丈。近日從ニ濟州ニ來。因レ看ニ燈火ニ誤犯ニ尊威ニ。萬乞情恕放免。自當ニ造謝ニ。草字不レ恭。惟願照察。不宣。

劉高呵責宋江明

猛虎が羊羔を啖ふに似たり。彼軍士等大いに宋江を罵つて云けるは、汝犬賊いかんぞかく大膽に此處には至りぬるぞとて、遂に劉知寨が廳前に引出しぬ。扨彼宋江を導いて來りぬる三人の家僕は、宋江が活捕れたるを見て、大いに仰天し、且よろしく主人花知寨に告べしとて、三人齊しく足を飛せ馳回りぬ。彼劉知寨は廳前に躍り出て待居ける所に、軍士等はや宋江を活捉て廳前に引渡しければ、劉知寨宋江を見て大に怒り、汝は是清風山の賊首にあらずや、いかんぞ擅に此處に來て自ら死を求るや。宋江告て云く、某はもと鄆城縣の者にて、名を張三と申し、花知寨とは舊友なるによつて、多日花知寨が家に逗留せり、竟に清風山に在て、賊をなせし事なし、相公誤つて我を賊と思ひ給ふな。此時劉高が妻、屏風の背後より走り出て、大に怒り罵りけるは、汝奸賊日外清風山に在て我に見えけるは、定て猶記えあらん、いかんぞ再三是を抵頼や。宋江此女を見て忙しく答へけるは、夫人何故かくのごときことを云給ふや、其時我已に夫人に對して云けるは、我は本此山の大王にあらず、則ち鄆城縣より來りし旅人なりとこそ告けるに、何ぞはや是を忘れ給ふや。劉知寨が云く、汝已に旅人ならば、何ゆゑ又清風山には在けるぞ、汝が言一々其理に當らず、我豈敢てこれを信ぜんや。妻又云く、彼日山陣に於て第一位の席に坐し、擅に我をして大王と稱へしめぬ、又もし賊首にあらずんば、汝は何ぞ

あり。其外に造物の燈籠、色々新奇を出し、今小蓬山とあるは、蓬萊山の形を造り、是へ燈籠を交へ掛たるなり。日本には中元の佳節を云のみにて、上元下元をいはず。土地大王廟とは所の鎭守と云ふ如し。

此時宋江二三人の家僕と共に、良久しきまで、普く遊賞し、纔半里許に至つて對向をみるに、殊更燈燭熒煌として、一夥の人雲霞のごとく集りて大墻院の門前を圍みしかば、宋江何事なるにやと、近々向ひ進んでこれを見るに、幾干の人鑼鼓を打鳴し、舞を奏うて騷ぎけり。宋江諸人の後に在てこれを見んとしけれども、宋江は原身材矮き小漢子なれば、偏にこれを見ること能はざりし處に、從ひ來りし二三人の家僕、諸人を推分て宋江を進せしかば、諸人の前に進出てこれを見るに、彼舞の裝束究めて異風に打扮けるゆゑ、宋江覺えず聲を放て咲ひける處に、墻院の内には、劉知寨夫婦高樓の上に登つて舞を見て在けるが、彼夫人不圖宋江が笑ひぬるを見て、忽ち夫劉知寨に告て云けるは、今彼咲ひたる漢子こそ、前日我を淸風山に奪行し盜賊の首なり、宜しくこれを捕へ給へ。劉高これを聞て大いに驚き、忙しく左右の家人に命じ、宋江を捉しむ。宋江は舞を見了つて再び外面に走り出で、纔二十步許過行んとせし處に、七八人の軍士飛がごとくに馳來り、頓て宋江を捉へて綁めけり。其勢は、恰も皂鵰が紫燕を追ひ、

百の花燈を設け、街の上には千百の藝者盡く來て喧嚷けり。然も京の繁榮には如ざれども、此處も亦人間の天上なり。此時花榮は手下の軍士等に命じ、嚴かに寨の四方を守らしめ、專ら盜賊醉漢の徒を防せけり。宋江花榮に對して云けるは、今宵は當地の街の上に、萬千の花燈を點し、都の光景にも多く讓らざるところ承る、宜しく馳て一覽致さば可ならんや。花榮が云く、某も老早長兄を導きて、共に遊覽せんと思ひけれども、只恨らくは、知寨の職をなしぬるゆゑ、妄に遊行すること能ず、長兄もし一覽し給んならば、某今家僕二三人を長兄に跟て導かすべき間、早々花燈を見て回り給へ、某は家に在て專ら長兄の回り給ふを待受け、共に三盃を酌で、佳節を慶すべし。宋江が曰く、旣にかくのごとくんば、足下は家に在て待給へ、我は花燈を看て少刻回るべしとて、乃ち二三人の家僕に引れて街に至り、四面八方に繞て遊覽するに、門々戸々に種々の花燈を懸け、其多きこと幾千萬と云ふ數を知らず。宋江大に讃美し、逕に土地大王廟の前に至て、彼小鰲山の花燈を見るに、或は金蓮燈、玉梅燈、或は牡丹燈、芙蓉燈、其外許多の故事を用ひて、燈籠を餝りしかば、誠に美々しき佳觀なり。

元宵とは、正月十五日は上元、七月十五日は中元、十月十五日下元と云ふ。支那の俗正月十五日夜、市中は家より家へ竹を亙し、種々の花燈を架並べ、道行人の頭上悉く燈籠

は解べし結べからずと云ふ事あり、況や彼は今賢弟と同僚の官なれば、又他人とは同じからず、殊に彼は文墨の人なれば、假令少しの過あるとも、只よろしく惡を隱して善を揚給へ、賢弟向後必ず恨を過て、交を親しうし給へ。花榮この言を感じて云く、長兄の曰ふ所は、一々これ賢者の見識なり、某明日公廨の内にて、劉知寨に見えなば、彼が妻を救ひ給ひぬること、一一告知らせ候はん。宋江が云く、賢弟もし肯てかくの如くんば、正によく親切の情現れて、此より平生の交互に睦じかるべし。花榮いよ〳〵其言に服し、夫婦慇懃に宋江を欵待ぬ。其夜二更の時に酒宴已に畢りければ、花榮則宋江を請て、後堂の内に歇せけり。翌日又酒宴を設て、宋江を欵待し、懇情を盡し、怠慢の體なかりしかば、是より宋江は五六日を過しける處に、花榮手下の軍士に命じ、宋江を街に導かせ、此彼の風景を遊覽なさしめければ、宋江は已に此日を始として、每度軍士に誘引せられ、或は茶肆又は酒肆、盡く至らずと云ふ處なし。此日宋江彼軍士と共に、小枸欄と云處に暫く徘徊して風景を遊賞し、夫より直に村中に馳て寺院宮觀等を一覽し、遂に又街の上に繞り出て、酒肆に至り、良久しく酒を酌で樂みけり。宋江此のごとくすること、每日なりしかば、寨裡に逗留すること、一月餘に及び、漸々臘盡き春回り、又早元宵に至りければ、清風寨の民ども、土地大王廟の前に一つの小鰲山を造り、其上には七八

き衣服を取出して宋江に著させ、後堂に於て酒宴を設け、快く飲酌を催しぬ。此時宋江彼劉知寨が夫人を救ひしこと、一々備に語りければ、花榮これを聞て、忽ち雙の眉を皺めて云けるは、長兄何の來歴もなきに、彼女を救ひ給ふはいかん、某却つて彼を滅さんとこそ思ふなり。宋江此ことを聞て大に恠み、則ち問て云けるは、賢弟何ゆゑ此の如き事を云給ふや、我は只賢弟の同僚たる人の妻なるに依てこそ、再三再四頻に王英を諫め、遂に救ひ得て、再び回らしめけるに、賢弟却て是を悦び給はざるは、必定緣故あらん、速にこれを語り給へ。花榮が云く、押司はいまだ知り給ふまじ、此清風寨は青州第一の要害なり、某一人此寨を守りし時は、遠近の盜賊等敢て一人も來ることなかりしに、今彼劉高想はず正知寨となり、擅に己が勢に乘じて、居民を閙し、法度を破て專ら非道をなすゆゑ、民の苦む者多くして、盜賊內より起れり、某は武官にして副知寨たるにより、毎度彼に欺かれ、恨骨髓に徹り、終には彼を殺すべきとぞ思ひつるに、長兄いかんぞ彼が妻を救ひ給ひぬるや、殊さら彼女大いに毒惡なり、常にしも一向夫を攛掇て、不仁のことを行はしめ、專ら黎民の賄賂を貪りて、不義の財を集んと欲す、幸ひ彼女に玷辱を蒙らしめて、天罰をも知らせんものを、長兄誤つてこれを救ひ給ひしこと、甚だ以て後悔なり。宋江此言を聞て則ち諫めて云く、賢弟の言差へり、古の語にも寃仇

活捉られ、却て燕順等三頭領が懇情を受たること、一々詳に語りければ、花榮此言を聞て、嘆息斜ならずして云けるは、押司此のごとく禍に遭ひ給ひ、嘸身心を惱し給ひつらん、今日幸願ひしごとく、此所に至り給ふ上は、少しも憂へ給ふこと有まじきに、且數ヶ年私宅に滯留し給へ、其内宜しからんずる商議をなすべし。宋江が云く、我向に柴進が館にありし時、老父がこと頻に憂へ想うたるゆゑ、弟宋清を回して、老父を訪はせける處に、老父も恙なく、また官司の事も漸息ぬるゆゑ、宋清已に書簡を孔太公が館に寄て、委細のことを我に告知らせり、其比賢弟の書簡をも共に送り屆けぬ、これに依て賢弟の深く懇情なることを知り、今日特々貴宅に拜候しけるに、果して此のごとく懇の存念、誠に感佩の至なり。花榮が云く、先にも已に語りぬるごとく、連々に二十餘封の書簡を呈して、押司の起居を候ひ奉りしが、久しく返簡をも得ざりし處に、其後令弟宋清公已に歸鄕ありしとて、乃ち書簡を惠み給ひて、押司は今孔太公が館に居給ふと告知らせ給ひぬ、是故に某近々人を孔太公が館に馳て、押司を邀へ奉らんとこそ思ひつるに、料らず今日光臨を蒙ること、是天の賜なり、然れども、祇恨らくは、何の欵待をも盡すことなし、先宜しく後堂に移り休息し給へとて、自ら宋江を延て後堂に至り、早速妻崔氏を呼出して、宋江を拜させ、又妹をも共に呼出し、同じく宋江を拜さしめ、頓て新し

き衣服を取出して宋江に著させ、後堂に於て酒宴を設け、快く飲酌を催しぬ。此時宋江彼劉知寨が夫人を救ひしこと、一々備に語りければ、花榮これを聞て、忽ち雙の眉を皺めて云けるは、長兄何の來歴もなきに、彼女を救ひ給ふはいかん、某却つて彼を滅さんとこそ思ふなり。宋江此ことを聞て大に恠み、則ち問て云けるは、賢弟何ゆゑ此の如き事を云給ふや、我は只賢弟の同僚たる人の妻なるに依てこそ、再三再四頻に王英を諫め、遂に救ひ得て、再び囘らしめけるに、賢弟却て是を悦び給はざるは、必定緣故あらん、速にこれを語り給へ。花榮が云く、押司はいまだ知り給ふまじ、此清風寨は青州第一の要害なり、某一人此寨を守りし時は、遠近の盜賊等敢て一人も來ることなかりしに、今彼劉高想はず正知寨となり、擅に己が勢に乘じて、居民を閙し、法度を破て專ら非道をなすゆゑ、民の苦む者多くして、盜賊內より起れり、某は武官にして副知寨たるにより、每度彼に欺かれ、恨骨髓に徹り、終には彼を殺すべきとぞ思ひつるに、長兄いかんぞ彼が妻を救ひ給ひぬるや、殊さら彼女大いに毒惡なり、常にしも一向夫を攛掇て、不仁のことを行はしめ、專ら黎民の賄賂を貪りて、不義の財を集んと欲す、幸ひ彼女に玷辱を蒙らしめて、天罰をも知らせんものを、長兄誤つてこれを救ひ給ひしこと、甚だ以て後悔なり。宋江此言を聞て則ち諫めて云く、賢弟の言差へり、古の語にも寃仇

活捉られ、却て燕順等三頭領が懇情を受たること、一々詳に語りければ、花榮此言を聞て、嘆息斜ならずして云けるは、押司此のごとく禍に遭ひ給ひ、嘸身心を悩し給ひつらん、今日幸願ひしごとく、此所に至り給ふ上は、少しも憂へ給ふこと有まじきに、且數ヶ年私宅に滯留し給へ、其内宜しからんずる商議をなすべし。宋江が云く、我向に柴進が館にありし時、老父がこと頻に憂へ想うたるゆゑ、弟宋清を回して、老父を訪はせける處に、老父も恙なく、また官司の事も漸息ぬるゆゑ、宋淸已に書簡を孔太公が館に寄て、委細のことを我に告知らせり、其比賢弟の書簡をも共に送り届けぬ、これに依て賢弟の深く懇情なることを知り、今日特々貴宅に拜候しけるに、果して此のごとく懇の存念、誠に感佩の至なり。花榮が云く、先にも已に語りぬるごとく、連々に二十餘封の書簡を呈して、押司の起居を候ひ奉りしが、久しく返簡をも得ざりし處に、其後令弟宋淸公已に歸鄕ありしとて、乃ち書簡を惠み給ひて、押司は今孔太公が館に居給ふと告知らせ給ひぬ、是故に某近々人を孔太公が館に馳て、押司を邀へ奉らんとこそ思ひつるに、料らず今日光臨を蒙ること、是天の賜なり、然れども、祇恨らくは、何の欵待をも盡すことなし、先宜しく後堂に移り休息し給へとて、自ら宋江を延て後堂に至り、早速妻崔氏を呼出して、宋江を拜させ、又妹をも共に呼出し、同じく宋江を拜さしめ、頓て新し

なるに、賊等は都て四五十人の大勢なれば、いかんぞよく彼等に對して敵することを得んや、願くは相公これを察し給へ。劉高益怒て云く、汝等何の面目あつて猶かくの如くいひわけを致すや、早々我妻を取返ずんば盡く入牢させ、斬罪に行ふべきぞ。軍卒等此事を聞て大に恐れ、俄に塞中の兵七八十人を催して、各器械を持ち、直に淸風山に馳て夫人を奪回さんと欲し、已に半路まで打出ける處に、彼兩人の轎夫、忙はしく轎を舁て、飛が如く馳來りければ、軍卒等是を見て、急に相迎へ問けるは、夫人はいかなる計に因て再び賊手を脱れ山を下り給ひしぞ。女が云く、賊等我を捉へて山陣に上りしかども、我自ら劉知寨の夫人たる事を云ければ、彼等大に怕れ、忽ち我を拜し乃ち山下迄送て我を囘しぬ。諸の軍卒共頓首して云けるは、夫人もし肯て某等が一命を救ひ給はむとならば、願くは相公に見え給はん時、某等が力にて再び夫人を奪ひ囘したると宣ひ給はれ、若然らずんば某等が罪決して免れ難からん。那女が云く、我自ら宜しく云べきに、必ず憂る事なかれ。諸の軍卒共大いに悦で拜謝し、頓て轎を中央に取圍んで、忙はしく寨裡に囘りければ、劉高是を見て大に悅び、夫人に問て云けるは、汝は誰が助けを蒙りて、再び恙なく囘りけるや。彼夫人が云く、盜賊等我を捉へて山陣に登り、再三戯れを云ぬれども、我決してこれに從はざりしかば、彼大いに怒り已に殺さんと

三編　卷之三十

○宋江夜小敖山を看る

偖も王英は半は羞ぢ、半は悶り、更に聲をも出さずして在ければ、宋江自ら手を携へて廳上に至り、再三再四諫て云けるは、足下自ら悶り給ふことなかれ、某後日かならず一人の美女、聰明怜悧なる者を擇び出して、山陣に送り申さん間、只よろしくこれと共に長遠の娯を同うし給へ、大丈夫既に一言を出す時は、駟馬も追がたしと云ことあれば、某誓て約を失ふことあらじ。燕順鄭天壽、これを聞て共に呵々と笑ひければ、王英心中に悶るといへども、宋江が威風且禮義に縛られ、たゞ自ら怒れる色を藏して、同じく笑を催しけり。扨又清風寨の軍卒等は、想はず夫人を奪ひ取られ、やむことを得ず、寨裡に歸り、則劉知寨に見えて、清風山の強盜等に夫人を奪ひ取られたるよし告ければ、劉高是を聞て大いに怒り罵つて云く、汝等何ぞかくのごとく懦弱にして、我妻を奪取られたるぞ、我曾て汝等を饒さじとて、乃ち棒搶取て七八人の軍卒等を散々に打しかば、軍卒等分說して云けるは、某等は僅七八人の小勢

後日一人の美女を擇で足下に嫁せしめ申べし、只此夫人は是我が朋友花榮が同僚の人の妻なれば、某如何ともして、これを放ち回さんことを願ふなり、明かにこれを察し給へ。此時燕順鄭天壽、忙しく宋江を扶起して云けるは、押司先座を安んじ給へ、這事原來大事にあらざれば、宜しく商議をなし申さん。宋江是を聞て、若かくのごとくば、偏へに各を頼んとて、深く是を謝しければ、燕順はや宋江が心底を察して、王英が存念を顧ず、則左右の小賊を呼で云けるは、汝等早く此女を再び轎に乘しめ、山下を送り出すべし、と嚴に命じぬる處に、彼女此言を聞て天に歡び地に喜び、再三宋江を拜謝して、大王の厚恩忘れがたしと云ければ、宋江此光景を見て、再び彼女に對して云く、夫人必ず我に謝し給ふことなかれ、我は此山陣の大王にあらず、乃ち鄆城縣の旅客なり。彼女益感謝して、遂に轎の內に坐しければ、兩人の轎夫急に轎を擡て山下に馳下り、恰も飛がごとくに跑去けり。宋江彼女を救ひしこと、大難に遇ふ根本とは、神ならぬ身に知るべきかは。次の卷を見て驚くべし。

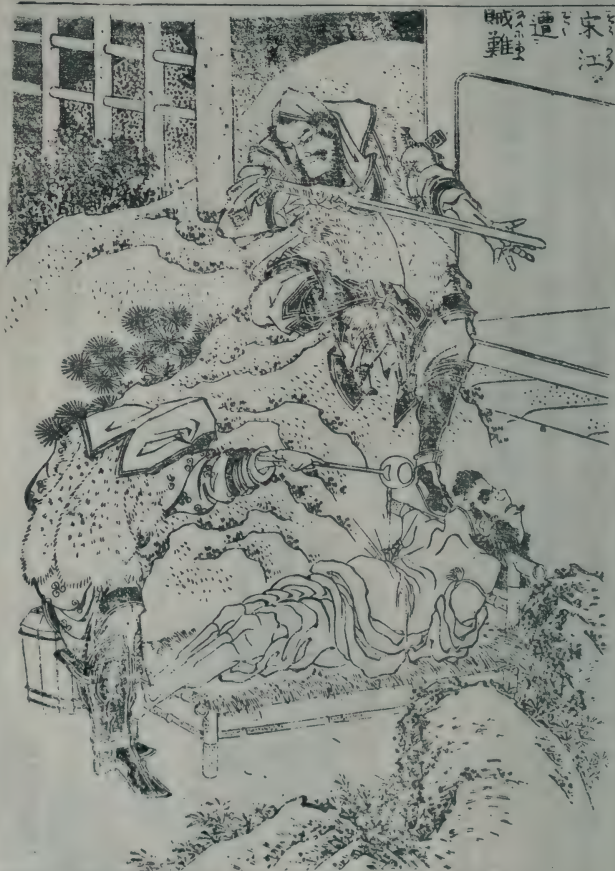
人果して清風寨の知寨が妻に詐なくんば、夫人の夫は乃ち花榮と云ふ人ならん、何故花知寨は又夫人と共に出ずして、這等の時節に獨夫人を放て此處を過らしめ給ふや。彼女が云く、我は是花知寨が妻にてはあらざるなり。宋江がいはく、夫人は今已に清風寨の知寨が妻と告給ひぬるに、何爲又言を變じ給ふや。彼女が云く、大王いまだ清風寨のことを知り給ふまじ、清風寨には今兩人の知寨あり、乃ち一人は文官、一人は武官の知寨は乃ち花榮なり、文官の知寨は乃ち我夫劉高と云ふ者なり。宋江これを聞想らく、彼が夫已に花榮と同僚ならば、我これを救はずんば有べからず、若然らざる時は、明日我清風寨に至て頗る詞有まじ、只よく王英を勸めて放たしめんと欲し、乃ち王英に對して云けるは、某一句の言を告んに、足下肯てこれを容ひ給ふべきや。王英が云く、押司言あらば、速に云給へ、何ぞ遠慮し給ふに及ばん。宋江が云く、我今此夫人の云はるゝを聞に、原是朝廷の官人の妻なれば、いかんぞ下賤の輩と一列に看んや、足下宜しく大義の二字を顧み、速に此夫人を放ち再び囘らしめ給へ。王英が云く、押司が詞背くにはあらざれ共、某久しく妻を求んと欲して、朝夕これのみ憂ぬ、今朝廷の官人等非道を行ふ者まゝ多し、縱ひ是を奪ひ取たるとも、何の妨かあらん、望らくは押司某が所望を遂しめ給へ。宋江これを聞て、忽ち地上に跪いて云けるは、足下もし夫人を求め給ふとならば、某

と大いに哄ひければ、宋江が云く、王頭領はもと女色を貪る人なるにや、是大丈夫のなす所にあらず。燕順が云く、王英が人となり、諸事敢て背くことなけれ共、只惜むらくは女色を愛るの病あり。宋江が云く、已にしからば、我足下等兩人と共に行て、諫言を加へなば可ならんや。燕順鄭天壽大に悦び、遂に宋江を延て後山の王英が房間へ行き、直に門を推開て内を見るに、王英彼女を捉へて、只管娛んことを求て有けるが、宋江等三人が來りしを見て、忙はしく女を放ち、乃ち三人を請て坐せしめけり。宋江彼女を見るに、身には縞素を著し、腰には孝裙を繫び、面には粉脂を施さず。其天然の姿尤妖嬈にして麗し、誠に沈魚落雁の容貌あり。宋江心中に想ひけるは、此女が粧都て素服を著しけるは、定て近き親類の忌中ならんと推量り、乃ち女に問て云けるは、夫人は誰が家の人にて、這等の時節かく遊行し給ふや。彼女滿面に羞る色を含み答へけるは、我は是清風寨の知寨が妻にて候が、近き比老母相果ぬるゆゑ、今日少しの供物を調へて墳を祭らんと欲し、今此山の下を過りぬ、何ぞ私に遊行することあらんや、願くは大王我が一命を救ひ給へ。宋江此言を聞て大いに驚き、乃ち心中に想ひけるは、我まさに清風寨の知寨花榮が方に訪ひ行んと思ひぬるに、此女今清風寨の知寨が妻と云しは、恐らくは花榮が妻にてもあらんずれば、我宜しくこれを救はんと圖り、則問て云けるは、夫

領と共に閑談をなし、又彼武松が豪傑萬夫も當りがたき剛勇を語りければ、三人の頭領齊しく大いに嘆じて云く、某等無縁にして未だ武松に遇ず、もし其武松を得て、共に此山陣を守らば、尤十分に宜しかるべきに、今已に他所に行しめぬるこそ殘憾なれとて、再三仰ぎ慕ひけり。宋江は清風山に五七日逗留しける處に、三人の大王心中に大悅し、毎日美酒美食を饌へて、宋江を欵待ぬ。此時臘月初旬なりけり。山東の人例年臘月には、必ず墳に上て先祖を祭ること有り。斯る處に一人の小賊來て告けるは、今大路の上に一乘の轎に七八人漢子跟て、二つの大盆を荷はせけるが、定て墳に上て先祖を祭るならん。王英は原好色の徒にて、此告を聞暗に想ひけるは、轎の内なるは必ず女ならん、何ぞ是を奪取て、樂しまざらんやとて、急に四五十の小賊を催して山を下らんとしける處に、燕順宋江再三これを攔りしかども、王英耳にも聞入ず、小賊に下知し金鼓を鳴させ、直に轎を望で下りけり。扨宋江、燕順、鄭天壽等三人は猶山陣に在て飲酌を催しける處に、少刻一人の小賊來りて報じけるは、王頭領人數を引て彼七八人の者を趕給ひしかば、彼漢子共大いに怕れて逃去し故、只轎夫二人を捉へ、頓て轎を破き内を見るに、只一人の女と銀の香盒のみ有て、別に何の財寶もあらずと。燕順問て、其女は今何れの所に在や。小賊が云く、王頭領自ら後山の房間の内に擡入給ひぬ。燕順これを聞呵々

速に禮を還して云けるは、三位の豪傑我を殺さずして、却て大禮を行ひ給ふは、いかなる謂ぞや。三人の大王跪いて、猶慇懃に畏り、燕順先言を開いて云けるは、某ら眼ありといへ共、眞の仁人を識ず、已に押司の尊命を害せんと欲ぬ、若押司自ら大名を曰はずんば、いかんぞよく宋押司たることを知らんや、某凡十四五年が間、諸州諸府に徘徊して、曾て宋押司の大名を聞及びぬ、只恨らくは緣薄うして、未だ尊顏を拜せざりし處に、今日天幸を假し給ひて、押司を覩奉ること、某一生の喜悅、何事かこれにしかんや。宋江答て云く、某何等の智德有て、かく慇懃の懇情に當らんや。燕順が云く、押司は原來能賢に禮し、士に下つて天下の豪傑と交を結び給ひしゆゑ、其佳名四海に流れて芳し、誰か敢て押司を敬はざらんや。梁山泊頃日大いに繁昌すること、都て皆押司の賜とこそ、諸人擧てこれを感歎す、只知らず、押司は今何れの處に往んと、何れの地より此處に到り給ひしぞ。宋江答て、彼晁蓋を救ひ、其後閻婆惜を殺し、ならびに柴進孔太公が館に逗留したること、今又淸風寨に馳て、小李廣花榮を訪はんと欲する事、始終備細に語りければ、三人の頭領是を聞て大いに悅び、早速一套の新衣を取出して、宋江に著せしめ、又小賊等に命じ、牛を殺し馬を宰しめ、大いに酒宴を設け、其夜五更の時まで飮酌をなしにけり。翌日宋江辰の刻に起て、廳上に出で、則ち三頭

り。彼小賊良久しく水を宋江が胸の上に澆しかば、宋江大いに嘆じて、惜哉宋江今此處に於て、非命の死をなすよな、嗚呼何ぞ運の拙きこと、直にかくのごときや、と再三嘆息に及びし處に、彼燕順不圖宋江と云たる二字を聞て、忙しく小賊等を退けて云く、汝等先水を澆ぐことなかれ、我今かの旅人が嘆息したるを聞たるに、何宋江とやらん云二字を稱へけると覺ゆ、果して此言ありや。小賊等答て云く、大王の聞給ひし所、曾て差なし、彼今獨自ら云けるは、惜哉宋江今此所にて、非命の死をなすよな、と歎息せり。燕順これを聞て、急に身を起し、乃ち近々と進み寄て、宋江に問て云けるは、汝曾て宋江を識認たるや。宋江が云く、我乃ち是宋江なり。燕順又問ふ、汝は何れの國の宋江ぞや。答て、我は是濟州鄆城縣にて、押司の官をなせし宋江なり。燕順が云く、然らば汝は閻婆惜と云ふ女を殺し、故郷を逃出たる山東の及時雨宋公明と云ふ人にはあらずや。宋江が云く、汝は何を以てこれを知れりや、我乃ち其閻婆惜を殺せし宋公明なり。燕順これを聞て大きに驚き、急に小賊が持たる刀を奪ひ取て、宋江が綁の索を割解き、又己が身に穿たる錦衣を脫て宋江に著さしめ、なほ自ら宋江を扶け起し、第一位の椅子に座を讓り、忙しく彼兩人の大王王英鄭天壽に向て云けるは、汝兩人椅子を下て拜を行へとて、遂に三人地上に倒れて拜をなしければ、宋江慌忙て椅子を滾び下り、

宋江遭賊難

男なり。昔日道中に於て不圖貪心を起し、多く商人の財寶を奪取けるゆゑ、終に其事露顯し、官司に捉はれ、久しく牢中に在て、已に斬罪に決斷せしに、一夜風雨烈しきに乘じ、暗に牢を越え、直に此清風山に上つて、燕順と共に盜賊の頭領をなしぬ。扨又右の方に坐したる大王は、面の色白くして鬚長く、身材極めて大いなり。此人は原浙西蘇州の產にして、姓は鄭、名は天壽と號す。彼斯面色白うして、人物風流なるにより、人皆白面郞君と呼慣せり。原銀器を造て業としたる工匠なり。此鄭天壽幼き時より、武藝を學んで練熟し、其後家業廢れ、異鄕に落魄れ、ある日此清風山の下を過りける處に、王英に出合鋒を交へ、戰已に五六十合に及びぬれ共、勝負分たざりしゆゑ、燕順大いに其武藝を愛し、遂に山陣に留て、第三位の頭領となしぬ。此時王英先小賊共に對して、汝等已に旅人を捉へたることならば、早く殺して其肝を引出せ、我これを肴にして、快く一盃を酌べきぞ。小賊等命を承り、頓て大いなる銅の盤に水を入れ、宋江が前に置ければ、又一人の小賊雙の袖を捲上げ、明晃々刀を提げ、已に宋江が前に進みし處に、彼銅の盤を携へ出たる小賊、又宋江が衣の襟を扯開いて、胸の上に只顧水を澆ぎぬ。此故はいかんぞなれば、凡そ人の胸の内には熱血裹ぬるゆゑ、今此冷水を以てしばしく澆ぎ、熱血を發散し、其後胸を剜開て肝を取出すときは、其肝脆くして味美なるに因てな

拙き所なれとて、自ら眼を閉て、只顧嘆じけるに、はや三更の左側に至りけり。かゝる所に四五人の小賊走り出て呼り云けるは、大王少刻廳上に出給はんと命じ給ふぞ、速に用意せよ、とて俄に椅子の上に虎の皮の裀を布き、廳の四方に許多の燈燭を點し、其光恰も白晝のごとくなり。宋江微し眼を開て、いかなる大王なるにやと暫く窺ひ見る處に、彼の大王頓て廳上に出來りぬ。其裝束嚴に美麗なり。此大王は原山東の人にて、姓は燕、名は順と申し、別號を錦毛虎と云なり。昔日羊馬を賈ふ商人なりしかども、商賣に本錢を失ひ、今此所に跡を留めて、盗賊の頭領をなせり。此時燕順已に酒の醉醒て、廳上に出來り、乃ち椅子の上に坐し、左右の小賊に問て云けるは、汝等彼者は何れの所にて捉へけるにや。小賊等答て云く、某等先に後山に埋伏し、鈎索を地上に引き、人もや來ると待ける處に、果して此者鈎索に鈎て倒れ候故、早速綁めて大王に獻じ奉るなり。燕順これを聞き、汝等が働我背て恩賞を行ふべき間、速に彼兩人の大王をも、同じく此處に邀へ來れ。一人の小賊命を奉つて、廳前を退き良久しくして、大王兩人を邀へ廳上に至りぬ。宋江暗に此兩大王を見るに、左の方に坐したる大王は、身のたけ五尺に滿ずして、兩眼の光は恰も日月のごとくなり。此人は原兩淮の生にして、姓は王、名は英と號す。渠此のごとく身の長矮きゆゑ、人皆矮脚虎と諢名せり。原車家の二

宋江夜係鈎索

家を求んと欲して、此彼を看繞りけれども、只一軒の破敗屋もなかりけり。宋江闇に想ひけるは、若夏の天氣ならば、林の内になりとも歇むべけれ共、今は是仲冬の天氣なれば、風霜甚だ寒し、いかんぞよく、野宿をなさんや、若又虎豹等の獸出ることあらば、遂に一命を害せらるべし、しかじ猶前面に馳て、人家を求んにはとて、東の小路を過り、足に信せて奔走し、約莫一時ばかり馳て、心彌慌て、更に路をも見分たず、一味に走りける處に、忽ち地上に索あるを蹕で跌き倒れければ、銅鈴齊しく響いて、左右より十四五人の小賊ども、叫喊んで走出で、頓て宋江を押へ、高手小手に綁め、早速火把に火を著け、直に山を望んで上りしかば、宋江大いに膽を消し、只呆れたる斗なり。小賊ども遂に宋江を引て、山陣に至りし處に、宋江火光の下に在て四下を見るに、都て皆木棚を用ひて陣を堅固に備へ、其中央には一つの草廳あつて、廳の上には三つの椅子を設けり。後の方には百十餘間の草屋を建列ね、各内には火の光明かなり。小賊等やがて、宋江を柱に捆著け、已に大王に報ずべしと議しける處に、内より一人の小賊出て云けるは、大王は今酒に醉て休み給ひぬれば、先宜しく醉の醒給ふを待て、これを報ずべしとて、衆皆宋江が左右に坐を列ねて、ともに緊しく守りけり。宋江暗に想ひけるは、我只一人の淫婦を殺し、いかんぞ此の如き苦みを被るや、我が一命此處に於て殺されんこそ、運の

汝只顧二龍山を望で進發し、萬里の路事なく早々到著して、魯智深等と共に難を避け災を脱れ、自ら身を全くせんこと専要なり、向後必ず酒癖を改めて、只よく朝廷より御赦免あらんを待請よ、汝又魯智深楊志等をも宜しく諫めて、朝廷に降らすべし、然らば必ず爵禄を受て妻子を安穩ならしめ、尙清名を普天の下に振うて、譽を末代に遺すことあらん、我斯不肖たりといへ共、素より忠心を懐くこと切なり、然れ共未だ寸歩も進むこと能ずして、かくのごとく狼狽あり、汝は原來萬夫不當の豪傑なれば、決然大官をなすことあらん、汝よく我此一言を聞て、心に銘じ、他日の參會を圖るべし。武行者此言を聞て大いに感激し、遂に兩人酒店を出て、路口に至り、武行者覺えず涙を洒ぎ、只戀々と別に忍びず、一向歎息に過りけり。宋江が云く、汝唯宜しく我言を忘れずして、酒癖を改め、自ら謹んで災を免れよ。武行者が云く、長兄もし清風寨に赴き給ひなば、必ず重く尊體を保養し給へ、某肯て長兄の訓を守り申さんとて、遂に別れて二龍山へぞ馳行けり。扨宋江は武行者に別れ、直に清風寨を望んで、東の路より進發し、已に數日馳ける處に、はや前面に一つの高山あり、則ち是を清風山と號す。宋江此山を見るに、勢嶮く樹木稠密にして、其風景凡ならざりしかば、宋江心中にこれを悦び、再三再四顧み行けるに、覺えず紅日西に落て、天色すでに晩しかば、宋江心中大に駭き、急に旅宿歇

と能ず、遂に酒宴を設けて、其日晩に至る迄、觴を飛せて別を惜み、互に依々として深く心中に感歎しぬ。翌日孔太公父子、一套の衣服ならびに一重の直裰を武行者に送り、又彼武行者が包袱纏及び度牒戒刀のものを還し、旅装を調へしめ、又五十兩の銀を宋江に送り、餞の儀を表しければ、宋江堅く辭し、これを受ざりしかども、孔太公父子再三進めて、自ら宋江が包袱の内に入しかば、宋江辭すること能ず、遂にこれを收納けり。已にして宋江武行者は、旅装はや調りしかば、兩人同じく孔太公父子を辭し、門外にいでける處に、孔明孔亮深く別を惜み、直に二十里餘送りて、遂に一別に及びぬ。夫より宋江武行者と共に路を急ぎ、其日は七十里を馳て旅宿に歇み、翌日又早天に打立ち方に五十里許行て、瑞龍鎭と云ふ所に至りけるに、此處に三筋の路ありしかば、宋江先鄕人に問て云く、二龍山と清風寨には何れの路を行ぞや。鄕人答て曰く、二龍山と清風寨には、兩路に分れ行なり。先二龍山へは西の路を望で行給へ、又清風寨には東の路を望んで行給へ。宋江是を聞て乃ち武行者に對して云けるは、賢弟我汝と今日別るべきに、宜しく此處に於て三盃を酌んとて、頓て酒店に入て盃を擧げ互に相勸め、酒已に數遍巡りし處に、武行者が云く、某長兄を送て、幾千道を行ば可ならんや。宋江が云く、何ぞ送るにや及ばん、古の語にも、君を送ること千里、終に須く一別すべしと云ふ事あり、

先我に隨つて同往せんや。武行者が云く、長兄若肯て某を淸風寨に携へ往給はゞ、某が爲には莫大の福なり、然れ共爰に一つの事有て、尊命に從ひがたし、昨日も語りぬるごとく、某此たび犯したる罪は正に九族を亡さるゝに當れり、もし長兄に從ひ彼所に赴き、萬一事漏て官司に活捉るゝことあらば、災必ず花榮長兄に及ぶべし、長兄は某と同死同生の約を誓ひ給ひしことなれば、假令某が爲災を蒙り給ふ共、十分恨み給ふことも有まじけれ共、花榮は又格別の交なければ、もし彼に禍を蒙らしむることあらば、某何を以てかこれに當らん、此ゆゑに此度は、只宜しく意を決して、二龍山に上り、彼に隱れて禍を避け難を脫るべし、若天憐を垂給ひて、朝廷の御赦免をも蒙らば、再び長兄を訪うて、會合致すべし、願くは長兄明らかに是を察し給へ。宋江此言を聞て云けるは、汝若果してかくの如く、朝廷に歸順するの心あらば、天必ず汝を祐け給ふべし、此上は我苦に汝を諫めて、同往せんこと大に不可なり、若互に上の御免を蒙りて身命恙なくんば、再會の期何ぞなからんや、然れ共汝倘若干日此處に滯留して、我と倶に發足せよとて、兩人孔太公が館に二十餘日逗留し、宋江はや發足すべしとて、武行者と共に孔太公父子に別を辭しけれども、父子再三頻に留めて、又四五日延引せしが、宋江決して發足すべしと再四告て、已に旅裝をも調へしかば、孔太公父子苦に留むるこ

○錦毛虎義を以て宋江を釋す

翌日武行者は宋江と同く起て共に中堂に至り、孔明兄弟と座を連ね食を吃し、閑談良久しくして、はや近午の天に至りしかば、孔太公又羊を殺し猪を宰しめ、大いに酒宴を設け、飲酌を催しけり。是日村中の親戚等悉く來て、豪傑の交を賀しければ、宋江此光景を見て、心中斜ならず悅びぬ。既にして酒宴罷りければ、宋江武行者に問て云く、汝は今何れの處に行て身命を安ぜんと思ふや。武行者が云く、昨日已に長兄に語りぬる、彼菜園子張青一封の書簡を修へ、乃ち某を薦て、青州の二龍山寶珠寺魯智深が山陣に送り申す、張青も又家業を止て、後より二龍山に來るべしと約しぬ。宋江が云く、汝若二龍山に往ば、尤身命を立るに足べけれ共、願くは我行く處に來らんや、前日故郷より書簡を寄て云けるは、青風寨の知寨小李廣花榮、我が閻婆惜を殺したることを聞て、每度書簡を寄、再三再四我を請て寨裡に任せしめんと欲する間、宜しく先花榮が請に應むて、彼が懇意をも謝し申せと、老父の方より備細に申越ぬ、殊更清風寨は此處より遠からざれば、頃日既に發足せんと思ひつれども、只天色陰て雨あるべき模樣なるゆゑ、未だ發程せざりしが、必定近日の内孔太公父子を辭し、淸風寨に赴くべき間、汝も

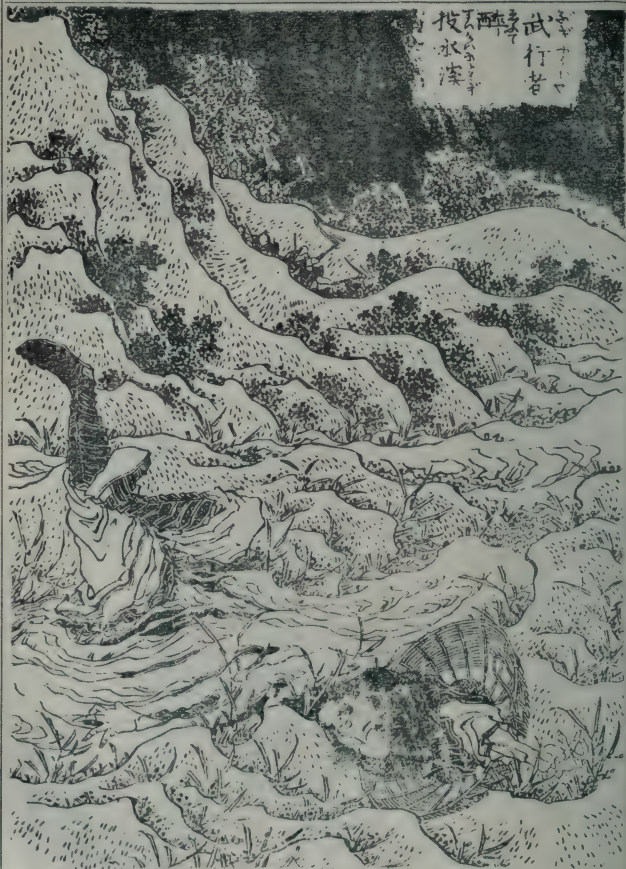
義を結び、其後孟州に至て老管營が男施恩と云ふ者と、また兄弟の約を誓ひ、其比施恩が仇人蔣門神と云ふ者ありけるを、某施恩が爲にこれを打倒し、處を追拂ひければ、蔣門神此恨を雪んと欲して、張團練、張都監等を頼んで、某を害せんと圖りけるゆゑ、某竟に張都監が樓上に忍び入り、此三人の者を斬殺し、猶又張都監が一家中の男女盡く斬盡し、再び難を避て張青が家に入り、商議しける處に、其妻孫二娘が計に依てかくのごとく行者となつて人目を詐き、直に此處に至りぬ、又蜈蚣嶺と云ふ處にて、王道人と云ふ者を、戒刀の試に之を殺しぬとて始終の事詳に語りし處に、孔明孔亮これを聞て大に駭き、忽ち身を飜へして拜をなしければ、武松忙はしく禮を還して云く、先には甚だ不禮をなしぬ、願くはこれを宥し給へ。孔明孔亮が云く、我等兄弟眼有るといへども眞の英雄を識ずして、威風を冒しぬ、望らくは罪を免し給へ。武行者が云く、足下兄弟既に斯我を憐み給ふならば、彼度牒戒刀幷に衣裳等これを失ひ給ふことなかれ。孔明が云く、豪傑必ずこれを憂給ふまじ、我自ら都て收拾めければ、只一色も失ふことあるまじ。武行者これを聞て深く感謝す。此時宋江頓て孔太公を請て、同じく對面なさしめ、互に禮畢て座已に定りしかば、孔太公家人に命じ酒宴を儲けしめ、豐に武行者を欵待けり。其夜は宋江武行者と一所に歇み、一年餘の別離の愁を語りて、共に寸心を慰めけり。

囘て、我は柴進が館に住しけると申せし故、早速滄州へ人を馳せ、我を迎へ給ひぬ、此處は是白虎山と云ふ處にて、此館は則孔太公の館なり、向に汝と爭ひ鬪ひたる人は、孔太公の二男なり、彼人常に短氣なるに依て、動不動人と爭を惹出すこと多し、乃ち其名を獨火星孔亮と號す、又彼一人の大漢子は孔太公の嫡男毛頭星孔明と云ふ人なり、此兄弟鎗棒を好んで學ぶゆゑ、我略是を指南せり、我此處に在る事已に半年餘りなり、我今又急に淸風寨に赴かんと欲す、我柴進が館に在し時、諸人の傳へ云けるを聞ける、に汝向に景陽岡の上にて猛虎を殺し、乃陽谷縣に留りて都頭の職をなせしと、其後又人の風說に、西門慶とやらんを殺し入牢せしと、專ら沙汰有けるが、知らず何れの處に流されしぞや、又いかなる故にて、斯頭陀の形に姿を變へ、今此處には來りしぞ。武行者答て、某嚮に柴大官人の館にて、長兄に別れてより、後直に景陽岡の上に至りて、大虎を殺しければ、村中の者擧て是を悅び、某を吹噓して、陽谷縣に送りぬる處に、知縣某を擧て、都頭の職を授けぬ、其後阿嫂西門慶と私情を通じ、兄武大郎を毒殺せしゆゑ、某此兩人の男女を殺し、兄の仇を報じ、知縣に斯と訟へければ、本府に送て決斷を求めし處に、陳府尹殊に某を憐み、死罪を免し流罪に決斷し、二十杖策つて孟州に流され、某已に孟州の路十字坡と云ふ處にて、張靑孫二娘と云ふ夫婦の者に遇て、八拜の交をなし、兄弟の

に、疾く我が爲にこれを助んや。兄弟の者大に驚きて云く、這行者いかんぞ、却つて長兄の義弟なるぞ。那漢子が云く、我常に汝等に語りぬる、彼景陽岡にて虎を殺せし武松と云は、則此行者がことなり、只知らずいかなるゆゑにて、斯髪を剪み頭陀の形とはなりけるぞや。兄弟の者これを聞て、慌て忙き絆を解せ、衣服を著さしめ、乃延て草堂の内に入りければ、武行者急に彼漢子を拜せんとせし處に、彼漢子これを扶け起して云けるは、賢弟とは敬ふと定て酒の醉いまだ醒まじきに、先宜しく安坐して談話せよ、何ぞ必しも拜をなすに及ばんや。武行者益大に悦び、座已に定りければ、酒の醉も今ははや全く醒にけり。扨彼武行者を助けたる男は別人にあらず、乃ち是鄆城縣の人及時雨宋公明なり。武行者先問て云く、長兄は、向に柴大官人の館に居給ひけるが、何ゆゑ又此處には至り給ひしぞ、疑らくは是夢中の參會にてはあらざるや。宋公明が云く、我汝と柴大官人が館にて別れて以後、柴進が家に半年許住しける處に、家内の老父がこと、旦暮心に懸り、乃ち弟宋淸を再び故鄕に回して老父を問はしめ、其後鄆城縣の消息を聞けるに、官府のことは、彼朱同雷橫兩都頭が働によつて宜しく相濟み、所々方々に文書を下して、我を捉へんとせしことも、遂に漸々怠りしとなり、このゆゑに我今頗る心を安んぜり、扨此家の主孔太公、時々鄆城縣に人を馳せ、我ことを問給ひし故、宋淸が

へ溪の内に投入て、大に身體を傷はしめぬ、よつて兄弟人數を催し、尋ね行し處に、這賊行者自ら溪の内に陷り、寒水に凍えて在けるを、遂に捉て拖回りぬ、這賊をよくみるに、必定眞の出家にあらず、已に面上にも金印の刺あり、この故に頭陀となり、髪を垂て此金印を遮り藏すと覺えたり、此賊定めて罪を避逃出たる囚徒にてあるべし、宜しく今拷問して、其來歷を聞屆け、速に官府に訴へ申べし。舍弟の大漢子が云く、這賊我が身體を打破て、斯苦みを受しむること、恨尤大いなり、若これを官府に送て、人の手に殺させては、我が恨いかんぞ全く雪ぐことあらん、只此處にて三百鞭を與へて終に打殺し、一把の火を用て屍を燒捨なば、我方に能此恨を絕すべし、と未だ云も罷らずして、又鞭搶取て、已に打んとせし處に、又彼内より出たる漢子が云けるは、汝先打つ事を休よ、我試に彼を一見せんとて、近々と向ひ前みけるに、武行者も酒の醉漸々醒て、心中に此ことを曉し、只眼を閉少しも怕るゝけしきなかりけり。彼漢子已に武行者が前に至て、先肩の上の棒瘡を見て云けるは、此棒瘡は頃日打れたる痕なりとて、叉手を以て武行者が髮を揭げ暫く面を見て、忽ち大に驚きて云けるは、這はこれ我が義弟にてはあらずや。武行者此言を聞て、眼を開き、同じく彼漢子を看て云けるは、斯宣ふは誠に我が義兄にてましますよな。彼漢子又忙しく兄弟の者に向て云けるは、這行者は我が義弟なる

はしく後を慕うて追かけ、同じく此處に至りて尋ねめぐり、忽ち舍兄に遇ければ、舍兄が云く、向に汝を打たる行者は、溪の内に在る頭陀ならんとて、乃ち指ざしして見せければ、彼打れたる漢子これを見て云けるは、かの頭陀こそわが仇人なり、速にこれを捕ふべしとて、諸の人數を一所に集めて、溪邊に馳行し處に、舍兄の大漢子が云く、先彼を私宅に引回て痛く箠たんに、汝等早く手を下して、活捉にせよ、と下知しければ、三四十人の漢子共、一齊に吽と溪の内に跳入て、武行者を捉へけるに、武行者は酒に醉たるのみならず、溪水に身を浸して凍しかば、少しも動き働らくこと能ず、遂に擒となりにけり。諸の漢子共武行者を捉捕へ、横に拖倒に拽て、岸の上に登り、尚中央に取圍んで、一間の大家ある所に引回りぬ。武行者は前後不覺の體なりしかども、微し醉眼を開て此處をみるに、家の左右は都て高墻粉壁あり。周廻は盡く垂柳喬松相交り、密々に茂りぬ。諸の漢子共遂に武行者を拖立内に入り、頓て衣裳を剝て戒刀を奪ひ、已に高手小手に綁めて大柳樹のもとに捆り著け、藤の鞭を以て、四五十鞭打ぬる所に、内より一人の漢子走り出て問けるは、汝兄弟何者を捕へて、斯策つや。兄弟兩人これを聞忙はしく慇懃に答て云けるは、長兄敬ふこれを聞給へ、今日弟、三四人の家僕を從へ、乃ち前面の酒店に在て、酒を酌んとせし處に、這賊行者酒に醉て事を鬧し、弟を散々に打、剩

武行者酔て投水渓

行者が後に纏ひ來りて吠えしかば、武行者大いに怒り、暗にかの戒刀を拔て、只一砍にと追駈しに、彼犬溪邊を繞て、尚頻に吠える處に、武行者遂に追著て唯一刀にと躍り起て斬ぬるに、彼犬これを見て、急に傍に跳去ければ、武行者早くも空を砍り、其力を用ひしこと、甚だ猛き故にや、覺ず石に跌いて溪の内に眞倒に落入けり。此時冬の天氣にて、溪水已に涸れ、僅一二尺の水にはみたざりしかども、水中殊更冷にして、武行者忽ち渾身こゞえ、急に上ること能はず、又良久しく水面に身を浸し、漸々岸に手をかけ扒上りし處に、彼戒刀を水底に落しければ、武行者忙はしく頭を低て水底を望み、彼戒刀をすくひ取んとしけれ共、一は則酒にゑひ、二は則水にこゞえ、全身すべて痲れたるがごとし、よつて足のふみども堅からず、再び身を翻して倒に落入けり。然る處に傍のへいの邊より一夥の人はせきたり、當先に一人の大漢子進みけるが、其裝束極めて嚴にして、手には一條の棒を拿ぬ。其ほかのをとこ共は、みな下人と見えて、盡く左右に從ひ、各手には棒を提げて、たゞちに溪邊に至り、其内一人の僕たにを指ざして云けるは、彼賊行者こそ、さかやにて不禮をなせしものなれ、扨今此處に馳來りぬる此大をとこは、先に武行者にうたれたる大をとこが兄なり。先に打れたる彼大をとこは、別に人數を催し、直に酒店に馳て、武行者を尋ねけれ共、はや武行者馳出たると聞き、忙

を交へんと欲ふや、汝若力量あらば、我肯て汝が對手にならんとて、已に門外に出ければ、武行者も相續いて、門より外に走り出で、我豈汝を怕れんや、と拳をあげ打つてかゝる。彼大漢子武行者が猛勢を見て、卒爾に相迎はず、乃ち拳を硬めて十歩許引退き、其便機を窺て控へける處に、武行者電のごとく跳入り、遂に右の手を伸して、彼大漢子が肩骨を、碎る斗に捏りければ、彼大漢子力を用ひて、武行者を踢倒さんとせしかども、いかんぞよく武行者が勇力に敵することを得んや、漸々力衰へて働くこと能はざりければ、武行者頓て彼男を扯よせ、唯一投に地上に投著けるに、恰も孩子に戲るゝがごとくなり。彼隨ひ來りし三四個の人、都て此體を見て大に恐れ、敢て一人も助んとする者なかりけり。武行者彼大漢子を踏付て、鐵石のごとき拳を擧げ、約莫二三十拳、一連に打了り、遂に酒店の前の溪の内に投入しかば、彼三個の人これを見て大いに驚き、各急に溪の内に馳入り、かの大漢子を扶け上げ、直に南を望んで囘りけり。酒店の主は、此時少しく人心地つき、這體を見ていよ〳〵肝を消し、忙はしく後堂に匍匐行て躱れ居けり。武行者獨自ら哈々と大いに咲ひ、再び酒店に入て彼酒肴を擅に賞翫し、暫くの間に盡くこれを吃し畢り、彼店を跳出溪に沿て走り行き、北風に吹れ、忽ち醉ます〳〵大に發しけり。既にして四五里許馳ける處に、傍の墻の内より一疋の黃犬走り出で、只顧武

さんや、必ずこれを怒り給ふことなかれ。武行者は心中に只顧彼酒肴を慕ひければ、主がいふことを耳にも聞入れず、益大いに怒き、汝焉ぞよくかゝる套話を以て我を欺くことを得んや、早く美酒佳肴を我前にも携へ來れ。主がいはく、我曾て汝のごとき出家を見ず、汝何ゆゑ再三非道をいふや。武行者が云く、汝老爺（在家の人敬つて云ふことば）に向て非道と云は是何の無禮ぞや。主が云く、汝は先出家の形と見えけるに、いかんぞ在家の詞を用ひ自ら老爺と稱するや、老爺は出家の稱する言にあらず、汝は是實に出家にもあらず、在家にもあらず、不三不四の徒なり。武行者此言を聞て大に怒り、忽ち拳を捏て主が面をいたく打ければ、主勇力に打れて眼を眩し、直に彼武行者が對面に坐したる大漢子が肩に礙り倒れける處に、その疼甚だしく、起ること叶ず。大漢子此光景を看て大いに怒り、忙はしく躍り起ち、武行者を罵つて云く、汝賊頭陀、何ぞ甚だ無禮をなし、且妄に手足を擧げて主を打しぞ、豈是を出家といふべきや、汝必ず俗心を起すことなかれ。武行者冷咲て云く、我主を打んに、何の事か汝に干らん。那大漢子益々怒て云く、我好意を以て汝を諫るに、汝却て欺くはいかん、必ずしも我恚を惹出して、後悔すること勿れ。武行者これを聞て、虎の怒をなし、忽ち走り出て大いに呼つて云けるは、汝は何奴なれば、閑事に干つて、自ら禍を招くや。彼大漢子大に咲つて云く、汝賊頭陀、我と拳

者と席を對して坐しければ、彼隨ひ來りたる三四個の人は、すべて傍に列座せり。此時主一樽の美酒を携へ出て、これを酌ければ、馥々酒の香忽ち風に從れ、武行者が鼻を襲うて過りけり。武行者此香を齅て大いに羨み、心中に且六七分主を怨みけるに、主又四つの大盤に雞と肉とを入て拿來り、乃ち彼大漢子が前にこれを置き、彼酌出したる酒を溫めて來らんとて、已に厨の邊に入ければ、武行者は己が前の一壺の白酒と一盤の熟菜とのみにして、淡薄不興なるを見て大いに怒り、遂に拳を捏て器を盡く打碎き、恰も奔雷のごとく、大音聲に叱て云けるは、汝何ぞ客を欺くこと、直に此のごときや、我原來酒錢を與へずして、空しく汝が酒を飲にあらず、汝小人我を何等の者と思ふぞや。主此を見て忙しく走出て云く、和尚何ゆゑ斯忿り給ふや、只宜く靜り給へ、若酒を求め給はんとのことならば、怒を息てこれを命じ給へ。武行者聞もあへず、怒る眼を瞬開て大いに罵つて云く、汝小人いかんぞかく虛言をなすや、汝さきには已に白酒のみ有て肴なきと云けるに、今又美酒佳肴を以て彼客に賣與へて、我に售ざるはいかん、我も同じく汝に價を償ふなり、汝客を擇んで諂ふこと、何ぞ一列ならざるや。主が云く、和尚誤つて我を恨み給ふな、彼酒と肴とは原我が家にある所にあらず、是乃かの太郎自ら携へ給ひし酒肴にて、只我が店を借りて酒を酌給ふのみ、我肯て客を選て賈をな

時先二升の酒を盪でこれを盪め、乃ち大碗に釃で武行者に與へ、又一碟の熟菜を具へて肴とす。武行者時を移さず二升の酒を酌乾し、再び又二升の酒を求めければ、重て二升の酒を大碗に斟で出しける處に、武行者只顧これを飲ぬ。又向に岡を過りし時、もはや五六分の酒を吃しけるに、今又四升の酒を飲、且寒風に吹れしかば、醉大に發し、再三呼つて云けるは、主實に肴を賣盡したるならば、只好汝等が自家に用ん肉を少しく我に分ち與へよ、我重く價を償ふべし。主打笑て、我いまだ嘗てかゝる出家を見ず、いかんぞ酒肉をのみ一向用んと欲ふや、若又自家に用る肉あらば、老早出して和尚に與ふべけれ共、只恨らくは半點もこれなし、和尚再三物好し給はんより、速に盃を收め、飲過給へ。武行者が云く、我價を償はずして、汝が酒食を求るにあらず、汝何ぞかくのごときことをいふや、汝が肉なきと云も信じがたし、宜しく肉を以て我に賣れとて、正に言を爭うて居ける處に、門外より一人の大漢子三四箇の人を引て、店内に馳入しかば、武行者暗に此人を見るに、頭には紅巾を戴き、身には皂衣を著し、面丸く耳大く脣濶く口方なり。身の丈は七尺餘高にして、年の比二十四五歳と見え、相貌堂々として威風凛々たり。此人已に店の内に入ければ、主滿面に咲を含んで相迎ふ。彼大漢子が云く、我方々を奔走して甚だ疲れたるに、最前の酒と肴をはやく拿來れ、われ快く一盃を酌んとて、遂に武行

中に入し處に、彼女頓て酒食を具て、慇懃に欵待ぬ。武行者大盞を乞取て飽飲し、酒已に盡ければ、武行者已に火を放て庵を燒拂ふ。此時女一包の金子を武行者に獻じて謝しければ、武行者辭していはく、我汝が金を受る者にあらず、汝無用の心を費さんより、汝が懐中に納て、私の私用に備へよ、且速に此を立去れ。彼女大きに悦んで拜謝し、遂に自ら嶺を下て回りけり。武行者は彼兩人が屍首を火中に投じて是を燒弃て、其夜月の明かなるに乘じ、嶺を下り、直に青州を志して進み、約莫路を往くこと十餘日、若干の州郡村鄉を過りけるに、都て武行者が形を寫して、賞錢とともに路口に掛あり、專ら緊しく尋ね覓るといへども、武行者今の體髮を剪て姿を變ければ、敢て一人も咎る者なく、時はや十一月の空に移り、寒氣烈しく勝かたかりしかば、武行者路すがら、多く酒肉を求て食しけれ共、更に寒を防ぐに足ざりけり。此日武行者一つの岡を上つて、前向を望みけるに、大いなる高山あつて、直に九霄に聳え、十分に險阻なり。武行者已に岡を下つて、纔に三五里許馳ける處に、一軒の酒店あり、門前にはひとつの溪あり、屋のうしろは都て顚石亂山雲を接へて峥嵘し。武行者逕に酒店に入り呼りけるは、主先我に二升の酒を賣與へよ、若肉あらば添來れ。主答て、酒はあれ共都て白酒なり、肉は賣盡しさらにこれなし。武行者がいはく、白酒は却て味美ならんに、早く溫て拿來れ。主此

しかども、若彼竟に憤りて奴を殺さば、父母の仇を報ずる者あるまじきを悲み、先曲て彼に従ひぬ、若其便機を得なば、いかん共して仇を報じ恨を雪がんとのみ圖りき、彼道童も原他所より掠來りし者なり、此嶺は乃ち蜈蚣嶺と申し、彼先生此嶺のかくのごとく風水好を見て、己が號をも自ら稱して、飛天蜈蚣王道人と申ぬ。武行者又問て云く、汝なほ親類有て、常にかの先生を害し、仇を報ぜんと圖る者ありや。彼女答ていはく、我が親類村中に猶數家有といへ共、都て賤き農夫なれば、第一には彼先生が勢を犯して、爭ふこと能はず、第二には遠く州裡に馳て、官府に訟ふこと能ず、衆皆徒に臍を噛のみなり。武行者が云く、彼先生、庵中に金銀の貯ありや。女が云く、彼向に我家の財寶を奪ひ取て、今已に一二百の黄金あり。武行者が云く、金子あらば汝早く取拾よ、我今火を放て、此庵を燒拂ふべし。彼女がいはく、和尚は酒肉をも食し給ふや。武行者云く、若酒肉あらば速に我に與へよ、我是を食せん。彼女がいはく、已にかくのごとくんば、宜しく庵中に入給へ。武行者がいはく、庵中に猶人あつて、暗に我を害せんと圖るにはあらずや。彼女がいはく、和尚已にかの先生がごとき、萬夫不當の勇士だにも、殺し給ひぬる豪傑なれば、假令庵中に千萬の人伏し置とも、何ぞ怕れ給はん、庵中には只一個の人もなく、必ず疑なく入たまへ、とて導きければ、武行者則彼女に從て、庵

三編　巻之二十九

○武行者醉て孔亮を打つ

武行者は道童と先生を斬り、庵の門に立ち大音に呼りけるは、庵の内に隱れ在る女早く出來れ、我誓て女は殺さじ、只汝に彼先生が來歷を問ん。彼女是を聞て忙しく走り出で、則地上に倒れて拜伏す。武行者これを見て、汝宜しく拜を休よ、我先汝に問ん、こゝは如何なる所にて、又彼先生は汝が爲には何者ぞや、汝實にこれを告よ。彼女淚を流して云けるは、奴はこれ這嶺の下に居住する、張太公と云ふ者が娘なり、此庵は奴が先祖の墓を安置したる庵なり、彼先生はもと何國の者かは知らねども、向に我が家に來て一宿し、その夜我が父母に對して、善陰陽を習ひ能風水を識たりと語りける故、我が父母不幸にして、彼に墓地の風水を觀せしめ、吉凶を占はせんと欲し、數日家に留て此墓の風水を觀せ、又數日留ける處に、彼一日奴を見て、再三戀慕ひ、二三ヶ月奴が家に逗留して囘らざりしゆゑ、父母是を怒りしかば、彼却て大に恚り、遂に父母と哥々嫂等こと〴〵く殺し、奴を引て此庵に居住せり、我決して彼が心に從ふまじく思ひ

捉らるゝ共、幾千の人をも蹴殺すばかり、足のはたらく剛力にて、凡々の四人に牽かれ、張青が宅に至るもをめ〳〵と云甲斐なし、此張青が家には一度來て逗留し、人を宰る所迄も見置たるに、何國へ引來られたるか辨へざる體も不審し、又行者と姿を變ては、別て萬端を謹愼み柔和忍辱第一なる旨張青も諫め、其身も納得し、立別れたる間もなく蜈蚣嶺にて、先生と道童を斬る、是過の高名にて殺して、功有にもせよ、其身に干らぬ事なれば、世を忍び落行く頭陀、慰に人を斬るとは、張青が深切を無にするも是又英雄豪傑の志にあらずと。愚辨じて云く、水滸傳の書は支那俗間の稗史なれば、理論を容に足ず、奇談に文華を加へ、畫に虛事あるは、和漢一つなり、譬ば今日本の兒女の弄ぶ草双紙、俗間に讀む繪入のよみ本などを見て、其事の虛實を議論し、旨趣を辨鑿する者はいまだあらず、二編目の首卷緒言に演るごとく、狂言綺語は穿つに暨ぶべからず。

きことなれ共、兄の喪に遇て官府を憚らず、知縣の前に進み、兄の死骨を懷にし廳前に出で、證見なりとて知縣に見せ、或は奸夫淫婦を斬り其首を刎ね髪を結合せ、提げ來て堦下に置き、公を穢すを憚らず、孟州へ流罪の終道、十字坡にて張青が家に逗留し、兄弟の約を結ぶなど、保養鬱散の旅のごとし、此時張青が談話に、我々夫婦の營旅人を欺き殺し、衣類を剝取り、殺せし人肉を牛肉と僞り肉包を製し賣物とす、店に入來れども殺さゞるもの三つあり、僧侶を殺さず、娼妓の類を殺さず、流人を殺さずと、而して武松多く人を殺し、張青が宅にて行者の模樣に姿を變へ、寶珠寺へ落行に臨で、孫二娘が詞に、二年以前一人の頭陀店に入來たる故、蒙汗藥の酒を用ひて殺し、其肉は饅頭に做へ、衣類と携へ來りし品は取置し、其直裰度牒珠數戒刀の類を武松に與へ、旅裝をなすとありては、僧を殺さずとの言は、出傍題の虛言と聞ゆ。又小事をあぐれば、張都監が八月十五夜、月の宴をなし、武松を捉へん計に、凳を正中に出し置き、暗きゆゑ武松跌き倒れたるを、大勢にて取押へ綁るとあれ共、此比の月は曉迄は傾かず、物に躓く程の闇夜にあらず、又比類なき豪傑にて、用捨する殺威棒を、好で棄れんことを望む程にて、此時無實の罪に陷り、自ら覺なき科を引請、白狀して棒を赦されんと乞ふも、豪傑の魂ならず、又睡て生

ぶにも及ばず、頭は前に落ら、體は傍に倒れけり。彼先生内よりこれを見て、則武行者を大いに罵り呼つて云けるは、汝賊徒、いかんぞ我道童を殺したるやとて、遂に利劍を轉し、武行者に斬つてかゝりしかば、武行者これを見て大いに打わらひ、とても汝を饒すまじきに、汝劍を輪して來るは、自ら死を急ぐならんと、戒刀を揮て相迎へ、互に猛威を勵し刀を交へ、戰すでに十餘合に及し處に、武行者詐りて五六歩許退きしかば、彼先生勢に乘じて斬入しに、武行者閃りと避け、頓て戒刀を擧げ忽ち先生が首を刎たりける。此先生何等の人ぞや、次の巻にて知るべし。

此巻に云賞錢とは屬託也。よむには音便にて、そつたくとよむべし。たとへば放火人を捉へ來らば、褒美として幾干の銀を取らすべしと、許多の人民に廣く知らしめん爲、市中人足繁き所に、札を建置くなど則是也。褒美に遣す銀にて、三千貫文の錢を與へんとなれば、賞錢の文字を、そくたくと讀せたる、此類義訓と云ものなり。道童とは道士の使童なり。或人論じて云く、此書二編目に宋江閻婆惜との事に、閻老婆唐牛兒の諍論あり、此編潘金蓮西門慶との事に、王婆鄆哥の諍論あり、事異なれども趣向は一つなり、作者別に工夫もなかりしにや。又武松が傳を論じて、兄武大郎が仇を復するは、武松が身に係りては尤重

ば、乃ち月の明かなるに乘じて馳上り、已に嶺上に至て、四方を顧るに、誠に嶮しき高嶺なり。武行者遂に麓を望んで、下り往く處に、林の内に忽ち人の笑ふ聲ありければ、武行者是を聞て想道く、恠や此ごとき蕩々たる高嶺に、何者有てかく笑を催すや、必定蹺蹊あらんとて、已に林の邊に至て、此處を伺ひ見るに、原此林一つの墓に添て一字の草庵あり、庵の窓より、兩人の男女露れしかば、武行者何者なるやと近く前んでこれを見るに、一人の先生一人の女を携へて月を賞し、戲を弄して咲ひけり。武行者是を見て、心中甚だ忿を發し、此庵はもと淸淨潔白の地なるべきに、彼輩何ぞかくの如く穢をなすや、我先彼等を殺して慰まんとて、則彼戒刀を引拔き手に持ち、自ら月光の下に透し、戒刀を見て云けるは、汝我が手に來り、未だ快き事に遇ず、我今試に彼賊先生を斬害り、汝を祭るべしとて、再び先鞘の内に納め、彼直裰の袖を把て高く卷上げ、直に庵の前に至り門を敲きければ、彼先生此響を聞て、忙しく窓の戸を闔して躲れけり。武行者また一つの石を拾ひ取て、頻に門を敲きしかば、内より一人の道童走り出て、門を開き、則ち武行者を罵つていはく、汝何奴なれば、いかんぞ半夜三更に門を敲て我が庵を閙がしむるや。武行者眼を睜開き、大いに怒り吼つて云けるは、汝賊道童敢て我を欺くや、我先汝を斬て刀を祭らんと、遂に戒刀を揮て道童が頸を刎ければ、只一聲阿と喊

武松於蜈蚣嶺
斬賊道人

宴を設けて武松を欵待し、又餞として一錠の銀を武松に送り、盃已に収りければ、武松已に其日旅装を調へて、包袱蘊を背に負ひ、已に張青夫婦に辭して、別を告し處に、孫二娘彼度牒を取出して武松に與へ、互に依々戀々として、暗に涙を含みけり。張青又再三武松に示して云けるは、賢弟道中に出給ひなば、自ら心を用ひ意を留て謹愼給へ、必ず大酒に及んで、大事を誤給ふことなかれ、殊に出家の行跡は慈悲を本として、柔和忍辱なるべきものなれば、縱ひ何等の忿るべきことありとも、能是を忍び、假にも人と爭をなし給ふことなかれ、已に二龍山に至り給ひなば、必ず早々書簡を寄て消息を通じ給へ、我卽今此處に在て營をなすといへども、是また長久の計にあらず、頓て家業を止て、我等夫婦も共に二龍山に上り、再び都頭と臂を交へて樂まん間、宜しく魯智深楊志に言を傳へ給へ。武松是を聞て云けるは、我自ら肯て行跡を謹愼べし、長兄必ずこれを憂へ給ふことなかれ、且早々家業を止て、速に二龍山に上り給へ、我專ら長兄嫂々の來臨を俟べしとて、遂に別れて門外に馳出ければ、張青夫婦も共に走り出て遙に送りけり。扨武行者は張青夫婦に辭して、大樹十字坡を離れ、直に二龍山を望んで進發す。此時十月の天氣にて、日甚だ短く、只一瞬間に晩に向々とす。武行者已に五十里ばかり往し處に、はや紅日沈んで月色漸々明かなり。武行者前面を見るに、一つの高嶺ありしか

張青夫婦
換武松
形容

豈希有の寶刀にあらずや、叔々既に難を遁んとならば、必ず髪を剪んで頭陀の形になり給ひ、宜しく行者の模樣に打扮て、髪を垂て以て面上の金印を遮り藏し給へ、倘且此度牒を携へて、一生の護身とし給へ、是則前世の因縁なり、ことにかの頭陀が年甲相貌叔々と等しかりければ、其法名も又度牒の表を見給ひて、彼頭陀が法名を用ひ給へ、是尤一生全き計ならずや。張青是を聞て、忽ち掌を鼓て云けるは、我妻が計何の神妙か是に過ん、我却てこれを忘れたり、只知らず、都頭肯て頭陀となり給ふべきや。武松が云く、是何の嫌ふ所かあらん、唯恨らくは我形出家の模樣に應ずまじ。張青が云く、我まづ都頭の爲に装を調へて試ん、我が妻早く直裰等を拿來れ。此時孫二娘房間の内より、彼包袱藴を取出し、許多の衣裳を武松に與へて著せしめ、乃ち髪を剪みて金印の上に垂ければ、果して金印少しも見えざりけり。武松大いに喜んで、自ら直裰を把り衣裳の上に著し、又珠數を把て頸にかけ、彼戒刀を直裰の下に帶し、装已に整ほりしかば、孫二娘再三讃美して云けるは、誠に有がたき僧形なり、是を以て前世の因縁を知り給へ。此時武松自ら鏡に照して己が形を見、忽ち絶倒て、扨々誠に好き一箇の行者かな、と云ければ、張青も同じく呵々と打笑て云けるは、僧形旁善智識かなと讃嘆しけり。武松は事已に危急なるを見て、はや發足すべし、と告しかば、張青夫婦も然りと同じ、乃ち酒

速に語り給へ。孫二娘が云く、今官府より叔々の形を寫して所々に懸け、乃ち三千貫の賞錢を出し、偏く村々里々に觸て、叔々を搜さしむ、叔々の面には金印の刺尤明々たり、若前面に至り給ひなば、行人必ず叔々を識認て捉ふべし、其時奚ぞよく抵賴給はんや、此ゆゑに殆ど難き處ありとは云しなり。張靑これを聞呵々と打笑ひて云く、面上の金印には、兩箇の膏藥を貼ば、人の眼目を誑くに足ん、何ぞ金印のみを怕れて、かくのごとく言を莫大に說や。孫二娘これを聞て同じく打咲て云く、丈夫の言は獨自らのみ聰明として、天下の人は皆癡愚とするに似たり、豈よく這等の淺々しき計を以て、眼明らかなる下官等を誑くに足んや、我却て一つの計あり、只怕らくは叔々これに從ひ給ふまじきことを。武松が云く、我今一味に災を避け、難を脫れんことをのみ欲ふ、如何ぞ敢て良計に背んや、願くは嫂々速に計を示し給へ。孫二娘大に笑て云く、叔々必ず我計を聞て怪しみ給ふことなかれ、偖計といふはいかんとなれば、二年以前に、一人の頭陀、此處を過りて我店に立倚しゆゑ、彼蒙汗藥を用て、これを殺し、乃ち包袱藴等を奪取て、其肉は常のごとく肉包に做へぬ、其時彼頭陀が著せし一領の衣服、一領の直裰今日本に十徳と云もの竝に一本の度牒、一連の珠數、一腰の戒刀あり、這刀いかなる名作なる故にや、又多く人を斬し故にや、毎夜三更の時に至りて、自ら鳴嘯の響あり、

近に振ひ、青州府の官軍等誰か彼兩人を怕れざらんや、都頭たゞ彼山陣に入り給ひなば、終久禍を免れ給ひて、身命を安んずるに足ぬべし、若他所に趣きなば、久しうして後必ず誤あるべし、魯智深常に書簡を寄て、我を山陣に招けども、我斯里を離るゝに忍びずして、未だ其招に應ぜず、我今一通の書簡を修へて、具しく都頭の武藝を吹噓し遣さんに、かれ何ぞ都頭を留めざらんや、都頭もし彼所にて頭領をなし給はゞ、縱ひ官府より、千軍萬馬を發して寄來る共、豈よく都頭を捕ることを得んや、宜しく意を決して、彼所に趣き給へ。武松が云く、我久しく當世の清からざるを恨みて、深山幽谷にも身を隱さんと欲すること、旦暮頻なりといへども、未だ時至らずして、今日に推移りぬ、幸ひ這次人を殺して事已に發りければ、宜しく此便機に乘じて二龍山に登り、魯智深等と豪傑をなさば、浮世の樂何事か是にしかん、長兄宜しく書簡を修へ、我を勸遣し給へ、我今日の内に發足すべし。張青大に悦び、卽時に一封の書札を修へて、武松が始終の來歷一々詳に相述べ、頓て武松にこれを附し、大に酒食を具へ、別れの酒宴を催しけり。此時母夜叉孫二娘張青に對して云けるは、丈夫いかんぞ這等の體にて、叔々を送り給はんや、若叔々此體にて往給はゞ、必定前面に於て、活捉れ給ふべし。武松が云く、嫂々の云給ふ所、頗る曉しがたし、此體にて往ば必定活捉れんとは如何ぞや、若所存あらば、

れんことを恐れ、多く金銀を諸役人に送て、武松を走らしめんことをぞ頼みける。さて府尹は武松は城下に在らざる事を聞て、亦復武松が相貌模樣を寫して、三千貫の賞錢をかけ、諸府に文書を下し、專ら嚴に武松を尋覓めけり。武松は張青が家に四五日逗留して在ける處に、孟州の官府より、諸方に文書を下して三千貫の賞錢をかけ、殊更緊しく在々所々に至る迄、下官等多く來て、武松を尋ね捜すよし聞えければ、張青武松に對して云けるは、我聊か事を怕れて申にはあらざれ共、我今都頭を留がたきこと出來りぬ、頃日孟州府の文書、諸州諸縣に到て、村々里々千門萬戸一々嚴に捜し、緊しく都頭を求るとなり、若後日縣州の下官等此所に至て都頭を捜し出すことあらば、一縱ひ幾千後悔すとも、何の益かあらん、我等夫婦都頭を送つて身を安んじ、命を立しめんずる所あり、嚮にも已に都頭をすゝめ、送らんと欲せしか共、都頭肯て往給はざりしが、今事危急に及しかば、都頭曲てかの地に往給はんや。武松が云く、某も此兩日定て事發んと察し、何れの方になり共、落行んとこそ計ぬれ共、普天の下身を容ん所なし、若長兄我を送て身命を安んぜしめ給ふ所あらば、宜しく急に送り給へ、我いかんぞ嫌ふことあらんや。張青が云く、我々向にも語し如く、青州府の支配地、二龍山寶珠寺に花和尚魯智深、青面獸楊志と共に山陣を守つて、強盜の頭領をなし、今專ら家を打ち舍を劫うて、猛威を遠

て追々に馳來り、各この光景を見て、只呆れたる許なり。已にして諸人商議を定めて、衆皆孟州の官府に至て、府尹に斯と訴へければ、府尹是を聞て大に驚き、早速人を馳て屍を查點させ、又役人等に命じて、武松が形を寫さしめ、急に尋出さんと計りけり。斯る處に彼張都監が家に來て查點をなしたる者共、已に囘て府尹に告げ一々詳に語りし中に、白壁に、血を以て書たる八字を寫して府尹に呈す。府尹取上てみれば、殺レ人者打レ虎武松也と云ふ字なるゆゑ、府尹益々心を驚かし、忙はしく人數を催し、緝捕の官に與へ、先偏僻の地を搜させけり。翌日又飛雲浦の保正諸々の鄕人を引て、孟州城の官府に至り、訟へけるは、何者の所爲なるにや、四人の漢子を斬殺し水中に捨置ぬ、しかも血の痕此彼に殘れり、是に依て早々訟へ申すなり。府尹是を聞て又一驚を加へ、その日人を飛雲浦に遣して、四人の屍を撈ひあげさせ、乃ちこれを查點けるに、其内兩人は武松を押監したる下官なり。其外兩人の屍首も、各々親類有て姓名住居分明なり。府尹役人等と商議して云けるは、武松數十人の命を害したること、其罪九族を滅すに當れり、尋常の公事とは等しからず、先宜しく城下の人家を搜すべき間、城門を闔して內外人の出入を留めよとて、一連に三日城門を閉ぢ、東西より南北に到り、只一字も遺さず、專ら緊く深閨幽室前庭後園都て搜さずと云ふ處なし。此とき施恩父子は此事を聞て、武松が捉は

我家に歸らんと圖りしなり、然るに都頭今日禍を蒙り給ひて、此邊に至り給ふこと、尤是奇異の至、都頭もし睡を醒し居給ふ時ならば、彼等四人が働にて、いかんぞよく捉ふることあらん、我等夫婦豫め都頭の災難を蒙り給ひしを知りしは、すべて是夢の凶に依てなり、今日上天良緣を假給ひて、再び恙なく遇ぬること、互の福何事かこれにしかんや。此時又孫二娘が云く、都頭かくのごとく辛苦を請給ひぬることとなれば、定めて心身大いに疲れ給はんに、先宜しく客室に入て歇み給へ、猶明日商議すべしとて、夫婦同じく武松を延て客室に至り、其夜は各歇みけり。

○武行者夜蜈蚣嶺に走る

偖孟州城の張都監が館には、屍許多四方に横はり、血は流れて池をなしぬ。家人の内兩三人床の下に躱れ命を脱れし輩、直に五更の時を得て、門外に走り出で、大に呼はつて云けるは、昨夜武松と云者館門の內に踏こんで、相公夫人を始、ならびに一家の男女盡く斬殺したるに、隣家の衆中早く集り給へと、頻に呼はりしかば、隣家此聲を聞て、大に駭きしかども、敢て一人も出來る者あらず、盡くみな曉に至て馳來りぬ。其後漸張都監が手下の役人ども、都

張青夫婦打笑て云けるは、我が輩毎度都頭を夢みて、吉ならざる故、何とやらん心にかゝり、乃ち彼輩に命じて縱ひ人を剝ぐとも、只活捉にして、性命を害する事なかれと、再三禁め置ぬ、是則我等夫婦預め存念有てのことなり、今日都頭かくのごとく禍を蒙りて、此處に至り給ふは、偏に我等夫婦が夢に應ぜり。武松此時かの四人の者に對して云けるは、我幸ひ汝らに捉はれたればこそ、此處に至て張青夫婦にまみゆることを得たり、是誠に汝等が賜なり、汝等既に博奕に輸て下梢盡しとならば、我今汝等に少しの銀を與へんまゝ、これを下梢にせよとて、乃ち十兩の銀を取出して四人の輩へ分ち與へければ、彼輩大に悅んで拜取せり。張青これを見て、己も又三四兩の銀を取出し四人の者に與へけり。張青又武松に對して云けるは、我今存念有と云しは、我老早都頭の必ず災難に遭て、此邊に徘徊し給はんことを知りぬ、此ゆゑに彼四人の輩に命じて云けるは、汝等途中にて人を剝取とも、必ず性命を害せずして、活捕にせよ、もし萬一豪傑の士にあうて、敵することを能はずば、早速來て我に告よ、我其豪傑の士に見えて、云事ありと示しぬ、此故はいかんとなれば、彼等もし都頭に遇て都頭を剝んとする時、四人はさて置四十人を以て齊く敵し鬪ふとも、いかんぞよく都頭に敵せんや、然らば彼等必ず逃回て我に告ん、其時我急に馳來て相見え、其豪傑もし武都頭にも在ならば、早速延て

ける處に、二十杖策たれ流罪に極りし處に、張都監また蔣門神が爲に計を設け、是非某を配所の道にて害せんと圖り、乃ち蔣門神が武藝の弟子二人を馳せ、彼監押の下官兩人と力を合せ、直に飛雲浦に至て、四人全く議を定め、已に手を下し我を殺さんとせしゆゑ、某預じめ其意を悟り、乃ち兩人の下官を水中に蹴落し、蔣門神が弟子兩人各一刀に斬殺し、再び叉孟州城に回り、竟に張都監が後門より忍び入り、鴛鴦樓に上り、乃ち張都監、張團練、蔣門神、此三人を一時同座に斬殺し、猶張都監が夫人を初として一家男女を盡く斬盡し、早速城門を越て、一時ばかり走りし處に、棒瘡再發して禁じ難かりしにより、古廟の内に入て、暫く眠りしかば、這四人の輩鉤索を以て我を搭住、終を綁めて此處に至れり、某縛り引立られて、初て眼醒て誠に茫然たり、しかし良縁絶ず、料らず長兄に相遇ふこと、是則我が福の至極なりと、已に談じ終りければ、彼四人の輩、忽ち地上に拜伏して云けるは、某等皆張大哥の家人なり、頃日博奕に輸て本錢盡ぬるゆゑ、少し錢財を求んと欲して、方々を尋繞りし處に、都頭血淋々になつて古廟の内に睡り居給ふを看著け、是得采なりと悦び、遂に鉤索を以て絆めまゐらせり、某等元來下愚鄙賤の徒なれば、眼ありといへ共、眞の英雄を識らず、妄に尊體を穢しぬる事、今更罪を謝するに所なし、願くは都頭、廣く仁慈を垂給へ。

這蔣門神己が豪强に倚て、擅に施恩が酒肆を奪取、施恩を散々に打しゆゑ、施恩原官府へ訟へんと欲しけれ共、張團練が威勢に怕れて訟ふること能ず、徒らに臍を嚼で忿りぬ、此故に某施恩に代つて、彼蔣門神を打散て、再び酒肆を取復し、施恩に與へしかば、施恩父子彌某を敬うて欵待ぬるゆゑ、某も又心を安んじ、施恩と一所に酒肆の内に住しける處に、蔣門神此仇を報んことを欲して、張團練に計を求め、遂に張都監が方に賄賂を送て、某を殺さんことを頼みければ、其賄賂を悦んで頼に應じ、乃某を招て己が家に留置き、專ら懇情の體にもてなし、某に心を寛さしめ、遂に詐の計を設け、某を後園の内に賺し入れ、則我を捕へて賊となし、翌日孟州府に送て我が命を害せんと計りぬ、然れ共施恩父子、多く賄賂を、上下の諸役人へ送て、某が免れんことを求めぬるゆゑ、某在牢の時もさまで苦みも受ざりけり、こゝに又葉氏の孔目ありけるが、這人平生義を重んじ財を輕んじ、專ら人の禍を救はんと欲し、毛頭も私の非道を行はざるゆゑ、深く某が無實の罪に陷たるを憐み、再三府尹に告て、遂に某が命を救ひぬ、且又康氏の節級有けるが、原來施恩と交厚きゆゑ、始終某を憐み、在牢の中這人の情を蒙ること多し、是等の故にて一命恙なく保てり、若是等の助けなくば、必ず牢中に於て害せられん、焉ぞよく今日の命あらんや、既にして六十日の限滿

張青之
小賊捉武松

牙を咬み歯を切るばかりなり。彼四人の漢子、武松が包袱蘊を取て高聲に呼はり云けるは、長兄阿嫂早く來て我輩が得采を見給へ、好き一疋の大牛を求て牽回りぬ。其時内より一聲答て云く、我少刻來らんに、且手を下して皮を剝ぐ事なかれ。武松これを聞て、内より答たるは何者なるにやと思ひける處に、やがて兩人出來る。武松これを見るに、一人は女なり。兩人齊しく云けるは、是は此武都頭にはあらずや。かの一人の漢子が云く、眞に是我が義弟武都頭なり、早く綁を解けと云て、四人の者に命じければ、武松これを怪みて、再び睛を定め、彼兩人の男女を見るに、彼漢子は則菜園子張青なり、彼女は是母夜叉孫二娘なり。此時彼四人の漢子張青夫婦が言を聞て大に驚き、忙はしく武松が索を解て衣服を著さしめ、則前面の客廳に延て座已に定りければ、張青先大に驚きて云けるは、賢弟は何ゆゑかくのごとく血に染て此邊に至り給ひしぞ。武松答て云く、我今此體にて此邊に到し所以、尤一席の言に盡しがたし、我嚮に長兄に別れ、孟州の配所に至り、想はず管營父子が懇意を蒙れり、乃老管營が男、小管營が姓名は金眼彪施恩と云ふ、此施恩毎日好酒好肉を以て某を欵待し、少しも怠慢のことながりし、施恩本孟州城の東、快活林と云處に、一間の酒店を開て、毎日毎月若干の高利を得けるに、張團練と云者向に孟州に至りし時、蔣門神と云力士を引て來りけるが、

只一跳に飛下り、頓て正陣の橋を過りて、纔に二三十步餘り行きし處に、はや三更の鐘四方に響きて耳に轟きぬ。武松東の小路を望んで、一時ばかり馳しかば、又早く五更の鐘所々に響きぬ。武松終夜辛苦して身體疲れ、なほ且觸に打れたる二十枚の棒の痕、再び發して大に痛みければ、武松頻に勝がたく、暫く憩はんと欲して前面を望み見るに、樹林の内に一つの古廟ありければ、武松幸ひなるかなと悅んで、遂に廟中に入り睡りし處に、傍より四人の漢子現れ出で、鈎索を以て武松を搭住め、頓て高手小手に綁め引起しければ、武松漸々睡を醒し、大に驚きけり。彼四人の漢子武松を見て云けるは、此漢子肉究て多し、宜しく長兄の方に送るべしとて、恰も羊を牽がごとくに、武松を引て村中を望馳來り、路すがら四人齊しく云けるは、這漢子一身に血の跡あるこそ怪しけれ、多くは賊をなして、かく身を打傷はれたるに疑なしと語て、漸四五里許馳ける處に、はや一軒の草屋の内に至て武松を引入れ、乃ち燈の下にて、武松が衣裳を剝取り、頓て武松を亭の柱に絆著けて、四人相共に造化よしと悅びけり。武松密に竈の邊を見るに、梁の上に人の腿許多掛置ければ、武松心中に想らく、我不幸にして這輩が毒手に中つて、死せんこそ拙けれ。我老早此禍に遇ふ事を知るならば、孟州に於て自殺を遂げ、名を後代に遺さんものを、今此處にて非命の死をなさんこと、返すぐ\も遺恨なりと、

武松鏖ニ張都監

に拜伏し、一命を饒し給へ、と頻に涙を流しけり。武松是を見て呵々と大に笑て云けるは、我汝を饒しがたし、宜しく死を致せ、とて遂に頸を刎落しぬ。武松熟想ひけるは、諺にも一に做さず、二に休せずと云事あるに、我何ぞ只四五人を殺し打休んや、縱ひ千百人を殺すとも、畢竟一死するのみなりとて、再び刀を提げて、樓を下りければ、夫人誤つて武松を家人と思ひけん、乃ち問て云けるは、樓上は何ゆゑかくのごとく騷動するや、と猶未だ云も了らざるに、武松房間の前に至りしかば、夫人此大漢子を見て、大に驚き、汝は誰なれば我家に來りしぞ。武松が云く、汝我を忘れたるや、とて遂に刀を揮つて頭を刎落し、猶再三左右を顧るに、彼張都監が寵愛の使女玉蘭、房間の内より燈燭を提げて出けるが、夫人が斬れたるを見て、忽ち眼を眩し倒れんとせし處に、武松早く馳來り、遂に胸の上を二刀刺て押伏せけり。斯る處に又三四人の男女出ければ、武松是をも斬殺し、乃ち四方八面を搜し、總て二十餘人を斬倒し、今は心地よしと悅んで、遂に後門を馳出て、城下に至り、今宵速に城を越て、城外に逃出べしとて、頓て城門の邊に來りて伺ひ見るに、城門を守る軍卒等盡く熟睡して、更に物音なかりければ、武松心靜かに、背後の方より繞り出で、急に城門の上に登りて、下を望み見るに、此城原來小城なるゆゑ、城門も又大いならず、低ければ、武松平生の術を盡し、足を縮め身を躍らして、

に、武松勢に乘じ唯一推おしければ、何かは以て熬ふべき、忽ち地上に倒れしを、武松飛入て水もたまらず、遂に頭を刎落し、蔣門神が頭も刎んとせし處に、初刀淺傷なりしにや、再び立起り掙扎んとせしを見て、武松大に怒り、忽ち右の脚を飛せて席上に踢倒し、刀を擧て頭を刎ね、張都監が側に立寄り、抑汝は何の意恨有て、我を欺きたるや、我今汝が腹を剔き五臟六腑を剜出し、一々怨を述べけれども、夜の闌んを厭ふにぞ、格別の慈悲を垂て、唯頸を刎るぞ、とて忽ち首を打落し、盃盤の狼藉たる中より、一つの大盃を擇み取り、自ら酒を篩で一連に三五盃飲乾し、再び張都監が屍首の前に至り、衣の襟を扯斷り、則これを血に蘸し、白壁の上に八つの大文字を書て云く、殺レ人者打レ虎武松也と、纔に書罷りし處に、樓下に夫人の聲と覺えて呼り云けるは、樓上の噪しきは、定めて賓主醉給ひての事ならん、誰にても早く樓に登て扶け進らせよ、と未だ云も終らざるに、兩人の漢子はや樓に上り來りければ、武松急に身を藏し、これを見るに、此兩人の者は張都監が心腹の家人にて、前日後園の内に於て、武松を捕へし者なれば、武松暗に悅んで控へ居たりける處に、かの兩人席上に來り見るに、三人の屍首血泊の内に横たへて有ければ、大に驚き、面を覷合せ、唯呆れ果たる許にて、敢て聲をも做ず、急に身を回さんとせし處に、武松躍り出て只一刀に一人を斬倒しければ、彼一人は忽ち地上

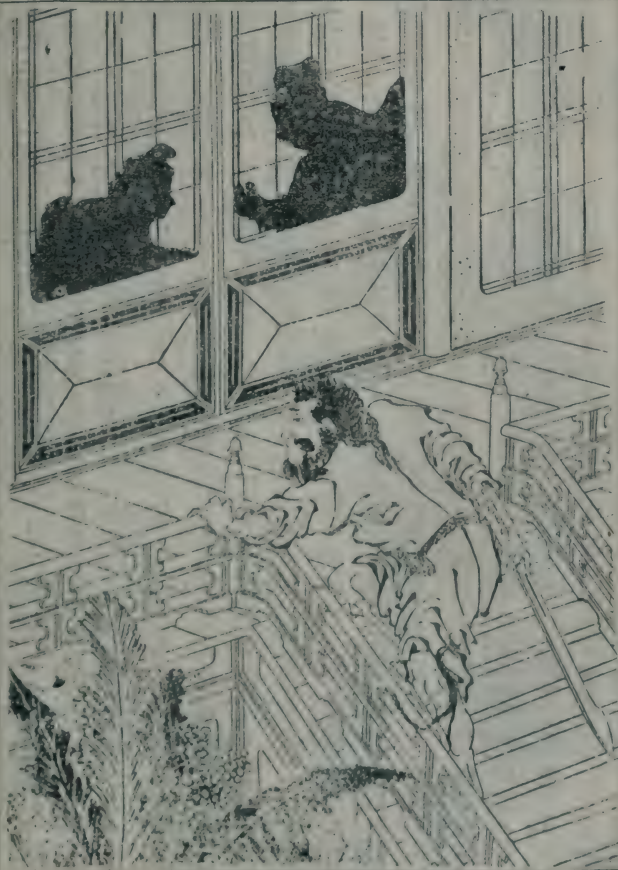
武松屠殺仇人血書白壁

三編　巻之二十八

〇張都監血鴛鴦樓に濺

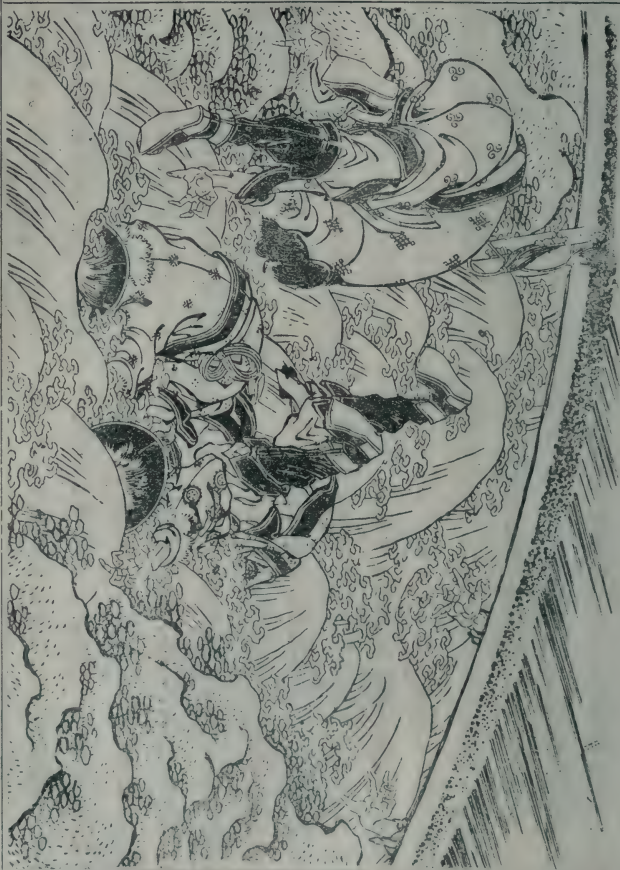
武松は已に鴛鴦樓の梯子を半上りて、張都監、張團練、蔣門神等が談話を聞すまし、今跳蒐り皆々を斬て棄んと、心焦燥を推怺へけるが、各の云所を一々能聞認ければ、右の手には刀を持ち、左の手に拳を捏り緊め、梯子を上了て樓上に顯れ出で、我老早此に在て汝等が談話一一聞たるぞ、といひければ、蔣門神先武松を見て愕然き、肝も魂も九霄の雲外に散り、渾身攤縮み、恰も卒中風の發したるがごとくなり。然れども此者原來有名の力士なれば、急に座を起て、掙扎んとせし所に、武松虎の威を奮ひ、嚮に我汝を免し、若當地に隱れ居ば、忽ち尋出し殺さんと堅く申付たるを用ず、惜からぬ命と思へば、汝が願に任するぞ、と只一刀に斬倒し、また身を回して、張都監に斬て蒐りしかば、忙はしくこれを迎へんとせしかども、武松電の如く跳入て、眉間を剺劈ければ、遂に樓板の上に倒れけり。張團練は本武夫の家に生れたる者なれば、酒後といへ共尙臂に力の覺あり、傍にある椅子を取て、武松に打て蒐りし處

回の計極めて神妙なれば、又不可なる所なし、定めて今時分は彼四人の輩已に手を下して、武松をば飛雲浦の邊にて殺つらん、多くは渠等明日歸るべき間、共に消息を聞て悅を催すべし。張團練が云く、彼四人の輩は殊更物馴たる者共なれば、老早武松を殺して、今宵の內に回ることもやあらん。蔣門神又云く、某彼兩人の弟子に再三命じ、はやく殺して、速に回れと申含ぬる間、彼等必ず早く手を下して殺すべければ、少刻悅を告歸ること有べし、何ぞ延引して明日に至るべき。武松已に三人が言を聞いて大に怒り、今飛蒐らんやと思ひ居ける。今夜武松何等の働をなすや、次の卷を見て知るべし。

すでにかくのごとくんば、汝をも饒しがたしとて、竟に刀をあげて頭を刎ね、其屍を傍に捨置き、再び刀を鞘に收め、忙はしく番所の内に入て、彼施恩が送りぬる綿衣を取出してこれを著し、暗に門の上に跳上つて、墻をこえ、直に鴛鴦樓の下に至りて、此所を窺ひ見るに、三四人の丫嬛一處に在て再三怨を含んで云けるは、彼兩人の客、今日朝飯後より酒を酌で、度々茶よ水よと只顧我々を勞しけるが、猶囘らずして、亦復夜飮をなすは、これ何の道理ぞと、再三低言譏りけり。此時武松刀を拔き手に提げ、遂に門を推開て走り入り、頓て彼女等に向て云けるやう、汝等は定て我を識認つらん、若一聲にても喊ぶことあらば、我今汝等を殺すべし、と未だ云も罷らざるに、其内一人の女已に聲を放つて喊びしかば、武松大いに怒て、これを只一刀に斬殺しぬ。其餘三人の女急に逃んとせしかども、身攤え脚軃れ走り動く事能ず、此彼に倒れし處に、武松這女等をも共に斬殺し、暗に後堂の内に走り入て、鴦鴛樓の梯子を登り、漸々と半に至て、且耳を側めて動靜を伺ひ聞所に、彼張都監、張團練、蔣門神、各談話して在けるが、蔣門神先云ぬるは、相公這囘某等が爲に武松を殺して仇を報じ給ふこと、此恩尤莫大なり、他日必ず重く報ぜんと、纔に云終りし處に、張都監これに答て云く、我もし義弟張團練の賴を受るにあらずんば、いかんぞ肯て這等のことをなさんや、汝多くの金銀を費したりと云へ共、這

漢子此響を聞て、呼りて云けるは、門外に在て門を開んとするは何奴ならんや、我纔に今睡らんとするに、汝何ぞはや來るや、若速に逃去らずんば、我再び起て汝を捉ふべきぞ。武松これを聞て却て心中に悦び、彼刀を拔て右の手に提げ、左の手を以て頻に門を推響せければ、彼漢子大に怒り、暗に床を下て、短棒を搶取り、直に門邊に來て、忙はしく門を開き、武松を捉へんとせし處に、武松猿臂を伸して、彼漢子が頸の骨を緊と捉へしかば、骨も碎くる許に覺て、禁難かりけるゆゑ、再三喊ばんとせしかども、第一は大力に頸の骨を揪へられて聲出ず、第二は武松が手に月晃々刀を持たるを見て大に肝を消し、唯一聲、命をゆるし給へ、とのみ呼はつて、其次は又聲を出すことならず。武松が云く、汝我を識認けるや。彼漢子武松が聲を聞て、初めて武松たることを知り、大に怕れ慄きて云けるは、都頭我を饒し給へ、這回都頭無實の難に遭給ひぬるこそ、此家に恨有べけれ共、曾て某が干りしことにあらず、只願くは我が命を害し給ふことなかれ。武松が云く、汝もし實情を説ば、我肯て汝を赦さん、張都監は今何れの所に在やらん、詐なく我に告よ。彼漢子が云く、我主人は今日張團練蔣門神等と倶に終日酒を酌で樂れけるが、尙鴛鴦樓に在て、夜飮を催し居給ふなり。武松が云く、汝此言に詐なきや。彼漢子が云く、某豈取て謊を云んや、都頭必ず疑ひ給ふことなかれ。武松が云く、

武松夜中入孟州城

の上を刺通し、再び橋の上に休息しながら、熟々思ひけるは、只此四人の者を殺したりとも、若彼張都監、張團練、蔣門神、此三人を殺さずんば、いかんぞ能我此度の怨を雪ぐならんとて、良久しく躊躇して在けるが、遂に意を決し、再び孟州へこそは引歸しけり。張團練蔣門神兩人の輩は、武松を害せんと欲して、張都監に賄賂を送つて計を設け、竟に武松を陷阱に隕して、官府に送りしかども、武松幸ひに葉孔目に助けられ、此日流罪に決斷して、配所に趣くよし聞えければ、蔣門神等、後々患あらんことを恐れ、監押の下官兩人に、多く金銀を與へ、武松を害せんことを云含め、又二人の弟子を遣し、下官等と共に、力を併さしめける所に、豈知らんや、四人の者共却て飛雲浦に於て、一人も殘らず武松に殺されぬ。武松は孟州城に回り來れば、紅日已に落て家々戸を閉ぢ、處々門を闗しけり。武松は直に張都監が後園の外に至て、此處を見るに、後門の内に一軒の番所あり。武松門外に伏して、内の動靜を伺ひけるに、門を守る者は衙門の內に在ていまだ歸らざるにや、人音更になかりしかば、武松心中に忖りけるは、もし門を守る者回りなば、我必ず計を以て門内に入んものをと、頸を伸して待居ける處に、一人の漢子燈籠を提て出來り、乃ち後門の四方を看廻して、番所の戸を開き、直に床の上に登りて睡りけり。武松門外に在て鐘の聲を聞に、一更の鐘なり。武松故意後門を推て響せければ、彼

猛勢を振ひしかば、頸枷は自ら颯と二つに劈たり。武松是を取上げ、下官と共に水中に投入れ、尙勢に乘じ、橋の下に赶來りし處に、かの兩人の漢子先一人は眼を眩して地上に倒れぬ。武松頓て赶著て、彼一人が後心を、拳も碎るばかり打しかば、只一聲阿と叫んで倒れたり。武松即此男が帶せし處の刀を奪取り、遂に胸の上を一衝刺て推伏せ、又立回て彼倒れたる漢子を殺さんとせし處に、彼漢子漸扒起て逃走らんとしけれども、武松電のごとく跑來り、急に頭を揪へて大に罵りけるは、汝は何奴なれば、敢て來て虎の鬚を撚らんとするや、もし實情をいはゞ、我肯て汝が一命を饒さん、もし然らずんば、彼三人の者を例として忽ち殺すべきぞ。這漢子大いに怕れて云けるは、我輩兩人は實に是蔣門神が武藝の弟子なり、今蔣門神張團練と計を設け、某兩人を此處に馳て、則兩人の下官と力を倂せ、豪傑を殺さんと計りぬ、もと是某等がなす所にあらざれば、豪傑明かにこれを察して、一命を饒し給へ。武松が云く、汝が師蔣門神は今何れの所にありや。那漢子答て云く、某等彼地を出し時は、蔣門神は張團練と共に張都監が後堂の鴛鴦樓にあつて、酒を酌樂み、專ら我が輩が消息を待となり。武松が云く、既に此のごとくんば、汝を饒がたしとて、遂に頭を刎にけり。武松此時渠等が帶したる刀の中、其一腰を選み出して是を帶し、彼兩人の下官死せざることもやあらんとて、各胸

て泪を洒ぎ、袖を霑して別れけり。扨武松は兩人の下官に引れ、十里ばかり馳ける處に、兩人の下官私に商議して云けるは、彼二人の輩は何ゆゑ來らざるや、老早來るべきことなるにと低言しかば、武松隱々に是を聞て、心中に想ひけるに、此兩人の下官必ず我をいかんとも圖るらん、遮莫なんぞこれを恐れんやとて、又八九里ばかり行けるに、前面に二人の漢子刀を帶して待居けるが、兩人の下官と一所に成て、共に武松を監押して往ければ、武松怪みてこれを見るに、兩人の下官只顧かの漢子等に向ひ眼弄し、暗に相圖を通ずる模樣なりしかば、武松はや是を七八分猜して唯自ら心中に收め、詐りて見ぬ體にもてなし、又三四里ばかり馳て、前面を見るに、浩々蕩々たる一つの浦あり。橋の傍に一座の牌樓あり、上に一片の額を掲け、三大字あり、是則飛雲浦と書けり。武松は是をも知らざる體にして問けるは、此邊の地名は何と云所ぞや。兩人の下官答て云けるは、汝も人と同じく眼明かにして、いかんぞ牌樓の上の額を見ざるや、分明に飛雲浦と云三字を寫せり。武松又浦の邊に立住りて云けるは、我こゝにて淨手せんに、暫く待ち給へと、未だ云も終らざるに、一人の下官進み寄し處に、武松大いに聲を放て、雷のごとく吼り、只一脚を飛して、彼下官が小腹を踢たりしかば、彼下官大力に踢られて、眞倒に水中に落入けり。彼一人の下官これを見て、急に逃んとせし處に、武松大いに怒り、引捉へ

武松再遭ニ災厄

半月以前快活林に回り、店の内に座して居ける處に、彼蔣門神又大勢を引來り、某が店の内に打て入り、某を散々に打倒し、再び店を奪取り、若干の家財等こと〴〵く彼に有れぬ、某是に因て身を惱し、久しく床に臥て在しか共、今日長兄配所に趣き給ふと聞し故、兩套の綿衣を長兄に送らんが爲こゝ迄馳出たり、抑且別の盃をも勸めん間、此處の酒店に入給ひ、暫く歇み給へとて、同じく兩人の下官を請て、酒屋に邀へ入んとせしか共、兩人の下官あへて入ずして、忽ち聲を勵して云けるは、武松は是賊漢なるに、我輩もし汝等が酒食を食する事あらば、他日いかなる累か我が身に及ばん、唯よく急に馳行べきに、汝かならず路を攔ることなかれとて、再三武松を催促し急ぎければ、施恩此體を見て心中に苦み、卽一錠十兩の銀を取出し、兩人の下官に與へける處に、兩人却て大いに怒り、我輩何ぞ汝が銀を受んやとて、武松を催し路を急しかば、施恩今は力に及ばず、只兩碗の酒を斟で、武松に飲しめ、また一つの包袱蘊を武松に與へて、私に云けるは、此内には二重の綿衣と一包の銀子あり、長兄宜しく途中に於てこれを使ひ給へ、我熟彼兩人の下官を見るに、もと好意を懷ざる輩なれば、路次の間隨分心を用ひ怠り給ふことなかれ。武松が云く、我はやく此意を曉して、已に所存ある間、汝は只心を安んじ、養生專一たるべし、我必ず再會の期をはかるべし。此時施恩戀々とし

武松を牢中より呼出して、罪を決斷しけるに、葉孔目武松が爲に力を用ひて、愈流罪に定め、即日武松を二十杖を策つて、面に金印を刺黥して、乃ち恩州を配所とし、文書を兩人の下官に與へて、武松を送らせければ、兩人の下官等命を奉つて、武松に顎枷を枷け、即日武松を引て孟州を離れ打出けり。扨張都監等は、武松が死罪を免れて、流罪に決斷したることを聞て、心中甚だ悦ばず、只一人の家僕を官府に馳て、贓物金盞銀盃等を請取けり。武松は先に二十杖を受し時、老管營葉孔目を賴で諸役人に賄賂を送りける故、其杖ことに輕くして、痛むことあらざりけり。武松は深く張都監等を怨みしかども、先是を忍びて心中に收め、遂に兩人の下官に引れて、孟州城を一里許馳出し處に、施恩其邊の酒店に在て、内より走出で武松を迎へければ、武松悦んで施恩を見けるに、顏色頗る衰へ、頭を包み臂を卷てありしかば、武松心中に其形を怪み、乃問て云けるは、小管營は何故かくのごとき模樣になり給ひしぞ、且先日は每度老管營の方より、酒食を饋り給ひて、消息ありしかども、汝は却て久しく音耗も寄給はざりしは、是いかなることぞや。施恩答て云く、某向に數度、長兄を訪うてよりの後、府尹是を知り、下官等を牢中に遣して、堅く人の出入を許さずして、專ら某が來るを待ちて捉へんと圖りけるゆゑ、某此より牢中に至て長兄を訪ふこと能ず、只康節級が方に趣きて、長兄の消息を求るのみ、某

張團練これを聞て大に驚き、忙はしく張都監が館に至て、詳かに是を語りければ、又多く金帛を府尹に送つてこのことを告知らせし處に、府尹は原來賄賂を貪る賊官なれば、また金帛を得て大に悅び、これより常に下官等を牢中に馳しめ、動靜を伺はしめ、もし人の來るを見ば、立處にこれを捉へよ、と嚴しく命じければ、是を奉り、下官等每日牢獄の邊に來て緊く窺ひけるゆゑ、施恩再び牢中に來て、武松を訊ふこと能ず、唯康節級幷に牢子以下の者共を賴みて、武松を介抱なさしむるのみなり。此より施恩は、每度康節級が家に至て、武松が消息を求め、尙且多く金銀を用ひて武松が一命を免れしめんとぞ圖りける。旣にして前後兩月あまり過しぬる所に、葉孔目再三再四府尹につげて、武松實に罪なく、張都監等が詐の計に陷じいれ、其上張都監は蔣門神が莫大の賄賂をうけて、非法のことを巧成したるよし、細々と語り聞せければ、府尹も始て武松には一點の罪なき事を知り、暗に恚り、張都監已に蔣門神が若干の賄賂を得て、武松を我が手に送て殺さんとするは、却て是我を欺くに似たり、我向後此事を疎んずべしとて、此より府尹も武松を害せんとする計を休て、牢中のことも制せざりしかば、施恩が父老管營再び酒食を牢中に送て武松に與へ、益金銀を費し、武松が爲に諸役人の方へ賄賂を送り、いかんともして武松を救はん事を計りける。斯る所にはや二ヶ月の日限已に滿ければ、府尹は

に是張都監張團練二人の輩が、蔣門神が爲に仇を報ぜんと欲し、長兄を計に陷し、かくのごとき無實の難を受しめぬ、然れ共先心を寛げて、憂愁し給ふことなかれ、我已に一人の友を頼みて、葉孔目が方へ長兄のことを通達しける處に、葉孔目甚だ長兄を敬ふの心有て、内外宜しく力を用ひ、長兄を助けんと圖り、已に今死罪を改めて、流罪に決斷すべきよしなれば、在牢の日限滿なば、長兄再び牢を出て、配所に趣き給ふべし、然らば又別に商議をなして事を全うすべき間、必ず能寸志を安んじ、日限の滿るを待給へ。武松は此頃手足の枷を除れ、身體寛ぎけるゆゑ、もし宜しき便機を得なば、牢を越て逃出んと圖りしかども、施恩が言を聞き、先此念を休にけり。施恩此日は牢門の外に在て、終日武松を慰め、已に黄昏に至て營中に歸り、翌日又酒食錢財を調へ、康節級と共に牢中に來り、乃ち武松に逢うて酒食を欸待し、又錢財を分ち、牢子以下の者共に送つて、酒錢となさしめ、其日も又暮に及び營中に歸り、又有緣の人を頼んで、大小の役人等に賄賂を送り、武松が身の上恙なく、急に決斷あらんことを求め、又兩日を經て、酒食ならびに兩三套の衣服を調へ、再び康節級を頼み、これを牢中に送て武松に與へ、其外別に多く酒食、ならびに肉果諸物を、牢子以下の者共に送り欸待ぬ。此より後は施恩毎日牢中に出入して、武松を訪ひける處に、張團練が家人等、是を見て張團練に斯と告ければ、

ゆゑ、何とぞ武松を害せんと欲すれ共、葉孔目に固く理の當然を説れて、妄に殺すこと能はず、只牢中にて武松を害すべしと、暗に謀を轉しぬる所に、康節級又施恩が頼を受け、一百兩の銀を得たりしかば、武松を懇に憫み、少しも餘儀なかりける間、武松想はず府尹が毒手を脱れて、一命を恙なく保ちけり。

此處は原本三十回にて、標目に施恩三入二死囚牢一とあつて、大に傳文と齟齬す。支那にて編者の輕忽なり。岡島氏の譯本通俗忠義水滸傳も誤りたるまゝにて改めず。今般標目を更め新に掲出す故、こゝに其ことを述ぶ。

○武松大に飛雲浦を鬧す

施恩は翌日多く酒食を具へ、康節級を頼みてこれを牢中に送らんと欲しければ、康節級これを許し、遂に施恩を引て大牢の邊に來りけり。此時武松は康節級が憐みを被りて、手足の枷をも除かれ、頗る寛ぎしかば、暗にこれを感悦せし處に、施恩は武松に對面して大に悦び、乃酒食を牢の内に饋りて武松に食しめ、又若干の銀子を取出して牢子以下の者共に送つて、武松がことを頼みしかば、衆皆悦んで領掌せり。施恩又武松が耳に附て低言けるは、這次の禍、明か

門神が爲に仇を報ぜんと圖て、計を張都監に求め、遂に武松を無實の罪に陷し、又多くの賄賂を諸役人に送り、彌武松を害せんと欲す、某等がごとき役人等も都て皆彼が賄賂を受ぬ、此ゆゑに府尹相公も、武松を死罪に行はんと圖り給へども、唯獨葉孔目同心せざるに依て、未だ武松を殺さゞるなり、這葉孔目は、人となり尤廉直にして辜なき者を殺さず、況や一毫も金銀を貪ることなし、已に這回も張都監が賄賂を受ざりき、此故に武松猶一命を保つて恙なし、今日某足下の賴みを請し上は、我自ら武松を憐み、向後彼に半點の苦みを懸ること有まじければ、足下は早く縁ある人を求めて、葉孔目の力を賴み給へ、然らば武松が命は必定恙有まじ。施恩此ことを聞て大に悅び、則彼二百兩の銀の內一百兩を取出して、康節級に送りければ、康節級再三辭して還しけれ共、施恩又再四詞を盡して送りけるゆゑ、康節級遂に辭すること能はずして收めけり。施恩此時營裡に回り、又葉孔目と親しき人を尋ね求め、一百兩の銀を葉孔目に送て、武松が埒宜しかるべき、決斷のことを賴みければ、葉孔目も素より武松が眞の豪傑たることを知れば、いかんともして助けたく思ふ時節なれば、いよ〳〵武松を憐んで、再三府尹に告けるは、武松が賊情のこと全く分明ならず、縱ひ金盞等の物を偸取たりとも、いかんぞよく死罪に行はんや、只よろしく公に決斷し給へ。府尹は曾て張都監より賄賂を請し

に來つて、父老管營と商議しけるに、老管營が云く、這回張團練蔣門神が爲に仇を報ぜんと欲し、則張都監と共に詐の計を設けて、武松を陷しぬ、張都監殊更彼府尹以下、諸役人等に賄賂を送りける故、府尹を始として役人等武松が分説を容ず、只顧武松を殺害せんとのみ計ることとなり、然共我又是を熟々思ふに、武松を救はん計は、唯獨兩院の押牢節級を賴みなば、方によく武松が一命を脱れしめて、何方にも逃し置き、他日又別に商議して、此恨を雪ぐべし。施恩が云く、當牢の節級姓は康にして、某と交厚ければ、某自ら節級が家に趣きて、宜しく賴み申さんこと可ならんや。老管營が云く、武松が禍に遇たるは、素是汝が事に因てなれば、汝今行て彼を救はずんば、さらにいづれの時をか期すべき、宜しく早々に馳せて、節級を賴み、いかんとも能き計を用ひて、武松が災禍を救ふべし。施恩父の命を受け、大いに悅び、乃ち二百兩の銀を以て直に康節級が宿所に至りける處に、康節級は猶牢中の役所に在て、未だ回らざる間なれば、施恩乃ち節級が家人を牢中に遣し、斯と告ければ、康節級頓て家に回り、遂に施恩と相見、座已に定りし處に、施恩先忙はしく武松がことを一々詳に語りしかば、節級これを聞て云けるは、這回武松がことは、都て張團練が僞せし所なり、張團練本張都監と同姓なるゆゑ、義を結びて兄弟の盟を誓ひけるが、頃日かの蔣門神を己が家に躱し置ぬ、抑且蔣

有り、彼今配所に在て、盤纏をつかひ盡せしゆゑ、忽ち恒の心を失うて、賊をなしつらん、既に贓物露れぬる上は、賊情明白なり、必ずしも彼が詐の言を聞くことなかれ、只宜しく彼を拷問せよとて、已に左右に命じければ、下官共棒搶取て武松を拷問せんと立騷ぎけり。武松此體を見て心中に想ひけるは、我假令幾干の分說すとも、必定我言を容ふまじ、しかじ曲て我賊をなしたりと白狀し、且此場の拷問を脫れなば、他日又よき主意あらんと暗に思案を定め、乃ち呼つて云けるは、某あへて實情を白狀すべし、且棒を行ひ給ふことなかれ、とて遂に白狀しけるは、當月十五日の夜、張都監の宴上に於て、許多の金盞銀盃あるを見て、忽ち是を偸んと欲ふ心生じ、乃其夜の闌なるに乘じ、遂に忍入て偸取れり、此外に一點も僞る所なし、願くは拷問を免し給へ。府尹が云く、汝財を見て意を起しぬるは、是則ち小人の所爲なり、且汝を入牢させんとて、則牢守に命じ頸枷をかけ、即時に死罪人の牢中に遣しけり。武松此日より牢獄の内に在て、暗に想ひけるは、張都監我にいかなる怨有てか、這等の陷穽を設けて我を陷しけるや、我もし一命を脫れ出牢する事あらば、再び事を正さんものをとて、牙を咬み齒を切りて憤りぬ。扨牢守は手下の下職と商議して、武松が手足に枷を入れ、晝夜緊く守つて、片時も怠る事なし。斯る處に施恩は、武松が已に入牢したると聞及び、大きに驚き、慌て忙き城下

武松を罵つて云く、汝賊配軍、かくのごとく不忠不義をなし財を貪るや、贓物既に露るゝ上は、汝必ず抵頼ことなかれ、諺にも、人は貌を以て相すべからずと云こと有けるに、果して此言虚しからず、汝が貌は豪傑とも云べき人品にて、我深く汝を信じ、腹心と思ひなしけるに、誰か知らん、かくの如き賊心賊骨賊肝あることを、既に今汝が櫃の内より贓物を捜し求めぬる上は、今宵の盗賊いよ〳〵汝たらんこと是を以て、明けし、我尙明日詳にこれを正すべしとて、遂に下官に命じ、其夜は武松を機密房用部屋といふ如しの内に入置しかば、武松無實の罪に陷されたるを怨み、甚心腑を惱し思ひ續居ける。張都監は其夜、早速人を州裡に馳て、府尹に賄賂を送り斯と訟へぬ。又押司孔目以下の役人等にも金銀を送り、翌日早々下官等に命じ、武松を州裡に引せける處に、府尹まさに廳上に出ければ、緝捕觀察等武松を擁て廳前に至り、又彼贓物を櫃と共に、廳下に擡出さしむ。此時かの張都監が使者謹んで張都監が文書を取出し、府尹に呈しければ、府尹これを披覽し、忽ち左右に命じ、武松を高手小手に縛めさせ、頓て牢守以下の下職共を呼集め、武松を入牢さすべきよし命じける處に、武松まさに言を發て、分說せしめん氣色現れしかば、府尹其心を悟り、忽ち大に怒て云く、彼賊武松は是遠流の配軍なれば、本仁義の輩にあらず、いかんぞ賊をなさゞらんや、古語にも、小人は恒の產なければ、恒の心なしと云こと

誤つて某を捉へり、相公速に我を免し給へ。張都監武松を見て大に怒り、忽ち面色を變て罵りけるは、汝武松賊配軍、我汝を擡擧て人に做んと欲ひ、毎々愛憐を垂れ、厚く賜を惠みけるに、何の不足有て賊を做しけるや、已に今宵も汝を請て酒宴に就しめ、我寵愛の玉蘭を以て汝に配さんと約せしは、畢竟汝を擡起、官職をも授んと思ふが故なり、然るに汝賊心盜肝を改めず、擅に偸をなさんと計るは、是何の道理ぞや、汝今更毛頭も分說有べからず。武松がいはく、某豈あへて賊をなさんや、某全く賊を捉んとて、後園の內に馳入ける處に、何ぞ圖らん、正中に凳あらんとは、月傾きて暗く、凳に跌き倒れければ、此們一齊に來て遂に某を絆めたり、某不肖たりといへ共、曾て賊をなしたることとなし、願くは相公明かに察し給ひ、下官等が詞を信じ給ふことなかれ。張都監益いきまきて云く、汝いかんぞよくこれを抵賴んや、我今汝が房間の內を搜さしめんとて、則下官等に命じていはく、汝等速に今武松を引て、彼が房間の內を搜し見よ、若贓物あらば、今宵の賊は果して武松に必すべし。下官等則命を奉り、頓て武松を擁て房間の內に入り、先櫃を取出してこれを開き見るに、上には衣類有て、下は都て金盞銀盃等、約莫一二百兩の贓物ありしかば、武松是を見て大に驚き、只呆れはてたる許なり。諸の下官共彼櫃を擡て廳前に至りしかば、張都監これを見て、大に

良久しく睡りがたければ、宜しく棒を使うて歇むべしとて、忽ち棒を搶取て門前に躍り出で、良久しく棒を演習して、天を見るに、時方に三更の左側なりしかば、もはや棒を休て一睡すべしとて、遂に房間に入て衣服を脱んとせし處に、後堂の邊に人聲有て、賊來れりと呼ること再三なり。武松是を聞て想ひけるは、都監相公限なく我を憐み給ひて、寵愛の美女玉蘭をすら我に賜るべしとのことなるに、今後堂に賊來ると呼るに、我いかんぞ馳て賊を捕へざらんやとて、棒引提て直に後堂の内に跳入ける處に、彼玉蘭慌しく走り出でて、武松に對して云けるは、一人の賊後園の内に入ぬるに、はやくこれを捉へ給へ。武松未だ聞も畢らず、直に後園の内に斷入て、四方を捜しけれども、更に人影もあらざりしかば、武松又身を翻して奔り出んとせし處に、夜色暗々として前後を見分たず、一つの凳の有けるに跌いて、忽ち倒れけるに、左右より十四五人の下官跑來り、一齊に聲を放つて、賊こゝに有と大に呼り、遂に武松を捉へ絆めけり。此時武松急に呼つて云けるは、我は是武松なるに、汝等誤つて我を賊なりとは云や。諸の下官等武松が言を耳にも聞入ず、頓て武松を引て後堂の前に來りけるに、燈燭熒煌として四方を照しぬ。此時張都監は廳上に馳出、大いに呼つて云けるは、其賊早く引來れと云ければ、諸の下官ども武松を推て廳前に至る。武松呼つて云く、我は是賊にあらず是武松なり、此輩

張都監謀陥武松

瓊樓玉宇高處。不レ勝ニ寒起一。舞ニ弄清影一。何似レ在ニ人間一。高捲ニ珠簾一。低綺戸照無レ眠。不レ應有レ恨。何事常向ニ別時一圓。人有ニ悲歡離合一。月有ニ陰晴圓缺一。此事古難レ全。但願人長久萬里共嬋娟。

玉蘭已に唱ひ罷りて、傍に坐しければ、張都監又云く、玉蘭汝宜しく盃を把て勸むべし。玉蘭命を奉り乃ち盃を執て、丫嬛に酒を篩せ、先これを張都監に獻り、次に同じく一盃の酒を篩で夫人に勸め、第三の盃を武松に勸めければ、武松頭を低て盃を接り、忙しく張都監夫婦に禮を述て、遂に其酒を飲乾て、再び其盃を又玉蘭に返しぬ。此時張都監玉蘭を指ざして、武松に對して云けるは、此女頗る聰明怜悧にして、善音律を知り、殊更針指は極めて高手なり、都頭もし彼を嫌はずんば、近日の内に吉日を擇んで汝に嫁せしめん。武松この言を聞て、急に頓首して云けるは、某何等の者なれば、敢てかくのごときことを望み申さんや、願くは相公これを饒し給へ。張都監打笑て云く、我已に此言を出すうへは、必ず汝に嫁せしめん間、汝これを辭することなかれ、我又決して約を背かじとて、再び盃を執て相勸め、酒又八九遍めぐりしかば、武松こゝに於て醉すでに發し、恐らくは禮を失ふこともあらんやとて、遂に張都監夫婦を拜謝して座を退き、頓て房間の前に至て門を開き、倘自らおもへらく、酒食腹に滿て、何とや

心腹の者なれば、少しも遠慮なく、共に宴に就て酒を酌べきに、必ず辭することなかれ。武松が云く、某は是罪を犯せし流人なるに、豈あへて相公の夫人と座を對し申さんや、願くは某を饒して出させ給へ。張都監が云く汝いかんぞ再三慇懃のことを云や、今宵は殊に外人もあらざれば、汝座に列りて酒を飲とも、何の妨かあらん、必ずしも我が心に背くことなかれ。武松再三再四辭しけれ共、張都監牢くこれを饒さず、自ら引て坐せしめしかば、武松これを辭すること能はず、遂に無禮の罪を謝して、遙か末座に坐しにけり。張都監は丫鬟に命じ酒を斟しめ、再三勸めて、酒已に數遍巡りしかば、張都監又肴を添しめて、再び相勸め、閑談良久しうして後、張都監武松に對していはく、大丈夫の酒を酌に、何ぞ小盞を用んや、宜しく大盞を用ひて、快よく酌べしとて、自ら大盞を執て、頻に武松に強ければ、武松一連に數盞を酌乾ぬる處に、月光光彩直に東窓を照しければ、武松益興に乘じて、只顧盞を傾けしかば、醉まさに五六分に及びけり。張都監又寵愛の使女に玉蘭と云美女を呼出して云けるは、今宵は別に外人もなく、唯獨我が心腹の武松のみ、此に在て妨なければ、汝速に一曲を唱うて、我に聞しめよ。玉蘭命を承つて敢て辭せず、乃ち象版を執て、蘇東坡が中秋水調の歌を唱ていはく、

明月幾時。有把酒問青天。不知天上宮闕。今夕是何年。我欲乘風歸去。只恐

内外出入を許して、恰も親類のごとく欵待し、多く衣服等を恵み、深く愛憐を垂れければ、武松暗に是を歡んで、心中に想ひけるは、都監相公かくのごとく我を愍み給ふこと、誠に感激の至なれば、我又此處に至りてより以來、都監の前を寸步も離るゝことなく、左右に侍す、然れば快活林に往て施恩にまみえん暇もなく、自ら多く疎遠に打過ぬ、いかさま近日暇を求めて施恩を訪はんと圖りけり。扨世上の人武松が出頭することを聞及び、何等の公事ある時は、早速來て武松を頼みけるに、武松も又頼を辭せず、張都監が前に出て宜しく取成を云ごとに、張都監も都て武松が言に從つて公事を決斷しけるゆゑ、世の人擧て武松に金銀財帛を送りければ、武松は是を一ト色も散さず、都て櫃の內に入置けり。光陰矢のごとくにして、はや八月の中秋に至りしかば、張都監後堂の鴛鴦樓の下に酒宴を設け、中秋を賞し、乃ち武松をも宴上に呼で、座に就しめければ、武松大に悅んで、後堂の邊に來り、宴上を望み見るに、張都監が夫人を始として、女中多く宴に就て坐しけるゆゑ、武松忙はしく身を囘して、走り出んとせし處に、張都監急に武松を呼で云く、汝何ゆゑ走り出んとするや。武松答て云く、相公の夫人ならびに女中多く宴に就て居給ふゆゑ、某宜しく此を避んと欲するなり。張都監大いに咲て云く、汝大いに差へり、我汝が義あるを敬うて汝を此席に呼けるに、何故自ら避んとするや、汝は是我が

ひ給はんとのことにて、今日武長兄を迎のため、馬を牽せ此所に來られぬ、都頭肯て行給ふべきや。武松はこれ一勇の士なれば、何の思慮分別にも及ばず云けるは、張都監相公人を馳て我を迎へらるゝは、是則好意なり、我何ぞこれを辭することあらんや、早々馳行べしとて、遂に裝束を改め、馬に乘り、かの下官等とともに、孟州の城下に馳せ、直に張都監が館の前にて馬を下り、遂に下官等に隨うて廳前に至りければ、彼張蒙方武松が來りしを見て大に悅び、乃ち請て相見る所に、武松は廳下に於て拜をなし、謹で廳の傍に立しかば、張都監先武松に對して云けるは、我聞汝は眞の豪傑にして、よく人を助け、死生を同じうするとなり、我今汝を舉て帳前に用ひたく思ふ、汝肯て我幕下に屬せんや。武松跪いて慇懃に謝して云く、某は是罪を犯したる流人なり、若相公の吹擧を蒙らば、某敢て犬馬の勞を盡すべし。張都監これを聞て大に悅び、便ち左右に命じて酒食を備けしめ、自ら盃を取て、武松に勸めければ、武松甚だこれを感謝し、一連に數盃の酒を酌で、遂に廳前を退きけり。此時一人の下官武松を引て、一つの房間の内に入て云けるは、都頭宜しく此處に休息し給へ、猶明日對面致さんとて、頓て房間の外に出ければ、武松其夜は遂に歇みぬ。翌日又人を施恩が方に遣して、行李を取寄せ、此より武松は張都監が家に在て事へけり。張都監常に武松を後堂に呼入て、酒食を與へ、抑且

三編　巻之二十七

○都監張蒙方武松を陥る

却説武松は施恩が爲に宿怨を晴し、一ヶ月餘りも過しける處に、炎暑漸退き玉露涼を生じ、はや深秋に至りけり。或日施恩武松と倶に店の內に坐し、閑談をなし居ける處に、門前に兩人の下官一疋の馬を牽せ馳來り、乃ち施恩が店に入て問けるは、虎を殺されし武都頭は此所に在や。施恩出て此輩を見るに、乃ち是孟州を守る、兵馬都監張蒙方が家人なりしかば、施恩先下官等に向て云く、汝等武都頭を尋ねていかなる事ありや。彼下官等が云く、某等は都監相公の命を奉つて此處に至りぬ、都監相公老早より、武都頭は當世の豪傑なることを聞及ばれて、乃ち馬を以て武都頭を邀へ給ふなり、尤書簡をも携へ來れりとて、施恩に與へければ、施恩是を披見し、暗に想ひけるは、張都監はこれ我が親の上に在て、下知をとなす人云ふ、尚且武松は流人のことなれば、張都監が命に背きがたし、唯宜しく武松をすゝめ遣さんと圖り、則武松に對して、彼兩人の下官を指ざし、這人等は則張都監相公の使者なるが、相公都頭に遇

をも云ず、只頭を低て居たりけり。此時施恩家財等を點査てこれを收めければ、蔣門神は羞を懐て、諸人に別れ、遂に快活林を離れて、行方知らずなりにけり。扨武松は其日諸の衆中を勸め、酒を酌み、漸々晩昏に至て、盃も收りしかば、皆々別を告げて歸りけり。武松其夜爛醉して打臥し、翌日辰の刻に至て睡を醒せり。扨又老管營は、子息施恩再び快活林を覇と聞て大に悦び、忙しく馬を飛せて、快活林に跳來り、乃ち武松に對面して、深く勞を謝し、連日酒店に滯留し、朝夕宴を設け、酒を酌て自ら悦び賀しにけり。此時快活林の貴賤、都て武松が猛勇を知りければ、來て武松を訪はざるもの一人もなかりけり。施恩是より新に店を修理し、再び酒を賣ひければ、老管營はこれを見て、まさに安堵の思を催し、遂に自ら安平寨に回りけり。施恩私に人を馳て、蔣門神が動靜を伺はしめけるに、蔣門神は已に行向知らず、落行ぬと告ければ、施恩彌心を安んじ、自ら商賣をなし、前方よりも猶繁昌して、毎日大利を得たりしかば、施恩ます〳〵武松が助けを感じ、則ち武松を尊ぶこと恰も父母の思をなしけり。

は、諸の衆中先一盞を酌給へとて、頓て酒宴を設けしめ、大に飲酌を催しけり。此時先武松諸家に對して云けるは、各此店の事を知り給ひつらん、我は近來陽谷縣にて人を殺し、遂に此孟州に流されけるに、前日人の云しを聞ぬるに、快活林の這酒店は、もと施恩が店なりしが、這蔣門神すでに勢に乘じて、擅に此店を刧ひて、小管營の衣飯を奪ひ取けるとなり、此ゆゑに我今日これを取復しぬ、諸人誤つて、我を小管營の家人とばし思はるゝな、我は只天下の悪人共、專ら非道をなす蔣門神ごとき者を打んと欲するゆゑ、我深く彼を恨みて、此のごときことに及べり、我途中に於ても、若剛き者有て、弱き者を欺き侮り非道をなすを見るときは、乃ち劍を拔て、弱き者を助け、剛き者を傷ふ、萬一彼が命を害し、我命を償ふ共曾て恨みなし、今日も已に蔣門神を殺して一害を除んと欲しけれ共、且列位の思像を顧て、權く彼が命を饒すなり、今晩早々蔣門神を他鄕に往しめ給へ、もし藏れて孟州の地にあらば、我又尋ね出して、景陽岡の上にて虎を殺したるごとく、三拳兩脚を以て、終にかれが命を害すべし。諸人このことばを聞き、初て景陽岡の上にて虎を殺したる武都頭たることを知り、衆皆慇懃に云けるは、豪傑怒を息め給へ、某等宜しく蔣門神を他鄕に遣して家財悉く皆本主小管營に還し申べしと、諸人一同にこれを肯ひしかば、彼蔣門神は武松が猛勢に怕れ、敢て一句の言

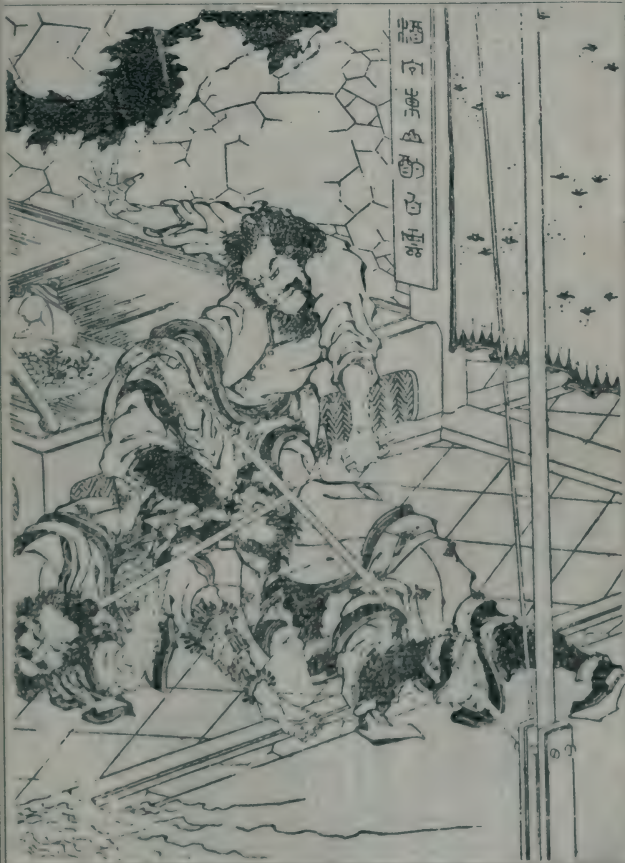
未だ我を知らずや、我は景陽岡にして、僅に三拳兩脚を用ひ、大いなる猛虎をだに打殺せり、況や汝等如き弱男を殺さんこと、何の難きことあらん、小指一本にて足ぬべし、汝速に家財を囘し、卽時に故鄕に歸れ、もしなほ遲疑することあらば、汝が性命暫時に消ゆべきぞ。蔣門神此言を聞き、初て武松たることを知り、彌恐れ入て再三罪を謝す處に、施恩は健かなる衆二三十人を引いて跑來り、武松はや蔣門神に贏たるを見て大に悅び、終に人數を分て左右に跕しかば、武松これを見て、再び蔣門神に對して云けるは、汝が家財の本主施恩すでに來れるに、汝向に奪ひ取たる所の諸物こと〴〵く皆還すべし、尙且快活林の豪傑たらん者、一人も遺さずこれを呼て來れ。蔣門神か云く、豪傑先某が店に入て坐し給へ、某自らこれを辨じ申べし。武松此時施恩に對して云く、然らば我先渠が店に行くべし、汝等も我に從ひ來給へとて、諸〻の人數を引き、再び酒店の內に馳入ける時、酒缸の內に投入れし女も、三人の僕も、倘缸の內に在て、大いに酒に浴れ苦みければ、武松漢子共に下知してこれを引上させ、乃ち又呼つて云けるは、蔣門神汝早く家財を施恩に還して、早々當地の豪傑共を呼來れ。蔣門神これを聞て、早速家內の道具を改め、又家僕を馳て村中の豪傑を呼ければ、諸〻の豪傑ども悉く來て、蔣門神が爲に慇懃に言を下げ、施恩と武松とに罪を謝しければ、武松から〳〵と打笑ひ云ける

武松酔
撃ニ
蒋門神

んぞ擅に人を欺くや、汝もし命惜くば、我が三件に從ふべきや、然らば我汝が命を免さん、若汝我が三件に背ば我今汝が命を免さんこと難し。蔣門神が云く、豪傑もし三件有て、我に從はしめんとならば、速に是をいひ給へ、我都て命に從ふべし。武松が云く、汝もし果して三件に從ふべくば、我今是をいはん、先第一の件は、汝が家の諸道具を只一つも遺さず、本主金眼彪施恩に還して、早々快活林を離れ、故鄉に歸れ。蔣門神忙しく答て云く、某敢てこれに從ふべし。武松又云く、第二の件は、我今汝を饒さんゆゑ、汝自ら快活林の英雄豪傑たるべき者、悉く皆呼寄せ、宜しく施恩に對して罪を謝せしめよ。蔣門神が云く、某これに從ふべし。武松が云く、第三の件は汝今日家財等を施恩に還しなば、今宵の內に故鄉に歸れ、汝もし私に孟州に藏れ居ることあらば、我再び汝を痛く打べし、輕き時は半死半生に打傷はん、重き時は則性命を害すべし、汝一々是等のことに從つて早々此所を立去ば、卽時汝を饒すべし、若半點にても相違くことあらば、卽時に汝を踢殺さん、汝いよ〱主意を定て返答せよ。蔣門神はいかんともして、命を脱れんと欲ひけるゆゑ、早速答て云く、某謹んで豪傑の命に從ふべし、願くは速に扶け起し給へ。武松是を聞て呵々と打笑ひ、遂に蔣門神を扯起して、面の上を看るに、太陽の邊痛く打破られ、血は滾々流れ出づ。武松指ざして云けるは、汝

捉へ、酒缸の内へ投入しかば、酒保幷に家僕どもの内、二人左右より武松が脚に纏ひ、引倒さんとするを、武松事ともせず、左右の手に提げ缸の内に投入れ、猶猛威を振て、三四人の僕を地上に踢倒し、四面八方に狂ひ繞り、許多の僕ども盡く打傷はれて、此彼に倒れけり。其内一人の僕、漸くに爬起て、門外に逃出しかば、武松是を見て、心中に想ひけるは、彼僕外に出けるは、必ず蔣門神に告知らせんとのことならめ、我宜しく大路の上に馳出て蔣門神を打倒し、乃ち諸人に是を咲しめ、施恩が恥を雪んとて、遂に門の外に跳出で、直に大路の上に至て相俟ぬ。扨かの僕忙しく馳て、蔣門神にかくと告ければ、蔣門神大に駭いて跳來りし處に、武松はや大路の上にて、蔣門神を迎へり。この蔣門神は原來力量武藝人に勝れしかども、頃日は酒色に迷はされて、力大いに弱りければ、武松が虎威に敵することを得ん。此時蔣門神は、武松が醉たるを侮り、勢を振ひ、足を飛せて踢入りける處に、武松急にこれを避け、蔣門神が眉間に拳を閃かして、故意十歩許退きしかば、蔣門神大に怒り追て近かんとせし處を、武松忙しく脚を擧て、蔣門神が小腹に踢中て、第二の脚を飛せて、蔣門神が太陽の上を踢破り、頓て雙手を以て打倒しければ、蔣門神相撲の手を盡して働かんとしけれ共、武松が勇力敵することと能はず、遂に胸の上を踏付られ、大に聲を放て苦しみけり。武松罵つていはく、汝奸賊いか

武松大騒將門神酒店

酒向東山酌白雲

然らずんば彼必ず酒興に乗じて閙しむること有べし。彼女これを聞て然りと同じ、乃ち第一色の上々酒を換へて、武松に與へければ、武松是を飲で云く、此酒頗る味好し、我先汝等に問ふ事あり、此店の主が姓はいかん。彼僕答て云く、主の姓は蔣なり。武松が云く、此家の主は何ゆゑ姓を李とせざるや、蔣氏は何とやらん聞悪し。彼女是を聞て云けるは、這漢子何れの所よりか酒に酔てこゝに至り、自ら禍を招んと欲ふや。彼僕が云く、渠は是外郷の者なるゆゑ、我家の勢を知らずしてこそ、かく無禮は申すらめ、何事も聞ぬ體にもてなし、只よく穏便に回し給へ。武松是を聞て、忽ち叱て云けるは、汝等今云し言は、我を譏りたるにあらずや。彼僕が云く、我輩自ら事有て説話するに、何ぞ貴客を譏り申さんや、貴客は只宜しく酒を酌給へ。武松が云く、汝速に彼女を呼て、我相伴させて酒を飲しめよ。彼僕怒て云く、汝何ぞ甚不禮を申や、彼夫人は則これ主の夫人なり、誤つて言を犯すことなかれ。武松が云く、縦ひ主が妻たりとも、相伴させて酒を飲んに何の妨かあらん、早々女を引て來れ。彼女是を聞大に恚り、罵つて云けるは、死を招く大賊、何ぞ甚だ人を羞辱やとて、已に座を起て内に入んとしける處に、武松衣の袖を捲て跑來り、頓て彼女を揪へて酒缸の内へ投入しかば、許多の家僕ども衆皆一齊に打て出けるに、武松少しも騒ず、手の到る所、はや一人の僕を

の内に入て凳の上に坐をなし、只顧かの女を看たりしかば、彼女急に面を轉て傍を望み、伴て見ぬ體にて居たりけり。此時店の内に猶六七人の家僕ありけるが、其内一人の酒保先武松に問て云く、貴客幾干の酒を沽ひ給ふや。武松が云く、先二升の酒を呑來れ。家僕是を聞て、彼女に二升の酒を出させ、則是を携へ出て云けるは、貴客宜しく酒を酌給へ。武松が云く、我原來惡酒を飲ず、汝先一碗を呑で、我に與へ試みしめよ。家僕が云く、我家の酒は味極めて美なりとて、一碗の酒を呑んで武松に與ふ。武松是を一口飲んで云けるは、此酒大に惡し、汝速にこれを換て來れ。彼僕武松が醉たるを見て、敢て背ず、再び彼女が前に來て云けるは、彼客酒惡しとて換んことを求む、夫人宜くこれを替て與へ給へ。彼女又上酒を呑出して、家僕に渡しければ、家僕これを携へ出て云けるは、貴客此酒を試み給へ、是則美酒なりとて、又一碗の酒を與へしかば、武松これを飲で云けるは、此酒いよ〱惡し、再び上々の美酒を換て來れ、もし遲々することあらば、我が拳を汝が太陽に與へんぞ。家僕是を聞て心中に忿りしかども、武松が醉しを見て、爭をなさず、再び彼女が前に來て云けるは、彼客又酒を換て來れと申す、夫人曲て再び換て與へ給へ。彼客原來爛醉したる故、這樣の非道を申ならん、是に依て某も言を爭はず、夫人も彼が醉たるを顧て、早々美酒を換て、無事ならしめ給へ、若

より又五六ヶ所にて酒を酌み、十分爛醉をぞなしにける。

○武松醉ながらに蔣門神を打つ

此時午の刻にて天色殊に熱しければ、武松益醉發し、一步は高く一步は低く、東に倒れ西に歪て、漸々林の前に至りしかば、彼僕指ざして云けるは、對面に見えし酒店は、乃是蔣門神が店なり。武松が云く、已に然らば、汝兩人は先遙の所に躱れ、我若蔣門神を打倒したると聞ば、早速馳來れとて、終に別れて林の内に入ける處に、後背に一人の大漢子、槐樹の下に凳を設け、乃其上に坐して乘涼居たり。武松此男子を見るに、形容醜惡にして身材長大なり。兩眼は星の光に似て、雙眉は刷毛の濃きがごとし。武松心中に想ひけるは、這大漢子蔣門神にはあるまじやと、暗にこれを疑ひ、又四五十步許行けるに、はや彼酒店の前に至て、此處を見るに、酒店の簷の前に一つの旗を立て、旗の上に四つの大文字あり、則河陽風月と書り。又門前にも二つの旗を建けるが、五つの大文字あり、左は醉裡乾坤大と云文字あり、右は壺中日月長とあり。店の內には年少の女凳に坐して在りけるが、是則蔣門神が新に娶りたる妾なり。この女は原娼妓の流にて、粧殊に風騷なり。武松是を見て醉眼を睜開き、逕に店

はや一間の酒店ありければ、彼兩人の家僕先此所に在て相待ち、則ち施恩武松を迎へ、酒店の内に入て、座已に定りしかば、兩人の家僕頓て酒肴を具へ持出けり。武松是を見て云けるは、小盃を收め、只宜しく大碗を以て酌べしと、則大碗を押取て、一連に三碗を酌乾し遂に酒店を離れ急ぎけり。此時七月の天氣にて、炎暑未だ消ずして、金風乍ち起りければ、武松施恩と共に、衣襟を開いて、又一里許往ける處に、此邊に又一間の酒店有しかば、武松大に悦んで忙しく酒店に入り、再び酒食を具へ三碗を酌乾し、忽ち門外に出で馳行けるに、二三里許に至て、又一間の酒店有ければ、此處にても同じく三碗の酒を飲み、都合十箇所ばかりにて酌しかば、武松大に爛醉し、則施恩に問て云けるは、是より快活林には猶幾干の路ありや。施恩が云く、快活林は此前面の林の内なり。武松が云く、既にかくのごとくば、小管營は先彼邊に在て待給へ、我自ら林中に入て、蔣門神を尋出すべし。施恩が云く、長兄自ら往て尋ね給はゞ、最可ならん、某は他所に徘徊して待申さん、長兄必ず彼を輕く覩給ひて、誤ち給ふこと勿れ。武松が云く、此ことは案じ給ふまじ、只宜しく彼家僕に命じ、酒を送らしめ給へ、我猶酒を用ひて氣力を強むべし。施恩これを聞て、兩人の家僕に命じて云く、武都頭もし酒を用ひんとあらば、速に進め申せ、必ず怠慢ることなかれとて、施恩は是より武松におくれ扣へければ、武松是

る所の酒店、約莫十二三軒も有べし、毎店に立倚て三碗のみ給はゞ、都合三十五六碗の酒なり、長兄已に快活林に至り給ふ時は、其酔大に發し、前後を覺え給ふまじ、願くは此望を休給はんや。武松大に笑て云く、小管營は我もし酒に酔ば事を誤らんと思ひ給ふにや、我反て酒なき時は力なし、一分の酒あれば一分の力有り、五分の酒ある時は五分の力あり、十分の酒あれば又十分の力あり、某向に十分の酒を飲で爛醉したればこそ、景陽岡にて大虎を殺せり、若然らずんば、いかんぞよく虎を殺すことを得んや、小管營これを以て我力は酒に起ることを知り給へ。施恩が云く、我家には元來多く美酒を貯へしか共、昨日より長兄に多く酒を勸めざるゆゑんは、唯是長兄の爛醉し給ひて後、自ら事を誤ち給はんとのみ恐れてなり、長兄すでにかくのごとく、酒の後益力あらば、我先二人の家僕に我家の美酒を持せ、途中に待しめん間、長兄意のまゝにこれを用ひて、快活林に往給へ。武松が云く、小管營若あへてかくのごとくんば、是則我悦びの第一なり、尤蔣門神を打倒さんこと、何の疑かあらん、我萬一酒を飲ずんば、いかんぞ能全き勝を取んや。此時施恩兩人の家僕に多く酒肴を持せて、まづ途中に遣しければ、老管營は暗に、健なる大漢子二三十人を撰み出し、其後に從はしめて遣しけり。扨小管營は武松とともに、安平寨を離れ、城の東門の外に打出で、纔四五百歩許り馳ぬる處に、

肴を携へ來て、武松に進む。武松是を見るに、肴は多けれども酒多からざれば、武松乃ち家僕に問て云く、小管營今日は何ゆゑかくのごとく酒少く肴多く送られけるや、我偏に其意を曉しがたし、若蹉跎あらば宜しく我に告よ。彼僕が云く、今朝管營父子商議して申されけるは、今日都頭を引て快活林に馳行たく思へ共、都頭定めて昨夜の酒に中り給ひて、快かるまじければ、今日馳行ては大事を誤ることもあらん、宜しく明日の沙汰にすべしとて、今日は已に日を延されて、酒を送ること多からず。武松是を聞心中に冷笑ひ、其夜は事なく寐みけり。武松翌朝未明に起て裝束を調へ、獨房間の內に坐して、施恩が消息を待て居ける處に、施恩親自來て、武松を私宅に邀へ、種々珍物を設けて、武松を欵待し、食事已に畢りければ、施恩が云く、長兄若馬に乘て行給はんならば、我家に幸ひ一疋の良馬あり、則ち今日是を牽て乘しめ申べし。武松が云く、我原來路を行く事達者なれば、何ぞ必しも馬を用んや、我只一つの望あり、小管營肯て是に從ひ給はんや。施恩が云く、長兄の望我何ぞ敢て違はんや、宜しく速に示し給へ。武松打笑て、我望他事にあらず、若城を出て途中に臨みなば、縱ひ幾干の酒店有りとも、酒店毎に立倚て、三碗の酒を飲で過るべし、小管營もしこれに從ひ給はずんば、這回のこと頗る難き所あらん。施恩是を聞て、快活林は城の東門より十四五里の路なれば、其間にあ

雪ぐこと能ふまじ、都頭いよ〳〵愚息を棄給はすば、此盃を酌み給ひて、愚男と義を結び、盟をなし、愚男が八拜を受給へ。武松答て云く、某年若く學なうして、如何ぞ敢て小管營の拜を受け申さんや、願はくは是を免し給へとて、已に辭せんとせし處に、施恩座を起ちて、武松を八拜し、義弟の禮を行ひければ、武松忙はしく禮を還し、遂に兄弟の盟を結び、其日は大いに悅んで酒を酌み、已に晩て宴終りければ、武松は泥の如くに爛醉し、其夜は先房間に歸て歇みけり。其翌日施恩父子商議して云く、武松昨日甚だ昏醉の體なれば、必然酒に中り、氣分も好かるまじ、今日いかんぞ事を行はんや、只詐つて云べきは、先立て人を遣し、動靜を窺はしめけるに、蔣門神は這兩日家にあらず、明日は必定歸らん、明朝飯後に早々長兄を引て馳行べし、今日は且氣力を養ひ給へと云うて、一日延すにしかじとて、施恩先武松に此事を演けるに、武松が云く、彼家にあらざるには縱ひ今日行とも益あるまじければ、只明日往べし、然れ共我一刻も早く、蔣門神に遇はんと欲することなれば、今日空しく憤を抱て、過し難からんとて、遂に施恩とともに營外に奔走し、再び又家に歸て閑談を催しければ、はや日中に至りぬ。此時施恩武松を引て私宅に歸り、僅二三碗の酒を具へて、武松を欵待し、重ねて一碗の酒も篩ざりしかば、武松此體を見て心中歡びず、早速別れ、己が房間に囘りけり。斯る所に兩人の僕又酒

○施恩重て孟州道に覇たり

小管營武松と商議半なる處に、忽ち屏風の背後より、老管營走り出て呼りけるは、豪傑の曰ひし處、我一々是を聞り、今日我が愚男想はず豪傑に相遇ふこと、恰も雲を披て日を見るがごとし、先後堂に移て商議を遂給へとて、頓て武松を延て後堂に至り、再三高座を武松に讓りて坐せしめければ、武松これを辭して云く、某は是科を犯せし罪人なるに、いかんぞ肯へて相公と座を對し申さんや。老管營が云く、豪傑必ず過て謙退し給ふことなかれ、我が愚男豪傑に對面を遂ること、十分の幸なれば、我尤欣躍に勝ず、唯よろしく座を安んじて談話し給へとて、再三頻に請ければ、武松辭すること能ばず、遂に席を對して坐しければ、施恩は其次に座を定めけり。家僕やがて酒肴を具へて携へ出し處に、老管營已に盃を取て云けるは、都頭は是眞の英雄なるに、願はくは愚男を助け給へ、愚男原快活林に在て、賣買をなしけるは、畢竟財を貪り、利を好むにあらず、只よく快活林を守つて、盜賊醉漢等を追退け、其名を四方に振ひ、孟州に一人の豪傑ある事を、世の人に知らせんが爲なり、然るに今蔣門神擅に己が猛勢を振ひ、公然として愚男が賣買を奪取れり、若都頭の英雄にあらずんば、仇を報じ寃を

は只三頭六臂の異人ならんとこそ思ひつるに、元是一つの頭二つの臂あるのみならば、何ぞ必しも恐るゝ所あらんや。施恩が云く、某只氣力薄うして、武藝疎きゆゑ、彼に敵すること能はざるなり。武松が云く、我自ら誇言を云にあらざれども、我が胸中の武藝は、只天下の悪人、道德に明かならざる者をのみ、是を傷め申すなり、彼蔣門神かくのごとく非道を行ふならば、宜く今速に馳申さん、小管營某を引て往給へ、某彼虎を殺せし勢を奮て、彼を只一打に打殺し、我自ら命を償ふのみ、何ぞ別に遠慮する所あらんや。施恩が云く、都頭暫く先家父が出來るを待て商議し給へ、然らば明日先人を馳て、蔣門神が消息を窺はせ、若いよ〳〵家に在ば、明後日馳行べし、若彼家に在ずんば、他日の催にいたすべし。武松是を聞て大に焦燥て云けるは、小管營彼に打れ給ひぬるに、自ら勢を失ひ給ひて、かく遲々し給ふや、大丈夫のなすことと、何ぞ再三猶豫することあらんや、若明日明後日とのばさば、此事彼等が方に曉されて、必備を堅固にすべし、只宜しく急に意を決して、今日事を行ひ給へ、とて頻にすゝめけり。

三年太嶽に於て角力を交りしかども、對手になる者一人もなし、普天下我がごとき相撲はかつてこれあらじと、大に勢を振ひ、擅に我が商賣を奪取んとしける故、某肯て是を讓らず、遂に手脚を交へ鬪ひける所、某彼が働きに打倒され、全身大に傷うて、凡三ヶ月餘り平復を得ずして床に臥ぬ、前日都頭初て至り給ひぬる時も、猶甚だ餘痛あり、乃ち手巾を用て頭を包み、漸々廳上に出て都頭の尊顏を拜しぬ、今に至ても打傷はれたる痕、時々再發して身心苦むるなり、我本大勢を催し、此仇を報じて恨を雪んと思ひしかども、張團練が一味の者共は、我が人數に十倍して多き故、是また勢敵すること能ず、只徒に時日を過して、恨骨髓に徹れり、某原來都頭の猛威を聞及びぬるゆゑ、這回幸ひ都頭を賴で、此仇を報ぜんとす、都頭もし肯て我爲に恨を雪ぎてたび給はゞ、此恩身を終るまで忘るゝこと有まじ、某暗に想ひけるは、都頭這回遠路を經て、當地に至り給ひしことなれば、必定氣力も疲れ給ひぬることあらん間、先宜しく半年許休息なさしめ參らせ、其後氣力足備るを待て、方に此ことを告げ、商議せんと思ひけるに、家僕誤つて事を露しけるゆゑ、已ことを得ず、急に今事實を告申なり。武松これを聞て、呵々と大に咲つて云く、那蔣門神は幾干の頭有つて、幾干の臂ありや。施恩が云く、只是一つの頭二つの臂あるのみ、如何ぞ許多の頭臂あらんや。武松益大に笑て云く、我

ろしく意を決して、早々告知らせ給へ。施恩が云く、某あにあへて都頭の尊意に背く事あらんや、少停事を明かに告申さん間、先暫く心を寛げて、茶を用ひ給へとて、則家人に命じ、佳茗をぞ進めけり。武松已に茶を吃し畢て云けるは、小管營速に事を詳に説て某に告知らせ給へ。施恩答て云く、某敢て事を告申さんに、これを聞給へ、某幼なき時より許多の師に從て武藝を傳へ申せし故、孟州の人皆某に諢名を附て、金眼彪施恩と稱し申なり、扨當城の東門の外に一つの里あり、地名を快活林と號して、山東河北等の商人等、其外多く此快活林に來て、賣買をなし申す、此處に百十餘所の客屋有て二十餘所の賭坊あり、某向に此快活林の内に酒店を開き、營をなしける所に、彼處の民人共某が武藝を尊んで、諸の客屋賭坊等より、毎月錢を湊て某に送りけるが、一箇月に約莫二三兩の銀ありぬ、此故に某も又深く是を感じ、若里の内に盜賊醉漢の徒來て、居民を犯さんとする時は、某親自ら八九人の流人共を引て、屢これを治め其無事を調へり、然るに當營の張團練新に東路州より來りけるが、一人の力士を從へて此處に至りぬ、力士が姓は蔣、名は忠と號し、身の長九尺餘り有て、力量人に踰たり、故に人皆諢名を附て蔣門神と呼慣せり、彼唯身の材長大にして、力量剛強のみならず、又能鎗を刺き棒を使ふ、就中相撲は比類なき達人なり、自ら誇て大言を吐き、

倚り、遂に石を取て眼より高く扛上げ、唯一电に地上に撲着しかば、其聲大に響いて、一尺餘り地の内に打入れけり。諸人是を見て大に驚き、衆皆舌を揮ふ許なり。武松又立倚て彼石を輕輕と引拔き再び空を望んで电上しかば、地上を離るゝこと一丈餘り、其石已に落けるを、武松雙手にこれを接へ、輕々と原の所に差置き、則頭を回して施恩幷に諸の流人どもに向て、呵呵と咲ひけるに、面の色少しも變ぜず、胸のうへ聊も跳らざりしかば、施恩これを見て、忙しく地上に拜伏して云けるは、都頭は是凡人にあらず、乃ち眞の天神なり。諸の流人共も一齊に拜をなして云けるは、都頭の勇力人倫のよく及べき處にあらず、これ必ず上天の神祇權に顯化して、下界に降下り給ひぬること彰し、誠に希有の英雄かなと、衆皆奇異の思をなしけり。當時施恩、再三武松を乞うて私宅に歸り、直に堂上に至て、座已に定りしかば、武松先施恩に對して云く、小管營已に我力を見給ひし上は、宜しく我に其事を告て、急に行ひ給へ。施恩が云く、都頭先寛坐して待給へ、我自ら家父を邀へ來て都頭と對面なさしめ、其上にて事を明かに告げ都頭を賴み申べし。武松が云く、小管營縱ひ如何樣の大事をなし給ふとも、何爲再三遲疑に及び給ふや、是却て事を做すの器量にあらず、若人を殺し火を放つ事たり共、某あへて小管營の爲にこれをなすべし、少しも猶豫することあらば、是丈夫にあらざるなり、唯よ

武松投大石示雄力

かども、景陽岡の上にて、而も大酒の醉中に、一つの大虎を打殺しぬ、いはんや今一點の病氣もなく、氣力十分に足り全し、若某を用ひ給はんことあらば、唯宜しく早々命じ給へ。施恩が云く、都頭の言を信ぜざるにはあらざれども、這時節は且行ひがたし、都頭尚幾干日を休息し給ひて、氣力いよ〳〵足り備りなば、其時まさに都頭に告て事を行ひ申すべし。武松がいはく、小管營只顧我が氣力の疲れたることを恐れ給はゞ、我今力を用ひて小管營の一覽に備へ申すべし、我昨日天王堂の前にて、一塊の青石有を見けるが、彼石は重さ幾干あらんや。施恩が云く、彼石は約莫四五百斤の重み有べし。武松が云く、我且試に小管營と天王堂の前に至て、彼石を一見すべし、若持るべくんば、我試に是を持て一覽に備へ申べし。施恩が云く、已にかくあらば、われあへて同往すべしとて、遂に武松とともに天王堂の前に至りしかば、諸の流人ども、小管營が武松を引て至りぬるを見て、盡く身を躬めて禮を行ひけり。武松已に石の前に至り、彼石を一搖搖て云けるは、某誠に氣力疲れたるにや、此石を持つ事を能ふまじ。施恩が云く、此石原來四五百斤の重み有べければ、いかんぞ能輕々しく持つ事を得んや。武松からからと大いに笑て云く、小管營は我今持んこと能ふまじと云ぬるを信じ給ふよな、我實にこれを持て尊覽に入申さん、傍によつて好見給へとて、乃ち雙の袖を捲起て、再び石の前に走り

して、豈妄に小管營の祿を費し申さんや、若永く酒食を惠み給ふは、某却て寸志を安んずるの暇あるまじ。施恩答て云く、某久しく都頭の大名を聞て、雷の耳に轟くが如しといへ共、只恨らくは山川遙に隔て、未だ高風を接へざりけり、今日幸ひ都頭此所に到り給ひしかば、理正に早速威顏を拜すべき處に、何の欵待も盡さゞりし故某深く是を愧て、相見自ら延引に及びぬ、願くは都頭我が罪を免し給へ。武松が云く、某今彼家僕に問けるに、半箇年を過なば、方に某に遇て說話し給はんとやらん云給ひぬると告けるが、知らず何等のことを示し給ふや。施恩がいはく、彼賤き輩にて、妄に言を申しぬ、某何ぞあへてかくの如きことを申さんや。武松が云く、小管營斯言を藏して、人を疑はしめ給ふは、眞の豪傑のなす所にあらず、則是秀才等が耍と同じ、願くは速に今我に告給へ。施恩が云く、彼已に我が云し言を都頭に告ぬる上は、我今心事を語り申すべし、乃ち都頭は是譽高き有名の豪傑なるゆゑ、我敢て一つのことを都頭に賴んと欲す、是もと都頭にあらずんば、他人の能ふべきことにあらず、然れ共都頭遠路を經て、此地に至り給へば、定て氣力も疲れ給ひつらんと、察しけるゆゑ、先宜しく半箇年も休足なさしめ參らせ、其後氣力全く備りなば、其節委細に都頭に告て事を行んと圖りぬ。武松是を聞て、から〳〵と打笑ひ、小管營聞給へ、某去年三月瘧病を患へし

必ず緣故ぞあらん、我且汝に問ん、彼小管營の姓名はいかんぞや。家僕が云く、小管營の姓は施、名は恩と申し、尤よく武藝を熟練されたる故、人皆金眼豹施恩と稱せり。武松是を聞て想ひけるは、管營已にかくのごとく武藝を善せば、必ず是豪傑なるべし、我且彼に對面して、其虛實を試んと、則又家僕に對して云けるは、汝若小管營を邀へ來て、我に遇しめば、我乃ち此酒食を食すべし、もし汝邀へ來らずんば、我決して一點も食すまじ、望らくは汝速に向て小管營を延て來れ。家僕が云く、小管營我に命じ申されるは、汝必ず我酒食を送ることを、都頭に告知らする事なかれ、直に半箇年も過なば、我相見えて說話すべきことありと云給ひぬるゆゑ、我今小管營を邀へ來らんこと、直正以て能ふべからず。武松が云く、汝妄の言をいはんより、早く邀へ來りて我に遇はしめよ。彼家僕猶豫して決せざりしかば、武松忽ち大に焦燥て、汝若いよ〳〵小管營を邀へ來らずんば、我決して此酒食を吃すまじとて、武松遂に酒食を把て還しければ、家僕止事を得ずして、頓て施恩に次第を告げ邀へければ、施恩來て先武松を見て拜をなしぬ。武松忙はしく拜を還して云けるは、某は犯科の流人にて、未だ曾て尊顏をも拜せざるに、前日も已に救ひを蒙り、殺威棒を脫れ、殊に酒食を送て欵待給ふこと、某甚だこれを受がたし、夫鷄だにも、功なき食は吃はざるといへり、いはんや某半點の功なく

子息小管營の命に依て送り申なり。武松が云く、我は是罪を犯したる流人にして、一點の功なきに、何ゆゑ我に酒食を惠み申さるゝや。彼下官が云く、我も其緣故は知らざれども、小管營の宣ふには、且半年ばかりが間は、酒食を送て、都頭に與ふべしとのことなり。武松がいはく、此意必定且我を養うて胖さしめ、其後我が首を刎ね、身を寸々に剖り、擅に己が刀の鋼を試んと云事ならん、此酒食分明ならざれば、我いかんぞこれを食して安穩ならんや、抑先小管營と云は、いかなる模樣の人なるや、我いまだ對面せざるに、彼人我を知られたるはいかん。家僕が云く、都頭前日始て來り給ひし時、管營相公の耳に附て、低言かれたる彼後生人乃ち是小管營なり。武松が云く、彼日頭に手巾を捲き、身に紗服を著したる人、管營が身邊に近づいて、何ごとやらん低言きけるが、定て此人のことならん。家僕が云く、其人則管營相公の子息なり。武松が云く、我彼日已に殺威棒を請んとしける處に、彼人管營に向て低言きける故、管營則殺威棒を免されぬ、是正しく彼人我を救ひたるに疑ひなし。家僕が云く、都頭はいまだ知り給はぬや、其日小官營都頭を救ひ申されずんば、都頭は痛く打れ給ひて、今時分は死生も不定なるらん。武松が云く、小管營我を救はれたるゆゑん、偏に曉しがたし、我は是淸河縣の者にして、彼は孟州の人なれば、素より知音にあらず、いかんぞ十分我を憐み給ふや、此中に

外を奔走して此邊をみるに、諸の流人共或は水を荷ひ、或は柴を劈り、其外さまぐ\雜事をなす徒も多かりけるが、すべて皆此六月の炎日に晒され、甚だ汗を流して苦みぬ。武松此者共に問て云く、汝等は何ゆゑ此炎日に晒されて事を做や。流人等答て云く、豪傑汝は新參の人なれば、此營中のことを知り給ふまじ、我輩此所に在て事をなすは、是則人間の天上なり、何ぞ妄に炎熱を嫌はんや、彼賄賂を送らざる流人共は、都て土牢の内に在て、生を求れども生を得ず、死を求れども死を得ず、其苦しきこと萬千にして、言語に盡すべからず、我輩若彼等に比せば、雲泥の差あり、武松是を聞畢て、又天王堂の前後を繞り、此邊を見るに、一つの青石あり、此石は卽ち天王の旗を插す石なり、約莫四五百斤の重さも有べし。武松心を留て是を一見し、再び房間の内に歸て坐しければ、又彼家僕酒食を携へ來て、武松に食しむ。武松熟思ふに、此營中に我を害せん心一點も見えず、必定緣故有べし、我先此家僕に其故を問ふべしと、乃ち下官に對して問けるは、汝は誰が家の者なれば、只顧酒食を以て我を欵待や、宜しく其緣故を語て我に聞せよ。彼下官が云く、先日も已に都頭に告申せしに、何ぞはや忘れ給ひぬるや、我は是管營相公の家より、斯毎日酒食を送り申なり。武松が云く、已に此のごとくんば、此酒食は定て管營相公の命を奉つて送るならん。彼下官が云く、是は總て相公の

我命終るべし、只宜しく彼等が所爲に任すべしとて、少しも騒ず、飽まで食しぬる所に、又一人の家僕來て、則武松を請て云けるは、此房間は殊更不自由なるべければ、宜しく房間を換給ふべきのよし、管營相公命じ給ふに、早々我に隨つて來り給へ。武松是を聞て、暗に想ひけるは、今日我を請て房間を換さしむるは、必ず土牢の内に移して命を害せんとの事ならん、我且彼に隨ひ行てこれを試むべしとて、乃ち包袱蘊を彼家僕に持しめ、遂に下官と共に房間を出て、一つの處に至りしかば、彼僕門を推開て、武松を入しむ。武松此處を見るに、新しき床凳卓、ならびに器等多く設けて、諸色都て足備りぬ。武松自ら思道く、我は只土牢の内に往かんとこそ思ひつるに、此のごとく善き所に邀へ來ること、偏に其意を曉し難しとて、只顧躊躇として、時已に日中に至りし處に、又一人の家僕同じく酒食をそなへて武松にすゝむ。武松是を見て、益奇異の思ひをなしけるが、終に意を決して酒食を食し了り、暫く坐を安んじて居ける處に、彼家僕又來て武松に沐浴なさしめ、再三慇懃に申けるは、都頭宜しく尊慮を安んじて歇み給へ。武松密に想ひけるは、諸の流人等も我を土牢の内に引入殺害するならんと告けるに、何故却て我をかく欵待や、尤奇怪のことなりとて、其夜は終に歇みけり。其翌日又彼家僕酒食を送り來ること、前日のごとし。武松例のごとく食し畢り、獨自ら營

家僕自ら器を収めて歸りけり。武松は獨房間の内に在て、冷笑ひ想道く、彼輩如何として我を殺すやらん、我宜しく是を試んとて、暫く消息を相待ける處に、日も漸黄昏に至て、又彼先に酒食を携へ來りし家僕、再び一つ盒子を持て進み入りしかば、武松これに問て云く、汝又來るはいかん。彼下官が云く、管營相公の命を受て晩飯を送り來りしなりとて、自ら盒子を開て武松に與ふ。武松これをみるに、一碗の飯、一瓶の酒、一盤の肉、一盤の魚あり。武松心中に想ひけるは、此飯を食し終らば、必然我を害すべし、須く是をも食して、快く死に就んとて、片時の間に又是を吃しければ、彼家僕器を取て回りけり。其後半時許を過て、彼家僕又一人漢子を引て、一桶の湯を携へ來りしかば、武松是を見て何ごとをなすやらんと思ひける處に、彼下僕が云く、都頭はやく浴し給へ。武松又思へらく、我に浴せしめて、殺さんと計るらめ、是又辭すること有まじとて、乃ち湯を把て澆ぎければ、彼兩人の家僕再び桶を帶して歸りけり。武松此時自門を關して想ひけるは、我に湯を與へて沐浴なさしめぬるは、いかなる謂ぞやとて、遂に床の上に打臥ける處に、其夜もはや明て、雞犬の聲四方に聞えしかば、武松遂に起て、房間の門を開きし處に、又彼家僕一人待詔を引て馳來り、乃ち武松が髪を梳らせ、又多くの飲食を携へ來りて、武松に用しめければ、武松心中に想道く、今日は必定

三編　巻之二十六

○施恩義をもつて快活林を奪ふ

時に諸の流人共又々相集りて、武松に問て云く、足下は誰人の書簡を持參して、管營に呈げ給ひぬるや。武松が云く、我曾て書簡を持參せず。衆皆これを聞て、足下書簡を携へ給はざるに、管營相公殺威棒を免し給ふは、是必定善意にあらず、今宵汝の命を害せんとの事なるべし。武松がいはく、彼いかにして我を殺すや。流人等が云く、今宵汝を土牢の内に引入て殺さるべし。武松が云く、既にかくのごとくんば、是卽我が天命なり、といまだ云も了らざるに、一人の家僕手に大いなる盒子を持て進み入り、乃ち呼つて云けるは、新來の流人は誰なるぞや。武松答て云く、新來の流人は我なり、汝我を問て何の事ありや。彼下官が云く、管營相公我に命じ、汝に酒食を惠み給ふとて、彼盒子を武松に與へければ、武松これを開て内をみるに、果して一瓶の酒、一盤の肉、一盤の麪あり。武松闇に思ひけるは、先我に酒食を吃せしめて、其後殺さんと云事ならん、遮莫何ぞ是を用ひざらんやと、時を移さず酒食盡く用ひ罷しかば、彼

好意なり。武松が云く、我曾て半點の病なし、速に殺威棒を受なば却て清かるべし、若此棒を預りなば、我心豈よく片時も安んずる事あらんや。又縦ひ實に病ありとて、百や二百の棒を受んこと何ぞ恐れん。管營呵々と笑て、此者必定熱病に犯され、未だ汗發せざるゆゑ、只顚亂言を申なり、彼が言を聞入ず、疾房間に引歸臥しむべしとて、下官等に命じければ、三四人頓て武松を引立て、營中の房間に送り入ける。是より武松剛勇の働品々、後巻に追々出るを見給へ。

を請よとて、則左右を呼りしかば、許多の下官共已に立騒ぎける處に、武松が云く、汝衆人必ず騒動することなかれ、我若一棒にても缺ることあらば、是大丈夫にあらず、又一聲にても喊ぶことあらば、是豪傑にあらず、汝等速に棒を下せ。兩邊に列座しける役人共、都て打咲て云けるは、這痴漢何ぞ自ら死を取るや、恐らくは棒を受熬んこと能ふまじ、と低言しかば、武松又云く、汝等打ばはやく打て、若輕く打ば、我却て快かるまじ、力を盡して痛く打て。左右の衆人これを聞て、都て又大に笑て云く、此漢子遂に骨を碎かるべきものをと、未だ云も畢らざるに、一人の下官棒を取て進み出ける處に、管營の傍に一人の漢子來る。身の長六尺許にして、年の比二十四五歳と見え、面の色白く腮の鬚長く、頭には手巾を捲き、身には紗服を著しけるが、已に管營の前に至て、乃管營の耳に附て暫く低言ける處に、管營忽ち武松に向て云けるは、汝道中に於て病を得たるよな。武松が云く、我道中に在ては、酒を飲み肉を食し、身體益堅固にして、曾て病を得たることなし。管營が云く、彼は道中にて病を得しか共、今少し快氣を遂んと、斯は申すらめ、然れ共病後の事なれば、暫く且殺威棒を預置き、他日病全く平復せば、其時に方に殺威棒を行ふべし、とて故意下官等を瞧しかば、下官等其意を悟り、乃武松に對して云けるは、汝早く病有しと云べし、這は是管營相公汝に殺威棒を免給はんとの

なせし者なれば、世間の事をも曉すべき處に、かく時務に達せざるはいかん、汝已に此營中に來るからは、縱ひ犬猫たり共、汝に打るゝもの有まじ、汝宜しく汝が分量を知れ。武松が云く、汝斯云は嚇して賄賂を求んと欲ふや、汝若我を憐むの言を云なば、我肯て多く賄賂を送るべきに、汝已に此のごとく我を羞辱むる上は、我一錢も汝に與ふまじ、若再三望ならば、我此拳を以て汝が太陽の上に與ふべし、汝若能勢あらば、われをいかんともせよ。彼差撥此言を聞て大に怒り、忽ち身を回して營外に馳出けり。此時諸の流人ども再び相聚つて武松に云ひけるは、豪傑何ゆゑ差撥に無禮を云給ひしぞや、差撥必定管營相公に告て、足下の性命を害するは必定なり、少刻禍の到ることあらん、豪傑何を以てこれを脱れ給はんや。武松が云く、何の怕るゝことかあらん、彼文を以て來らば、我文を以て對し、彼武を以て來らば、武を以て對せん、列位必ず我爲に憂へ給ふことなかれと、云も終らざるに、三五人の兵來て大に呼りけるは、新參の流人武松は何れに在や。武松答て、武松こゝにあり、我一足も走るまじきに、汝何ぞかく大音に呼るや。彼兵共再び答ず、遂に武松を引て點視所の前に至りければ、管營相公廳上に出で、武松を罵つて云く、汝罪人、我朝の太祖武德皇帝の遺し給ひぬる法度を知りけるや、凡流人初て營中に至る時は、一百の殺威棒を打つ事あり、我今汝を打つべきに、宜しく棒

獨房間に閑坐しけるに、先達て營中に在る流人共凡十四五人、武松が房間の内に至て云けるは、豪傑汝は新來のことなれば、定て營中のことを知り給ふまじ、若汝賄賂の銀あらば、預じめ是を包て待候へ、少刻差撥來るべき間、暗に其銀を差撥に送り給へ、然る時は彼殺威棒と申て、初て來る流人を打つの棒有けるが、是を打つ事尤輕し、若賄賂を送らざる時は、此棒を打つ事甚重し、我輩皆汝と同じく罪人なる故、特々來て此事を汝に告申すなり、諺にも兎死ば狐悲むと云こと有て、物各其類を悲む、我輩今汝に此の如きことを告るは、乃其類を哀むの道理なり。武松が云く、列位の懇意誠に感謝に勝ず、我身邊にも少しは銀を所持しけるに、彼若これを求る時は、幾何の銀を與へんや、彼萬一我を嚇して、求んとするならば、我却て一錢も與ふまじ。諸の流人共是を聞て云けるは、豪傑必ず這樣のことを云給ふことなかれ、我が輩皆彼が下知を蒙るなれば、いかんぞよく彼に對して頭を低ざらんや、只宜しく慇懃に說話し給ふべしと、纔に云了りける處に、又一人の罪人來て、差撥官人はや至り給ぬと告ければ、諸の罪人共各四方へ散去けり。武松は猶房間の内に居ける處に、彼の差撥進み入て問けるは、新來の流人は何れに在や。武松答て、新來の流人は則某なり。彼差撥が云く、汝何ぞかくのごとく無禮なるにや、汝は是景陽岡にて虎を殺せし豪傑にて、巳に陽谷縣に於て都頭の職をも

夫婦再三再四詞を盡して留めければ、武松辭すること能ずして、一連に三日逗留し大に張青夫婦が懇情を蒙りしかば、武松心中に甚だ夫婦の者が厚意を感じ、遂に張青と義を結んで、兄弟の約を誓ひ、其年齒の高低を論じけるに、張青は武松に五歳の長なりしかば、乃ち張青を拜して兄と定め、恰も同胞のごとくなり。武松此日張青を辭して別を告ければ、張青則酒宴を設け、別離の盃を催し又十兩の銀を武松に送り、餞の薄儀なりとし、又三兩づつの銀を二人の下官に與へ、張青夫婦已に武松を送て路口に出で、互に依々戀々遂に雙方に別れけり。

○武松威安平寨を鎮む

扨も武松は兩人の下官と共に、其日に孟州の城下に至り、直に府尹が衙門に趣きけるに、府尹廳上に出て、武松幷兩人の下官を堦の下に呼寄せ、東平府よりの文書を請取披覽し、早速返文を修へて、下官に與へ、直に東平府へ回しめ、一人の雜兵に命じて、武松を當地の營中に送せければ、則營中に武松を導きける。武松則營門を看に一つの額懸れり、額の上には三つの大文字ありて、安平寨と書り。房間の内に至りし時、雜兵が云く、汝は宜しく此處に在て、差撥の來るを待候へとて、己は役所に至て斯と告げ、遂に領書を乞取、再び城下へ歸りける。武松は

婦夜飲を催すべしとて、遂に燈を秉て盃を新め、酒又數巡に至りし處に、武松又張青夫婦に對し、諸の豪傑等が所爲、人を殺し火を放つことを語り、將又山東の及時雨宋公明が洪德を稱美して云けるは、宋公明は元來雙なき英雄にて、義を重んじ財を輕んじ、專らよく人の危急を救はれけるが、これ又禍を惹出して、故郷を走り出で、已に今柴大官人の館に居給ふ、と語りければ、張青夫婦も宋公明が德あることを稱美しける處に、二人の下官此談話を聞て、大に驚き恐れ、再四身を揮はし色を失ひければ、武松これを見て、乃ち兩人の下官に對して云けるは、汝兩人道中慇懃に仕へて、我を此處迄送りしことなれば、我輩毛頭汝等を害する心なし、惣じて我が如き豪傑の談話する所は、武を帶し勇を兼ね、人を殺し火を放つ言多し、汝等誤つてこれを恐るゝなかれ、我輩は誓て善をなす人を殺さずして、只惡を倣す人を殺すのみ、我は是恩を忘れ義を背くの徒にあらず、汝等宜しく心を寛げ只顧酒を酌め、明日孟州に至りなば、我猶重く汝兩人を謝すべきぞ。張青も又兩人の下官に對して云けるは、汝必ず我輩が談話を聞て、徒らに疑心を生じ恐るゝことなかれ、只宜しく安心して酒を飲よとて、自ら盃を擧て勸めければ、兩人の下官此時始て心を安んじ、一連に三五盃酌乾けり。已にして夜も漸更しかば、遂に盃を收めて、其夜は各張青が家に歇みけり。翌日武松別を告げ、打立んとせし處に、張青

いならん、しかじ此所にて彼兩人の下官を殺し申さんに、都頭は暫く我家に滯留あつて、疲をも慰め給へ、若又肯て强盜の頭領をもなし給はんとならば、我自ら都頭を二龍山寶珠寺に薦め送つて、かの魯智深と一所にあらしめ申べし、知らず此議許し給ふべきや。武松がいはく、此議尤然りといへども、只一つの事有て足下の厚意に從ひがたし、我原來只よく上に在て剛き者に傲り、下に在て弱き者を憐む、況や此兩人の下官は、路すがら慇懃に我を敬ひ、一點も麁略のことなし、我もし兩人が命を害せば、天理必ず我を饒し給ふまじ、足下もし我を憐み給はゞ、宜しく我が爲に彼兩人が命を助け給へ、然らば我ます〳〵感心すべし。張青が云く、都頭の宣ふ所は、都て義士の本意なり、我急に彼を助くべしとて、頓て二人の下官を凳より拖落し、一碗の毒を消す藥を、口中に灌入ければ、彼兩人の下官、恰も夢中に在て、睡の醒たる如くにして起上り、則ち武松に對して云けるは、此處の酒はいかなる美酒なれば、僅一碗を飮けるに、何故はやかくの如く前後も知らず醉けるにや。武松これを聞て呵々と笑ひければ、張青夫婦も同じく咄と笑ひし處に、彼下官等偏に其意を曉ずして、共に笑ひけるこそ好咲けれ。此時又張青再び小二小三に命じて、豐に酒宴を設けしめ、乃ち後園に於て大いに飮酌を催しけり。張青夫婦盃を執て、再三武松を勸め、又兩人の下官を强ひ、酒已に數巡回りし處に、日色薄暮に近ければ、張青夫

ある體を夫人に見せぬ、我老早彼酒には毒あることを知て、暗にこれを捨て、詐りて毒に中りし模樣を致しければ、夫人果して、我を害せんとせられしゆゑ、我勢に乘じて夫人を駭しめり、彼渾りし酒、器に移し有を見給へ。張青これを聞て呵々と打笑ひ、已に酒宴を設け、武松を欵待けり。武松が云く、張公かくの如く懇情を垂給ふ上に、彼兩人の下官をも助け給はんや。張青が云く、我少し所存ある間、都頭先我人を宰る所を見給へとて、乃武松を引き、人を殺す空房の内に入る。武松此處を見るに、壁の上には許多の人の皮を掛け、梁の上には五七對の人の腿を吊けるが、其血臭きこと、鼻を襲うて勝ず。彼兩人の下官は、はや人を宰る凳の上に有ければ、武松則張青に對し、張公我爲にはやく是を助け給へ。張青が云く、彼を救んことは、何より最易し、まづ都頭の犯し給ひし罪の次第を語り給へ、我豫め是を聞て、其後彼を助ることを商議すべし、某頗る所存あるゆゑ、先下官等を助けざるなり。武松是を聞て彼西門慶と阿嫂を殺し、兄の仇を報ぜし次第、知縣の査照心に任せざりし樣子迄具に語りければ、張青夫婦大に感歎しけるが、張青が云く、我今一句の言を以て都頭に勸め申さんに、知らず領承し給はんや。武松が云く、張公の諫め給はんことあらば、速に語り給へ。張青が云く、某熟々都頭の身の上を思ふに、都頭もし孟州の配所に至り給ひなば、艱苦を請給はんこと最大

に我回て、先彼禪杖を見たるに、等閑の輩の用ふべき禪杖にあらざりし故、某急に毒を消す藥を口中に灌入れて、再び救ひ起し、竟に某と義を結んで兄弟の盟を誓ひぬ、今はかの二龍山寶珠寺に在て、青面獸楊志とやらん云者と共に、强盜の頭領をなして居けるが、何度書を寄せて、我を山陣に招くといへ共、我尚未だ往く事能ずして、其招に應ぜざるなり。武松が云く、我も旅中に在て、魯達の大名を聞く事久し、彼は是眞の英雄なり。張青が云く、我又愚妻に命じ、第二に殺さしめざる人は、專ら今世間に往來する妓女婊子の類なり、此輩は皆客を敬ひ舞を奏ひ、十分に慇懃の心を盡して、僅の銀を求むる者なれば、豈能これを殺さんや、若我彼輩を殺さば天下の豪傑に嘲り哄るべし、又第三に殺さしめざる者は、配所に赴く流人なり、流人の内には儘豪傑多し、若誤て誠の豪傑を殺さば、某一世の後悔なり、然るに愚妻我が言を用ずして今日又都頭を殺さんと欲せしこと、是大いなる過なり、若我片時遲く回りなば、何を以てか我此一片の心を露さんや。母夜叉孫二娘がいはく、我も本都頭を害すべきとは思はざりしか共、第一都頭の包袱の重きを見、第二には都頭我を戲れ給ひしゆゑ、我不圖怒を起して、已に毒酒を進めたり。武松が云く、我は實に是鐵石の心にて事に戲れを云たることなし、然れ共夫人再三眼を留めて我包袱を看給ひしに依て、我先これを疑ひ、故意戲れを云て、我心に油斷

の住居を好まざりし故、再び此處に移て、酒を商賣するを家業と名付け、若旅人貨多き者過る時は、酒の内に蒙汗薬を入て飲ましめ、遂に其命を害して、貨を奪取り、又其人肉を牛肉と名付て、肉包を製り、某毎日これを村中に携へて賈ひせり、某以前より天下の豪傑と交を結びしゆゑ、豪傑等我を呼で、菜園子張青と申ぬ、我妻は姓は孫、父が武藝を傳へ、又聊力量あり、人皆彼を呼で母夜叉孫二娘と申す、彼が父は三四年以前死去致しぬ、其名を山夜叉孫元と號して、天下に名高き豪傑にて候ひき、某今村中より回て内に入し處に、愚妻が再三呼り喊ぶを聞て、何事やらんと驚き見しに、想はず都頭に相見え、自ら雀躍に勝ざるなり、某常に牢く愚妻に命じて殺さしめぬ人三つあり、第一は雲遊の僧なり、雲遊の僧は多くは方々に流落れ、艱難を受る者なり、況や出家のことなれば、豈あへてこれを殺すに忍びんや、向にも已に天地を驚しむる如き豪傑を殺さんとせし、此人は原是延安府老种經略相公の提轄官、姓は魯、名は達と云て、只三拳を加へ人を打殺したる故、五臺山に上て出家を遂ぬ、彼が身中に花を刺黥しけるに依て、人皆彼を呼で花和尚魯智深と申す、此僧一つの禪杖を使得たること最も神妙なり、乃ち禪杖の重さ六十斤許もあらん、彼も向に此所を過りて我店に入し故、愚妻又酒の内に蒙汗薬を入れ、遂に毒に中らせ、後の空房に扛入れ、これを害せんとしける處に、幸ひ

此女の夫なるか。答て云く、其女は實に某が妻なり、彼眼有といへども、眞の豪傑を識らずして、妄に威風を犯し申しぬ、願くは某が心の誠あるを顧給ひて、愚妻が科を赦し給へ。武松彼が斯慇懃なるを見て、忙はしく女を放ち起して云けるは、我熟々汝夫婦をみるに、尤等閑の人にあらず、願くは姓名を聞ん。漢子先妻に對し云けるは、汝速に都頭を拜して、宜しく罪を謝せよ。武松是を聞て云く、我一時の怒に乘じて夫人を痛めたり、望らくは怨み給ふことなかれ。彼妻急に拜をなして云く、我肉眼眞の英雄を識らずして、嚴威を冒し申せし事、今更後悔極りなし、願くは只罪を宥し給へ。彼漢子が云く、先宜しく草廳に移りて、談話致し申さんとて、遂に武松を延て草廳に至り、賓主座已に定りければ、武松又云く、願くは先、汝夫婦の姓名を報じ給へ。彼漢子が云く、某姓は張、名は青と申し、原此邊の光明寺と云寺に在て、菜園を預りて居候へども、不圖僧衆と爭を做出し、寺中を燒拂ひ、其後此大樹坡の下に徘徊し、强盜をなせしに、一日一人の老翁に遇て、これを剝取んとせしに、此老翁武藝の達者にて、某と三十餘合戰ひ、つひに某を打倒しぬ、此老翁も又壯年の時より强盜をなして、武藝を熟練したるなり、彼某が働活動なりしとて、遂に某を引て城下に囘り、己が武藝の祕術を、盡く某に傳へ、又此女を某に嫁せしめて、親子の緣を結びぬ、某原來城下

す能ざりしかば、彼女是を見て、大に焦燥ち、汝兩人何ぞ彼一人を扛上ること能はざるや、我是を拖上て見せんとて、遂に武松が前に至て、輕々と扛起さんとせし處に、武松急に雙手を伸して彼女を胸の上に抱上げ、猶兩腿を開て彼女が腰の邊を挾み、乃ち勢に乘じて緊ければ、彼女少しも動き働くこと能ず、大きに驚きて喊びければ、彼兩人の後生急に來て助けんとせし處に、武松大に吼つて、近き倚らば摑殺さんと罵りければ、兩人の後生此聲を聞て、偏に只呆れたる許なり。彼女自ら罪を謝して云けるは、我誤つて豪傑を犯せり、願はくは豪傑我を饒して放ち給へと、纔に云了らんとせし處に、一人の漢子外面より走入て、只顧呼つて云けるは、豪傑怒を息て、其女を饒し給へ、我自ら說話することあり。武松これを聞て急に跳起き、彼女を左の脚に踏著け、雙の手は拳を捏つて彼漢子をみるに、頭には紗の四面金を戴き、身には布の短袖衫を著し、面の色黑くして微し髭あり、年の比は三十五六歲許なり。彼漢子武松を見て、慇懃に手を束ね云けるは、願くは豪傑の尊姓、大名を承らん。武松が云く、我は是陽谷縣の都頭武松と云者なり。彼漢子が云く、景陽岡の上にて虎を殺し給ひぬる、武都頭にてはあらずや。武松が云く、我乃ち其武都頭なり。彼漢子これを聞て、忙はしく拜をなして云く、某都頭の大名を慕ふこと日旣に久し、今日何の幸に依て、尊顏を拜するや。武松が云く、汝は

なり、少刻盪めて來らんとて、自ら心中に思ひけるは、此酒の内には蒙汗藥を入置けるが、熱く盪むる時は毒藥いよ〳〵其驗疾し、彼自ら熱きを好むは死を急ぐ道理なり、我遂に是を殺すべきものをとて、頓て酒を盪め拿來り、則これを三碗に篩て、武松等三人を勸めて云けるは、客官試に是を酌で味ひ給へ。兩人の下官是を聞て大に悦び、急に盃を執て飲乾ければ、武松も執上て、彼女に對し云けるは、我は原來肴なき酒を飲む事能はず、別に又肴あらば、我に與へ用ひしめんや。彼女が云く、尙牛肉を與へ申さんとて、頓て座を立て出ければ、武松忙はしく盃の酒を把て傍にある器の内に潑し入れ、故意舌打して云けるは、此酒味狠き美酒なり、最も能人を醉しむと呼りければ、彼女此聲を聞て急に走入り、則手を拍て、汝等早く倒れよ、と未だ云も了らざるに、彼兩人の下官忽ち渾身痲れて、席上に倒れければ、武松も又詐つて眼を閉ぢ、終に盃を棄て打倒れぬ。彼女、呵々と打笑て云く、汝等縱ひ鐵石の身たりとも、いかんぞよく我酒の毒に中らざらんやとて、乃ち小二小三と云ふ二人の後生を呼出し、彼兩人の下官を堂の後に扛入らしめ、彼女は自ら三人の者が包袱纏を探て、只顧掂り見て云けるは、此内には正しく金銀多く有と覺えたり、今日の得采尤大吉利市と喜悦して、遂に包袱纏を收めける處に、兩人の後生再び出て武松を扛起さんとしけれども、恰も千萬斤の重きごとくにして、動

ふや、我が此處は古へより清平の地にして、曾て人を害したることなきなり。武松がいはく、我此肉包の内を見るに、人の頭髪あり、是によつて我是を疑ふ、且汝が夫は何故家に在ざるや。彼女が云く、我夫は商賣の爲、頃日外鄕に出て、未だ家には回らざるなり。武松が云く、已にかくのごとくんば、汝獨膝を抱いて嘸寂莫からん。彼女笑を含んで暗に想ひけるは、這配軍自ら死をいたすことを知らずして、却て我を戲るゝは、是乃ち夏の蟲火を撲ち、焔を惹て自ら身を燒に似たり、我終に汝を害すべきものをと、乃ち打笑て云けるは、客官戲れを云給ふことなかれ、且此處は風曾て來らざれば、後園の樹下に坐して乘涼給はんや、もし晩なば乃ち我家に歇み候へ。武松心中に想ひけるは、此女必定惡心を夾んで、我を留るに疑ひなし、我却て先彼を試んと、再び彼女に問て云けるは、汝が家の此酒は、甚だ淡うして用ひがたし、別に又美酒あらば、是を出さんや。彼女がいはく、我家に尙一種上々の美酒あれ共、唯少し渾れるゆゑ、妄に是を出さゞるなり。武松が云く、其溷れる酒こそ、いよ〳〵味よきものなり、汝速にこれを出せ。彼女是を聞て暗に悅び、遂に一瓶の溷酒を拿出ければ、武松これを見て云けるは、此酒極めて美なるべし、凡溷酒は熱くして飮む時はいよ〳〵味好し、汝是を盪めて來らんや。彼女が云く、客官の宣ふ如く、此酒は熱くして飮む時は、味ます〳〵美

に製へ、是も商物となす、希有の婦人とはさらに知れざりしなり。

○武都頭十字坡にて張青に遇ふ

流人武松酒店の後堂に入て坐しければ、下官が云く、此處は別に人の見るにもあらず、宜しく都頭の頸枷を除て、休息致させ候はんとて、遂に枷を外しければ、武松大に悦び、乃ち窓に倚て疲を慰めて居ける處に、彼女滿面に笑を含んで云けるは、客官幾何の酒を沽給ふや。武松が云く、幾何を論ぜず、只顧に汲來れ、肉あらば是又三五斤を切て出すべし。彼女又問て云く、肉包は用ひ給はんや。武松が云く、是も同じく二三十携へ來れ。彼女呵々と打笑て内に入り、頓て一桶の酒と一盤の肉とを携へ出て云く、客自ら酒を勸め給へと、酒已に五七碗篩ければ、又肉包を持て座上に出ける處に、武松先是を執て二つに開り、乃ち其内を見て云けるは、此肉包は人肉を用ひぬるや。彼女打咲て云く、客官戯れを云給ふことなかれ、今の世に何ぞ人肉の肉包あらんや、我家の肉包は先祖より牛肉を以て製し候なり。武松が云く、我多年旅中に在て、人の云しを聞ぬるに、大樹林十字坡の輩は、專ら旅人を害し、其肉を用ひて、肉包を作るとなり、汝必ず我を誑くことなかれ。彼女が云く、客官何ぞかやうのことを云給

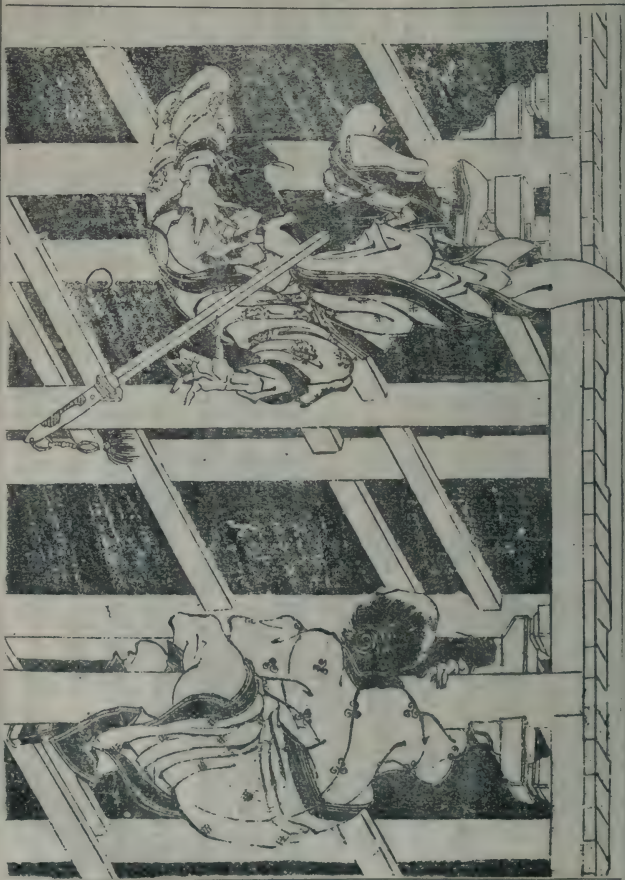
して云けるは、且暫く此所に休息し、嶺を下り若酒店あらば、酒肉を調へ食すべし。兩人の下官然りと同じ、暫く嶺上に歇て、遂に麓に下り來り、其邊を望けるに、遙の坂の下に僅十餘間の草屋、盡く渓に傍てありけるが、柳の樹の上に一つの酒帘を掛しかば、武松これを見て云けるは、彼所に酒帘を掛けるは、必定酒店有らん、早く往て酒を汲べきに、我に跟て來れとて、忙はしく嶺を下つて來りける處に、岡の邊に一人の樵夫柴を荷うて過りしかば、武松是に問て云く、此より孟州へは尚幾干の路ありや。樵夫答へて、僅に一里の路あり。武松又問て云く、此處の地名は何と申や。樵夫が云く、嶺の下に見えし大樹林は、則ち是十字坡と申て有名の地なり。武松此時兩人の下官共に、十字坡の邊に至つて樹林を見るに、第一の大樹は凡六人圍もありしかば、武松是を希有の大木なりと賞し、已に酒店の前に至て此所を見るに、酒店の内に一人の女坐しけるが、頭の上には鐵環を插し、鬢の邊には野花を插しぬ。此女已に武松等三人、門前に至りぬるを見て、急に出迎て云けるは、客官暫く憩み給へ、我店には美酒美肴菜包肉包等も賈へば、望に任せて食し給へ。武松是を聞て兩人の下官と倶に、店の内に入ければ、彼女遂に三人の者を延て、後堂に坐せしめけり。抑此女何者なれば、菜園子張青が妻、母夜叉孫二娘とて、蒙汗薬の酒を賣て旅人を醉しめ殺して、行李衣類等を奪ひ、殺せし肉を切取て肉包

居たりけり。扨陳府尹は、武松が義あるを感じ是を憐み、常に人を馳て武松を問しめける間、牢守以下の者共、皆々武松を懇に介抱し、時々酒食を以て欵待ぬ。陳府尹ひそかに一通の密書を東京の刑部官等が方に送つて、武松が死罪を赦したきよし、頼遣しければ、刑部官等原來陳府尹と親しき故、早速省院官に告げ、武松が罪を流罪に議定し、其日文書を修へて、東平府に下しければ、陳府尹文書を見て悦び、急に陽谷縣へ人を馳て、西門慶が眷屬、并に何九叔鄆哥及び諸近隣等を、再び東平府に呼寄せ、則廳前に於て、東京より下りし文書を諸人に讀聞しめ、武松を輕く四十杖策つて面に刺黥し、七斤半の頸枷をかけ、孟州に流罪せしめ、諸證正人ならびに西門慶が眷屬等は事なく縣に回らしめ、王婆は街中を引渡して斬罪に行ひけり。隣家共は家財變賣せし銀子を武松に與へ、遂に各別れければ、武松は二人の下官と共に、東平府を出て孟州へ赴きけるが、二人の下官原來武松が豪傑たること隱なければ、道中慇懃に事へ、少しも怠慢のことなく、武松も又其懇情を感じ、此村彼里に於て、多く酒肉を與へければ、兩人の下官彌悅んで、共に心を傾けぬ。武松三月の初に仇を殺し、二ケ月餘り牢中にあり、今孟州路へ出れば、六月の前後にして、炎暑勝がたきまゝ、毎日朝涼に乘じて路を急ぎ、約莫二十餘日馳ける處に、一つの大路に至りて嶺の上に登りしかば、時已に巳の刻なり。武松兩人の下官に對

を取り、早速下官許多兩所に分遣し、彼妻が屍首西門慶が屍首とを查點させ、且武松と王婆とに頸枷を枷て牢中に遣し、其餘の者共は都て縣裏の役所に入置けり。扨知縣相公暗に想ひけるは、武松は原來義氣重き豪傑なり、況や此度我が爲に東京に上り、事を完へて回りたる功勞も大いなり、我宜しく彼を救ふべしとて、則諸役人と商議して云けるは、我武松を見るに、義氣鐵石の英雄なれば、先死罪を免し、當縣の本府東平府に送て、知府相公の決斷を求んと思ふはいかん。諸の役人共誰か敢て知縣の言を背くべき、一同其議に伏しければ、知縣即日一通の文書を修へ、二人の下官をさし添へ、武松王婆ならびに何九叔鄆哥諸近隣、盡く皆東平府に遣さんと議定しければ、縣中縣外の人民共、武松が勇を憐み、思ひ〳〵金銀を以て、武松に餞しけり。武松は旅裝束の間を免され、房間に歸て用意をなし、頓て十四五兩の銀を鄆哥が親に送らしめ、都て完く調りしかば、兩人の下官、武松ならびに何九叔等を催促し、其日遂に東平府に至りけり。此時府尹陳文昭已に廳上に出て、武松等を廳前に呼入れ、且陽谷縣の文書を披き讀み、諸の口詞共を一覽し、猶明白に來歷を糺し、武松が罪を輕しと定め、先入牢させ、王婆が罪は重しとて頸枷をかけて、死罪人の牢中に押入しめ、何九叔鄆哥ならびに諸の鄰家共は、無事に陽谷縣に回しければ、西門慶が眷屬共は東京よりの決斷を待ち、暫く消息を窺て

○母夜叉孟州道にて人肉を賣る

此時武松は諸〻の隣家に對していはく、我今亡兄の爲に仇を報ひ、寃を雪ぎしことは、尤理の當る所なれば、縱ひ死すとも怨なし、只某諸高隣を駭かし申せしこと、願くは是を恕し給へ、我已に罪を犯しぬる上は、存亡死生保んずまじき所あり、今日且家内の道具を變賣へ、官司へ出る時の使用に備へんと欲す、諸〻高隣我が爲に之を變賣して給はり候へ、又我官司に出なば、もろ〳〵高隣の見給ひし所、一々我に替て訴へ給へ、望らくは勞を避給ふことなかれ。諸隣家是を聞て、皆其意を領承し、頓て家内の道具を取出し、遂に是を變賣しかば、武松乃ち二つの首を手に提げ、諸隣家とともに縣裡を望で馳來りぬ。此時街に出て見物する者數を知らず。知縣此事を聞て大に驚き、忙しく廳上に出ければ、武松は諸隣家とともに、王婆を引て廳下に至り、乃ち彼二つの首を堦の下に置き、武松は左の方に跪きければ、王婆は中央に引居ゑ、隣家共はこと〴〵く右の方に跪きぬ。武松頓て彼胡正卿が寫したる口詞を取出し、一一詳に訟へければ、知縣先王婆に問ける處、王婆が白狀少しも口詞に差はざりしかば、諸隣家も又、其見聞したる處具に訴へける。知縣又彼何九叔と鄆哥とを呼出して、明白に其口詞

友これを見て、忽ち眼を眩かして倒れけり。西門慶今は脱れがたしとや思ひけん、忙しく右の足を飛せて踢たりしかば、其足武松が右の手に中つて、武松が持たる刀を、樓の下街の上に踢落したり。武松刀を踢落され大に怒り、彼虎を殺したる勢を揮て、電のごとく跳蒐り、則右の手を以て西門慶が肩胛を揪へ、左の手にては其兩足を握り、乃窓の内より街の上に望んで、力に任せて投落しければ、西門慶眞倒に成て遙の下に落にけり。武松は原來武藝の達人にて、身を跳ばしむるの術を善しけるゆゑ、又彼阿嫂が首を拾ひ取て、輕々と身を躍せて、街の上へ跳下り、彼踢落されたる刀を再び尋ね取上げ、西門慶が頸の上に當て罵りけるは、汝我兄を毒害したる天罰、まさに今思ひ知らするものなりとて、終に頭を刎落し、彼女が首と同じく、頭髪を結び合せ、左の手に是を提げ、恰も奔雷のごとく吼て、再び紫石街の兄が家に回り、頓て二つの首を靈前に供て云けるは、我兄の靈魂早く天界に生じ給へ、我今日奸夫と淫婦とを殺して兄の仇を報じぬと奠了り、則ち又雜兵に仰せ、諸の隣家を樓の下に邀はしめければ、隣家共皆王婆を拖りて靈前に至りぬ。此時武松兩人の首を執て、諸の隣家に對して云けるは、我倘一句の言有て、高隣の衆中へ語り申さんに、敢て聞給はんや。諸隣家がいはく、都頭もし語り給はんことあらば、速に示し給へ、某ら敢て命に從ふべしとて、衆皆一同に答へけり。

兵に命じけるは、汝兩人必ず樓門を守て、一人も出さしむることなかれ、我少停來るべしとて、外より樓門を閼し、直に西門慶が藥舖に至て、老主官に向ひ問て云けるは、大官人は今家に在や。主官答て云く、主人は先に他出致されぬ。武松が云く、我汝に一言問ん、早く我に從て來れ。彼主官武松が勢の猛きを看て敢て背ず、遂に武松に引れ、僻靜なる地に至りしかば、武松詞を荒らげて云けるは、汝は死せんことを欲するや、又活んことを欲するや。彼主官大に驚き、某曾て都頭を犯したることなきに、何ゆゑかくのごときことを云給ふや。武松が云く、汝もし活んことを欲するならば、西門慶が行向を知らせよ、若死せんと欲せば、西門慶が行向を云ことなかれ。彼主官が云く、我主人は今一人の友に引かれ、獅子橋の下の酒樓に在て、酒を飲で居らるゝなり、都頭もし用事あらば、自ら尋ねて行給へ。武松是を聞て大に悅び、飛がごとく跳行しかば、彼主官此光景を見て、甚だ讋れ慄きけり。武松已に獅子橋の下の酒店に至て、小厮に問けるは、西門慶は誰とともに酒を酌で、此所に在や。小厮答て云く、一人の友と酒興を催し、樓上に居給ふ。武松是を聞て直に樓上に登り、阿嫂が首を西門慶が面の上に投かけしかば、西門慶肝を消し、急に逃んとして、窗の内より、下を望けるに、其下は遙の街なれば、跳下るゝこと能はずして、纔に猶豫しける處に、武松雷のごとく吼り跳蒐りしかば、西門慶が

給へ、我詳に白狀すべし。武松急に彼女を扯起し、遂に靈前に跪せて罵りけるは、淫婦、早く實情を白狀せよ。彼女肝を消し魂を散し、則彼日簾を取落して、西門慶が頭巾を打てより以來、私情を通じたる事共、一々微細に語り、其後又藥の内に砒霜を加へて、毒殺したること、始終詳に白狀したりしかば、武松胡正卿に白狀の言を書しめ、又彼王婆を罵つて、賊老婆、此上にも詐らんや。老婆此時止ことを得ずして、遂に白狀しける處に、是又胡正卿に其言を寫さしめ、乃ち兩人の女が名を書せ、其下に判を押さしめ、武松又諸々の隣家に對して云けるは、列位も證見人たる間、宜しく名判をすゑ給へとて、遂に諸々近隣に判を押させ、頓て雜兵に命じ、兩人の女を高手小手に縛しめ、靈前に引居ゑ、武松謹んで武大郎が靈牌を拜して云く、愚弟武松今日兄の仇を殺して、恨を雪ぎ申す間、九泉の下に於ても、これを悅び給へとて、香を撚りければ、彼女この體を看て大に驚き、すでに喊んとせし處を、武松急にこれを踢倒し、遂に胸の上を一刀刺て、五臟六腑を引出し、靈前に供へ、回す刀にて女が首を刎しかば、血は流れて席上に溢れぬ。諸々近隣是を見て大に恐れ、衆皆面色を失ひけり。武松又諸々近隣に對して云けるは、列位再び樓上に登りて坐し給へ、我尙一つの事を完つて少刻回るべし。諸隣家これを聞て互に目を見合せ、遂に皆々樓上に登りしかば、武松自ら王婆を引て樓に登り、乃二人の雜

て云く、賊老婆、汝我云事をよく聞け、我兄の性命都て汝が計に殺されぬ、我少刻詳に問べしとて、又阿嫂を罵つて云く、汝淫婦好も敢て我兄の命を害せしよな、汝宜しく謀の次第を、一々白狀せよ、然らば饒さん。彼女が云く、叔々何ぞ自ら誤り給ふや、我が夫は心痛の病を得て死し申されしかば、我が干る所にあらず、叔々是を察し給へ。武松益怒り、頓て彼女を靈前に踢倒し、即右の脚を擧て是を踏住め、又刀を以て彼王婆を指して大に罵つて云けるは、汝賊老婆、速に實情を申せ、若猶豫することあらば、忽ち此刀を飛せ、汝が首を刎べきぞ。王婆大に驚き、我實情を申べきに、願くは都頭怒を休給へ。武松急に彼雜兵に紙筆を出させ、胡正卿に對して云けるは、足下我が爲に彼王婆が云言を寫し給へ。胡正卿甚だ怕れて云けるは、某敢て寫し申さんとて、已に筆を執起げ又王婆に對し、汝早く實情を白狀せよ、我今都頭の爲に此を寫すべきぞ。彼王婆又心中に思ひけるは、我實情を白狀せば、必ず此席にて殺さるべし、且暫く抵賴んにはしかじとて、乃ち答て云けるは、我今實情を申さんと云けれ共、此事我知りし事にあらざれば、別に申さん事もなし、願くは列位我爲に罪を謝し給り候へ。武松是を聞き大に怒て云けるは、汝何ぞ此事を抵賴んとするや、我先淫婦を殺し、其後又汝を害し、天罰を受しめんとて、乃刀を擧て彼女の面に一著著ければ、彼女大に慌忙て云く、叔々且我を放ち起し

ら酒を飾で勸めければ、胡正卿暗に想道く、武松必ず好意を以て我輩を邀へつらんに、何ゆゑ又かくのごとく、人の忙はしきをも顧ざるやとて、再三心中に怪みけり。既にして盃六七遍巡りける處に、武松即諸隣家に對して曰く、且盃を收め申べしとて、頓て兩人の雜兵に命じて、盃盤を收めしめければ、此時諸の隣家已に座を立んとしけるに、武松急にこれを攔り住めて云く、諸の高鄰猶暫時相控へ給へ、我一言を申すことあり、知らず此内に善文字を書人ありや。姚文卿が云く、乃ち此胡正卿善文字を書申さるなり。武松が云く、胡公すでによく文字を書給ふならば、我少し賴申度ことありと、未だ云も終らずして雙の袖を捲り起げ、忽ち衣の下より、一挺の刀を拔出しもち、乃ち兩眼を睜開て云けるは、某今寃を報んと欲す、諸の高鄰我爲に證人となり給へ、必ず駭き給ふこと勿れ、とて忙しく跳蒐て、彼阿嫂を捉へて壓へければ、王婆これを見て、大に襲れ慄きける處に、武松又これを瞧んで、王婆走ることなかれ、と罵りしかば、もろ／＼近鄰おの／＼面を見合せ盡く色を失ひ怕れけり。武松がいはく、諸高鄰われを怪しみ給ふことなかれ、我はこれ鄙き村夫たりどいへども、また能寃あれば寃を報じ、仇あれば仇を報ず、願くは列位囘りたまふことなかれ、若一人にても囘んとする人あらば、我必ずこれを怨むべし。衆人是を聞て揮ひ慄くばかりなり。武松又王婆を罵つ

は、左も右も都頭の命に從ふべし。武松又右隣の姚文卿が家に至て邀へければ、姚文卿がいはく、今日は少し家事忙しき間、願くは免し給へ。武松がいはく、一盞の淡酒を勸めんに、強て邀へ申すは反て無禮に似たれ共、少しの間駕を移し給へ。姚文卿辭すること能はず、遂に來て王婆が次に坐しけり。武松又兩對面の趙仲銘、胡正卿を邀へて同じく座に卽しむ。既にして武松又王婆に問て云けるは、右鄰第三間の家は誰なるぞや。王婆が云く、彼は是張公と申す人なり。武松が云く、我猶彼人をも迎へ來るべしとて、乃ち張公が家に至りければ、張公武松にまみえて云けるは、都頭何の事有て、某を訪ひ給ふぞ。武松が云く、明日は亡兄斷七日なる故、一盃の淡酒を進め申さんに、來臨を惠み給へ。張公が云く、我未だ都頭に一言の弔問も申さゞるに、いかんぞ敢て請に應じ申さんや。武松が云く、張公何ゆゑ隔心の言を云給ふや、願くは速に來り給へ、とて遂に邀へて家に回り、卽姚文卿が次に坐せしむ。諸の隣家座已に定りければ、武松頓て盃を執て諸近隣を勸て云けるは、今日列位を邀へ申ぬと雖も、何の欵待もこれなし、只強て酒を酌て給はり候へとて、再三勸めて酒已に數盃巡りければ、胡正卿先別を告て云けるは、某今日は一つの事有て忙はしき間、席を辭し申すとて已に立んとせし處に、武松これを扯住て云く、汝既に來り給ふ上は、縱ひ忙はしきとも、倘暫く座に列り給へとて、自

三編　巻之二十五

○武松闘て西門慶を殺す

武松は兩人の雜兵を具して、多く酒肴を買調へて、武大郎が家に至りけり。此時彼妻は武松が訴訟准はざる由を聞て、大に心を安んじ、少しも怕るゝ色なかりけり。武松かの妻に對して云く、明日は是亡兄の斷七日四十九日の事なり。よつて諸の近隣を請て、酒を勸めたく思ふなり。彼妻が云く、我曾て近隣を勞したることもなきに、何ゆゑこれを請て、酒を勸め給ふや。武松がいはく、隣家悉く喪を送て、化人場邊まで出たるとなれば、宜しく此勞を謝すべし、嫂々必ず禮を缺給ふことなかれとて、卽靈前に香花燈燭を供て云けるは、嫂々宜しく客の來るを待て、これを欵待給へ、我は自ら諸隣家を邀へ來らんとて、先隔壁の王婆が家に往て、彼を迎へければ、王婆が云く、都頭必ず心を費し給ふことなかれ。武松が云く、亡兄別して汝を勞したること多ければ、我尤是を感ず、早々來り給へとて、遂に王婆を邀へ家に回り、乃ち彼妻に對して坐し給へ。此時王婆も又武松が訴、准はざるよしを聞しかば、自ら心を安んじて云ける

ならずして、西門慶を捉がたし、汝豈聞ずや、聖人の語に、經目之事猶未眞ならずと宣ふことあるをや、汝必ず人の云ふ背後言を信じて、事を惹出すことなかれ。諸の役人等武松に對して云く、人命の事は尤大なる沙汰なれば、正しき證見なくんば、分明に決斷しがたし、且此度は曲て靜り給へ。武松が云く、相公既に我訟を准へ給はずんば、某自ら此事を正し申べし、殊に今人命のことは大なる沙汰と各申さるれば、奸夫淫婦が命の重きことにや、我兄の命は我に於て重ければ、此上は止ことを得ず、我訟を我正すべきのみ、とて廳を下て房間に回り、何九叔鄆哥兩人を留置き、汝兩人暫く此に在て我をまて、我は少刻一つの事を完へて來んとて、則兩人の雜兵從へ、街の邊に馳出ぬ。是より武松何等の擧動をなすや、後卷に詳なり。

原本に武松を武二と書る所多し。武大郎有て、其次の武松なれば、武氏の二男と云儀なり。又百回本と七十回本を照し考ふるに、毎回標目大抵同じく、只金聖歎外書七十回の二十五回標目に、偸骨殖何九送喪と、供人頭武二設祭と二箇を出し、傳文も大同小異あり。其後七十回までは、又粗相同じ。

議しける處に、縣吏以下の役人等、原來西門慶が賄賂を受たる者どもなれば、私に使を西門慶が方に馳て、此事を告知らせ、尙且知縣に對して云けるは、此事卒爾に決斷し給ふことなかれ、恐くは不實のことあらん。知縣其議に同じて云けるは、武松汝も縣裡に在て、都頭の職をもなす者なれば、定めて官府の法度も見聞いて辨へつらん、古の語にも、盜賊を捕ふるには、其贜を見て捕へ、奸夫を捉ふには、其雙を見て捕ふと云ことあり、もしせめて汝の兄屍首あらば、猶事を正して奸夫を捉ふべけれども、武大郎が屍首は、已に燒捨たることなれば、何を以て正しき證見とせんや、其兩人の輩が云所、全く證見とするに足ず、汝自ら三思を加へて、宜しく此訴訟を休よ。此時武松彼骨と銀とを取出して、願くは相公これを見給へ、是乃大いなる證見なり。知縣是を取て云けるは、汝今日は且房間に歸れ、もし行はるべき事ならば、汝が爲に奸夫を捕へて罪を問ふべきぞ。武松是を謝して、遂に廳前を退き、彼何九叔鄆哥兩人の者を、尙己が房間に留置き、則酒食を設て欵待けり。此日西門慶は此事を聞て大に驚き、私に人を縣裡に馳て、上下の役人に賄賂を送りければ、知縣を初として諸の役人も、悉皆西門慶を助けんとぞ思ひける。翌日武松又兩人の者を引て、廳前に出ければ、知縣昨日の骨と銀とを武松に還して云く、汝妄に外人の云ことを聞て、西門慶を怨むることなかれ、此事尤明白

別して悪むべきは王婆なり、我年の幼を侮て云けるは、汝少年者、何ぞ卒爾のことを問や、西門慶とやらんは我家に來りしことなし、汝若再三問ば拳を與へんと罵りぬ、此故に我又彼等が樂をなすことを云て、聊王婆を辱めければ、王婆忽ち大に怒て、我を散々に打ぬ、某是を恨ること骨髓に徹り、其日遂に這等のことを武大郎に告て、商議を定め、翌日又武大郎と倶に王婆が家に往て、奸夫を捕へんとしける處に、西門慶卻て武大郎の胸の上を踢たりしかば、武大郎遂に血を噴て、房間の口に倒れ給ひけるが、其後五六日經ける處に、武大郎已に死去せらる、其死尤分明ならず、都頭よく明かに察し給へ。武松がいはく、此事彌詭なきや。鄆哥冷哄ていはく、都頭何ゆゑ我言を疑ひ給ふや、我縱ひ官府に出たりとも、此言毛頭違變することあらじ。武松が云く、旣にかくのごとくんば、事まさに明白なり、我今縣裡に回りて此事を知縣の相公に訴へん、汝兩人我に隨つて來れとて、乃ち何九叔と鄆哥とを引て、直に縣裡に回り廳前に至りしかば、知縣これを見て問けるは、武都頭汝は何事を訴へんと欲や。武松頓首して云く、某に一人の兄武大郎と云者ありけるが、其妻西門慶と密通し、遂に毒藥を用ひて兄武大郎を殺しぬ、此兩人の輩乃是證見なり、願くは相公明かに是を決斷し給へ。知縣是を聞て、先何九叔鄆哥に問糺し口詞を取り、早速縣吏等の役人どもを聚めて、決斷の事を

を收めて、心中に想ひけるは、此五兩の銀は凡二三ヶ月の家用に足べければ、我何ぞこれを辭することあらんやとて、則ち謝して云く、都頭我に此銀を惠み給ふこと、誠に感激に勝がたし、我少刻來て都頭と談話すべき間、暫くこゝに相待給はれとて、早速家に回て銀を老父に與へ、再び來て云けるは、都頭もし我に問ひ給はんことあらば、速に承らん。武松大に喜で云く、已にかくのごとくば我に隨ひ來れとて、遂に一間の酒店に至て、樓の上に坐しければ、酒店の小厮酒肴を具へて持出る。武松先鄆哥に對していはく、汝は年幼しといへ共、却て孝順の心ある事尤難得なり、我今汝を用ふべき所あるに、汝宜しく我爲に用ひられよ、然らば我又多く金銀を與へ、商賣の本錢ともなさすべきぞ。鄆哥が云く、知らず都頭は何事によつて我を用ひ給はんとにや。武松が云く、是他事にあらず、汝日外我が兄武大郎に力を添へ、王婆が店に於て、奸夫を捉へんとしたる來歴はいかんぞや、詳にこれを告よ。鄆哥がいはく、此事は去ぬる正月十三日、一籃の梨を西門慶に賣んと思ひしに依て、彼家に行たるに、他出して家に在ざれば、跡を追うて、遠近を尋ぬる内一人の友に遇て、西門慶を看ざりしやと問ければ、彼友が云く、西門慶は、今專ら紫石街の王婆が茶坊に在て、武大郎が妻と娛をなす、汝若用事あらば、王婆が家に往て尋ねよと敎へたるゆゑ、早速王婆が方に至りて、西門慶を尋ねし處、

日此骨を以て證見とする所以は、此骨の色を見給へ、半は紫に半は黑し、此則毒に中りたる骨なり、殊に其紙の上に年號月日、並に喪を送て來りし人々の姓名を書記せり、這はこれ我爲の口詞なり、望らくは都頭明かに是を察し給へ。武松是を聞き益大に怒て問けるは、是必定淫婦が所爲ならん、唯知らず、其奸夫は何奴ぞや。何九叔が云く、某も實正の事は知らざれども、日外人の云しを聞けるに、武大公已に奸夫を捉へんと欲して、菓を買ふ鄆哥と云少年者を語らひ給ひ、則間壁の王婆が店を、大いに閙し給ひぬるとなり、此事徧く遠近に流布して、人皆是を知れり。武松が云く、既に鄆哥と云少年者あらば、速に是を問て事の實正を聞ん、汝も宜しく我に隨て來れとて、遂に酒店を出て、鄆哥が家の前に至りけるに、此時鄆哥は手に竹籃を提げ、東の方より宿所を望で回り來りければ、何九叔且呼つて云く、いかに鄆哥汝は此都頭を識認たるや。鄆哥が云く、此都頭向に虎を殺し給ひぬる時、我曾て識認申ぬ、今日我を尋ね給ふならん、其所以我略これを猜しけれ共、唯恨らくは我自ら六十有餘の老父を養ふゆゑ、専ら營に忙しうして、閑談致すべき暇なし、都頭もし果して用事あらば、異日再び來り給へ。武松是を聞て云けるは、汝は猶少年たりといへ共、老父に事へて能孝を盡すよな、我今汝に銀を與ふべし、暫時我に隨て談話せよとて、則ち五兩の銀を出して鄆哥に與ふ。鄆哥銀

遲疑することあらば、卽時に先汝を害し仇とせんとて、已に兩眼を睜開しかば、其勢天神のごとくなり。何九叔此勢を看て大いに慄き、乃ち袖の内より一つの紙包を取出して云けるは、都頭怒を息め給へ、此紙包は是大いなる證見なり。武松紙包を取てこれを披き看るに、其内に兩塊の骨と、十兩の銀有ければ、武松問て云く、汝是を以て證見とする、其緣由はいかん。何九叔が云く、某曾て委細の事は知らねども、去る正月二十二日に、某不圖街の邊にて縣前の生藥舖西門慶に行遇しが、彼再三某を請て酒店に至り、乃這十兩の銀を與へて、汝後刻武大郎が屍首を看ることあらん、必我が爲に其死首を查照ことなかれと申ぬ。某是を疑ひ、這銀を頻に還さんとしけれ共、彼萬千詞を盡して强ひけるゆゑ、終に辭することを得ずして納め申ぬ、其後武大公の家に到て、其屍首を看けるに、痛しい哉武大公、日口鼻より血流れ、上下の牙を咬緊て死給ひぬ、是則毒に中りて死給ひしに疑なし、某本查點を遂んと思ひぬれ共、武大公の爲に力を出す人なき故、且これを心に收め、今に其沙汰を致さず時を待ちぬ、其節武大公の妻申されけるは、心痛の病にて死れしと申されたるとなり、某其日邪氣に中りたる體にもてなし、手下の火家等に扶られて家に歸りぬ、翌日又下火家等某に告て、武大郎が屍は第三日に出喪して、彌火葬なりと申す故、故意喪を送る體にて、私に此骨を拾取ぬ、今

揭て、何九叔家にありや、と問けるに、何九叔は武松が來りしを見て、大に驚き騒ぎ、急に武大郎が兩塊の骨と、西門慶が十兩の銀とを袖の内に入て走り出で、武松を迎て云けるは、都頭は前日東京に上り給ひぬと聞けるに、何れの日歸り給ひしぞ。武松が云く、我昨日回りぬ、汝に一句の言を問んと欲ひ、特々此に到れり、汝我が爲に街の酒肆に來らんや。何九叔が云く、あに尊命に遵はざらんやとて、頓て武松に從つて、一間の酒店に至りしかば、武松則九叔を延て内に入り、座已に定りける處に、酒肆の小斷、はや酒食を具へ携へ出ぬ。何九叔武松に對して云く、都頭何ゆゑ斯慇懃に管待給ふや。武松が云く、汝先謝することを止て酒を酌べしとて、已に盃を執て勸めければ、何九叔一連に三盃を酌んで、心中には武松が來意を猜しけれ共、敢て聲をもなさずして、只汗をぞ揑りけり。此時武松衣の下より、刀を抜出して手に持ければ、何九叔大に膽を消て、面の色土のごとくに變じけり。武松刀を捻て云けるは、我愚なりといへども、又能仇を報ることを知れり、九叔汝怕ずして、我兄武大郎が死たる緣故、一々我に告よ、我決して汝に礙ること有まじ、我若汝を傷ふならば、誓て大丈夫を做さじ、汝もし一句にても或は包み、もしくは差ふことあらば、今此刀を以て汝が身に三百の窟を明べきぞ、汝既に我が兄を火葬せしとなれば、其屍首をも看つらんに、聊にても蹺蹊あらば、委しく語れ、若彌

咬をなしける處に、天色漸明かなれば、彼妻樓を下りて靈前に至り、乃武松に對して云けるは、叔々終夜嘸嘆き給ひつらん。武松が云く、嫂々先坐し給へ、我哥々は實に何の病にて死し給ひぬるぞ。彼妻が云く、叔々何ぞはや忘れ給ひしぞ、夜來も已に語りしごとく、心痛の病を得て死給ひぬ。武松が云く、誰人の藥を用ひ給ひけるや。彼妻が云く、隔壁の王婆を賴で、心痛の藥を求めり、其藥の剩今になほ所持して玆にあり。武松が云く、棺椁は誰を賴て買給ひしぞ。彼妻がいはく、是又隣の王婆を央て買申ぬ。棺椁を擡て化人場に往しは何者ぞや。彼妻が云く、當地の團頭何九叔、殊更我を助け、三四人の下火家を遣し、棺椁を舁しめぬ。武松、已にかくのごとくんば、都て是嫂々の力なり、我尤これを感心すること淺からず、我は且縣に回て來るべき間、瑠璃燈の光を絶し給ふことなかれとて、彼兩人の雜兵を從へ、遂に門外に馳出ければ、彼妻吻と息をぞ繼にけり。武松已に紫石街を離れ、兩人の雜兵に問けるは、汝兩人は團頭何九叔を識認けるや、我いまだ彼に對面せず。兩人の雜兵が云く、都頭いかんぞはや忘れ給ひぬるや、都頭向に虎を殺し、職を授り給ひし時、彼何九叔も已に來て都頭を賀しぬ、彼は今獅子街の南長遠橋の邊に住す、某ら原來識荊なり。武松が云く、汝ら宜しく我を導きて、彼が家に至らしめよとて、遂に三人、何九叔が門前に至りしかば、武松先簾を

懦弱なりしゆゑ、人皆兄を欺き侮る者多かりし、今日死し給ひぬるとも、其死全く分明ならず、もし他人に殺害せられ給ひしにも有ならば、早速一夢に托て我に告給へ、我兄の爲に仇を殺し、九泉の下を安んじまゐらすべし、必ず靈を現し給へとて、忽ち聲を放て大に哭ければ、左右の近隣此聲を聞て、各〻哀れを催しぬ。彼妻も伴て、ともに泪を洒ぎけり。夜も漸〻更しかば、武松は靈前に在て睡り、彼妻は樓上に在て睡りたり。武松は心中悲深き故、只顧歎息して眠ること能ず、忽ち再び起て席上に坐しける處に、はや三更の鐘も耳に轟きぬ。武松再三嘆じて云けるは、我兄世に居給ひし時は、人皆其懦弱を侮りけるが、果して今日の死去何とやらん分明ならず、我心焉んぞよく是を安んぜんやとて、頻に疑を起しける處に、恠哉靈牌を設けたる床の下に、一陣の冷氣生じけるが、武松覺ず身の毛盡く竪しかば、武松こは恠やと、再び睛を定めて、床の邊を望しに、朦朧に人影現れけるが、忽然として又化失ぬ。武松是を見て思ひけるは、今現れたる人影は、慥に我兄の形なり、只知らず是は夢か幻かとて、自ら心を納めて想道く、我が兄の死去必然分明ならず、今形を現し給ふは、定て寃のことを、我に告んとこそ思はれしならん。然れ共兄の陰氣、我が陽氣に壓れ、詞を交すこと能ず、虛しく消失給ひぬるよな、我もし兄の爲に、仇人を捜し殺さずんば、何を以て孝悌の道を行はんやとて、獨自ら牙

重り申せしゆゑ、種々醫療を盡して看病しけれども、終に驗なく、僅八九日病で死失られぬ、我哀み推察して給はれ。此時王婆も已に來て、妻と倶に詞を盡し、僞を云ならぶる時、武松阿嫂に向て、我兄は昔より、心痛の病氣もあらざりしが、いかんぞ心痛の病にて、早速命を終られしならん。王婆が云く、都頭あに聞給はずや、天に不測の風雲あり、人に暫時の禍福あり、誰かよく始終無事を保たんや。彼妻又武松に對して、幸ひに此王婆隣家に居給ふゆゑ、我を助けて諸事心を費ひ給りぬ、若然らずんば、誰か肯て我憂を分る人あらん、好々一禮を述て給り候へ。武松が云く、兄の屍は何の地に葬り給ひしぞ。阿嫂がいはく、我女性と云、況や一人のことなれば、其節急に墓地を求ることも能はざりしゆゑ、止ことを得ずして、火葬に致せり。武松が云く、兄死れて幾七日を經るにや。答て、明後は卽ち斷七日にして四十九日なり。武松良沈吟し、阿嫂に向ひ、我は先宿所に歸り宜しく事を完て再び來らんとて、遂に縣裡に回り、房間に入り、一身素服に改め、身邊に又一腰の刀を藏し、乃ち二人の雜兵を從へ街に行き、靈前の料具米麪香燭等を買調へ、直に武大郎が家に到て門を敲しかば、彼妻自ら門を開きて武松を迎へり。武松兩人の雜兵に命じて、羹飯を安排させ、是を靈前へ供て、自ら香を撚り、再三拜をなして云けるは、兄の陰魂未だ遠からざるに、我が云ふ事をよく聞給へ、兄此に在給ひし時は、其性

京の首尾一々詳かに訴聞え、一封の返簡を呈しければ、知縣返簡を披讀して大に悅び、即座に於て、武松を賞し重く賜あり。武松拜謝して己が房間に回て粧束を更め、直に紫石街を望で來りしかば、左右近隣武松を見て大に駭き、各手に汗を捏り低言けるは、此武松は是勇力の豪傑にして、然も能是非を決斷すること分明なり、若彼武大郎が事を聞ば、いかばかりの大事に及んも測知られずとて、皆々舌を揮ひけり。武松は已に兄が家に到て內を見るに、槅子の前に靈牌を設けて、亡夫武大郎が位靈と書記しければ、大に愕然想ひけるは、必定我が眼花つらんとて、忽ち眼を睜開て、又暫く打望み、頓て聲を放て呼りけるは、嫂々何れに居給ふや、武松今日歸りし故、兄に遇ん爲來れり。此時西門慶は、彼女と共に樓に在て娛居たりけるが、今武松が呼りたる聲を聞き、大に膽を消し、忙しく窓を爬出飛がごとく、王婆が家へ逃去んとして、餘り急なれば迫屈と窮尿と下棄て、辛くして遁れ、隣の茶坊より走出ぬ。女は慌答へ、叔々回り給ふか、少く相待給へ、逐付來らんとて、俄に水を把て面上の脂粉を洗落し、身の綉服を脫て素服を著し、詐つて哭悲み樓を下りければ、武松これを見て云く、嫂々且哭き給ふことなかれ、知らず我哥々は何の時に死給ひぬるや、何の病にて、誰人の療治を受け、藥を用ひられしぞ。女が云く、汝の哥々は汝に別れ二十日計して後、不圖心痛の病を得られけるが、漸

塊の骨を拾ひ取り、乃ち傍の池水を汲み、是を洗ひける處に、其骨半は紫の色有て、半は黑き色有り。何九叔是を懐中に藏し、頓て齋堂の内に來りしかば、王婆深く何九叔を謝して云く、今日は多く何公を勞しぬ、倘異日重く謝せん、先回りて休息し給へ、とて各〻別れ私宅へ歸りけり。扨何九叔歸りて、彼骨を紙に包み、其上に年號月日并に喪を送來りし、彼近隣等が姓名を寫し、彼十兩の銀と共に、櫃の内に藏置ぬ。扨又武大が妻は王婆と計り、床の前に武大郎が位牌をまうけ、琉璃燈に火を點じ香花等を供て、出入の人の眼目を掩ひ、毎日只樓の上に在て、西門慶と倶に心の儘に樂を催しけるが、此より西門慶は家内の事を忘れて、數日武大郎が家に逗留して歸らざりしかば、一家の眷族大に憂へ、都て西門慶を恨る事限なし。西門慶は已に百念を捨て、唯一味に彼女を寵愛し、外人の曉すをも顧ず。女も又弔來る人も遠ければ、いつしか紅粉を粧ひ、髮簪の銹喪中に似合しからぬ風流を盡し、奸夫に戲れ暮せしは、希有の淫婦なり。されば今に至て比隣の家のみにあらず、遠く在者迄、誰知らぬはなかりけり。光陰箭の如くにして、又早く四十餘日を過しける處に、武松は東京の事を完了て、已に道中に馳出けるが、何とやらん身心安んぜず、夜々の夢惡かりしかば、兄武大郎は恙なきやなど憂ひ思うて、頻に道を急ぎける程に、三月の初遂に陽谷縣に著て、先縣裡に入り、則知縣相公に見えて、東

差ず、三日の内に出喪、火葬せんとのことなり、我其期に至らば、喪を送る體にもてなし、武大が骨一兩塊偸取べき間、假令後日事發るとも、必ず其禍を免るべしとて、夫婦暗に低言けり。扨彼王婆は武大が妻を幇助て、其夜盡く相調へ、第二日に四人の僧を請て、阿彌陀經を念しめ、第三日早天に、彼火家等自ら來て、棺槨を城外に擡出でければ、左右の近隣盡く相送る。彼妻心中には悦びけれども、故意棺槨に引傍て哭悲み、遂に化人場の内に入しかば、頓て棺槨に火を著んとしける處に、何九叔手に一束の錢紙を提て、化人場の内に入ければ、王婆これを見て、彼妻と共に九叔を迎へていひけるは、何公は前日は邪氣に中り給ひたりしが、はや快氣を得給ふは、幸ひの至りなり。九叔が云く、我前日は不慮に列位の心配に預れり、醫療の効を以て早快方に成しかども、歩行いまだ意に任せず、我日外武大公の餅を買しに、其節價を償はざりし故、今此一束の錢紙を、武大公の靈前に燒んため、これ迄送り申ぬ。王婆が云く、何公は原來、老實の人と聞つるに、果して詐ならず、何公彌力を合せて、宜しく火葬をなし給はれとて、遂に火家等を催して、火を著しめければ、何九叔は一束の錢紙を燒了りて、則王婆に告ていひけるは、汝は武大郎の妻と共に、先齋堂の内に入て待給へ、我は跡に留りて宜しく火葬を完了候はんとて、遂に王婆と妻とを齋堂の内に遣し、己は私に化人場の内に入て、兩

若此事を分明に知らんとならば、先手下の火家を遣し、武大郎が妻に、喪を出すの日を問しめ給へ、彼もし武松が歸るを待て喪を出さんと思はゞ、畢竟惡事有まじ、假令今喪を行ふとも、若土葬にせんといはゞ、是又惡事有まじ、彼もし再三火葬にせんといはゞ、必ず惡事有べし、彼いよ〳〵近日に喪を出し、火葬にすることあらば、丈夫暗に彼武大郎が身の骨一兩塊拾ひ取り、彼十兩の銀と一つにして藏し置給へ、然らば後日もし事の敗に至らんに、大なる證見とならん、武松もし歸て何ごとも問ことなく穩ならば、彼十兩の銀も家内の使用に供へん、是二つながら全き計なり。何九叔これを聞て大に悦び、家に賢妻あるときは、事敗れずと云古語ありけるが、果して今日のこと、汝が計によつて兩全の議調れり、我急に手下の火家を遣すべしとて、則一兩人の火家を呼び、これに仰せて、我今邪氣に中り、武大郎が家に往がたければ、汝ら宜しく我に替つて武大郎が家に馳せ、何の日喪を行ふことやらん速に問來れ。火家等が云く何公は是所勞有る事なれば、必ず這等の事なんどを以て、心を費し給ふ事なかれ、我輩自ら馳て、宜しく葬らしめんとて、遂に武大郎が家に到て、屍骨を棺椁に收め、則出喪の日を問けるに、彼妻答て、只三日の内に喪を行ふ、火葬にすべし、と云しかば、火家等此言を聞て、再び何九叔が家に來て告しかば、何九叔密に妻を呼で云けるは、汝が云し言一點も

汝憂ることなかれ、我邪氣に中りしは、都て詐つてなせしことなり、起先に我街の邊にて、生藥舖西門慶に遇ける處に、彼再三我を請て酒肆に往き、乃ち十兩の銀を我に與へ云けるは、若武大郎が屍首に明白ならざる事有とも、査照を加ることなかれと頼みけるゆゑ、我心中怪しみけれども、已ことを得ず領承し、遂に武大郎が家に往て、先彼妻をみるに、其模樣極めて不善なりしゆゑ、我已に八九分これを疑うて、彼武大郎が死屍を看しに、其面紫色に腫て、目口より血流れ、上下の齒を咬緊、牙微し露れ出けるが、必定毒に中て、死したるに疑なし、我もと卽座に是を正さんと思へ共、西門慶が頼を受け、十兩の銀を領しけるゆゑ、先これを免して、邪氣に中りし計をなしぬ、原來西門慶が頼を辭すべきが、此仁は官司上下に絕ず賄賂して、勢を得たるゆゑ、讒言せられんを恐れ、止ことを得ず頼をうけ、銀をも受納せり、され共一つの難儀は、彼武大郎が舍弟武松と云者有り、向に景陽岡にて虎を打殺し、今當地にて都頭の職をなし、縣裡に住す、其性專ら人を殺すことを好む勇力の豪傑なれば、彼今旅に出たれ共、明日にも歸來り、此ことを知覺せば、暫時に大事となるは治定せり、我是を恐るゝこと深し。妻が云く、我も嘗て人の云しを聞けるに、後街の喬老が兒子鄆哥と云者、前日紫石街にて、武大郎と共に、奸夫西門慶を捉へんとして、大に王婆が茶坊を閙せしとなり、此度の事必定此來歷ならめ、

を開いて、暫く屍首を看てありけるが、忽ち阿と叫んで暈倒れ、頻に口中に血を噴て、面色漸漸變じければ、一座に在し者共大に驚き、各醫者よ、打鍼科よと騷ぎけるが、何九叔が體たとはゞ、三更に油盡て燈熄んとするに似たり。此者の性命果していかんぞや、次を見て生死を知るべし。

○鄆哥大に授官廳を鬧す

何九叔眼を眩し倒れし、人心地なければ、諸人大に驚きける處に、手下の火家ども急に何九叔を抱起し、醫者よ藥よと、甚だ躁ぐ時、王婆が云く、まづ暫く騷ぎ給ふことを止給へ、這は是邪氣に中り給ふならん、先急に水を沃ぐべしとて、水を把て九叔が口に灌ぎ入ける處に、漸々氣を得て甦しかば、王婆が云く、先宜しく家に回らしめんとて、彼火家兩人に九叔を舁せ、直に私宅に送りければ、九叔が妻子等此體を見て、大に驚き、且九叔を、床の上に臥しめて、其妻一向流涕して云けるは、今朝出給ひし時は欣々然として出給ひしが、何ゆゑかく邪氣に中りて歸り給ひぬるぞ、只宜しく自ら氣を求め給へとて、猶頻に哭ければ、何九叔微し眼を開きて左右を見るに、手下の火家等已に歸つて、別に人なかりしかば、九叔則妻を近く呼で云けるは、

死せしゆゑ、これを火葬にせんとて、彼家より使來れり、幸ひ是より直に武大郎が家に往給へ。何九叔是を聞て、すはやと思ひ、遂に手下の火家等に引かれ、武大郎が家の門前に至りし所に、先達て一人の火家、此處に相待ければ、何九叔先彼火家に問て、武大郎は本何の病に因て死しけるぞや。彼火家答て云く、武大郎が妻の云しを聞に、根心痛の病にて死たるとなり。何九叔これを聞て、遂に武大郎が家に至りければ、王婆忙しく、九叔を迎へて云く、我久しく汝を待けるに、何ゆゑ遲く至り給ふぞや。何九叔が云く、某ちと用事有て遲來せり、嘸待わび給ひつらん、と云も畢らざるに、武大郎が妻一身に素服を著し、房間の內より哭出ければ、何九叔またこれを勸て云く、夫人過て悲み給ふことなかれ、死の道は貴き王孫公子といへども、是を脫れ給ふ事能ざるなり。彼妻佯てます〱泪を洒て云けるは、夫武大郎想ず心痛の病に臥し、わづか數日の間に相果申ぬ、我悲み盡く是を云べからず。此時何九叔、彼妻が模樣、何とやらん他に異なるを見て、心中に想ひけるは、我日外人の云しを聞ぬるに、陽谷縣に不相應の物三つ有り、第一は永興寺の三門（山門と書も非なりとぞ）、第二には陳員外が破衣、第三には武大郎が妻とやらん語りしを、隱々に記えけるが、果して此妻武大郎には應じがたし、西門慶が我に與へたる十兩の銀には、必定莫大の來歷あらん、我先武大郎が屍首を看んとて、遂に床の前に至て被を掲げ、又褥

門慶が云く、我汝に說話せんと云しも、畢竟餘の義にあらず、今紫石街に居住して餅を賣る、武大郎と云者死しけるが、少刻汝を請て火葬の事を議すべき間、武大郎が屍首に若少しのことと有とも、我が爲にこれを穩便に治めて、査照を加ることなかれ。何九叔が云く、某は只大事なるらんとこそ思ひつるに、這等の小事、何の利害かあらん、若此事のみならば、某決して銀を受申まじ、願くは大官人銀を收納め給へ。西門慶悅ずして云けるは、汝いかなれば、再四辭推に及ぶや、若彌銀を請ずんば、乃ち是我が賴を受ざる道理なり、汝若果して異心なくんば、速に銀を受けて我心を安んぜしめよ。何九叔猶辭せんと思ひけれども、若西門慶が怒を惹出すことあらば、此人ゆゑ官府の役人共へ讒言せられ、不時の難義來らんことを恐れ、遂に已ことを得ずして、彼銀を請ければ、西門慶大に悅び、又盃を取て九叔に勸め、酒已に多く巡りければ、盃を收めて兩人酒店を立出、西門慶重て云けるは、我が今云しことは、只能汝が心に收て、必ず他言すべからず、異日又重く汝を謝せんとて、遂に別れけり。何九叔心中に想ひけるは、西門慶故なくして我に十兩の銀を與ふるのみならず、他日又重く謝せんと約しけるは、此事多く蹺蹊あらん、且私宅に回り、彼武大郎が家より、使の來るを待んと、遂に宿所を望んで、一つの街を過し所に、手下の火家二三人來て告けるは、已に今紫石街の武大郎と云者、病

惱し給ふことなかれ。彼妻詐りてこれを謝しければ、諸の隣家ども各私宅に歸りけり。扨西門慶は團頭何九叔が家を望んで行ける所に、幸ひ途中にて想はず何九叔に適遇ければ、西門慶暗に悅び、乃何九叔を呼かけ、我汝に說話あり、我行く處に來らんや。何九叔が云く、大官人某に示し給はんことあらば、速に從ひ參るべし。西門慶大に悅び、乃ち何九叔を引て、一間の酒店に至り、西門慶密事に先樓の上に坐して、何九叔を呼で坐せしめければ、何九叔大に讓りていはく、某は是何等の者なれば、敢て大官人と座を對し申さんや。西門慶がいはく、汝何ゆゑ隔心の言を云や、必ず過て讓ることなかれとて、再三請て、座已に定りければ、酒店の小斷頓て酒食を備へ拿來る。此時何九叔心中に疑ひて思ひけるは、此西門慶つひに我と共に酒を酌たることなし、今日斯我を欵待は、必定蹺蹊あらんと推察し、遂に盃を執て酒數巡に及び、西門慶袖の內より一錠十兩和の百目の銀を採出し、何九叔に與へて云く、汝且此銀を笑納せよ、明日又重く謝すべきぞ。何九叔これを怪んで云く、某一點も力を盡し功を用ひし事もなく、何ゆゑ此銀を惠み給ふぞ、某殆ど此賜を領納仕がたし、先賜を受て後命を承らんこと有べからず。西門慶が云く、九叔何ゆゑこれを辭するぞ、先此銀を收めなば、其後我汝に一言を語るべし。何九叔が云く、大官人若事あらば宜しく示し給へ、敢て命に隨はん。西

しく發落給れ。西門慶が云く、汝何ぞ心を安んぜざるや、何事も我都て宜しく發落べき間、少しも憂ることなかれ。王婆が云く、こゝに一つの大儀有て、我心いまだ安んぜず、當地の團頭何九叔は、原來精細者なれば、若武大郎が死骸の、明白ならざることを看ば、必定葬らしむまじ、いかなる計較を以てか、此難義を脱れんや。西門慶が云く、此事何の愁る所あらんや。彼何九叔は、我常に憐憫を垂たるゆゑ、我が命を背くことなし、我宜しく彼に仰せて屍を葬らしめん、汝兩人心を安んぜよ。王婆が云く、已にかくのごとくは、一刻も早く彼に仰せて事を穩ならしめ給へ。西門慶が云く、我自ら往て何九叔に命ずべければ、汝まづ棺槨を求めて屍を收めよとて、則ち十兩百目の銀を王婆に與へ、遂に親ら何九叔が家にぞ趣きけり。此時東方已に白みければ、王婆自ら去て棺槨ならびに、香燭紙錢等を買調へて立歸り、乃ち彼女と共に、香燭を屍の前に供て、只顧伴て哭きければ、左右近隣これを聞て、皆弔問に來り、乃ち彼女に問て云けるは、武大公は本いかなる病にて、早速死し給ひしぞや。彼女哭き悲んで告けるは、前日不圖心痛の病を患へしが、日々に重り遂に本復すること能ず、不幸にして昨夜三更の比死し去ぬとて、又兩々と哭きけるにぞ、諸の近隣皆心中に疑ひけれども、これを問者なく、只勸めて云けるは、死する人は是命數なれば、尤留めがたし、必ず深く悲み給ひて、自心を

服履鞋

云く、大醫の申されけるは、裀を厚くし汗を發せしめば、早速快からんとなれば、暫く氣鬱に勝へ給へ。武大郎益苦んで叫んとしけれども、彼女又武大が上に跨り騎て、力に信せ壓へければ、武大郎此時僅二聲を喊んで、遂に淫婦が手裡に死しにけり。彼女武大郎が動ざるを窺ひ、卽ち被を除てこれを見るに、哀なるかな武大郎は、目口鼻より血を流し、牙を咬んで死しければ、彼妻頓て相圖の壁を敲きける處に、王婆此響を聞き、早速後門に來りければ、彼女樓を下り後門を開き、則王婆に對して云けるは、武大郎は已に死しけれ共、果して我手足漸疲れ、屍を收拾めん氣力なし、汝宜しく我を助け、早く屍を藏し給へ。王婆が云く、是何の難き事あらん、我自ら是を收拾めんとて、遂に衣の袖を捲起て、一桶の湯を舀み、又一幅の布を湯の内に浸して、樓に跳登り、彼被を引開けて、武大郎が面上の血の痕を盡く抹ひ取て、新しき衣服を用て是を蓋ひ、兩人の女頓て屍を擡起て、樓の下に移し、乃ち新しき被褥等を用ひて、牀の上に臥さしめ、再び樓に登て、彼血に汚れたる臥具等、こと〴〵く櫃の内に藏し入れ、事全く調ほりしかば、王婆は先己が家に歸りけり。彼女は詐りて終夜哭き悲み、直に五更の天になりしかば、西門慶王婆が家に來りて、消息を問ける處に、王婆一々語り、頓て彼女を招き商議しければ、彼女が云く、武大郎は已に死したれば、我身の上の事は獨大官人を頼むのみなり、諸事我が爲に宜

此藥を用ひて、裀を厚くし一睡せば、果して汗多く發すべし、汗だに發しなば、早速快らんとなり。武太郎悅んで云く、汝非を改めてかくの如く我を看病すること、我家の福なり、今宵半夜に至りなば、怠なく藥を用ひしめよ。彼女が云く、我夫心を安んじ歇み給へ、我自ら能怠る事有るまじ。此時天色已に暮ければ、彼女頓て一鍋の湯を滾して、暗に時の至るを待ける處に、はや三更の鐘も四方に響しかば、彼女砒霜を鍾の內に入れ、別に又一碗の白湯を汲み、直に樓に上つて、武太郎に對し云けるは、最前の末藥は、何れの所にありや。武太郎が云く、我枕頭の下に有べきに、早く之を取て我に與へ用ひしめよ。彼女即ち枕頭の下より藥を取出して、是も又鍾の內に入れ、其上に又彼白湯を傾入て、銀の釵を用て攪拌ぜ、乃是を武太郎に與へければ、一口用ひて云けるは、此藥甚だ用ひがたし。彼女が云く、凡藥用ひがたきものなり。強て用ひなば早速快かるべきに、必ず遲々し給ふことなかれ。武太郎實にもと思ひ、第二口を用ひんとせし處に、彼女勢に乘じ彼一鍾の毒藥盡く武太郎が口中に灌入れければ、一滴も遺さず、咽喉の內に吞下み、忽ち大に苦んで云けるは、恠哉、此藥を飲むと齊しく、五臟六腑迸斷るゝが如し、苦しやな禁へがたし、とて、已に一聲叫びしかば、彼女忙はしく被を把て武太郎を蓋ひけるに、武太郎いよ〳〵苦んで云く、汝なにゆゑ斯我を氣鬱せしむるや。彼女

て漚妙たりといへ共、只恐らくは、我事に臨て駭き騒ぐ事も有るべければ、急に其屍を収拾ること能ふまじ。王婆がいはく、これ何の難き事あらん、其時に至らば壁を敲き給へ、我其壁の響を聞かば、早速來て夫人を助け、共に屍を取拾め申べし。西門慶が云く、汝兩人心を用ひ、よく做就べし、我明日五更の時分に來りて、消息を求めんとて、其日は遂に回りけり。王婆は彼砒霜を自ら手の內に捻り、これを細末となし、遂に彼女に與へければ、女はこれを取て私宅に歸り、暗に樓に上り、武大郎が寢間を見るに、武大郎は病倍重く大に苦み居たり。此時彼女床近く前寄り、只顧涙を流し哭きければ、武大これを見て云けるは、汝は何故斯流涕するや。彼女涙を拭て云けるは、我向に不圖彼漢子に誑れて、我夫に斯苦みを請しめ申し、今更後悔萬千なり、願くは我爲に平復して給はれ、我實に藥をも進め參らせんと思へ共、若疑もや有らんと推量つて、強ひ申さゞるなり。武大郎頗る悅んで云く、汝實に心を改めて我に藥をも用ひしめ看病せんには、我何ぞ汝を恨むる事あらんや、縱ひ武松回りたりとも、我決して何事も沙汰すまじ、汝速に心痛の藥を求めて我に服さしめよ。彼女が云く、我夫罪を赦し給ふには、我何ぞ怠慢る事あらんや、少刻藥を求めて來らんとて、再び王婆が家に至て、一貼の末藥を求め、立歸て其藥を武大に見せしめて云く、此藥は是心痛を治するの藥なり、彼大醫の申されけるは、半夜の比

三編　巻之二十四

○淫婦武大郎を藥鴆す

王婆が啜むる計を領し、西門慶忽ち我家に馳せ、再び入來て一包の砒霜を持來り、王婆に渡しければ、王婆彼女に對ひ、藥を用ひん法式を教へ申さん間、能是を以て仕おほせ給へ、今武大は深く夫人を怨み忿れば、常の體にて藥を勸るとも、彼反て疑つて用ふまじければ、先僞て涙を流し罪を謝し、宜しく藥をも進め、看病したきよしを云給へ、武大もし是を信じ藥を用ひんといはゞ、其時此砒霜を藥の内に入て用ひしめ給へ、彼一口用ひて遲疑することあらば、夫人自ら力を盡して、藥を彼が口中へ灌入れ給へ、毒藥轉る時に於ては、五藏六腑都て迸斷るゝごとくならん、然れば必定聲を揚て喊ぶべし、夫人又被を把て蓋ひ、其叫ぶ聲外に漏ず、聞く人なからん樣に計ひ候へ、豫じめ又湯を滾置き給へ、毒藥發すれば、必目口鼻より血流るべければ、宜しく布を湯に浸し、悉く是を抹取り、一點も血の痕なき樣にして、これを棺槨に收め、其後火葬して、踪跡もなく燒棄なば、これ爽利き事ならずや。彼女が云く、此計究

の家に娶り給へ、是則長遠の夫婦にして、老を偕にし歡を同じうするものなり、知らず此計はいかん。西門慶大に悦んでいはく、王婆が此計は誠に神妙奇特なり、古の語にも生快活を求めんと欲せば、須らく死の工夫を下すべしと云ふ事あれば、只よろしく王婆が計に隨つて急にこれを行ふべし。王婆が云く、此計は、草を刈て、根を除くの道理なり、大官人は早く砒霜を取て來り給へ、我は自ら夫人に手を下さしめまゐらせて、終に武大郎を殺すべし、若事成就致さば、必ず重く我を謝し給へ。西門慶が云く、汝を謝せんことは、何ぞ汝が催促を俟んや、我自ら能これを曉せし間、汝は只心を安んじ計を行ふべし、我少刻砒霜を取て來らんと、竟に王婆が家を出て、私宅へ馳歸りぬ。王婆が計に仍て、遂に潘金蓮其夫を鴆殺する始末、次の巻を見て明かならん

と思ひ給はゞ、今日先縁を斷給ひて、武大郎が病氣平復の日を待て、宜しく罪を謝し給へ、然らば武松回り來るとも一點の事有るまじ、後日若武松遠國に出る事あらば、其時再び來て情を通じ給へ、是乃ち短く夫婦をなすものなり、若又長く夫婦をなさんと思ひ給はゞ、毎日一所に在て少しも怕れず娯み給へ、我已に神妙奇特の計あり、然れども等閑に教んこと成がたし。西門慶がいはく、汝已に臥龍が計あらば、速にこれを行うて、夫婦全からしめよ、我等は只長く夫婦をなさん事をのみ願ふなり。王婆が云く、已に各所存かくあらば、我此計を申べし、第一此計の内、一つの物を用ん、此一物、他人の家には決してあらざれ共、天幸ひに大官人の家にあり。西門慶が云く、たとひ我眼睛を用んと云とも、我これを剜出し與ふべきに、實にいかなる物を用るや。王婆が云く、武大郎病重ければ、坐臥不自由なるに乘じ、手を下すべき間、大官人は早く家に歸りて、砒霜を持參し給へ、夫人ば又一服の藥を求め給へ、然らば此内に、砒霜を加へて、武大郎を殺し、乃其屍を火葬にし、蹤跡もなく燒捨なば、他日武松歸りたるとも、何の把柄有てか、一句の言をいはんや、諺にも、初嫁する時は親に從ひ、再び嫁するときは身に由るとこそ申なれ、たとひ大官人に嫁し給ふとも、武松何ぞこれを攔る事を得んや、凡夫の喪は一年にして滿ち候へば、其内は暗々に我家にて參會し給へ。喪已に滿ちなば、大官人

を得ず、苦み萬千にしてかくのごとく身心を惱ましむ、汝等兩人尤樂をなして、快かるべけれ共、若我死することあらば、我弟武松いかんぞ此仇を報ぜざらんや、汝も知るごとく、武松は是虎を打殺せし勇力の豪傑なり、汝もしよく我を看病して、快氣を遂しむることあらば、武松今囘來るとも、我此事を沙汰すまじ、若汝我を看病せずんば、我武松が皈るを待て、此度の事、一々詳に彼に告べきぞ。彼妻此言を聞しかども、一言も答ずして、頓て又王婆が家に來り、乃ち西門慶に對して、武大郎が云し事を、具く告ければ、西門慶これを聞て、大に驚きて云く、我早老景陽岡にて虎を殺せし武都頭が名を聞及べり、彼はもと淸河縣に於て、第一の豪傑なり、彼若我等が做所を聞きなば、終に事の敗に至るべし、然れ共汝と恩愛の日久うして、互の想已に骨髓に染徹りしかば、今更緣を斷らん事能ふまじ、只恨らくは何の計を以てか、此禍を脱れんや。王婆冷笑つて云く、汝兩人は何故甚だ慌忙給ふや、毛頭我は憂る事なし。西門慶が云く、我専ら計を思案すといへども、尙行はん計なし、汝若良しき計あらば、速に是を行うて、我等が禍を脱れしめんや。王婆が云く、兩人は長く夫婦とならんと思ふや、短く夫婦とならんと思ふや。西門慶が云く、長く夫婦となし、短く夫婦となすとの義はいかなる緣故ぞや、汝且是を說て聞かしめよ。王婆が云く、汝兩人短く夫婦をなさん

に怒り、忙しく走り倚て西門慶を捉へんとせし處に、西門慶早く右の足を飛せて、武大郎が心窩の上を踢たりしかば、武大郎忽ち眼を眩して、地上に倒れけり。西門慶これを見て、急に門外に走出ければ、鄆哥も此勢に怕れ、遂に王婆を捨て立去けり。此時左右近隣すべて此事を知りけれども、西門慶が猛勇に恐れて、一人も出合ふ者無かりけり。王婆は武大郎が倒れたるを見て大に駭き、急に扶起してこれを見けるに、顏色土の如くにして口中に血を吐きければ、王婆忙しく彼妻を呼で、武大郎が口の中に水を沃入れ漸々救起し、兩人の女遂に武大郎を擡起て私宅に歸り、乃樓の上に床を設けて臥さしめけり。翌日西門慶暗に事なきを伺ひ知て、再び王婆が家に來り、猶又彼女と擅に相娛で、只顧武大郎が死せん事を願ひけり。武大郎は已に五七日臥けれども、胸の痛ますく盛んなりしかば、自ら大いにこれを苦み、彼妻に問て、湯を求れども湯を與へず、水を求むれども水を與へず、猶更飢渴の憂を加へけり。彼妻は每日粧を餝りて、王婆が家に行回る每に、酒に醉はざる事なかりければ、武大郎是を見て、每度大に怒て氣を失ひしかども、一人も看病する者なきゆゑ、武大益々大に嘆じて、彼妻を呼で云けるは、汝奸夫を求めたること、世間の人皆これを知る者多し、我此故に奸夫を捉へんとしける處に、汝彼奸夫をして、我胸を踢さしめ、今に至て、生を求れども生を得ず、死を求れども死

罵るはいかん。鄆哥彌罵つて曰く、汝は是、清天白日に人の妻を買うて、不義の利を貪る、老惡無類の毒犬なり、いかんぞかく恥を知らざるや。王婆是を聞き、忽ち其怒氣心頭より起り、忙はしく座を立て、彼鄆哥を揪へんとせし處に、鄆哥大に呼て云く、汝賊婆、何ぞ今日も亦我を打んやとて、急に梨籠を門外に投出し、王婆が腰に抱つきたり。時に武大郎相圖の梨籠を見ると等しく、飛が如く門内に跑入しかば、王婆大に驚き、急に鄆哥を棄て、武大郎を攔り住んとせしかども、鄆哥腰に纏うて放たざりければ、只聲を揚て武大郎入來りしぞ、早く躱れ給へ、と呼りけり。彼女房間の内に在て王婆が呼る聲を聞き大に仰天し、先彼房扃の戸を關しければ、西門慶は床の下に躱れけり。武大郎已に房間の口に至て戸を推開んとしけれども、彼女内より牢く壓へしかば、武大郎これを開く事能ずして、再三聲を放つて、汝等よくも不義の娯をなすよな、早く門を開け、と呼りぬ。此時彼女西門慶を望んで云けるは、大官人常に武藝に誇り給ひけるが、事に臨んで是を用ひ給はざるはいかん。西門慶これを聞き、忽ち床の下より爬出て云けるは、我曾て恐るゝにはあらざれども、事の急なるに氣を奪れ、思量こゝに及ばざりけり、我今平生の手段を、夫人に見すべしとて、頓て門を開て、大に叱詈云けるは、武大郎、汝必ず卒爾に來ることなかれ、若我が言を用ずんば、立所に後悔至るべきぞ。武大郎これを聞て大い

應じけり。武大郎已に皈りしかども、其色を露さず、只常の體にて何のことも云はざりければ、彼妻武大郎が面の紅を見て問けるは、丈夫は今日酒を酌給ひけるにや、面の色頗る紅し。武大郎が云く、今日は不圖朋友に誘れて、三碗の酒を酌ぬ、と答て、其夜は遂に歇みけり。翌日武大郎常のごとく、餅櫃を荷て出ければ、彼女頓て門を闔して、王婆が家に至り、專ら彼西門慶をぞ待にける。扨武大郎は街口に來て鄆哥を尋ける所に、鄆哥は早老此邊に出て待しかば、武大郎是を見て忙しく鄆哥に問て云けるは、彼西慶はいまだ來らざるや。鄆哥答て云く、此時分は尚太だ早し、先街に馳て餅を賣來り給へ。武大郎が云く、汝はよく此處に待て、西門慶が來るを見よ、我は少刻來るべしとて、遂に街の上に馳往き、凡半時ばかりして、再び街口に回りて鄆哥に問ければ、鄆哥答て云く、西門慶已に今來りぬ、我急に茶店の内に入て、王婆を閙すべき間、我が此梨籠を門の外へ投出さば、是を相圖として早速跑來り給へ、必ず自ら過ち給ふべからず。武大郎が云く、我已に相圖を約しぬる上は、少しも謬ること有べからず、汝宜しく事を差ることなかれ。此時鄆哥は梨籠を提て、直に王婆が茶坊の内に入り、大に罵りけるは、王婆老犬、汝昨日我を打たるを記ぬるや、我已不得此仇を報ずべきぞ。彼王婆原來火性の短慮者なれば、此一言を聞て益〻大に怒て云く、汝此子孫、我自ら汝を饒しけるに、汝今又來て我を

然らば汝遂に無實の罪に陷沈り、獄屋に於て飢死し給はん事、何の疑かあらん、必ず誤て事を做壞じ給ふな。武大郎が云く、汝が云處極めて其理有り、唯しらずいかゞしてか、此怨を報んや。鄆哥が云く、我今日王婆に擲れたれば、此恨骨髓に徹り、遺憾尤甚し、我一つの謀を汝に示し、共に仇を報ずべし、汝今日宿所に歸り給ふとも、必ず此ことを色に出さずして、唯よく常の體にて休み給へ、明日も常のごとく商賣に出給へ、我は豫じめ先街口に出て汝を待べし、若西門慶王婆が家に來りなば、我早速汝に告べき間、汝は只街口の邊に徘徊し、消息を窺つて控へ給へ、我已に汝に告終りなば、西門慶が後に隨つて、同く茶屋の内に入り、彼王婆を散々に罵るべし、然らば彼王婆、必ず又大に我を打んとすべし、其時我王婆を牢く揪へ放つまじ、汝此便宜に乘じて、急に王婆が家に走り入て、直に房間の内に入りたまへ、彼等兩人果して一所にあらば、其時に乘じて捉へ給へ、知らず此計いかん。武大郎これを聞て大いに悅び、汝が此計最絕妙なりとて、數貫文の錢を鄆哥に與へて、明日街口に出て、我を待よと云ければ、鄆哥錢を得て甚だ悅び、我必ず汝の爲に力を併すべしとて、遂に別れて立去ぬ。武大郎は自ら酒錢を償ひ、再び酒店を出て宿所へこそは歸りける。彼妻初の間は每度武大郎を責りけるが、頃日は己が身に不義有ゆゑにや、かつて武大を呵ることなく、只曲て武大郎が心に

故に、我王婆が茶坊に尋行き、直に房間の裏に入んとしける處に、王婆大に怒り、牙を咬み拳を捏て、我が頭を此のごとく打腫しぬ、我深く怨み、早速此事汝に告申すなり、必ず誤てこれを疑ひ給ふことなかれ。武大郎尚疑を含んで云けるは、實に這等の事ありや、我全く信じがたし。鄆哥冷笑ていはく、汝かくのごとく愚なるゆゑ、彼兩人汝を欺て擅に己らが樂をなすなり、汝信じがたきと云給ふは、我言を謊と思ひ候や、是尤世上の人多く知る所なり、必ず疑を決し給へ。武大郎これを聞て云けるは、汝が云所一々疑ふにあらず、こゝに一つの事あつて、而も汝が言に相應ぜり、我妻頃日王婆が家にて、衣服を縫ふと云て毎日往けるが、其歸るごとに面紅うして酒に醉り、我自らこれを疑ふ事最深し、既に今世間の人も知る上は、我急に彼西門慶を捉て事を正さばいかん。鄆哥が云く、汝半百の年を保給ひて、何ゆゑ斯見識なきことを云給ふぞや、彼王婆は原來這樣の事に馴たる者なれば、豫じめ逃路の計を設けてこそ有らめ、汝もし西門慶を捉へんとして、王婆が家に入給はゞ、王婆必ず相圖を告て、汝が妻を藏すべし、縱ひ西門慶一人房間の内に在を見給ふとも、把柄なきことはいはれまじ、汝若萬一西門慶に對して、此ことを云候はゞ、彼必ず汝をいたく打つ事あらん、況や彼は常に官司の諸役人に賄賂して、勢有る者なれば、却て汝を憊懇者と名けて、官司に訴へ告ること有べし、

を傷ひ給ふこと能ふまじければ、却て聞給はぬこそ强似ならめ、無用のことを問給ふな。武大郎これを聞て、大いに氣騰なし、急に十四五の餅を取出して、鄆哥に與へて云ひけるは、汝もし我を憐むの心あらば、彼奸夫が姓名を告知らせよ。鄆哥が云く、汝もしこれを聞たく思ひ給はゞ、我に一席の酒を欵待給へ、然らば我これを告ん。武大郎が云く、汝いよ〳〵酒を酌んとならば、何より以て易きことなり、汝宜しく我に隨て來れとて、遂に鄆哥を引て、一軒の酒店に至り、早速酒肴を調へて鄆哥を欵待ければ、鄆哥大に悅で、只顧酒を酌む。武大郎が云く、汝少年者必ず酒を過して、事を誤ることなかれ、且急に彼奸夫が名を告知せよ。鄆哥が云く、武大公是を聞んと思ひ給はゞ、先汝の手を、我髮の内に入れて、我が頭の腫たるを摸り看給へ、此腫たるに就て緣故あり。武大郎此時、手を鄆哥が髮の内に入れて摸りける處に、果して頭の上大いに腫たり。武大是を見て問けるは、此腫たるに就て緣故ありと云はいかにぞや、我ひとへにこれを覺しがたし。鄆哥が云く、我今此緣故を語り申さん、耳を側て好聞給へ我今日一籃の梨を賣はんと欲して、西門慶を尋ねし所に、西門慶他行したるゆゑ、我又其跡を慕うて方方尋繞りしに、街にて一人の友我に告て云けるは、西門慶今專ら武大郎が妻と私情を通じ、每日王婆が茶坊に參會す、必定彼所に在べきに、汝若事あらば直に王婆が家に尋行けと敎ぬ、是

○王婆西門慶を計啜む

鄆哥は憤の餘り、此形勢を武大郎に知らせんとて、尋ね求る處に、武大郎も餅の櫃を荷て此邊に來りしかば、鄆哥これを見て、乃ち詞をかけて云けるは、頃日は武大公に遇ざりしに、愈恙なく毎日商賣に出給ふよな、嘸渾家は娯んで偸を致さるべし。武大郎大に驚いて云く、汝何ぞ妄に我妻を偸盗にはするや、若人有てこれを聞かば、我夫婦は賊をなすぞと云べきぞ。鄆哥が云く、武大公は未だ人皆知らぬと思ひ給ふかや、渾家の偸を致さるゝこと、誰か是を知らざらん、然れ共こゝに一つの事あり、彼偸まるゝ人原來約束の上にて、渾家に偸まるゝ故、互に相歡んで、或は偸み或は偸まるゝ、何ぞ必ずしも世間の偸と等しからんや、必ず是を恐れ給ふことなかれ。武大郎これを聞て、心中に其半を猜して云けるは、汝が云こと甚だ以て怪異なり、我妻に漢子を偸むと云ふ事かや、我妻に於ては漢子を偸みし事なし、必ず妄の言を云て、我を羞辱ることなかれ。鄆哥哈々と打笑て云けるは、汝の妻は漢子は偸まるまじけれ共、只能奸夫を偸まるゝなり、汝須く眼を明かにし給へ。武大郎これを聞て、急に鄆哥を揪へて問けるは、我妻が偸む漢子は誰なるぞ、速に告よ。鄆哥が云く、我假如告たりとも、汝彼等

王婆が云く、我を許して入給へ。早速出申さんに、我自ら房間の内に入て、大官人に見えなば、汝誤て我が家内に入ことなかれ。鄆哥が云く、王婆は何ゆゑ己一人のみ利を貪るや、少し其汁を分つて我に與ふとも、何の不可なることかあらん。王婆大に罵つて云く、汝我を以て利を貪ると汝少年の者いかんぞかく大膽のことを云や、我家には西門官人とやらんは曾て來られず、汝誤し、又其汁を分ち與へんやと云は、是何の謂ぞや、我忿の未だ十分ならざる内に、早くこゝを立回れ。鄆哥が云く、汝は只一滴も、外に漏ぬとこそ思ふべけれども、此度の事我悉く是を知れり、我若直にこれを云はゞ、武大郎が怒ることあらん。王婆彼が武大郎の名を云けるを聞て、大に怒り、汝何を曉して、かくのごとく無禮を云や、若再び一言を吐出さば、我今汝が太陽の上に痛く拳を中ん。鄆哥が云く、汝は誰なれば妄に我を打んや。王婆これを聞て益怒り、忽ち鄆哥を揪へて散々に打ければ、鄆哥原來少年者にして、王婆に敵すること能はず、たゞ頻に哭叫んで云けるは、汝賊婆、何ぞかくの如く我を打や、我少停汝に後悔なさしめんとて、直に街を望んで馳行けり。

ず、悪事千里を走ると云ことありけるが、果して未だ半月にも至らざるに、左右近隣悉く此ことを知れり、唯獨武大郎を誑くのみなり。其比又當地に一人の少年者あり、乃ち姓は喬、名は鄆哥と號して、僅に十五歳に成ぬれども、極めて乖巧の徒なり。家内には只一人の老父あり。這鄆哥毎日酒店の邊に徘徊して、專ら菓品を賣うて、過活とし、常に西門慶が家に出入して、商賣をなし、又曾て西門慶が憐を蒙れり。此日鄆哥一籃の梨を携て、西門慶が家に行き、乃ち是を賣はんと欲して、西門慶を問しかども、西門慶は已に他行して家にあらざれば、鄆哥大きにこれを憂ひ、這首那首にて、西門慶は今已に、餅賣の武大郎が妻と私情を通じ、專ら茶坊の王婆が家にて會合す、今日も必定王婆が家にあるべきに、汝若西門慶に遇たくば、彼所に行て尋ねんや。彼鄆哥是を聞て大に悦び、直に紫石街を望んで馳來り、遂に王婆が店に至て、問けるは、此處に大官人は至り給はぬや。王婆が云く、大官人とは誰が事ぞや。鄆哥が云く、此店に來り給ふ大官人は、云はずと共知り給へ。王婆が云く、大官人は、世上に充滿て多し、汝且其姓名を申せ。鄆哥がいはく、我尋ぬる大官人は、則ち西門大官人なり、我今急要有て來れり、定めて店の內に居給はんに、我自ら入て見えんとて、店の內に走り入ける處に、王婆急に攔り住め云けるは、汝何ぞ妄に我内に入るや、凡人の家には各内外の隔あるぞかし。鄆哥が云く、

これを聞て打笑ひ、又彼人に對し云けるは、我夫人を免しがたく思へども、若肯て我一つの望を准へ給はゞ、我まさに免し申さん。彼人が云く、一つの望は扨置て、百千の望をも准へ申べし。王婆が云く、夫人果して我望を准へ給はゞ、且今日を始として、宜しく武大郎を誑て毎日約を差へずして、西門大官人にまみえ給へ、もし一日にても我家に來り給はずんば、我早速に武大郎に告べし。彼人が云く、事すでに此に至り、何ぞ辭することあらんや。王婆又西門慶に對して云く、大官人我計によつて、十分の好事をなし給ひぬ、必ず我にゆるし給ひぬる彼十兩の銀を忘れ給ふことなかれ、若萬一約を違へ給ふことあらば、我速に此事を武大郎に告べし。西門慶が云く、汝必ず心を安んぜよ、我決して約を違ふることあらじ。此時三人又盃を新めて、飲酌を催し、漸武大郎が回る時分に至りしかば、彼人乃ち西門慶に向て、夫武大郎も少刻回るべき間、早別れを辭するなり、必ず明日又相見え申さんとて、遂に後の門より我が宿へぞ歸りけり。王婆西門慶に對して云く、大官人我が智謀の廣大なること如何。西門慶が云く、汝が計は古の諸軍師にも強るべし、我急に彼十兩の銀を汝に與ふべし、必ず是を憂ることなかれとて、其日は遂に回りけり。扨彼武大郎が妻は、這日を初として、毎日王婆が家に來り、擅に西門慶に恩愛を相交へ、恰も漆と膠とのごとくなり。諺にも好事門を出

計のごとく行ひて、頭を擡げけるに、彼人打笑て云く、大官人は是何の戯をなし給ふや。西門慶これを聞て、身を抖ひ顔を紅めて云けるは、我は原來夫人を慕ひ想ふこと、方寸に逼て此身を悩せり、願くは夫人我一點の誠を察し給ひて、廣く恩情を垂れ、深く愛憐を恵み給へ。彼人此言を聞て答て云けるは、大官人もし實にかくのごとくんば、我又何ぞ情なからんや、此上は只長遠の契を結ぶべしとて、遂に兩人恩愛を相まじへ、此日ぞ乃ち雲雨の始なり。既にして兩人再び衣を正して、座を新めたる處に、かの王婆門を押開て進み入り、乃兩人に向ひ云けるは、大官人は申に及ばず、此精細夫人も、又何ぞかくのごとく大膽にして、はや我眼を詐き給ふや、我早老歸て已に此事を聞しなり。彼人これを聞て大に驚き、只惘然として呆たる計なり。王婆又彼人に對して云く、我汝を請て壽衣をこそ縫しめしに、何ぞ却て此のごときことをなし給ふや。若武大郎知り給ひなば、我も必定其連累を蒙るべし。知らず早く行て武大に告申さんとて、幾乎に房間を出んとして身を回しければ、彼人大に慌忙て、急に王婆が裙を扯住て云けるは、願くは王婆我が罪を免し給へ、もし此事を武大に告給はゞ、我此一命つひに休るべし、況や大官人に難を懸申さんこと、我いかん共よく是を忍びんや。西門慶が云く、王婆聲を高むることなかれ、豈聞ずや、窓の外に人あり、壁の上に耳ありと云ことを。王婆

貴宅に至て告申さんに、別に妨有まじきや。西門慶が云く、我兩親は已に沒しぬ、今誰か敢て我身の上のことに、妨をなす者あらんや。汝若我心に合ふべく思ふ者を、看中りなば、急に來て我に告よ。王婆が云く、我今云しは戲言なり、大官人の心に合ふべき者、豈よく急にこれあらんや。西門慶が云く、王婆云ことなかれ、我心に合ふべき者兩人は知らず、一人はあるべし、然れ共我因緣薄うして、これを娶ざるのみ。王婆是を聞き呵々と打笑て云く、兩人の施主に又新めて酒を勸めんずれ共、酒已に盡ぬ、又大官人これを續給はんや。西門慶が云く、もし果して酒盡なば、汝只顧酒を調へ來れ、何ぞ再び問ふ事を用ひんや。王婆これを謝して又彼人に向ひ、夫人は宜く我に替て、大官人に陪して坐し給へ、我遂付酒を求て回るべし。彼人これを辭し、酒は定て足んに、何ぞ又酒を求め給はんや、願くは盃を收め給へと、口にては云けれども、其身は更に動ぜざりける。王婆は遂に房間を出て、前後の門を關し、乃ち店の角に坐して麻を績て居たりけり。扨西門慶は彼人と共に房間の裡にあり、頓て王婆が計によつて、一對の筯を袖にて拂ひ落しけるに、已に因緣到來したるにや、かの筯幸ひ武大郎が妻の脚の邊に落かゝる。西門慶急に是を拾ひ取る體にもてなし、彼人が尖々と文佳なる小脚に碍りけれども、彼人これを曉さず顏にて、微し笑を含しかば、西門慶これを見て、心の内に金を鳴し、鼓を擊ち、已に

抜んで給ひぬ。西門慶も同じく詐て云く、若我先妻がごとき者あらば、我何ぞ此のごとく心を焦さんや、今我左右に七八人の妾ありといへども、都て家内のことを務ず、唯よく座を安んじて喫ふのみなり。彼人問て云く、大官人の尊夫人果給ひて、幾ばく年に成ぬるぞや。西門慶が云く、我先妻は是聰明他に超て、伶俐人に勝れ、諸事我に替て、家を齊へけるが、惜らくは不幸にして早世し、已に三年に及びぬ、諺にも人の妻なきは、屋に梁なきがごとしと云ことありけるが、果して我今妻なきゆゑ、家内已に七顛八倒しぬ、是故に我心を慰めんが爲、毎日街に出て奔走す、若家に在ときは萬千の憂愁免るゝことなし。王婆がいはく、我つら〳〵大官人の先夫人のことを思ふに、容貌聰明最他に超給ひしといへども、實に針線のこと、此夫人には及ばせ給ふまじ。西門慶がいはく、針線のことは、口を同じうして、語るべからず、且先妻が容貌も、いづくんぞ此夫人に及ぶことを得ん。王婆が云く、大官人の愛妾に張惜々李嬌々とて、兩人の美色あることを聞及べり、此人等は又如何ぞや。西門慶が云く、此らの輩は、本外宅に養ひ置しかども、久竟恩愛を續者にあらず、只これ一時の興をなすのみなり、彼李嬌々は去年の秋七月に本宅に引取今更後悔限りなし、かれ若聰明の者なれば、老早晩妻ともなすべけれども、唯惜むべきは家を理の器量なし。王婆が云く、若大官人の心に合ふ者あらば、

へとて、遂に彼人を延て酒卓の邊に座をなさしめ、已に三人飲酌を催しけり。西門慶自ら、盃に滿々と酒を篩て、彼人に送て云く、夫人我爲に此酒を乾給へ。彼人謝して云く、多く大官人の厚意を蒙るとて、遂に盃を取て未だ飲も乾ざるに、彼王婆が云く、夫人は原より酒量大いなりと聞及びぬ、只心を寛げ酌給へ。西門慶又王婆に對して云く、汝我に替つて、宜しく夫人を勸んや。王婆これを聞て、又盃を執て相勸め、酒已に數巡に至りしかば、王婆又酒を盪て來らんとて、已に座を立ぬ。此時西門慶、かの人に問て云く、夫人の春秋は幾干ぞや。彼女が云く、我年は徒にはや、二十三春を過しぬ。西門慶が云く、我年慚らくは、夫人に五歳の兄なり。彼人が云く、大官人の貴き庚を以て、我賤き庚に比給ふは、是何ぞ天を以て地に比し給ふに等しからんや。王婆これを聞き、打笑ていはく、此精細夫人唯よく、針線の高手のみにあらず、又よく諸子百家のことに通じ給ふよな。西門慶が云く、此のごとき佳人、焉ぞよく求ることを得んや、武大郎は是命中に福分大いなり、我實に偏向んことを欲す。王婆が云く、大官人の左右に、許多の佳人有といへども、只恐らくは此夫人に及ん者一人も有まじ。西門慶が云く、果して汝が云ごとくなり、我只命の薄き故にや、未だ一人も我心に合ふ者を求ず、朝夕これのみ患とするなり。王婆詐て云く、大官人の先夫人は、聰明伶俐にして、而も其容貌類を出で群を

就中此夫人の手に經ぬる、壽衣を著して、冥土に趣かば、必ず其功德に仍て、極樂淨土の諸佛諸菩薩盡く影向ましく、途中に我を迎へ給ふべし、我今夫人を欵待して、豫じめ此恩を聊謝し度思へども、只恨らくは力此に及ばず、もし大官人此老婆に替て東道となり、宜しく此夫人を欵待給ひなば、此上の高恩齒を沒る後迄も貽らん、只知らず、大官人肯て東道となり給ふべきや。西門慶此言を聞き、王婆が思ふ所尤理なり、我今汝に替り、東道とならんこと、何よりも易し、我爲に酒食を求めて來るべしとて、則ち銀を取出して與へけり。彼人是を見て、必ず生受のことをなし給ふな、と口にては云けれども、其身は更に座をも動ず。此時王婆銀を取て座を立しかども、彼人又身を動さず。王婆則彼人に向て云く、夫人暫く此官人に陪して坐し給へ、我少停回るべし。彼人これに答て、免し給へ、と許にて、又曾て身を動すことなし。西門慶眼を歇ずして、一向彼人を看ければ、彼人も亦暗に西門慶が人物の風流なるを見て、已に方寸を亂しけり。須臾して王婆は酒肴を調へ來り、乃ち是を具へて、房間の內酒卓を設け、かの人に向て云けるは、夫人且生活を收拾給ひて、一盞を酌給へ。彼人が云く、汝自ら大官人に陪して酌給へ、我豈あへてこれに當らんや。王婆が云く、今日は是大官人我に替て、夫人を欵待給ふに、何ゆゑ是を辭し給ふや、願はくは且生活を休て、共に一盞斟給

偖は武大郎の美婦よな、我もと武大郎とは識荆なり、彼人は常に街に出て、商賣をなし、能錢を撰て善家を利する人なり、況や其性質究て好し、かやうの人に嫁し給ふも、又是夫人の福なり。王婆が云く、我平常這人夫婦の內間を見るに、其睦じきこと水魚のごとし。彼女が云く、我夫は愚癡懦弱の鄉巴老なり、大官人是を笑ひ給ふことなかれ。西門慶が云く、夫人の言差へり、古人の語にも、柔軟は是身を立るの本、剛強はこれ禍を惹の胎と云ことあり、武大郎のごときは是、老實三昧の君子なり。王婆是を聞て早速其言を接て云けるは、大官人の宣ふごとく、武大郎は元來性格よき人にて、世人擧てこれを吹噓。西門慶呵々と打笑ひ、遂に三人座を列しかば、王婆又彼人に向て、夫人は此官人を識給ひぬるや。彼人が云く、我いまだ識ず。王婆が云く、此官人は是、當縣の富貴人にして、知縣相公も常に來往し給ふ、乃ち大名を西門大官人と申て、幾萬々貫の錢財を保てり、今已に縣前に居住して、生藥舖を開き給ふ、夫人も幸ひ識荆となり給へとて、再四詞を盡しけり。西門慶は私に彼人が十分の情思を見て、心大に擾亂せり。王婆又西門慶に對して云く、今日大官人もし來り給はずんば、我も又大官人の貴宅に至て、邀へ來ることも有まじきに、知らずいかなる因緣にて、今日不圖こゝに至り給ひしぞ、我何の僥倖にや、想はず兩人の施主を得ぬ、一人は錢財を出し給ひ、一人は又力を出し給ふ、

彌恙なきや。王婆故意是を曉ぬ體にて、店の内より答けるは、斯懇に我を問給ふは誰人ぞや。西門慶が云く、汝何ぞ我聲を聞識ざるや。此時王婆忙はしく門前に出で、西門慶を見て云けるは、我は只他の客ならんと想ひしに、原是壽衣の施主、我爲の大主顧にてありけるよな、大官人は是幸の時に來り給ふ者哉、我今彼壽衣を縫せ候に、且内に入て是を看給へとて、遂に、西門慶を延て、房門の内に入り、乃ち彼人に對して云けるは、此壽衣を惠み給ひぬる施主は、則此官人なり。西門慶先彼人を見て、慇懃に禮をなしければ、彼人も又忙しく禮を回しぬ。王婆則西門慶に云けるは、我此壽衣先月より今迄、一向裁縫を央て縫しめんと思ひけれども、裁縫等皆生活の忙しきを以て、是縫ざりし所に、幸ひ此夫人、我爲に手を下し、是を縫給ふ、尤高手の針線なり、大官人宜しく是を一覽し給へとて、彼壽衣を取て西門慶に見せしむ。西門慶再四是を見て、大に賛美て云けるは、此夫人いかんぞ此の如き、奇妙の針線を傳へ給ひしぞ、恐らくは天帝の宮中にも、斯神妙の針線はよもあらじ。彼人笑を噛で云けるは、大官人虛く譽給ふ事なかれ。西門慶王婆に問て云く、這夫人は誰人の夫人なるぞや。王婆が云く、大官人、是を猜し給へ。西門慶が云く、我神明ならぬ身の、いかんぞよく猜し著ることを得ん。王婆呵々と打笑て云く、此夫人は便是我隔壁の武大郎の妻なり。西門慶が云く、

王婆貪心密奸の媒を成

人を勞するのみならず、いかんぞ顚倒のことをなし給ふや、我夫人の管待を受ることあらじ、必我爲に心を費し給ふことなかれ。彼人云く、汝必ず是を辭し給ふこと有べからず、これ乃ち我夫再三我に命じて、汝を慰めんとす、若是を辭し給ふことあらば、乃ち衣料を我家に持回りて、これを縫ふべし。王婆是を聞て云けるは、大郎何ぞかくのごとく、心を費し給ふや、我若汝夫婦の好意に背ば、却て不可ならん、權先これを收て、酒肴を求んとて、遂に烏目を取にけり。王婆又私に心中に想爲、もし少しにても彼女が心に背くことあらば、必ず計の害となるべければ、宜しく慇懃に欸待んと思ひ、彼一貫文の錢を請たる上に、又己が錢を加へ、酒肴菓子等を買調へ、丁寧を盡し、彼女を欸待し、再三今日の席の、東道をなしたることを、謝しにけり。凡世間に、女十人の内八分は精細者ありといへども、人よく計を儲て墮坑に落す時は、かの精細女も遂に其計に中つて坑に隕るなり。況や武大郞が妻のごとき、慾心深き淫婦をや。扨王婆は酒食を以て彼人を欸待し、其日も同じく何事なく回しけり。第三日に至て、王婆先彼人を邀へて、我家に來り、則彼衣料を取出し、生活を催しければ、彼人又是を縫ふこと、已に午の刻に至りぬ。此時西門慶は、別して風流に粧ひ、直に王婆が店の前に至て、一聲相圖の咳嗽をなし呼つて云けるは、我頃日は世事に纒れ、久しく此邊に至らざりし、王婆は

させ、明日再び來るべしとて、遂に又後門より回りけり。此時彼武大郎も、商賣を完了て回りしかば、妻は門を開てこれを迎ふ。妻が顏色紅きを見て問けるは、汝何れの所にて、酒を飲けるや。妻答て、則隔壁の王婆、今日より彼が家にて壽衣を縫せけるゆゑ、我先に彼が家に往し處、日中の比、酒食を以て我に進めし間、我これを用ひて、顏色紅し。武大是を聞て云けるは、汝何を以て彼が酒食を用るや、我夫婦彼を賴む事每度なり、必彼に錢財を使はしむることなかれ、汝若明日も又往く事あらば、豫じめ錢を携て往き、酒肉を買調へて、宜く彼に進め、今日の禮を回すべし、諺にも遠き親類は近き隣家に如ずと云ことあり、必隣家の情を缺く事なかれ、若彼再三辭退に及んで、我返禮を受ずんば、汝明日より彼が家に往ずして、衣料を我家に取よせ、是を縫べし。妻これを聞き、いかにとも、只明日の光景に憑すべしとて、其夜は共に歇けり。扨彼王婆は計を設けて、彼人を我家に賺し寄せ、心中にこれを悅ぶこと限なし。翌日朝飯後に、武大は已に商賣に出ければ、王婆自ら急に、武大が家に至り、彼人を請て再び己が家に迎て、又房裡の內に於て、生活をなさしむ。漸々日中に至らんとする處に、彼人鳥目一貫文を取出し、これを王婆に與へて云けるは、我今日汝の爲に、一酒一肴を調へて、共に觴を飛さん。王婆是を聞て、夫人是何の道理ぞや、我憚をも顧ずして、夫

む事をせん。彼人が云く、我聞壽衣を裁は、別して黄道吉日を用るとなれば、則明日と定め給へ。王婆が云く、既にかくのごとくば、明日より針の起すべし、願くは夫人、我家に來て縫給へ。彼女が云く、汝の家にて縫んとも、我家にて縫ふとも、何ぞ別に拘束ことあらんや。王婆が云く、我亦原來夫人の針工を看たく思へば、希くは必ず、我家に來て縫給へ。彼人の云く、彌さる事あらば、明日朝飯後より來るべし。王婆大に悅び、再三感謝して、遂に私宅に歸りけり。扨彼西門慶は、王婆が回りたるを見て、忙しく其首尾を問ければ、王婆詳に告知らせ、則第三日に來り給へと、約を定め別れけり。翌日早天に王婆先房裡を淸めて、芳茶美饈新果等を相調へ、專ら彼人の來るを待居たり。當時隔壁にて、武大郎は食事已に終り、則彼餠を荷うて、街の邊に出しかば、彼人は前門を關し、後門より出て、王婆が家に來りぬ。王婆大に悅び、則延て房裡に入り、壽衣の衣料色々を取出し、彼人に渡すの所、忽ちに裁てはや縫かゝりしかば、王婆再三聲を放て贊美し、我凡六十餘年、許多の針線を見れども、未だかつてかく高手の針線を見ず、誠に夫人は裁縫の棟梁ならんとぞ譽にける。彼人已に口中の比まで縫ければ、王婆頓て酒食を饌へ、これを進む。彼人辭すること能ず、暫く先生活を過て、酒飯を用ひ、其後又生活を做て、方に武大が回る時分に至りしかば、則王婆を呼で衣料を收拾

め壽衣を製へんと思ふ、それに付て夫人聞給へ、今の世にも又善人は有て、則此近邊に居住ある一人の財主、前月我店に來り給ひて、我今年は殊に疲れたると聞給ひ、則壽衣にせよかしとて、二三色の疋頭に十兩の好綿を添て施し給ひぬ、我今年は氣力も大いに衰へぬるゆゑ、其砌にも早速縫しめんとしけれども、折節裁縫等、生活の忙しきを以て、日を延し今日に至れども、猶忙しき由云て、未だ我爲にこれを縫ず、よつて甚しく憂ふること數日なり、よもや近々には來て裁縫もあらんと、さてこそ日を尋ねに來りしなり。彼女咲て云く、我汝が爲に縫んと思へ共、恐らくは心に合ふまじきをいかゞせん、もし我が縫たるを嫌給はずば、急に縫整て進らせん。王婆此言を聞て、忽ち滿面に咲を含んで云けるは、若夫人我爲に手を下し給はらば、我死すとも必ず其好所を得べし、我久しく夫人針線の妙手たることを聞といへ共、只憚を顧て、敢て頼まざりけり。彼女が云く、汝何ぞ慇懃のことを云給ふや、彌我に縫しめ給はゞ、黄道吉日を擇で手を下し申べし。王婆が云く、夫人我爲に縫給ふならば、夫人は誠に是一點の福星、何ぞ必しも日を選む事を用ん、況や前日一人の主顧我店に來られけるゆゑ、我是を問けるに、たしか明日は黄道吉日とやらん申されぬ、然れ共我未だ曆本を見ざるに依て、曆本を借てこれを見んと思ひしなり、幸ひ福星の夫人手を下し給はんに、何ぞ日を擇

新編水滸畫傳

東武　高井蘭山翁譯編

三編巻之二十三

○鄆哥忿ずして茶肆を閙しむ

西門官人は街に馳て、紬絹舖に至り、白綾藍紬白絹ならびに十兩の好綿を調へ、これを包袱にして、一人の家僕に持せ、再び王婆が店に到しかば、王婆頓て包袱を請取西門慶を店の內に俟しめ、遂に後門を開て、間壁の家に入ば、潘金蓮は王婆を迎へ、樓に上り、兩人座已に定り、王婆先いはく、夫人は何ゆゑ頃日我家に見給はぬや。彼女が云く、這兩日は我何とやらん身心快からず、是故に數日汝の家に看望ざりしなり。王婆が云く、夫人の家に曆本あらば、我に借て裁衣日を見せ給へ。彼女が云く、汝何の衣服を裁給ふや。王婆が云く、我今年は覺えず身體疲れ、動不動病起發る、齡もはや七旬に近ければ、冥途の旅出も遠かるまじ、よつて預

五編

四編

新編水滸畫傳 二 目録

三編

水滸畫傳

二

Shui hu chuan
Shimpen Suiko gaden